

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第77集

上越新幹線関係  
埋蔵文化財発掘調査報告

第11集

# 下佐野遺跡

I地区・寺前地区(4)

中世・近世編

1989

群馬県教育委員会

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

東日本旅客鉄道株式会社





(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第77集

上越新幹線関係  
埋蔵文化財発掘調査報告

第11集

# 下佐野遺跡

I地区・寺前地区(4)

中世・近世編

1989

群馬県教育委員会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
東日本旅客鉄道株式会社





(表)

舶載青磁・染付および伊万里染付



(裏)

伊万里磁器





唐津陶器



瀬戸美濃および京焼系陶器



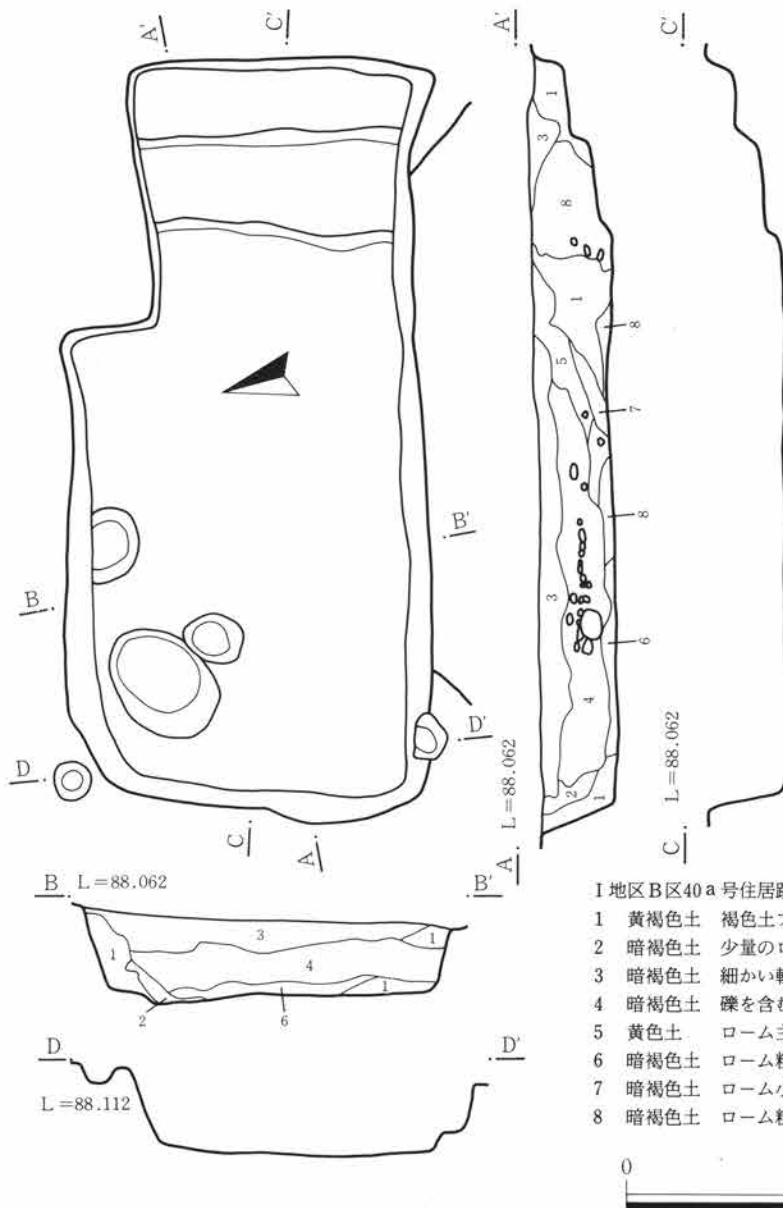
I 地区C区1号館跡（清水館）  
出土の鉦鼓

## 第6章 中世・近世の遺構と遺物

### (1) 竪穴住居跡

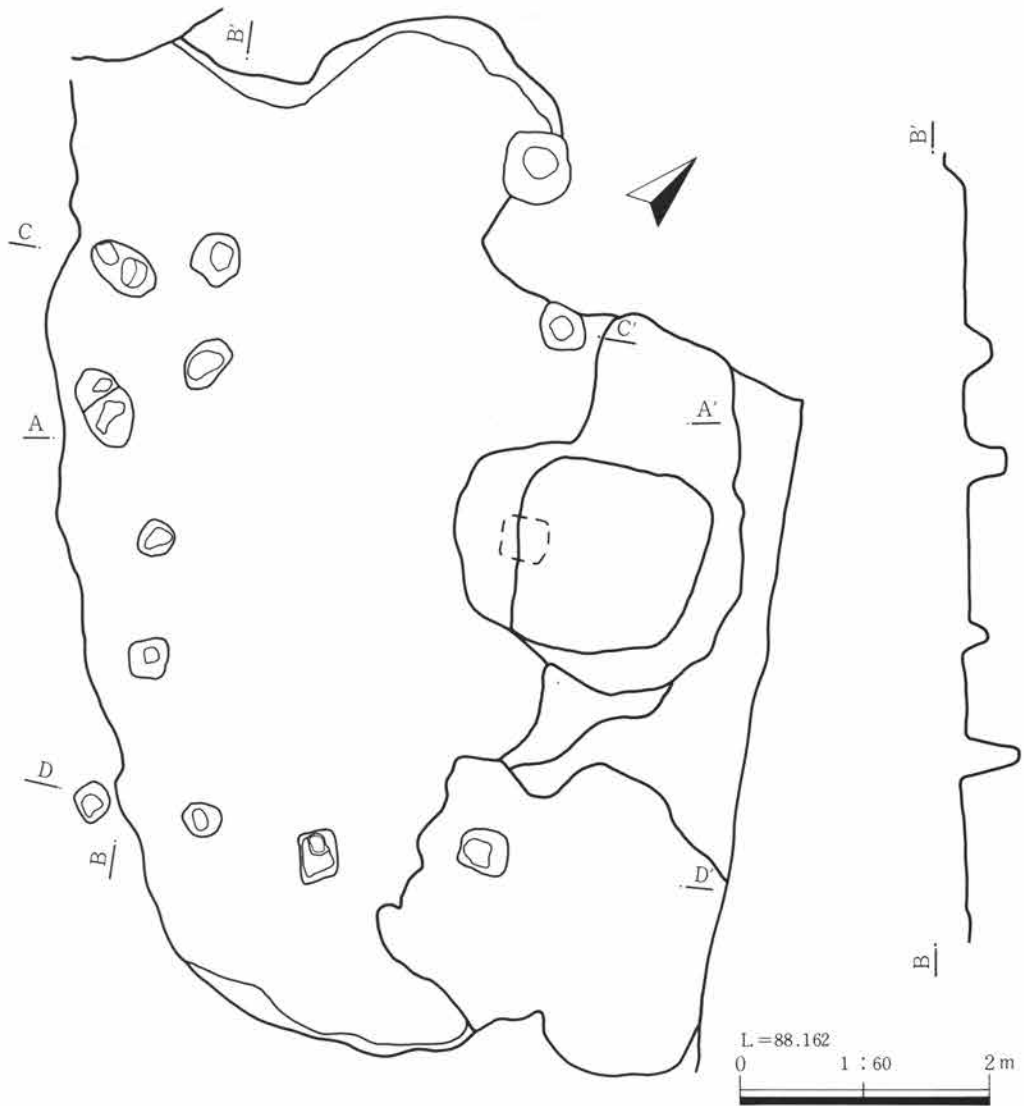
#### I 地区B区40a号住居跡 (第635図)

本住居跡は耕作土下、黄褐色土中確認された。40b号住居跡と重複するが、本住居跡が新しい。規模は、東西方向約6.0m・南北方向2.9mを測り、主軸はN-77°-Wである。平面形は長方形の



第635図 I 地区B区40a号住居跡遺構図





第636図 I地区B区46号住居跡遺構図

I地区B区46号住居跡（第636・637図、第199表）

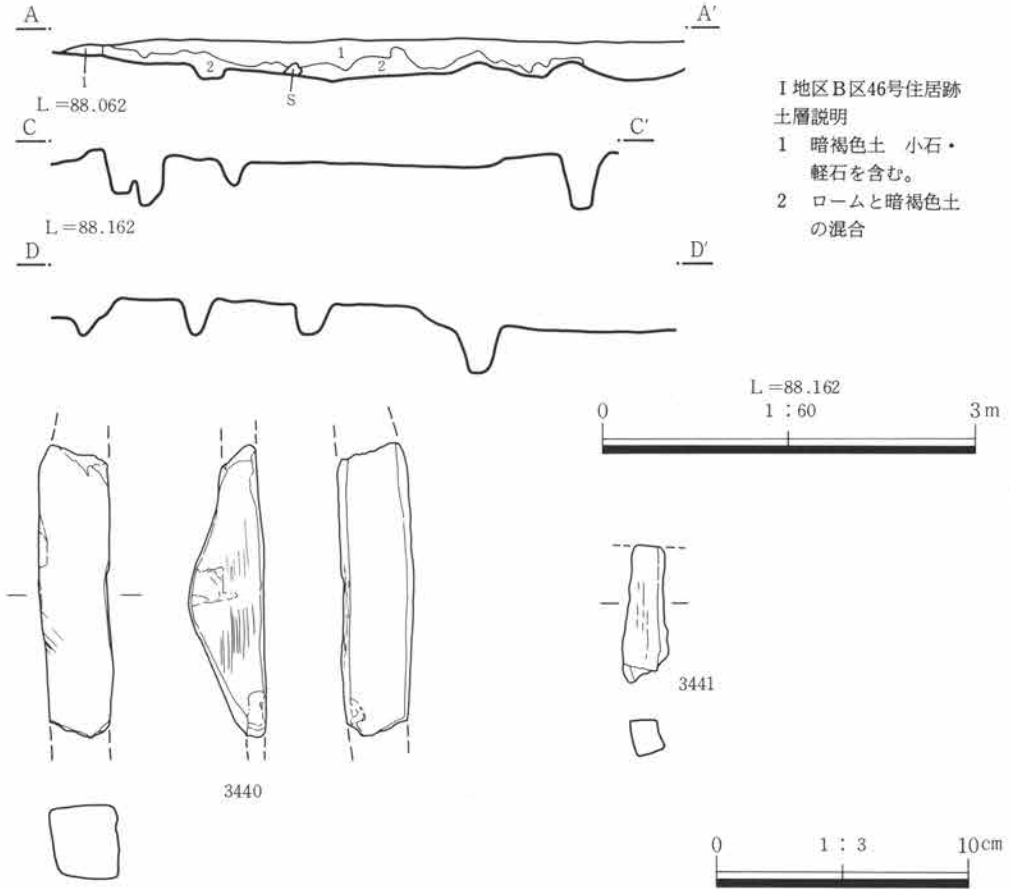
当住居跡は、B区4号古墳と重複する。新旧関係の直接的把握はできなかったが、当住居跡の形態・遺物から、当住居跡の方が新しいと考えられる。

当住居跡の規模は、壁の確認ができないために不明である。当住居跡の特徴は、柱穴の形態である。南北方向に4～5基・東西方向に2～4基の柱穴が検出できた。規模は、径25～40cm・確認面からの深さ20～40cmである。平面形はやや崩れてはいるが、方形を呈する。竈・貯蔵穴・壁溝等は検出できなかった。

当住居跡は、火を使用した跡がなく、柱の形態等、他の住居跡とは異なっており、遺物も砥石

## (1) 竪穴住居跡

が2点出土しただけである。当住居跡は、一般的に考えられている住居跡とは異なったものであり、時期も、確定はできないが、平安時代末～中世ではないかと推定している。(井川)



第637図 I地区B区46号住居跡遺構・遺物図

第199表 I地区B区46号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3440	砥石	長さ:(116mm)幅:28~26mm 厚さ:30~12mm		使用面は3面。断面四角形。両側面に切り出しの工具痕あり。	住居内覆土。
3441	砥石	長さ:(54mm)幅:(17mm)厚さ:13mm		使用面は二面。	住居内覆土。

## (2) 館 跡

I地区A区1号館跡（内郭及び西外郭）〔長者屋敷館〕（付図2、第638～658図、第200表、図版93～97）

本館跡の存在する部分（内郭）は、周囲より約10cm程高くなっており、地元では、長者屋敷天王山古墳（A区1号古墳）の前方部と考えられていた。調査の結果、方形にめぐると推定される堀と、堀の内側に存在する掘立柱建物跡・方形遺構、それに堀の南外側に位置する方形遺構・溝・土坑が確認された。本館跡に重複する遺構として、A区1号古墳（長者屋敷天王山古墳）・2号方形周溝墓・4号方形周溝墓・10号住居跡・14号住居跡・19号住居跡等があるが、いずれの遺構よりも、本館跡の方が新しい。

**堀** コーナー部分が確認された。堀の走行から南西コーナーにあたり、直角よりやや開いた97°の角度を持つ。堀は単純ではなく、コーナー部から更に西側へと直進するやや浅い堀があり、又、西側堀の長者屋敷天王山古墳墳丘と重なっている部分では2本に分かれ、1本は内側へ緩やかにカーブしている。なお、南側の堀を基準として本館跡の主軸を求めると、N-19°-Eとなる。

堀の幅は、確認の難しい他の遺構との重複部分が多いため、全体的に把握することは困難であるが、南堀の調査区東寄り橋脚付近では、6.7m、同じく南堀のコーナー寄りでは約6mとなっている。なお、コーナーから西へ延びる部分については、約2.5mと南堀の半分以下の幅となっている。

堀の深さは、南堀の東寄り橋脚付近で海拔86.2mであるが、西寄りコーナー付近では、86.5mで約30m高くなり、西側の堀では更に10m程度高くなっている。又、コーナー部から西側へ直進する堀については、海拔87mで、コーナー付近より約80cmの段差がある。更に、西側堀の北側部分で、2本に分かれる堀のうち、直進する堀は海拔88mで、1.1mの段差となっている。

堀内に設けられた施設として、長方形土坑2基・橋脚・井戸がある。2基の長方形土坑のうちの1基は、南側堀の東端部にあり、3.3m×1.6mの規模を持ち、堀底面より85cm深くなっている。この長方形土坑の西側約1.3mには、橋脚と推定される柱穴があり、幅1.5mで相対する柱穴が4個づつ、計8個ある。井戸跡は、西側堀北部の内側にカーブする部分にある。この井戸は、直径約1.2mであるが上面から約2m掘り下げたところで、激しい湧水のため、発掘作業を中止した。なお、ボーリングによる調査では、井戸は更に1m以上深くなっている。井戸に接して、幅約1.8mの長方形土坑がある。土坑は、調査区域外へと連続しているため、規模は不明であるが、付近の堀底面より約90cmの深さがある。

堀の内側には、テラス状となった部分がある。この部分は、幅が一様ではなく、南側堀においては、1m～1.3m、深さ約50cmであるが、西側堀では約2.3mと広がっている。西側堀のテラス状部分には、幅50cm～80cm、深さ20cm～40cmの溝がある。溝の上には、多くの小河原石が密集している部分が多いが、これらの河原石は、底面から浮いた状態で発見されている。又、この河原

石からやや北側にも、河原石の列が見られるが、この部分は、A区1号古墳（長者屋敷天王山古墳）の周堀内のため確認できなかったが、南側堀テラスの場合は、ほとんどが掘り方上に存在している。

**堀の内側** 堀の内側に存在する遺構として、方形遺構6・掘立柱建物跡6・溝1がある。

① 1号方形遺構（第638図）

本遺構は、北側部分が調査区域外となっており、南側は1B号方形遺構と重複する。本遺構と1B号方形遺構との新旧関係は不明。又、E掘立と重複するが、本遺構の方が古い。本遺構は、幅が約2.5m、深さ約36cmの規模を持ち、主軸はN-20°-Eである。底面は平坦であり、固くなったような状態は見られなかった。内部底面上には、東側と西側の壁に接して、小ピット列が存在する。このピット列は、直径7cm~12cm、深さ約6cmの規模を持つ。

② 1B号方形遺構（第638図）

本遺構は、1号方形遺構と重複しているが、新旧関係は不明である。規模は、1.3m(推定)×2.4m、深さ15cmで、東西に長い長方形である。主軸は、N-20°-Eである。底面は平坦で、南側の壁に接して、径6cm~10cm、深さ4cm~6cmの小ピットがある。

③ 2号方形遺構（第638図）

本遺構は、北側部分が調査区域外となっているため、全体の規模は不明であるが、幅は約2.5m、深さ約10cmである。D掘立と重複しているが、本遺構の方が古い。壁は緩やかな傾斜をもって掘り込まれており、底面は平坦で軟弱である。

④ 3号方形遺構（第639図）

本遺構は、D掘立と重複しているが、本遺構の方が古い。1号方形遺構・2号方形遺構と併存して存在しており、主軸は1号及び2号方形遺構と同じN-20°-Eである。規模は、2.3m×5.9mの長方形を呈し、深さは約25cmである。壁の掘り方は、比較的緩やかであるが、南西コーナー付近においては、急斜面となっている。底面は、ほぼ平坦であるが、中央付近がやや凹んでいる部分もある。なお、底面は軟弱である。

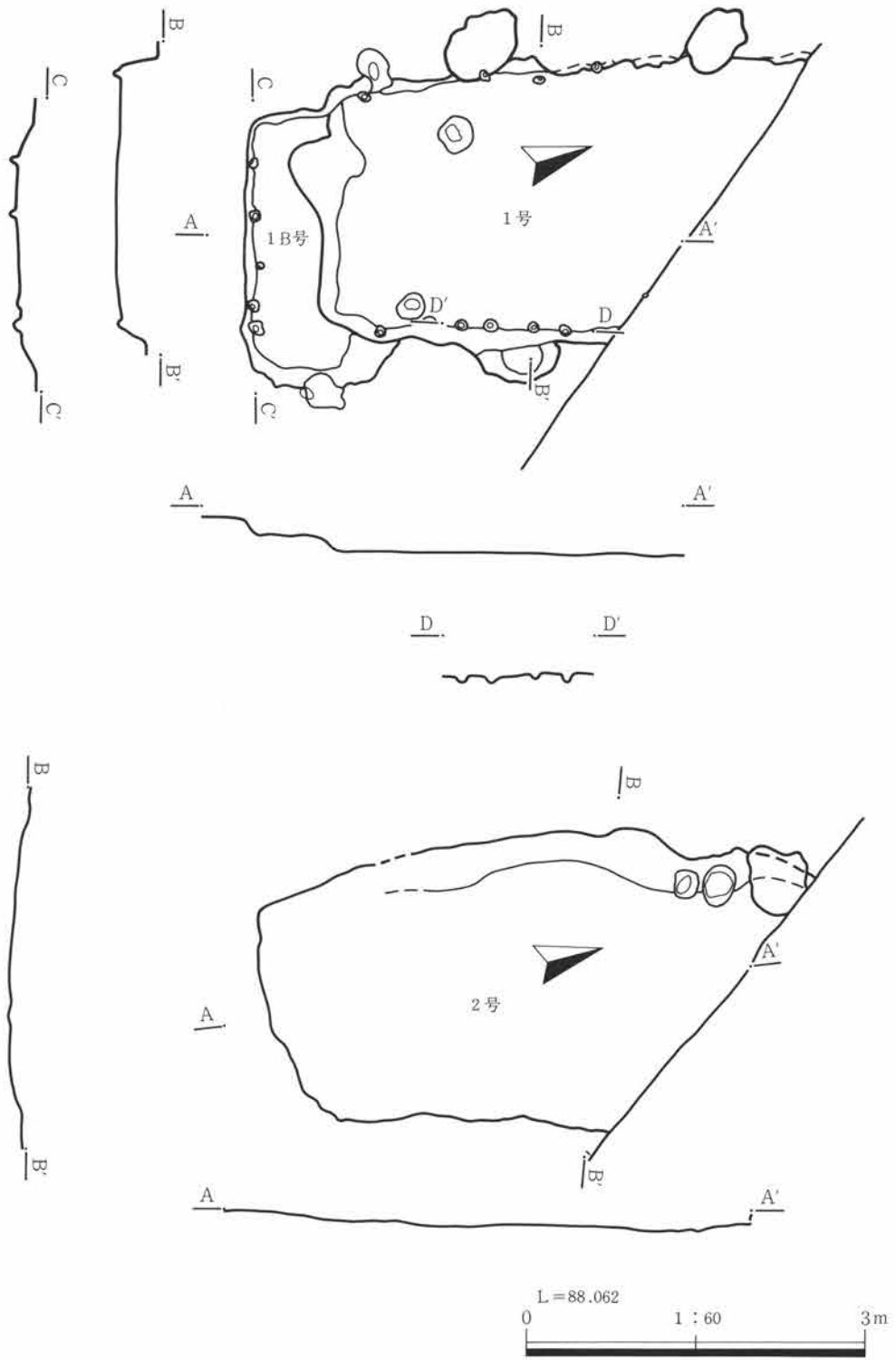
本遺構の主軸線上と、南側を除く壁には、中小のピットが存在する。これらのピットの覆土は、本遺構の覆土と同じことや、ピットの位置関係から本遺構に伴うものと考えられる。

⑤ 4号方形遺構（第639図）

本遺構は、東西に長く、東側部分は調査区域外となる。規模は、幅1.8m、深さ約20cmである。形態は、隅丸長方形を呈し、壁はやや緩やかな斜面をもって掘り込まれている。なお、底面は軟弱で、中央付近が最も深くなっている。

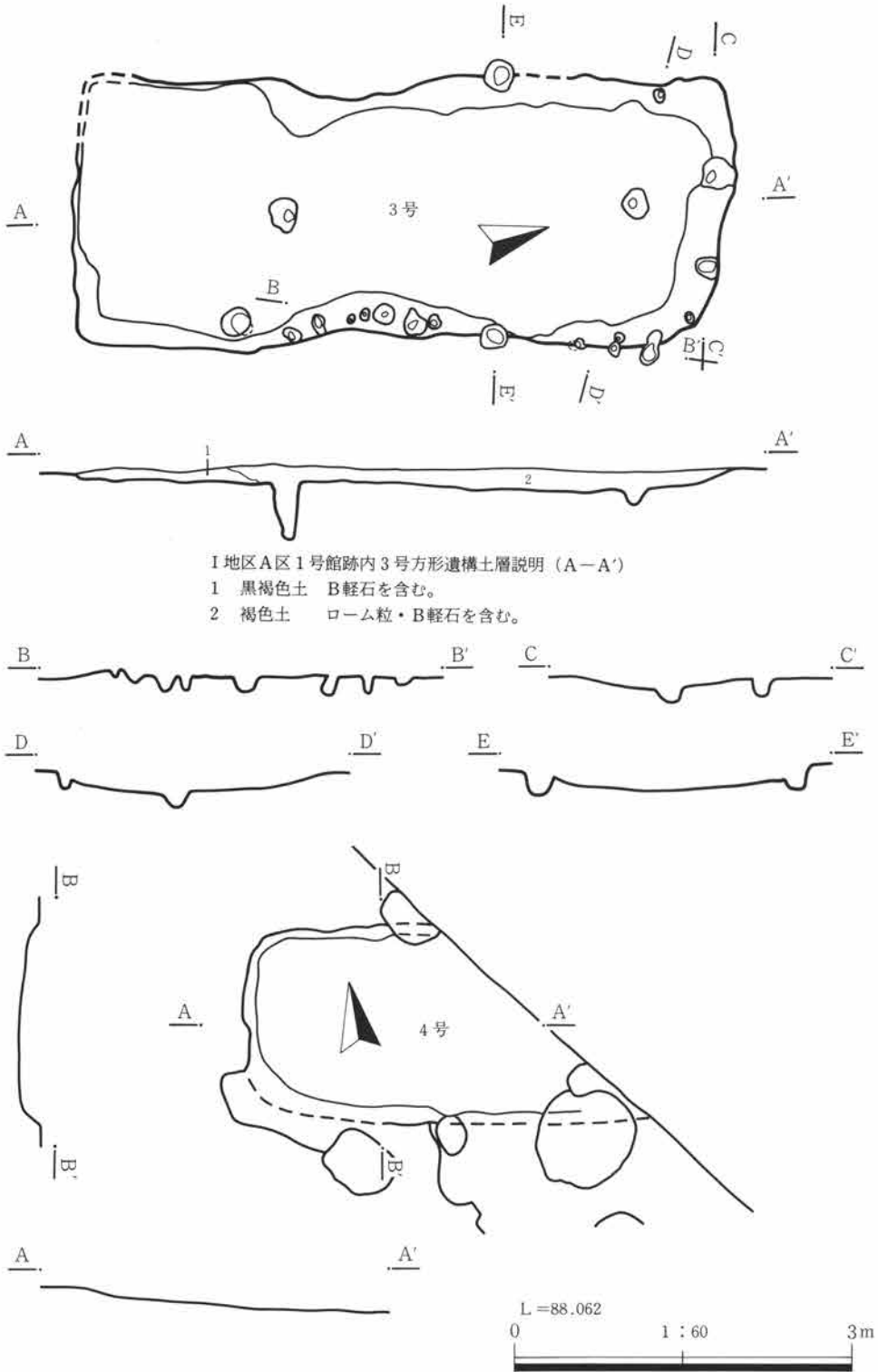
⑥ 5号方形遺構（第640図）

本遺構は、6号方形遺構と重複しているが、土層断面により本遺構の方が新しい。形態は、南北に長い長方形であるが、北側は、A区1号古墳（長者屋敷天王山古墳）周堀埋没土上に作られているため、確認が難しい。規模は、幅約22.5m、深さ約25cmで、主軸はN-13°-Eである。壁

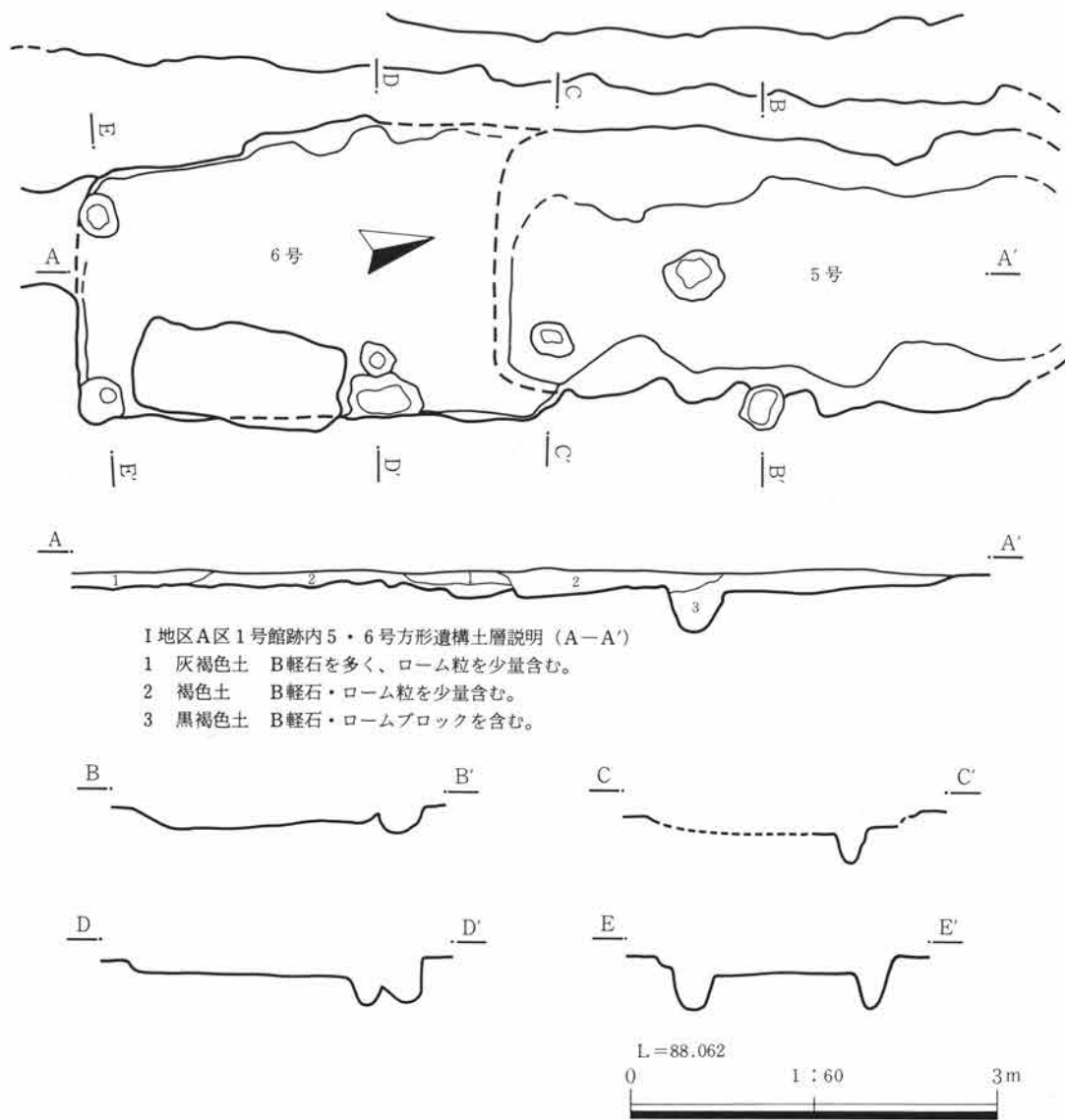


第638図 I地区A区1・1B・2号方形遺構図(1号館跡内郭)





第639図 I地区A区3・4号方形遺構図(1号館跡内郭)

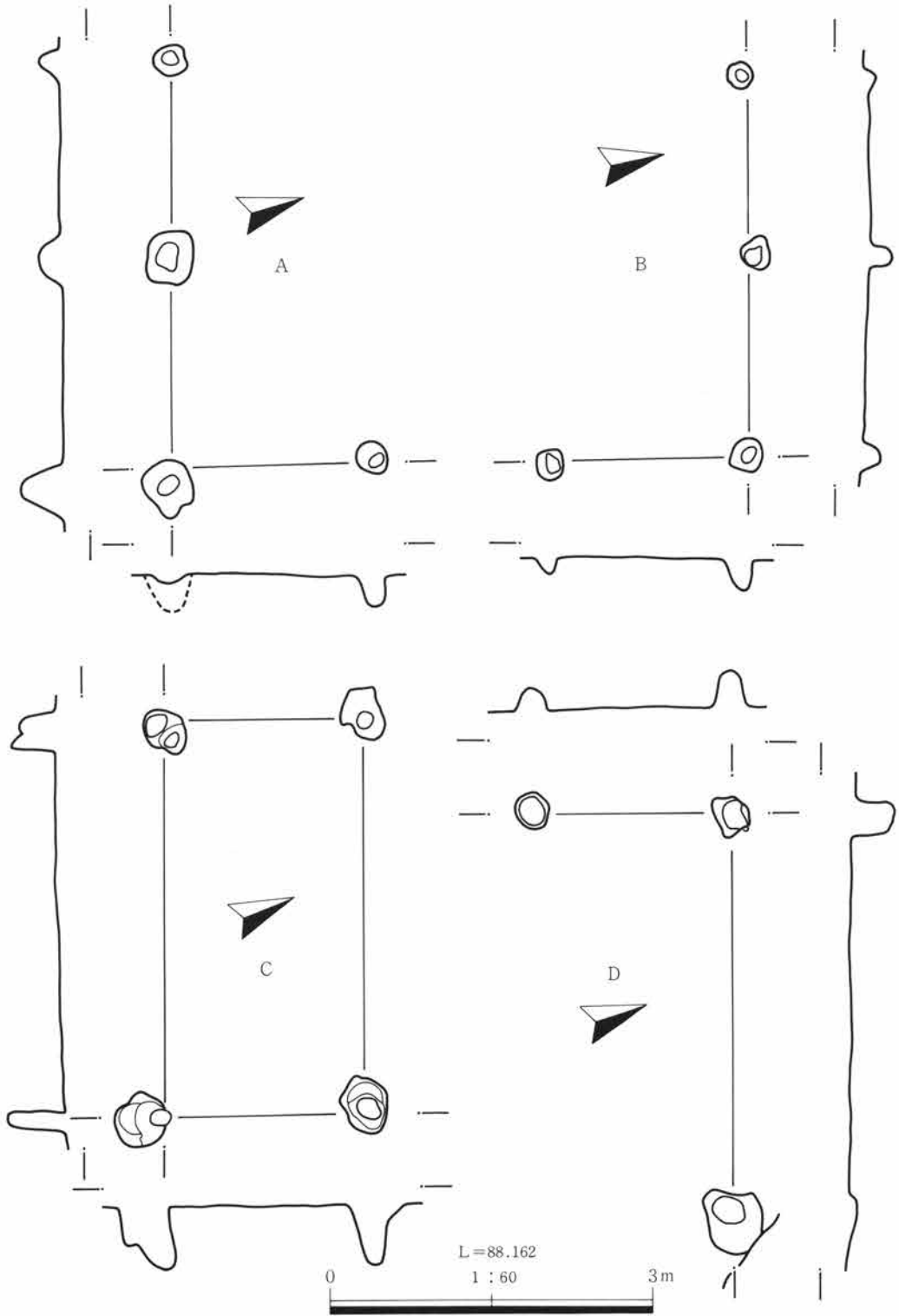


第640図 I地区A区5・6号方形遺構図(1号館跡内郭)

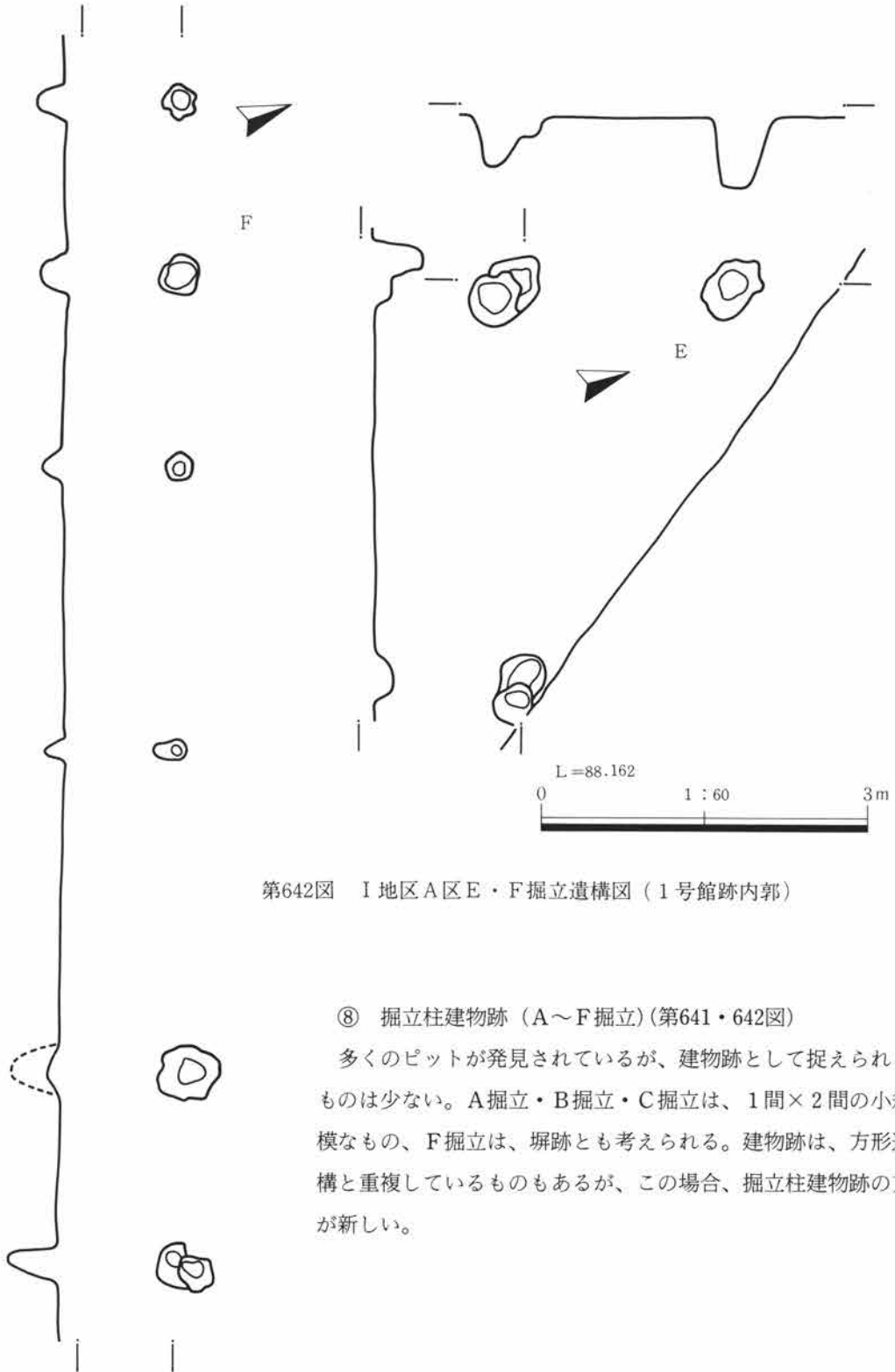
は、緩やかな傾斜をもって掘り込まれている部分が多い。底面は、やや凹凸があり、軟弱である。本遺構の主軸線上と西側壁近くには、直径30cm～40cm、深さ約30cmのピットがある。このピットは、本遺構の覆土と同じであり、本遺構に伴うものと考えられる。

⑦ 6号方形遺構(第640図)

本遺構は、5号方形遺構と重複しているが、本遺構の方が古い。又、近年に掘られた新しい土坑が、本遺構と重なっている。規模は、幅が2.4m、長さ4m(推定)で、深さは約12cmである。本遺構の壁に接して、直径30cm～40cm、深さ約30cmのピットが4ヶ所見られるが、ピットの埋没土は、本遺構の埋没土と同じであり、本遺構に伴うものと考えられる。



第641図 I地区A区A・B・C・D掘立遺構図(1号館跡内郭)



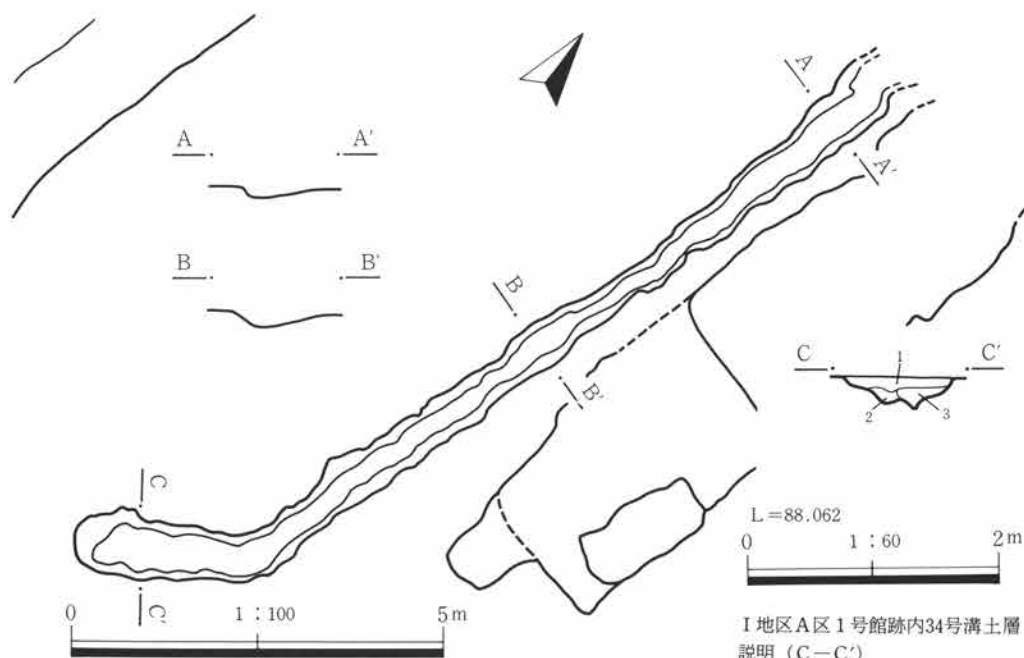
第642図 I地区A区E・F掘立遺構図（1号館跡内郭）

⑧ 掘立柱建物跡（A～F掘立）（第641・642図）

多くのピットが発見されているが、建物跡として捉えられるものは少ない。A掘立・B掘立・C掘立は、1間×2間の小規模なもの、F掘立は、塀跡とも考えられる。建物跡は、方形遺構と重複しているものもあるが、この場合、掘立柱建物跡の方が新しい。

## ⑨ 34号溝 (第643図)

5号及び6号方形遺構の約30cm西側に両遺構とほぼ平行して存在する。規模は、幅70cm～1.4mで、深さは20cm～30cm、浅い皿状の掘り方を持つ。主軸はN-16°-Eであったが、約21m直線的に延びた後、南側では南北方向に折れ、約5mで終わっている。なお、北側については、A区1号古墳(長者屋敷天王山古墳)の周堀上へと続くが、確認は難しくなる。



第643図 I地区A区34号溝遺構図(1号館跡内郭)

I地区A区1号館跡内34号溝土層  
説明(C-C')

- 1 灰褐色土 浅間B軽石粒・ローム小ブロック・ローム粒を含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒を含む。
- 3 褐色土 ローム小ブロックを含む。

**堀の南外側** 堀の南外側には、方形遺構・溝・土坑がある。

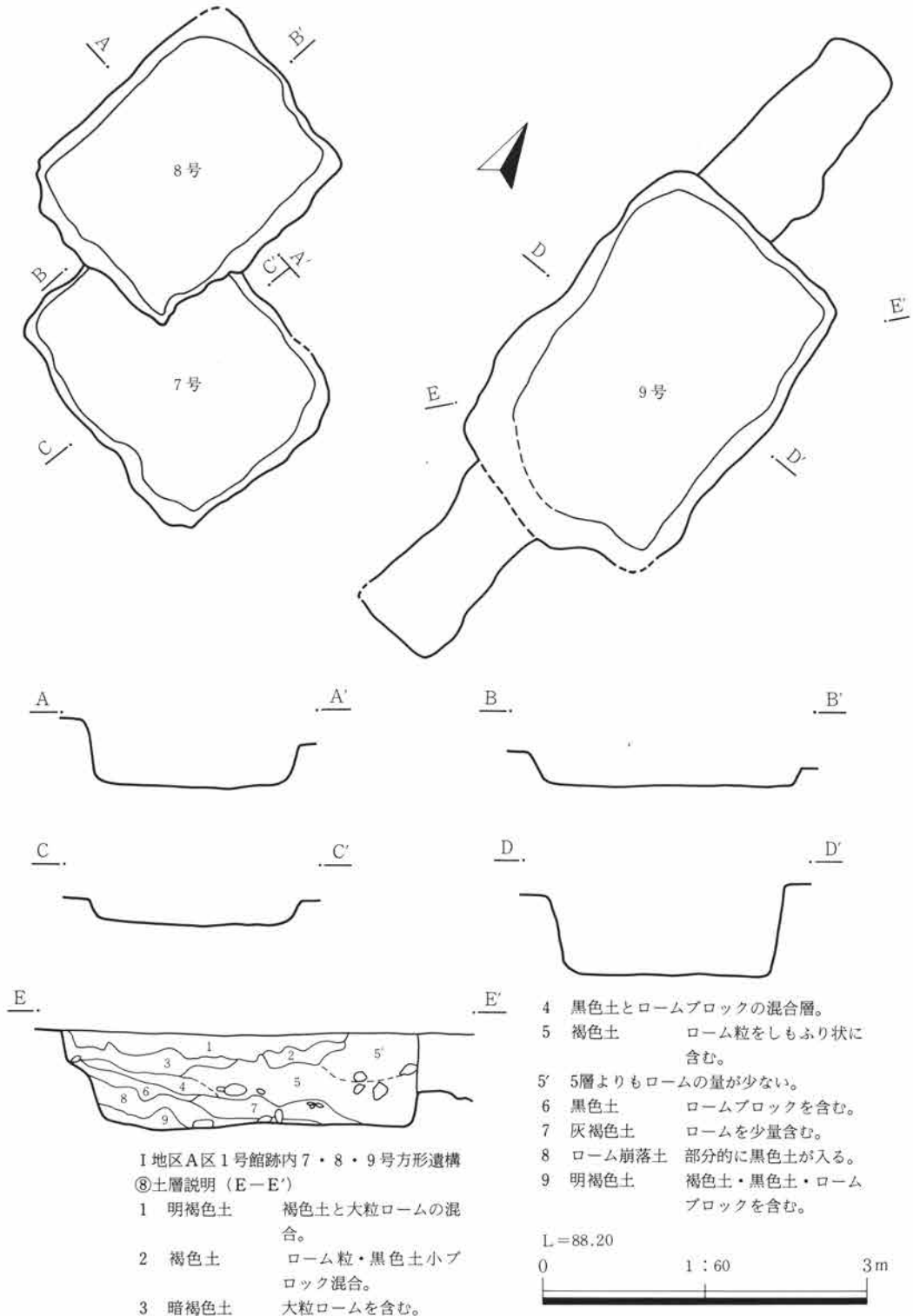
## ① 7号方形遺構 (第644図)

8号方形遺構及びピットと重複しているが、本遺構の方が古い。形態は、やや隅丸の長方形を呈しており、幅2m、長さ2.5m、深さ約30cmの規模を持つ。底面は軟弱である。なお、主軸方位(短軸)は、N-17°-Eであり、堀の主軸方位に極めて近い。

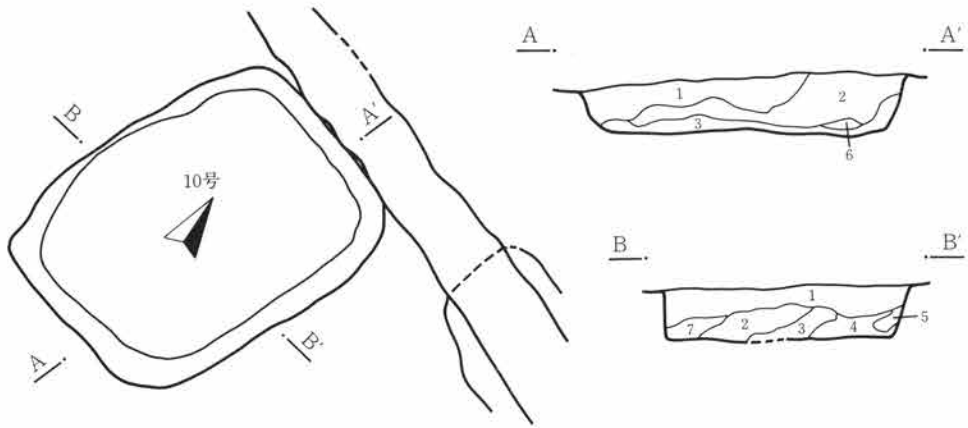
## ② 8号方形遺構 (第644図)

7号方形遺構及びピットと重複しているが、7号方形遺構よりも新しく、ピットよりも古い。平面形は、7号方形遺構と同じで、幅2m、長さ2.5mであるが、深さは約35cmと僅かに深くなっている。底面は軟弱で、主軸方位もN-17°-Eと7号方形遺構と同じである。



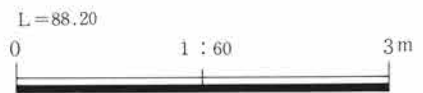
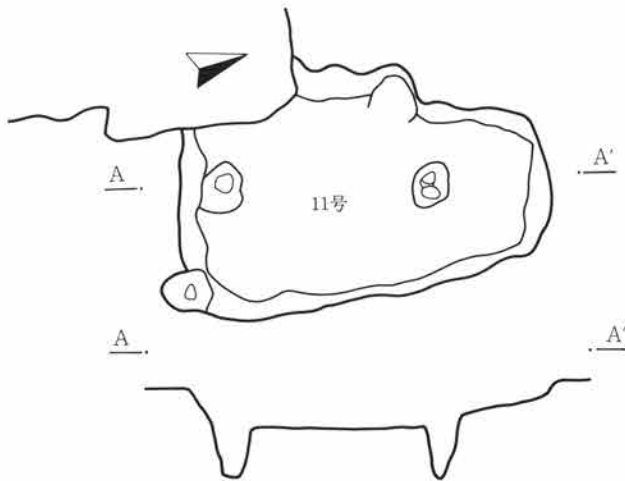


第644図 I地区A区7・8・9号方形周遺構図(1号館跡西外郭)



I地区A区1号館跡内10号方形遺構⑨土層説明 (A-A'・B-B')

- 1 暗褐色土 ローム粒・小石を含む。
- 2 暗褐色土 多量のローム粒・小石を含む。
- 3 暗褐色土 明度低く、ローム粒僅かに含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを含む。
- 5 暗褐色土 明度低く、柔らかい。
- 6 暗褐色土 ローム粒含み、固い。
- 7 暗褐色土 やや砂質、ローム粒少量含む。



第645図 I地区A区10・11号方形遺構図 (1号館跡西外郭)

## 第6章 中世・近世の遺構と遺物

### ③ 9号方形遺構（第644図）

本遺構は、3号古墳及び5号土坑と重複している。3号古墳よりは新しいが、5号土坑との新旧関係は不明である。本遺構と5号土坑は、主軸が $N-9^{\circ}-E$ と同じであり、密接な関係を持つ可能性もある。規模は、幅が2.3m、長さ3.2m、深さ約85cmである。底面はほぼ平坦で、固くなったような状態は見られなかった。

### ④ 10号方形遺構（第645図）

本遺構は、1号方形周溝墓と重複しているが、本遺構の方が新しい。形態は、やや歪んだ隅丸長方形で、短辺の2辺は平行しない。規模は、幅が2m、長さ2.6mで、深さ約45cmの規模を持つ。主軸は、 $N-19^{\circ}-E$ で、堀の主軸とほぼ同じである。底面はほぼ平坦であり、固くなったような面はみられなかった。

### ⑤ 11号方形遺構（第645図）

本遺構は、13号土坑と重複しているが、本遺構の方が古い。形態は、長い台形を呈しており、上（短）辺に1.2m、下（長）辺2m、高さ（長軸）3mである。深さは約30cmであるが、北側ではやや浅くなっている。主軸は $N-16^{\circ}-E$ である。

本方形遺構の中央主軸上に2ヶ所と、南東コーナー部にピットがある。いずれのピットも直径約35cm、深さは約45cmであるが、このうち主軸線上に存在する2基のピットは、埋没土が本方形遺構の埋没土と同じであり、本方形遺構の施設と考えられる。なお、底面には、固くなったような面は見られなかった。

### ⑥ 5号溝（第646・647図）

本溝は、2号方形周溝墓・8号住居跡と重複しているが、本溝の方が新しい。規模は、幅約1m、推定長約10.3m、深さ約60cmである。底面は平坦である。なお、主軸は、 $N-74^{\circ}-W$ で、堀の主軸にほぼ直行する。

### ⑦ 6号溝（第646・647図）

本溝は、7号溝・13号土坑・14号土坑・27号土坑・1号方形周溝墓と重複しており、7号溝よりは古い。13・14・27号土坑・1号方形周溝墓よりは新しい。溝は、ほぼ直線で、 $N-70^{\circ}-W$ を呈する。規模は、長さ約19.5m、幅約70cm、深さ約20cmである。掘り方は、全般的に皿状で水平である。

### ⑧ 7号溝（第646・647図）

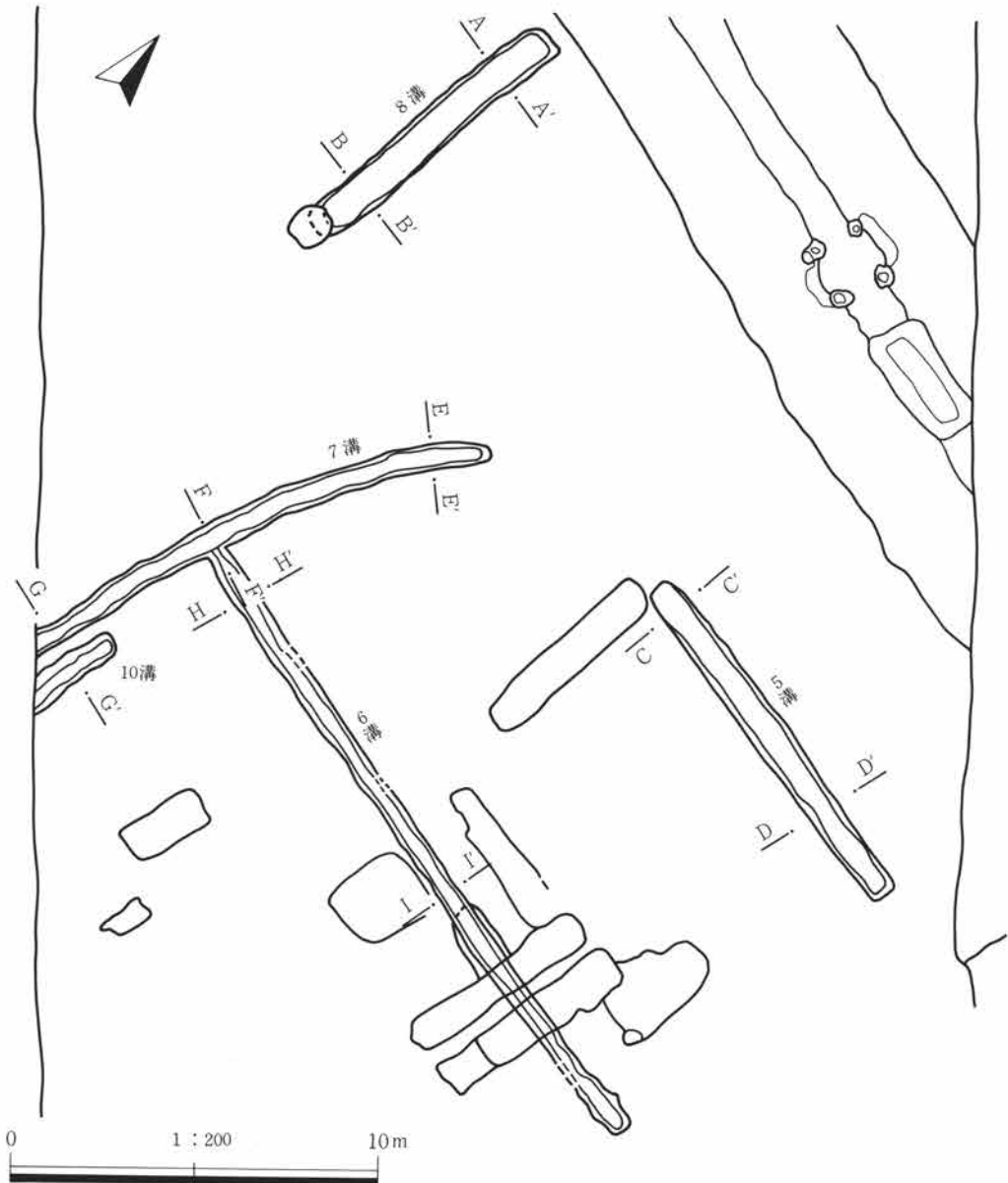
本溝は、1号方形周溝墓・6号溝と重複しているが、両遺構よりも新しい。規模は、幅約70cm、深さ約15cm～20cmで、緩やかにカーブしている。

### ⑨ 8号溝（第646・647図）

本溝は、幅約1m、長さ8m、深さ約35cmの規模を持つ。底面は平坦で、ほぼ水平である。主軸は、 $N-12^{\circ}-E$ で、堀の主軸に近い。

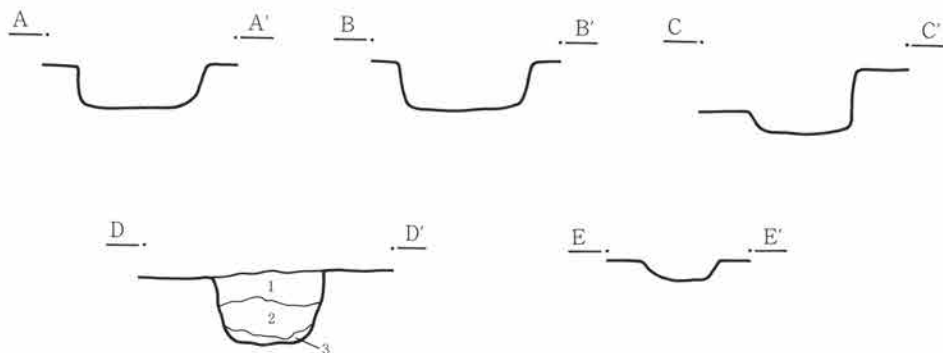
## ⑩ 10号溝 (第646・647図)

本溝は、調査区内に一部が確認された。7号溝と約35cmの間隔をもって併行している。幅約70cm、深さ約15cmで、皿状の掘り方を呈する。



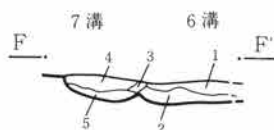
第646図 I地区A区5・6・7・8・10号溝遺構図(1号館跡西外郭)①

第6章 中世・近世の遺構と遺物



I地区A区1号館跡内5号溝土層説明 (D-D')

- 1 暗褐色土 ローム・小石を含む。
- 2 暗褐色土 ロームと黒褐色土の小ブロックを含む。
- 3 暗褐色土 ロームを多く含む。



I地区A区1号館跡内6・7号溝土層説明 (F-F')

- 1 ロームと黒褐色土の混合層。
- 2 ロームブロックと黒褐色土の混合。
- 3 さらさらしたロームと褐色土の混合。
- 4 黒褐色土 粘性あり、ローム粒を含む。
- 5 黒褐色土 ローム粒多く含む。



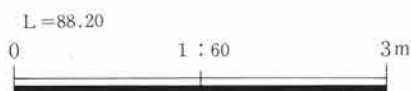
I地区A区1号館跡内7・10号溝土層説明 (G-G')

- 1 褐色土 粘性なく、柔らかい。
- 2 黒褐色土



I地区A区1号館跡内6号溝土層説明 (H-H')

- 1 黒褐色土と汚れたロームが斑状に混合 やや粘性。
- 2 褐色土 やや粘質。



第647図 I地区A区5・6・7・8・10号溝遺構図②

⑪ 2号土坑 (第648図)

1.8m(東西)×1.9m(南北)のほぼ正方形を呈し、約45cmである。4号土坑との新旧関係不明。

⑫ 3号土坑 (第648図)

幅90cm、深さ約15cmの長方形。10号土坑と一部重複しているが、新旧関係不明。

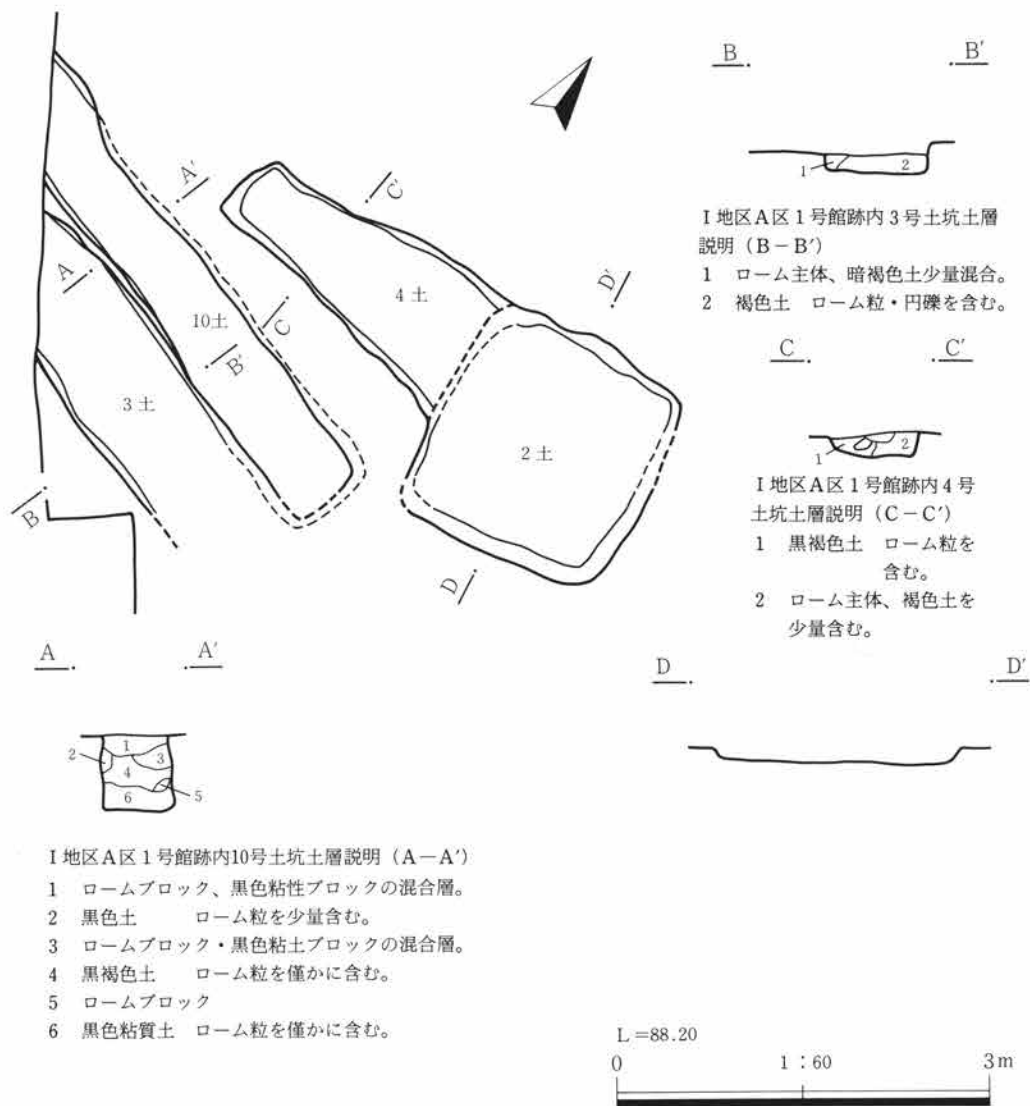


## ⑬ 4号土坑

幅60cm～1mの不整長方形。深さ約20cm。東側では、2号土坑と重複するが、新旧関係不明。

## ⑭ 10号土坑

幅約70cm、深さ約60cmの長方形を呈する。掘り方は、袋状となっている部分が多い。



第648図 I地区A区2・3・4・10号土坑遺構図(1号館跡西外郭)

第6章 中世・近世の遺構と遺物

⑮ 5号土坑 (第649図)

幅約90cm、長さ6.9mの長方形。9号方形遺構と重複するが、新旧関係不明。掘り方は、袋状を呈する部分が多い。

⑯ 13号土坑 (第650図)

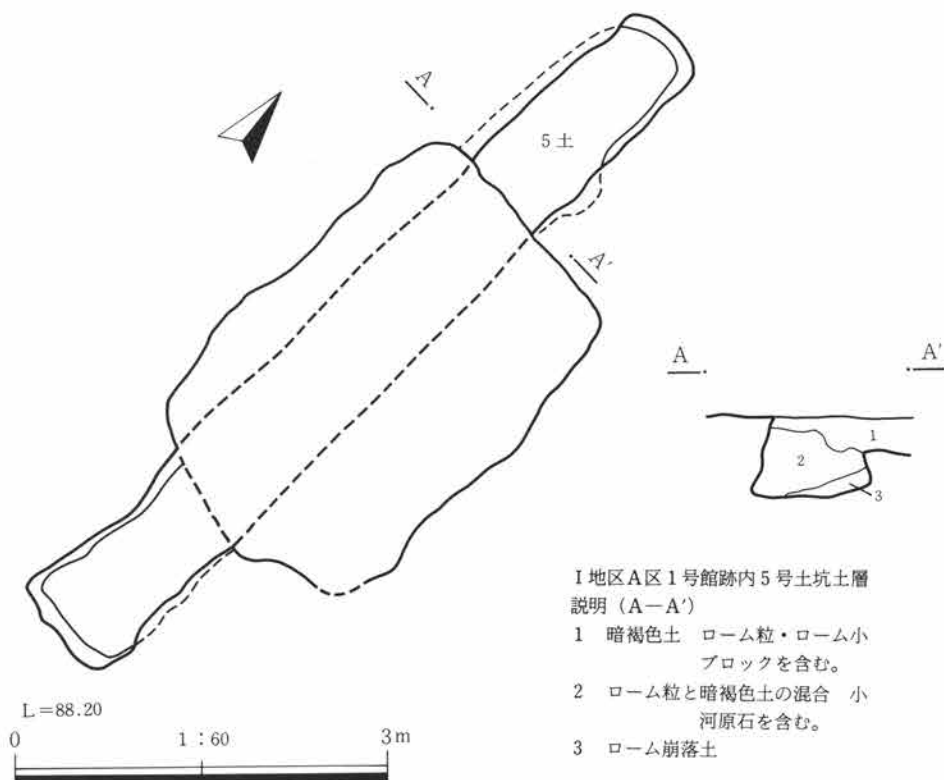
幅90cm～1m、長さ5.8mの長方形を呈する。6号溝、11号方形遺構と重複するが、6号溝よりは古く、11号方形遺構よりは新しい。

⑰ 14号土坑 (第650図)

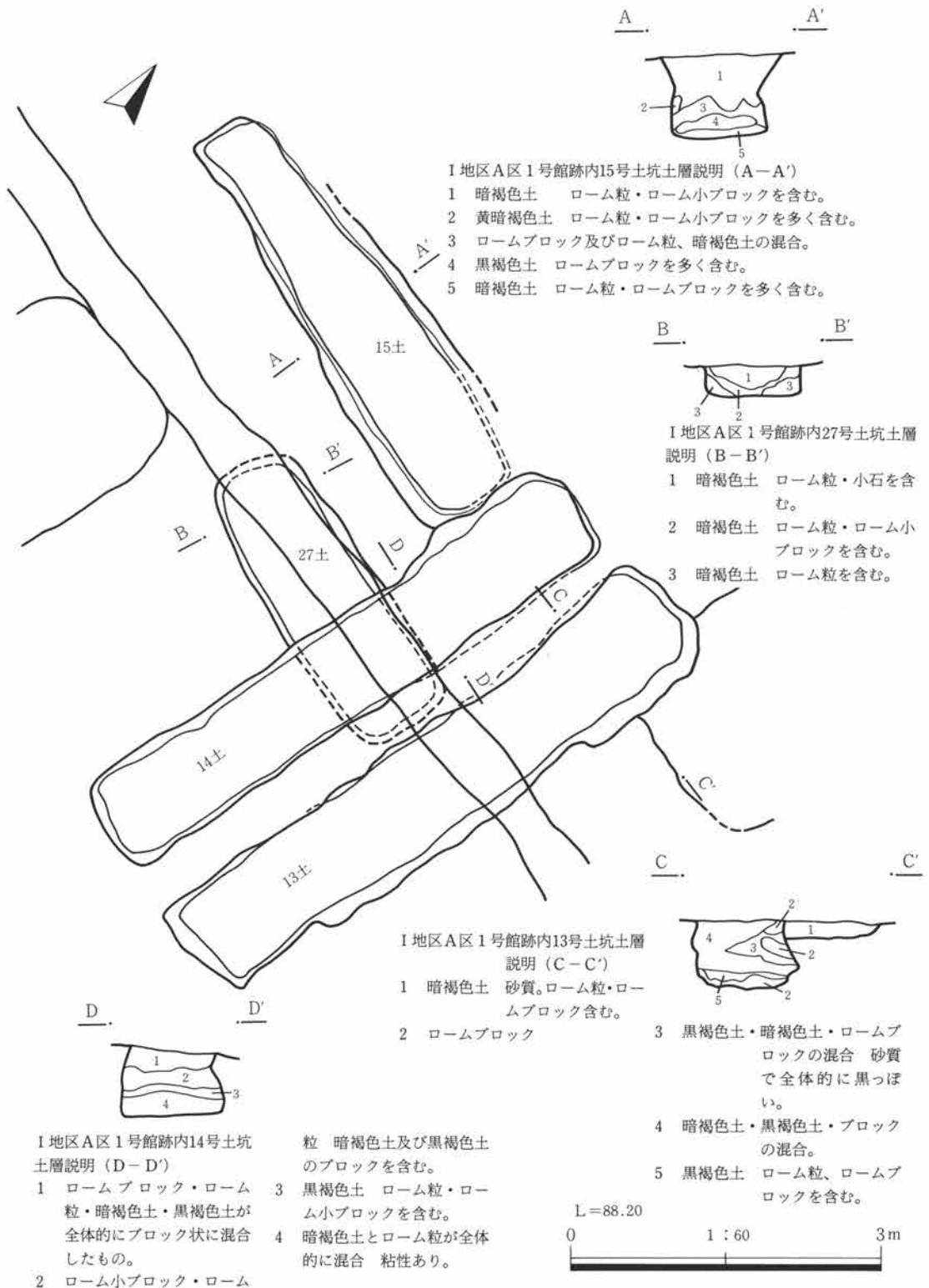
幅約90cm、長さ5.5m、深さ約60cmの規模を持つ長方形土坑。6号溝及び27号土坑と重複しているが、6号溝よりは古いものの、27号土坑との新旧関係は不明。

⑱ 15号土坑 (第650図)

幅約1.2m、長さ4.4m、深さ75cmの規模を持つ長方形土坑。掘り方は、途中に段をもち、上部は大きな傾斜をもっている。



第649図 I 地区A区5号土坑遺構図 (1号館跡西外郭)



第650図 I 地区A区13・14・15・27号土坑遺構図 (1号館跡西外郭)

第6章 中世・近世の遺構と遺物

⑲ 16号土坑 (第651図)

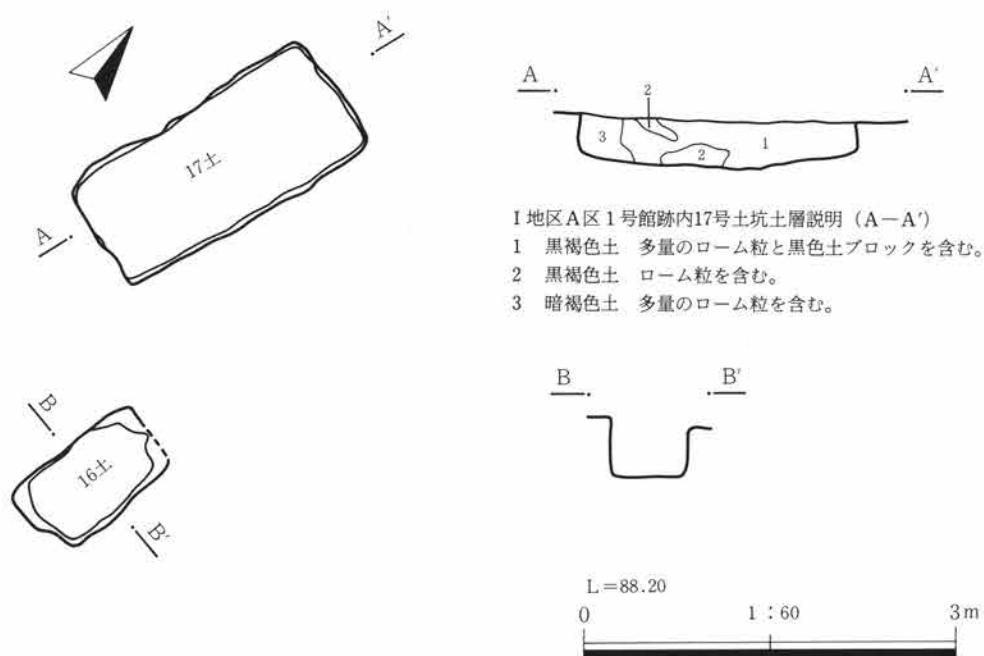
幅約1m、長さ2.3m、深さ約45cmの規模を持つ長方形土坑。土層断面は、瞬間に埋没した状態を示している。

⑳ 17号土坑 (第651図)

幅約60cm、長さ1.2m、深さ約45cmの規模を持つ長方形土坑。ほぼ垂直に掘り込まれている。

㉑ 27号土坑 (第650図)

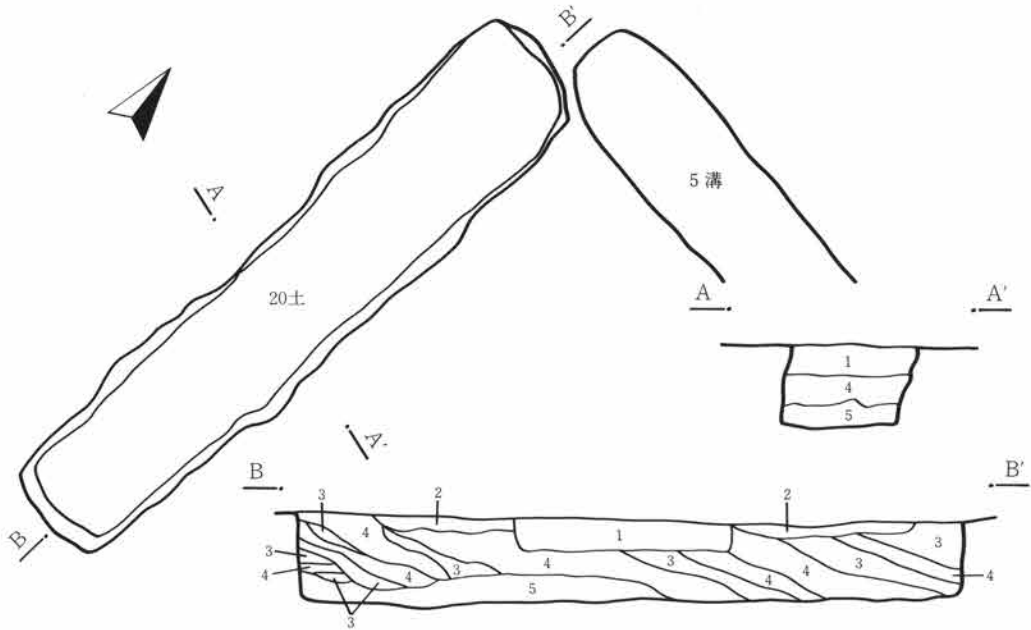
幅約1.1m、長さ推定3m、深さ約30cmの規模を持つ長方形土坑。ほぼ垂直に掘り込まれている。



第651図 I地区A区16・17号土坑遺構図(1号館跡西外郭)

## ② 20号土坑 (第652図)

幅1.2m、長さ5.5m、深さ69cmの長方形。主軸はN-10°-Eで、5号溝の主軸と直行する。掘り方は垂直に近く、底面は平坦である。



## I地区A区1号館跡内20号土坑土層説明

- 1 暗褐色土とローム小ブロックの混合。
- 2 暗褐色土 ローム粒少量含む。
- 3 黒色土とロームとの混合層 ローム粒少ない。
- 4 黒色土とロームとの混合層 ローム粒多い。
- 5 褐色土 ロームと黒色土が均一に混合したもの。



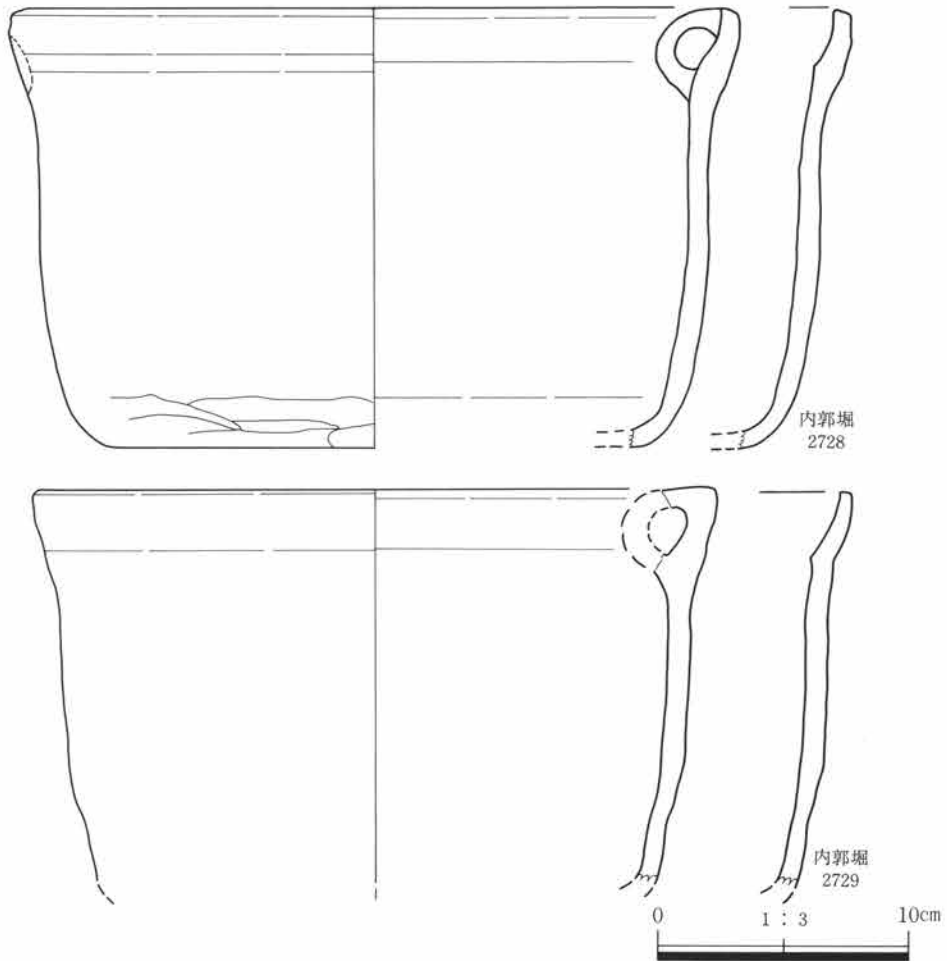
第652図 I地区A区20号土坑遺構図(1号館跡西外郭)

② 井戸について

堀の外側には、11基の井戸（1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12号井戸）が存在する。これらの井戸のうち、1号井戸・2号井戸・3号井戸・12号井戸の4基からは、堀出土の土器と同時期の土器が出土している。土器出土の井戸は、いずれも本館跡に接しており、本館跡に伴う遺構と考えられる。又、土器の出土していないその他の井戸についても、その位置から、本館跡と密接な関連がある井戸も少なくないと考えられる。

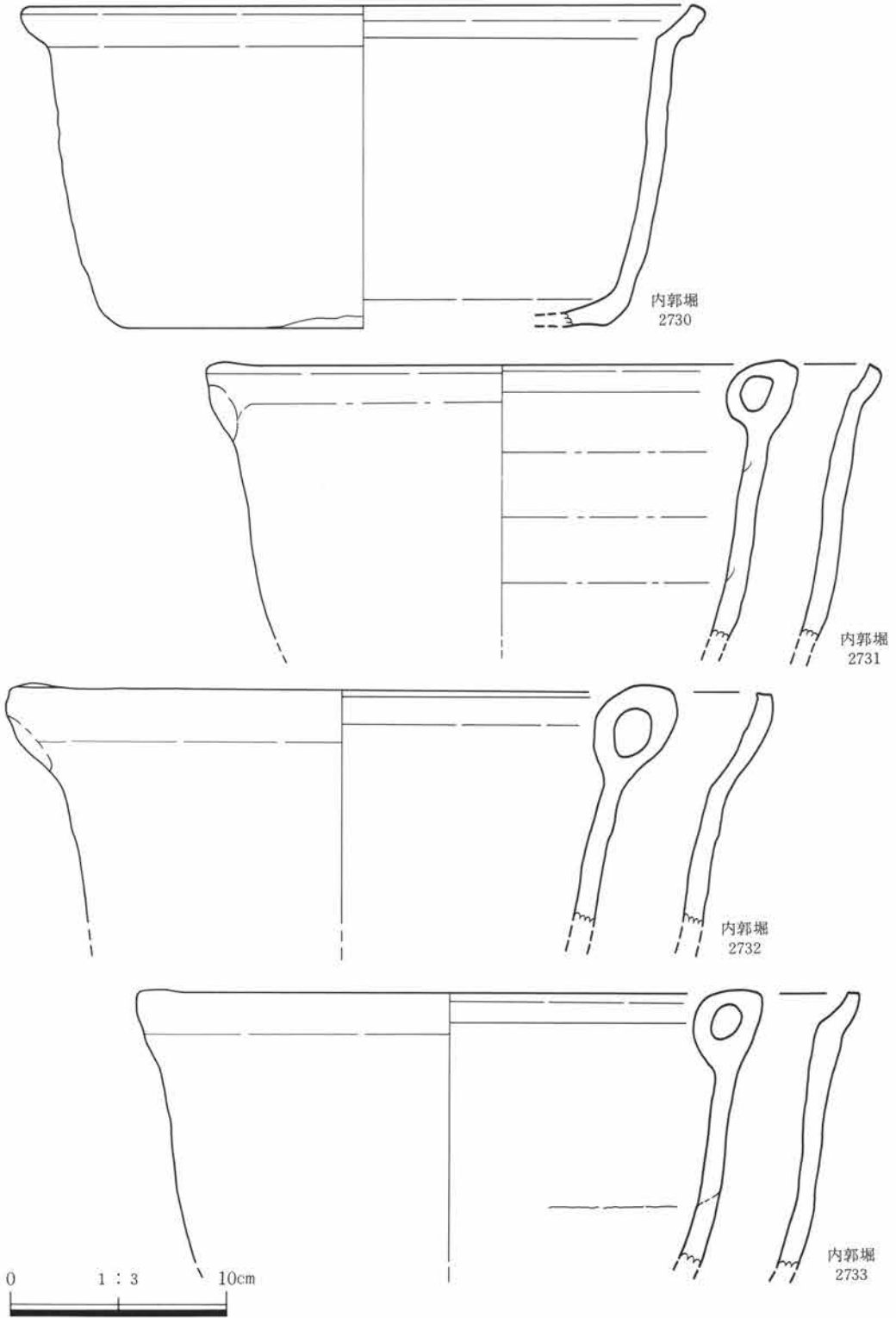
出土遺物

本館跡の遺物には、堀・6号溝・10号溝・34号溝・1号井戸・2号井戸・3号井戸・12号井戸がある。このうち、最も遺物の出土量が多いのは堀で、多くの内耳土器片の他に、壺・石臼片・鉄鎌片・砥石が出土した。いずれも堀の中・下層で、本館跡の時期を示しているものと考えられる。又、6号溝・10号溝・34号溝出土の土器片も、底面近くより出土している。（飯塚）

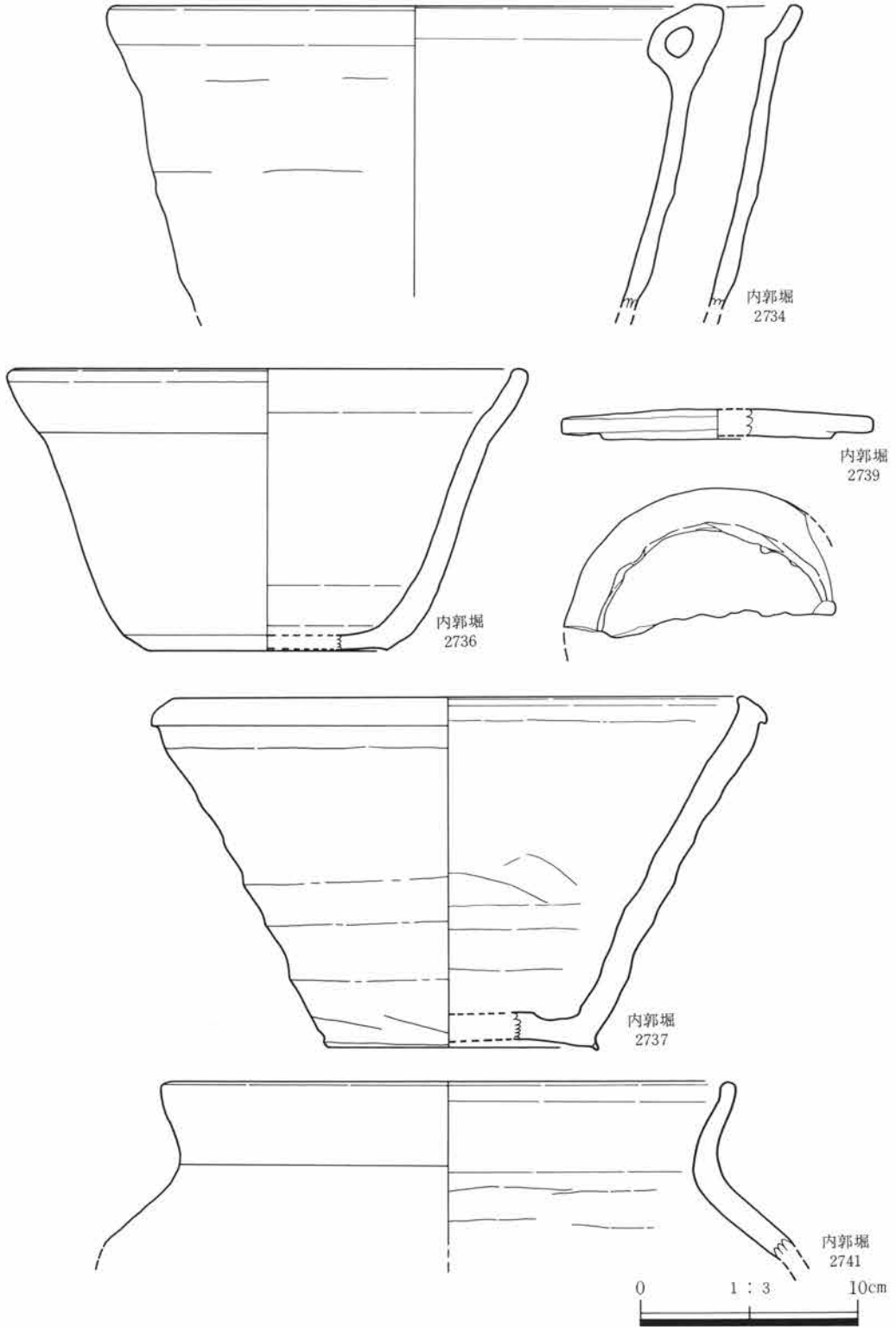


第653図 I地区A区1号館跡遺物図(1)

(2) 館 跡

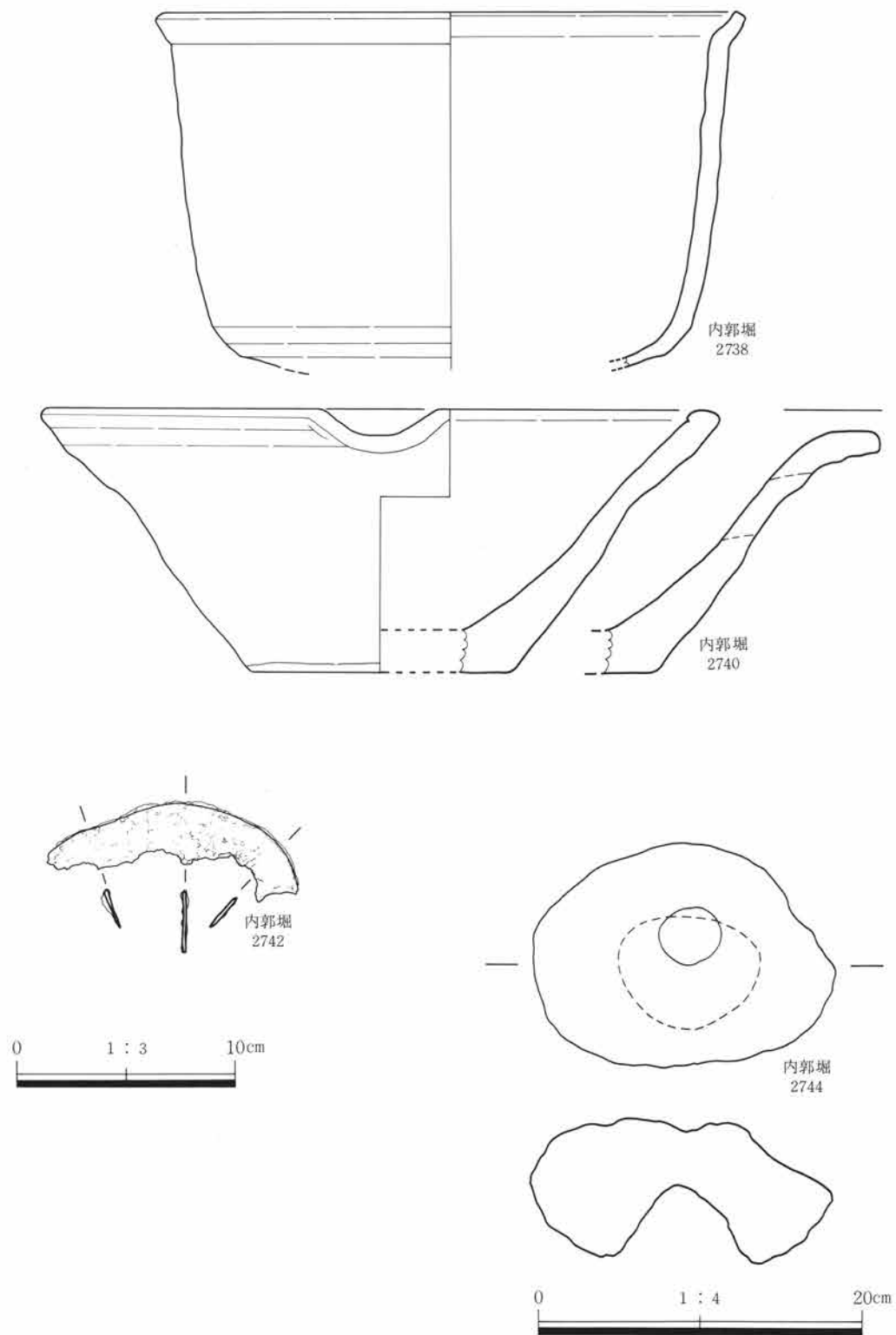


第654図 I地区A区1号館跡遺物図(2)

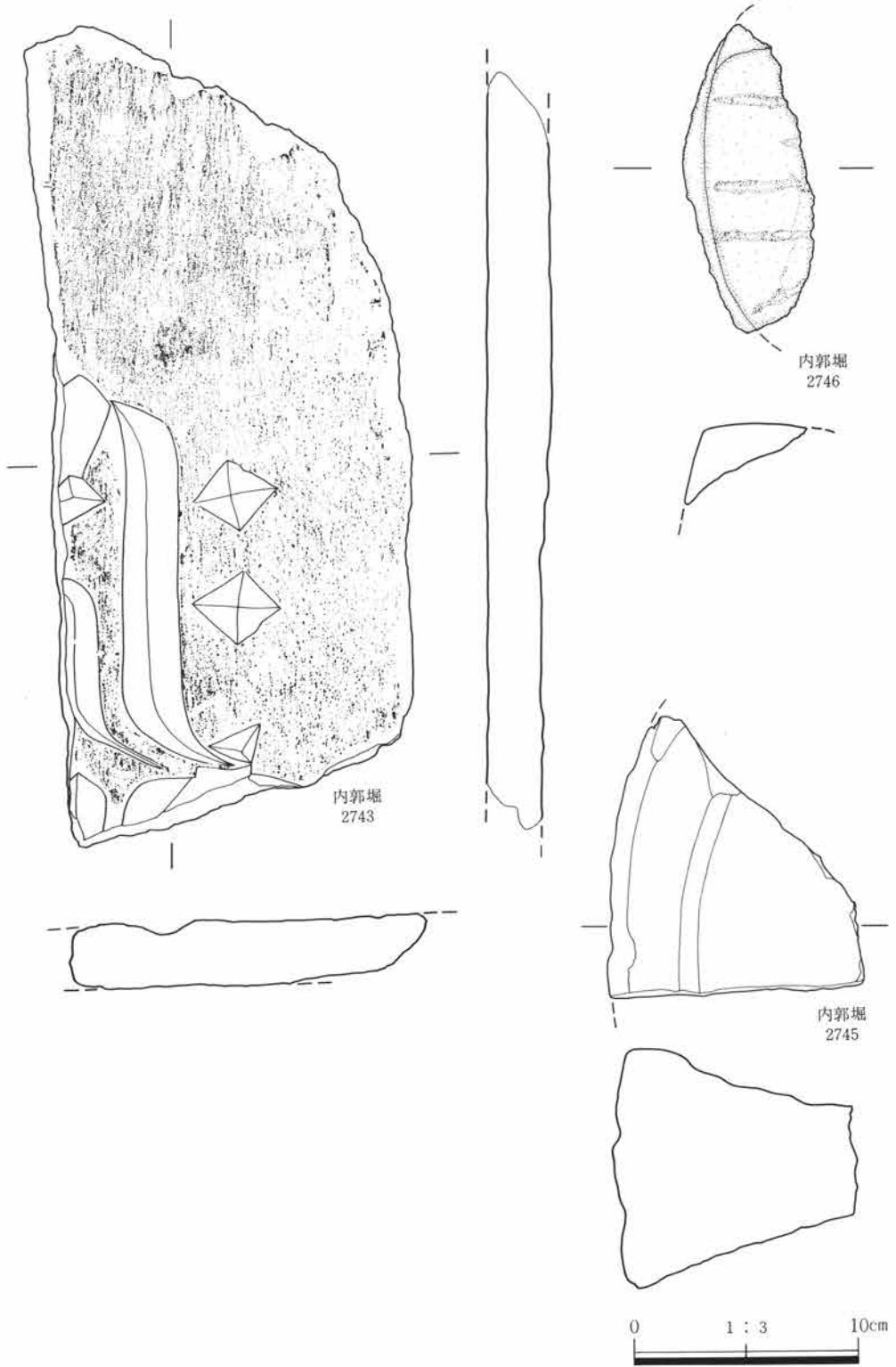


第655図 I地区A区1号館跡遺物図(3)

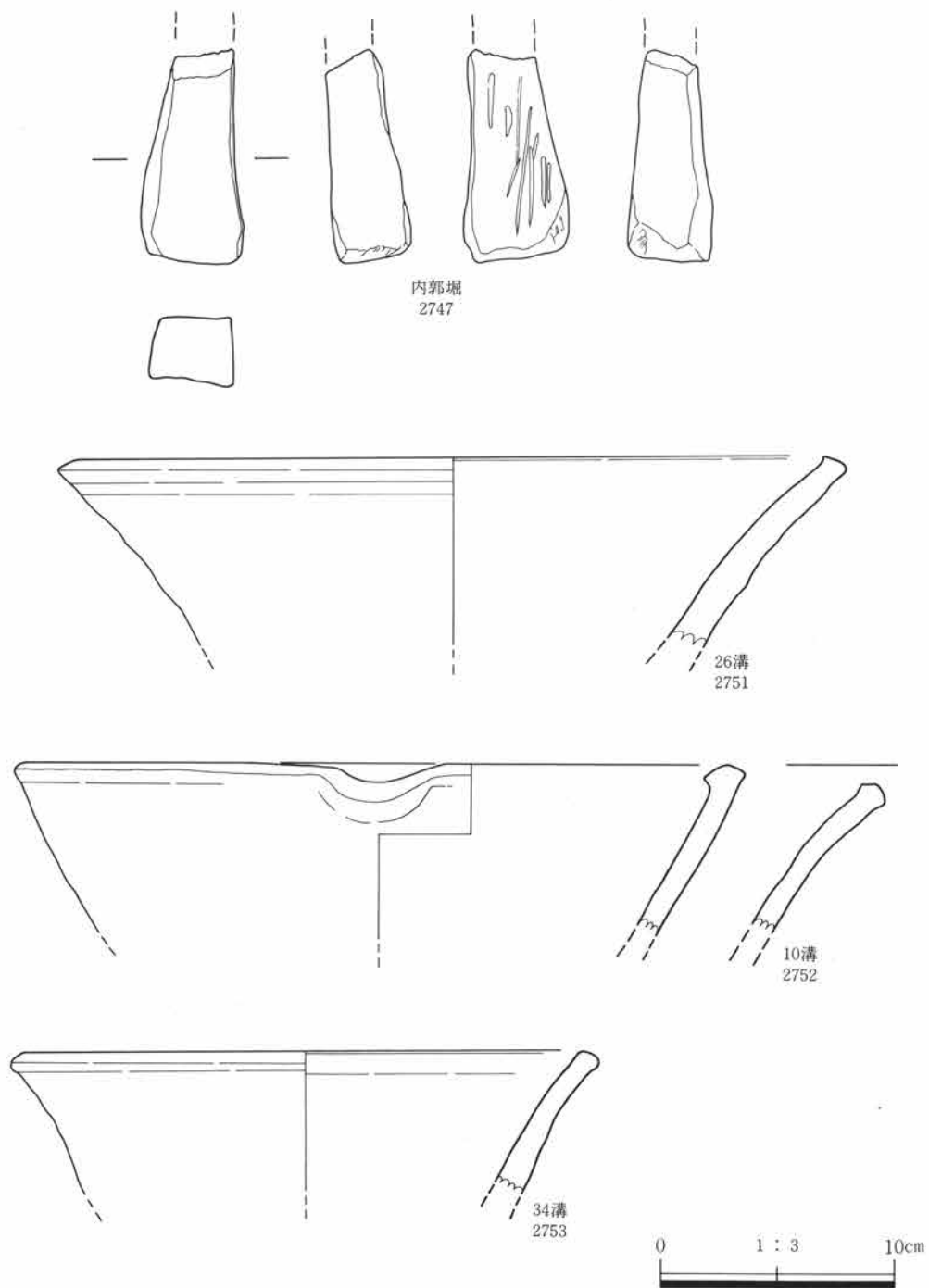




第656図 I地区A区1号館跡遺物図(4)



第657図 I地区A区1号館跡遺物図(5)



第658図 I地区A区1号館跡遺物図(6)

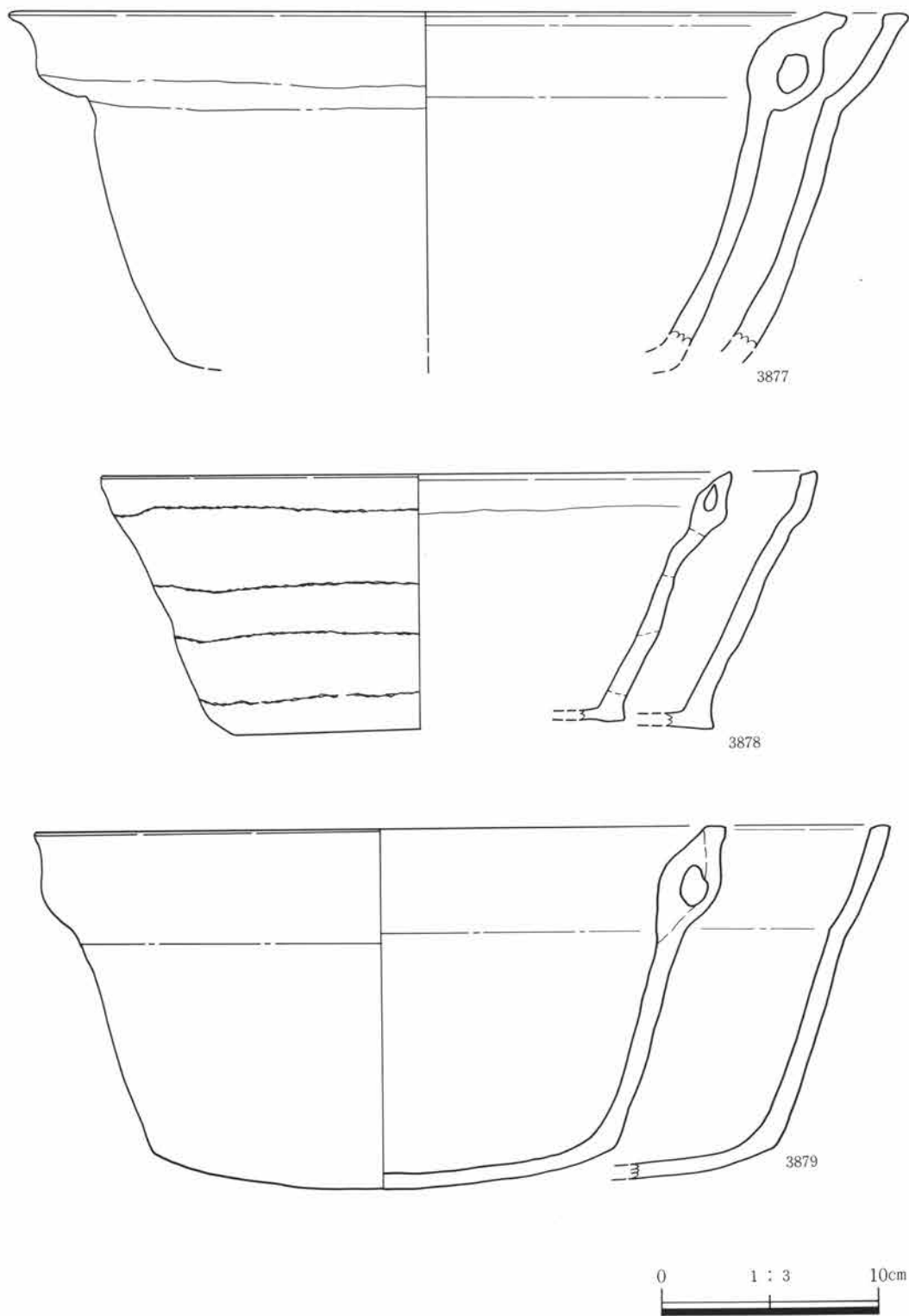
第200表 I地区A区1号館跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
2728	鍋 瓦質土器	器高:174mm口径: [290mm]底径:210 mm $\frac{1}{2}$ 残	微砂粒を含む。還元中性 焼成。硬質。外面:二次焼 成。	口縁部は短く外反。耳部は中形。土型 成形。外面:上端はなで。下端は削り。 内面:なで調整。	堀覆土。鉄分付着。 2729に似る。
2729	鍋 瓦質土器	器高:一口径:[270 mm]底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	微砂粒を含む。還元焼成。 硬質。外面:二次焼成。	口縁部は短く外反。内面に稜あり。耳 部は中形。輪積土型成形。外面:削り、 なで。内面:こぼめ調整。	堀覆土。2728に似 る。
2730	鍋 瓦質土器	器高:[150mm]口径: [320mm]底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒が多い。還元焼成。硬 質。外面:二次焼成。	口縁部は小さく外傾。内面に稜あり。 下げ底。土型成形。外面:こぼめ、な で。内面:こぼめ調整。	堀覆土。鉄分付着。
2731	鍋 瓦質土器	器高:(126mm)口径: [274mm]底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で鉄分を含む。還元 焼成。硬質。外面:二次焼 成。	口縁部は小さく外傾。内面に稜あり。 耳部は中形。土型成形。内外面:軽い こぼめ調整。	堀覆土。鉄分付着。
2732	鍋 瓦質土器	器高:(110mm)口径: [308mm]底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。還元焼成。硬 質。外面:二次焼成。	口縁部は外反。耳部は中形。土型成形 外面:なで。内面:軽いこぼめ調整。	堀覆土。鉄分付着。
2733	鍋 瓦質土器	器高:(125mm)口径: [290mm]底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	微砂粒を含む。還元焼成。 軟質。外面:軽く二次焼 成。	口縁部は小さく外傾。耳部は中形。土 型成形。外面:こぼめ。内面:なで調整 成。	堀覆土。鉄分付着。
2734	鍋 瓦質土器	器高:一口径:[285 mm]底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で鉄分を含む。還元 中性。硬質。外面:二次焼 成。	口縁部は小さく外傾。体部直立。内面 に稜あり。耳部は中形。土型成形。内 外面:軽いこぼめ調整。	堀覆土。鉄分付着。
2736	鍋 瓦質土器	器高:129mm口径: [230mm]底径:(110 mm) $\frac{1}{2}$ 残	微砂粒を含む。還元焼成。 軟質。外面:二次焼成。	口縁部は外反、下げ底。土型成形。外 面:上端はなで。下端は削り。内面:軽 いこぼめ調整。	堀覆土。鉄分付着。
2737	捏鉢 須恵質土 器	器高:155mm口径: [290mm]底径:[120 mm] $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。還元 焼成。硬質。	口唇部は外傾。体部は直立きみ。体部 は輪積。底部は回転糸切り成形。内 面:回転なで調整。磨耗痕なし。	堀覆土。鉄分付着
2738	鍋 瓦質土器	器高:一口径:[262 mm]底径:一口縁部体 部片	砂粒で鉄分を含む。還元 中性焼成。硬質。外面:二 次焼成。	口縁部は小さく外傾。体部は直立。内 面に稜あり。下げ底。土型成形。内外 面:軽いこぼめ調整。	堀覆土。鉄分付着。
2739	蓋 瓦質陶器	直径:[140mm]厚さ: 14mm $\frac{1}{2}$ 残	鉄分・砂粒を含む。酸化。 硬質。	下面に段を持つ円盤状。上面は僅か に弧状。手づくね成形。篋なで調整。 なでは部分的に研磨状。	堀覆土。
2740	捏鉢 瓦質土器	器高:121mm口径: [320mm]底径:[120 mm] $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で鉄分・気泡を含む。 還元中性焼成。硬質。内外 面は二次焼成。	口唇部の内面に稜あり。体部は輪積 あり。底部は回転糸切り成形。体部の 内面:無調整。内面:磨耗。	堀覆土。鍋及び火 処として転用か。
2741	甕 瓦質陶器	口径:[260mm]口縁 部 $\frac{1}{2}$ 残	鉄分・石英粒を含む。酸化 後還元。焼成。	口縁端部は直立きみで、口縁部は 「く」字状に外反する。輪積み成形。内 面はこぼめ調整。	堀覆土。

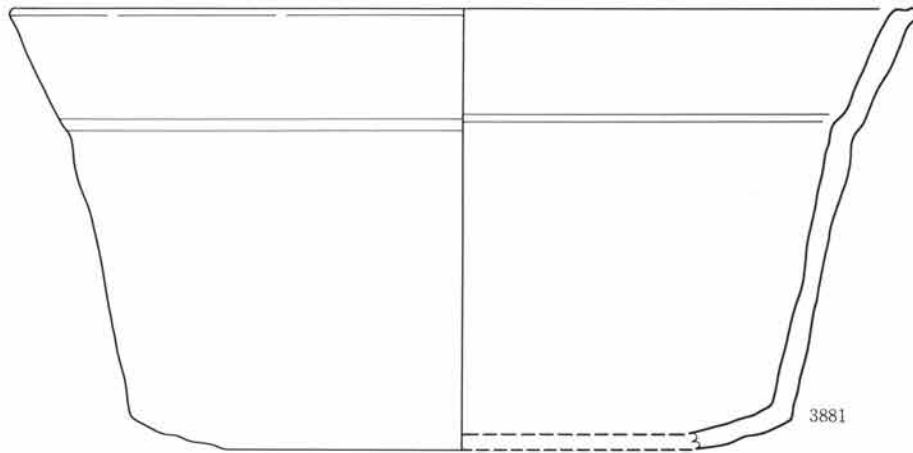
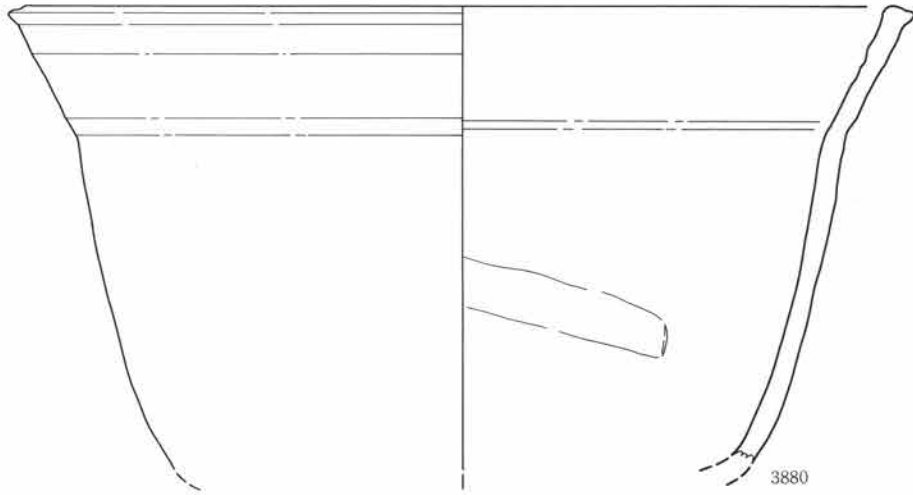
2742	鎌 鉄 製	刃部の幅:27mm背の 厚さ:2mm	全体に錆びており、両端 及び刃の大部分欠。	曲刃。	堀覆土。
2745	石 白 石 製品	高さ:107mm上白の小 片	砂岩。	下面やや磨滅している。	堀覆土。
2746	石 白 石 製品	下白の小片	粗粒安山岩。	目の深さ2~3mmで不揃い。上面は かなり磨滅している。	堀覆土。
2747	砥 石 石 製品	一部欠損	流紋岩。	三面は中央部が大きく擦り減ってい る。一面は1~1.5mmの筋状の擦痕が ある。	堀覆土。
2751	捏 鉢 瓦質土器	器高:一口径:[340 mm]底径:一口縁部小 片	砂粒で鉄分・気泡を含む。 酸化後、還元。硬質。	口唇部の内面に稜あり。体部は輪積 成形。外面:軽いなで調整。内面:磨耗	堀覆土。
2752	捏 鉢 瓦質土器	器高:(73mm)口径: [310mm]底径:一口縁 部小片	砂粒で鉄分・気泡を含む。 酸化後、還元焼成。硬質。	口唇部は内外面に鋭い稜あり。輪積 成形。外面:軽いなで調整。内面:磨耗	堀覆土。
2753	捏 鉢 瓦質土器	器高:(60mm)口径: 252mm底径:一口縁部 小片	砂粒で鉄分・気泡を含む。 還元焼成。硬質。	口唇部は外傾。体部は直立ぎみ。輪積 成形。内外面:軽いなで。内面:磨耗な し。	堀覆土。2737にや や似る。
2743	板 碑	別紙に掲載			
2744	五 輪 塔 水 輪	長径:186mm短径:135 mm高さ:87mm重量: 1112g完形	榛名二ツ岳軽石。	整形やや良。上面に径39mm、深7mmの 凹、下面に87mm、深48mmの播鉢状の凹 あり。	堀覆土。

## I 地区C区1号館跡〔清水館〕(付図3、第659~700図、第201表、図版98~127)

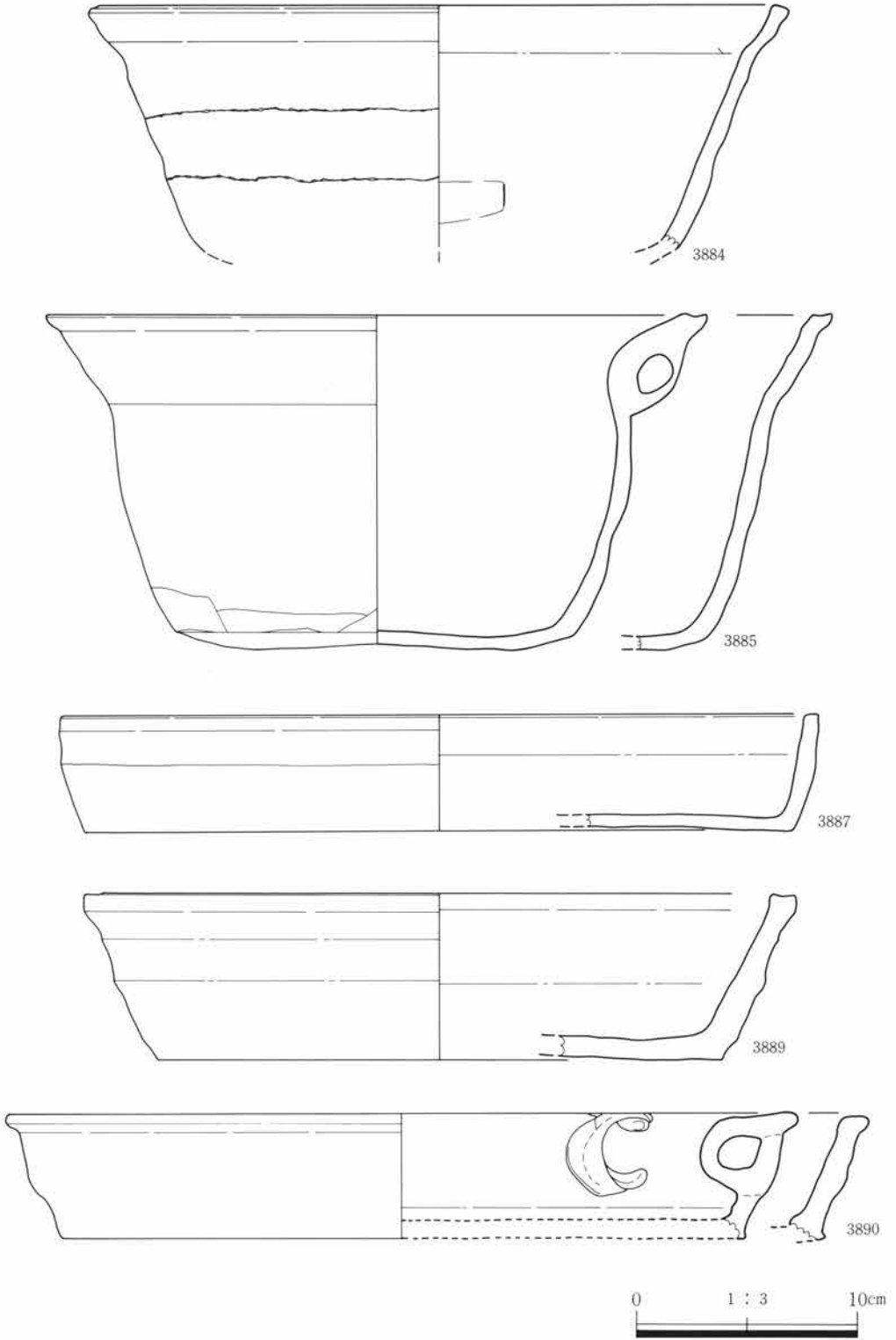
本館跡は、耕作土下、浅間山A軽石混入の褐色土中で確認された。環濠部分は、東辺が一辺約86.6m、北辺、南辺はそれぞれ約25.4m、7.8mで調査対象区外へのびている。方位は東辺でN-19°-Wである。館内部の遺構は井戸、柱穴、土坑、墓坑等がある。濠は地表からの深さが北で約2.4m、南で約2.1mで、南が浅くなっている。濠の上幅は約4.2m、下幅約1.1mを測り、中段部分をもっている。濠の底は平坦である。濠は江戸時代には名残が残っていたようで、覆土上層部には浅間山A軽石の混入と投込、落込の石、陶磁器類の出土層があった。濠下層部ではこの軽石の混入はなく、中世の遺物が混入している。出土遺物は覆土上層部のA軽石混入層では、陶磁器製の香炉、鉢、皿、椀、仏花器、壺、五輪塔、砥石等が出土している。覆土下層部分からは、内耳、カワラケ、永楽通宝等の出土がある。出土遺物、形態から中世の遺構とする。(秋池)



第659図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(1)

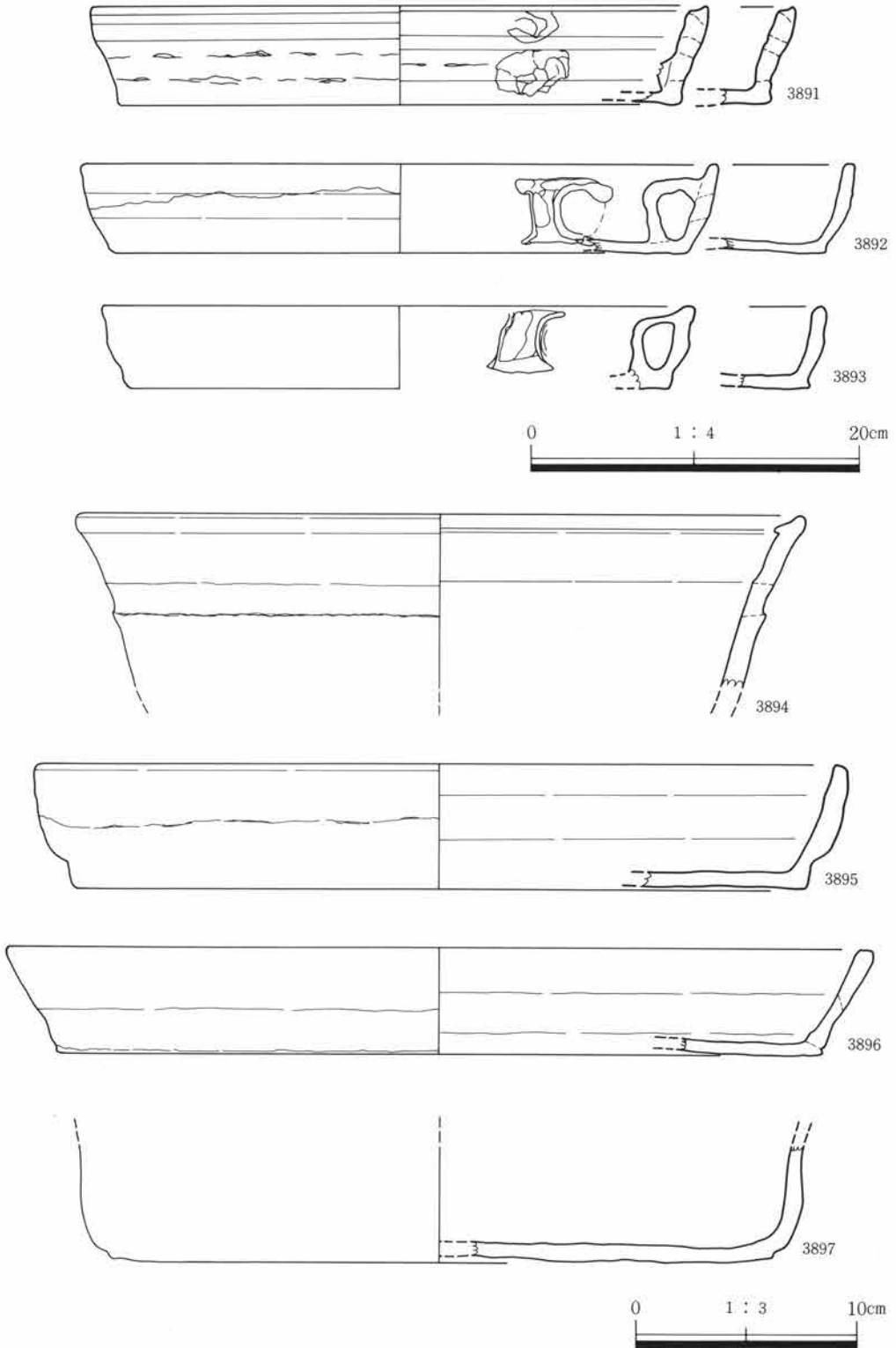


第660図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(2)

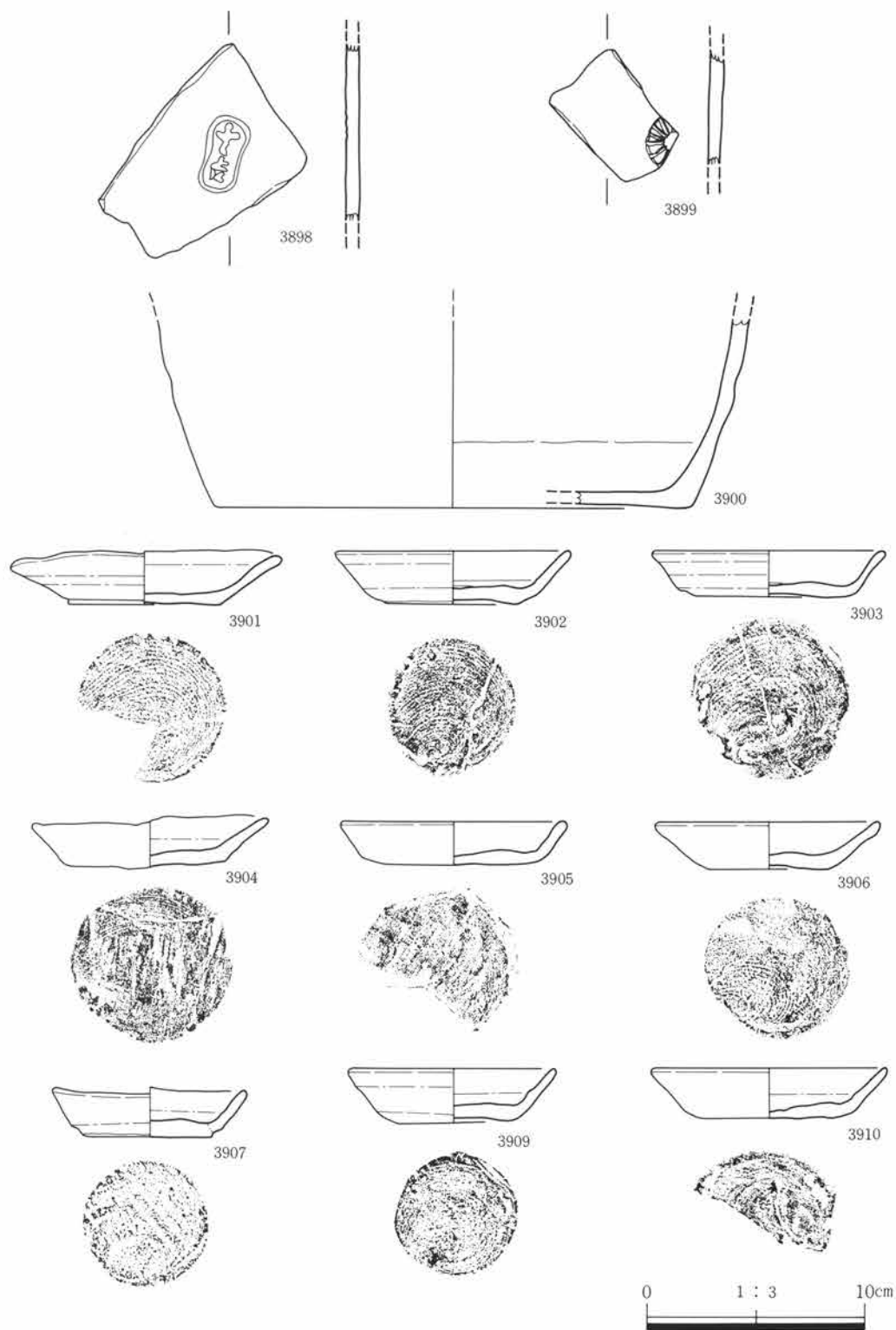


第661図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(3)



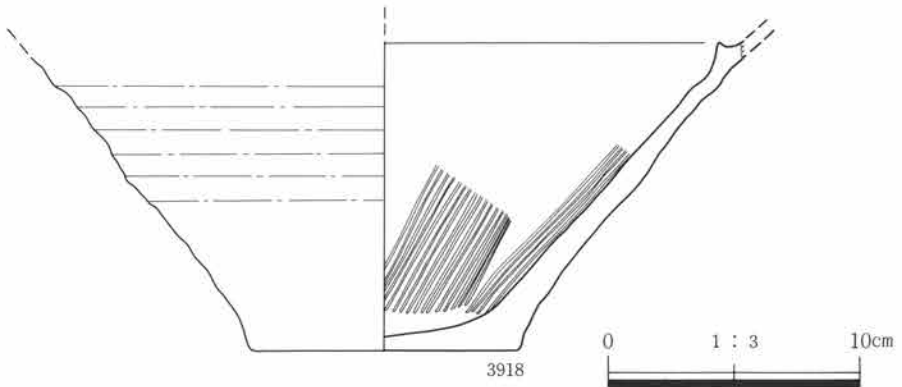
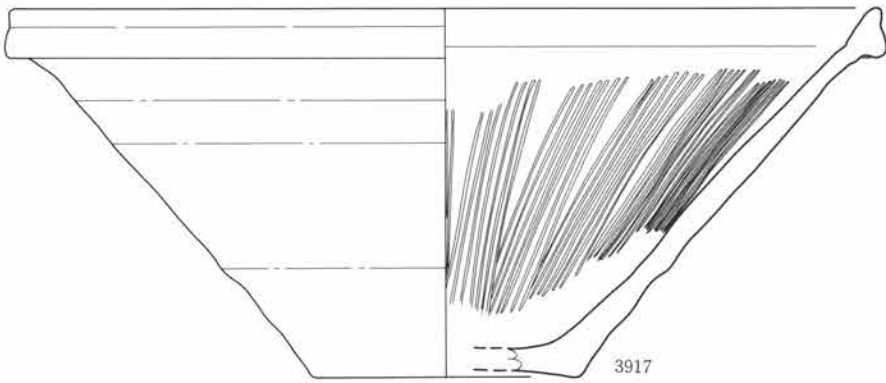
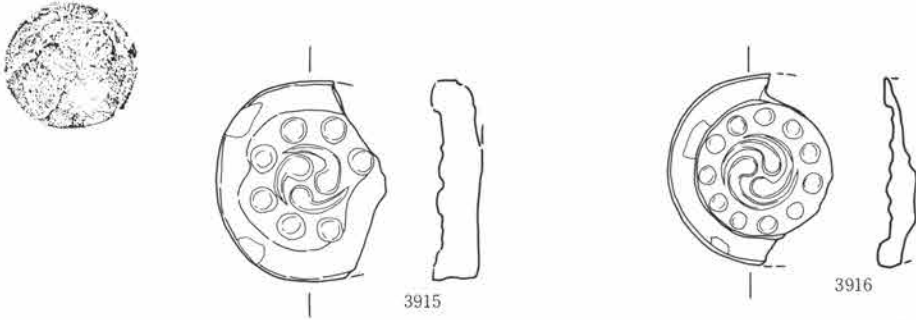
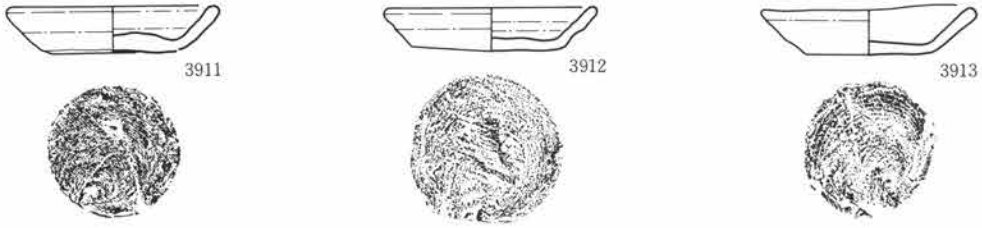


第662図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(4)

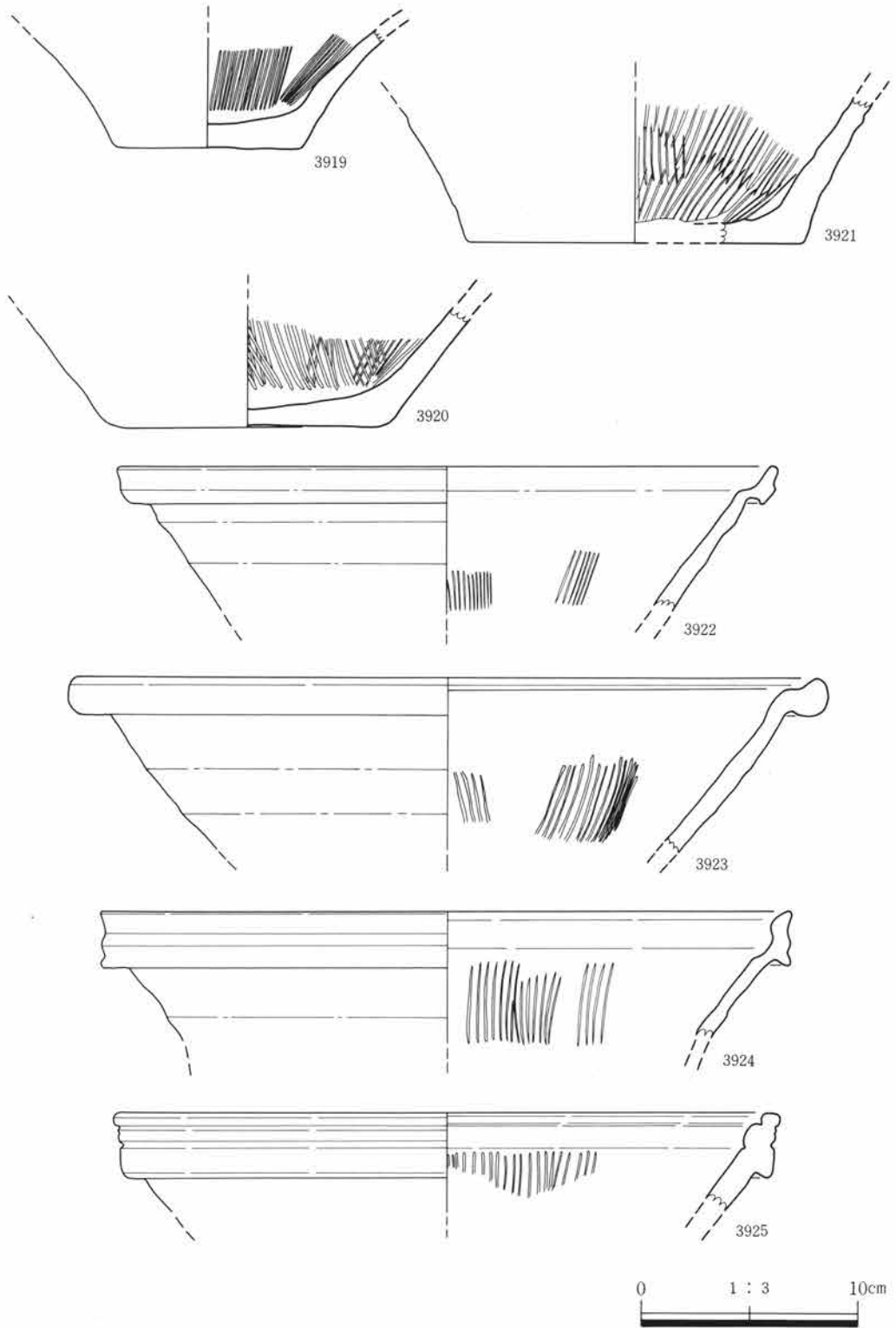


第663図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(5)

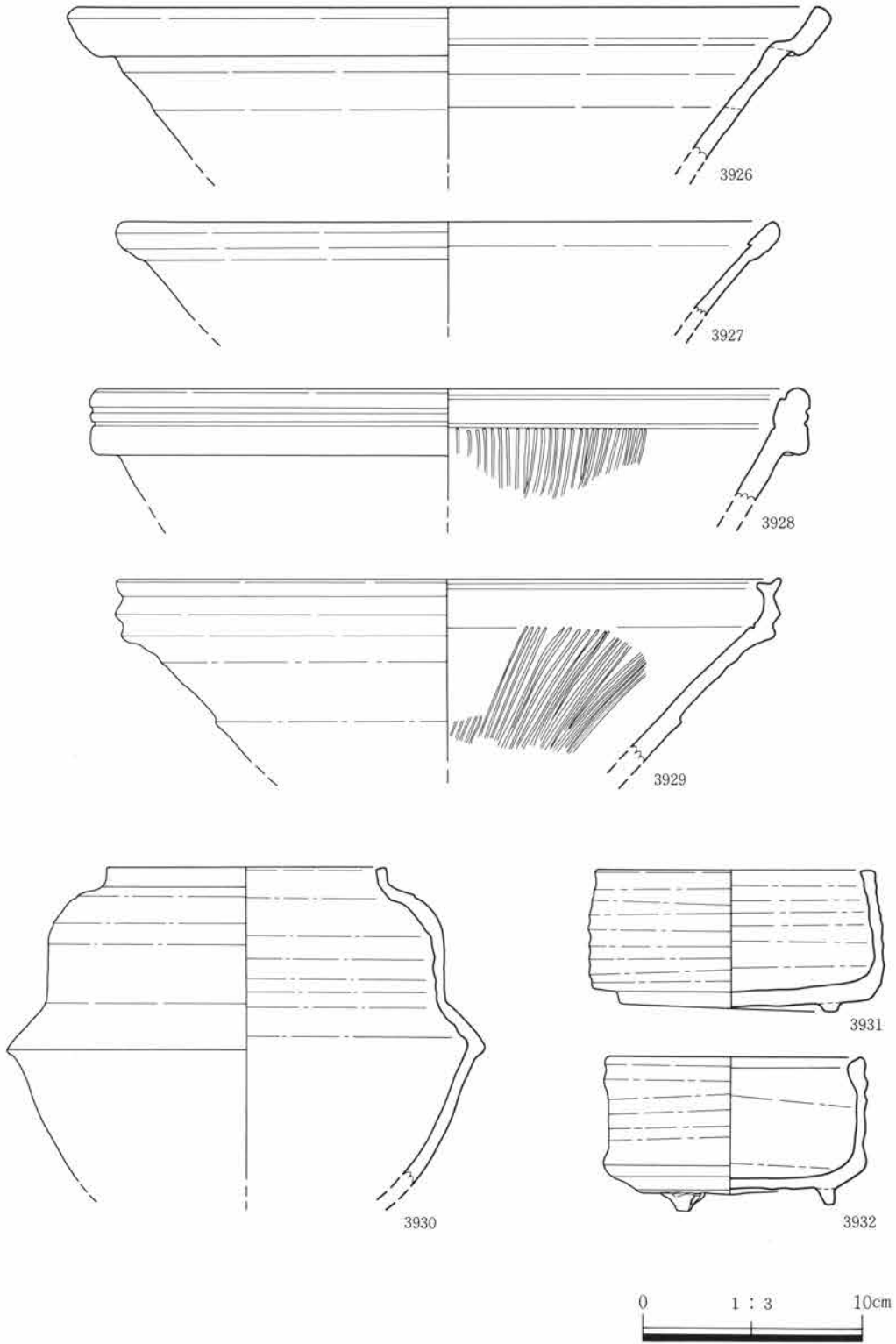
(2) 館 跡



第664図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(6)

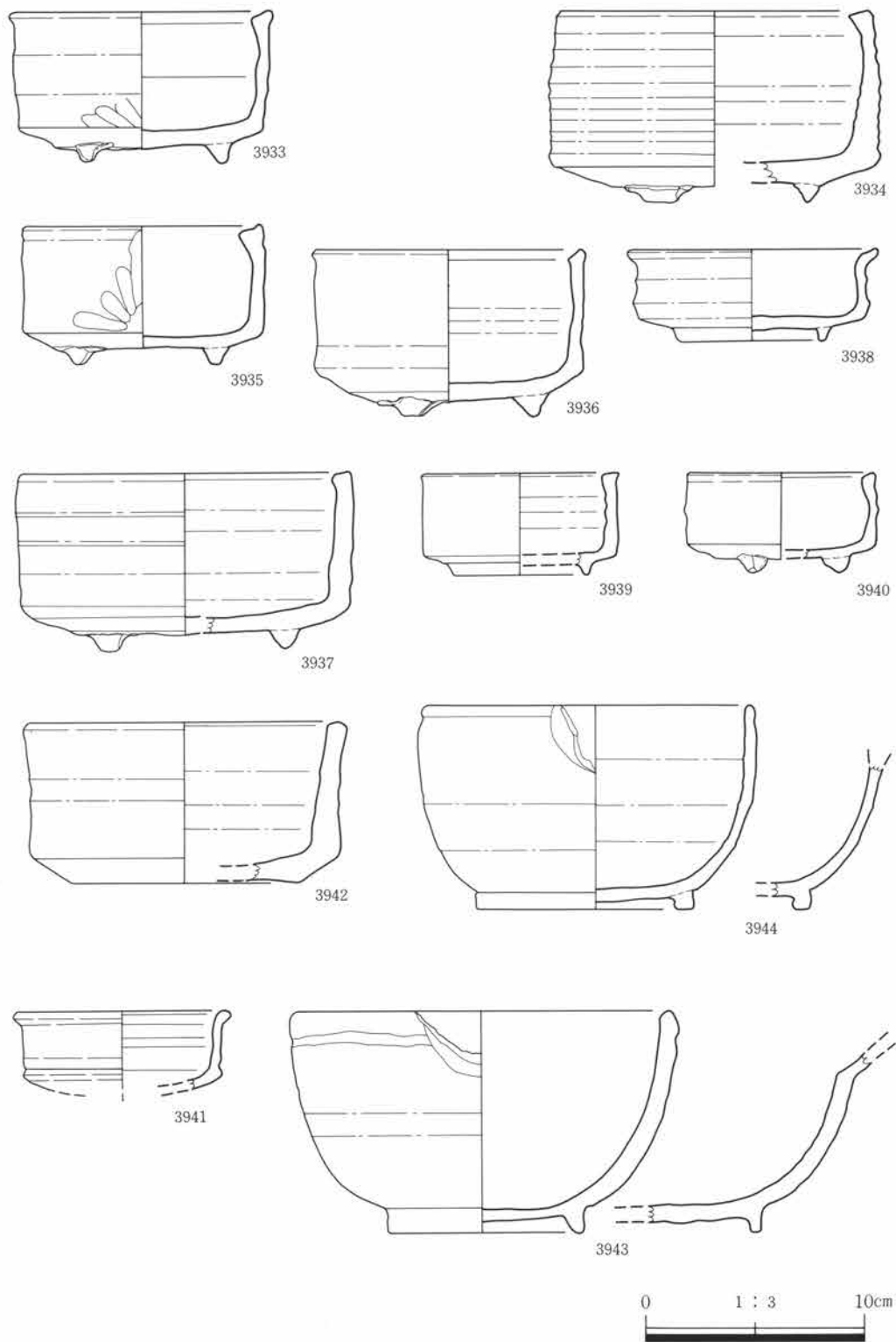


第665図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(7)

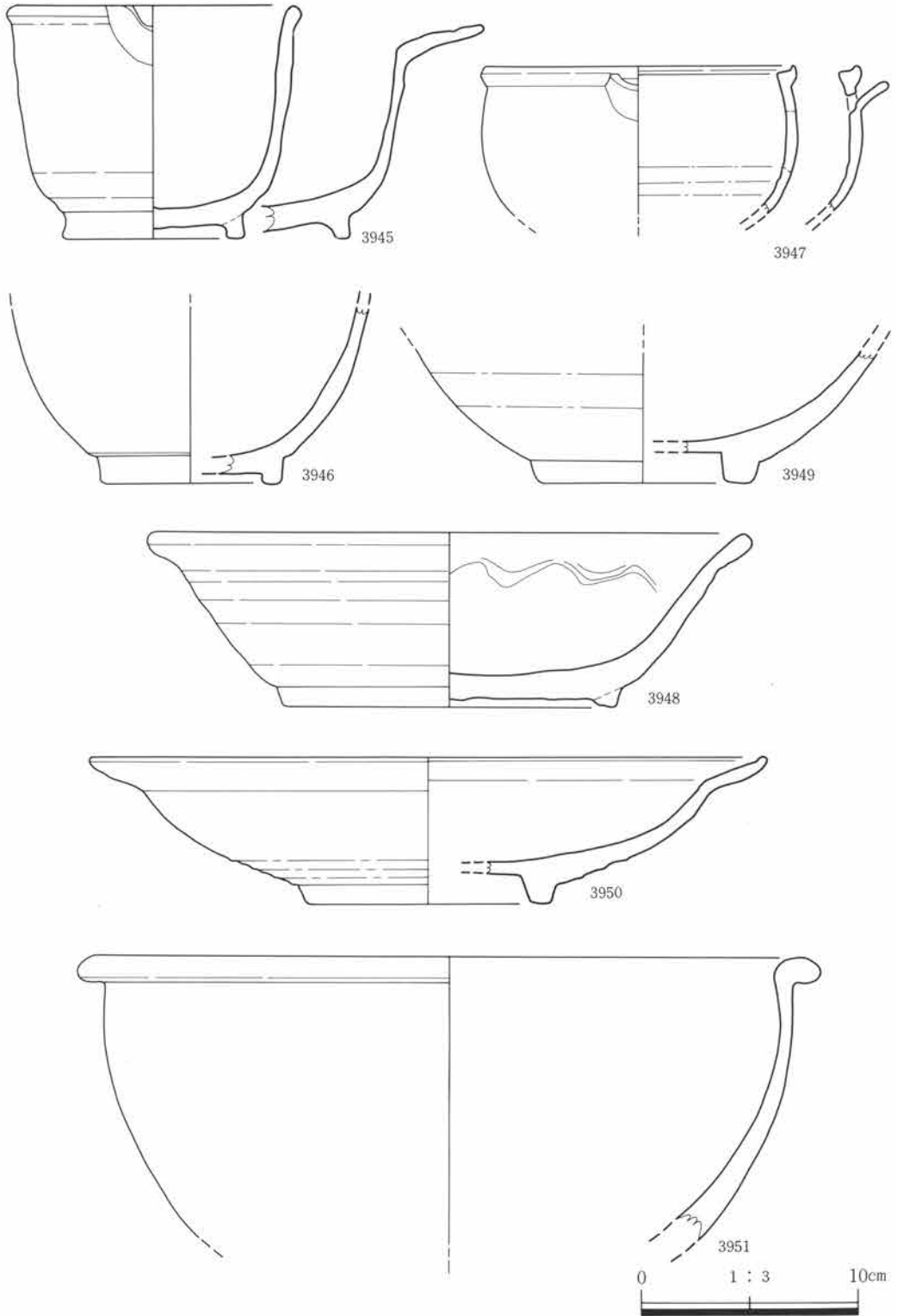


第666図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(8)

第6章 中世・近世の遺構と遺物

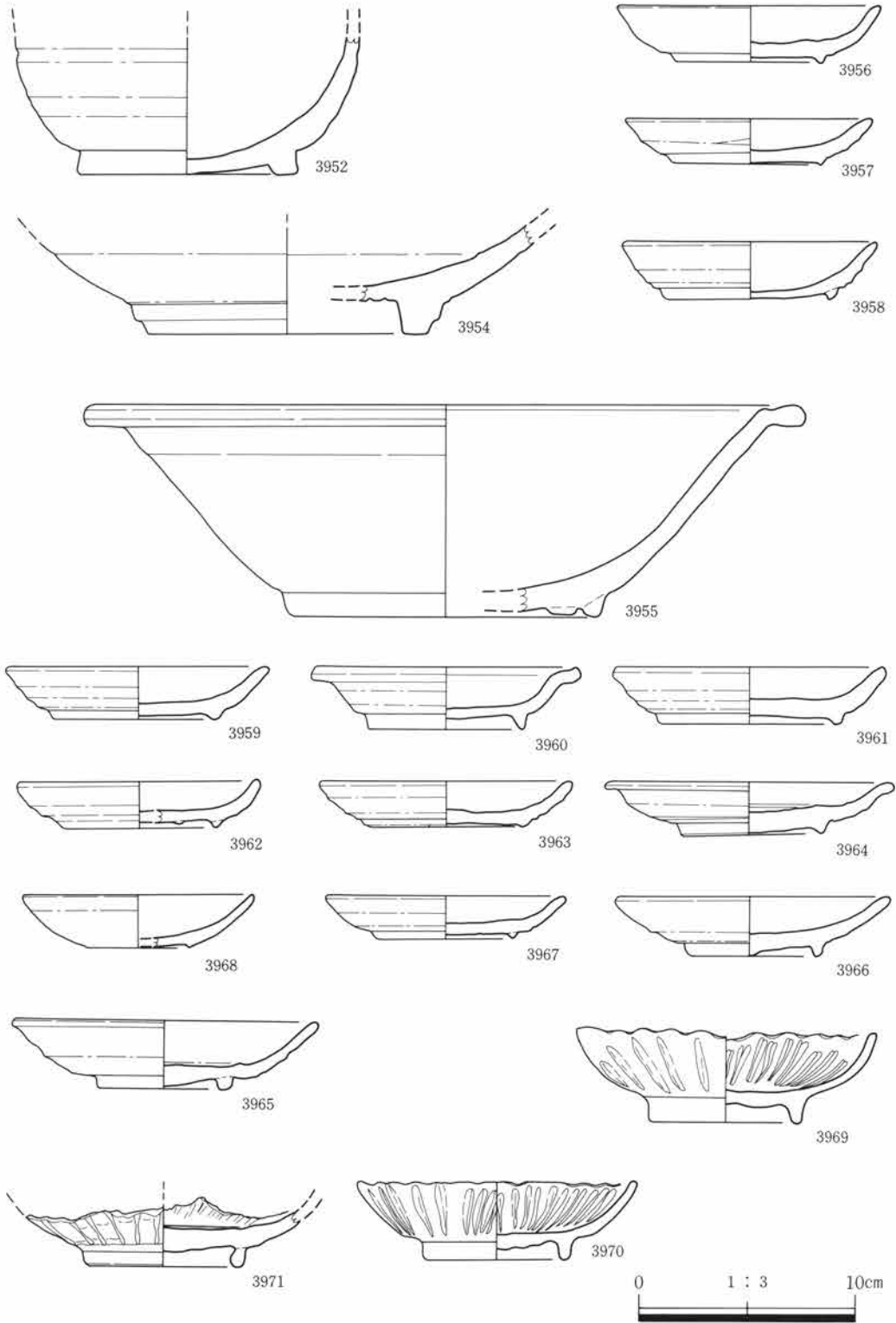


第667図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(9)



第668図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(10)

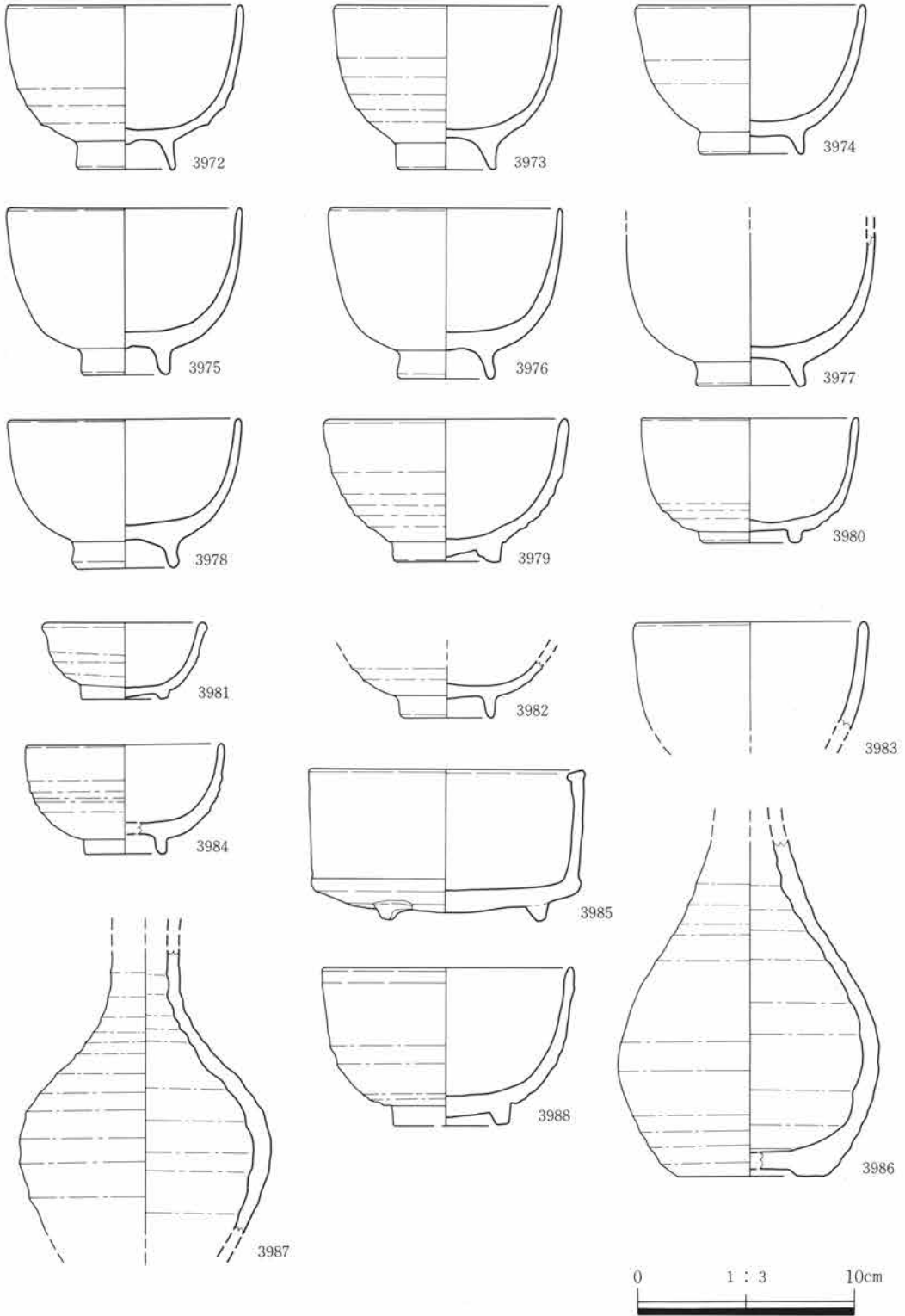
第6章 中世・近世の遺構と遺物



第669図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(11)

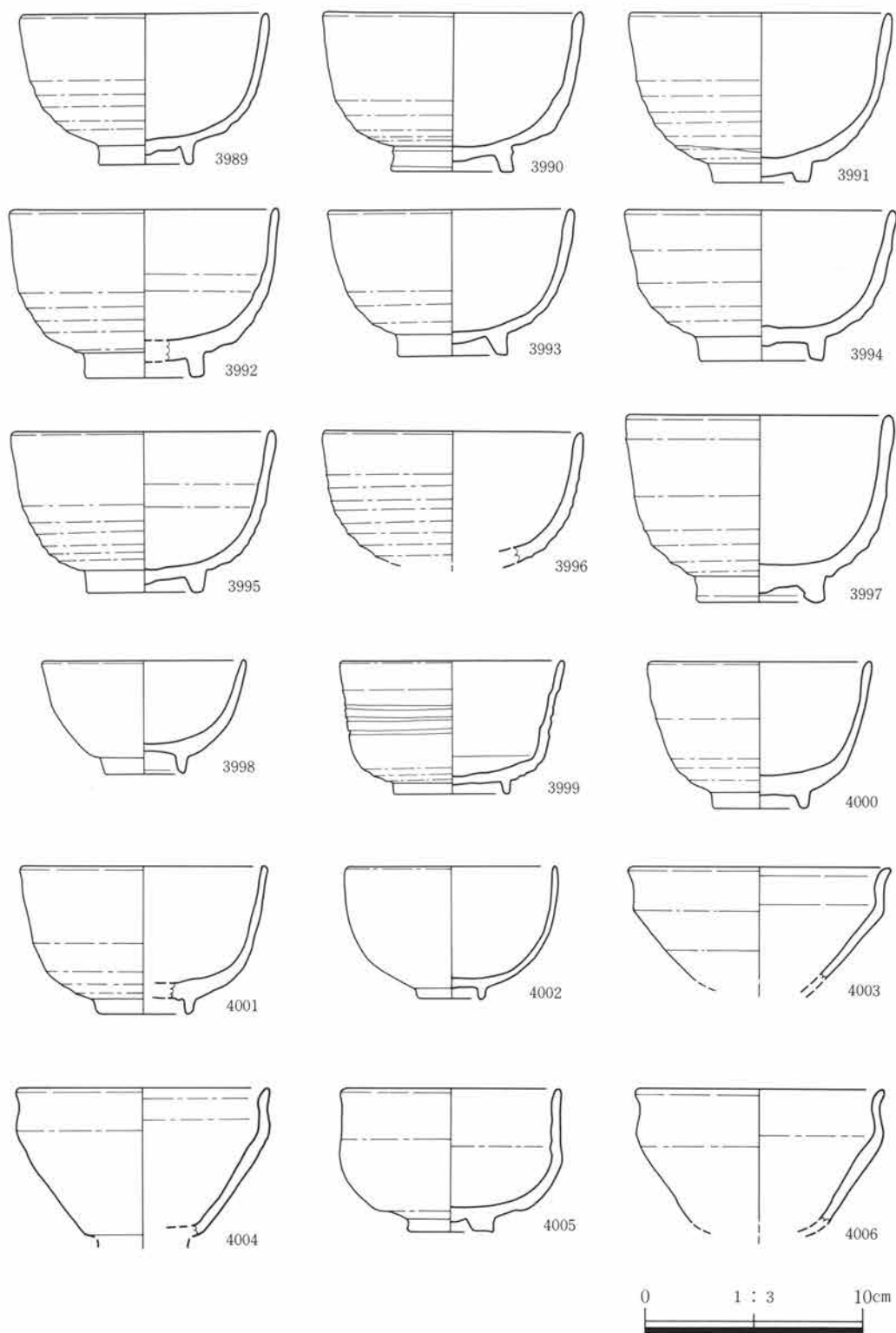


(2) 館 跡



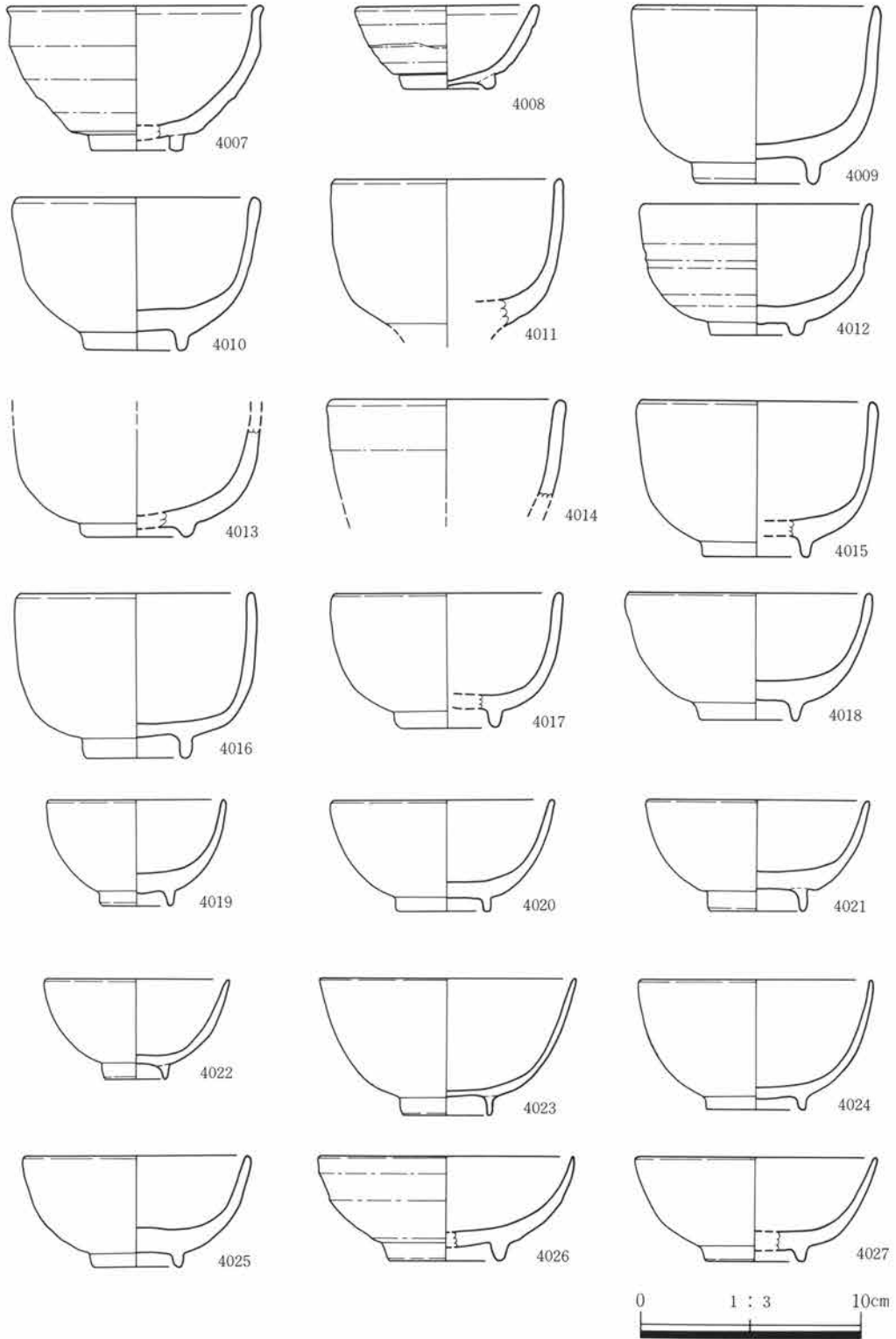
第670図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(12)

第6章 中世・近世の遺構と遺物

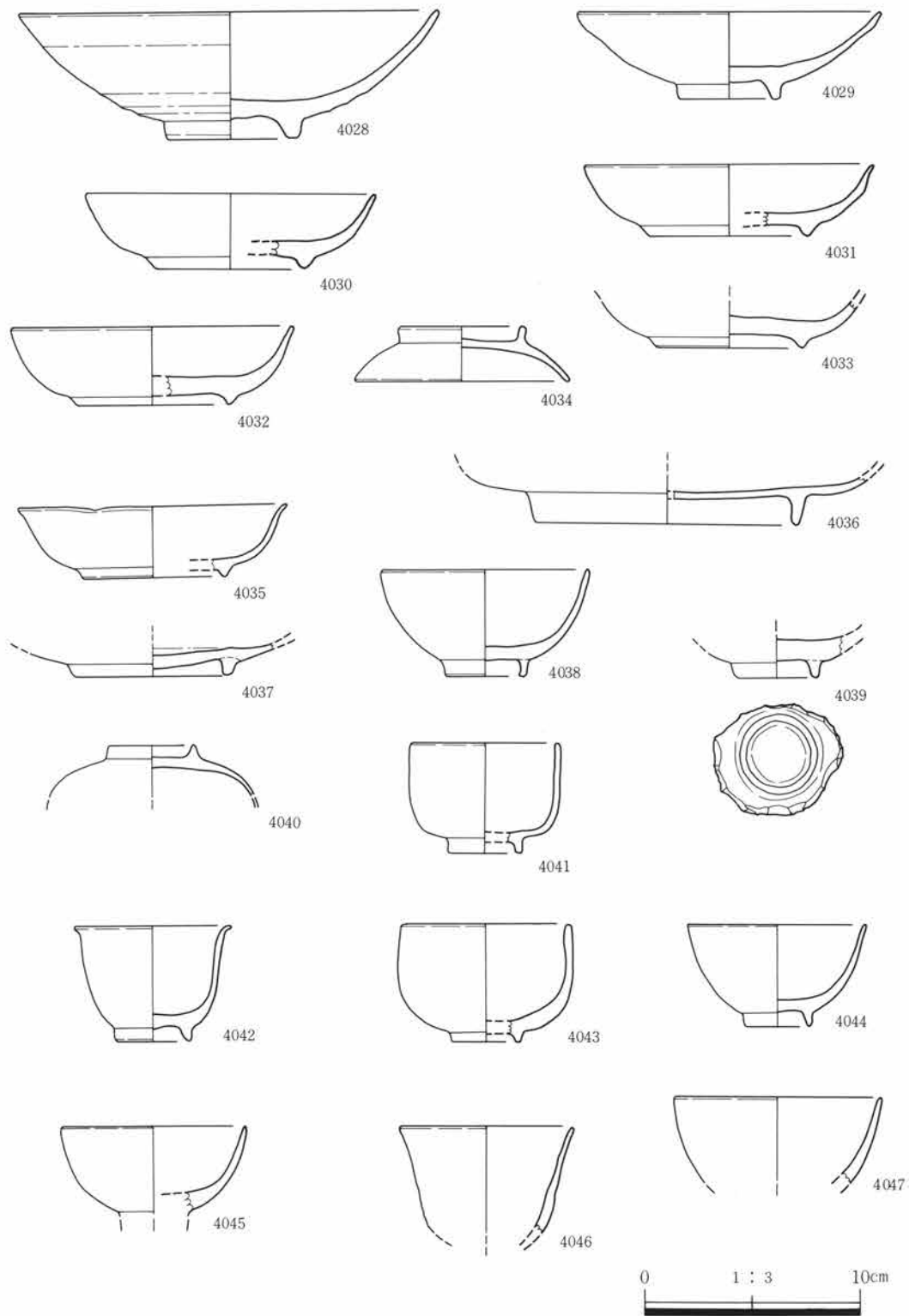


第671図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(13)

(2) 館 跡

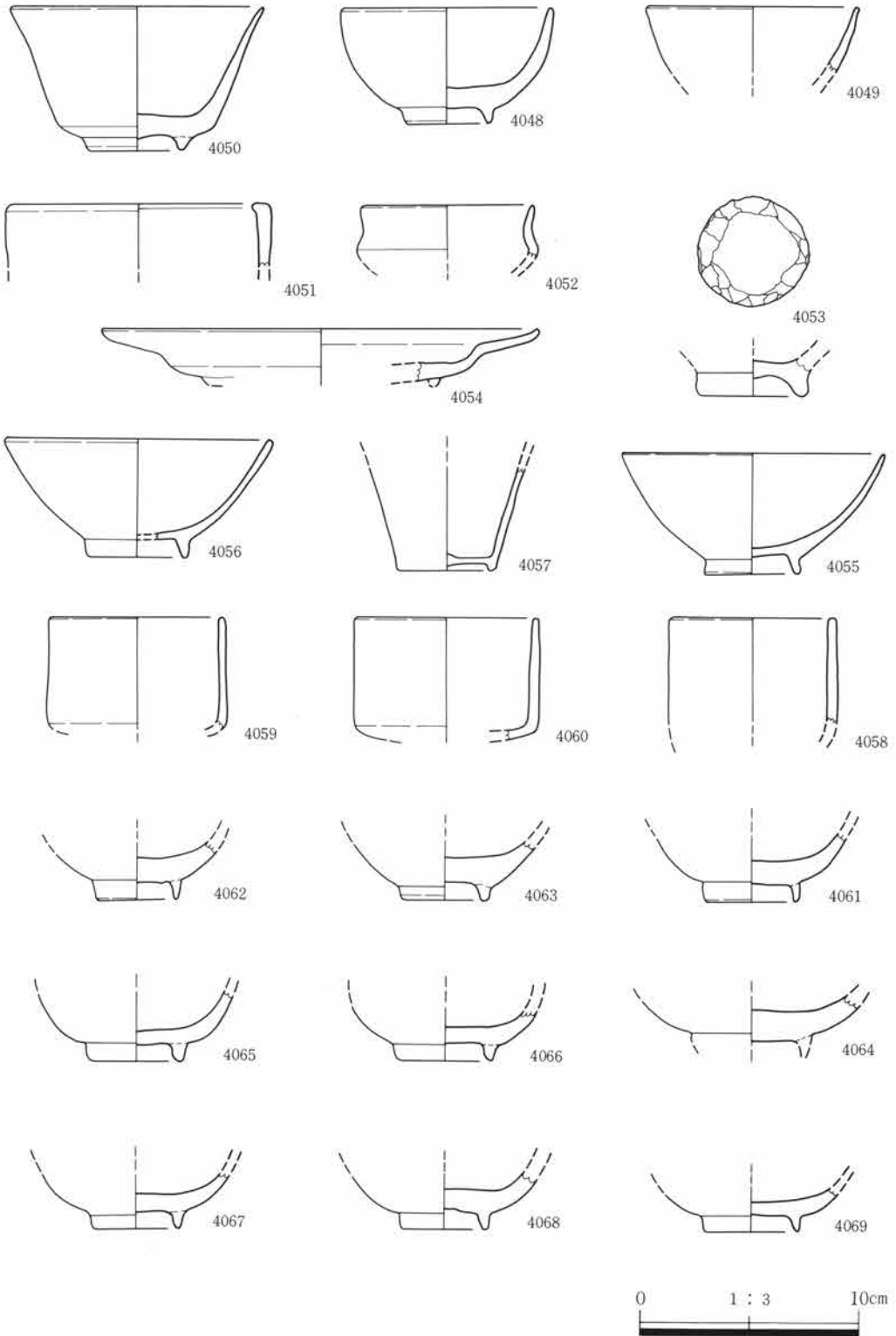


第672図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(14)



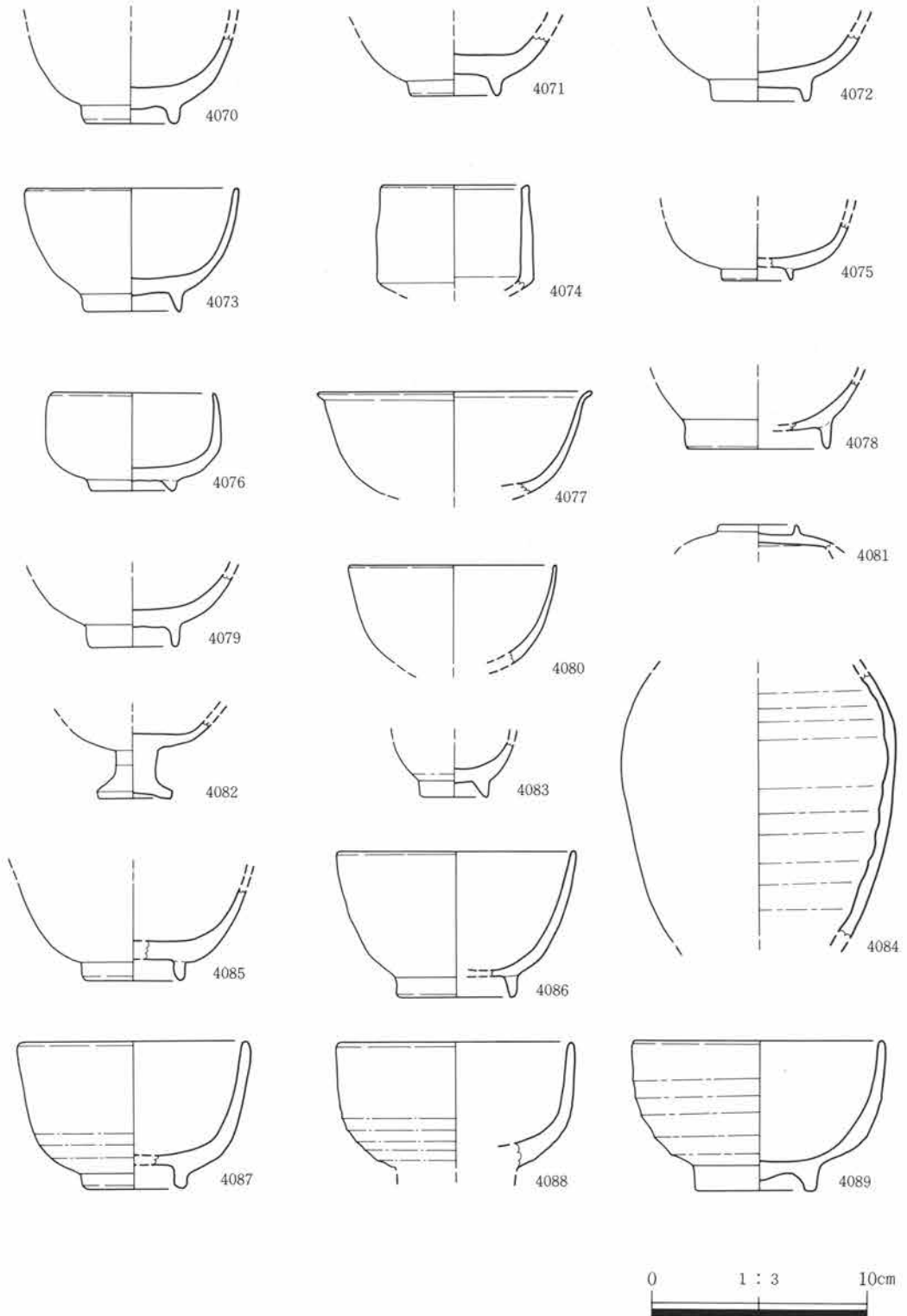
第673図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(15)

(2) 館 跡

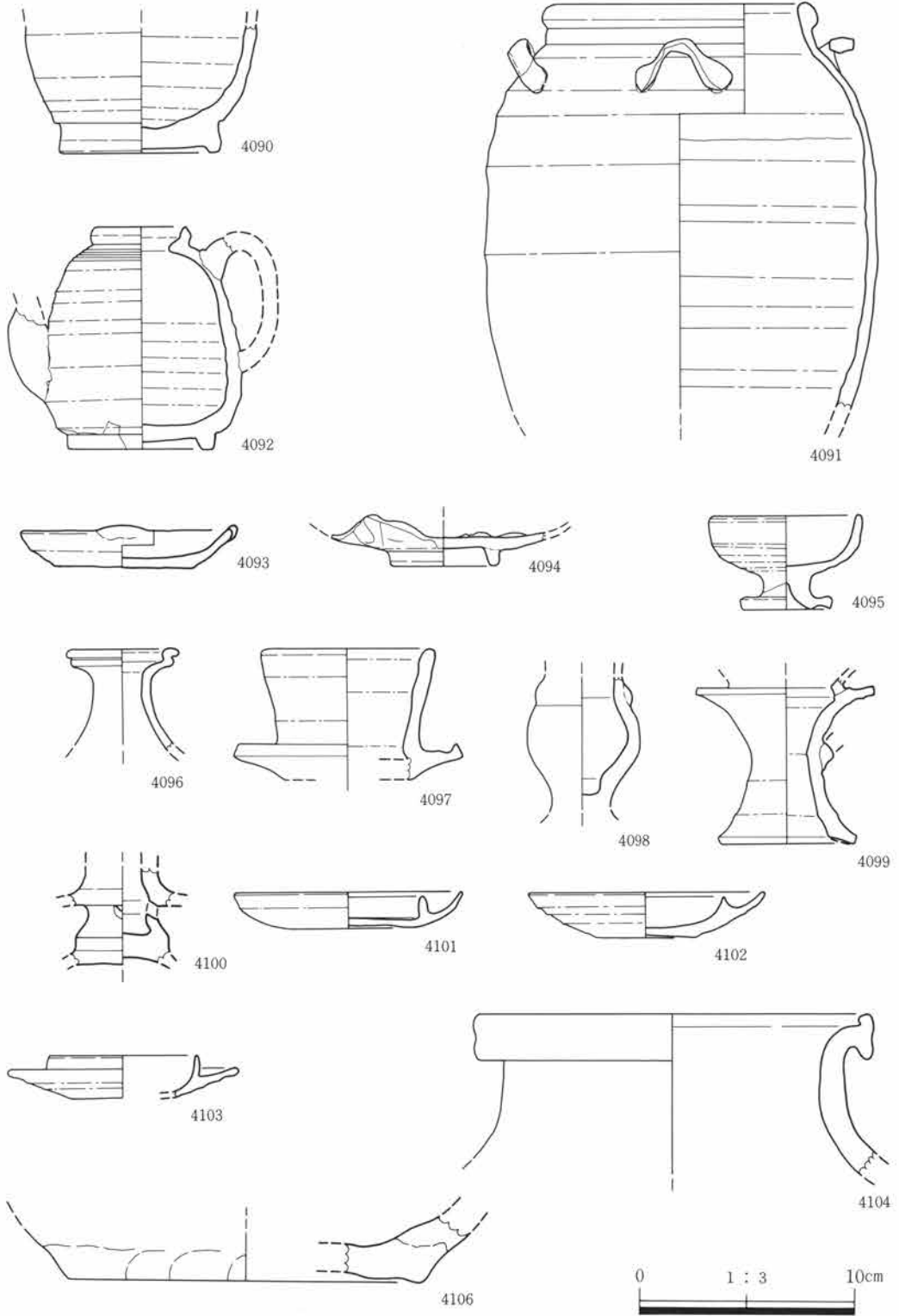


第674图 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(16)

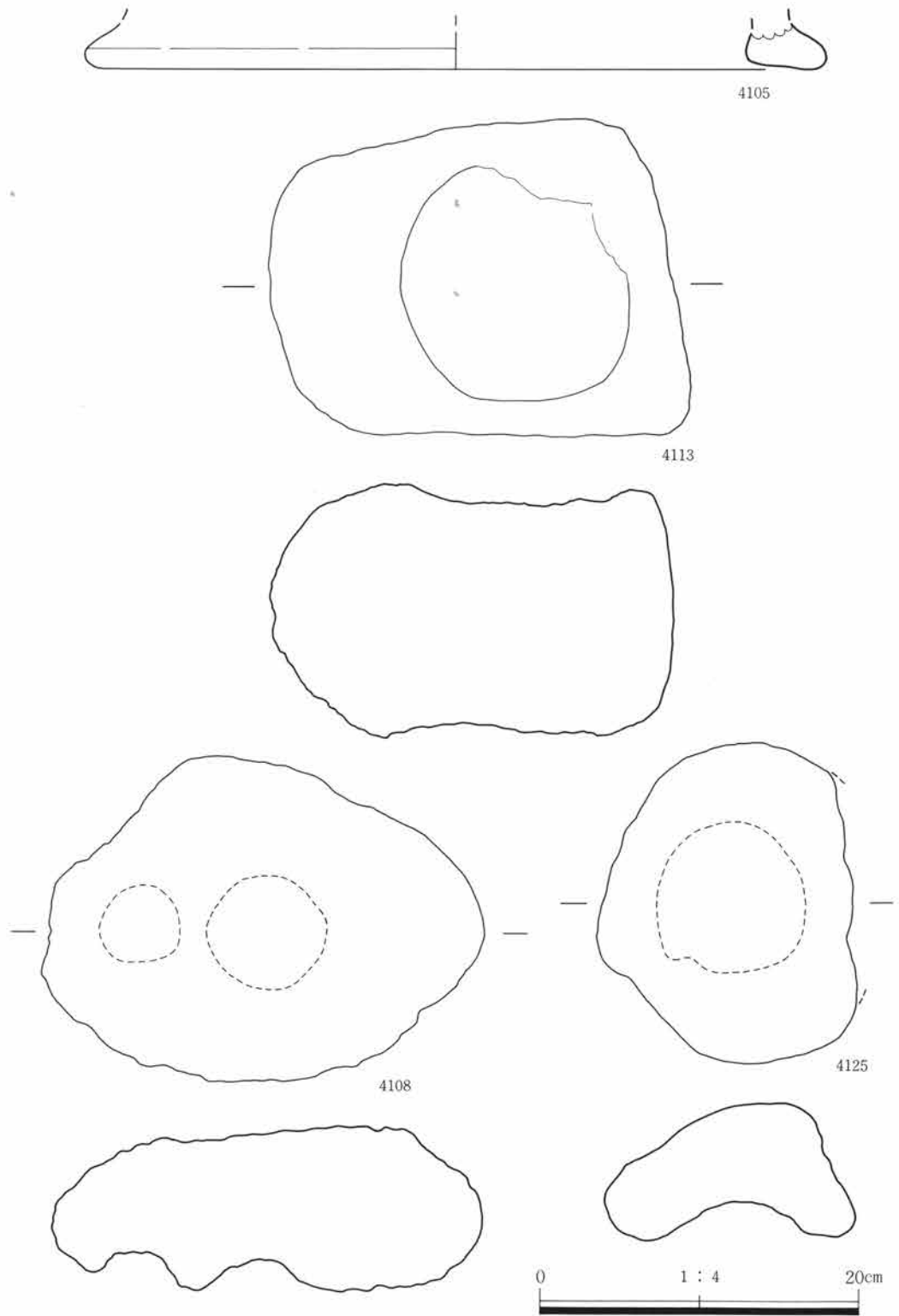
第6章 中世・近世の遺構と遺物



第675図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(17)

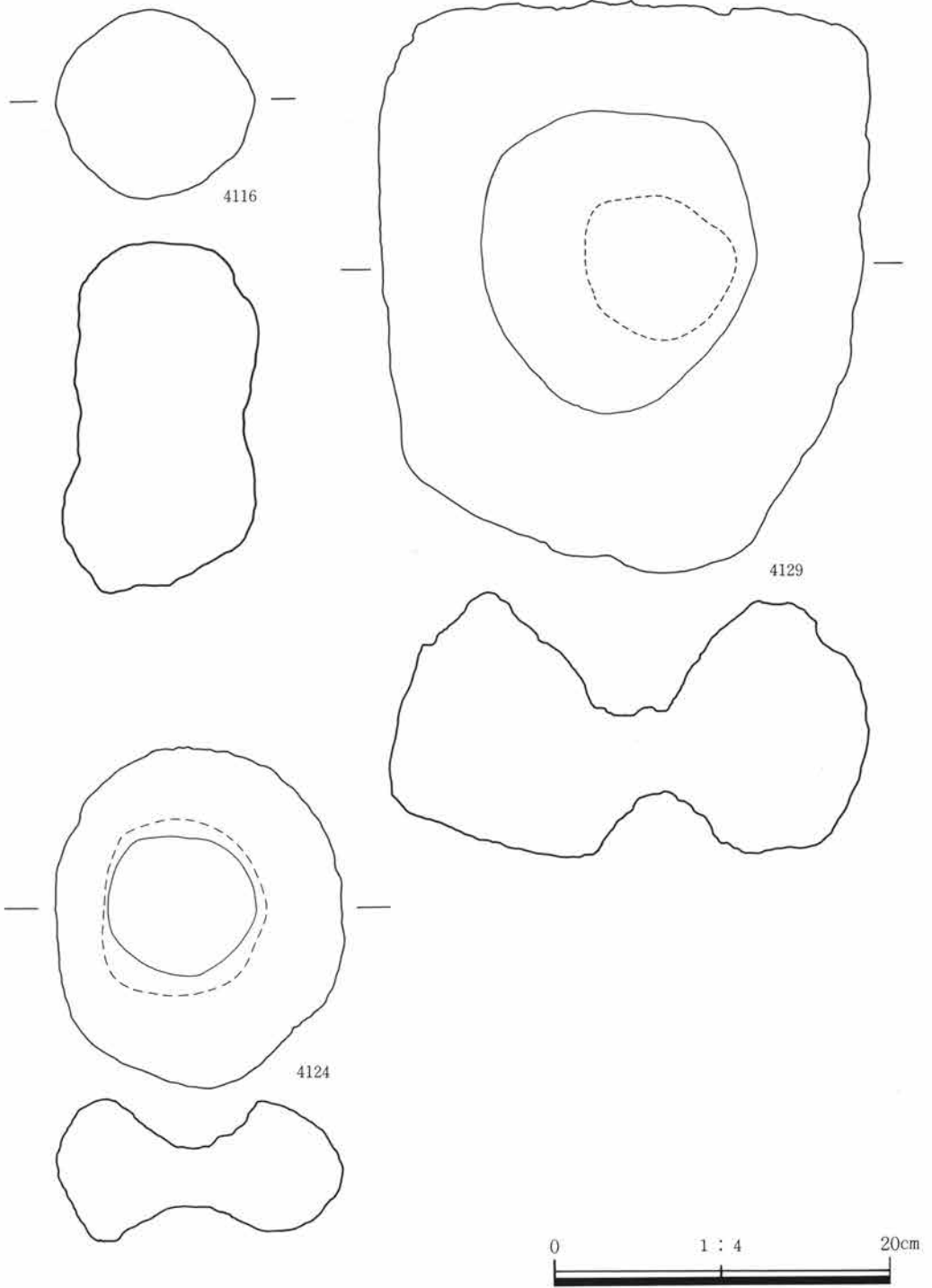


第676図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(18)

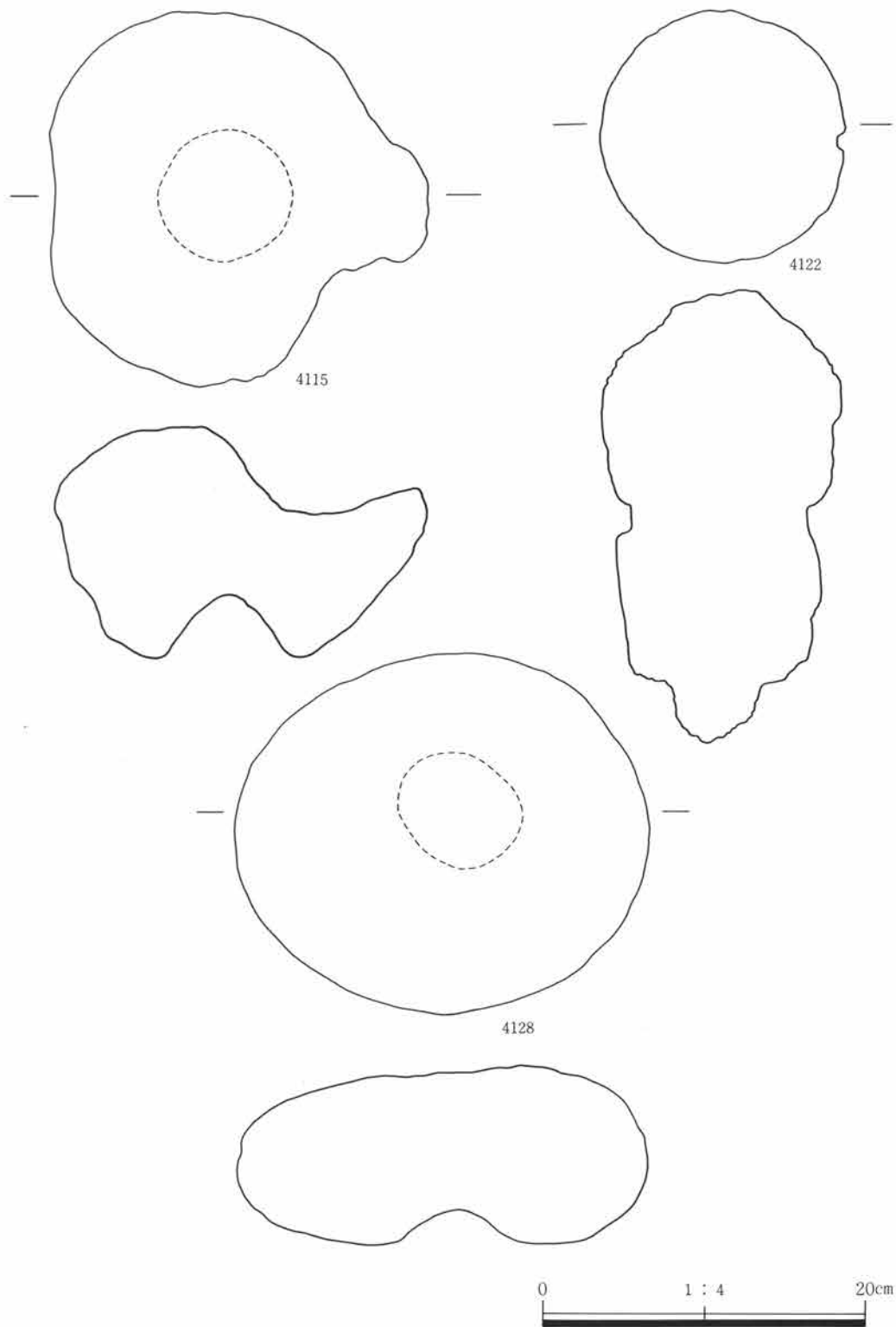


第677図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(19)

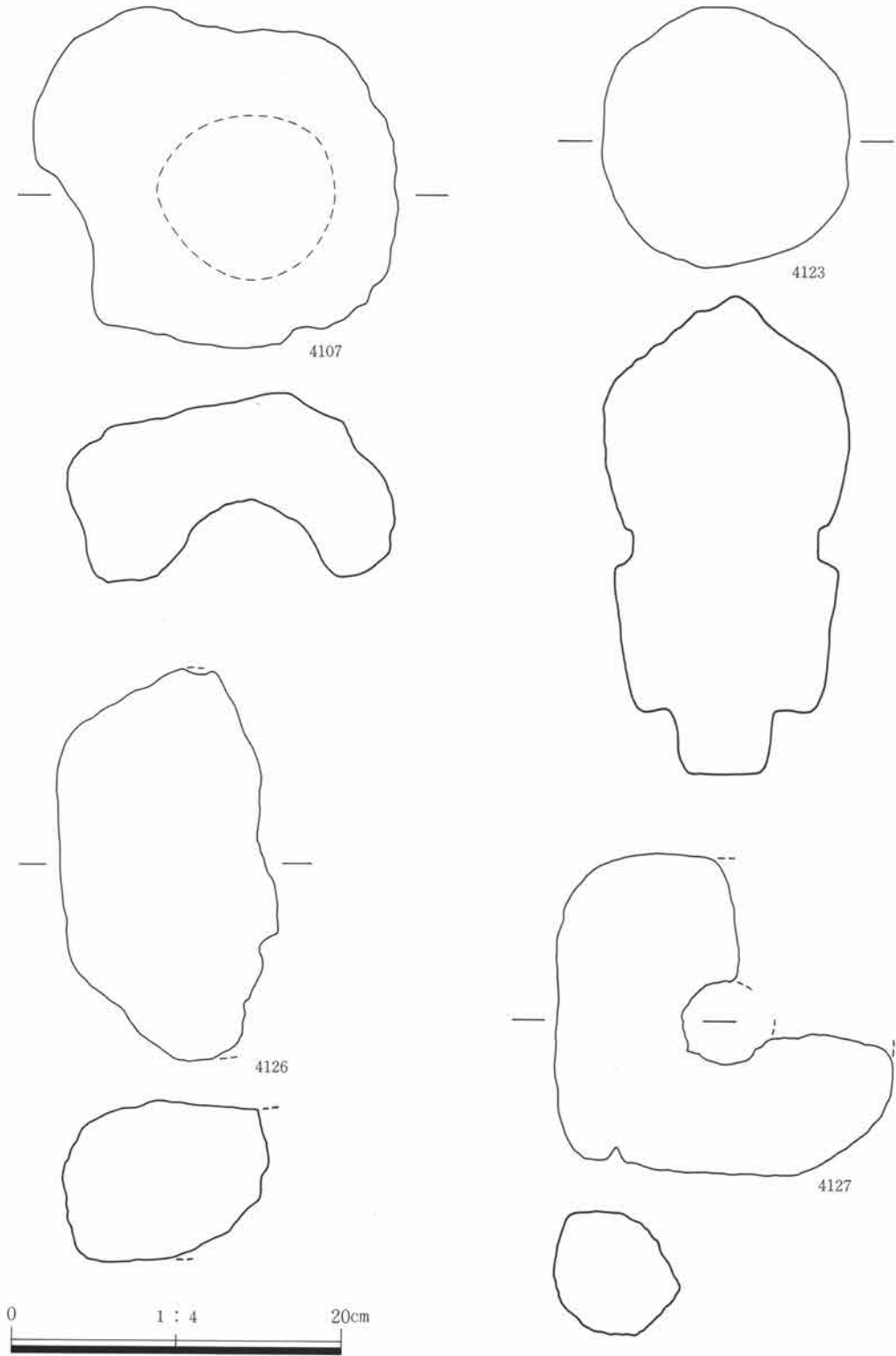




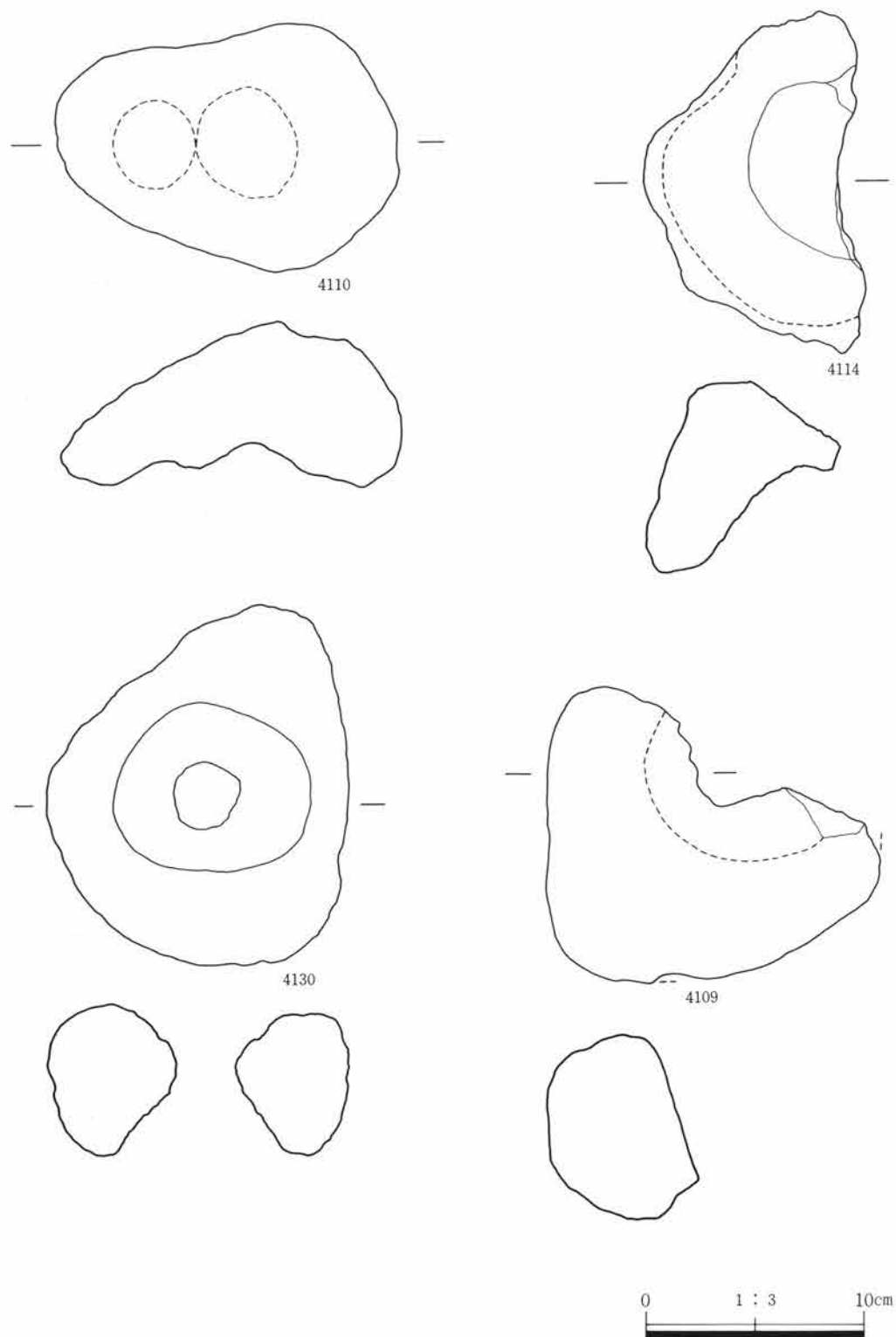
第678図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(20)



第679図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(21)

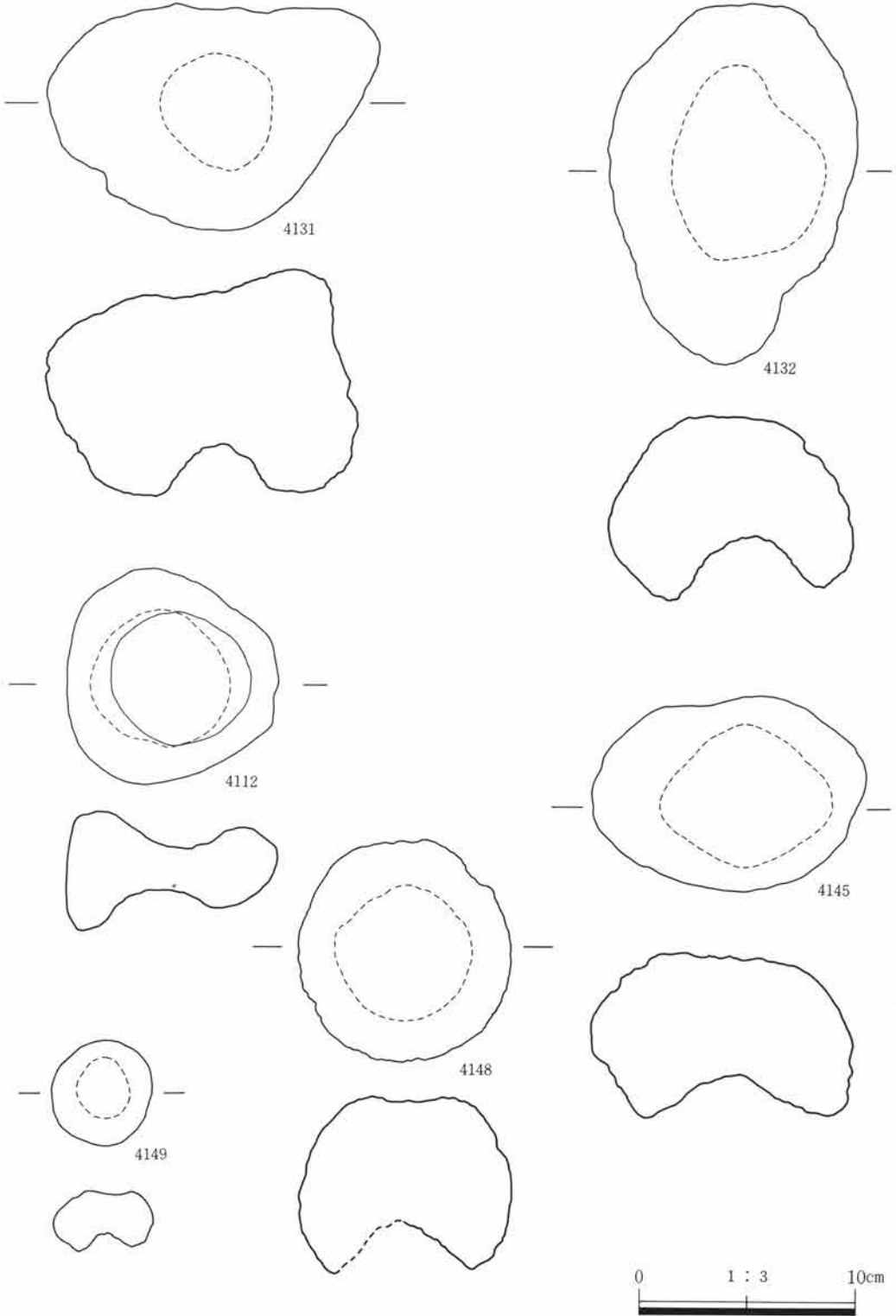


第680図 I地区C区1号館跡（内郭堀）遺物図（22）

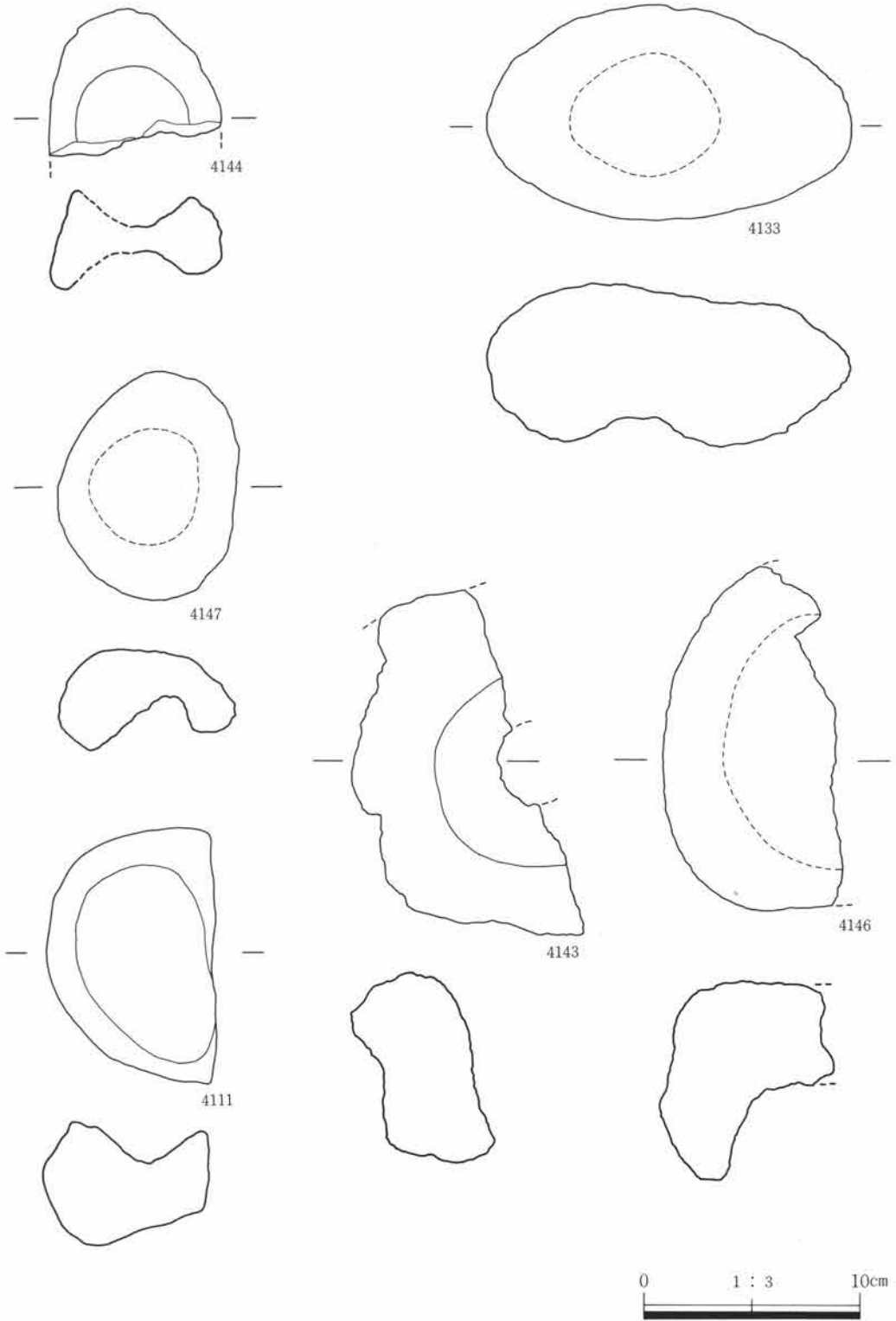


第681図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(23)

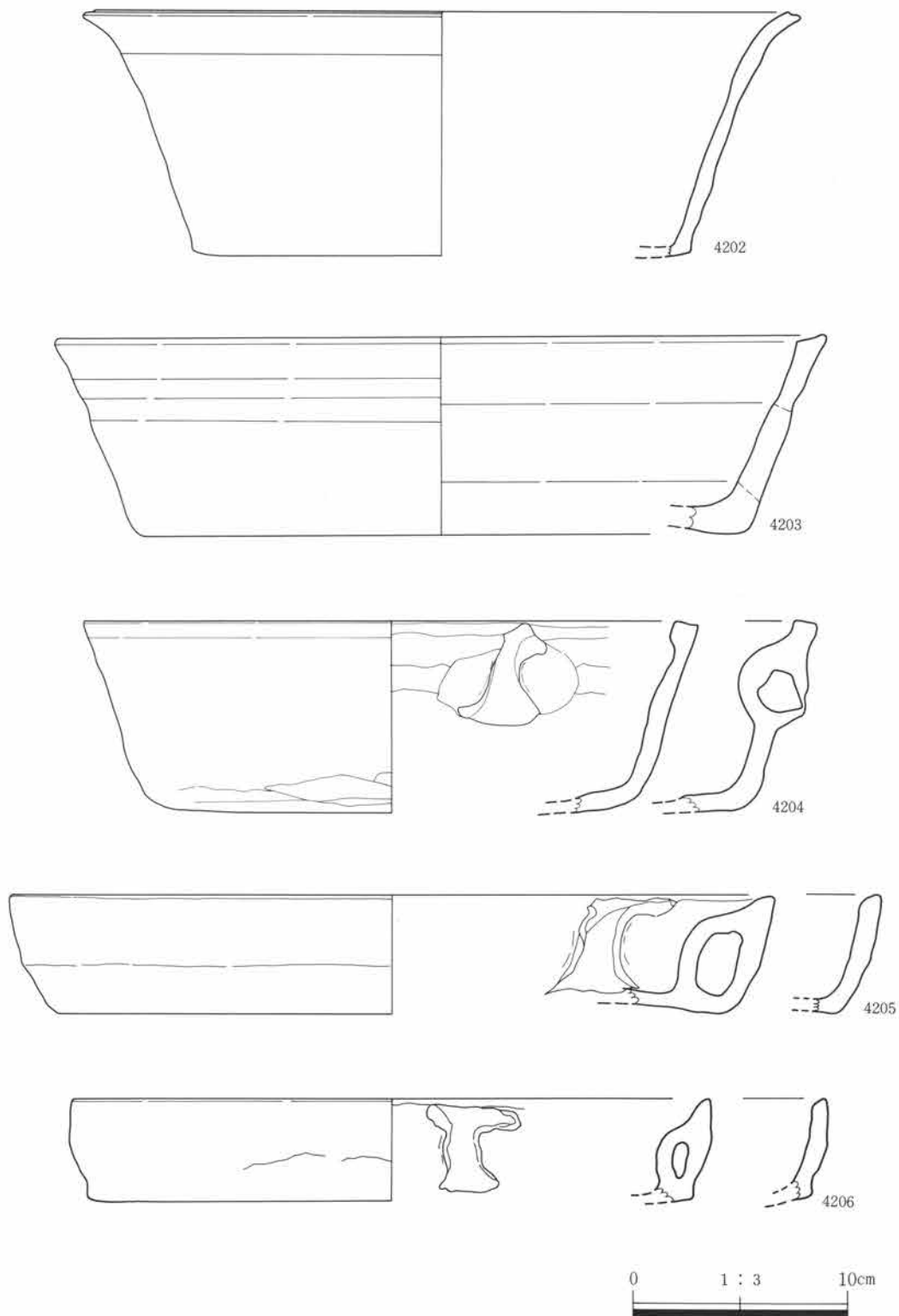
(2) 館 跡



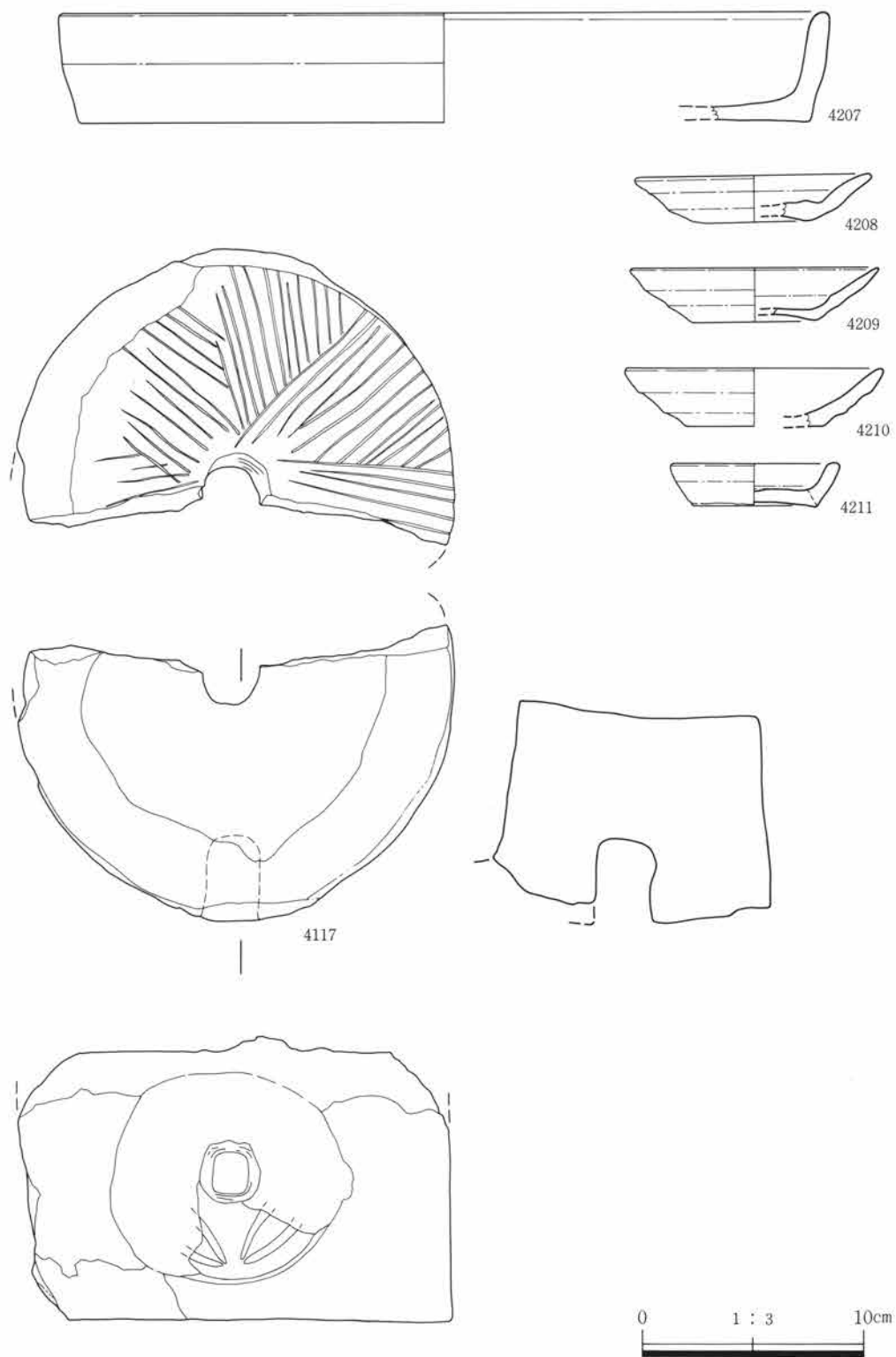
第682図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(24)



第683図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(25)

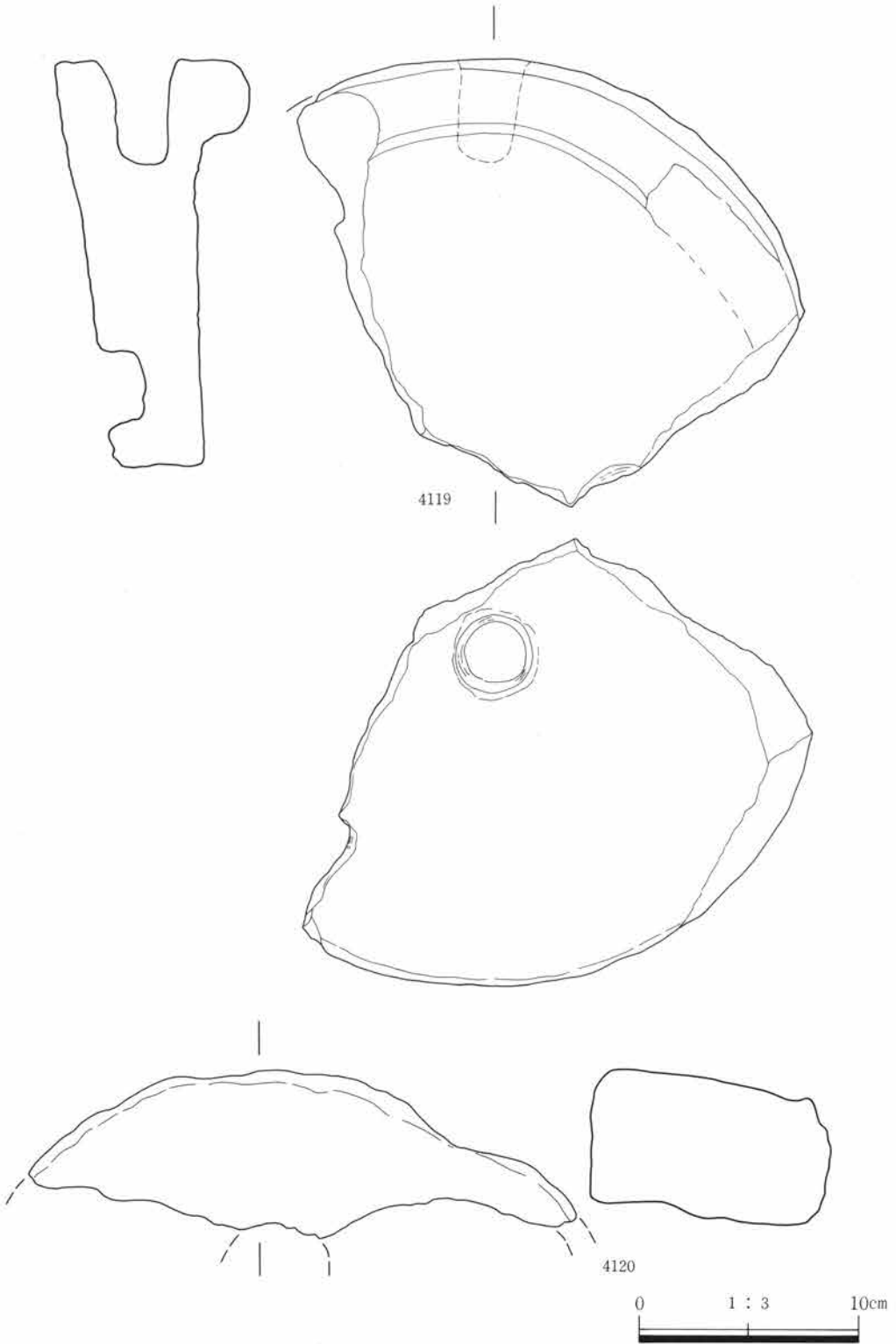


第684図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(26)

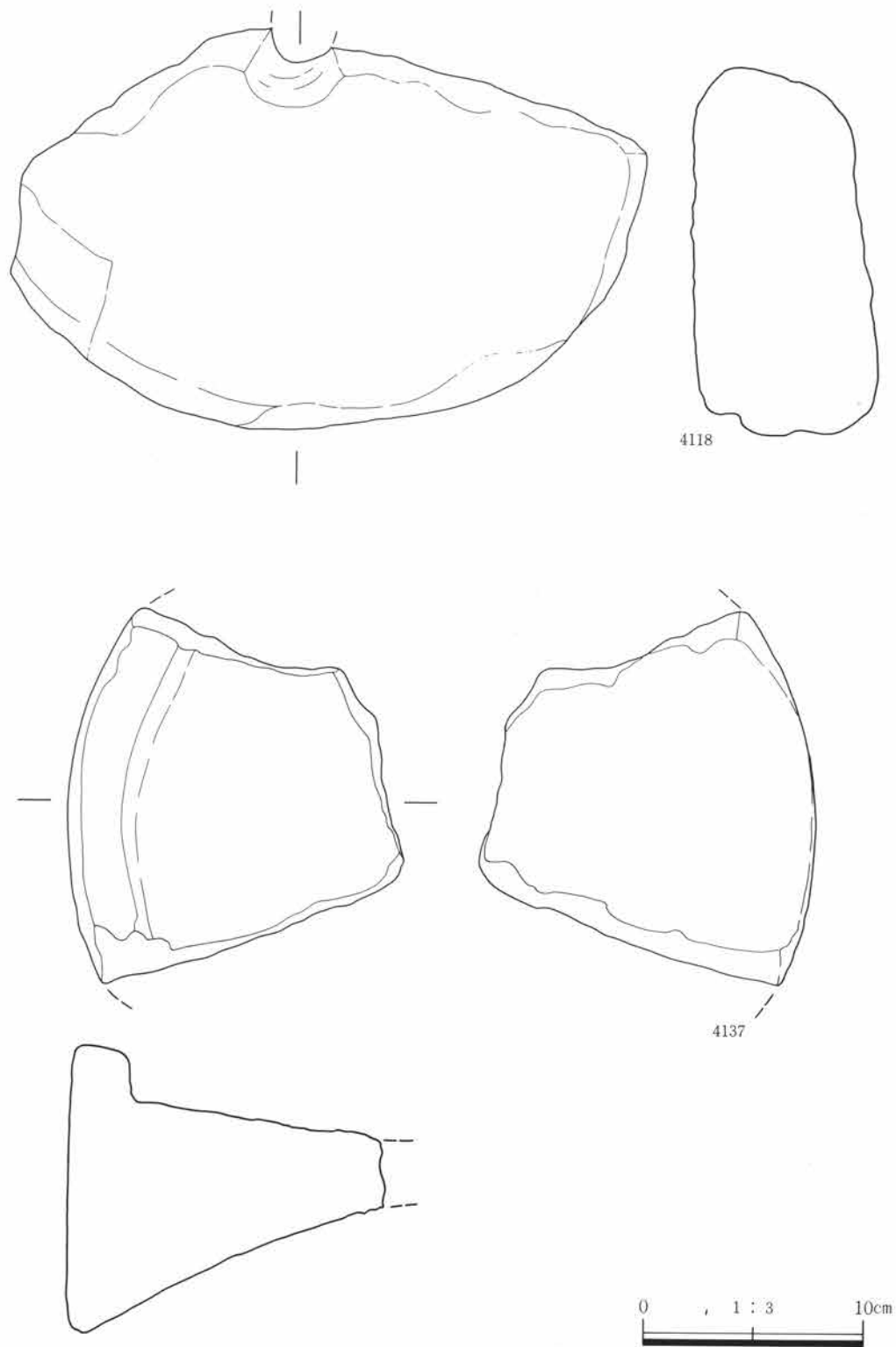


第685図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(27)

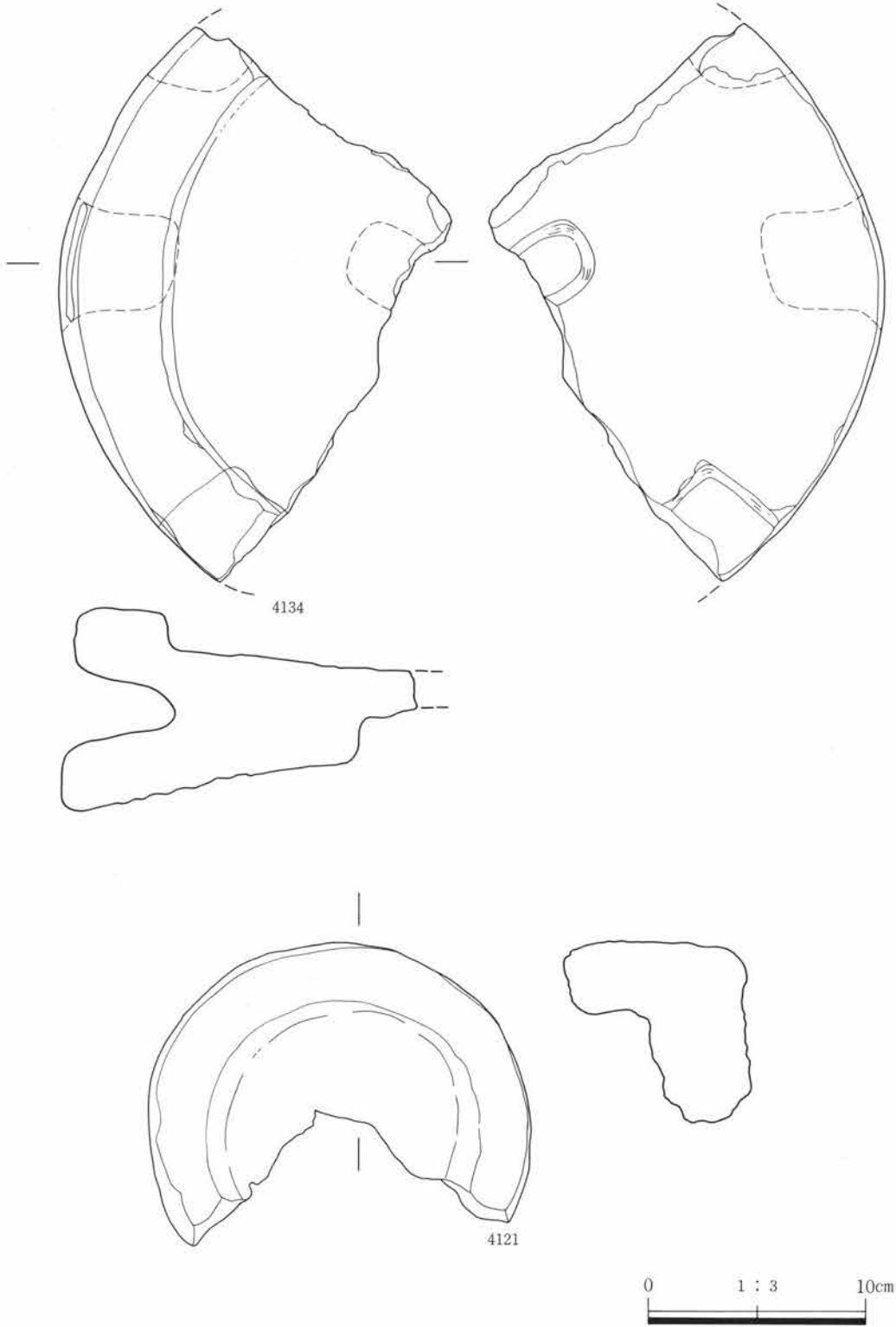




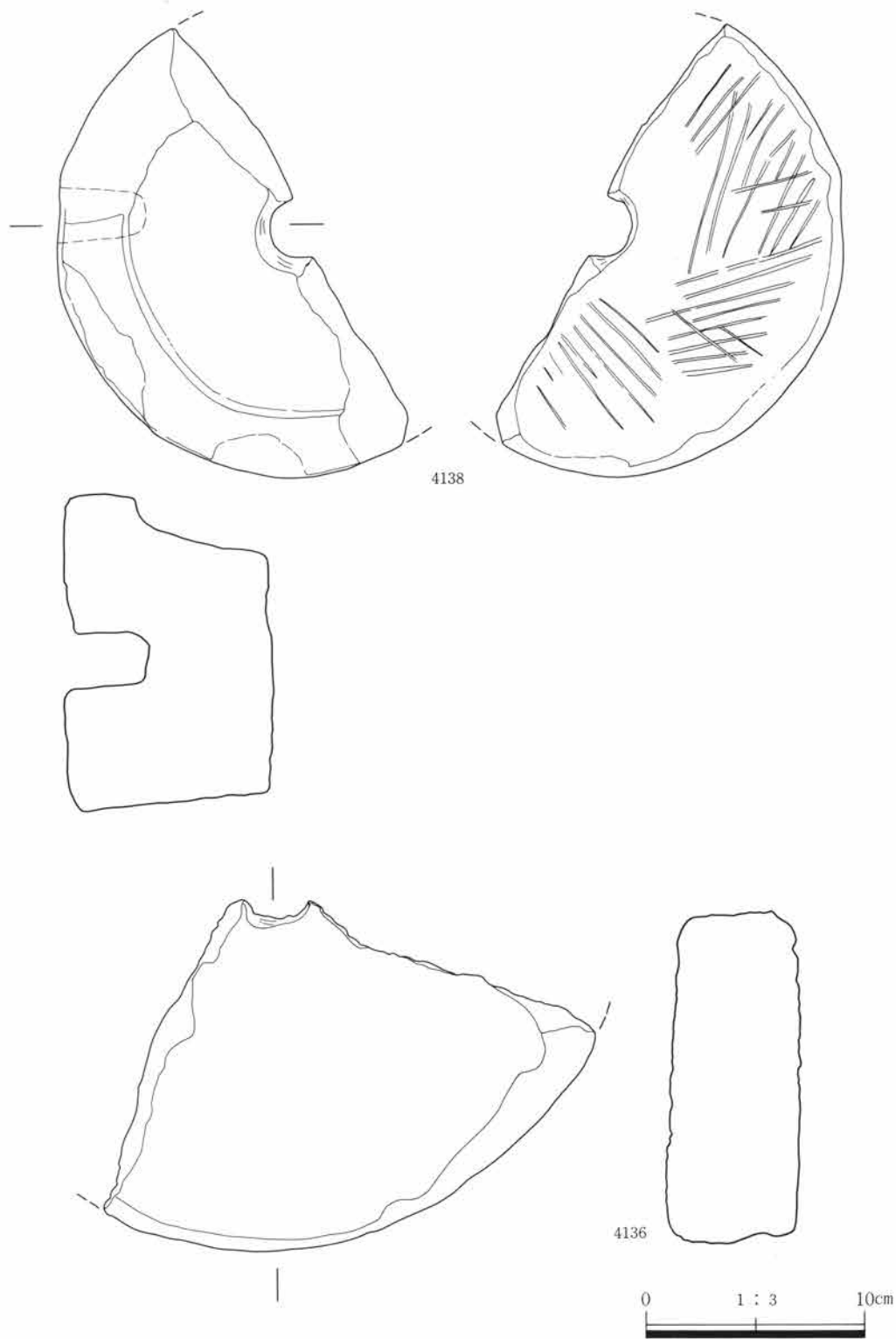
第686図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(28)



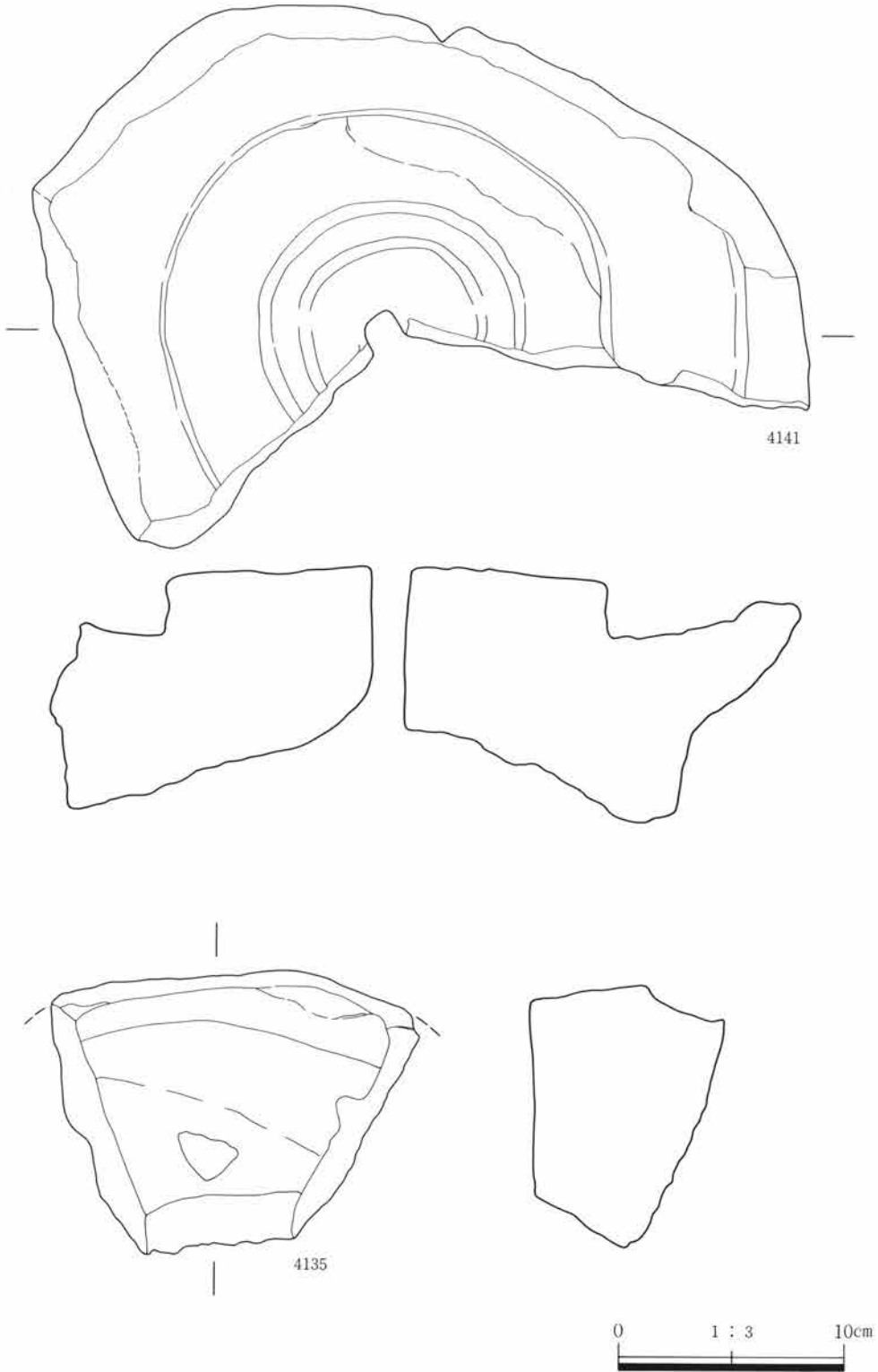
第687図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(29)



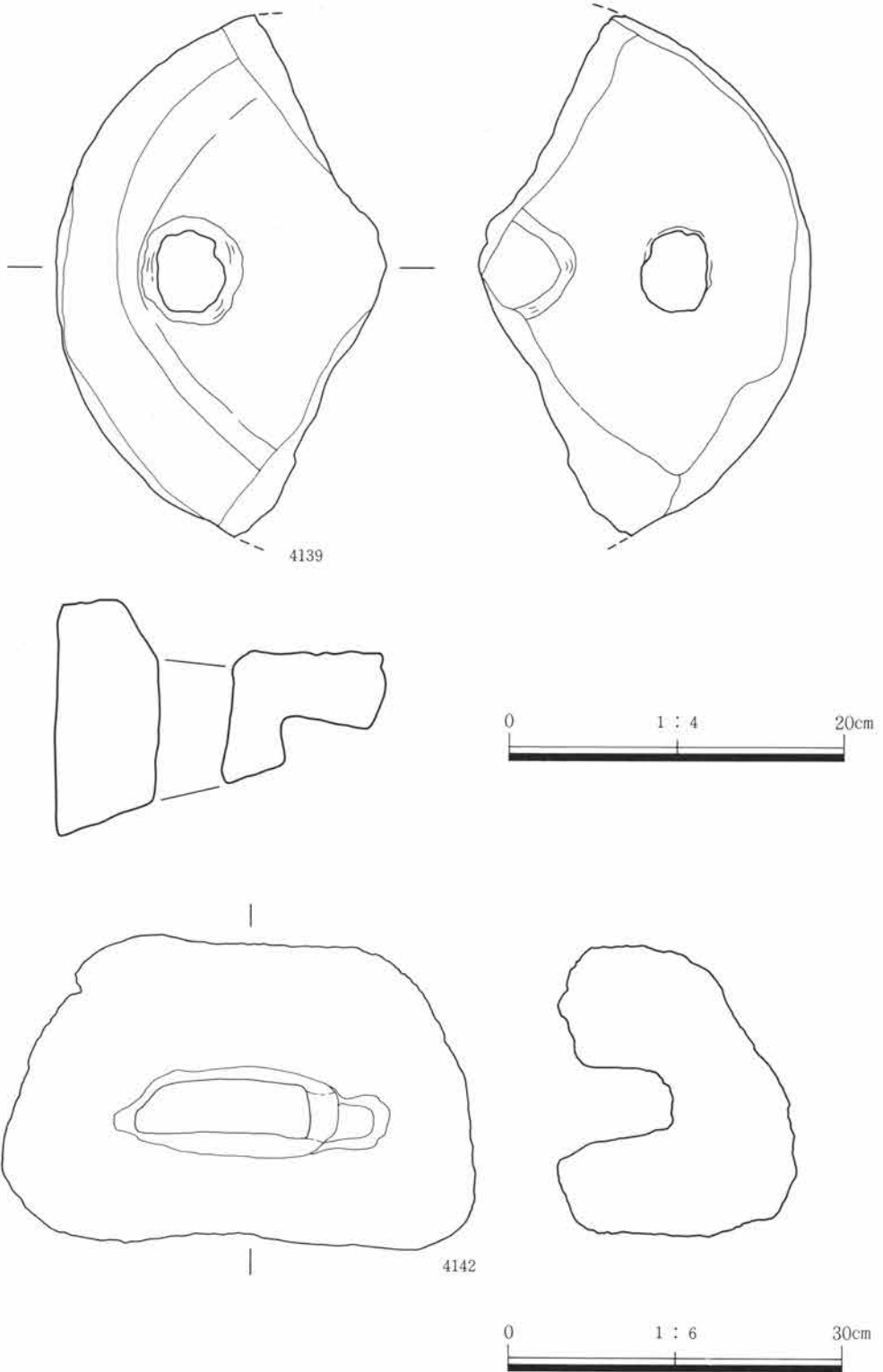
第688図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(30)



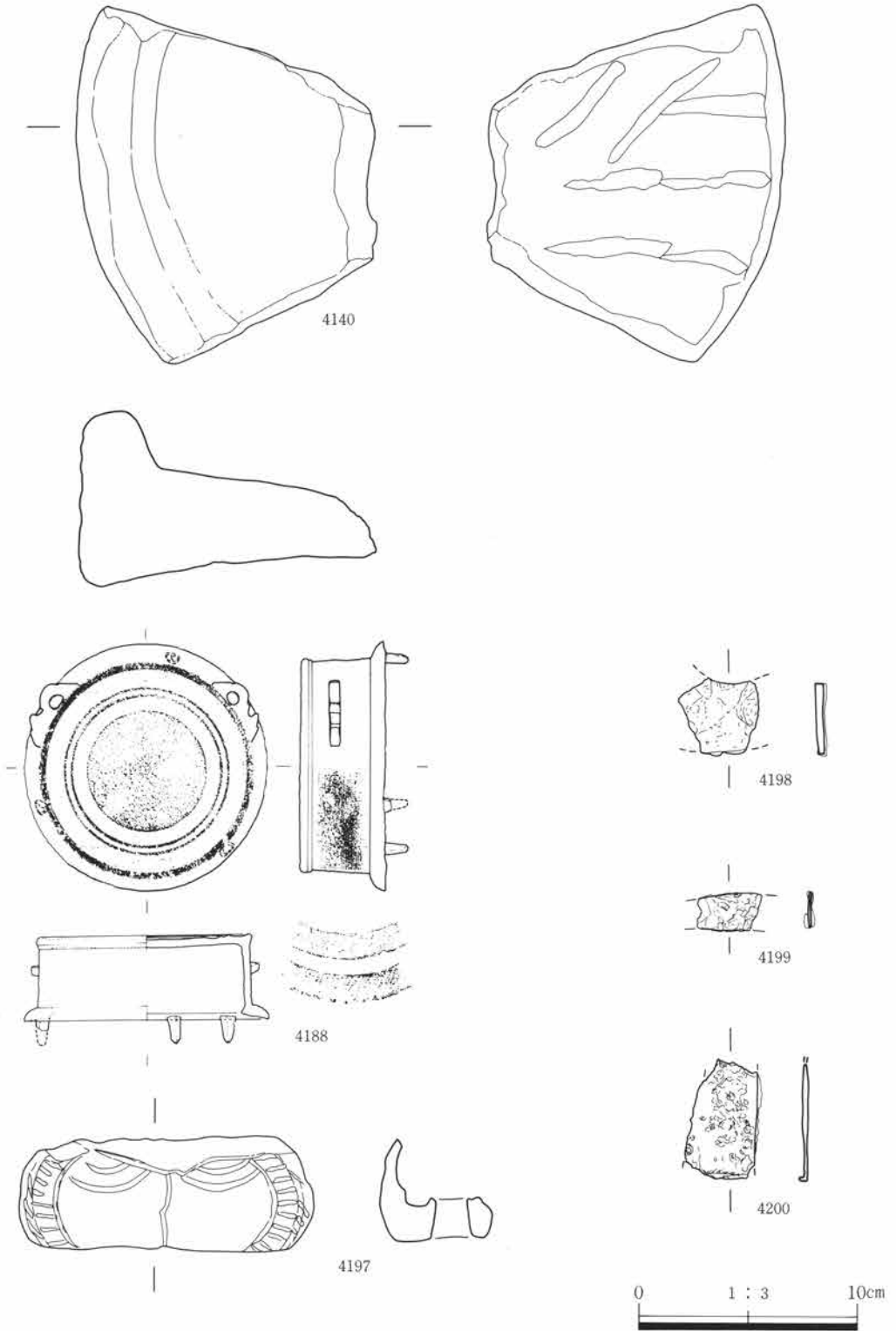
第689図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(31)



第690図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(32)

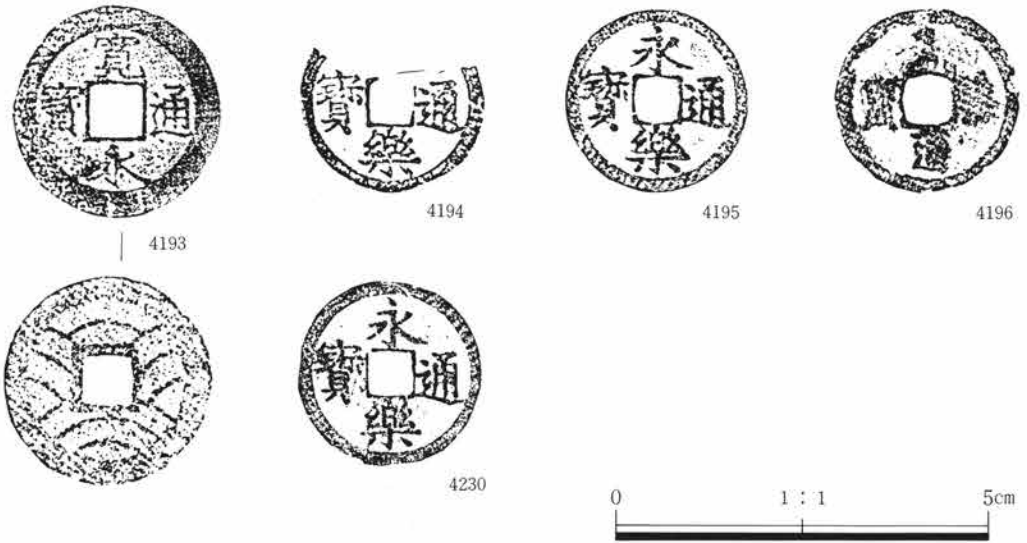
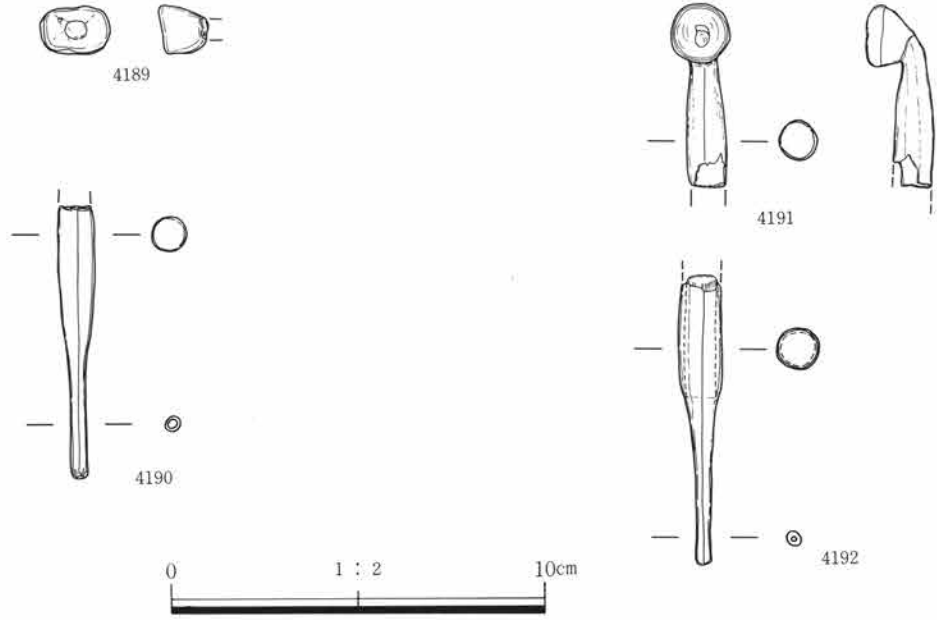


第691図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(33)



第692図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(34)

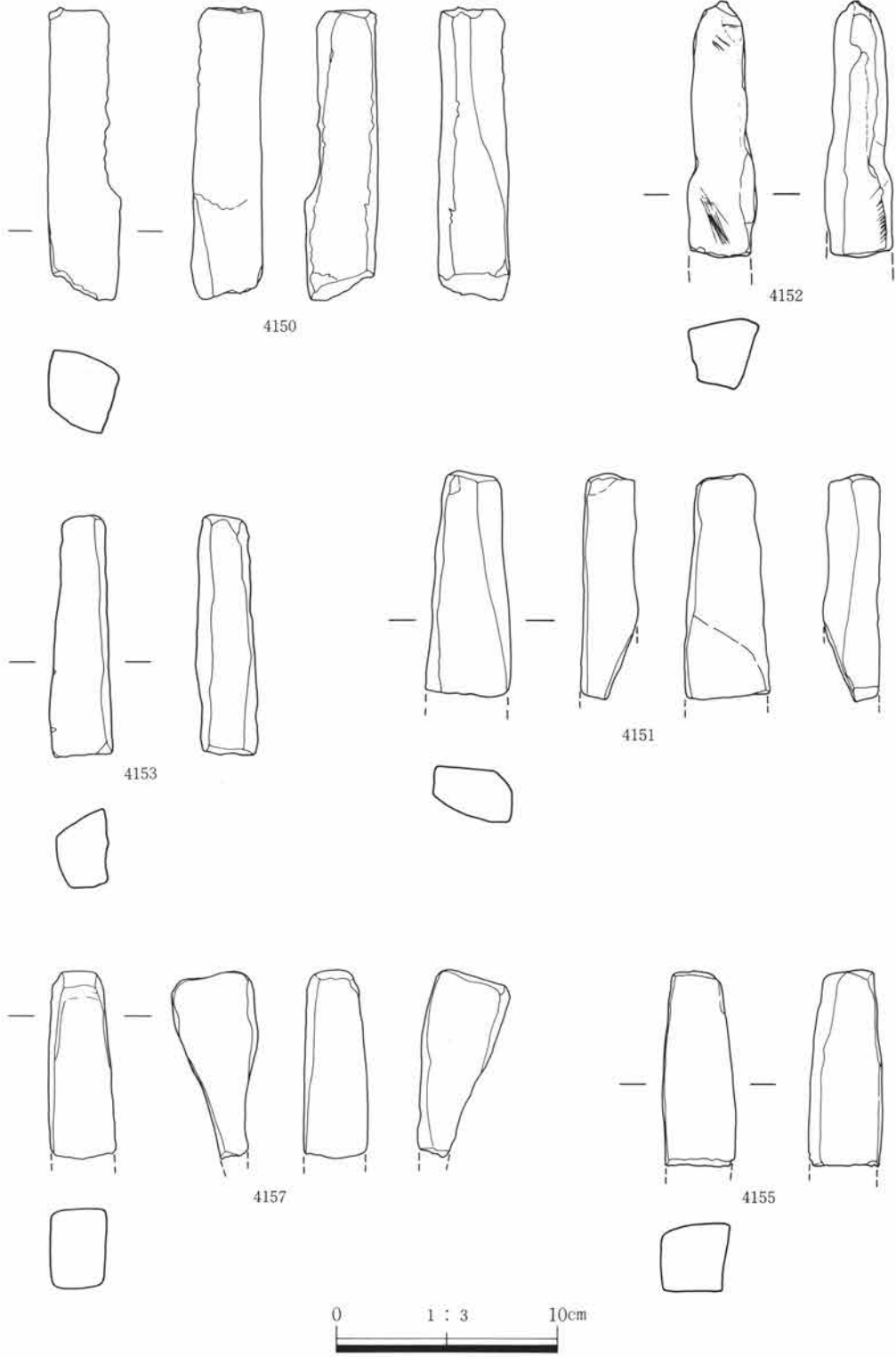
第6章 中世・近世の遺構と遺物



第693図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(35)

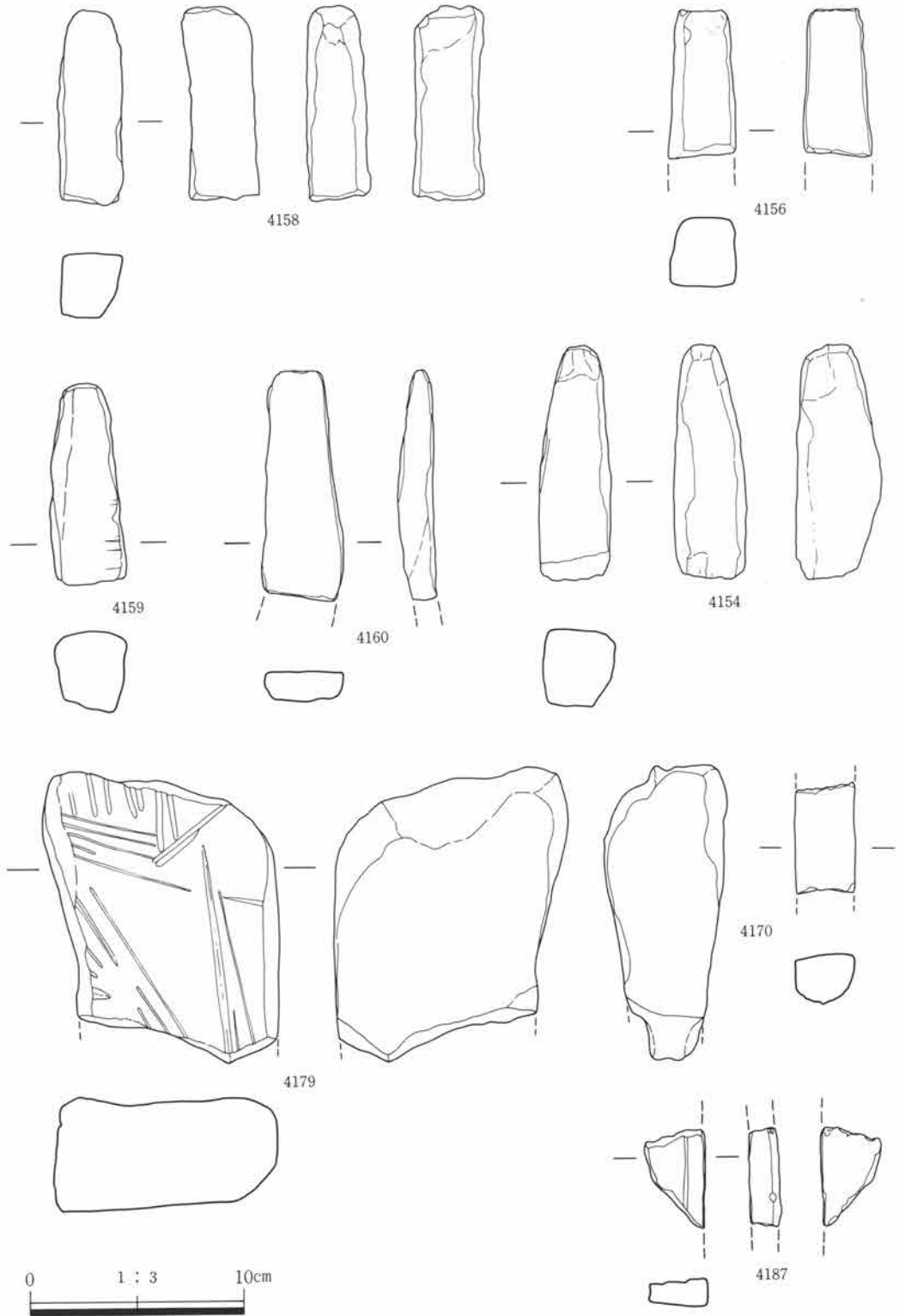


(2) 館 跡



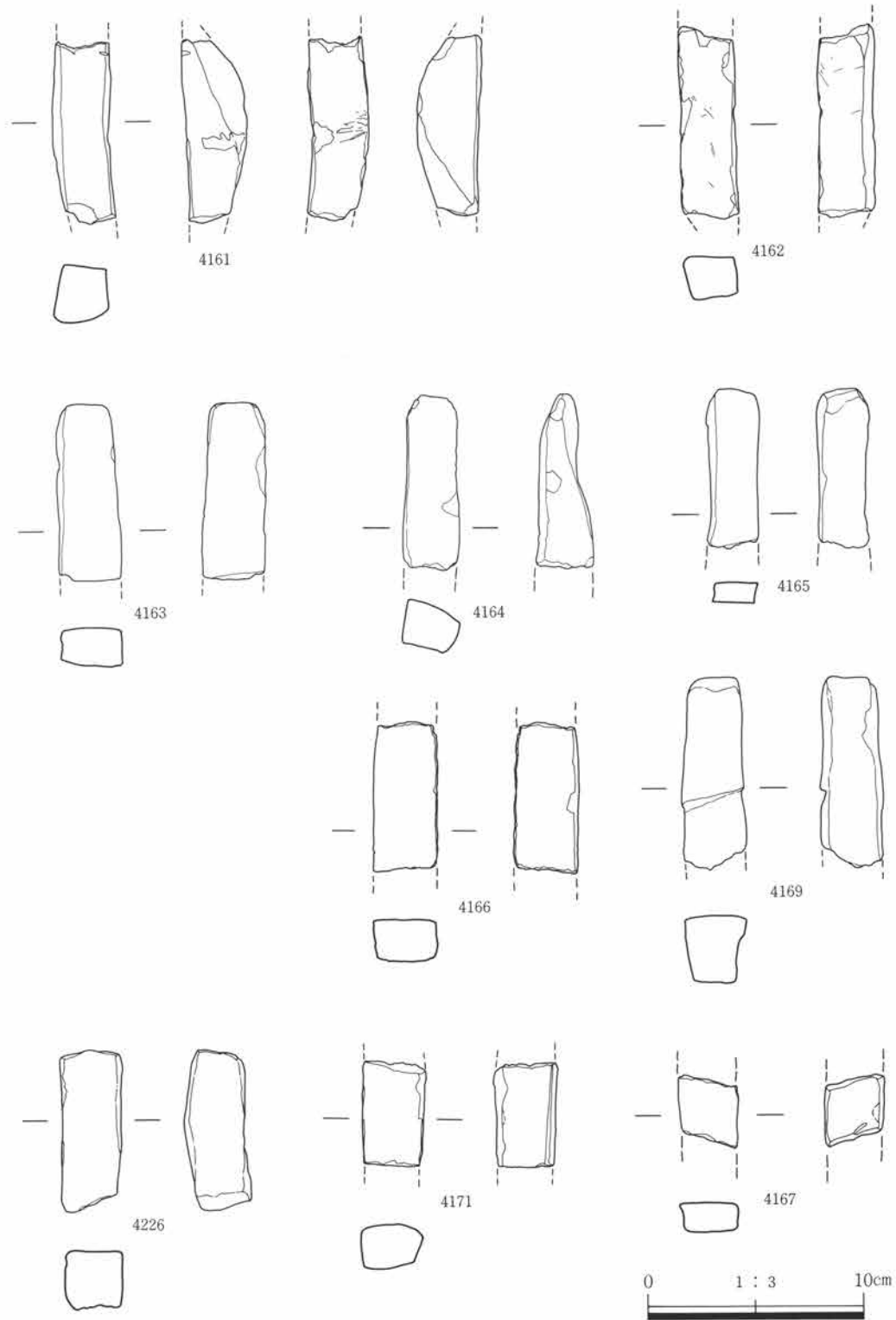
第694图 I地区C区1号馆迹(内郭堀)遗物图(36)

第6章 中世・近世の遺構と遺物

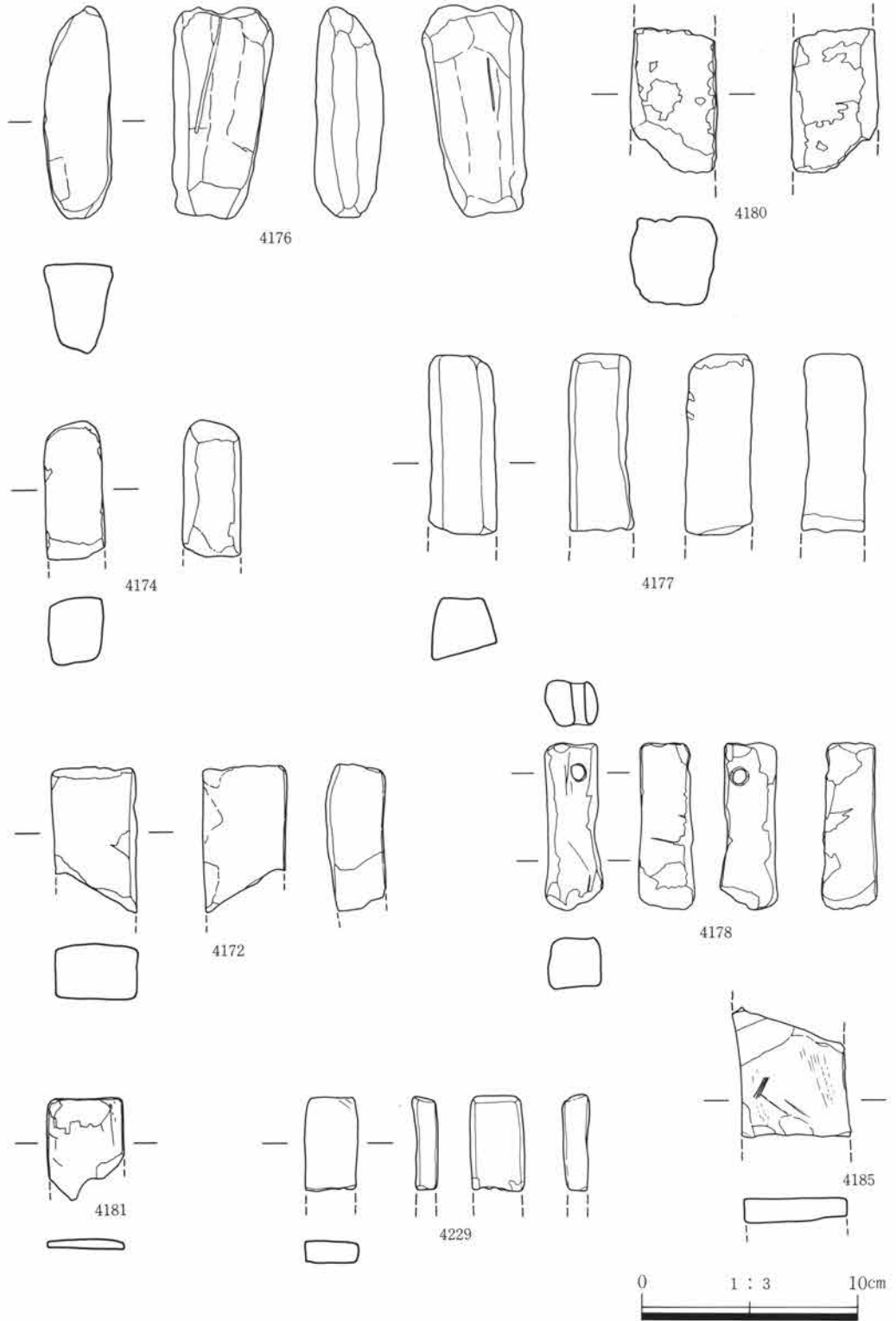


第695図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(37)

(2) 館 跡

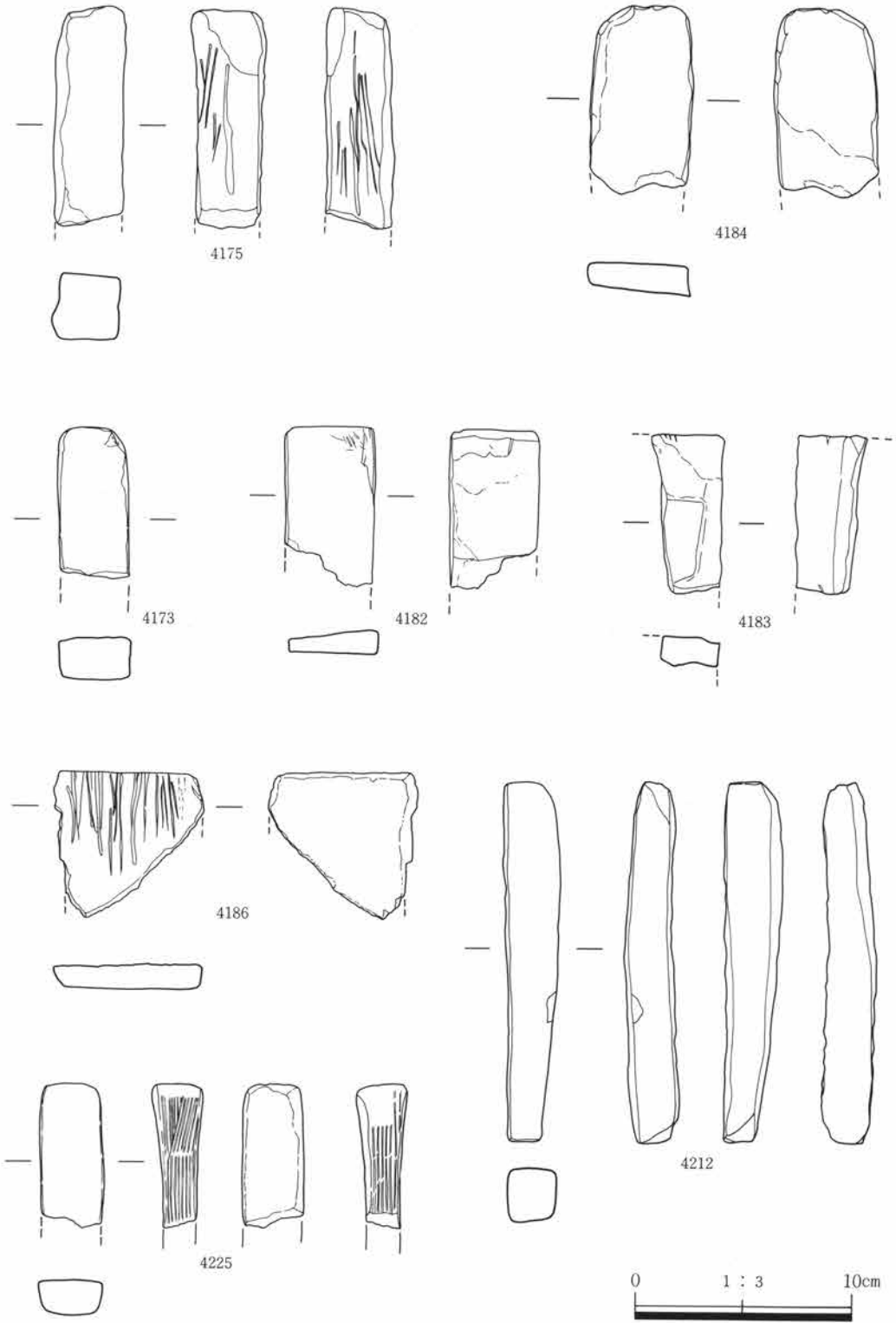


第696图 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(38)



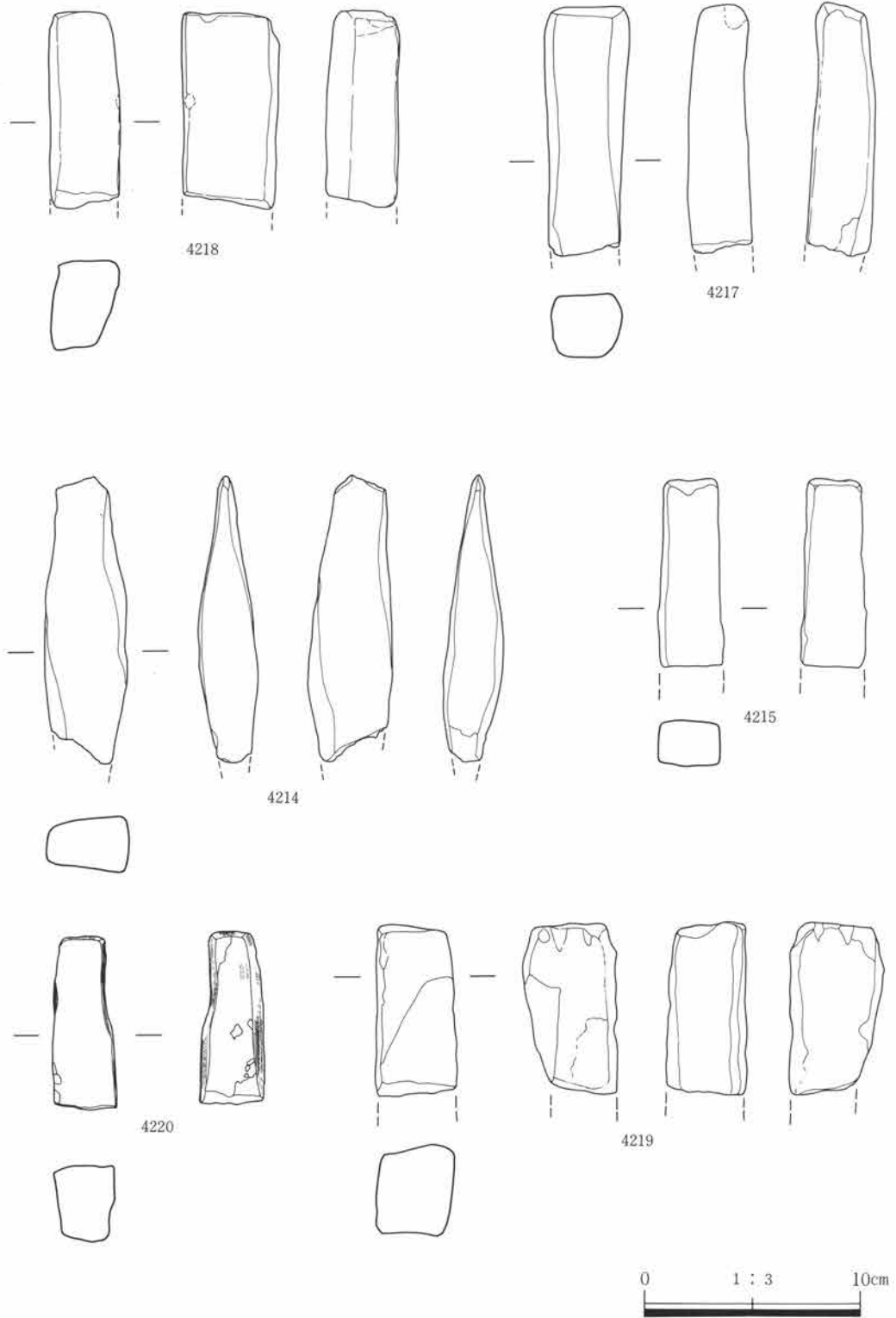
第697図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(39)

(2) 館 跡



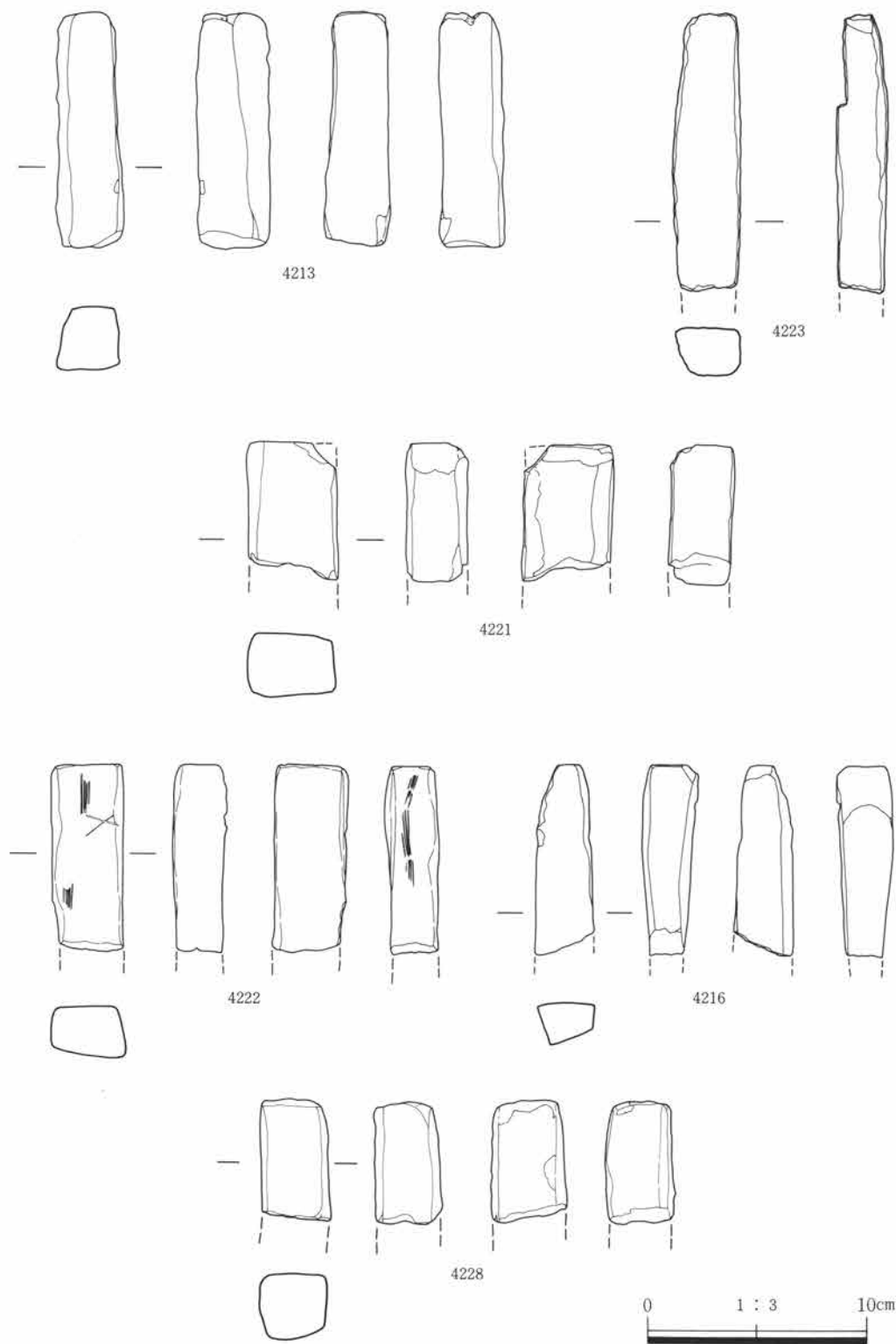
第698图 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(40)

第6章 中世・近世の遺構と遺物



第699図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(41)

(2) 館 跡



第700図 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物図(42)

第6章 中世・近世の遺構と遺物

第201表 I地区C区1号館跡(内郭堀)遺物観察表

番号	器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態
3877	鍋 瓦質土器	器高:[170mm]口径: 386mm 底径:[230 mm]½残	砂粒、鉄分を多く含む。還元中性焼成。軟質。	口縁部は大きく外反。口唇部水平。内面に稜あり。耳部は中形で一對、歪み。輪積成形。外面:下端は削り。外面上端及び内面:軽いなで調整。	堀覆土下層。
3878	鍋 瓦質土器	器高:117mm口径:290 mm底径:180mm底部以 外完存	微砂粒で雲母を含む。還元焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は短く外反。耳部は小形で一對であり、歪んでいる。輪積土型成形外面:無調整。内面:軽いなで調整。	堀覆土集石。
3879	鍋 瓦質土器	器高:165mm口径:320 mm底径:215mm½残	砂粒を多く含む。還元焼成。軟質。外面二次焼成。	口縁部は大きく外傾。耳部は中形。下げ底。輪積土型成形。外面:下端は削り。外面上端及び内面:軽いなで調整	堀覆土下層。
3880	鍋 瓦質土器	器高:(182mm)口径: 一底径:[360mm]口縁 部小片	砂粒で気泡を含む。酸化後、還元焼成。軟質。	口縁部は大きく外傾。内面に稜あり。輪積成形。外面:下端は削り。外面上端及び内面:軽いこぼめ調整。	堀覆土下層。
3881	鍋 瓦質土器	器高:[180mm]口径: 357mm底径:264mm½	砂粒で気泡・鉄分を含む。酸化後、還元焼成。硬質。	口縁部は大きく外傾。内面に稜あり。下げ底。輪積土型成形。外内面:軽いなで調整。	堀覆土下層。
3883	鍋 瓦質土器	器高:100mm口径: [340mm]底径:[280 mm]遺存:?	砂粒で気泡を含む。酸化中性焼成。硬質。外面は二次焼成。	口縁部は外反。口唇部は水平。耳部は中形。内面に稜あり。浅い。平底。輪積土型成形。外面:軽い削り。内面:軽いなで調整。	堀覆土下層。
3884	鍋 瓦質土器	器高:(320mm)口径: [320mm]底径:一½残	微砂粒を含む。還元中性焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は短く外反。口唇部は水平。輪積土型成形。外面:下端は無調整。外面上端及び内面:軽いなで調整。	堀覆土。
3885	鍋 瓦質土器	器高:150mm口径:300 mm底径:180mm½残	砂粒で気泡を含む。酸化中性焼成。軟質。外面・底部は二次焼成。	口縁部は大きく外傾。口唇部は水平。耳部は中形。輪積土型成形。外面:下端は削り。外面上端及び内面:軽いこぼめ調整。	堀覆土集石。
3887	盤 瓦質土器	器高:52mm口径:[340 mm]底径:[320mm]½ 残	砂粒を含む。酸化中性焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部と体部は分かれず、浅く平底輪積土型成形。外面上端及び内面:回転なで調整。	堀覆土集石。
3889	火鉢 瓦質土器	器高:75mm口径:[330 mm]底径:[260mm]遺 存:?	砂粒で気泡を含む。酸化焼成。硬質。外面は二次焼成。	口縁部は肥厚。口唇部は水平。やや深く平底。輪積土型成形。外面:下端は削り・上端はなで。内面:回転なで。	堀覆土上層。
3890	盤 瓦質土器	器高:56mm口径:[360 mm]底径:[310mm]½ 残	砂粒を多く含む。還元中性焼成。軟質。外面は2次焼成。	口唇部は水平に張り出し、浅い。耳部はやや小さく3個以上。輪積成形。外面上端及び内面:軽いなで調整。	堀覆土。
3891	盤 瓦質土器	器高:59mm口径:[380 mm]底径:[350mm]½ 残	砂粒・鉄分を多く含む酸化焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部と体部は分かれず、器壁厚。耳部やや小さい。輪積土型成形。外面上端及び内面:回転なで調整。	堀覆土。



3892	盤 瓦質土器	器高:54mm口径:[390mm]底径:[360mm]	砂粒で気泡を含む。還元焼成。硬質。	口縁部と体部は分かれず、浅く平底。耳分は中形。輪積土型成形。外面上端及び内面:回転で調整。	堀覆土。
3893	盤 瓦質土器	器高:50mm口径:[350mm]底径:[330mm]×残	砂粒で気泡を含む。還元焼成。軟質。内外面は二次焼成。	口縁部と体部は分かれず、浅い平底。中形の耳部は口縁部から付き3個以上。輪積土型成形。内外面:回転で調整。	堀覆土集石。4207に似る。
3894	鍋 瓦質土器	器高:(77mm)口径:[326mm]底径:一口縁部小片	砂粒で気泡を含む。酸化焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は大きく外傾。口唇部及び内面に稜あり。輪積成形。体部及び外面:無調整。その他は軽いこぼめ調整。	堀覆土。
3895	盤 瓦質土器	器高:55mm口径:[370mm]底径:[340mm]×残	砂粒を含む。還元中性焼成。硬質。内外面は二次焼成。	口縁部と体部は分かれず、体部は底部より張り出す。浅い平底。輪積土型成形。外面上端及び内面:回転で調整。	堀覆土中下層。
3896	盤 瓦質土器	器高:48mm口径:[400mm]底径:[350mm]×残	砂粒を含む。還元中性焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部と体部は分かれず。口唇部は水平。器壁は薄く浅い平底。輪積土型成形。外面上端及び内面:回転で調整。	堀覆土上層。
3897	鍋 瓦質土器	器高:52mm口径:一底径:[310mm]底部×残	砂粒で気泡を含む。中性焼成。軟質。外面は二次焼成。	体部は直立し、平底。輪積土型成形。底部端は削り。体部内外面:で調整。	堀覆土。
3898	盤 瓦質土器	底部小片	砂粒で気泡を含む。還元中性焼成。軟質。外面は二次焼成。	器壁は薄い。土型成形。内面に瓢箪形刻印。内面:磨耗。	堀覆土。
3899	盤 瓦質土器	底部小片	砂粒で気泡を含む。酸化焼成。軟質。	底部の外面はやや凹凸。土型成形。内面に菊花形刻印。内面:磨耗。	堀覆土。
3900	鍋 瓦質土器	器高:(85mm)口径:一底径:222mm×残	微砂粒を含む。還元焼成。硬質。外面は二次焼成。	平底。器壁はやや厚い。輪積土型成形。外面及び底部端:軽い削り。内面:軽いこぼめ調整。	堀覆土。
3901	皿 土師質土器	器高:23mm口径:125mm底径:70mm一部欠	砂粒を含む。酸化。軟質。鈍い黄橙。	浅くやや歪んでいる。底部は回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	堀覆土下層。
3902	皿 土師質土器	器高:24mm口径:106mm底径:62mm×残	小砂粒を僅かに含む。酸化。軟質。鈍い褐。	器肉やや厚い。底部は回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	堀覆土下層。
3903	皿 土師質土器	器高:21mm口径:105mm底径:71mmほぼ完形	径2~3mmの小石・小砂粒を含む。酸化。軟質。鈍い橙。	浅い。底部は回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	堀覆土中~下層。
3904	皿 土師質土器	器高:22mm口径:108mm底径:71mm完形	小石・砂粒を含む。酸化。軟質。鈍い橙。	浅い。底部:厚く歪んでいる。回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	堀覆土下層。

第6章 中世・近世の遺構と遺物

3905	皿 土 師質土器	器高:20mm 口径:104mm 底径:62mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。軟質鈍い橙。	浅い。底部:厚い。回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	堀覆土下層。
3906	皿 土 師質土器	器高21mm 口径:100mm 底径:55mm $\frac{2}{3}$ 残	砂粒を含む。酸化。軟質鈍い橙。	器肉は厚い。底部は回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	堀覆土下層。
3907	小 皿 土師質土器	器高:22mm 口径:90mm 底径:58mm ほぼ完形	砂粒を含む。酸化。軟質明赤褐。	底部:厚い。回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	堀覆土下層。
3908	小 皿 土師質土器	器高:22mm 口径:98mm 底径:64mm ほぼ完形	砂粒を含む。酸化。軟質橙。	全体に歪む。底部は回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	堀覆土下層。
3909	小 皿 土師質土器	器高:25mm 口径:96mm 底径:54mm 一部欠	砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い赤褐。	底部:厚い。回転糸切り。口縁部に稜あり。内外面:回転台によるなで。	堀覆土。
3910	小皿 土 師質土器	器高:23mm 口径:106mm 底径:62mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	底部:やや厚い。回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	堀覆土下層。
3911	小 皿 土師質土器	器高:18mm 口径:80mm 底径:50mm ほぼ完形。	砂粒を少量含む。酸化。やや軟質。橙。	器肉は特に厚い。底部は回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	堀覆土下層。
3912	小 皿 土師質土器	器高:17mm 口径:82mm 底径:60mm 一部欠	砂粒を含む。酸化。やや軟質。明赤褐。	器肉は特に底部が厚い。底部は回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	堀覆土下層。
3913	小 皿 土師質土器	器高:19mm 口径:82mm 底径:50mm 一部欠	砂粒を含む。酸化。やや軟質。明赤褐。	器肉は厚い。底部は回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	堀覆土下層。
3914	小 皿 土師質土器	器高:21mm 口径:78mm 底径:49mm 一部欠	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い赤褐。	器肉は厚い。底部は回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	堀覆土下層。油煙付着。
3915	軒 丸 瓦	直径:80mm 厚さ:18mm 瓦当部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒・気泡を含む。還元焼成。軟質。	やや楕円形状。背面に接合痕。側面はなで調整。巴8乳文。	堀覆土。
3916	軒 丸 瓦	直径:75mm 瓦当部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を少量含む。硬質。	外区:側面はなで調整で、稜が顕著。巴11乳文。巴の尾が長い。	堀覆土。
3917	擂 鉢 焼締陶器	器高:145mm 口径: [350mm] 底径:[110mm] $\frac{1}{2}$ 残	小石を多く含む。還元焼成。硬質。	口縁部は断面が三角形で内面に稜あり。体部は薄い。内面は7本歯左右回りすりめ、磨耗。	堀覆土集石。丹波系。
3918	擂 鉢 陶器錆釉	器高:一口径:一底径: 106mm $\frac{1}{2}$ 残	雲母粒を多く含む。酸化焼成。軟質。	口縁部の内面に稜あり。底部は右回転糸切り無調整。体部は内外面轆轤目無調整。内面:21本歯左回り放射状すりめ。全面は薄く施釉。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。
3919	擂 鉢 陶器錆釉	器高:一口径:一底径: 85mm $\frac{1}{2}$ 残	気泡が多い。酸化焼成。軟質。	底部は右回転糸切り無調整。内面:17本歯左回り放射状すりめ。全面は薄く施釉。	堀覆土。瀬戸美濃系。

## (2) 館 跡

3920	播鉢 陶器柿釉	器高:一口径:一底 径:127mm $\frac{1}{2}$ 残	雲母粒多い。酸化焼成。軟質。	器壁やや厚い。底部は左回転糸切り無調整。内面:12本歯左回りすりめ。全面施釉。むらあり。	堀覆土。瀬戸美濃系。
3921	播鉢 焼締陶器	器高:一口径:一底 径:[150mm]小片	小石を多く含む。酸化焼成。硬質。	器壁やや厚い。内面:8本歯右回りすりめ。	堀覆土。丹波系?
3922	播鉢 陶器錆釉	器高:一口径:一底 径:一口縁部小片	石英粒・気泡を含む。還元焼成。軟質。	口縁部は有段。内面に稜あり。外面:折り込み。放射状すりめ。全面に薄く施釉。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。
3923	播鉢 焼締陶器	器高:一口径:[350 mm]底径:一小片	雲母粒を多く含む。酸化焼成。軟質。	口縁部は有段で外に大きく出る。輪積成形。回転調整。内面:13本歯左回り放射状すりめ。全面やや厚く施釉。	堀覆土集石。泉州堺系?
3924	播鉢 焼締陶器	器高:一口径:一底 径:一口縁部小片	小石を多く含む。還元後、酸化焼成。硬質。	口縁部は直立。外面に緩い凹線2条。器壁薄い。内面:7本歯右回りすりめ。	堀覆土集石。信楽系。
3925	播鉢 焼締陶器	器高:一口径:一底 径:一口縁部小片	砂粒を多く含む。酸化焼成。硬質。	口縁部は直立。外面に凹線2条。内面:に隆帯。内面:8本歯左回りすりめ。	堀覆土集石。泉州堺系。
3926	播鉢 陶器錆釉	器高:一口径:一底 径:一口縁部小片	砂粒で気泡を含む。還元焼成。軟質。	口縁部は有段。器壁は薄い。回転調整放射状すりめか?全面は薄く施釉。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。
3927	播鉢 陶器錆釉	器高:一口径:一底 径:一口縁部小片	砂粒で気泡を含む。酸化焼成。軟質。	口縁部は内面に折り返し。器壁は薄い。放射状すりめか?斑状に薄く施釉	堀覆土。瀬戸美濃系。
3928	播鉢 焼締陶器	器高:一口径:一底 径:一口縁部小片	砂粒を含む。酸化焼成。硬質。	口縁部は直立。内外面:凹線2条。内面:8本歯左回りすりめ。	堀覆土。泉州堺系。
3929	播鉢 焼締陶器	器高:一口径:一底 径:一口縁部小片	小石を多く含む。還元焼成。硬質。	口縁部は直立。口唇部に凹線。外面:広い凹線2条。内面:細かい7本歯右回りすりめ。	堀覆土集石。信楽系。3917に胎土・焼成似る。
3930	茶釜 陶器錆釉	器高:一口径:127mm 底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	微砂粒を含む。還元焼成。やや軟質。	口縁部は短く直立。体部に鋭い稜の最大径部あり。内面の上端に轆轤目。外面:錆釉。内面:口縁部除き灰釉施釉。	堀覆土上層。瀬戸美濃系。
3931	香炉 陶器鉄釉	器高:62mm口径:127 mm底径:99mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化焼成。硬質。	口唇部の上面は平坦。体部はやや内傾し、高さ差あり。高台部削り出し。体部は轆轤目。見込みに輪積の無調整部。体部の外面及び口縁部は鉄・うのふ釉。	堀覆土下層。瀬戸美濃系。
3932	香炉 陶器鉛釉	器高:70mm口径:115 mm底径:90mm $\frac{1}{2}$ 残	小石・気泡を含む。酸化焼成。軟質。	口唇部は内傾。体部と底部間に顕著な稜あり。底部に3足部。口唇部から体部に施釉。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。
3933	香炉 陶器鉛釉	器高:68mm口径:[100 mm]底径:80mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。還元焼成。軟質。	口唇部は内傾。体部は直立。体部と底部間に稜あり。底部に3足部。口縁歪む。見込みにトチン痕。底部以外全面施釉。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。

第6章 中世・近世の遺構と遺物

3934	香 炉 陶器鉄釉	器高:86mm口径:[150mm]底径:[90mm]×残	砂粒で気泡を含む。酸化焼成。軟質。	口唇部は内傾。体部は直立。体部と底部間に稜あり。底部にやや大きい3足部。見込みに重ね焼き痕あり。底部以外全面施釉。	堀覆土上層。瀬戸美濃系。
3935	香 炉 陶器鉛釉	器高:63mm口径:111mm底径:83mm×残	砂粒を含む。還元焼成。硬質。	口唇部は内傾。体部は直立。体部と底部間に稜あり。底部に3足部。口縁歪む。体部に菊花状文。体部の外面及び口唇部のみ施釉。	堀覆土。瀬戸美濃系。
3936	香 炉 陶器鉄釉	器高:74mm口径:[124mm]底径:84mm×残	気泡を含む。酸化焼成。軟質。	口唇部は内傾。体部は直立。外面:カキメ。体部と底部間に稜あり。底部に3足部。底部以外施釉。	堀覆土上層。瀬戸美濃系。
3937	香 炉 陶器錆釉	器高:80mm口径:[150mm]底径:[100mm]×残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	口唇部の上面は平坦。体部は直立。体部と底部間に稜あり。底部にやや大きい3足部。見込みに重ね焼き痕あり。底部以外錆釉で施釉。内外面:天目釉をかける。	堀覆土。瀬戸美濃系。
3938	香 炉 陶器鉄釉	器高:41mm口径:[110mm]底径:67mm×残	砂粒を含む。還元焼成。硬質。	口縁部は大きく外反。体部は低い。体部と底部間に稜あり。高台部は削り出し。見込みに重ね焼き痕あり。底部以外施釉。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。
3939	香 炉 陶器鉛釉	器高:46mm口径:89mm底径:[60mm]×残	気泡を含む。還元焼成。硬質。	口唇部の上面は平坦。体部は直立。体部と底部間に稜あり。高台部削り出し。体部の外面と口唇部に施釉。	堀覆土。瀬戸美濃系。
3940	香 炉 陶器鉛釉	器高:45mm口径:[80mm]底径:53mm×残	微気泡を含む。酸化焼成。軟質。	口唇部は内傾。体部は直立。体部と底部間に稜あり。底部に小さな3足部。体部の外面と口唇部に鉄釉・うのふ釉施釉。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。
3941	香 炉 陶器鉛釉	器高:一口径:[100mm]底径:一×残	気泡を含む。酸化焼成。軟質。	口縁部は大きく外反。体部は低い。体部と底部間に稜あり。底部以外施釉。	堀覆土上層。瀬戸美濃系。3938に器形が似る。
3942	香 炉 陶器長石釉	器高:一口径:[150mm]底径:一×残	気泡が多い。酸化焼成。軟質。	口唇部はやや内傾。体部の上端僅か外傾。体部と底部間に稜あり。底部以外長石釉施釉。体部の外面と口唇部は灰釉重ねかけ。足部がつくか?	堀覆土。瀬戸美濃系。
3943	片 口 灰釉陶器	器高:100mm口径:170mm底径:85mm×残	砂粒・気泡を含む。酸化中性焼成。軟質。	口縁部はやや玉縁状。外面:口縁部下端は凹線。体部は半球形。高台部の断面は台形。見込みトチン痕あり。底部以外は施釉。貫入。	堀覆土上層。瀬戸美濃系。
3944	片 口 陶器天目釉	器高:92mm口径:151mm底径:99mm×残	砂粒で気泡を含む。還元焼成。硬質。	口縁部はやや玉縁状。外面口縁部の下端は凹線。体部は半球形。高台部は大きく、断面は方形。見込みはトチン痕あり。体部の外面と口縁部は天目釉。体部の内面は灰釉施釉。	堀覆土。瀬戸美濃系。

3945	片口 陶器鉄釉	器高:105mm 口径: [140mm]底径:84mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化 焼成。軟質。	口縁部はやや肥厚して外反。体部は 直線状で深みあり。口部は細く長い。 高台部の断面は方形。口縁部は鉛釉。 体部の内外面は鉄釉施釉後、うのふ 釉を少しかける。見込みにトチン痕。	堀覆土。瀬戸美濃 系。
3946	片口 陶器鉛釉	器高:一口径:一底 径:84mm $\frac{3}{8}$ 残	砂粒で気泡を含む。還元 焼成。軟質。	体部は半球形。高台部の断面は方形。 見込みにトチン痕あり。底部以外は 施釉。	堀覆土。瀬戸美濃 系。
3947	行平鍋 陶器灰釉	器高:一口径:[140 mm]底径:一 $\frac{1}{8}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元 焼成。硬質。外面の下端 は二次焼成。	口縁端部に蓋受け凹帯。外面の断面 は半円形。体部は球形。注口部は小さ い。外面の上端と内面は施釉。外面に 貫入あり。	堀覆土。瀬戸美濃 系。
3948	大皿 陶器灰釉	器高:80mm口径:[280 mm]底径:115mm $\frac{3}{8}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化 焼成。軟質。	口縁部は外反。体部は直線状外傾。低 く狭い付高台部。体部の内面沈線波 状文。見込みに同心円文。二重のトチ ン痕あり。底部以外は灰釉施釉。内面 は緑釉流し。	堀覆土集石。瀬戸 美濃系?鉄分付着
3949	大鉢 陶器刷毛 目	器高:一口径:一底 径:98mm $\frac{1}{8}$ 残	砂粒で気泡を含む。還元 焼成。硬質。	体部は半球形状に立ち上がる。高台 部は小さく高い。外面の上端は白土 刷毛目がけ。高台部は底以外鉄釉。内 面は緑釉。貫入あり。	堀覆土上層。唐津 系。
3950	大皿 陶器二彩	器高:[70mm]口径: [320mm]底径:115 mm $\frac{3}{8}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化 中性焼成。硬質。	口縁部は大きく外傾。体部は緩く内 反し浅い。高台部は小さく高い。外面 の上端は灰釉。内面は灰釉地上に長 石釉を塗って指でかき取り後、鉄・緑 釉で上絵付。見込みに砂目。	堀覆土集石。唐津 系。
3951	練鉢 陶器灰釉	器高:一口径:[340 mm]底径:一 $\frac{1}{8}$ 残	砂粒で気泡が多い。還元 中性。軟質。	口縁部は短く外折。体部は半球形状。 器壁は厚い。外面の下端以外は施釉。 外面に緑釉流し。	堀覆土。瀬戸美濃 系。
3952	鉢 陶器柿釉	器高:一口径:一底 径:100mm $\frac{1}{8}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化 焼成。軟質。	体部は直線状に立ち上がりぎみ。器 壁は厚い。高台部は内面は削りこみ 少ない。底部以外は施釉。	堀覆土集石。瀬戸 美濃系。
3954	大鉢 陶器刷毛 目	器高:一口径:一底 径:[130mm]小片	砂粒を含む。酸化焼成。硬 質。	器壁は厚い。高台部の外面に段あり。 見込みに稜あり。内面:灰釉は地上に 長石釉を塗って体部を指でかき取り 後、見込みを指でかき取る。見込みに 砂目。	堀覆土集石。唐津 系。
3955	大鉢 陶器鉄絵	器高:97mm口径:一底 径:一 $\frac{1}{8}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元 焼成。硬質。	口縁部は水平に外折。内面:稜あり。 体部は直線状に外還元傾。高台部は 低く大きい。底部以外は全面を長石 釉施釉。内面に鉄絵。見込み及び高台 部に胎土・砂目。	堀覆土集石。唐津 系。
3956	皿 陶器長石 釉	器高:26mm口径:122 mm底径:62mm $\frac{1}{8}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化 焼成。硬質。	口縁部は直線状に外傾。口縁に歪み。 高台部は小さい。底部以外は全面施 釉。釉溜まり。貫入あり。円錐ピン痕 あり。	堀覆土。瀬戸美濃 系。

第6章 中世・近世の遺構と遺物

3957	皿 陶器長石 釉	器高:21mm 口径:114 mm 底径:69mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化 焼成。硬質。	口縁部は直線状に外傾。高台部は殆 ど段差のみ。全面施釉。見込みに鉄絵 笹文。見込み及び高台部に円錐ピン 痕あり。	堀覆土。瀬戸美濃 系。
3958	皿 陶器灰釉	器高:27mm 口径:115 mm 底径:77mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化 中性焼成。やや軟質。	口縁部はやや直立ぎみ。高台部より 底部は低い。全面施釉。見込みに鉄絵 笹文。見込み及び高台部に円錐ピン 痕あり。	堀覆土。瀬戸美濃 系。
3959	皿 陶器長石 釉	器高:24mm 口径:118 mm 底径:75mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化 中性焼成。やや軟質。	口縁部は直線状に外傾。高台部は小 さい。ほぼ全面施釉。見込みに鉄絵笹 文。見込みに円錐ピン痕あり。釉に虫 喰いあり。	堀覆土。瀬戸美濃 系。
3960	皿 陶器灰釉	器高:29mm 口径:120 mm 底径:72mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元 焼成。硬質。	口唇部の内面に稜あり。口縁部は外 高台部の断面は三角形。内面は施釉。 見込みに鉄絵笹文。	堀覆土集石。瀬戸 美濃系。
3961	皿 陶器長石 釉	器高:26mm 口径:[120 mm] 底径:[80mm] $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元 焼成。硬質。	口縁部は直線状に外傾。器壁はやや 厚く浅い。高台部は小さい。全面施釉 内面:体部に鉄絵唐草文。貫入と円錐 ピン痕あり。	堀覆土。瀬戸美濃 系。廃棄後、2次焼 成。
3962	皿 陶器灰釉	器高:21mm 口径:[110 mm] 底径:[70mm] $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。還元 焼成。やや軟質。	口縁部はやや直立ぎみ。高台部は狭 いが明瞭。全面に施釉。見込みに印花 花文。底部に輪トチン痕あり。貫入あ り。	堀覆土集石。瀬戸 美濃系。
3963	皿 陶器長石 釉	器高:21mm 口径:[110 mm] 底径:[70mm] $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。還元 中性焼成。軟質。	口縁部は直立状外傾。高台部の底部 の差は小さい。底部以外施釉。見込 みに鉄絵笹文。円錐ピン痕あり。	堀覆土。瀬戸美濃 系。
3964	皿 陶器長石 釉	器高:24mm 口径:133 mm 底径:65mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒・小石・気泡を含む。 酸化中性焼成。軟質。	口縁部は短く外反。浅く、高台部の断 面は三角形。底部以外は施釉。見込 みに輪状無釉隆帯あり。貫入あり。	堀覆土集石。瀬戸 美濃系。
3965	皿 陶器灰釉	器高:31mm 口径:[140 mm] 底径:62mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。還元 中性焼成。軟質。	口縁部は直線状外傾。やや薄い。高台 部は削出で断面は方形。底部以外施 釉。見込みに僅かな輪状無釉隆帯。	堀覆土集石。瀬戸 美濃系。
3966	皿 陶器灰釉	器高:27mm 口径:123 mm 底径:59mm $\frac{1}{2}$ 残	気泡・鉄分を含む。還元焼 成。硬質。	口縁部は直線状外傾。高台部の断面 は三角形。底部以外施釉。見込みに輪 トチン痕あり。貫入あり。	堀覆土。瀬戸美濃 系。
3967	皿 陶器長石 釉	器高:20mm 口径:10mm 底径:62mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。還元 中性焼成。やや硬質。内面 は二次焼成。	口縁部は長線状外傾。高台部の断面 は三角形で小さい。底部以外施釉。	堀覆土。瀬戸美濃 系。灯明皿として 使用か。
3968	灯明皿 陶器鉛釉	器高:24mm 口径:[110 mm] 底径:[50mm] $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元 焼成。硬質。外面は二次 焼成。	口縁部の体部は内反ぎみに立ち上 がり深みあり。器壁は薄い。底部は削 り込み。底部以外施釉。見込みに円錐 ピン痕あり。	堀覆土。瀬戸美濃 系。

3969	菊 皿 陶器織部 釉	器高:43mm口径:[140mm]底径:70mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化焼成。軟質。	口縁部の体部は内反ぎみ。高台部は高い。内面:菊花状押型。外面:口唇部:同刻花。底部以外は灰釉地施釉後口縁部に緑釉がけ。	堀覆土。瀬戸美濃系。
3970	菊 皿 陶器灰釉	器高:35mm口径:126mm底径:64mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡が多い。酸化焼成。軟質。	口縁部は直線状外傾。体部の下端に稜あり。高台部はやや低い。内面:見込みを除き菊花状押型。外面:口唇部:同刻花。底部以外施釉。見込みにトチン痕あり。	堀覆土。瀬戸美濃系。
3971	菊 皿 陶器織部 釉	器高:一口径:一底径:70mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。酸化焼成。硬質。	器壁は厚い。高台部は張り付けでやや内傾。体部の下端に稜あり。内面:見込みを除き菊花状押型。外面:同刻花。底部以外施釉。口唇部は上り緑釉がけ。	堀覆土。瀬戸美濃系。廃棄後、二次焼成。
3972	椀 陶器灰釉	器高:75mm口径:[110mm]底径:46mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。酸化焼成。軟質。	口縁部・体部はほぼ直立で深みあり器壁は薄い。高台部は薄く高い。全面施釉。貫入あり。	堀覆土。唐津系。
3973	椀 陶器灰釉	器高:75mm口径:[100mm]底径:44mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。酸化焼成。硬質。	口縁部・体部はほぼ直立で深みあり器壁は薄い。高台部の断面は三角形で高い。全面施釉。貫入あり。	堀覆土集石。唐津系。
3974	椀 陶器灰釉	器高:68mm口径:103mm底径:47mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	口縁部はやや外傾で深みあり。器壁は薄い。高台部の断面は三角形で低い。全面施釉。貫入あり。	堀覆土集石。唐津系。
3975	椀 陶器灰釉	器高:76mm口径:[110mm]底径:45mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	口縁部・体部はほぼ直立で深みあり器壁は薄い。高台部の断面は三角形で高い。全面施釉。貫入あり。	堀覆土。唐津系。
3976	椀 陶器灰釉	器高:78mm口径:[110mm]底径:45mm残 存:?	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	口縁部・体部はほぼ直立で深みあり。器壁は薄い。高台部の断面は三角形で高い。全面施釉。貫入あり。	堀覆土上層。唐津系。3975に似る。
3977	椀 陶器灰釉	器高:一口径:一底径:50mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。酸化焼成。硬質。	体部は直立ぎみ。器壁はやや厚い。深みあり。高台部の断面は三角形で低い。全面施釉。貫入あり。	堀覆土。唐津系。
3978	椀 陶器灰釉	器高:68mm口径:[110mm]底径:45mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	口縁部の体部は直立し浅い。器壁は薄く、高台部は高くやや外傾。全面施釉。貫入あり。	堀覆土。唐津系。
3979	椀 陶器灰釉	器高:65mm口径:[120mm]底径:[50mm] $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は半球形状で轆轤目を残す。高台部は低く厚い。底部以外施釉。貫入あり。	堀覆土集石。唐津系。
3980	椀 陶器灰釉	器高:57mm口径:[100mm]底径:44mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。酸化焼成。硬質。	口縁部・体部は直立ぎみで浅い。高台部は削り出しで低い。底部に「富永」刻印。底部以外施釉。貫入あり。	堀覆土。唐津系。

第6章 中世・近世の遺構と遺物

3981	小杯 陶器胎釉	器高:35mm口径:73mm 底径:40mmほぼ完存	砂粒を含む。還元焼成。硬質。	口縁部はやや玉縁状。体部は半球形。高台部の断面は台形。外面:轆轤目残す。底部付近以外は施釉。窯変。	堀覆土上層。瀬戸美濃系。
3982	椀 陶器刷毛目	器高:一口径:一底径:44mm%残	砂粒で気泡は少ない。酸化焼成。硬質。	体部は半球形。高台部は鋭い。全面に透明釉と長石釉の刷毛目塗り。見込みは蛇の目状の釉はぎと、重ね焼き痕。貫入あり。	堀覆土上層。唐津系。
3983	椀 陶器鉄絵	器高:一口径:[110mm]底径:一%残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	口縁部・体部はほぼ直立。器壁やや厚い。外面:鉄絵付後、内外面透明釉施釉。貫入あり。	堀覆土。唐津系。
3984	椀 陶器灰釉	器高:50mm口径:[90mm]底径:[40mm]%残	砂粒で気泡は少ない。酸化焼成。硬質。	口縁部は直立。体部は半球形。高台部は小さく断面は方形。底部以外は施釉。内外面:窯変。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。
3985	香炉 陶器鉄釉	器高:69mm口径:[130mm]底径:87mm%残	気泡が多い。酸化焼成。軟質。	口唇部はやや内傾。体部は直立。体部の外面は楕円平行線文。底部に3足部体部と底部間に稜あり。見込みにトチン痕あり。底部以外は鉄釉施釉後、うのふ釉かけ。	堀覆土。瀬戸美濃系。
3986	徳利 陶器柿釉	器高:一口径:一底径:[70mm]最大径:121mm%残	砂粒・小石・気泡を含む。酸化焼成。軟質。	頸部は長く、最大径は体部下端。器壁は厚い。高台部は削り出しの低い輪状。内外面:轆轤目残す。外面:底部除き柿釉地に胎釉流し。内面:錆釉。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。
3987	徳利 陶器柿釉	器高:一口径:一底径:一最大径:[120mm]%残	砂粒で気泡を含む。還元焼成。軟質。	頸部は長く、最大径は体部中央。轆轤目残す。外面:柿釉地に灰釉を流している。内面:灰釉地に柿釉たれる。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。
3988	椀 陶器掛分け	器高:72mm口径:116mm底径:54mm%残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	口縁部は直立。削り出し。高台部の断面は方形。器壁は薄い。高台部周辺灰釉後、上端・内面天目釉。更に口縁部はうのふ釉漬掛け。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。
3989	椀 陶器胎釉	器高:68mm口径:[100mm]底径:44mm%残	砂粒で気泡を含む。還元焼成。やや軟質。	口縁部は僅かに外傾。体部は半球形。器壁は薄い。高台部はやや小さい。底部周辺以外施釉。貫入あり。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。
3990	椀 陶器掛分け	器高:72mm口径:[120mm]底径:56mm%残	気泡を含む。還元中性焼成。軟質。	口縁部は僅かに外傾。体部の下端は半球形。高台部はやや外傾。削り出し底部の周辺は錆釉後、上端・内面は天目釉、口縁部は柿釉漬掛け。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。
3991	椀 陶器掛分け	器高:76mm口径:[120mm]底径:44mm%残	砂粒で気泡を含む。還元中性焼成。やや軟質。	口縁部は僅かに外傾。削り出し。高台部の断面は方形。器壁は薄い。高台部は薄い。高台部の周辺は錆釉後、上端・内面胎釉、更に口縁部の周辺はうのふ釉漬掛け。	堀覆土上層。瀬戸美濃系。
3992	椀 陶器掛分け	器高:76mm口径:[120mm]底径:55mm%残	砂粒で気泡を含む。還元中性焼成。やや軟質。	口縁部は僅かに外傾。体部は半球形。高台部やや大きく断面は方形。器壁は厚い。底部以外に胎釉後、口縁部はうのふ釉漬掛け。見込みは窯変。	堀覆土上層。瀬戸美濃系。



3993	椀 陶器胎釉	器高:66mm口径:[100mm]底径:51mm%残	気泡を含む。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は僅かに外傾。高台部の断面は台形。底部以外は施釉。	堀覆土。瀬戸美濃系。
3994	椀 陶器胎釉	器高:68mm口径:[130mm]底径:56mm%残	砂粒で気泡を含む。還元中性焼成。軟質。	口縁部・体部は僅かに外傾。高台部の断面は方形でやや大きい。浅い。高台部端以外全面に厚く施釉。	堀覆土上層。瀬戸美濃系。
3995	椀 陶器掛分け	器高:73mm口径:[120mm]底径:54mm%残	砂粒で気泡を含む。酸化焼成。軟質。	口縁部・体部は僅かに外傾。高台部の断面は台形。器壁やや厚く浅い。底部以外に錆釉施釉後、口縁部はうのふ釉漬掛け。	堀覆土。瀬戸美濃系。
3996	椀 陶器掛分け	器高:一口径:[120mm]底径:一%残	砂粒で気泡が多い。酸化焼成。軟質。	口縁部・体部は僅かに外傾。外面:轆轤目残る。胎釉施釉後、口縁部はうのふ釉漬掛け。見込みに輪状重ね焼き痕あり。	堀覆土。瀬戸美濃系。
3997	椀 陶器掛分け	器高:85mm口径:[120mm]底径:59mm%残	砂粒で気泡が多い。酸化焼成。軟質。	口縁部・体部は僅かに外傾。外面:轆轤目残る。器壁はやや厚く深みあり。底部以外うのふ釉施釉後、口縁部は長石釉漬掛け。見込みに円錐ピン痕あり。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。
3998	椀 陶器刷毛目	器高:51mm口径:[90mm]底径:37mm%残	微砂粒を含む暗紫色胎土。酸化焼成。硬質。	口唇部はやや玉縁状。口縁部・体部は半球形。高台部は小さく内傾。器壁は薄い。外面:雲文状。内面:ヒゲ状に長石釉塗り。高台部を含め、全面透明釉施釉。	堀覆土集石。唐津系。(現川か)
3999	椀 陶器掛分け	器高:60mm口径:102mm底径:53mm%残	微砂粒を含む。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は外傾し筒形。体部上端に沈線3条。沈線上に指頭痕あり。高台部は低い。外面中央以下は全面に錆釉後、上端・内面に灰釉施釉。	堀覆土。唐津系。
4000	椀 陶器灰釉	器高:67mm口径:[100mm]底径:44mm%残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は僅かに外傾。高台部の断面は方形で小さい。高台部以外は全面にうのふ釉流す。	堀覆土。瀬戸美濃系。
4001	椀 陶器刷毛目	器高:67mm口径:[120mm]底径:[40mm]%残	微砂粒を含む暗紫色胎土。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は僅かに外傾。高台部は内傾。外面:長石釉で大きく連続半円を塗り胎釉で草文施文後、透明釉を全面施釉。内面:長石釉流しのみ。	堀覆土。上野系。
4002	椀 陶器上絵付	器高:60mm口径:[100mm]底径:32mm%残	砂粒で気泡を含む。酸化焼成。軟質。	口縁部・体部は球形状で薄い。高台部は小さい。底部以外は灰釉施釉焼成後、体部の外面に具須・銅・鉄絵で草木文。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。
4003	椀 陶器天目釉	器高:一口径:120mm底径:一%残	砂粒で気泡を含む。還元焼成。軟質。	口唇部はやや外反。口縁部・体部間緩い稜あり。体部は直線状に収縮。内外面:天目釉施釉。口唇部に錆釉。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。
4004	椀 陶器鉄釉	器高:一口径:[120mm]底径:一%残	砂粒で気泡を含む。還元焼成。軟質。	口唇部は玉縁状で外反。口縁部・体部間の稜やや不明瞭。体部は直線状。底部周辺以外全面施釉。	堀覆土。瀬戸美濃系。

第6章 中世・近世の遺構と遺物

4005	椀 陶器天目 釉	器高:65mm口径:98mm 底径:39mm $\frac{2}{3}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化 中性焼成。軟質。	口縁部は直立。体部は半球形で最大 径上端。低く厚い輪高台部。底部周辺 以外施釉後、口唇部に柿釉かけ。外面 上端に長石釉を雲文状に流す。	堀覆土。瀬戸美濃 系。
4006	椀 陶器天目	器高:—口径:[110 mm]底径:— $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化 焼成。軟質。	口唇部は外反。口縁部・体部間に稜な く、丸み。体部は直線状。底部周辺施 釉後、斑状に天目釉かける。	堀覆土集石。瀬戸 美濃系。
4007	椀 陶器天目 釉	器高:65mm口径:—底 径:—小片	砂粒で気泡は少ない。還元 焼成。硬質。	口唇部は玉縁状で外反。口縁部・体部 間に緩い稜あり。削り高台部の断面 は台形。底部周辺以外施釉。口唇部は 錆釉。	堀覆土集石。瀬戸 美濃系。
4008	小 杯 陶器錆釉	器高:37mm口径:[80 mm]底径:43mm $\frac{2}{3}$ 残	砂粒で気泡が多い。還元 焼成。軟質。	口縁部・体部は内反状外傾。轆轤目が 残る。高台部は低く断面は丸い。底部 周辺以外は薄く施釉。見込みに凹部。 阻害。	堀覆土。東海系。
4009	椀 陶器染付	器高:80mm口径:[110 mm]底径:55mm $\frac{2}{3}$ 残	砂粒が多い。還元焼成。硬 質。半磁器。	口縁部・体部は直線状。器壁は厚く、 深みあり。高台部の内側は深い。コバ ルト釉。外面:口縁部は格子文。体部 は草木文。高台部に圏線。貫入あり。	堀覆土下層。肥前 系。
4010	椀 陶器染付	器高:69mm口径:[110 mm]底径:— $\frac{2}{3}$ 残	砂粒を含む。還元焼成。硬 質。半磁器。	口縁部・体部は僅かに外傾きみ。高台 部はやや小さい。コバルト釉。外面は 絵付。体部は二重圏線内に草花文。高 台部は二重線。貫入あり。	堀覆土。肥前系。
4011	椀 陶器染付	器高:—口径:[100mm] 底径:— $\frac{2}{3}$ 残	砂粒を含む。還元焼成。硬 質。半磁器。	口縁部・体部は直線状。器壁は厚い。 コバルト釉。外面:絵付・圏線・草木 文。貫入あり。	堀覆土。肥前系。
4012	椀 陶器掛分 け	器高:59mm口径:[100 mm]底径:40mm $\frac{2}{3}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化 焼成。硬質。	口縁部は直立。体部の上端に緩い凹 帯2条。高台部は張り付けて低い。外 面上端・内面は灰釉、下端は鉄釉。	堀覆土。瀬戸美濃 系。
4013	椀 陶器灰釉	器高:—口径:—底 径:45mm $\frac{2}{3}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化 中性焼成。軟質。	体部下端は半球形。器壁は厚い。高台 部は低い。全面施釉。貫入あり。	堀覆土。唐津系。
4014	椀 陶器染付	器高:—口径:[100 mm]底径:— $\frac{2}{3}$ 残	砂粒を含む。還元焼成。硬 質。半磁器。	口縁部・体部は直立。器壁は厚い。コ バルト釉。外面:絵付・二重圏線・雲 文。貫入あり。	堀覆土。肥前系。
4015	椀 陶器染付	器高:70mm口径:[110 mm]底径:[50mm] $\frac{2}{3}$ 残	砂粒を含む。還元焼成。硬 質。半磁器。	口縁部・体部は直立。器壁は厚い。高 台部は小さい。コバルト釉。外面:絵 付・二重圏線・草花文。貫入あり。	堀覆土。肥前系。
4016	椀 陶器染付	器高:74mm口径:[110 mm]底径:47mm $\frac{2}{3}$ 残	砂粒で気泡を含む。還元 焼成。硬質。半磁器。	口縁部・体部は内反きみ。高台部はや や高い。コバルト釉。外面:絵付・二 重圏線・草花文。貫入あり。	堀覆土集石。肥前 系。
4017	椀 陶器染付	器高:60mm口径:[110 mm]底径:[50mm] $\frac{2}{3}$ 残	砂粒を含む。還元焼成。硬 質。半磁器。	口縁部・体部は直線状で浅い。高台部 は小さい。コバルト釉。外面:絵付・二 重圏線・雲文。貫入あり。	堀覆土集石。肥前 系。

## (2) 館 跡

4018	碗 染付白磁	器高:57mm 口径:110mm 底径:43mm完存	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は半球形。底部はやや厚い。外面:コバルト釉で梅樹文。高台部に圈線。見込みは蛇の目状釉はぎ。	堀覆土。肥前系。
4019	小 碗 染付白磁	器高:48mm 口径:82mm 底径:34mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	全体に小さく、口縁部・体部は半球形状。外面:コバルト釉で笹文。高台部に圈線。発色は悪い。	堀覆土上層。肥前系。
4020	碗 染付白磁	器高:50mm 口径:102mm 底径:43mm完存	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は半球形でやや小さい。外面:コバルト釉で手描草花文と型紙摺雀文。高台部に圈線。底部に窯印。	堀覆土。肥前系。
4021	碗 染付白磁	器高:50mm 口径:101mm 底径:44mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	体部下端に緩い稜あり。やや高い付け高台部。外面:コバルト釉で草花文。高台部に圈線。釉割れ。底部は窯印。	堀覆土。肥前系。
4022	小 碗 染付白磁	器高:45mm 口径:84mm 底径:40mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。やや軟質。	口縁部・体部は半球形。器壁は薄い。口縁の外面にコバルト釉で口縁部鋸歯状文、高台部圈線。	堀覆土。肥前系。
4023	碗 染付白磁	器高:62mm 口径:117mm 底径:40mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は外傾し、深みあり。器壁は薄い。外面にコバルト釉で草花文。高台部の内外面に圈線。	堀覆土集石。肥前系。
4024	碗 染付白磁	器高:58mm 口径:105mm 底径:44mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は半球形。高台部は低い。器壁は薄い。外面:コバルト釉で鳥雲文。底部に崩れた「大明年製」。発色は良い。	堀覆土集石。肥前系。
4025	碗 染付白磁	器高:50mm 口径:100mm 底径:39mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は半球形で低く、器壁は厚い。外面:コバルト釉で梅樹文。底部に窯印。釉だまり。発色は悪い。見込みはハリ痕。	堀覆土集石。肥前系。
4026	碗 染付白磁	器高:47mm 口径:116mm 底径:52mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	浅く口径は大きい。高台部の断面は三角形。外面:轆轤目残し、コバルト釉で笹文。発色は悪い。見込みに蛇の目状砂目。	堀覆土集石。肥前系。
4027	碗 染付白磁	器高:47mm 口径:110mm 底径:44mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	浅く口径は大きい。底部の器壁は厚い。外面:コバルト釉で梅樹文。高台部に圈線。全面施釉。見込みは蛇の目状釉はぎ。	堀覆土集石。肥前系。
4028	皿 陶器青緑釉	器高:58mm 口径:197mm 底径:60mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は内反きみ外傾、深みあり。高台部の断面は台形。外面:灰釉、高台部は無釉。内面:青緑釉。見込みは蛇の目状釉はぎ。	堀覆土上層。唐津系。
4029	皿 染付白磁	器高:50mm 口径:140mm 底径:45mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は直線状で外傾。付け高台部の断面は台形。内面:コバルト釉で草花文。発色は悪い。見込みは蛇の目状釉はぎ。	堀覆土。肥前系。

第6章 中世・近世の遺構と遺物

4030	皿 染付白磁	器高:35mm 口径:135mm 底径:75mm <sup>1</sup> / <sub>2</sub> 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部はやや急に立ち上がりは浅い。高台部の断面は三角形。コバルト釉。内面:梅樹文。外面:雲文と圏線。	堀覆土上層。肥前系。
4031	皿 染付白磁	器高:33mm 口径:135mm 底径:73mm <sup>1</sup> / <sub>2</sub> 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	4030とほぼ同じ。僅かに発色は良い。	堀覆土上層。肥前系。
4032	皿 染付白磁	器高:36mm 口径:[130mm] 底径:[70mm] <sup>1</sup> / <sub>2</sub> 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部はやや急に立ち上がり浅い。高台部は低い。コバルト釉で内面:花文と網目文。見込みは五弁花。外面:圏線。	堀覆土。肥前系。
4033	皿 染付白磁	器高:一口径:一底径:[70mm]底部小片	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	底部の器壁はやや厚い。高台部の断面は三角形。コバルト釉で内面:草花文。見込みはコンニャク判五弁花。外面:圏線。	堀覆土。肥前系。
4034	蓋 染付白磁	器高:25mm 口径:100mm 底径:58mm <sup>1</sup> / <sub>2</sub> 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	鈕部は高く大きい。コバルト釉で見込みは十字文。外面:松葉文。鈕内は花文。発色は良い。	堀覆土。肥前系。
4035	輪花皿 染付白磁	器高:33mm 口径:125mm 底径:66mm <sup>1</sup> / <sub>2</sub> 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部は輪花刻みで小さく外反。高台部の断面は方形。コバルト釉で内面:梅樹文。外面:唐草文。高台部の端は鉄釉圏線。	堀覆土。肥前系。
4036	大皿 染付白磁	器高:一口径:一底径:122mm底部片	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	底部はやや上がる。高台部は高くやや内傾。コバルト釉で見込みに圏線内にアヤメ文外に七宝繫ぎ文。外面:唐草と圏線。発色は優良。	堀覆土。有田。
4037	皿 青花白磁	器高:一口径:一底径:72mm底部片	やや気泡ある磁胎。還元焼成。硬質。	底部はやや下がる。器壁はやや不均一。高台部の断面は台形。コバルト釉で見込みに雲竜文。	堀覆土。景德鎮か。
4038	碗 染付白磁	器高:49mm 口径:96mm 底径:38mm <sup>1</sup> / <sub>2</sub> 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は半球形。コバルト釉で外面:二重の粗い網目文。見込みにハリ痕。	堀覆土集石。肥前系。
4039	碗 染付白磁	器高:一口径:一底径:37mm底部片	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	器壁はやや厚い。コバルト釉で見込みに網目文。周縁部はほぼ均等に破碎。重量58g。	堀覆土。肥前系。印地として転用か。
4040	蓋 染付白磁	器高:一口径:一底径:39mm底部片	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	器壁は薄く、鈕は小さい。コバルト釉で外面:二重の粗い網目文。	堀覆土。肥前系。
4041	小碗 染付白磁	器高:51mm 口径:67mm 底径:32mm <sup>1</sup> / <sub>2</sub> 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は直立。高台部の断面は方形。外面:コバルト釉で二重格子文内に草花文。	堀覆土。肥前系。
4042	小杯 染付白磁	器高:53mm 口径:72mm 底径:35mm <sup>1</sup> / <sub>2</sub> 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部は短く外反。体部は直立ぎみで深みあり。高台部の断面は三角形。コバルト釉で外面:花木文。見込みにハリ痕。	堀覆土。肥前系。

## (2) 館 跡

4043	碗 染付白磁	器高:54mm口径:71mm 底径:32mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は直立。高台部は小さい。コバルト釉で外面:矢筈文。内面:圏線。口唇部の一部に鉄釉かかる。	堀覆土。肥前系。
4044	小 碗 染付白磁	器高:47mm口径:83mm 底径:32mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部は直線状で外傾。深みあり。高台部は小さい。コバルト釉で外面:コンニャク判花文と圏線。発色は悪い。	堀覆土。肥前系。
4045	小 碗 青花白磁	器高:一口径:86mm 底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は半球形。コバルト釉で外面:コンニャク判花文と圏線。発色は悪い。	堀覆土。肥前系。
4046	小 杯 染付白磁	器高:一口径:79mm 底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部は小さく外反。体部は直立ぎみで深い。コバルト釉で外面:コンニャク判松樹文と圏線。	堀覆土。肥前系。
4047	碗 染付白磁	器高:一口径:96mm 底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は半球形。僅かに轆轤目を残す。コバルト釉で外面:コンニャク判桐葉文。	堀覆土。肥前系。
4048	碗 染付白磁	器高:53mm口径:92mm 底径:39mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は半球形。底部の器壁は厚い。コバルト釉で外面:コンニャク判花文と圏線。底部に渦福字銘。	堀覆土。肥前系。
4049	碗 染付白磁	口縁部小片	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	器壁は厚い。口唇部の両面に鉄釉重ね圏線。コバルト釉で外面:型紙摺菱形花文。	堀覆土。肥前系。
4050	碗 染付青磁	器高:65mm口径:116mm 底径:44mm残存:?	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は大きく外反し深みあり。体部の下端に稜あり。外面:青磁釉。内面:コバルト釉で口縁部に斜格子。見込みにコンニャク判五弁花。	堀覆土。肥前系。
4051	香 炉 青 磁	器高:一口径:[120mm] 底径:一小片	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口唇部は平坦で内方へ肥厚。体部は直立。内面:轆轤目。青磁。	堀覆土。竜泉窯系?
4052	香 炉 青 磁	器高:一口径:[80mm] 底径:一小片	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部はやや外反。体部は外へ張り出して稜あり。青磁。	堀覆土。竜泉窯系。
4053	碗 青 磁	器高:一口径:一底径:48mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	高台部の断面は台形に近い。青磁。貫入あり。体部は角がなく打ち欠く。	堀覆土。竜泉窯系。印地に転用か。
4054	脚付段皿 青 磁	器高:一口径:[200mm] 底径:一小片	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口唇部は短く直立ぎみ。段部は明瞭。見込みに刻花文。青磁。貫入あり。	堀覆土中下層。竜泉窯系。
4055	碗 染付白磁	器高:55mm口径:120mm 底径:44mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部はやや内反ぎみに外傾。高台部は外方に開く。器壁は薄い。全面にコバルト釉、型紙摺で雷文地に桜花文。	堀覆土。肥前系。
4056	碗 染付白磁	器高:54mm口径:120mm 底径:45mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部はやや内反ぎみに外傾。高台部は直立。外面:コバルト釉、型紙摺で雀枝葉文。銅釉型紙摺で魚文。	堀覆土。肥前系。

第6章 中世・近世の遺構と遺物

4057	猪口 染付白磁	器高：一口径：一底 径：44mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	体部は直立きみ外傾。底部は削り込み。外面の下端にコバルト釉で交叉線文。	堀覆土。肥前系。
4058	碗 染付白磁	器高：一口径：(50mm) 底径：一小片	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は直立。外面：コバルト釉で仕切り内に七宝繫ぎ文と井桁文。内面：圏線。	堀覆土。肥前系。
4059	碗 染付白磁	器高：一口径：48mm 底径：一 $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は直立。体部の下端に稜あり。コバルト釉で外面：網目地で菊花散らし。内面：上端は菱形割付文。	堀覆土。肥前系。
4060	碗 染付白磁	器高：一口径：56mm 底径：一 $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	口縁部・体部は直立。体部の下端に稜あり。コバルト釉で外面：格狭間内にアヤメ文。地に蕨手唐草文。内面：上端は菱形割付文。	堀覆土。肥前系。
4061	碗 染付白磁	器高：一口径：一底 径：43mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	底部は厚い。高台部は薄く付け高台。外面：コバルト釉で草花文。底部は「み」字銘。	堀覆土。肥前系。
4062	碗 染付白磁	器高：一口径：一底 径：38mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	底部は厚い。高台部の断面は三角形。外面：コバルト釉で草花文。底部に「山」字銘。	堀覆土。肥前系。
4063	碗 染付白磁	器高：一口径：一底 径：38mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	底部は厚い。高台部の断面は方形。外面：コバルト釉で草花文。底部に「み」字銘。	堀覆土。肥前系。
4064	皿 染付白磁	不明 $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	底部は極めて厚い。やや大形。コバルト釉で外面：圏線。底部は不明銘。内面：見込みにコンニャク判五弁花。	堀覆土。肥前系。
4065	碗 染付白磁	器高：一口径：一底 径：[40mm] $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	体部は半球形に立ち上がる。外面：コバルト釉で草花文。底部に「山」字銘。発色不良。	堀覆土。肥前系。
4066	碗 染付白磁	器高：一口径：一底 径：42mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	高台部はやや内傾し、砂目残る。外面：コバルト釉で草花文。底部に「み」字銘。	堀覆土。肥前系。
4067	碗 染付白磁	器高：一口径：一底 径：38mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	高台部はやや内傾し、砂目残る。外面：コバルト釉で草花文。底部に「み」字銘。	堀覆土。肥前系。 4066に似る。
4068	碗 染付白磁	器高：一口径：一底 径：39mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	高台部の断面は方形で砂目残る。底部は凹む。外面：コバルト釉で圏線と底部に不明銘。発色不良。	堀覆土。肥前系。
4069	碗 染付白磁	器高：一口径：一底 径：43mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	高台部は薄く付け高台。外面：コバルト釉で草花文。底部に「大明年製」銘。	堀覆土下層。肥前系。
4070	碗 染付白磁	器高：一口径：一底 径：42mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬質。	底部は厚い。体部はやや完に立ち上がる。外面：コバルト釉で草花文。底部に「み」字銘。	堀覆土集石。肥前系。

4071	碗 染付白磁	器高:一口径:一底 径:42mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬 質。	器壁はやや厚い。外面:コバルト釉で 草花文。底部に「み」字銘。	堀覆土集石。肥前 系。
4072	碗 染付白磁	器高:一口径:一底 径:43mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬 質。	見込みはやや下がる。外面:コバルト 釉で草花文。底部に不明銘。	堀覆土集石。肥前 系。
4073	碗 染付白磁	器高:56mm口径:98mm 底径:43mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬 質。	口縁部・体部は半球形。器壁は薄い。 外面:コバルト釉で草花文。底部に不 明銘。	堀覆土。肥前系。廃 棄後二次焼成。
4074	椀 陶器染付	器高:一口径:69mm底 径:一 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還 元焼成。硬質。半磁器。	口縁部・体部は直立。体部に轆轤目。 下端に稜あり。コバルト釉で外面:仕 切り網目地菊花文と井桁散らし七宝 文。内面:圏線。	堀覆土。磁器4059 などの模倣。唐津 系。
4075	碗 染付白磁	器高:一口径:一底 径:32mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬 質。	体部は半球形。高台部は小さく断面 は三角形。外面:コバルト釉で梅花状 文。見込みにも施文。貫入あり。	堀覆土。肥前系。
4076	碗 染付白磁	器高:45mm口径:76mm 底径:36mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬 質。	口縁部は内反。体部の下端は最大径。 高台部は低い。外面:コバルト釉で網 目丸文。内面:上端は無釉で砂目残り	堀覆土。肥前系。
4077	碗 染付白磁	器高:一口径:[130 mm]底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬 質。	口唇部は短く外反。体部は半球形。器 壁は薄い。コバルト釉で外面:格狭間 内に「信」字。見込みに内稜を持ち圏 線。	堀覆土。肥前系。
4078	碗 染付白磁	器高:一口径:一底 径:75mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬 質。	高台部は高く、見込み下がる。外面: コバルト釉で花木文。見込みに圏線。	堀覆土。肥前系。
4079	碗 染付白磁	器高:一口径:一底 径:42mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬 質。	体部は半球形。高台部は貼付け。コバ ルト釉で外面:草花文。底部に不明銘	堀覆土。肥前系。
4080	碗 染付白磁	器高:一口径:96mm底 径:一 $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬 質。	口縁部・体部は半球形。器壁は薄い。 外面:コンニャク判松梅文。	堀覆土。肥前系。
4081	蓋 染付白磁	器高:一口径:一底 径:36mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬 質。	鈕部は貼付けで断面は三角形。器壁 は薄い。コバルト釉で外面:圏線。見 込みに手書き花文。	堀覆土。肥前系。
4082	仏飯器 染付白磁	器高:一口径:一底 径:34mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬 質。	脚部は短い。体部外面にコバルト釉 で草花文。	堀覆土。肥前系。
4083	小杯 染付白磁	器高:一口径:一底 径:30mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬 質。	高台部貼付けで断面は三角形。体部 は内反ぎみに立ち上がる。高台部の 内は無釉。体部外面にコバルト釉で 不明文。	堀覆土。肥前系。
4084	瓶 染付白磁	器高:一口径:一底 径:一最大径:126mm 残存:?	緻密な磁胎。還元焼成。軟 質。	ナデ肩状の肩部に最大径。内面:轆轤 目。外面:コバルト釉で柳文。下端圏 線。内面:無釉。	堀覆土。肥前系。
4085	碗 染付白磁	器高:一口径:一底 径:44mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。還元焼成。硬 質。	体部の外傾度は大きく、高台部の断 面は三角形ぎみ。外面:コバルト釉で 草花文と柳文。発色は良い。	堀覆土上層。肥前 系。

第6章 中世・近世の遺構と遺物

4086	椀 陶器灰釉 鉄絵	器高:67mm口径:108mm 底径:53mm $\frac{2}{3}$ 残	気泡・砂粒は少ない。酸化焼成。硬質。	口縁部・体部は内反ぎみ外傾。体部の下端は緩い稜あり。全面施釉。体部の外面に鉄絵山水文くずれ。	堀覆土。京焼系。
4087	椀 陶器鉄絵	器高:67mm口径:104mm 底径:44mm $\frac{2}{3}$ 残	黒色鉱物粒・微砂粒を含む。還元焼成。硬質。半磁器。	口縁部・体部はやや外傾。器壁は厚い。高台部の断面は方形ぎみ。全面灰釉施釉後、外面:鉄釉で唐草文。貫入あり。	堀覆土。肥前系。
4088	椀 陶器染付	器高:一口径:108mm 底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎に近い。還元焼成。硬質。半磁器。	口縁部・体部は直立。下端の器壁は厚く、轆轤目残る。外面:コバルト釉で圏線内に草樹文。貫入あり。	堀覆土集石。肥前系。
4089	椀 陶器鉄釉	器高:68mm口径:117mm 底径:56mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	口径は大きく、口縁部・体部は直立。高台部は貼付けで厚く断面は台形。全面施釉後、内外面:うのふ釉流しかけ。	堀覆土集石。瀬戸美濃系。
4090	香炉? 陶器鉄釉	器高:一口径:一底径:74mm $\frac{2}{3}$ 残	砂粒で気泡が多い。酸化焼成。硬質。	体部は円筒状。底部は厚く、高台部は削り出し。体部端に顕著な稜あり。底部以外は施釉。内面:やや窯変。見込みにハリ痕。	堀覆土。東海系?
4091	四耳壺 陶器鉄釉	器高:一口径:127mm 底径:一最大径:182mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化焼成。軟質。	口縁部は玉縁状。稜をもって頸部はコの字状。内外面:轆轤目残し。肩部に耳あり。外面中上端・内面上端は施釉。口唇部に無釉部あり。	堀覆土下層。瀬戸美濃系。
4092	水注 陶器胎釉	器高:102mm口径:46mm 底径:68mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化焼成。硬質。	口縁部は小さく内面:蓋受け内稜あり。体部の最大径は下端。高台部は削り出し。把手・注口部貼付け。底部以外施釉。肩部にカキ目。	堀覆土。瀬戸美濃系。
4093	小皿 陶器胎釉	器高:17mm口径:100mm 底径:64mm $\frac{2}{3}$ 残	砂粒で気泡を含む。還元焼成。硬質。	口唇部端に突起部貼付け。浅い。底部以外施釉。見込みの一部は窯変。	堀覆土上層。瀬戸美濃系。
4094	輪花皿? 陶器灰釉	器高:一口径:一底径:49mm $\frac{2}{3}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。軟質。	体部の一端に折り曲げあり。高台部の断面は三角形ぎみ。底部以外施釉。	堀覆土。瀬戸美濃系。
4095	仏飯器 陶器灰釉	器高:53mm口径:66mm 底径:40mm $\frac{2}{3}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	腕部は大きく脚部は短い。底部は円盤状。底部以外は施釉。	堀覆土。瀬戸美濃系。
4096	徳利 陶器鎊釉	器高:一口径:52mm 底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	口唇部は強く外折。稜をもって頸部は窄まる。肩部はなで肩。全面施釉。	堀覆土。瀬戸美濃系。
4097	天目台 陶器灰釉	器高:60mm口径:76mm 底径:60mm $\frac{2}{3}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化焼成。硬質。	口唇部・体部は外傾。罅部は水平に大きく張り、口唇部は直立。体部内外面と罅部上面に施釉。口唇部は無釉。	堀覆土。瀬戸美濃系。
4098	仏花器 陶器鉄釉	体径:53mm $\frac{2}{3}$ 残	砂粒で気泡を含む。還元焼成。軟質。	体部は球形状。頸部は直立きみで境にボタン状貼付突起。脚部は大きく外反ぎみ。全面施釉し、頸部に長石釉を流す。	堀覆土。瀬戸美濃系。



4099	乗 燭 陶器鉄釉	皿部径:80mm底径:62mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	棧部に切り込み2か所。脚部はやや長く外反し、片側に突起。中空。外面と頸部の内面は施釉。	堀覆土。瀬戸美濃系。
4100	乗 燈 陶器灰釉	脚部か $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	中央に水平の張り出し部あり。脚部との境に孔2か所。器壁は厚い。上面以外に厚く施釉。	堀覆土。瀬戸美濃系。
4101	灯明皿 陶器柿釉	器高:17mm 皿径:104mm底径:56mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	棧部は直立し断面は三角形。底部はやや上げ底。全面施釉後、底部拭い取る。	堀覆土。瀬戸美濃系。
4102	灯明皿 陶器長石釉	器高:21mm 皿径:110mm底径:[45mm] $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。	棧部は小さく断面は三角形。皿部は大きく底部は小さい。上面は施釉。	堀覆土。瀬戸美濃系。
4103	灯明皿 陶器錆釉	器高:20mm 皿径:117mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。酸化焼成。硬質。	棧部は高くやや内反きみで、切り込みあり。底部以外は施釉。	堀覆土。瀬戸美濃系。
4104	甕 焼締陶器	器高:一口径:[180mm]底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は多い。還元焼成。硬質。	口縁部は折り返し、外面:直立。頸部と口縁部端は離れる。内外面:自然釉 外面:銀化。	堀覆土下層。常滑。
4105	不明 焼締陶器	径:[460mm]小片	砂粒・気泡・小石が多い。還元焼成。硬質。	器壁は厚く、下面は水平。上面の割れ口に疑口縁接合痕。内外面:自然釉。	堀覆土。常滑?
4106	鉢 ? 焼締陶器	器高:一口径:一底径:[160mm]小片	砂粒・気泡・小石が多い。還元焼成。硬質。	体部・底部の接合部は指押さえ。底部未調整。内面:自然釉。	堀覆土中下層。常滑。
4117	石 白 茶 白	直径:[200mm]厚さ:[121mm] $\frac{1}{2}$ 残	粗粒安山岩。	上白。中央に供給口、側面に挽き手穴がある。打込孔の周囲に刻文あり。	堀覆土上層。4141と対の可能性あり
4118	石 白	直径:[360mm]厚さ:80mm $\frac{1}{2}$ 残	砂岩。	下白。中央に芯棒受けあり。えぐるが大きい。	堀覆土。
4119	石 白	直径:[300mm]厚さ:88mm $\frac{1}{2}$ 残	砂岩。	上白。中央に芯棒受け、側面に挽き手穴がある。	堀覆土上層。
4120	石 白	破片	砂岩。	上白。	堀覆土上層。
4121	不明石製品	直径:175mm厚さ:80mm $\frac{1}{2}$ 残	軽石(二ツ岳)。	上面に黒色の生漆付着。中世骨蔵器の可能性あり。	堀覆土。
4134	石 白	直径:[300mm]厚さ:93mm $\frac{1}{2}$ 残	粗粒安山岩。	上白。側面に挽き手穴、中央に直径35mmの芯棒受けあり。	堀覆土。
4135	石 白	厚さ:80mm破片	砂岩。	下白。	堀覆土。
4136	石 白	直径:[310mm]厚さ:60mm $\frac{1}{2}$ 残	粗粒安山岩。	下白。中央に芯棒受け孔あり。	堀覆土。
4137	石 白	直径:[300mm]厚さ:(13mm) $\frac{1}{2}$ 残	粗粒安山岩。	上白。含みが著しく大きい。	堀覆土。

第6章 中世・近世の遺構と遺物

4138	石 茶 白	直径:(220mm)厚さ: 141mm $\frac{1}{2}$ 残	粗粒安山岩。	上白。上面が皿状。厚さが厚い。中央 に供給口。側面に打込孔がある。	堀覆土。
4139	石 白	直径:[360mm]厚さ: 135mm $\frac{1}{2}$ 残	砂岩。	上白。上面に直径65mmの供給口あり。 下面に円筒状の芯棒受けあり。含み が大きい。	堀覆土。
4140	石 白	直径:[280mm]厚さ: 80mm $\frac{1}{2}$ 残	粗粒安山岩。	上白。約30mmの間を置いて、幅4~7 mm粗い目があり。	堀覆土上層。
4141	石 茶 白	全体径:[360mm]厚 さ:[105mm] $\frac{1}{2}$ 残	粗粒安山岩。	下白。幅約5mmの同心円を持つ目が 二重にある。	堀覆土。
4150	砥 石 石製品	長さ:127mm 幅:31mm 厚さ:31mm端部欠	流紋岩。	四面とも擦痕があるが、上面は大き く擦り減っている。	堀覆土。
4151	砥 石 石製品	現存長:95mm幅:35mm 厚さ:20mm端部欠	流紋岩。	右側面と下面の一部に使用痕あり。 大きく擦り減っている。	堀覆土。
4152	砥 石 石製品	現存長:113mm幅:29 mm厚さ:26mm端部欠	流紋岩。	上面及び下面、左側面の一部に使用 痕あり。上面は大きく擦り減ってい る。	堀覆土。
4153	砥 石 石製品	長さ:103mm 幅:24mm 厚さ:32mm完形	流紋岩。	上面大きく擦り減っている。下面及 び側面に使用痕なし。	堀覆土。
4154	砥 石 石製品	長さ:103mm 幅:31mm 厚さ:37mm完形	流紋岩。	上面及び下面に使用痕あり。上面は 斜めに大きく擦り減っている。	堀覆土。
4155	砥 石 石製品	現存長:80mm幅:30mm 厚さ:27mm端部欠	流紋岩。	上面及び下面に使用痕。上面は大き く擦り減っている。	堀覆土。
4156	砥 石 石製品	現存長:66mm幅:28mm 厚さ:30mm端部欠	流紋岩。	上面及び下面に使用痕。下面は大き く擦り減っている。	堀覆土。
4157	砥 石 石製品	現存長:79mm幅:27mm 厚さ:33mm端部欠	流紋岩。	上面・右側面・下面に使用痕あり。上 面と下面は大きく擦り減っている。	堀覆土。
4158	砥 石 石製品	現存長:86mm幅:27mm 厚さ:30mm端部欠	流紋岩。	四面に使用痕あり。上面と下面は大 きく擦り減っている。	堀覆土。
4159	砥 石 石製品	現存長:86mm幅:31mm 厚さ:35mm端部欠	流紋岩。	使用痕上面のみ。上面上方は大きく 擦り減っている。	堀覆土。
4160	砥 石 石製品	現存長:100mm幅:37 mm厚さ:12mm端部欠	流紋岩。	使用痕は上面及び右側面。使用面は 大きく擦り減っている。	堀覆土。
4161	砥 石 石製品	現存長:79mm幅:24mm 厚さ:24mm端部欠	流紋岩。	四面に使用痕あり。下面は斜めに大 きく擦り減っている。	堀覆土。
4162	砥 石 石製品	現存長:83mm幅:24mm 厚さ:18mm両端部欠	流紋岩。	上面及び下面に使用痕あり。	堀覆土。
4163	砥 石 石製品	現存長:76mm幅:26mm 厚さ:24mm端部欠	流紋岩。	上面及び下面に使用痕あり。	堀覆土。

## (2) 館 跡

4164	砥石製品	現存長:76mm幅:23mm 厚さ:23mm端部欠	流紋岩。	上面及び左側面に使用痕があり、大きく擦り減っている。	堀覆土。
4165	砥石製品	現存長:71mm幅:20mm 厚さ:17mm端部欠	流紋岩。	上面及び下面に使用痕あり。大きく擦り減っている。	堀覆土。
4166	砥石製品	現存長:66mm幅:29mm 厚さ:17mm両端部欠	流紋岩。	上面及び下面に使用痕。	堀覆土。
4167	砥石製品	現存長:25mm幅:26mm 厚さ:12mm小破片	流紋岩。	上面及び下面に使用痕。上面は大きく擦り減っている。	堀覆土。
4169	砥石製品	現存長:86mm幅:27mm 厚さ:30mm端部欠	流紋岩。	上面のみ使用痕あり。	堀覆土。
4170	砥石製品	現存長:46mm幅:27mm 厚さ:22mm両端部欠	流紋岩。	上面のみ使用痕あり。	堀覆土。
4171	砥石製品	現存長:46mm幅:26mm 厚さ:20mm両端部欠	流紋岩。	上面及び下面に使用痕。上面大きく擦り減っている。	堀覆土。
4172	砥石製品	現存長:64mm幅:36mm 厚さ:24mm端部欠	流紋岩。	上面及び下面に使用痕あり。	堀覆土。
4173	砥石製品	現存長:67mm幅:31mm 厚さ:17mm端部欠	流紋岩。	上面のみ使用痕あり。	堀覆土。
4174	砥石製品	現存長:58mm幅:26mm 厚さ:31mm端部欠	流紋岩。	上面及び下面に使用痕あり。	堀覆土。
4175	砥石製品	現存長:101mm幅:23mm 厚さ:33mm端部欠	流紋岩。	四面に使用痕。上面は大きく擦り減る。右側面及び下面に深さ1~2mmの筋状の擦痕あり。	堀覆土。
4176	砥石製品	長さ:95mm幅:29mm厚さ:44mm完形	流紋岩。	上面及び下面に使用痕。右側面に深さ2mmの筋状の擦痕あり。	堀覆土。
4177	砥石製品	現存長:75mm幅:30mm 厚さ:27mm端部欠	流紋岩。	上面・左側面・下面に使用痕あり。下面は大きく擦り減っている。	堀覆土。
4178	砥石製品	全長:70mm幅:21mm厚さ:20mmほぼ完形	流紋岩。	上面・右側面・左側面に使用痕あり 上方やや右寄りに径7mmの孔あり。	堀覆土。
4179	砥石製品	現存長:115mm幅:100mm 厚さ:51mm約半分欠	砂岩。	上面及び右側面に使用痕あり。上面に数条の不規則な筋状の擦り痕あり 最大の溝は幅3.5mm、深さ4mm、目が非常に粗い。	堀覆土。
4180	砥石製品	両端部欠	流紋岩。	使用痕上面・下面。	堀覆土。
4181	砥石製品	端部欠	泥岩。	使用痕上面のみ。非常に細かい筋状の擦り痕がある。石質が極めて細かなため、上面の使用面はつるつるしている。	堀覆土。

第6章 中世・近世の遺構と遺物

4182	砥石製品	現存長:72mm幅:40mm 厚さ:13mm端部欠	泥岩。	使用痕上面のみで、大きく擦り減っている。目が粗い。	堀覆土。
4183	砥石製品	小破片下面剝離	泥岩。	上面及び右側面に使用痕あり。右側面に極めて細い筋状の擦り痕がある。石材が非常に細かく、使用面はつるつるしている。	堀覆土。
4184	砥石製品	現存長:81mm幅:45mm 厚さ:17mm端部欠	砂岩。	上面及び下面に使用痕。石材が比較的細かく使用面はすべすべしている	堀覆土。
4185	砥石製品	現存長:56mm幅:47mm 厚さ:? 両端部欠下面剝離	泥岩。	使用痕は上面のみ。石材が非常に細かく使用面はつるつるしている。	堀覆土。
4186	砥石製品	現存長:65mm幅:67mm 厚さ:13mm小破片	硬質泥岩。	使用痕は上面のみ。使用面はつるつるしている。なお、多数の細い筋状の擦り痕があるが、これは本砥石が破片になってから、欠け口を整えて二次的に使用したものと考えられる。	堀覆土。
4187	砥石製品	厚さ:13mm小破片	流紋岩。	中央が2mmほど低くなっている。	堀覆土。
4188	鉦	後述			
4189	煙管吸口 青銅	長さ:72mm最大径:10mm 完形		肩部は緩やかに吸い口に移り、肩端はやや狭い。長軸方向に接合。	堀覆土。
4190	煙管雁首 青銅	口径:15mm底径:6mm 火皿部残		口縁部周辺は厚く、首部接合面で割れる。首部は真下に付く。廃棄後外圧で歪み、壁一分破損。	堀覆土。
4191	煙管吸口 青銅	長さ:73mm最大径:11mm 完形		肩部は円筒状で、稜を持って急速に吸い口に移る。長軸方向に接合。竹製ラウの一部残存。	堀覆土。
4192	煙管雁首 青銅	長さ:46mm口径:15mm ほぼ完形		火皿部は大きく、首部は斜め底に付き、直線状。首部長軸方向に接合。	堀覆土。
4193	銭			「寛永通寶」	堀覆土。
4194	銭			「永樂通寶」	堀覆土。
4195	銭			「永樂通寶」	堀覆土。
4196	銭			「天藏通寶」	堀覆土。
4197	泥人形 瓦質土器	残存最大径:45mm下部: 残	気泡を含む。酸化焼成。軟質。	下面は平坦で有孔。外面型押し成形。内面は中空。外面に塗彩痕。大黒天像か。	堀覆土。
4198	不明 鉄製品	厚さ:4mm残存:?		薄く、有孔円盤状。	堀北東隅覆土。

4199	不明鉄製品	残存長:27mm幅:17mm 厚さ:1mm残存:?		薄く、刀子状で廃棄後歪む。	堀覆土。
4200	鎌鉄製品	残存長:53mm最大 幅:32mm茎部残		片端が5mmほど垂直に折れ曲がる。 下側の刃部の残存は良い。	堀覆土。
4202	鍋瓦質土器	器高:113mm口径:334 mm底径:232mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒・鉄分を含む。酸化中性焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は短く外反。浅い平底。土型輪積成形。体部の外面は無調整。口縁部は内外面とも軽いなで調整。	堀覆土集石。
4203	火鉢瓦質土器	器高:92mm口径:[360 mm]底径:[290mm] $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は大きく外傾し、口唇部はやや肥厚。浅く平底で厚い。内面に緩い稜あり。輪積土型成形。外面上端及び内面:軽いなで調整。	堀覆土。
4204	鍋瓦質土器	器高:88mm口径:[290 mm]底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は肥厚。口唇部は水平。耳部は中形。輪積土型成形。体部外面:無調整。内面:軽いなで調整。	堀覆土。
4205	盤瓦質土器	器高:54mm口径:(356 mm)底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。還元中性焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部と体部は分かれず。浅い平底。耳部は大きく3個以上。土型輪積成形外面上端及び内面:回転なで調整。	堀覆土。
4206	盤瓦質土器	器高:63mm口径:400 mm底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。還元中性焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部と体部は分かれず、やや深い平底。耳部は中形。体部は底部より張り出す。土型成形。輪積土型成形。内外面:軽いなで調整。	堀覆土。
4207	盤瓦質土器	器高:49mm口径:[350 mm]底径:[330mm] $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。還元焼成。やや硬質。外面は二次焼成。	口縁部と体部は分かれず、浅い平底。輪積土型成形。外面の上端及び内面:回転なで調整。	堀覆土集石。3893に似る。
4208	皿土師質土器	器高:21mm口径:[104 mm]底径:[54mm]破片	砂粒・小石を含む。酸化焼成は良好。軟質。鈍い橙。	底部は厚い。内外面共に回転台によるなで。底部は回転糸切り。	堀覆土。
4209	皿土師質土器	器高:24mm口径:[111 mm]底径:[54mm] $\frac{1}{2}$ 残	砂粒・小石を含む。酸化焼成は良好。軟質。外面:鈍い橙。内面:橙。	内外面共に回転台によるなで。底部は回転糸切り。	堀覆土。
4210	皿土師質土器	器高:26mm口径:[116 mm]底径:[60mm]破片	砂粒・小石を含む。酸化焼成は良好。橙。	内外面共に回転台によるなで。底部は回転糸切り。	堀覆土。
4211	小皿瓦質土器	器高:19mm口径:[76 mm]底径:[56mm] $\frac{1}{2}$ 残	砂粒・小石を含む。還元焼成は良好。黒。	内外面共に回転台によるなで。底部は回転糸切り。	堀覆土。
4212	砥石製品	長さ:161mm幅:23mm 厚さ:22mm完形	流紋岩。	上面・左側面・下面の上半分に使用痕あり。上面及び左側面は大きく擦り減っている。	堀覆土。
4213	砥石製品	長さ:104mm幅:30mm 厚さ:27mm完形	流紋岩。	上面及び下面に使用痕あり。又、上方端部に溝状の使用痕がある。なお、下面は大きく擦り減っている。	堀覆土。

第6章 中世・近世の遺構と遺物

4214	砥石製品	現存長:132mm幅:36mm厚さ:25mm端部欠	流紋岩。	四面を使用しており、すべて大きく擦り減っている。	
4215	砥石製品	現存長:83mm幅:26mm厚さ:25mm端部欠	流紋岩。	上面及び下面に使用痕あり。	堀覆土。
4216	砥石製品	現存長:85mm幅:26mm厚さ:23mm端部欠	流紋岩。	上面・下面・右側面の一部に使用痕あり。上面と下面は大きく擦り減っている。	堀覆土。
4217	砥石製品	現存長:110mm幅:38mm厚さ:25mm端部欠	流紋岩。	上面・右側面・左側面に使用痕あり。	堀覆土。
4218	砥石製品	現存長:85mm幅:29mm厚さ:42mm端部欠	流紋岩。	上面及び下面に使用痕あり。本砥石は、他と異なり幅の狭い面(他の砥石で側面)を使用している。	堀覆土。
4219	砥石製品	現存長:77mm幅:37mm厚さ:37mm端部欠	流紋岩。	使用痕上面のみ。	堀覆土。
4220	砥石製品	現存長:77mm幅:27mm厚さ:33mm端部欠	流紋岩。	上面及び下面に使用痕あり。本砥石は、幅の狭い面を使用している。	堀覆土。
4221	砥石製品	現存長:57mm幅:27mm厚さ:39mm端部欠	流紋岩。	上面及び下面に使用痕あり。本砥石は、幅の狭い面を使用している。	堀覆土。
4222	砥石製品	現存長:82mm幅:31mm厚さ:23mm端部欠	流紋岩。	四面及び上方端部に使用痕あり。	堀覆土。
4223	砥石製品	全長:120mm幅:30mm厚さ:20mmほぼ完形	流紋岩。	上面及び下面に使用痕あり。余り擦り減っていない。	堀覆土。
4225	砥石製品	現存長:65mm幅:29mm厚さ:22mm端部欠	流紋岩。	上面及び下面に使用痕あり。上面は大きく擦り減っている。	堀覆土。
4226	砥石製品	現存長:73mm幅:28mm厚さ:26mm両端欠	流紋岩。	使用痕は上面のみ。	堀覆土。
4228	砥石製品	現存長:50mm幅:27mm厚さ:28mm端部欠	流紋岩。	四面に使用痕あり。	堀覆土。
4229	砥石製品	現存長:42mm幅:24mm厚さ:9mm端部欠	流紋岩。	四面に使用痕あり。上面は大きく擦り減っている。	堀覆土。
4230	銭			「永樂通寶」	堀覆土。
4231	銭			「皇宋通寶」	堀覆土。
4232	銭			「寛永通寶」	堀覆土。
4107	五輪塔火輪	長径:(220mm)短径:(203mm)高さ:113mm重量:2,570g $\frac{1}{2}$ 欠	榛名ニツ岳軽石。	整形やや良。一部磨き。上面に径102mm、深さ49mmの摺鉢状の凹あり。下面はほぼ平坦。	

4108	五輪塔 水輪?	長径:276mm短径:200mm 高さ:101mm重量: 2,970g完形	榛名ニツ岳軽石。	整形粗雑。上面は、ほぼ平坦。下面に 径75mm、深さ22mmの摺鉢状の凹あり。	
4109	五輪塔 火輪?	長径:(152mm)短径: (134mm)高さ:84mm重 量:870g $\frac{1}{2}$ 欠	榛名ニツ岳軽石。	整形やや良。上面に径90mm、深さ55mm の摺鉢状の凹あり。上下面の凹は貫 通。下面が、ほぼ平坦。	
4110	不 明	長径:155mm短径:112 mm 高さ:75mm 重量 489.8g完形	榛名ニツ岳軽石。	表面の一部を磨く。下面に径が46mm、 深21mm・径が31mm、深13mmの摺鉢状の 凹2穴あり。	
4111	五輪塔 水輪?	長径:(118mm)短径: (77mm)高さ:57mm重 量:324.8g $\frac{1}{2}$ 欠	榛名ニツ岳軽石。	整形やや良。上面に径60mm、深19mmの 摺鉢状の凹あり。下面に径70mmの摺 鉢状の凹あり。割れ口が平坦、転用の 可能性あり。	
4112	五輪塔 水輪?	長径:(98mm)短径: (97mm)高さ:55mm重 量:417.4g一部欠	榛名ニツ岳軽石。	整形やや良。平鑿の加工痕あり。上面 に径が65mm、深17mmの摺鉢状の凹あ り。下面に径65mm、深19mmの摺鉢状の 凹あり。	
4113	五輪塔 地輪?	長径:(263mm)短径: (197mm)高さ:157mm 重量:6,150g一部欠	榛名ニツ岳軽石。	整形やや良。側面部に平鑿の加工痕 あり。上下面に径10mm~14mmの皿状 の凹あり。	
4114	五輪塔 火輪?	長径:(156mm)短径: (90mm)高さ:87mm重 量:620g $\frac{1}{2}$ 欠	榛名ニツ岳軽石。	整形粗雑。各部に平鑿の加工痕あり。 上面に径80mm、深30mm、下面に径150 mm、深46mmの凹あり。	
4115	五輪塔 水輪	長径:(232mm)短径: (229mm)高さ:142mm 重量:3,700g $\frac{1}{2}$ 欠	榛名ニツ岳軽石。	整形やや良。一部に平鑿の加工痕・磨 きあり。上面はほぼ平坦。下面に径84 mm、深38mmの摺鉢状の凹あり。	
4116	五輪塔 空風輪	長径:208mm短径:118 mm高さ:208mm重量: 1,450g一部欠	榛名ニツ岳軽石。	整形粗雑。各部に平鑿の加工痕あり。 風輪部下の突起欠損。	
4122	五輪塔 空風輪	長径:227mm短径:152 mm高さ:277mm重量: 3,010g略完形	榛名ニツ岳軽石。	整形は良好。全面磨き。空風輪との境 の縁部に鑿の刺突痕あり。推定工具 巾約20mm。	
4123	五輪塔 空風輪	長径:287mm短径:155 mm高さ:287mm重量: 3,340g完形	榛名ニツ岳軽石。	整形は良好。全面磨き。空風輪との境 の縁部に鑿の刺突痕あり。推定工具 巾約20mm。	
4124	五輪塔 水輪	長径:201mm短径:172 mm高さ:83mm重量:1, 840g完形	榛名ニツ岳軽石。	整形やや良。各部に鑿の加工痕あり。 上面に径88mm、深30mm、下面に径97 mm、深20mmの摺鉢状の凹あり。	
4125	不 明	長径:(198mm)短径: (163mm)高さ:84mm重 量:1,500g完形	榛名ニツ岳軽石。	各部に平鑿の加工痕あり。上面に径 93mm、深24mmの摺鉢状の凹あり。	

第6章 中世・近世の遺構と遺物

4126	五輪塔 水輪?	長径:234mm 短径: (127mm)高さ:96mm重 量:2,200g ½欠	榛名二ツ岳軽石。	整形粗雑。各部に平鑿の加工痕を残す。	
4127	五輪塔 火輪?	長径:203mm 短径: (190mm)高さ:74mm重 量:1,300g ½欠	榛名二ツ岳軽石。	整形は良。側面は平坦、下面も平坦。上面に径100mm、深30mmの擂鉢状の凹、下面に径110mm、深40mmの擂鉢状の凹。両凹は貫通。	
4128	五輪塔 水輪	長径:256mm短径:221 mm高さ:110mm重量: 5,000g 完形	粗粒安山岩。	整形やや良。一部磨き。下面に径が77mm、深22mmの凹あり。上面は平坦。	
4129	五輪塔 地輪	長径:(338mm)短径: (291mm)高さ:168mm 重量:10,500g 一部 欠	榛名二ツ岳軽石。	整形やや良。各部に平鑿の加工痕あり。上面に径が161mm、深75mmの擂鉢状の凹あり。下面に径90mm、深39mmの擂鉢状の凹あり。	
4130	不明	長径:163mm短径:138 mm高さ:70mm重量: 920g 完形	榛名二ツ岳軽石。	整形粗雑。一部に平鑿の加工痕あり。上面に径90mm、深45mmの擂鉢状の凹あり。下面に径60mm、深20mmの擂鉢状の凹あり。両凹は貫通。	
4131	不明	長径:154mm短径:104 mm高さ:105mm重量: 930g 完形	榛名二ツ岳軽石。	整形粗雑。下面に径が52mm、深25mmの擂鉢状の凹あり。	
4132	不明	長径:166mm短径:115 mm高さ:85mm重量: 850g 完形	榛名二ツ岳軽石。	整形粗雑。下面に径71mm、深29mmの擂鉢状の凹あり。	
4133	不明	長径:99mm 短径:168 mm高さ:75mm重量: 780g 完形	榛名二ツ岳軽石。	整形粗雑。下面に径69mm、深14mmの擂鉢状の凹あり。	
4142	板碑基礎	後述			
4143	五輪塔 火輪	長径:(160mm)短径: (107mm)高さ:87mm重 量:650g ½欠	榛名二ツ岳軽石。	整形やや良。各部に平鑿の加工痕を残す。下面は平坦。上面に径80mm、深70mmの擂鉢状の凹あり。	
4144	不明	長径:80mm 短径:(68 mm)高さ:45mm重量: 100.3g ½欠	榛名二ツ岳軽石。	整形粗雑。一部に平鑿の加工痕を残す。上面に径50mm、深17mm、下面に径50mm、深18mmの擂鉢状の凹あり。	
4145	不明	長径:127mm 短径:90 mm高さ:76mm重量: 570g 完形	榛名二ツ岳軽石。	整形粗雑。下面に径80mm、深20mmの擂鉢状の凹あり。	
4146	五輪塔 水輪	長径:(158mm)短径: (84mm)高さ:92mm重 量:610g ¾欠	榛名二ツ岳軽石。	整形やや良。一部磨き。上面に径約100mm、深43mmの擂鉢状の凹あり。	



## (2) 館 跡

4147	不 明	長径:105mm 短径:84mm 高さ:46mm 重量: 200.2g 完形	榛名ニツ岳軽石。	整形粗雑。下面に径50mm、深24mmの擂鉢状の凹あり。	
4148	五輪塔 水輪	長径:100mm 短径:99mm 高さ:81mm 重量: 650g 完形	粗粒安山岩。	整形やや良。下面に径64mm、深24mmの擂鉢状の凹あり。上面に皿状の凹あり。	
4149	不 明	長径:48mm 短径:465mm 高さ:27mm 重量: 402g 完形	榛名ニツ岳軽石。	整形粗雑。下面に径25mm、深80mmの凹あり。	

4188 鉦鼓（伏鉦）

《観察》鉦鼓（伏鉦）は、C区第1号館跡を構成する東側堀の南東隅部に寄った地点で、付図3（D-D'）の8層中から単体で出土している。又、鉦鼓（伏鉦）の直下からは、第663図3901～664図3914の土師質土器皿が一括で、土層断面D-D'9層土内から出土している（写真図版100）。両層共に地山土ブロックは認められず、人為層を即断させる状況はないが、共に旧表土（当時の主たる文化層）の堆積である点では、寧ろ、自然堆積を想起させる。しかし、結論的には言及しかねる。

出土状態は、正位に近い状態であるが、溝底面側に向いや傾斜した状態で出土している。この傾斜状態は覆土の堆積状態をそのまま示すのではなく、“覆土の沈下”に伴う可能性が大きい。そして、投棄後の状態であるのか、置かれた状態であるのかは言及しかねるが、下位から出した土師質土器及び本品性格から勘案すれば、後者での状況を示唆するものと思われる。

本品は、吊手を有し足も具備する点が最大の特徴である。全体的な型態では“鉦”であるが、吊手を用い懸けた場合には“鉦鼓”であって、足を用い置いた場合には“伏鉦”である。すなわち、本品は“鉦鼓”と“伏鉦”とに使い分けができるものである。

平面形状は真円を呈し、断面は“コ”の字状を呈する。各部位の計測値は次のとおりである。

裾部径11.35cm・上面径9.75cm・鐘座部径5.80cm・高さ4.98cm・厚さ0.32～0.37cmを計る。重量は、525gを計量する。下端には、正長さ1.3cmを計る。上面は鐘座区・内区と外区を示す界線・銘区からなり、胴部には2ヶ所に1対の吊手を備え、裾部内面には三ヶ所に足を備えている。三本の足部は正三角形の頂点位置にあたる様に配されている。全体に遺存は良好であるが、銘文・紀年銘等は認められない。

出土状況

鉦鼓は、C区1号館跡を構成する東側堀に寄った地点で、出土標高値から算出すると土層断面付図3（D-D'）の8層土内に対比し得る部分から単体出土している。又、鉦鼓の直下からは、第663図3901～664図3914の土師質土器皿が一括で出土しており、（写真図版100）、その標高値から土層断面D-D'の9層に対される。この8・9層の土質は、両層共に地山土ブロックは認められず人為層を即断させる状況はないが、共に旧表土（当時の主たる文化層）の堆積である点では、むしろ、自然堆積を想起させる。しかし、結論的には判然としない。

出土状態は、正位に近い状態であるが、溝底面側に向いや傾斜した状態で出土している。この傾斜状態は溝覆土の堆積状態上での状態でもあると思われるが、廃棄後の状態であるか、置かれた状態であるのかは、言及し難いが、下位から出土した土師質土器皿及び本品の元来用途を勘案すれば、後者の状況を示唆するものと考えられる。（木津博明 当事業団主任調査研究員）

## 寺前地区1号館跡〔寺前館〕(第701~708図、第202表、図版129~131)

本館跡は、全体の2分の1弱が調査区内に存在しており、寺前地区5号古墳・6号古墳・116号土坑・117号土坑と重複する。重複遺構との新旧関係では、5号古墳及び6号古墳よりは新しい。しかし、116号土坑・117号土坑との関係は不明であるものの、覆土が比較的似ていることから、本館跡が機能していたときに掘られたものである可能性もある。なお、1号館跡の堀の内側に存在する5号古墳は、直径約10m、高さ約1mの規模を持っているが、この古墳は、横穴式石室の根石付近まで殆ど攪乱された後に、再び同じ位置に積み上げられたものであることが調査で明らかになった。5号古墳の墳丘が、一度大きく攪乱されているとはいえ、同じ位置に発掘調査時点まで存在していたことから、5号古墳墳丘は、本館跡に関わる何らかの施設の土台等に利用されていたものと思われる。

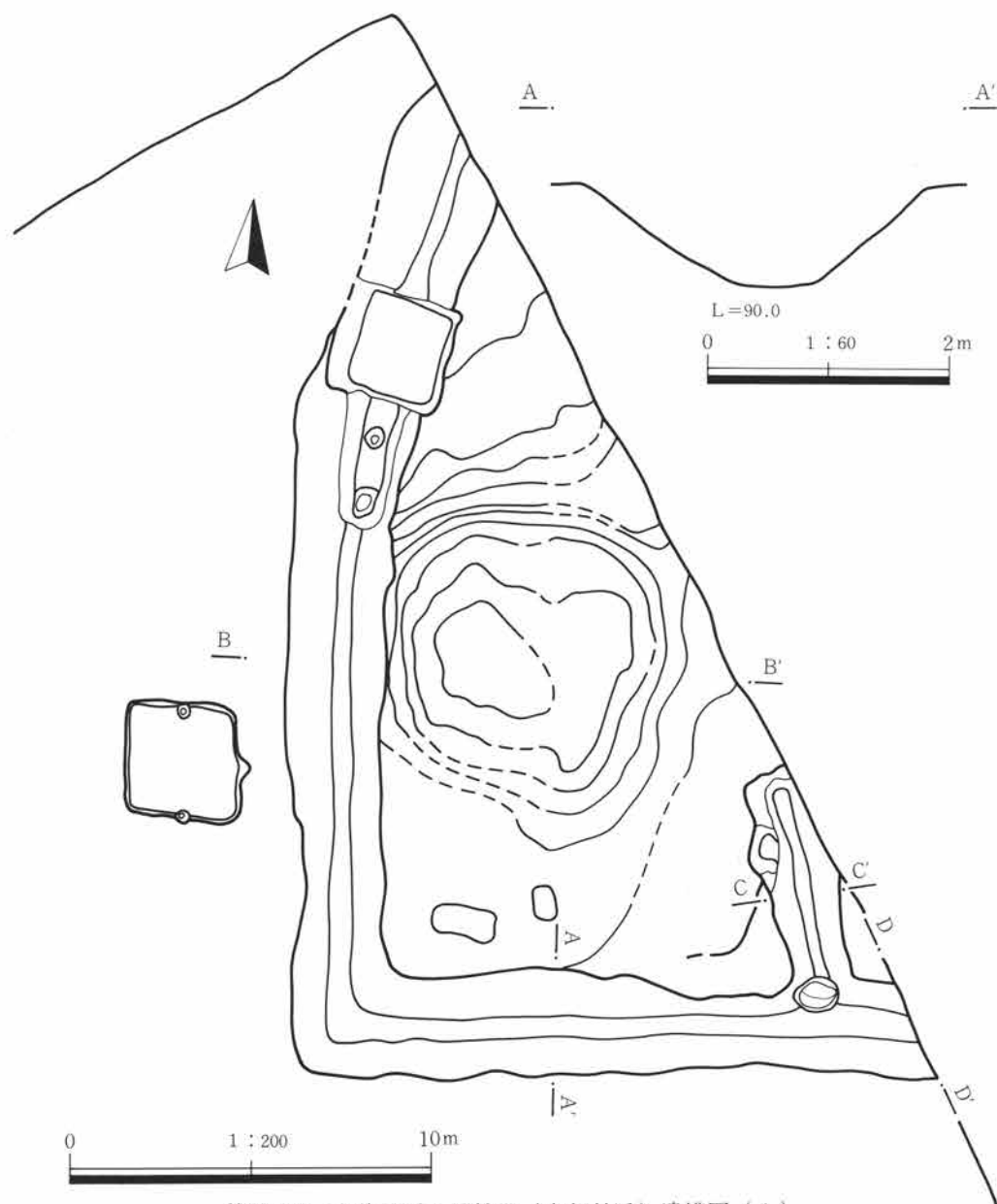
本館跡の堀は、幅約2.8mで、直角に曲がるコーナーを持つ。主軸は、N-4°-Wである。しかし、南西コーナー部から東側及び北側の約17mまでは、堀が直線的に掘られているものの、それより北側の西堀は内側にややカーブしている。また、南堀の南西コーナーより11.3m東側には、南堀に連続し、内側に延びる約6mの堀がある。この堀は、他の部分より狭く、幅1.5~2mである。この南堀の途中から北へ延びる堀の入口には、底面をやや掘り凹め、約1m×50cmのやや大きな石が置かれていた。堀は逆台形に掘られている。堀の深さは、西堀及び南堀の西寄りでは約90cmであるが、南堀の東寄りと南堀の途中から北に出ている堀は、約40~60cmとやや浅くなっている。

西堀が内側へややカーブを始める付近には、約3m×3mの方形の遺構があり、その南側に接して幅1.5m、長さ3.5mで、周囲の堀の底面より約60cmほど深くなった部分がある。この深くなった部分の底面には、2ヶ所にピットがあり、更に約70cmほど深くなっている。また、西堀の約1.5m西側には、約3m×3mと西堀内に存在する方形遺構と同規模の方形遺構がある。このうちの西堀内に存在する方形遺構は、深さ1.5mである。底面は平坦でやや傾斜を持って掘り込まれているが、下方では垂直に近い掘り方となっている。なお、西堀に存在する方形遺構の土層断面図には、この方形遺構を切って堀の断面が現れている。この断面に現れた堀は、西堀に連続するものと考えられる。すなわち、方形遺構よりも後に堀が造られたということになる。しかし、方形遺構の覆土下半には、ローム及びロームブロックが多く含まれており、このローム及びロームブロックを多く含む層は、一般的に堀の下半から底面近くに見られる。一方、方形遺構の断面に現れた堀は、第703図第4層の堀最下層に於いても、ローム粒は含むものの量は少なく、ロームブロックは含まない。方形遺構が一辺約3mの規模であり、堀の埋没の過程において、仮に方形遺構内の堀が館跡の構築当時のものであれば、ロームブロックが少なからず方形遺構内の堀に入り込む可能性は当然考えて良いように思われる。ここでは、方形遺構内の堀は、方形遺構埋没後に新たに掘られたものと考えておきたい。

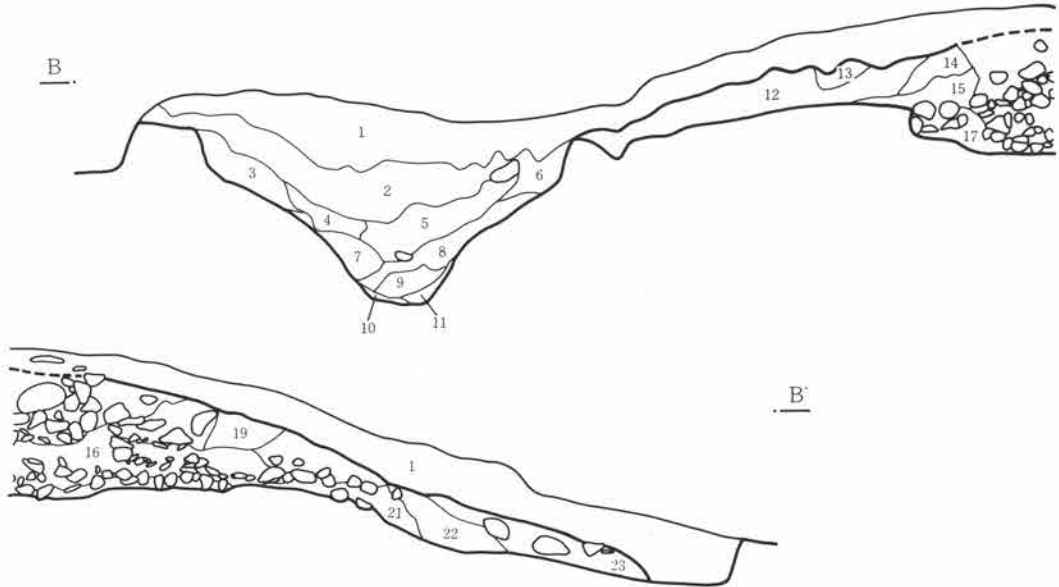
西堀の西側1.5mには、西堀内に存在する方形遺構と同規模の方形遺構がある。ただし、深さは30cm前後で、西堀内に存在する方形遺構の4.5分の1の深さである。底面は平坦である。主軸はN-

4°-Wで館跡の堀と併行する。本方形遺構の北側と南側の壁付近中央に、直径30cm前後、深さ約45cmのピットがある。又、東壁中央には、約25cmの壁の張り出しがある。以上、2つの方形遺構は、本館跡を構成する一施設と考えられる。

堀に囲まれた内側からは、掘立柱は全く確認できなかった。本来存在しなかったものか、あるいはローム層にまでは達しない浅い掘立柱が存在したかは明らかではない。出土遺物としては、内耳土器片・カワラケ・陶器片・石臼・五輪塔・古銭がある。いずれも堀の覆土中よりの出土である。本館跡の時期は、出土遺物から中世と考えられる。(飯塚)



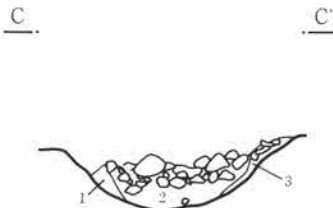
第701図 寺前地区1号館跡(内郭付近)遺構図(1)



寺前地区1号館跡土層説明 (B-B')

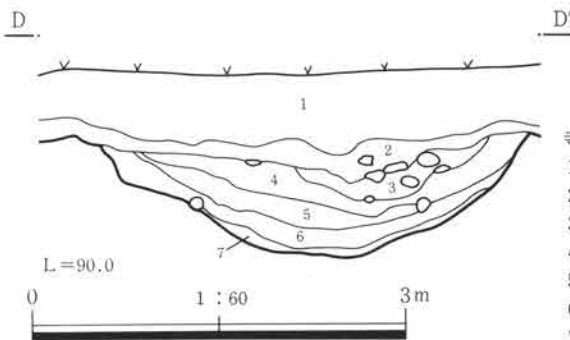
- 1 暗褐色土 A軽石を含む。  
 2 褐色土 小石を含み、柔らかい。  
 3 褐色土 ローム小ブロックを少量含む。  
 4 褐色土 ローム粒・小石を僅かに含む。  
 5 褐色土 ローム及び暗褐色土の小ブロックを含む。

- 6 褐色土 ローム粒を多く含む。  
 7 褐色土 ローム小ブロック・暗褐色土小ブロックを多く含む。  
 8 褐色土 小石・ローム小ブロックを含む。  
 9 暗褐色土 柔らかい。  
 10 褐色土 白っぽいロームブロックを含む。  
 11 褐色土 ローム粒を含む。  
 12 褐色土 ロームの小ブロックを含む。  
 13 褐色土 大ロームブロックを含む。  
 14 褐色土 暗褐色土ブロック混入。  
 15 ローム・暗褐色土の混合層 残存盛土。  
 16 黄褐色土と砂利の混合層  
 17 暗褐色土 ローム粒混合。  
 18 黄褐色土 小石を多く含み、柔らかい。  
 19 黄褐色土 A軽石を含み、柔らかい。  
 20 小石・砂利・黄褐色土の混合層  
 21 黒褐色土 柔らかい。  
 22 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む。  
 23 褐色土 石を多く含む。



寺前地区1号館跡土層説明 (C-C')

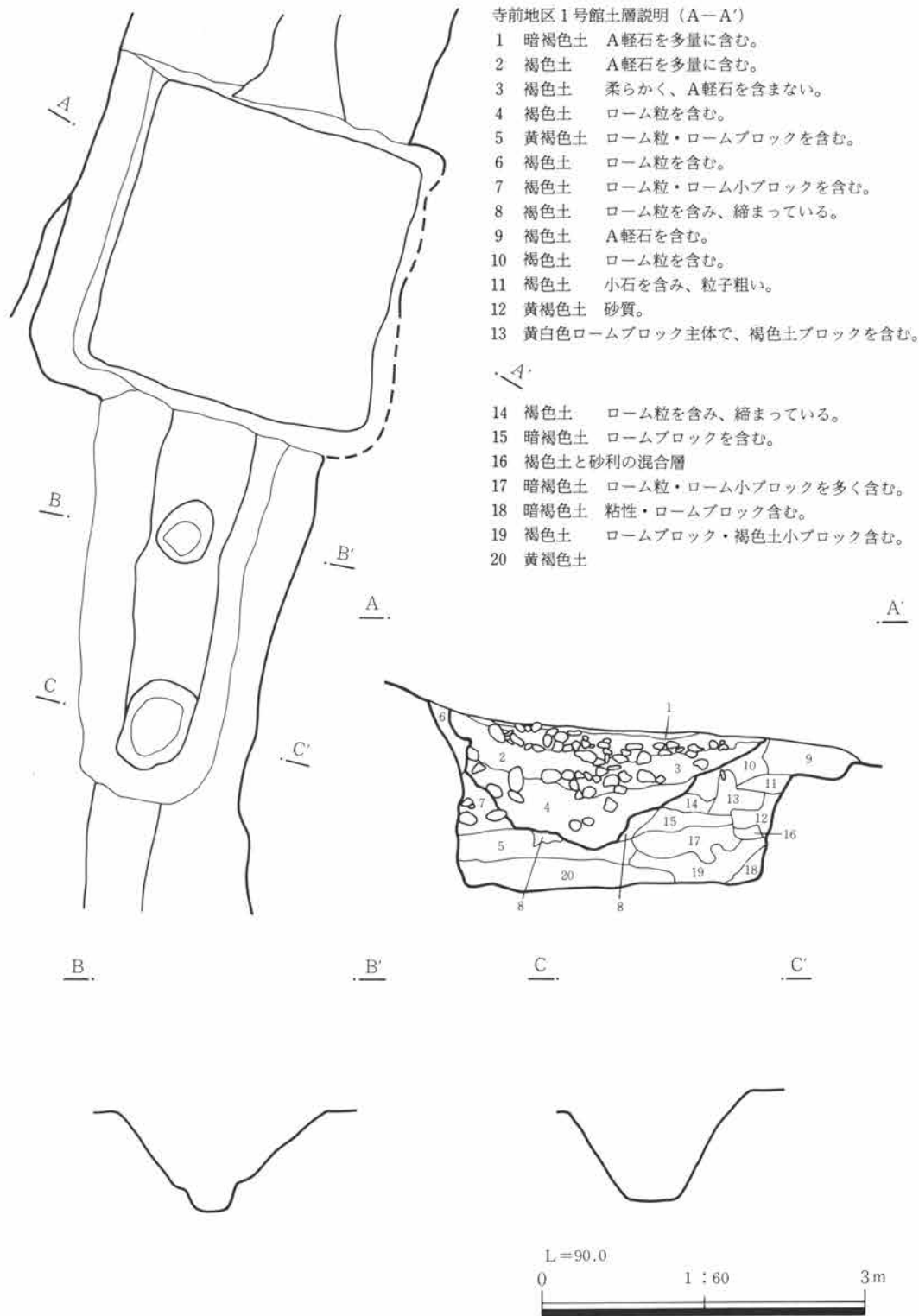
- 1 黄褐色土 粘性。  
 2 褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む。  
 3 黄褐色土 ローム小ブロックを多く含む。



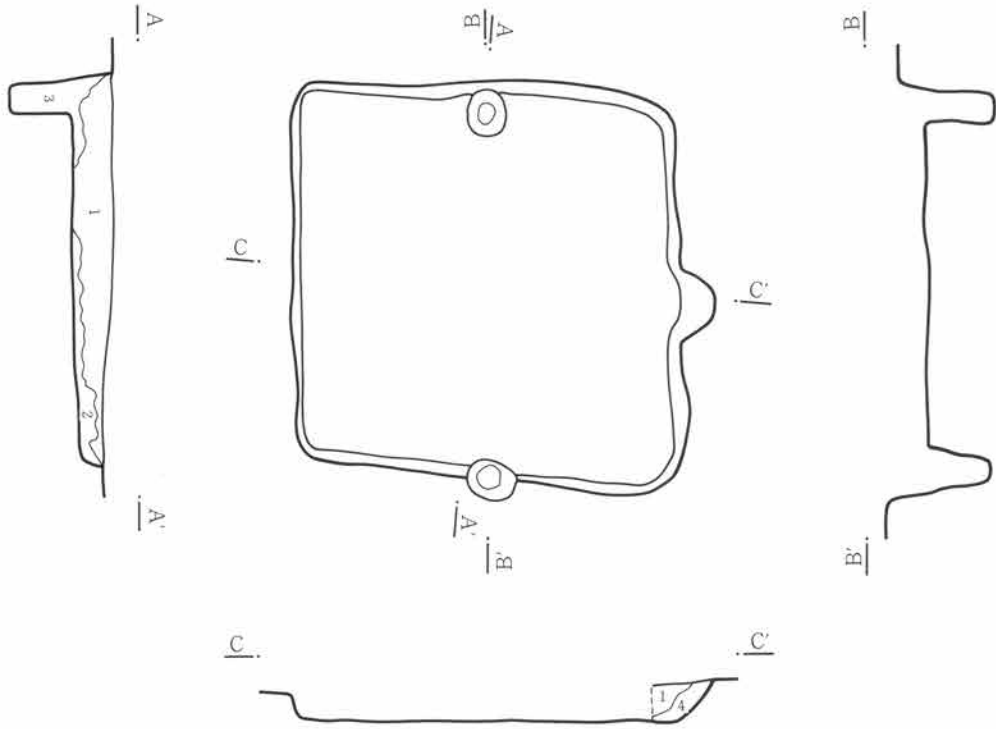
寺前地区1号館跡土層説明 (D-D')

- 1 耕作土 A軽石を含む。  
 2 A軽石層  
 3 褐色土 ローム粒・小石を含む。  
 4 黒褐色土 ローム粒を含む。  
 5 黒褐色土 ローム粒・小石を全体的に含む。  
 6 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒を含む。  
 7 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む。

第702図 寺前地区1号館跡(内郭付近)遺構図(2)



第703図 寺前地区1号館跡(内郭付近)遺構図(3)

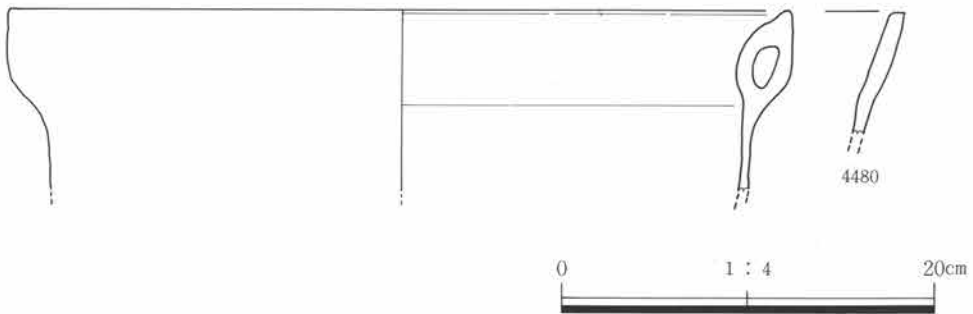


寺前地区1号館跡土層説明 (A-A'・C-C')

- 1 暗褐色土砂質土 B軽石を多く含む。
- 2 暗褐色土砂質土 B軽石・ローム小ブロックをやや多く含む。
- 3 暗褐色土砂質土 B軽石を多く含む。ローム粒・褐色粘質土ブロックを少量含む。
- 4 褐色粘質土 ローム粒を含む。B軽石含まず。

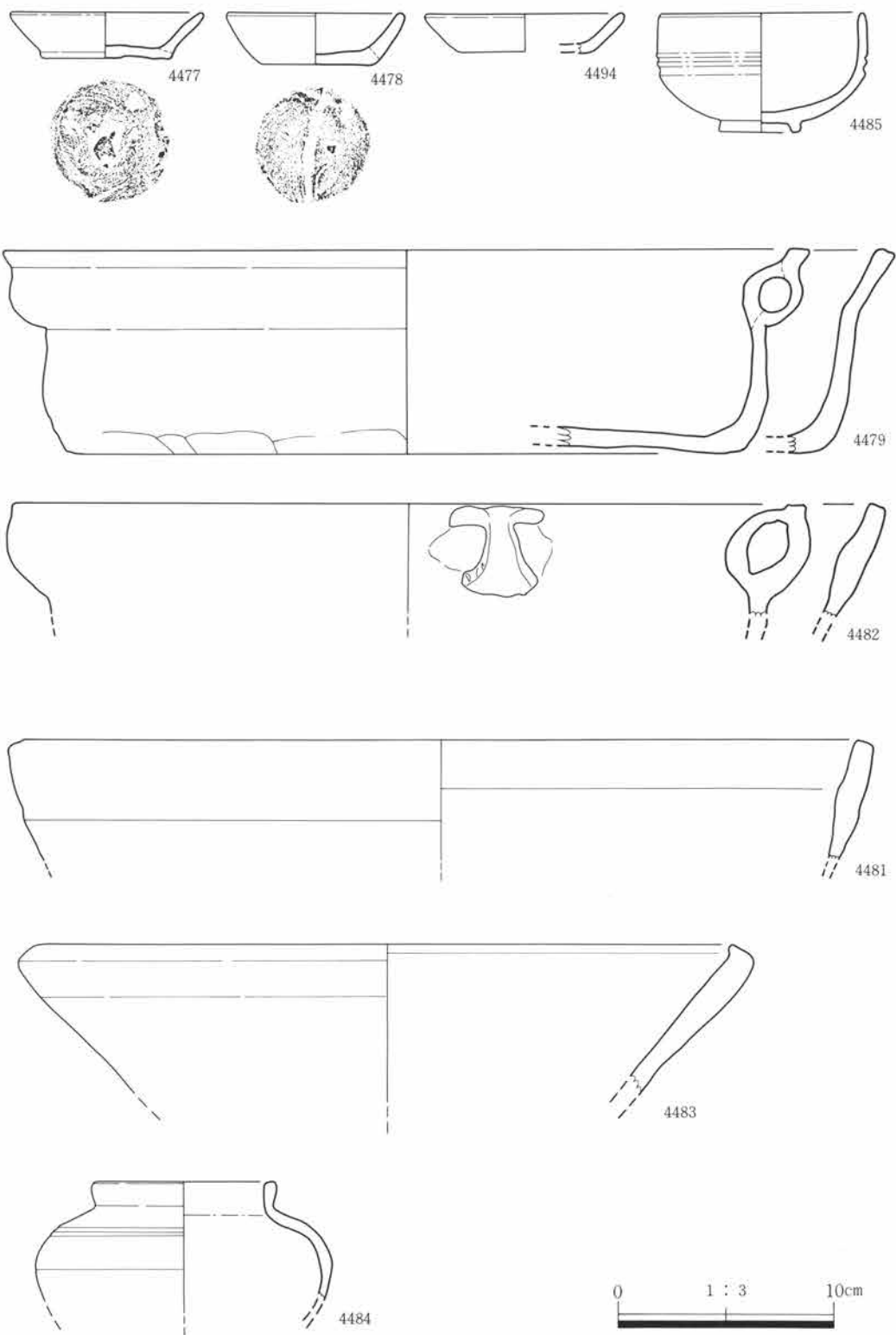


第704図 寺前地区1号館跡(内郭堀)遺構図(4)



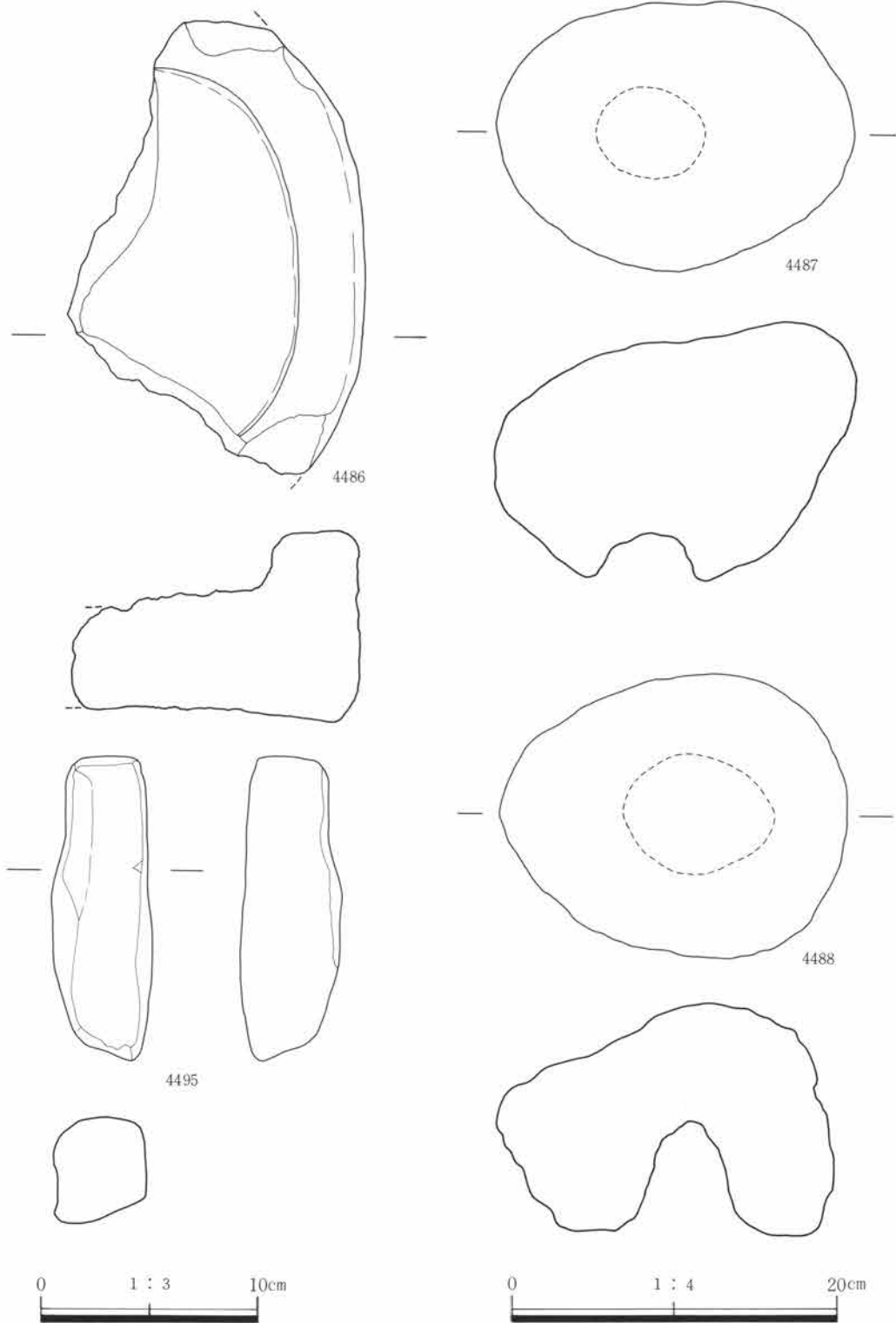
第705図 寺前地区1号館跡(内郭堀)遺物図(1)

第6章 中世・近世の遺構と遺物

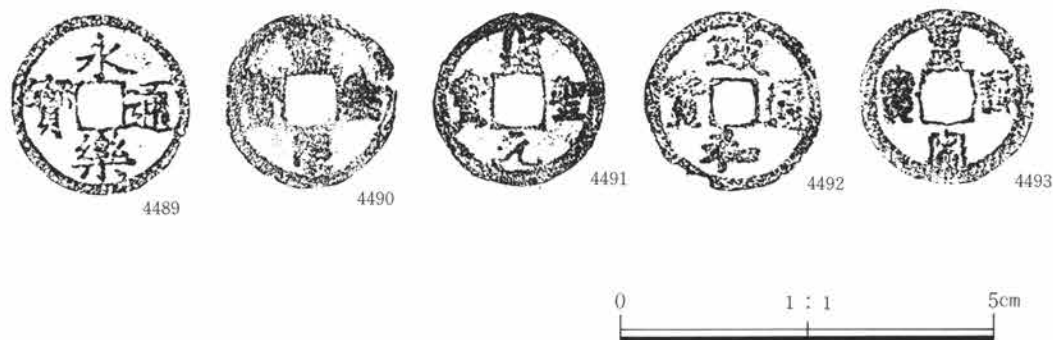


第706図 寺前地区1号館跡（内郭堀）遺物図（2）





第707図 寺前地区1号館跡（内郭堀）遺物図（3）



第708図 寺前地区1号館跡（内郭堀）遺物図（4）

第202表 寺前地区1号館跡（内郭堀）遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
4477	小皿 土師質土器	器高:21mm口径:88mm 底径:58mm $\frac{1}{2}$ 残	小砂粒を僅かに含む。酸化。やや硬質。浅黄。橙。	口縁部はやや外反気味に立ち上がる。底部は回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	堀覆土。
4478	小皿 瓦質陶器	器高:23mm口径:82mm 底径:50mmほぼ完形	小砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。内外面煤付着。	口縁部やや内湾気味に立ち上がる。底部は回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	堀覆土。内面中央に油煙付着。
4479	鍋 瓦質土器	器高:93mm口径:[370mm] 底径:[310mm]遺存:?	砂粒を多く含む。酸化中性焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は外反。口唇部は水平。耳部は小さく内面に稜あり。浅い平底。土型成形。外面:下端、削り。口縁部の内外面:軽いなで調整。	堀覆土。3883に似る。
4480	鍋 瓦質土器	器高:一口径:[412mm] 底径:一最大径[418mm]口縁部小片	砂粒で鉄分を多く含む。酸化焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は大きく外傾。内面に稜あり。耳部は中形。輪積成形。内外面:軽いこぼめ調整。	堀覆土。
4481	盤 瓦質土器	器高:(50mm)口径:[384mm] 底径:一口縁部小片	砂粒を含む。還元中性焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部と体部は分かれず、内外面に緩い稜あり。輪積成形。内外面:上端、軽いこぼめ調整。外面:下端、無調整。	堀覆土。
4482	盤 瓦質土器	器高:一口径:[366mm] 底径:一最大径[186mm]口縁部小片	微砂粒を含む。酸化焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部と体部は分かれず、耳部は中形で3個以上。輪積成形。上端はなで調整。	堀覆土。
4483	捏鉢 瓦質土器	器高:一口径:一底径:一口縁部小片	小石・気泡を含む。還元焼成。硬質。	口唇部は外傾。内面:稜あり。輪積成形。外面:無調整。内面:磨耗。	堀覆土。
4484	壺 陶器灰釉	器高:一口径:[80mm] 底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。酸化焼成。硬質。	口縁部は短く直立。肩部は大きく張る。肩部に沈線3条。口縁部の内面及び外面は灰釉施釉。内面:全体に鉄分沈着。	堀覆土。瀬戸美濃系。内容物は鉄分か。

## (3) 囲溝掘立群

4485	椀 陶器掛分	器高:54mm口径:[90mm]底径:38mm%残	微気泡を含む。還元焼成。軟質。	口縁部は直立。体部は半球形。高台小形。外面の中央に沈線3条。外面の上端及び内面に灰釉。外面の下端は鉄釉を掛け分け。貫入あり。	堀覆土。瀬戸美濃系。
4486	石 白	厚さ:88mm破片		上白。含みが小さい。	堀覆土。
4489	銭			「永樂通寶」	堀覆土。
4490	銭			「熙寧元寶」	堀覆土。
4491	銭			「紹聖元寶」	堀覆土。
4492	銭			「政和通寶」	堀覆土。
4493	銭			「皇宋通寶」	堀覆土。
4494	杯 瓦質土器	器高:[17mm]口径:[90mm]破片	砂粒を含む。酸化。焼成良好。軟質。	内外面共に回転台によるなで。底部は回転糸切り。	堀覆土。
4495	砥 石	長さ:137mm幅:40mm 厚さ:40mm完形	流紋岩。	上下2面に擦痕があり、上面はかなりすり減っている。両側面は使用痕なし。	堀覆土。
20溝 4487	五輪塔 水輪?	長径:221mm短径:163mm 高さ:158mm重量:2,450g完形	榛名ニツ岳軽石	整形粗雑。下面に径68mm、深29mmの凹あり。	
4488	五輪塔 水輪?	長径:213mm短径:173mm 高さ:141mm重量:2,600g完形	榛名ニツ岳軽石	整形粗雑。下面はほぼ平坦で径93mm深69mmの楕円状の凹あり。	

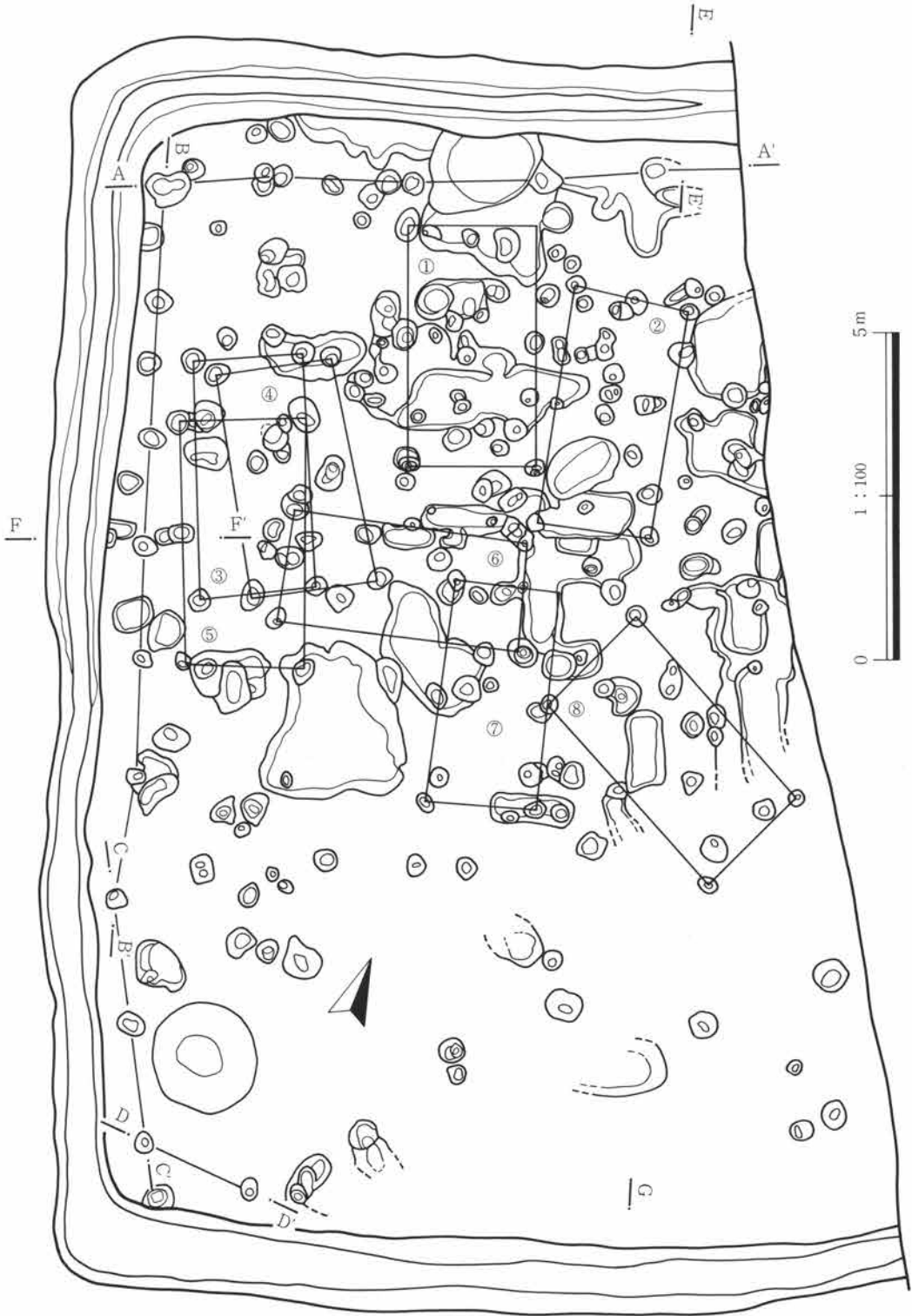
## (3) 囲溝掘立群

## I 地区C区囲溝掘立群 (第709~713図、第203表、図版128)

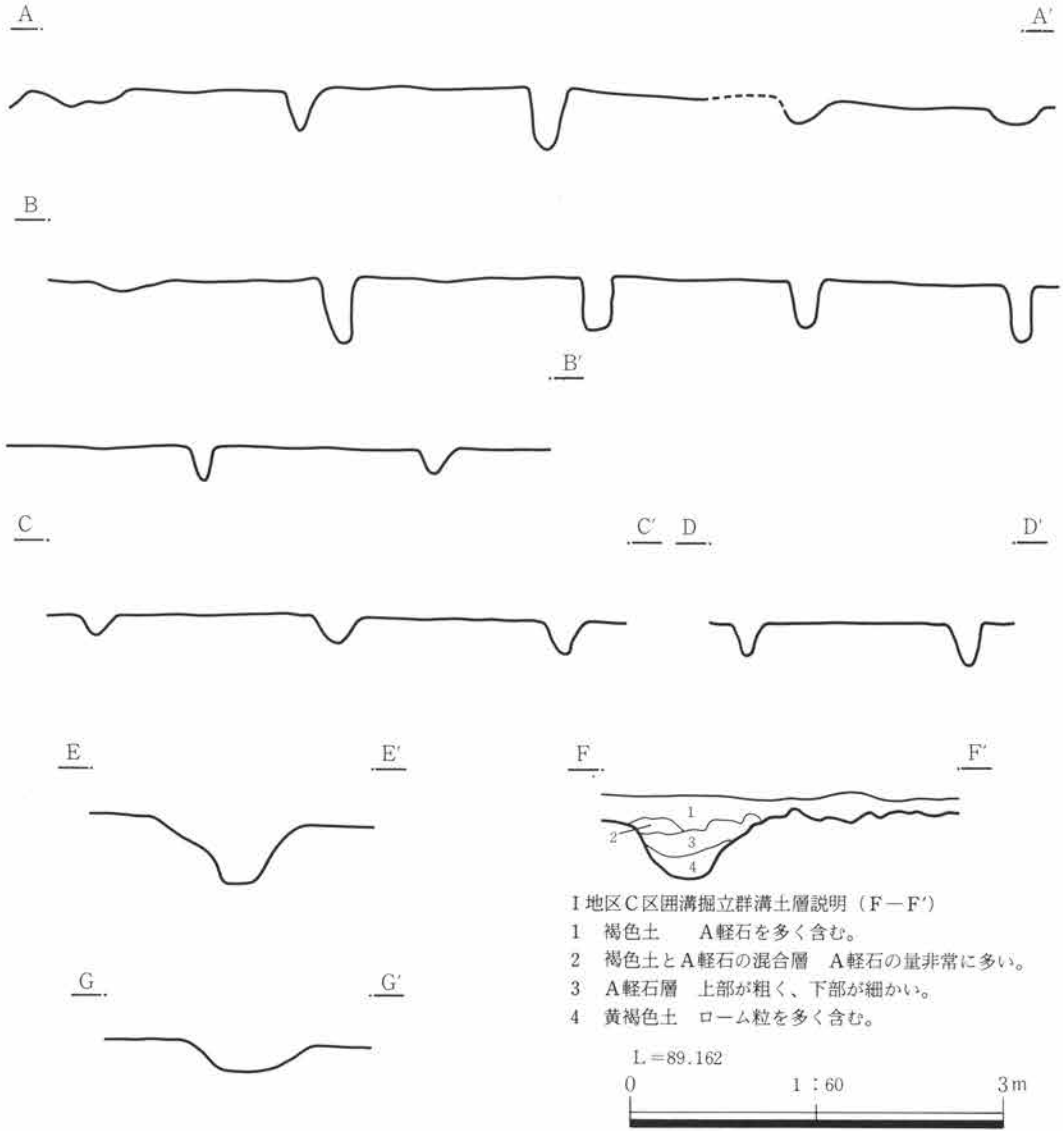
C区1号館跡の東側1.2mに併行して存在する。本遺構に重複する遺構として、2号方形周溝墓・6号溝・7号溝・8号溝があるが、いずれの遺構よりも本遺構の方が新しい。本遺構は、掘立柱建物跡及び井戸、それを取り囲む堀によって構成されている。なお、堀から導き出される主軸は、N-20°-Wとなる。

規模は、南北16.6mで、それを幅約1m、深さ約50cmの堀がめぐっている。なお、東西の規模については、遺構が調査区外へ続いているため不明である。また、南堀の調査区東壁に接する付近では、堀の幅がやや狭くなって内側に入り込み、深さも約20cmと浅くなっている。

堀の内側には、多くの柱穴跡が検出された。これらの柱穴跡から、かつて存在した建物を確認すべく検討したが、その結果、1間×2間の掘立柱建物跡が8棟と、堀の内側をめぐる推定堀跡が確認された。確認された掘立柱建物跡は重複しており、また、それ以外にも柱穴が多く存在する



第709図 I地区C区囲溝掘立群遺構図(1)

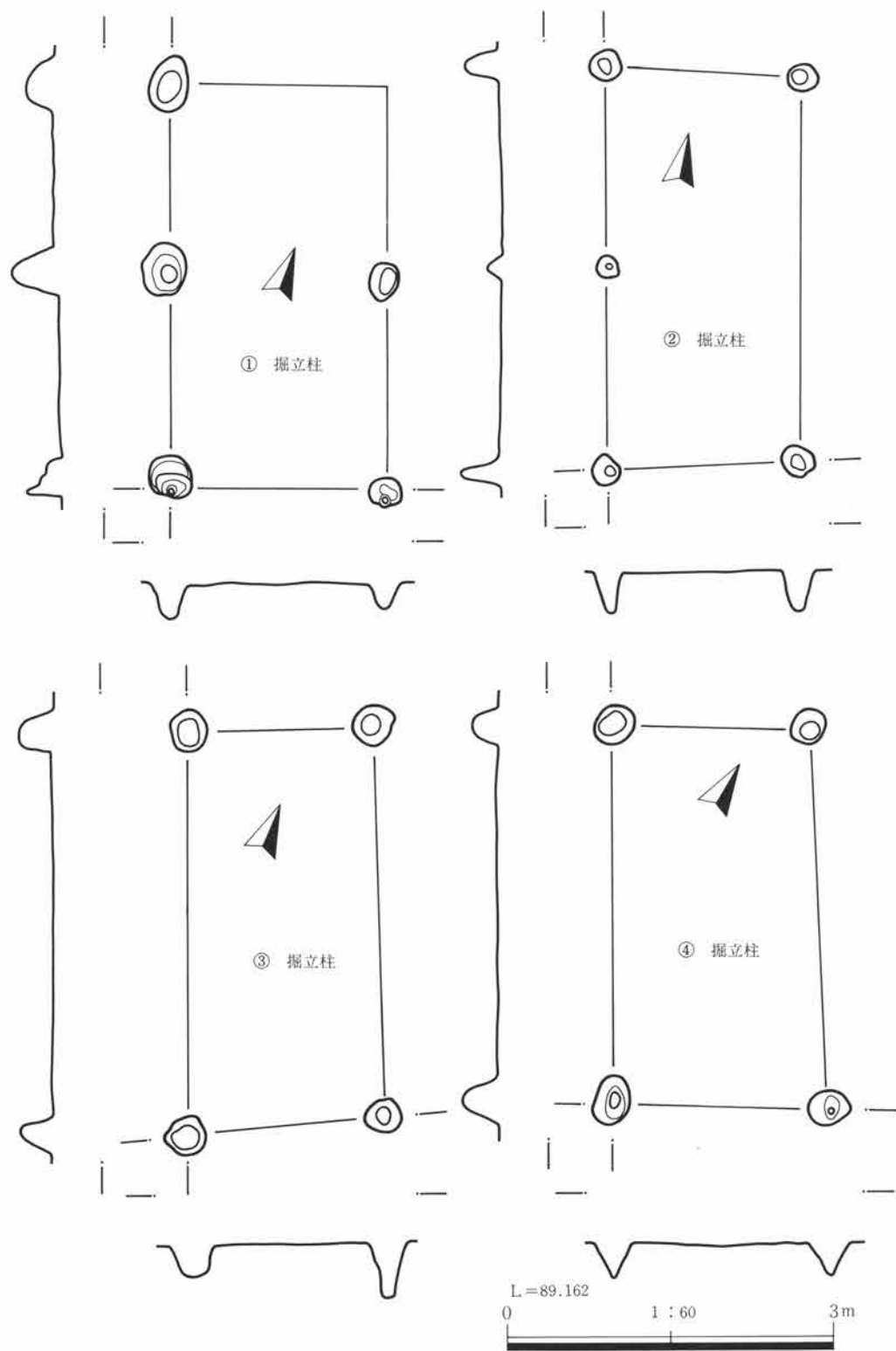


第710図 I地区C区罫溝掘立群遺構図(2)

ことから、建物が何回となく建て替えられていたことが推定される。堀の内側で南西コーナー付近には、井戸跡(C区3号井戸)が存在する。井戸は、石が詰められており、その上には、浅間A軽石を含む褐色土が流入していた。このことは、堀部分の上半に浅間A軽石が堆積している事実を合わせて考慮すると、3号井戸は本館跡が存在していた時期に使用されていた可能性が濃厚となる。

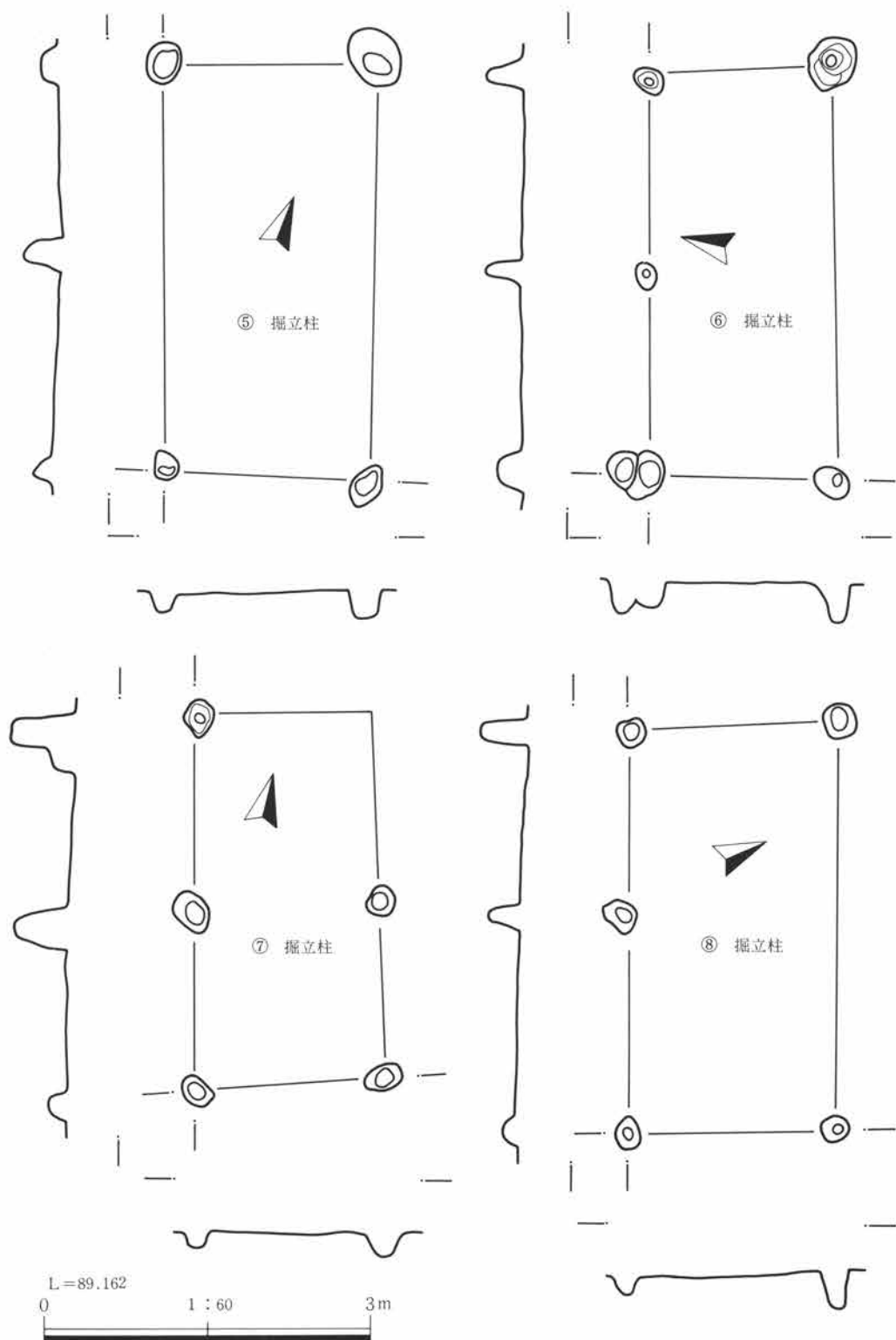
本館跡に伴う遺物として、堀の中(浅間A軽石堆積面より下方)より火鉢(3848)の破片が出土している。

(飯塚)

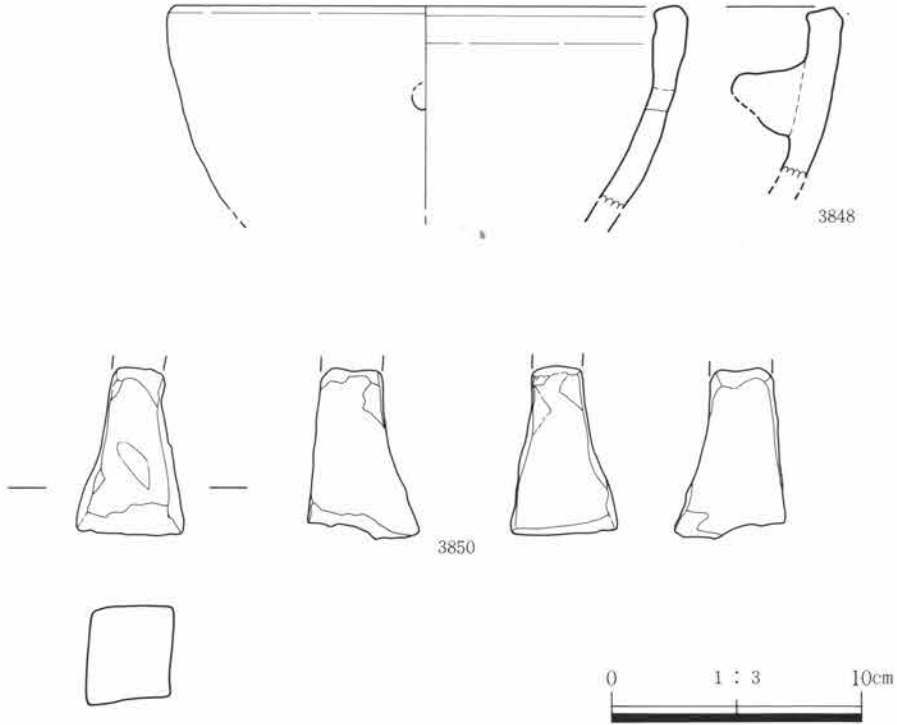


第711図 I地区C区囲溝掘立柱群遺構図(3)

(3) 围沟掘立柱



第712图 I地区C区围沟掘立柱群遗构图(4)



第713図 I地区C区囲溝掘立群遺物図

第203表 I地区C区囲溝掘立群遺物観察表

番号	器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3848	火鉢 瓦質土器	器高：—口径：[200mm]底径：—	気泡・鉄分粒を含む。酸化後還元焼成。硬質。	口唇部は最大径持ち面取り。器壁やや厚く、内面：三角錐状突起。口縁下位に焼成前窄孔。輪積成形。外面：研磨調整。	堀覆土。
3850	砥石 石製品		流紋岩。	ほぼ中央で折れている。四面ともかなり擦り減っている。	堀覆土。

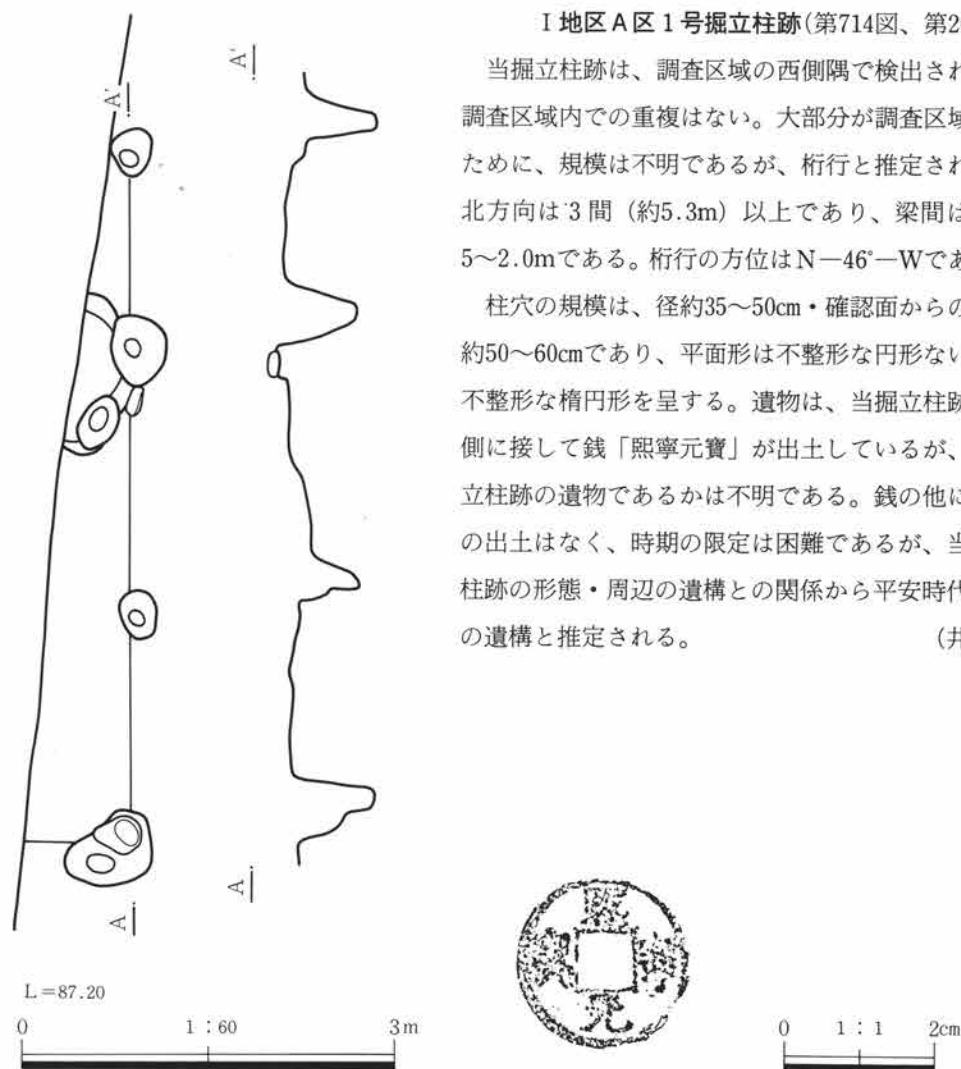


## (4) 掘立柱建物跡

## I地区A区1号掘立柱跡(第714図、第204表)

当掘立柱跡は、調査区域の西側隅で検出された。調査区域内での重複はない。大部分が調査区域外のために、規模は不明であるが、桁行と推定される南北方向は3間(約5.3m)以上であり、梁間は約1.5~2.0mである。桁行の方位はN-46°-Wである。

柱穴の規模は、径約35~50cm・確認面からの深さ約50~60cmであり、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。遺物は、当掘立柱跡の南側に接して銭「熙寧元寶」が出土しているが、当掘立柱跡の遺物であるかは不明である。銭の他に遺物の出土はなく、時期の限定は困難であるが、当掘立柱跡の形態・周辺の遺構との関係から平安時代以降の遺構と推定される。(井川)



第714図 I地区A区1号掘立柱跡遺構図・遺物図

第204表 I地区A区1号掘立柱跡遺物観察表

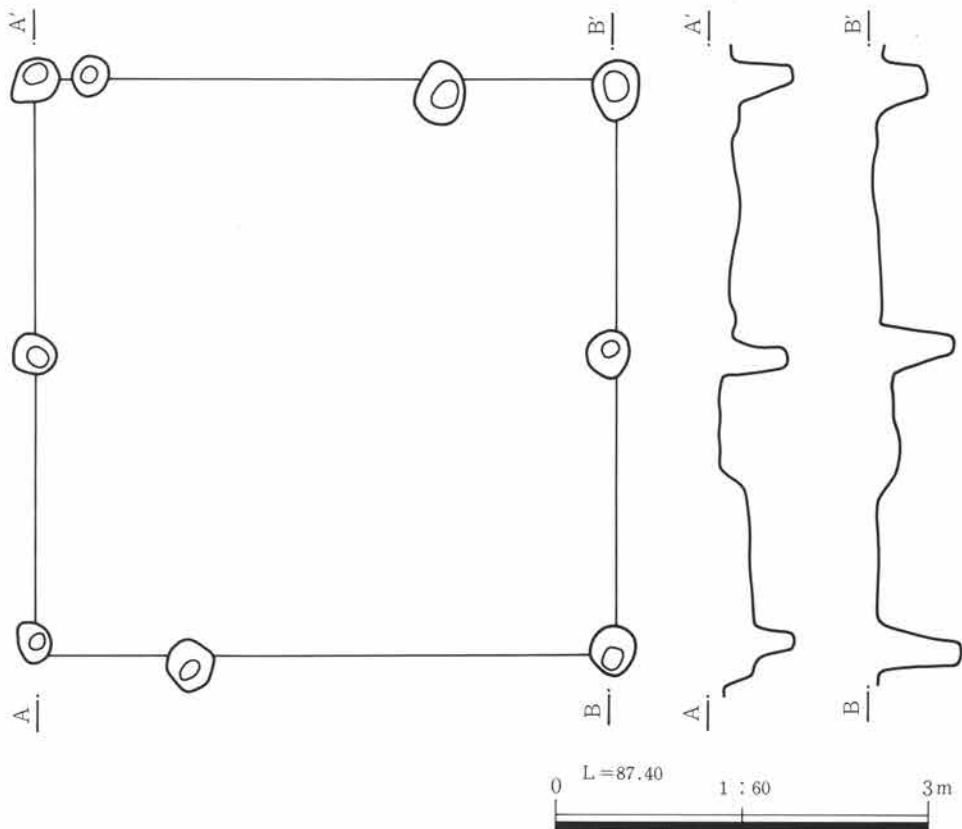
番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
2717	銭			「熙寧元寶」	掘立柱内南東部。

I地区A区2号掘立柱跡 (第715図)

当掘立柱跡は、A区3号掘立柱跡・A区96号土坑・A区99号土坑・A区105号土坑と重複する。A区3号掘立柱跡との新旧関係は不明である。A区96号土坑・A区99号土坑・A区105号土坑との新旧関係は、確定できないが、当掘立柱跡の柱穴の検出状況・覆土の状況から、当掘立柱跡の方が古いと推定している。

当掘立柱跡の規模は、桁行3間ないしは4間(約4.6m)・梁行3間(4.5m)である。桁間は約1.2m~3.3mと変則的であり、土坑に破壊された柱穴が推定される。梁間は約2.1~2.4mである。桁行の方位はN-31°-Eである。柱穴の規模は、径25~40cm・確認面からの深さ約45~65cmであり、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。遺物の出土はなく、時期の限定は困難であるが、当掘立柱跡の形態・周辺の遺構との関係から、平安時代以降の遺構と推定される。

(井川)

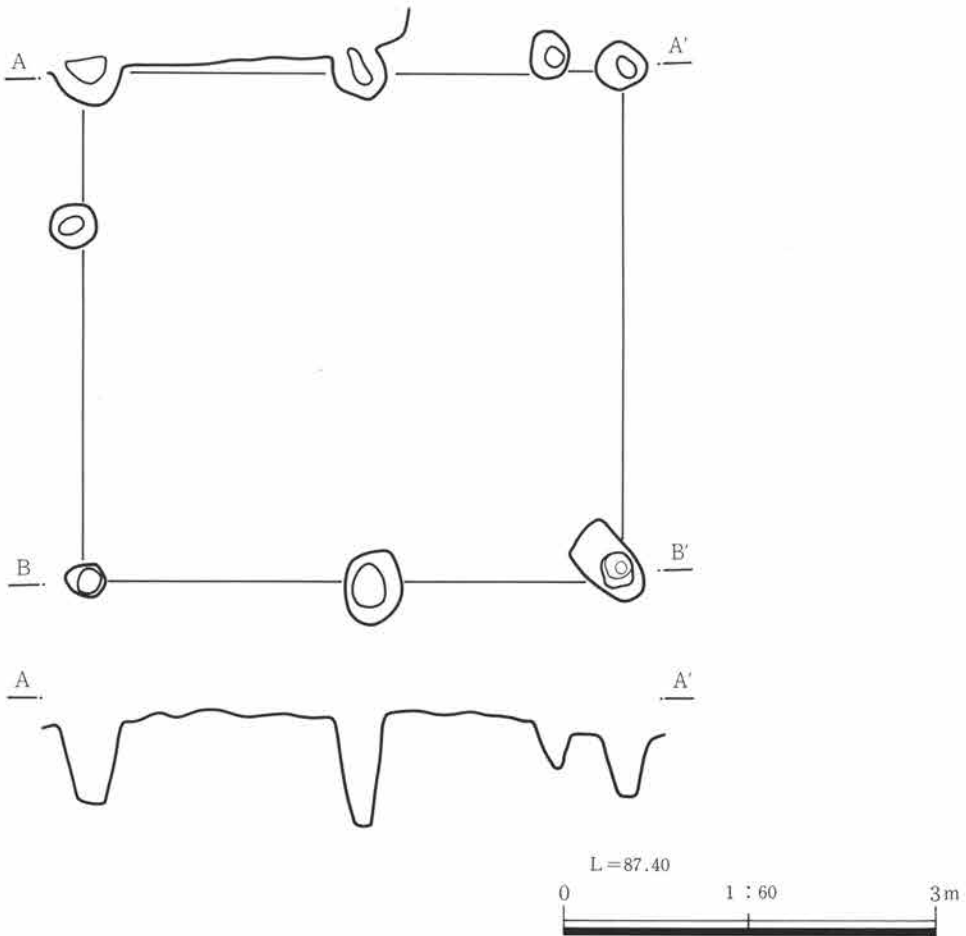


第715図 I地区A区2号掘立柱跡遺構図

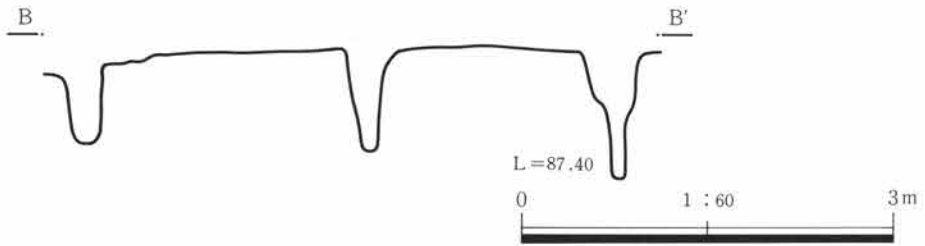
## I 地区 A 区 3 号掘立柱跡 (第716~718図、第205表)

当掘立柱跡は、A区2号掘立柱跡・A区96号土坑・A区99号土坑と重複する。A区2号掘立柱跡との新旧関係は不明である。A区96号土坑・A区99号土坑との新旧関係は、確定できないが、覆土の状態・当掘立柱跡の柱穴の検出状況から、当掘立柱跡の方が古いと推定している。

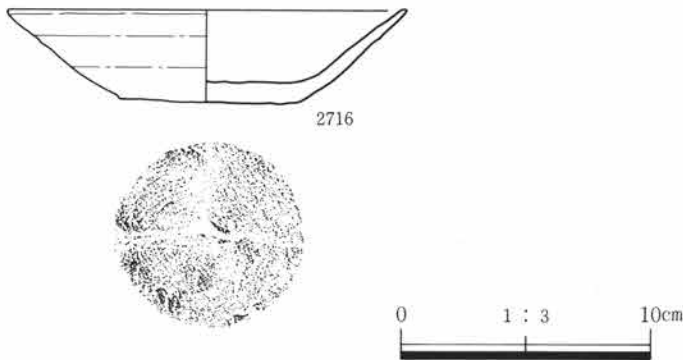
当掘立柱跡の規模は、桁行3間(約4.3m)・梁行1間(約4.0m)であり、桁間は約2.0~2.3m・梁間は約4.0mである。桁行の方位はN-63°-Wである。柱穴の規模は、径約30~50cmであり、確認面からの深さは約50~100cmを測る。平面形は、不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。遺物は、遺構内から酸化焼成の杯が出土しているが、当掘立柱跡に属することを確定することはできない。当掘立柱跡の時期の限定は困難であるが、遺構の形態・周辺の遺構との関係から、平安時代以降の掘立柱跡と推定される。(井川)



第716図 I 地区 A 区 3 号掘立柱跡遺構図



第717図 I地区A区3号掘立柱跡遺構図



第718図 I地区A区3号掘立柱跡遺物図

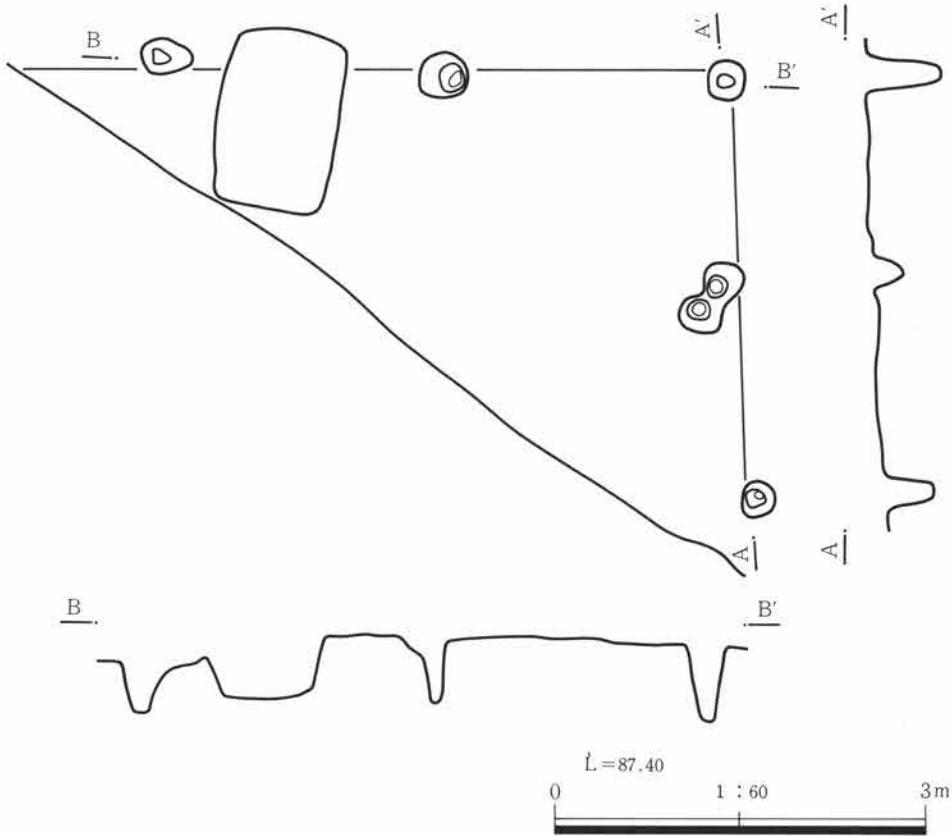
第205表 I地区A区3号掘立柱跡遺物観察表

番号	器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
2716	杯 土師質土器	器高:37mm口径:160mm底径:73mm口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部～体部は直線的に広がる。轆轤左回転。底部は回転糸切り。外面:口縁部～体部は轆轤なで。内面:口縁部～底部は轆轤なで。	掘立柱内北東部。柱穴内。

I地区A区4号掘立柱跡(第719図)

当掘立柱跡は、A区104号土坑と重複する。新旧関係の確定はできないが、覆土の状態から、当掘立柱跡の方が古いと推定している。当掘立柱跡の規模は、南西部分が調査区域外のために確定できないが、桁行2間ないしは3間(約4.5m以上)・梁行2間(約3.3m)と推定している。桁間は約2.2~2.4mであり、梁間は約1.6~1.7mである。桁行の方位はN-74°-Wである。

柱穴の規模は、径約30~40cm・確認面からの深さ約30~60cmであり、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。遺物の出土はなく、当掘立柱跡の時期の限定は困難であるが、遺構の形態・周辺の遺構との関係から、平安時代以降の掘立柱跡と推定される。(井川)

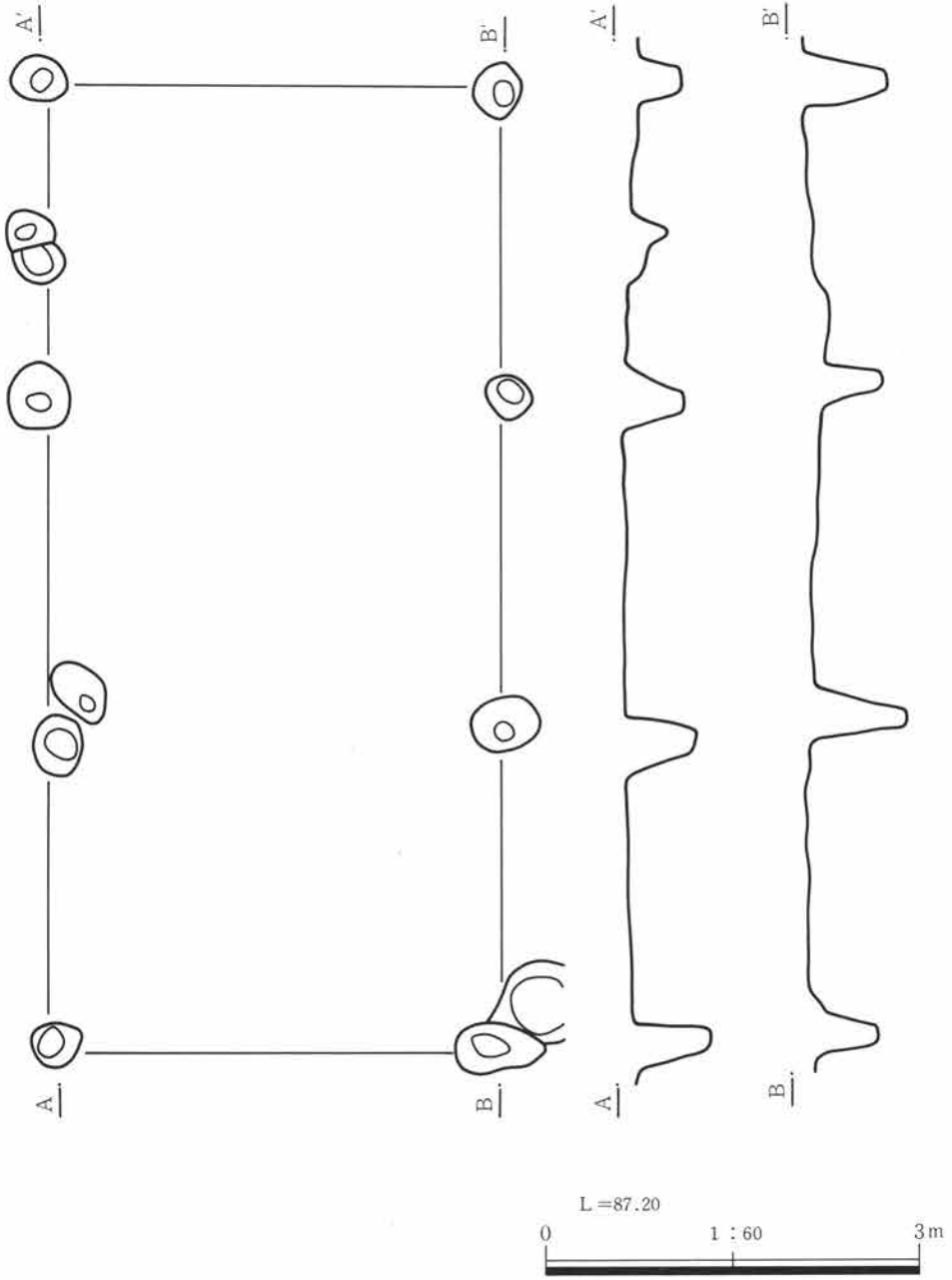


第719図 I地区A区4号掘立柱跡遺構図

## I地区A区5号掘立柱跡 (第720図)

当掘立柱跡は、A区12号方形周溝墓・A区115号土坑と重複する。A区12号方形周溝墓との新旧関係は、直接的に確認することはできなかったが、覆土の状態から当掘立柱跡の方が新しい。A区115号土坑との新旧関係も、直接的に確認することはできなかったが、覆土の状態から当掘立柱跡の方が古いと推定される。

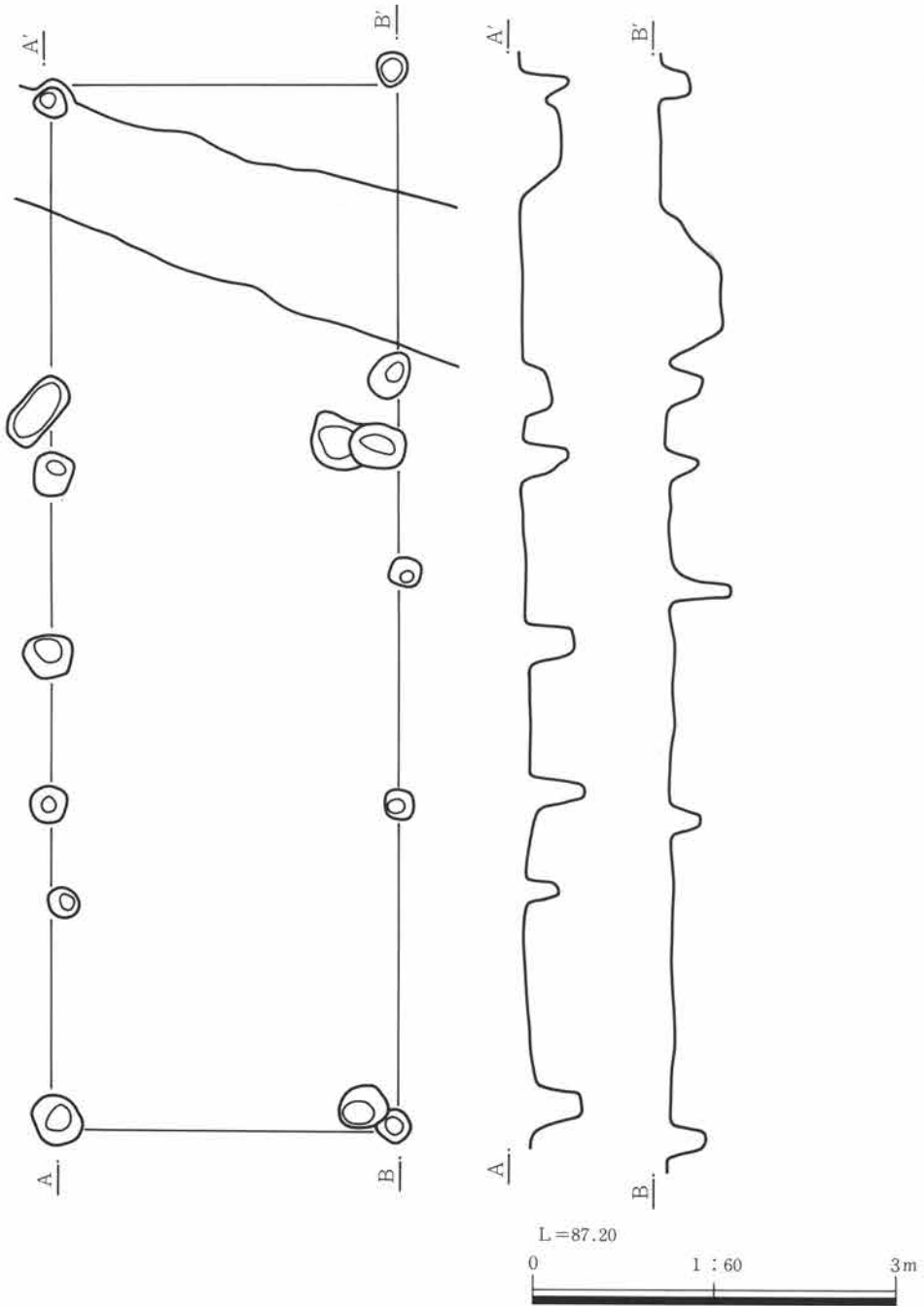
当掘立柱跡の規模は、桁行3間(約7.6m)・梁行1間(約3.6~3.7m)であり、桁間は約2.4~2.7m・梁間は約3.6~3.7mである。桁行の方位はN-32°-Eである。柱穴の規模は、径約30~50cm・確認面からの深さ約50~70cmであり、平面形は、不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。当掘立柱跡からは遺物の出土がなく、時期の限定は困難であるが、覆土の状態・周辺の遺構との関係から、平安時代以降の掘立柱跡と推定される。(井川)



第720図 I地区A区5号掘立柱跡遺構図

I 地区 A 区 6 号掘立柱跡 (第721図)

当掘立柱跡は、A区12号方形周溝墓と重複する。新旧関係は、直接的に確認することはできなかったが、覆土の状態から、当掘立柱跡の方が新しいと考えられる。当掘立柱跡の規模は、桁行4間



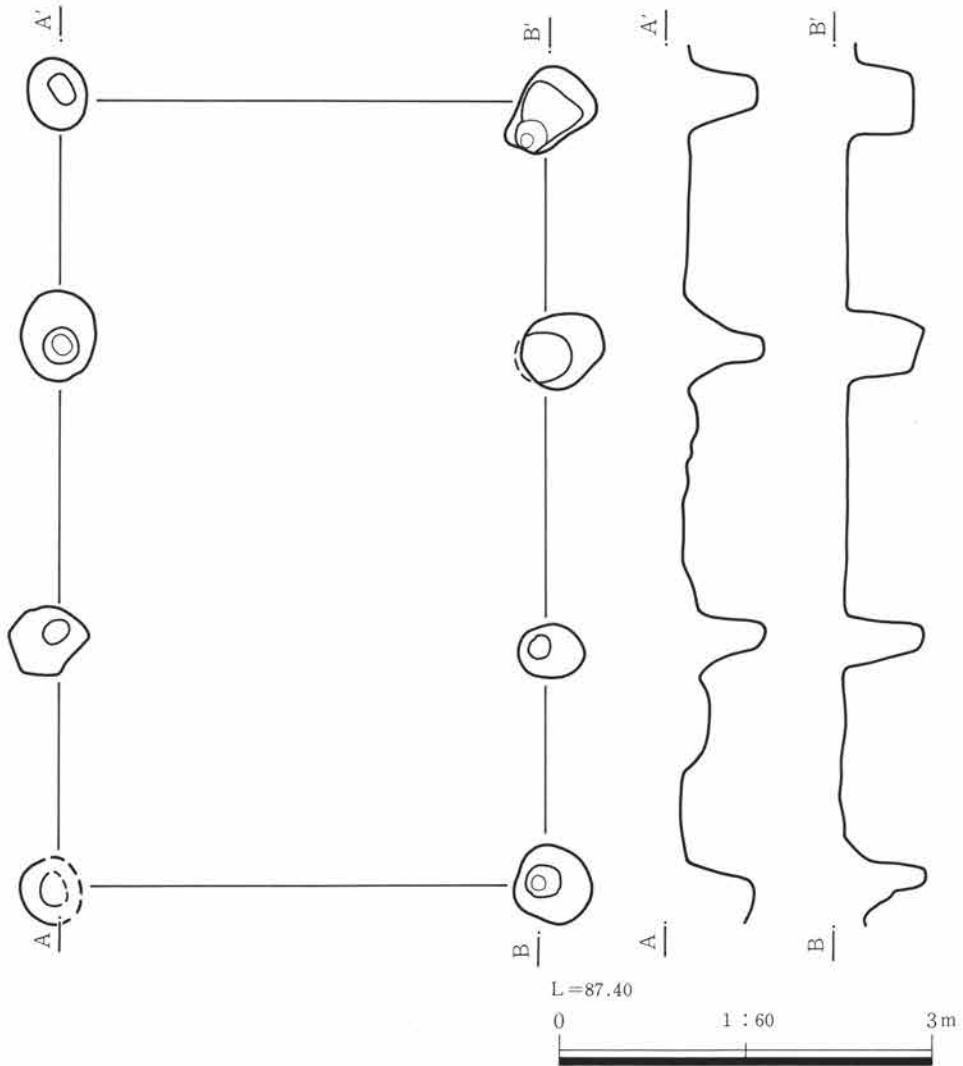
第721図 I 地区A区6号掘立柱跡遺構図

(約8.4~8.6m)・梁行1間(2.8m)であり、桁間約1.5~2.5m・梁間約2.8mである。桁行の方位はN-56°-Wである。

柱穴の規模は、径約25~40cm・確認面からの深さ約30~50cmであり、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。当掘立柱跡からは遺物の出土がなく、時期の限定は困難であるが、覆土の状態・周辺の遺構との関係から、平安時代以降の掘立柱跡と推定される。(井川)

I地区A区7号掘立柱跡(第722図)

当掘立柱跡は、A区149号土坑・A区154号土坑と重複する。A区149号土坑・A区154号土坑との新旧関係は、直接的に確認することはできなかったが、覆土の状態から、当掘立柱跡の方が古



第722図 I地区A区7号掘立柱跡遺構図

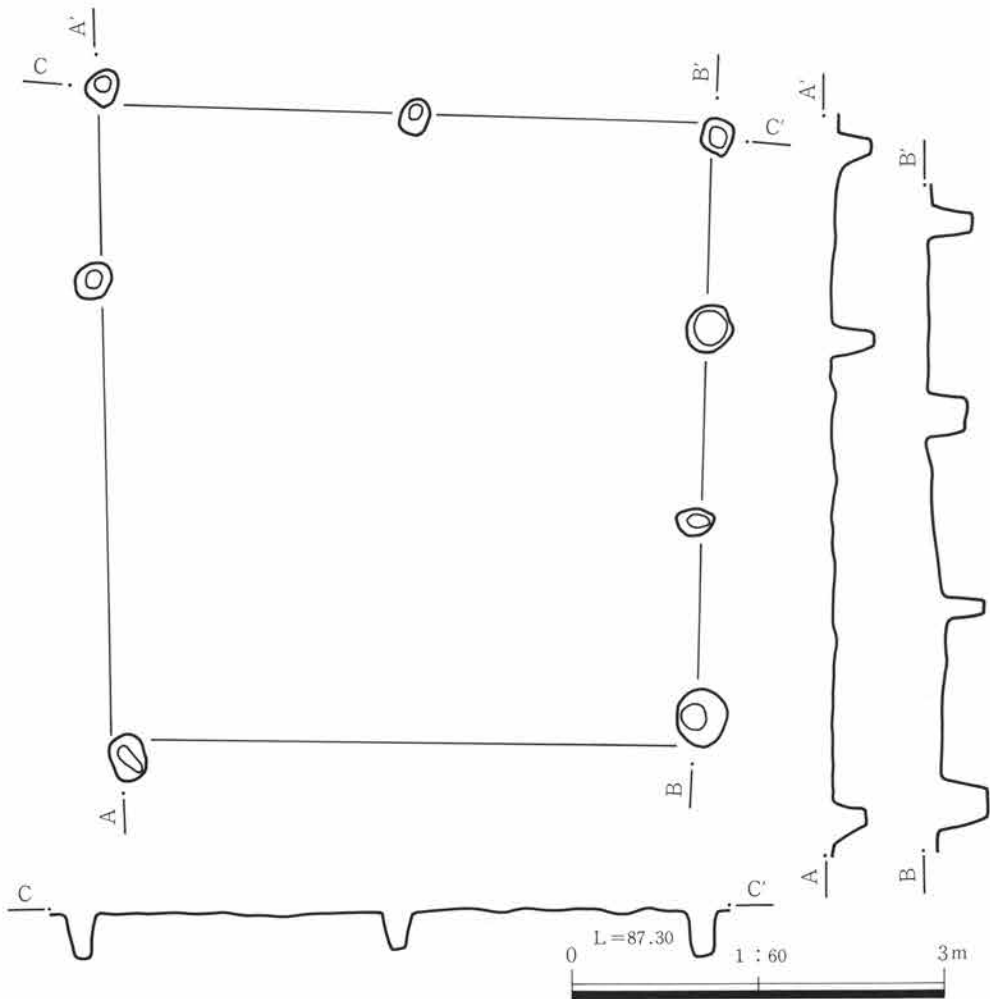


いと考えられる。

当掘立柱跡の規模は、桁行3間（約6.2m）・梁行1間（約3.8m）であり、桁間約1.9～2.2m・桁間約3.8mである。桁行の方位はN-54°-Wである。柱穴の規模は、径約40～70cm・確認面からの深さ約50～70cmであり、平面形は、不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。当掘立柱跡からの遺物の出土はなく、時期の限定は困難であるが、覆土の状態・周辺の遺構との関係から平安時代以降の掘立柱跡と推定される。（井川）

#### I 地区A区8号掘立柱跡（第723図）

当掘立柱跡は、A区226号土坑と重複する。新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、覆土の状態から、当掘立柱跡の方が古いと考えられる。当掘立柱跡の規模は、桁行は3間（約4.



第723図 I 地区A区8号掘立柱跡遺構図

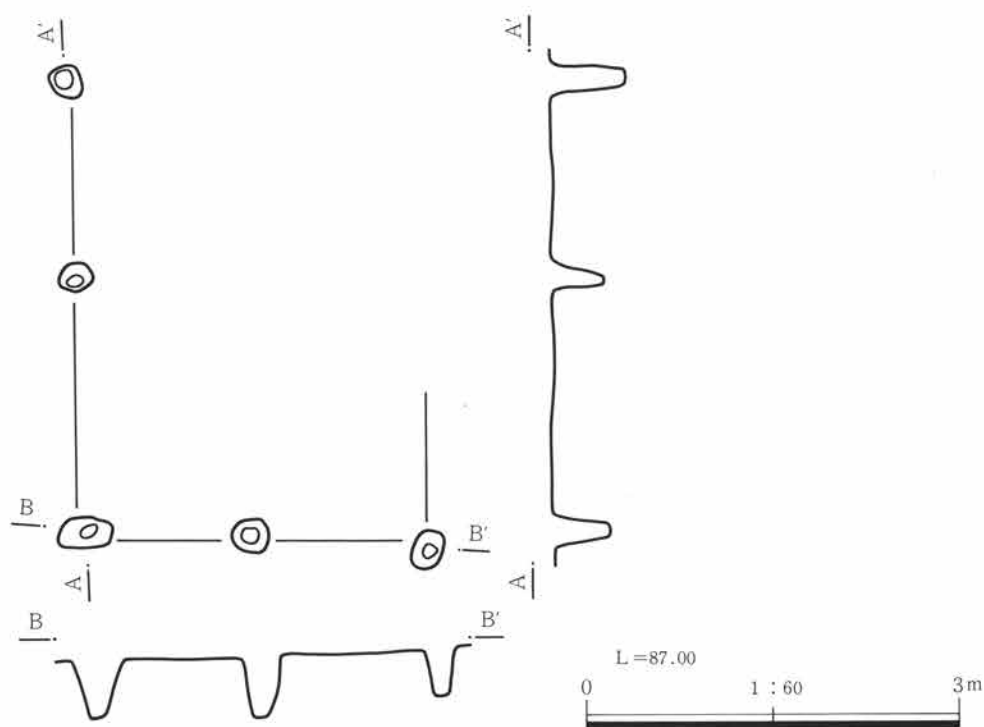
7～5.3m)であり、梁行は2間(約4.5～5.0m)であると考えられるが、西側及び南側の各柱穴1基は検出できなかった。桁間は約1.5～1.6mであり、梁間は約2.5mである。桁行の方位はN-38°-Eである。

柱穴の規模は、径約25～40cm・確認面からの深さ約30～40cmであり、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。当掘立柱跡からは遺物の出土がなく、時期の限定は困難であるが、覆土の状態・周辺の遺構との関係から、平安時代以降の掘立柱跡と推定している。(井川)

#### I地区A区9号掘立柱跡(第724図)

当掘立柱跡に重複はないが、A区22号溝跡・A区266号土坑が近接する。当掘立柱跡の規模は、北東部分が調査区域外となるために確定できないが、桁行2間以上(約3.6m以上)・梁行2間(約2.8m)であり、桁間約1.6～2.0m・梁間約1.3～1.5mである。梁行の方位はN-11°-Eである。

柱穴の規模は、径約20～30cm・確認面からの深さ約40～60cmであり、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。当掘立柱跡からは遺物の出土がなく、時期の限定は困難であるが、覆土の状態・周辺の遺構との関係から、平安時代以降の掘立柱跡と推定している。(井川)

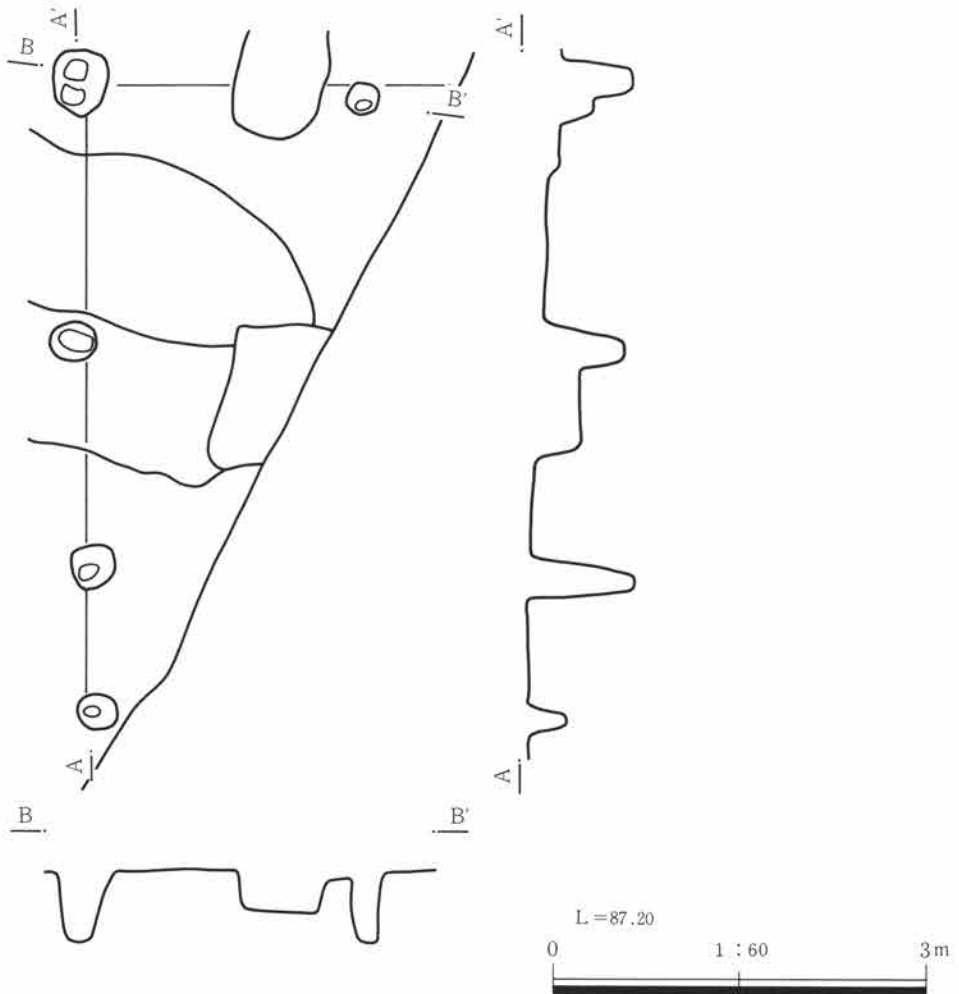


第724図 I地区A区9号掘立柱跡遺構図

## I 地区 A 区10号掘立柱跡 (第725図)

当掘立柱跡は、A区273号土坑・A区274号土坑と重複する。各土坑との新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、覆土の状態から、当掘立柱跡の方が古いと推定される。当掘立柱跡の規模は、北側部分が調査区域外のために確定できないが、桁行3間以上(5.1m以上)・梁行1間以上(2.4m以上)であり、桁間は約1.2~2.2m・梁間は約2.4mである。桁行の方位はN-68°-Wである。

柱穴の規模は、径約25~40cm・確認面からの深さ約30~80cmであり、平面形は、不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。当掘立柱跡からは遺物の出土がなく、時期の限定は困難であるが、覆土の状態・周辺の遺構との関係から、平安時代以降の掘立柱跡と推定される。(井川)

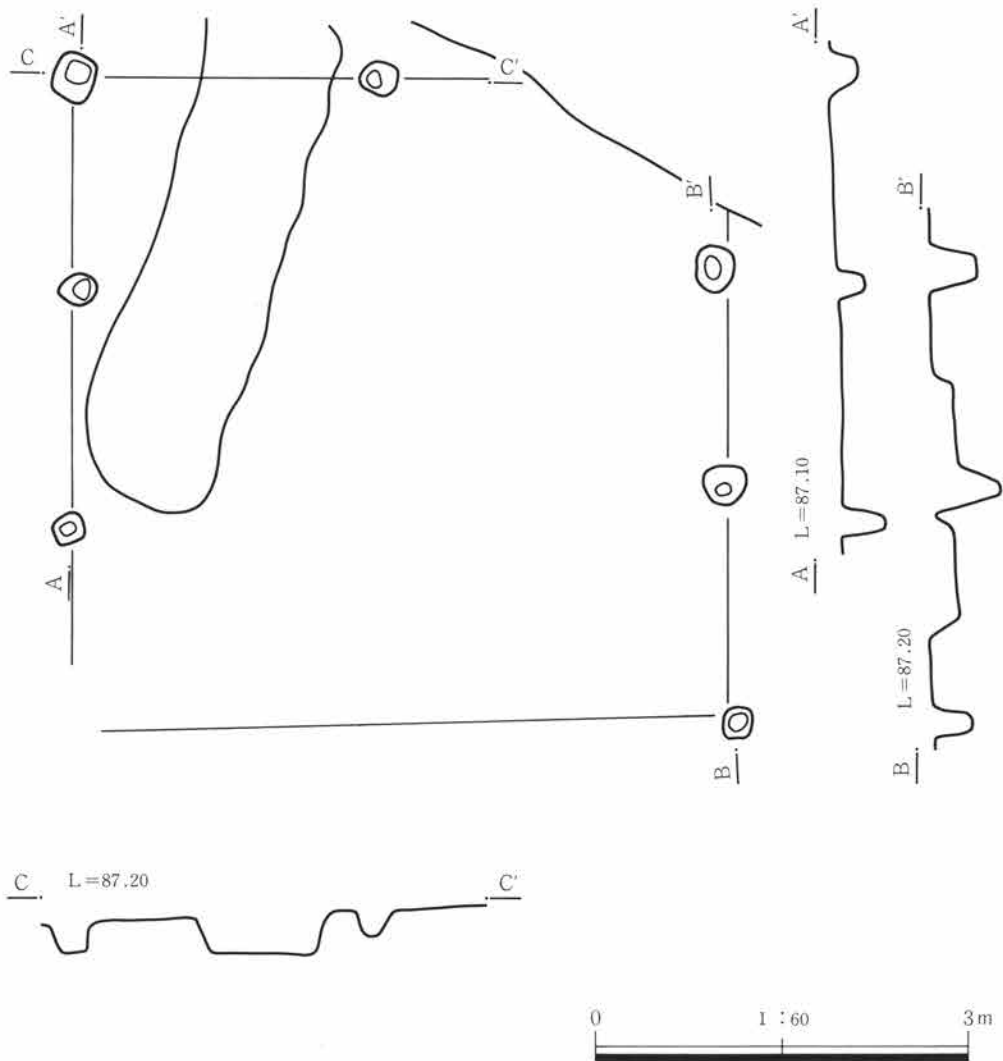


第725図 I 地区 A 区10号掘立柱跡遺構図

I地区A区11号掘立柱跡(第726図)

当掘立柱跡は、A区274号土坑・A区278号土坑・A区283号土坑・A区284号土坑と重複する。各土坑との新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、覆土の状態から、当掘立柱跡の方が古いと推定される。当掘立柱跡の規模は、桁行3間(約5.1m)・梁行2間(約5.0m)と考えられるが、北東部隅・南西部の柱穴は検出することができなかった。桁間は約1.7~1.9m・梁間は約2.5mである。梁行の方位はN-23°-Eである。

柱穴の規模は、径約25~40cm・確認面からの深さ約25~40cmであり、平面形は、不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。当掘立柱跡からは遺物の出土がなく、時期の限定は困難であるが、覆土の状態・周辺の遺構との関係から、平安時代以降の掘立柱跡と推定される。(井川)



第726図 I地区A区11号掘立柱跡遺構図

## (5) 井戸跡

## I 地区 A 区 1 号井戸跡 (第727・730・731図、第206表、図版137)

当井戸跡は、A区5号方形周溝墓と重複する。新旧関係は、当井戸跡がA区5号方形周溝墓の周溝の一部を破壊していることから、当井戸跡の方が新しい。当井戸跡の規模は、長軸約1.1m・短軸約1.0mであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。深さは、出水のために確認できなかったが、上面は、投げ込まれた石で覆われていた。

遺物は、土器の鉢・磁器の鉢・内耳土器が、投げ込まれた石の間から出土している。遺物・井戸の形態から推定される当井戸跡の時期は室町時代である。(井川)

## I 地区 A 区 2 号井戸跡 (第727・731図、第206表、図版137)

当井戸跡は、A区1号方形周溝墓・A区6号溝跡と重複する。A区1号方形周溝墓との新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、覆土の相違・遺物から当井戸跡の方が新しい。A区6号溝跡との新旧関係は、不明である。

当井戸跡の規模は、長軸約2.0m・短軸約1.5m・確認面からの深さ約3.8mであり、平面形は不整形な楕円形、断面形は上面の広がった円筒形を呈する。井戸の上面は、投げ込まれた石が詰まっていた。遺物は、陶器の片口鉢・カワラケの杯が出土している。遺物・井戸の形態から推定される当井戸跡の時期は室町時代である。(井川)

## I 地区 A 区 3 号井戸跡 (第727・731図、第206表)

当井戸跡は、A区5号方形周溝墓と重複する。新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、覆土の相違・遺物から当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、長軸約2.9m・短軸約2.3m・確認面からの深さ約2.3mであり、平面形は不整形な楕円形・断面形は上面の大きく広がった円筒形を呈する。遺物は陶器の鉢が出土している。遺物・井戸の形態から推定される当井戸跡の時期は室町時代である。(井川)

## I 地区 A 区 4 号井戸跡 (第727図)

当井戸跡に重複はないが、A区2号方形周溝墓が近接する。規模は、直径約0.9m・確認面からの深さ約1.8mであり、平面形は不整形な円形、断面形は円筒形を呈する。覆土上層は多量の軽石を含んでいた。

遺物は出土していないため、時期は不明である。(井川)

## 第6章 中世・近世の遺構と遺物

### I 地区A区5号井戸跡 (第727図)

当井戸跡は、A区5号方形周溝墓と重複する。新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、覆土の相違・遺物から当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、直径約0.95m・確認面からの深さ約2.4mであり、平面形は不整形な円形、断面形は円筒形を呈する。周囲からは、井戸を取り囲むように配置された6基の小ピットが検出できた。小ピットの規模は径約20～40cm・確認面からの深さ約30～60cmであり、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。当井戸跡には、覆い屋が建っていたと推定することができる。

当井戸跡上面は、投げ込まれた石が詰まっている状態であった。当井戸跡からは遺物は出土していないが、井戸の形態・周辺の遺構との関係から推定される当井戸跡の時期は中世～近世である。(井川)

### I 地区A区6号井戸跡 (第728図)

当井戸跡は、A区5号方形周溝墓と重複する。新旧関係は、当井戸跡がA区5号方形周溝墓の周溝の一部を破壊していることから、当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、長軸約1.3m・短軸約1.1m・確認面からの深さ約1.9mであり、平面形は不整形な楕円形、断面形は円筒形を呈する。当井戸跡からは遺物は出土していないが、井戸の形態・周辺の遺構との関係から推定される当井戸跡の時期は中世～近世である。(井川)

### I 地区A区8号井戸跡 (第728図)

当井戸跡は、A区1号古墳と重複する。新旧関係は、当井戸跡がA区1号古墳の周溝の一部を破壊していることから、当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、直径約1.4m・確認面からの深さ約1.3mであり、平面形は不整形な円形、断面形は上面のやや広がった円筒形を呈する。当井戸跡からは遺物は出土していないが、覆土の最上部には浅間B軽石が認められることから、平安時代末から鎌倉時代初めの井戸跡と推定している。(井川)

### I 地区A区9号井戸跡 (第728図)

当井戸跡は、A区1号古墳と重複する。新旧関係は、当井戸跡がA区1号古墳の周溝の一部を破壊していることから、当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、長軸約2.1m・短軸約1.9m・確認面からの深さ約2.4mであり、平面形は不整形な楕円形、断面形は上部が広がる円筒形を呈する。当井戸跡の上部は、石が詰まっている状態であったが、遺物は出土しなかった。井戸の形態・周辺の遺構との関係から推定される当井戸跡の時期は中世～近世である。(井川)

**I 地区 A 区10号井戸跡 (第728図)**

当井戸跡は、A区31号住居跡・A区1号古墳と重複する。A区31号住居跡との新旧関係は、当井戸跡が同住居跡の南東部分の床を破壊していることから、当井戸跡の方が新しい。A区1号古墳との新旧関係は、当井戸跡が同古墳の周溝の一部を破壊していることから、当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、直径約1.8m・確認面からの深さ約1.8mであり、平面形は不整形な円形、断面形は上面が広がる円筒形を呈する。当井戸跡の上部は、石が詰まっている状態であったが、遺物は出土しなかった。当井戸跡最上層の覆土には、浅間B軽石が含まれている。覆土の状態から推定される当井戸跡の時期は平安時代末～鎌倉時代初期と推定している。(井川)

**I 地区 A 区11号井戸跡 (第728図)**

当井戸跡は、A区1号古墳と重複する。新旧関係は、当井戸跡がA区1号古墳の周溝の一部を破壊していることから、当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、長軸約1.7m・短軸約1.5m・確認面からの深さ約2.0mであり、平面形は不整形な楕円形、断面形は上部の広がった円筒形を呈する。当井戸跡の上部の覆土中には、石が投げ込まれた状態で詰まっていた。遺物の出土はないが、井戸の形態・周辺の遺構との関係から推定される当井戸跡の時期は、中世～近世である。(井川)

**I 地区 A 区12号井戸跡 (第728・731・732図、第206表)**

当井戸跡は、A区1号古墳の墳丘上で検出された。A区1号古墳の墳丘は削平されており、新旧関係の直接的な確認はできなかったが、覆土の相違・出土遺物から、当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、直径約2.0m・確認面からの深さ約3.2mであり、平面形は不整形な円形、断面形は上部の広がった円筒形を呈する。当井戸跡の上部の覆土中には、石が投げ込まれた状態で詰まっていた。遺物は内耳土器と砥石が出土している。遺物・井戸の形態から推定される当井戸跡の時期は、室町時代である。(井川)

**I 地区 A 区13号井戸跡 (第729・732図、第206表、図版137)**

当井戸跡は、A区30号溝跡と重複する。新旧関係は、覆土の相違から、当井戸跡のほうが新しい。当井戸跡の規模は、長軸約1.9m・短軸約1.7mであるが、深さは出水により完掘できなかったために不明である。平面形は、不整形な楕円形を呈し、断面形は円筒形を呈するものと推定している。当井戸跡の上部の覆土中には、石が投げ込まれた状態で詰まっていた。遺物は、カワラケの杯が出土している。遺物・形態から推定される当井戸跡の時期は、室町時代である。(井川)

I 地区 A 区14号井戸跡 (第729・732図、第206表)

当井戸跡は、A区2号古墳の墳丘上で検出された。A区2号古墳の墳丘の大部分が削平されており、新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、覆土の相違・出土遺物から、当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、長軸約2.0m・短軸約1.7mであるが、深さは出水のために確認することができなかった。平面形は、不整形な楕円形を呈する。断面形は、円筒形を呈するものと推定している。当井戸跡の上部の覆土中には、石が投げ込まれた状態で詰まっていた。遺物は、内耳土器が出土している。遺物・井戸の形態から推定される当井戸跡の時期は室町時代である。(井川)

I 地区 A 区15号井戸跡 (第729図)

当井戸跡に重複する遺構はないが、A区2号古墳・A区26号溝跡が近接する。当井戸の規模は、長軸約0.9m・短軸約0.8mであるが、深さは出水のために確認することができなかった。平面形は、不整形な楕円形を呈する。断面形は、円筒形を呈するものと推定される。

当井戸跡からは、遺物は出土していないため、時期は不明である。(井川)

I 地区 A 区16号井戸跡 (第729図)

当井戸跡は、II地区7区5号古墳の墳丘上で検出された。II地区7区5号古墳の墳丘は大部分が削平されており、新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、覆土の相違から当井戸跡の方が新しい。

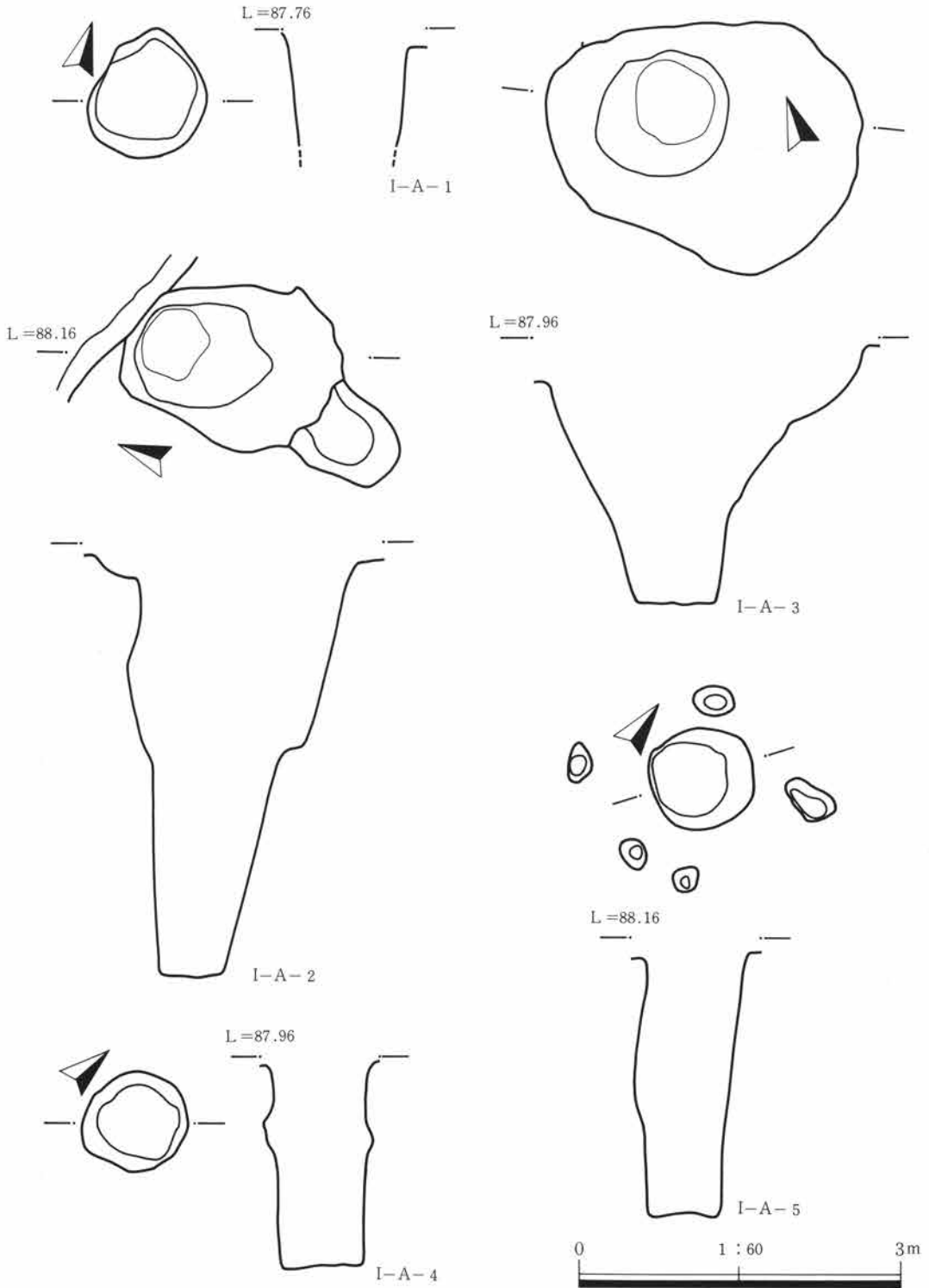
当井戸跡の規模は、長軸約1.1m・短軸約1.0mであるが、深さは出水のために確認することができなかった。平面形は、不整形な楕円形を呈する。断面形は、円筒形を呈するものと推定される。当井戸跡の上部の覆土中には、石が投げ込まれた状態で詰まっていた。遺物は出土していないが、井戸の形態・周辺の遺構との関係から推定される当井戸跡の時期は中世～近世である。(井川)

I 地区 A 区17号井戸跡 (第729図)

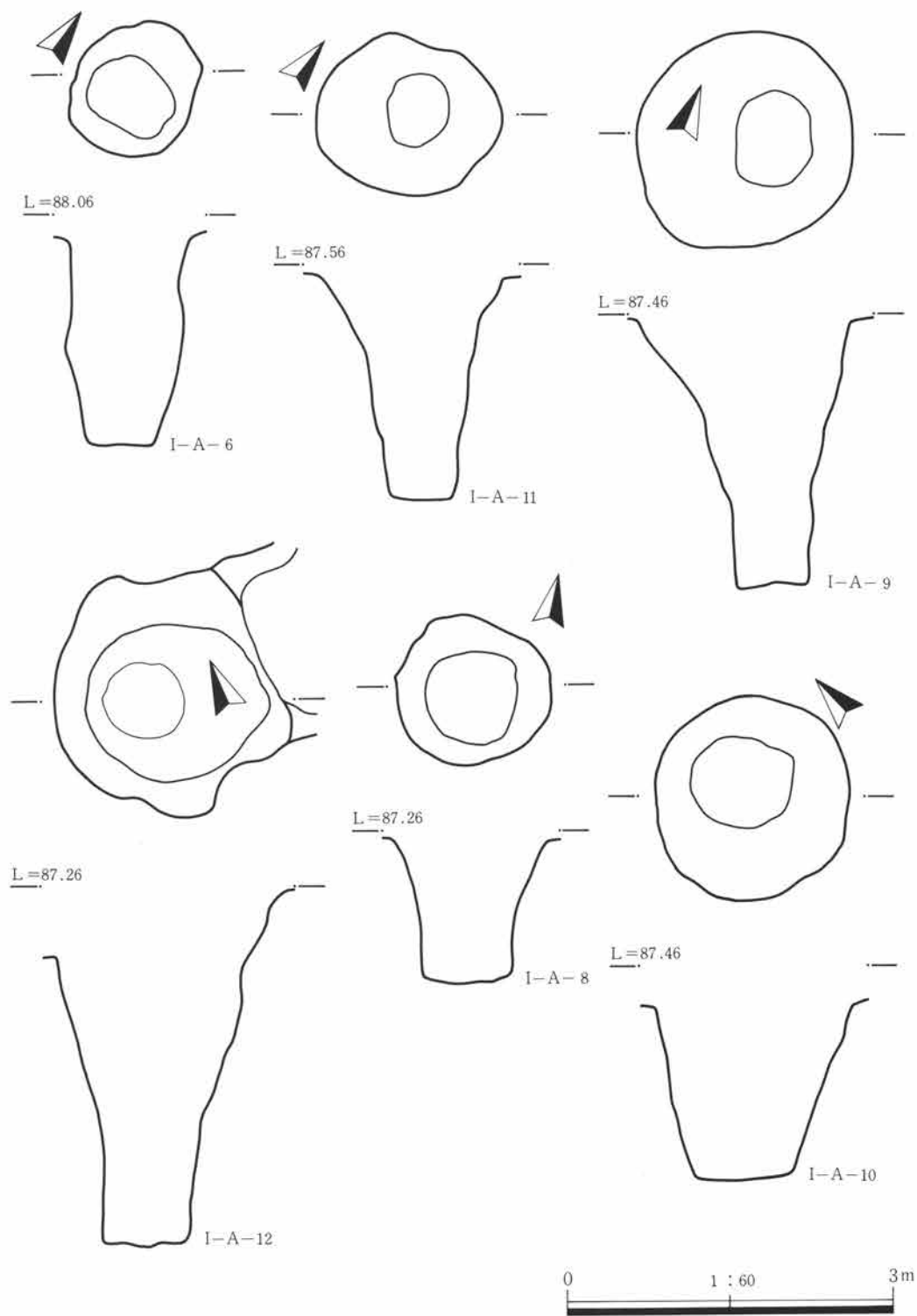
当井戸跡は、II地区7区5号古墳の墳丘上で検出された。II地区7区5号古墳の墳丘は大部分が削平されており、新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、覆土の相違から当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、長軸約1.5m・短軸約1.3mであるが、深さは出水のために確認することはできなかった。平面形は、整形な楕円形を呈する。断面形は、円筒形を呈するものと推定される。遺物は出土していないが、井戸の形態・周辺の遺構との関係から推定される当井戸跡の時期は中世～近世である。(井川)



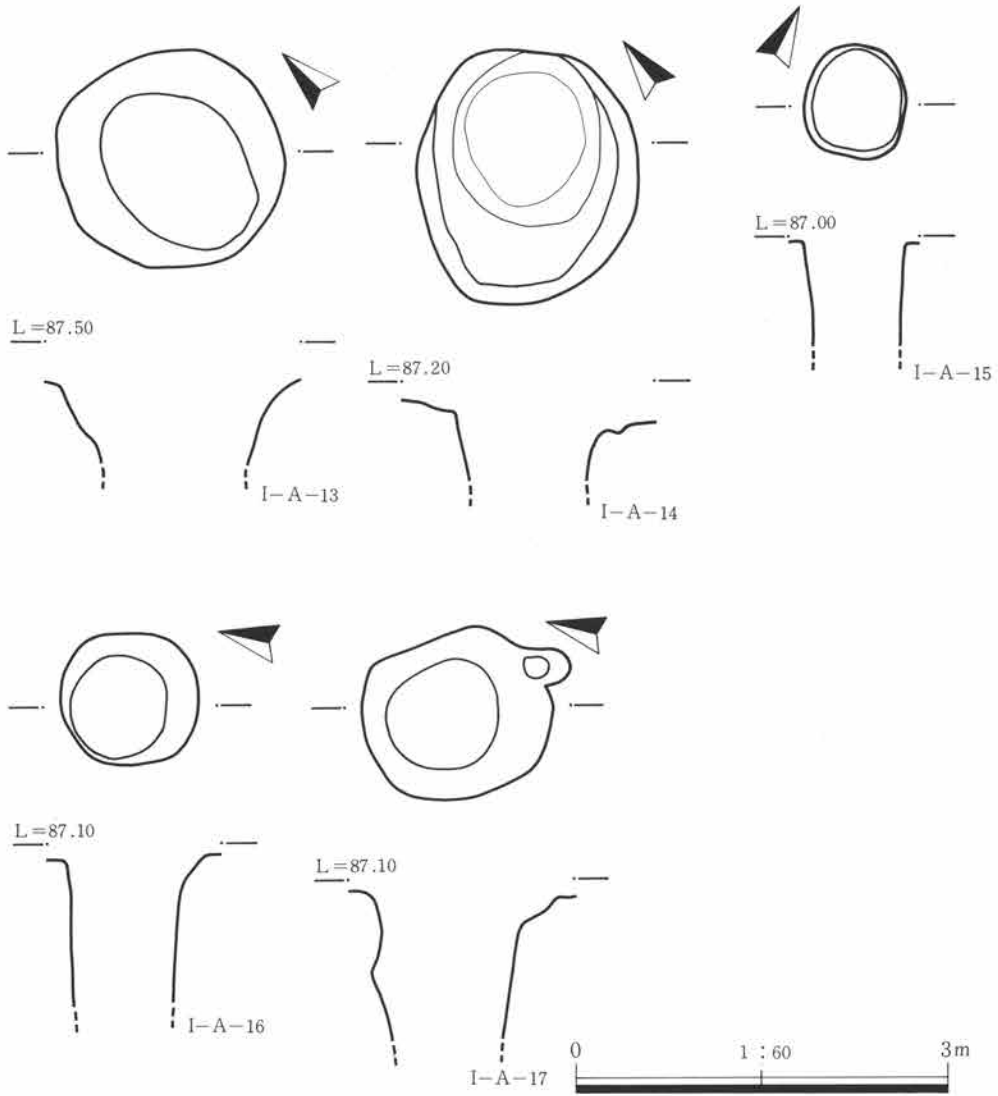


第727図 井戸遺構図(1)

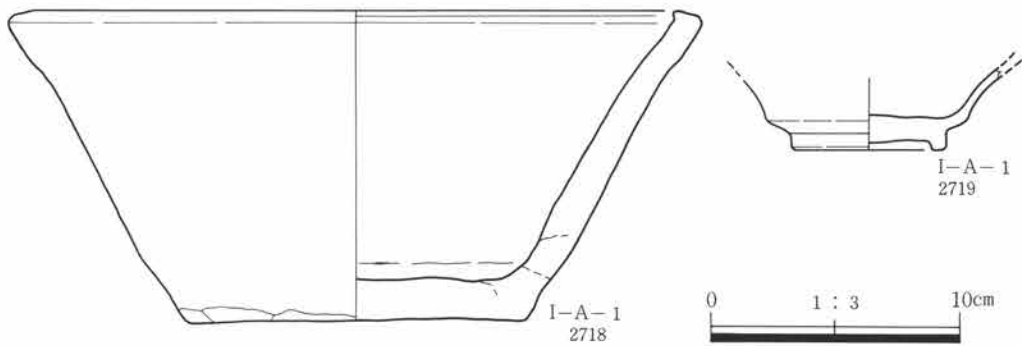


第728図 井戸遺構図(2)

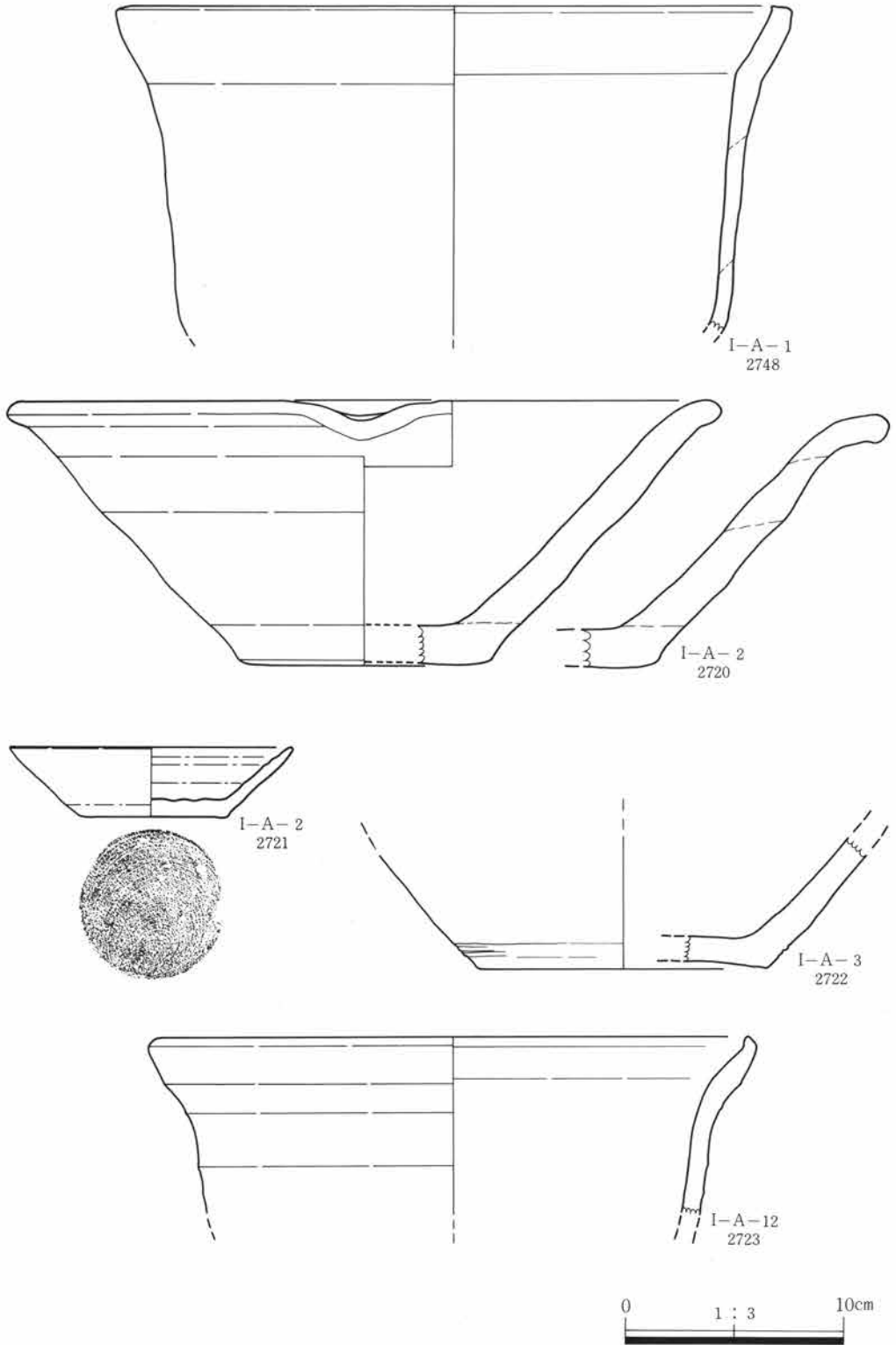
(5) 井戸跡



第729図 井戸遺構図(3)

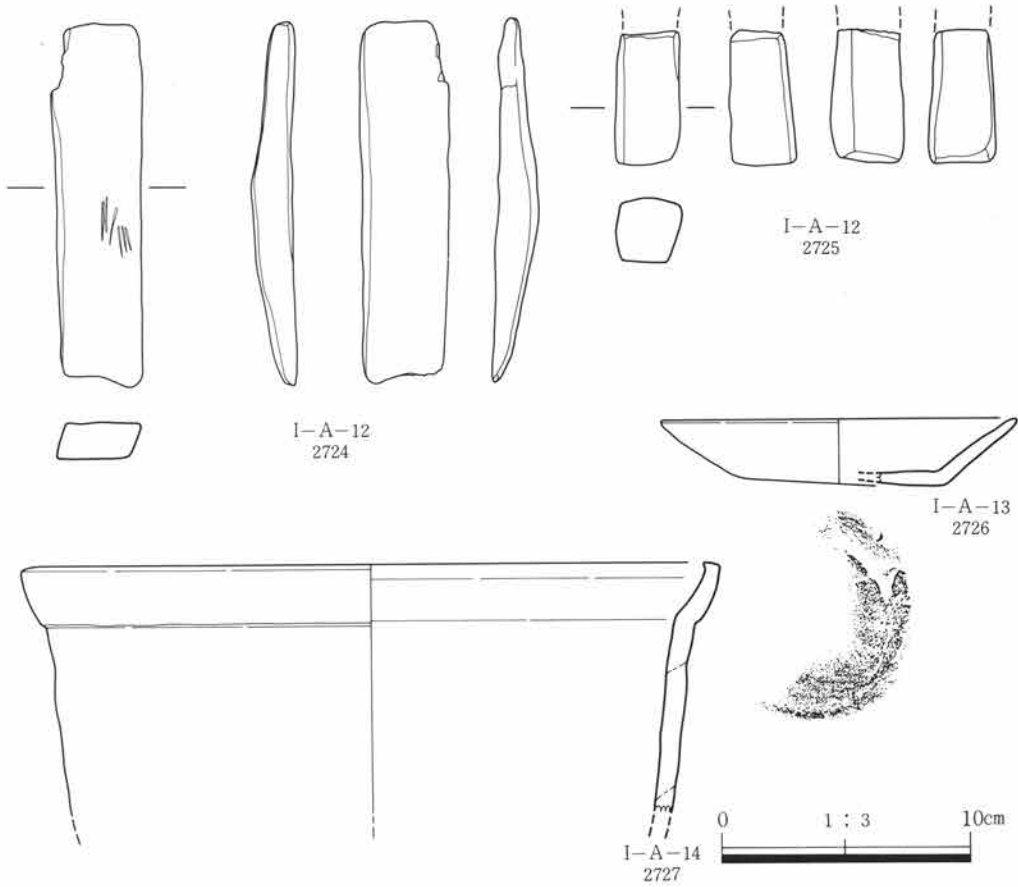


第730図 井戸遺物図(1)



第731図 井戸遺物図(2)

## (5) 井戸跡



第732図 井戸遺物図(3)

第206表 井戸遺物観察表(A区)

番号	器土器種	法址(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
1井戸 2718	埴鉢 瓦質土器	器高:123mm口径: [280mm]底径:135mm 口縁部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒・小石・気泡を含む。 還元焼成。やや硬質。	口径に比べ底径は大きく口縁部体部 外傾度は小さい。口唇部は面取りで、 口縁部はやや外反。輪積成形。外面: 無調整。底部は回転糸切り後調整。内 面:磨耗痕。	内外面廃棄後二次 焼成。
2719	碗 青磁	器高:(33mm)口径: 一底径:60mm体部 ~高台部残	緻密。還元焼成。硬質。釉 色は灰緑。	体部の下端に稜を持ち、上端に外反。 輪高台。見込みに輪状刻花。貫入あり	竜泉窯系。
2748	鍋 瓦質土器	器高:(148mm)口径: [290mm]底径: $\frac{1}{2}$ 残	微砂粒を含む。還元焼成 硬質。外面は二次焼成。	口縁部外反・肥厚。外面:中押さえ・ なで。下削り調整。	覆土中位。

第6章 中世・近世の遺構と遺物

2井戸 2720	捏鉢 瓦質土器	器高:119mm 口径: [320mm] 底径:[120 mm] 残	砂粒・鉄分・気泡を含む 酸化後、還元焼成。硬質外 面は二次焼成。	口唇部は水平に外へ張り出す。輪積 成形。回転で調整。外面:中央、無調 整。内面:磨耗。	鍋として転用か。
2721	杯 土師質土 器	器高:32mm 口径:[129 mm] 底径:68mm 口縁部 ~底部 残	砂粒を含む。酸化。やや軟 質。橙。	口縁部~体部は直線的に広がる。轆 轤左回転。底部は回転糸切り。外面: 口縁部~体部は轆轤などで。内面:口縁 部~底部は轆轤などで。	
3井戸 2722	捏鉢 瓦質土器	器高:(580mm) 口径: 一底径:[140mm] 底部 小片	砂粒・鉄分を含む。酸化 後、還元焼成。硬質。	体部は輪積。底部は左回転糸切り成 形。体部の下端は押さえ調整。内面: 磨耗。	
12井戸 2723	鍋 瓦質土器	器高:(80mm) 口径: [276mm] 底径:一口縁 部小片	砂粒・鉄分を含む。還元焼 成。軟質。外面は二次焼 成。	口縁部は外反。土型成形。外面:上端 などで。下端、押さえ調整。	
2724	砥石	長さ:143mm 幅:36~ 32mm 厚さ:17~8mm		使用面は四面。	
2725	砥石	長さ:(53mm) 幅:26~ 18mm 厚さ:25~23mm		使用面は四面。	
13井戸 2726	杯 土師質土 器	器高:26mm 口径:143 mm 底径:[80mm] 口縁 部~底部 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い橙。	口縁部~体部は直線的に広がる。底 部は回転糸切り。外面:口縁部~体部 は轆轤などで。内面:口縁部~底部は轆 轤などで。	
14井戸 2727	鍋 瓦質土器	器高:(98mm) 口径: [279mm] 底径:一口縁 部小片	砂粒・鉄分を含む。還元焼 成。硬質。外面は二次焼 成。	口縁部は短く外反。内面に稜あり。土 型成形。外面:削り及びなどで。内面: で調整。	

Ⅰ地区B区1号井戸跡 (第733~736図、第207表)

当井戸跡は、B区1号古墳の墳丘上から検出された。B区1号古墳の墳丘は、大部分が削平されており、新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、遺物・覆土の相違から当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、長軸約2.2m・短軸約2.0m・確認面からの深さ約2.6mである。平面形は、不整形な楕円形を呈する。断面形は漏斗状であり、確認面から約1.2m及び約2.1mの所に段を持つ。当井戸跡の上部の覆土中には、石が投げ込まれた状態で詰まっていた。遺物は、内耳土器・鉢・砥石が出土している。遺物・井戸の形態から推定する当井戸跡の時期は、室町時代である。

(井川)

I 地区 B 区 2 号井戸跡 (第733・735図、第207表)

当井戸跡は、B区9a号住居跡と重複する。新旧関係は、当井戸跡がB区9a号住居跡の南東部分の壁・床・竈を破壊していることから、当井戸跡のほうが新しい。

当井戸跡の規模は、直径約1.2m・確認面からの深さ約3.4mであり、平面形は不整形な円形を呈し、断面形は円筒形を呈する。遺物は砥石が出土している。遺物・井戸の形態から推定する当井戸跡の時期は、中世～近世である。(井川)

I 地区 B 区 3 号井戸跡 (第733図)

当井戸跡は、B区4d号住居跡と重複する。新旧関係は、覆土の相違から、当井戸跡の方が新しい。当井戸跡の規模は、直径約0.9m・確認面からの深さ約0.9mであり、平面形は不整形な円形を呈し、断面形は円筒形を呈する。

遺物の出土は無く、時期の限定は困難であるが、井戸の形態・周辺の遺構との関係から推定する当井戸跡の時期は、中世～近世である。(井川)

I 地区 B 区 4 号井戸跡 (第733図)

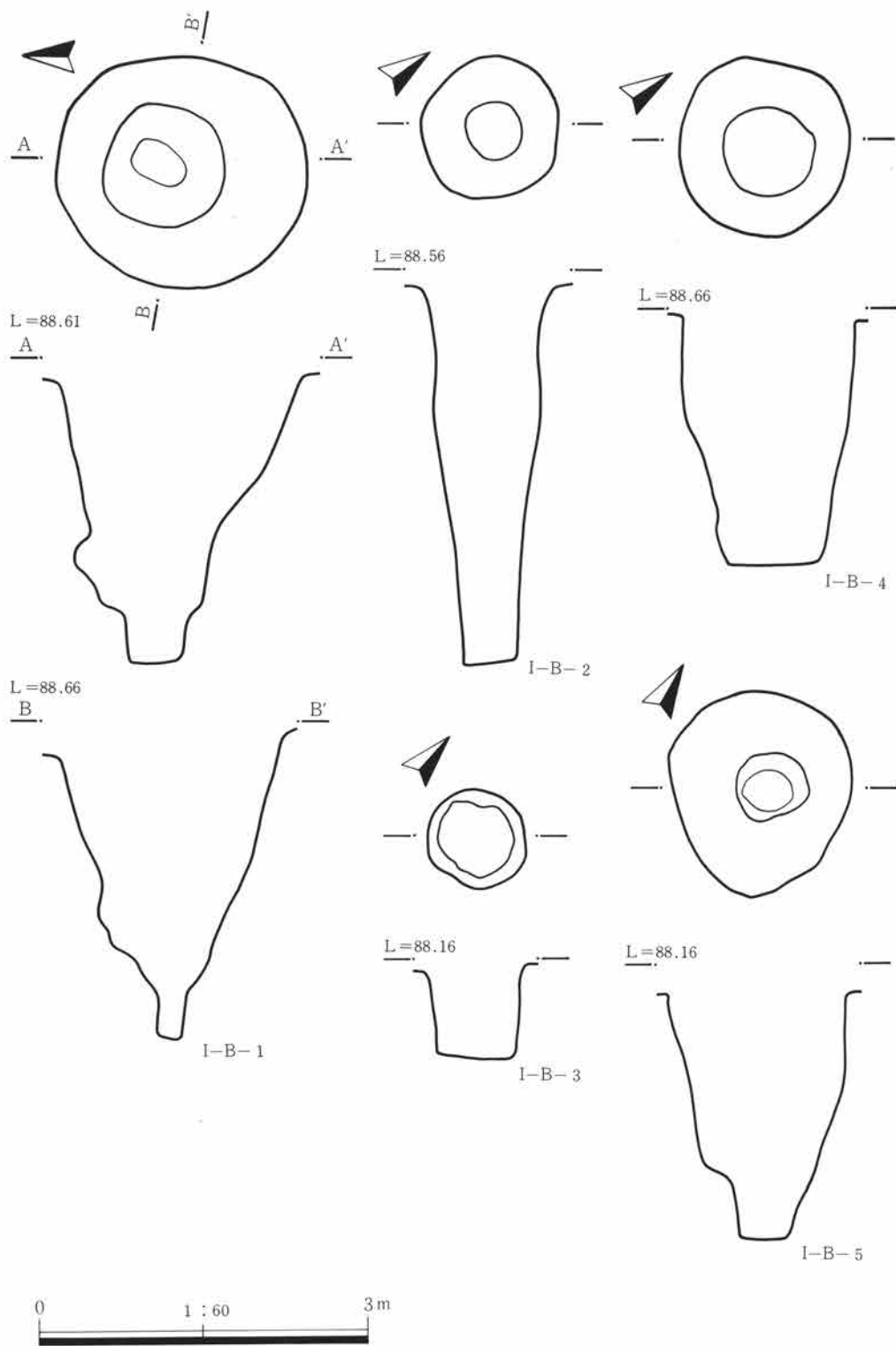
当井戸跡は、B区15a号住居跡と重複する。新旧関係は、出土遺物・覆土の相違から、当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、直径約1.6m・確認面からの深さ約2.3mであり、平面形は不整形な円筒形を呈し、断面形は上部の広がる円筒形を呈する。遺物の出土は無く、時期の限定は困難であるが、井戸の形態・周辺の遺構との関係から推定する当井戸跡の時期は、中世～近世である。(井川)

I 地区 B 区 5 号井戸跡 (第733・735・736図、第207表、図版137)

当井戸跡は、B区32号住居跡・B区2号古墳と重複する。B区32号住居跡との新旧関係は、当井戸跡が、同住居跡の北西部分の壁・床を破壊していることから、当井戸跡の方が新しい。B区2号古墳との新旧関係は、当井戸跡が同古墳の周溝の一部を破壊していることから、当井戸跡の方が新しい。

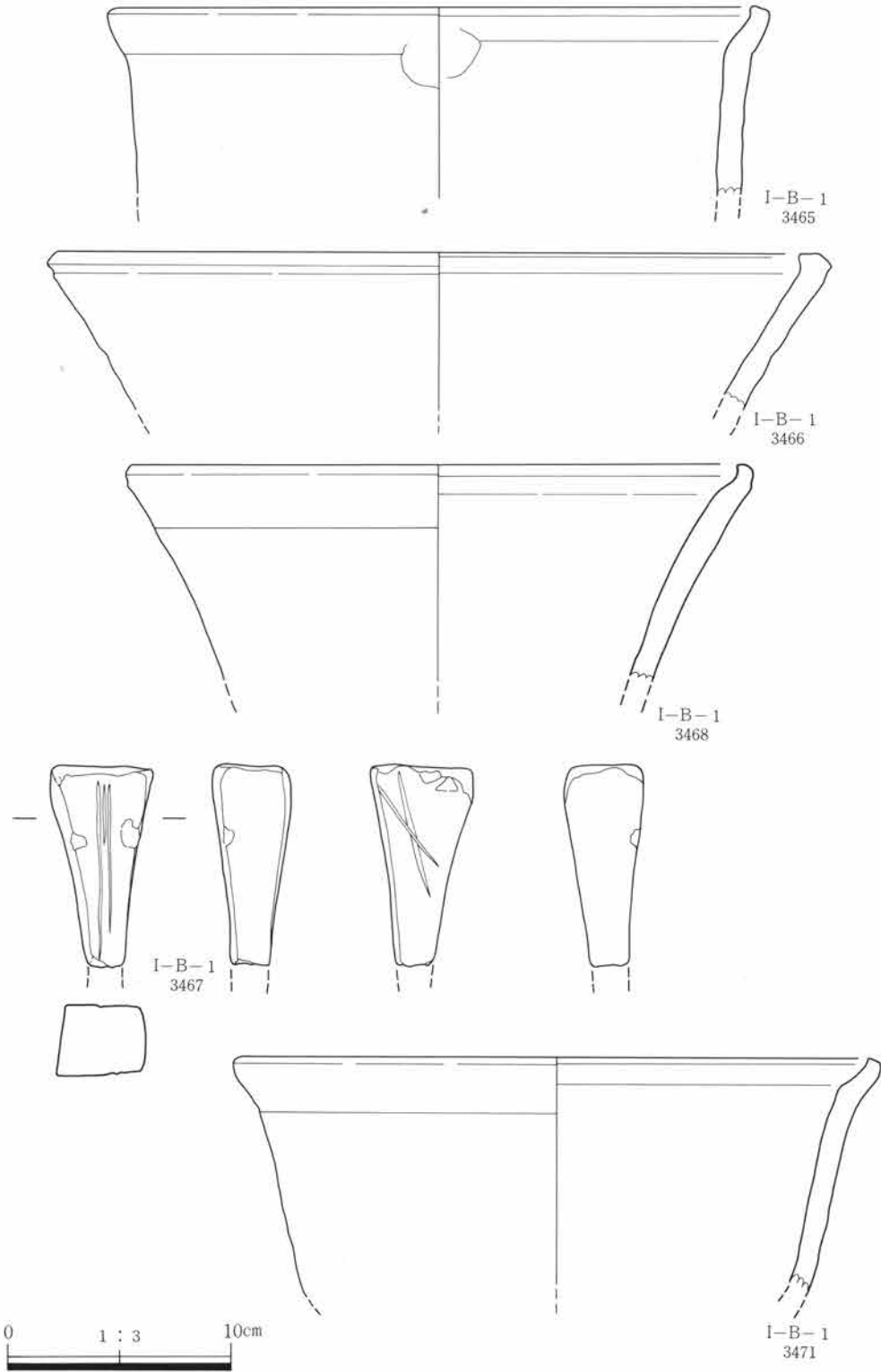
当井戸跡の規模は、長軸約1.8m・短軸約1.6m・確認面からの深さ約2.3mであり、平面形は不整形な円形を呈し、断面形は不整形な楕円形を呈する。遺物は、内耳土器・土器の鉢が出土している。遺物から推定する当井戸跡の時期は、室町時代である。(井川)



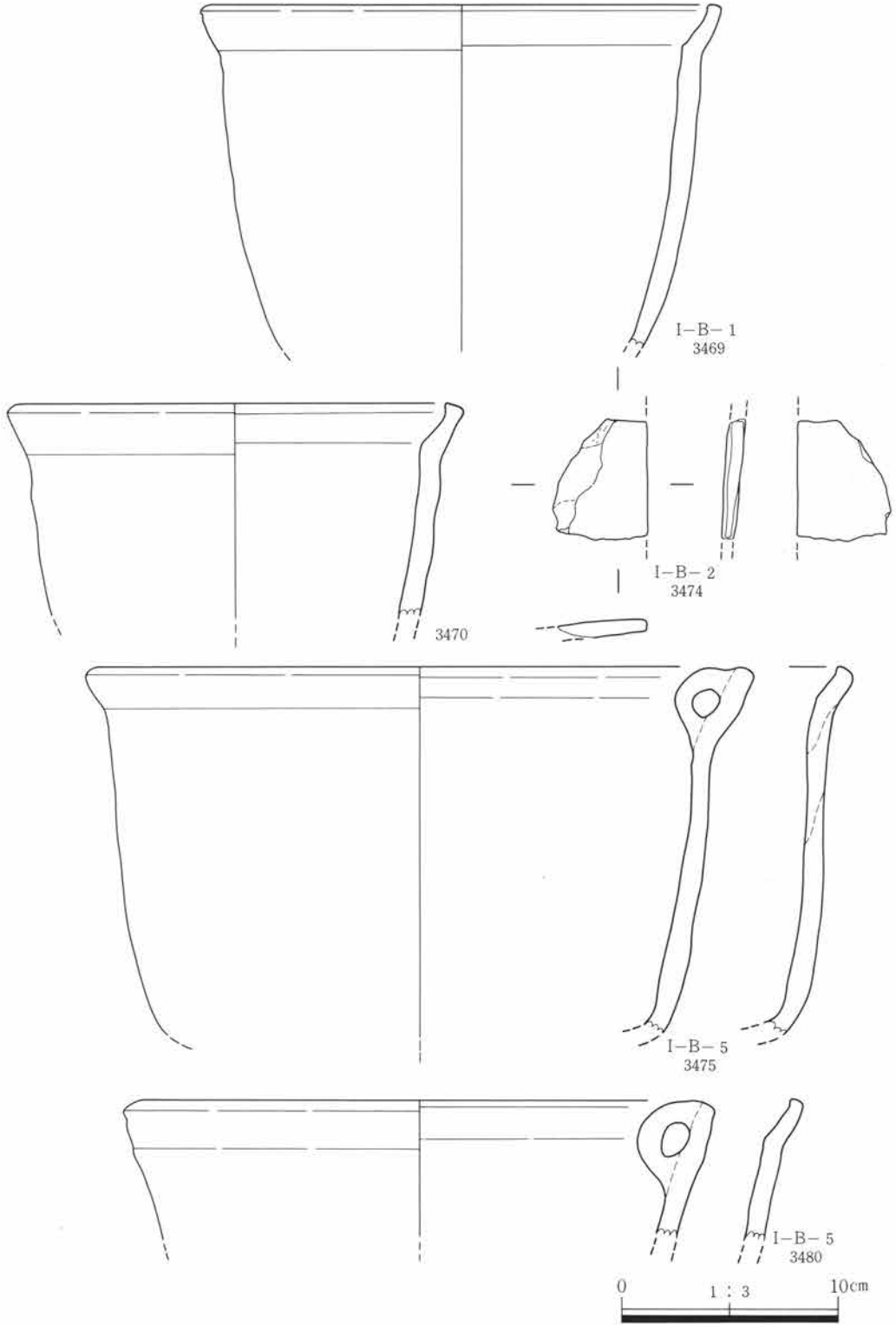
第733図 井戸遺構図



(5) 井戸跡

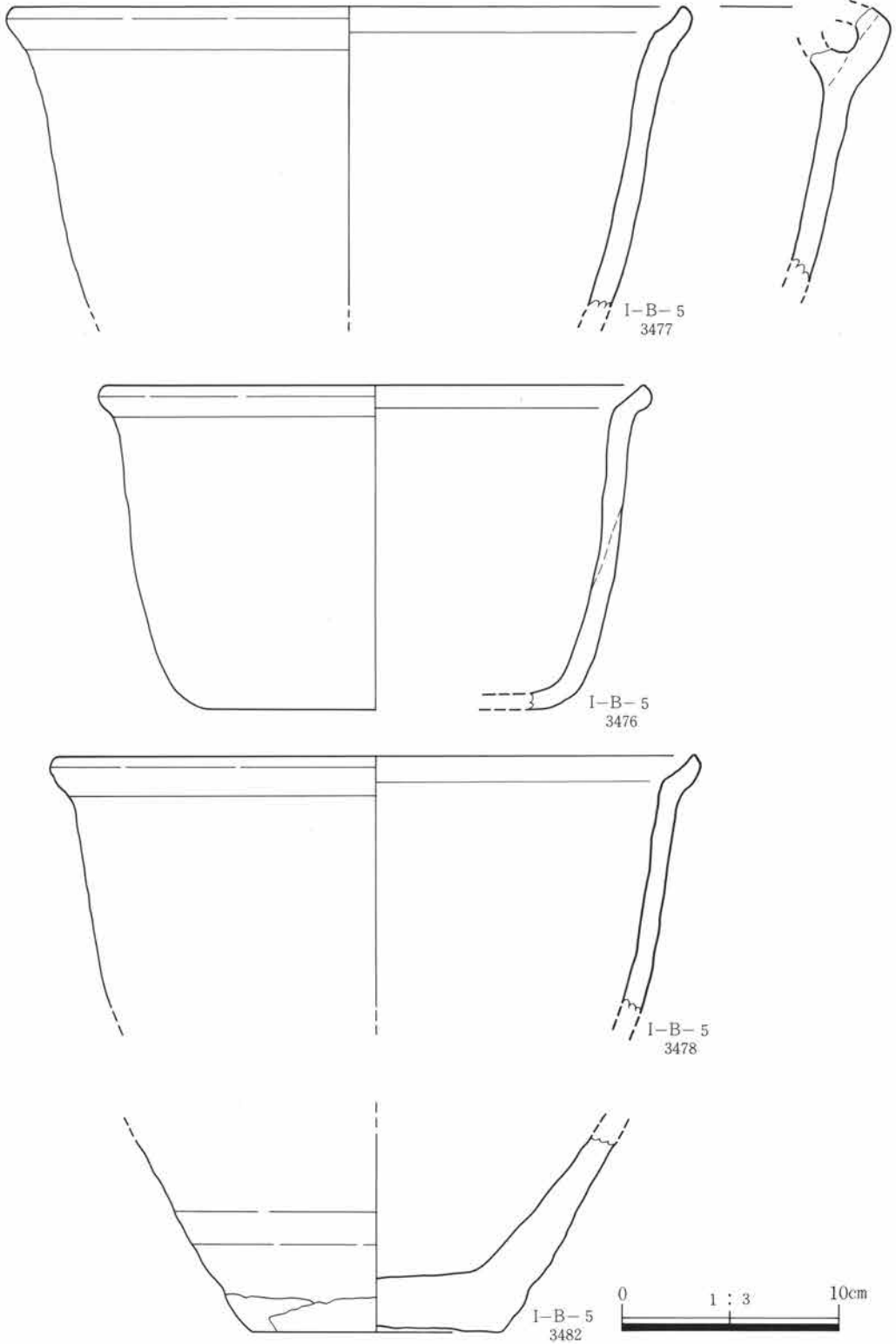


第734図 井戸遺物図(1)



第735図 井戸遺物図(2)

(5) 井戸跡



第736図 井戸遺物図(3)

第6章 中世・近世の遺構と遺物

第207表 井戸遺物観察表 (B区)

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
1井戸 3465	鍋 瓦質土器	器高:(83mm)口径: [195mm]底径:一口縁部小片	微砂粒を含む。還元中性焼成。硬質。	口縁部は小さく外傾。体部は直立。内面に稜あり。土型成形。内外面:軽いこぼめ調整。	
3466	捏鉢 瓦質土器	器高:(70mm)口径: [350mm]底径:一口縁部小片	砂粒・鉄分を含む。酸化中性焼成。硬質。	口唇部は内外面に稜あり。輪積成形。体部の外面:無調整。内面:やや磨耗。	
3467	砥石	長さ:(89mm)幅:45~17mm 厚さ:35~18mm	流紋岩(砥沢?)。	使用面は4面。	井戸内覆土。
3468	鍋 瓦質土器	器高:(103mm)口径: [280mm]底径:一口縁部小片	微砂粒を含む。還元中性焼成。硬質。	口縁部は外反。口唇部の内面に稜線あり。土型成形。内外面:軽いこぼめ調整。	
3469	鍋 瓦質土器	器高:(159mm)口径: [240mm]底径:一口縁部小片	砂粒・鉄分を含む。還元中性焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は小さく外傾。体部は直立。内面に稜あり。輪積土型成形。内外面:軽いこぼめ調整。	
3470	鍋 瓦質土器	器高:97mm口径:[240mm] 底径:一口縁部小片	砂粒・鉄分を含む。還元中性焼成。硬質。	口縁部は短く外反。輪積土型成形。外面:指あてこぼめ。内面:こぼめ調整。	
3471	鍋 瓦質土器	器高:(106mm)口径: [289mm]底径:一/〃残	微砂粒を含む。還元中性焼成。軟質。	口縁部は短く外反。輪積土型成形。内外面:軽いこぼめ調整。	
2井戸 3474	砥石	長さ:[54mm]幅:[43mm] 厚さ:[8mm]	流紋岩(砥沢?)。	使用面は2面。	井戸内覆土。
5井戸 3475	鍋 瓦質土器	器高:(167mm)口径: 308mm底径:一/〃残	砂粒を含む。還元中性焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は短く外反。体部は直立。耳部は中形。輪積土型成形。内外面:軽いこぼめ調整。	
3476	鍋 瓦質土器	器高:(147mm)口径: 255mm底径:[160mm] 残存:?	砂粒を含む。還元焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は小さく外傾。体部は直立。内面に稜あり。輪積土型成形。内外面:こぼめ調整。	
3477	鍋 瓦質土器	器高:(136mm)口径: [314mm]底径:一口縁部小片	砂粒・鉄分を含む。還元中性焼成。硬質。外面は二次焼成。	口縁部は短く外反。耳部は中形。内面に稜あり。輪積土型成形。内外面:軽いこぼめ調整。	3478と同一個体か?
3478	鍋 瓦質土器	器高:(120mm)口径: [300mm]底径:一口縁部小片	砂粒・鉄分を含む。還元中性焼成。硬質。外面は二次焼成。	口縁部は短く外反。内面に稜あり。輪積土型成形。内外面:軽いこぼめ調整。	3477と同一個体か?
3480	鍋 瓦質土器	器高:(63mm)口径: [272mm]底径:一口縁部耳部小片	砂粒・気泡を含む。還元焼成。硬質。外面は二次焼成。	口縁部は短く外反。耳部は中形。輪積土型成形。内外面:軽いこぼめ調整。	鉄分付着。

3482	捏鉢 瓦質土器	器高:90口径:一底 径:114mm片残	小石・鉄分粒を多く含む。 酸化後還元。硬質。外面は 二次焼成。	底部の器壁は厚く重い。体部は直立 ぎみ。体部は輪積。底部は右回転糸切 り成形。体部の下端は削り調整。内 面:磨耗。	煤は付着せず。
------	------------	-------------------------	---------------------------------------	--	---------

#### I 地区C区1号井戸跡 (第737・739図、第208表)

当井戸跡は、C区11号住居跡と重複する。新旧関係は、当井戸跡がC区11号住居跡の南西部分の壁・床を破壊していることから、当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、長軸約2.5m・短軸約2.0m・確認面からの深さ約2.7mであり、平面形は不整形な楕円形を呈し、断面形は上部の広がった円筒形を呈する。又、井戸底面は、凹状に窪んでいる。遺物は、内耳土器が出土している。遺物・井戸の形態から推定される当井戸跡の時期は、室町時代である。  
(井川)

#### I 地区C区2号井戸跡 (第737・740図、第208表)

当井戸跡は、C区7号方形周溝墓と重複する。新旧関係は、当井戸跡がC区7号方形周溝墓の周溝の一部を破壊していることから、当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、直径約2.0m・確認面からの深さ約2.3mであり、平面形は不整形な円形を呈し、断面形は上部が大きく広がった円筒形を呈する。井戸跡の底部近くの北西部分には、径約0.2mの横穴があいている。又、井戸跡の上部からは、投げ込まれた状態の石が発見できた。遺物は、内耳土器が出土している。遺物・井戸の形態から推定される当井戸跡の時期は、室町時代である。  
(井川)

#### I 地区C区3号井戸跡 (第737図)

当井戸跡は、C区2号方形周溝墓と重複する。新旧関係は、当井戸跡がC区2号方形周溝墓の周溝の一部を破壊していることから、当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、直径約1.6m・確認面からの深さ約3.0mであり、平面形は不整形な円形を呈し、断面形は上部の広がる円筒形を呈する。確認面から下約0.2~0.9mの間には、投げ込まれた石が詰まっている状態であった。遺物の出土はなく、時期の限定は困難であるが、井戸の形態・周辺の遺構との関係から推定される当井戸跡の時期は、江戸時代前期である。  
(井川)

I 地区C区5号井戸跡 (第737図)

当井戸跡は、C区5号方形周溝墓と重複する。新旧関係は、当井戸跡がC区5号方形周溝墓の周溝の一部を破壊していることから、当井戸跡のほうが新しい。

当井戸跡の規模は、直径約1.2m・確認面からの深さ約1.8mであり、平面形は不整形な円形を呈し、断面形は円筒形を呈する。確認面から下約0.7mまでの間には、投げ込まれた石が詰まっている状態であった。遺物の出土はなく、時期の限定は困難であるが、井戸の形態・周辺の遺構との関係から推定される当井戸跡の時期は、中世～近世である。 (井川)

I 地区C区6号井戸跡 (第738・740・741図、第208表、図版137・138)

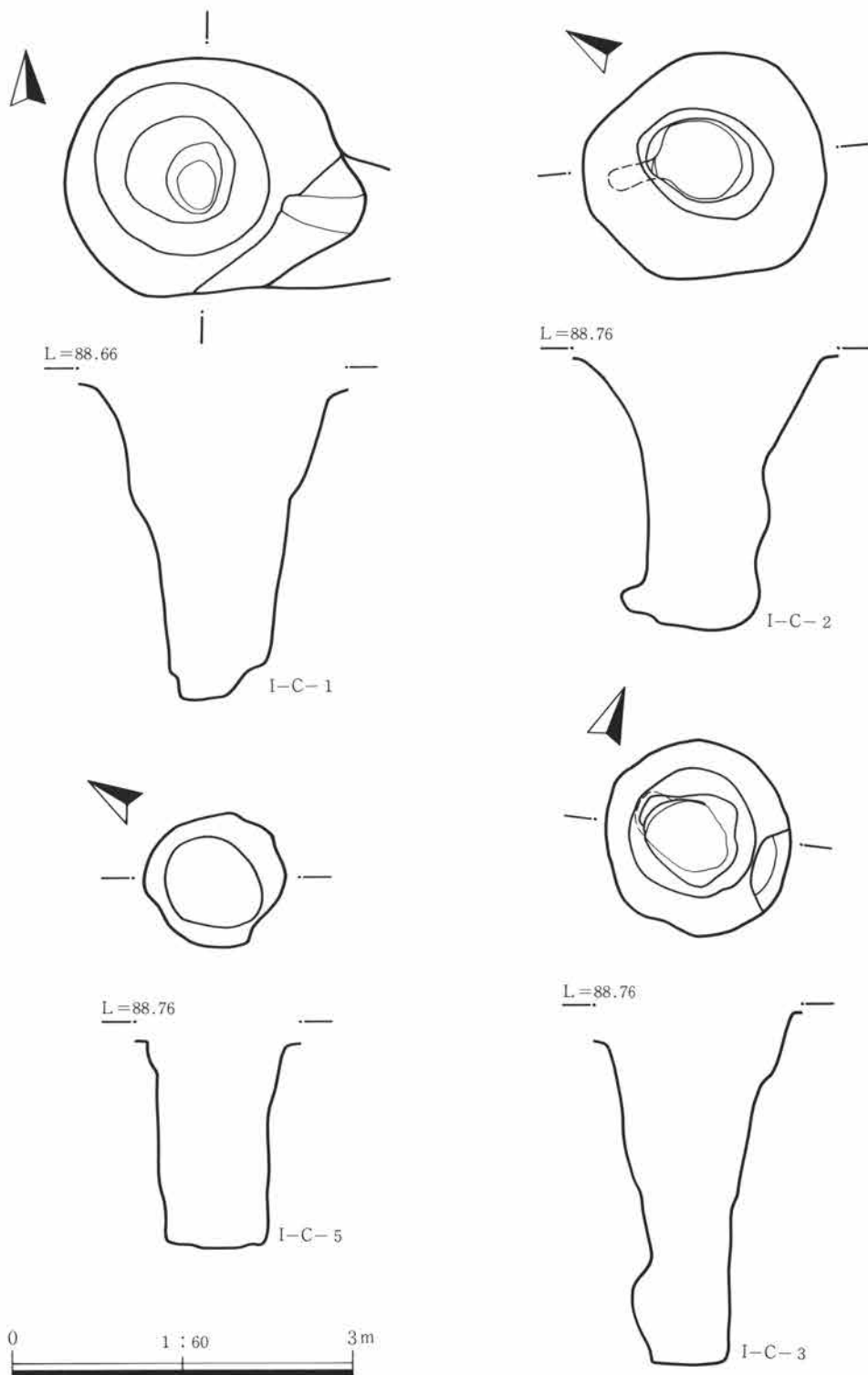
当井戸跡は、C区5号井戸跡の北東部に近接して検出されたが、重複関係はない。当井戸跡は確認面から約1.2mのところ段を持ち、2段構造となっている。規模は、確認面から約1.2mまでが、長軸約2.7m・短軸約2.5mであり、平面形は不整形な楕円形を呈し、断面形は上部の広がった円筒形を呈する。約1.2mから下は、長軸約1.1m・短軸約1.0mであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。全体の確認面からの深さは、出水のために確定できないが約5.5mである。

当井戸跡の上段は、周壁をロームまじりの褐色土・ロームブロックで固めた状態で検出された。当井戸跡の上部の覆土は、浅間A軽石を含んでいる。遺物は、陶器の摺鉢・磁器の小鉢・砥石・板碑が出土している。覆土・遺物・井戸の形態から推定される当井戸跡の時期は、江戸時代の後半である。 (井川)

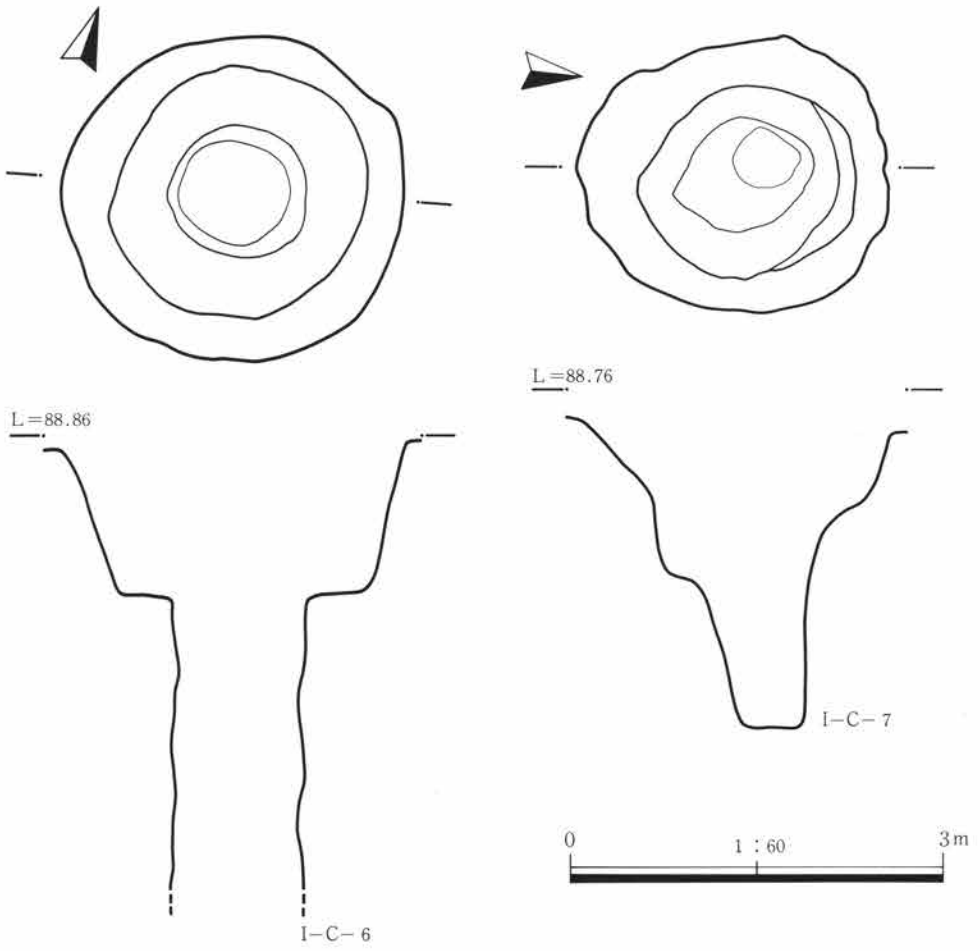
I 地区C区7号井戸跡 (第738・740・742図、第208表、図版138・139)

当井戸跡は、C区1号館跡・C区4号溝跡・C区8号溝跡と重複する。新旧関係は不明である。当井戸跡の規模は、長軸約2.5m・短軸約2.1m・確認面からの深さ約2.5mであり、平面形は不整形な楕円形を呈し、断面形は上部の大きく広がった円筒形を呈する。

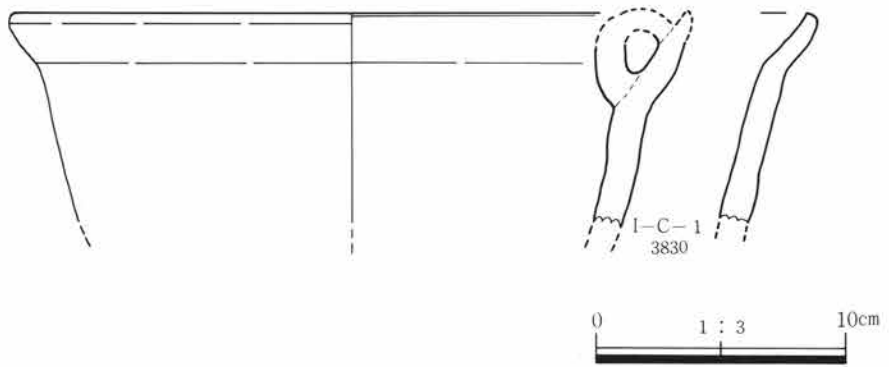
当井戸跡の確認面から約0.3～0.9mの間には、石が投げ込まれた状態で詰まっていた。遺物は、石臼・五輪塔が出土している。遺物・井戸の形態から推定される当井戸跡の時期は、中世～近世である。 (井川)



第737図 井戸遺構図(1)



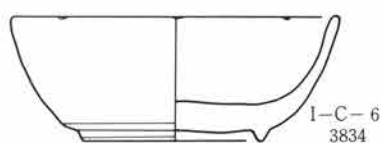
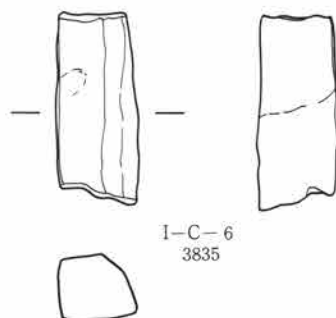
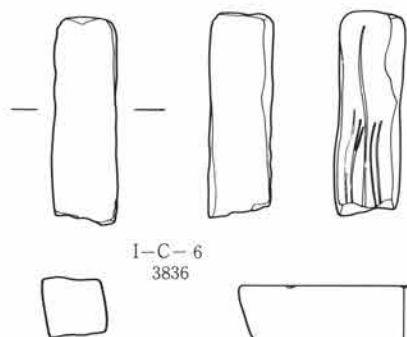
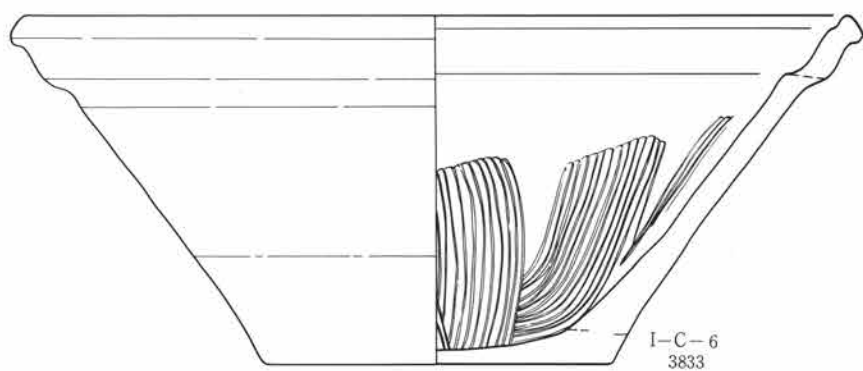
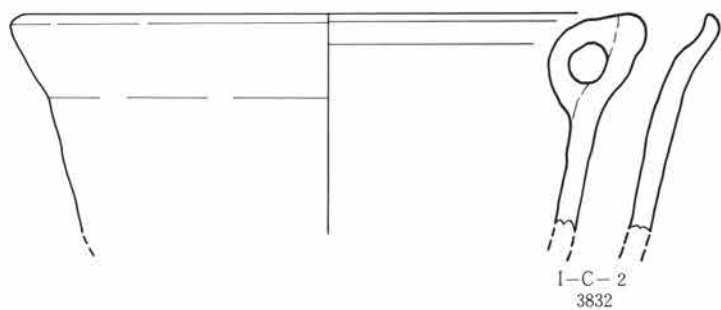
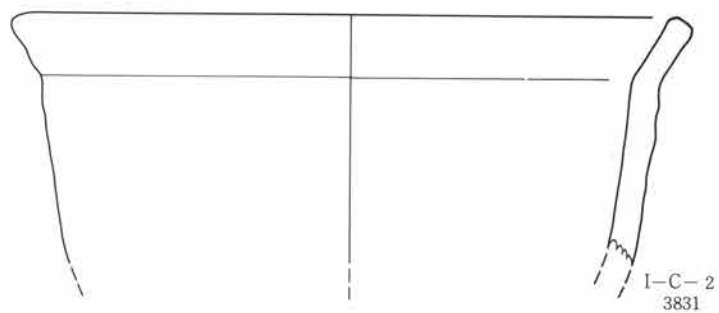
第738図 I地区C区6・7号井戸遺構図(2)



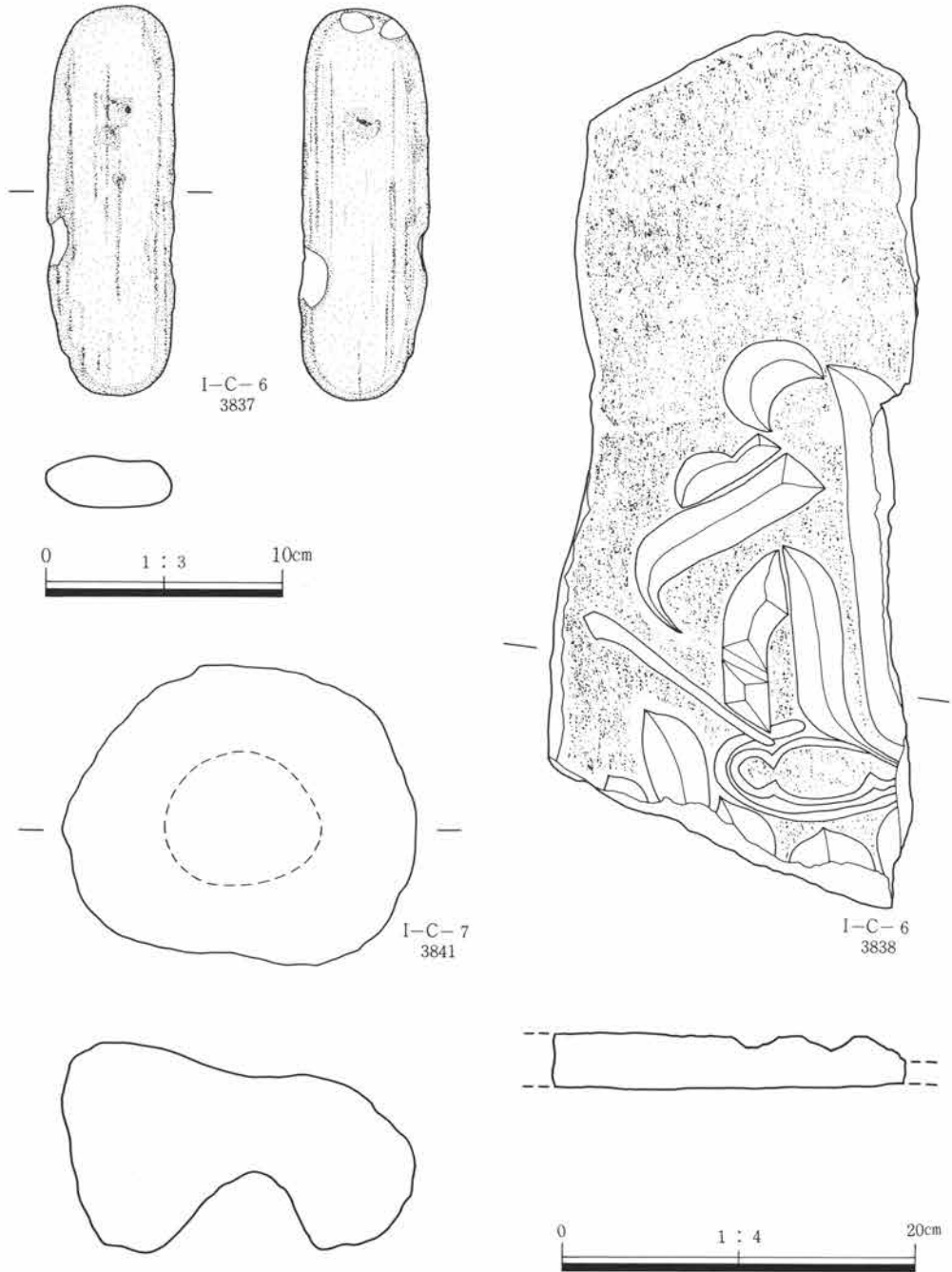
第739図 井戸遺物図(1)



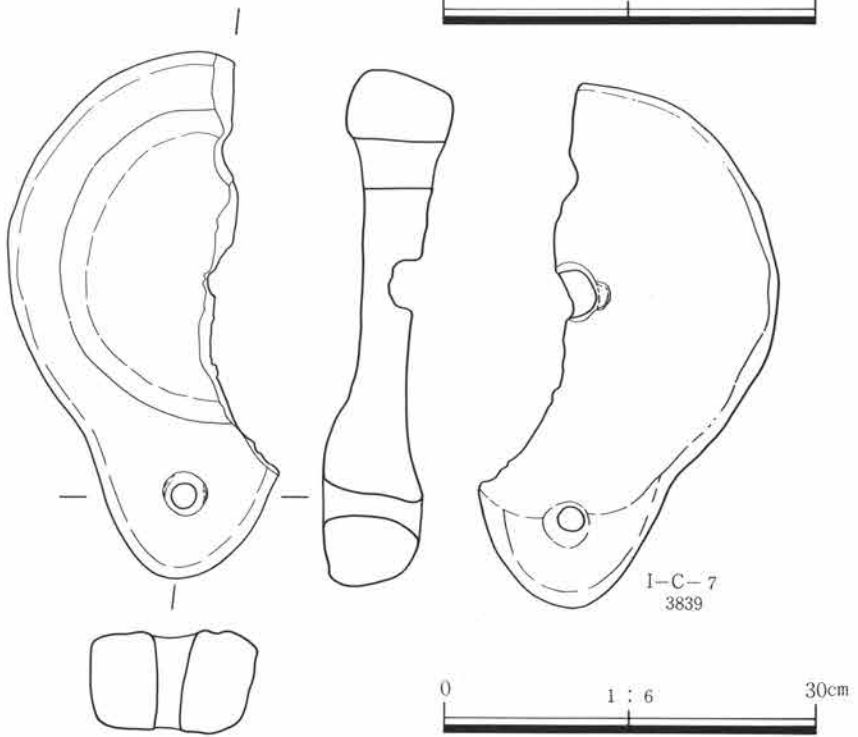
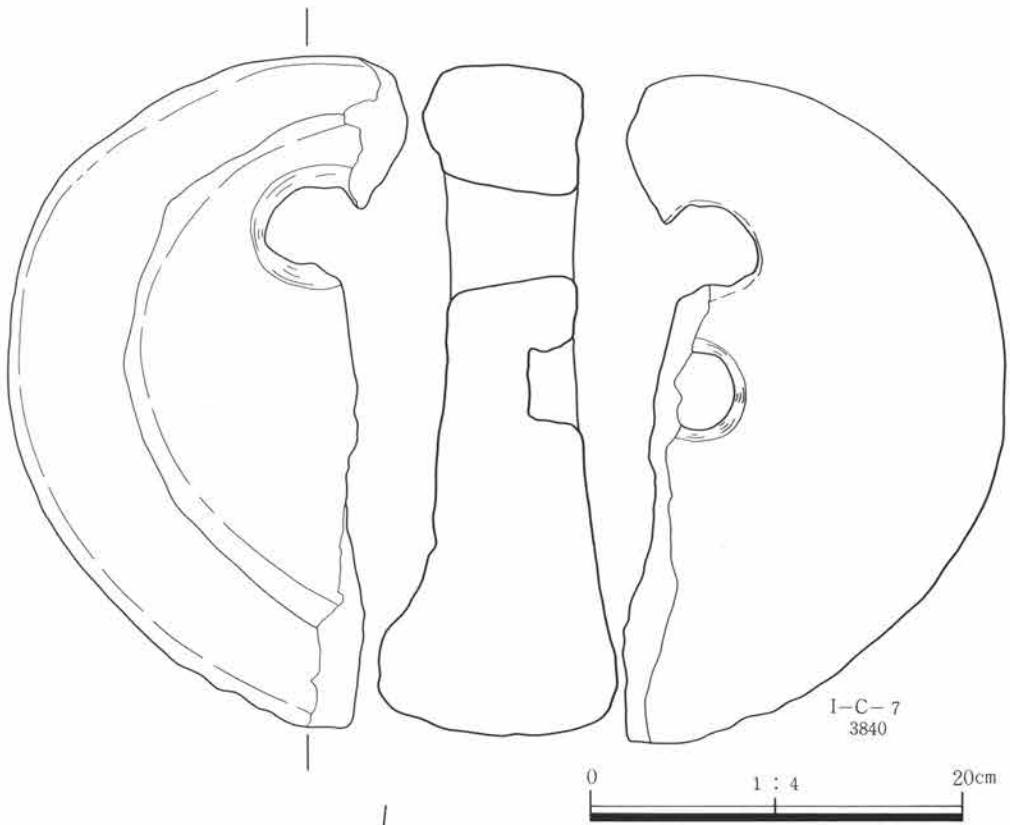
(5) 井戸跡



第740図 井戸遺物図(2)



第741図 井戸遺物図(3)



第742図 井戸遺物図(4)

第6章 中世・近世の遺構と遺物

第208表 井戸遺物観察表 (C区)

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
1井戸 3830	鍋 瓦質土器	器高:(84mm)口径: [272mm]底径:一口縁 部耳部小片	砂粒を含む。還元焼成。軟質。	口縁部は短く外反。耳部は中形。輪積成形。などで調整。外面:耳下布あて痕。	
2井戸 3831	鍋 瓦質土器	器高:(99mm)口径: [272mm]底径:一口縁 部小片	砂粒・鉄分を含む。還元中性焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は短く外反。内面に稜あり。輪積成形。などで調整。	
3832	鍋 瓦質土器	器高:(82mm)口径: [255mm]底径:一口縁 部耳部小片	微砂粒・鉄分を含む。還元焼成。硬質。外面は二次焼成。	口縁部は外反。口唇部の内面は稜あり。耳部は中形。輪積成形。軽いこぼめ調整。	
6井戸 3833	播鉢 陶器錆釉	器高:138mm口径:328 mm底径:138mm $\frac{1}{2}$ 残	小石・雲母粒・気泡を含む。還元中性焼成。軟質。	口縁部は有段で外へ張る。内面:稜あり。やや歪む。15本歯左回りで放射状。すりめ。底部の端以外は全面施釉。	瀬戸美濃系。
3834	輪花皿 染付白磁	器高:49mm口径:132 mm底部:71mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。硬質。	口縁部は体部より緩く内反。底部はやや厚く高台部の断面は三角形。コバルト釉。内面:竹林文。見込みに手書き五弁花。外面の体部に唐草文。底部に字形不明角銘。	肥前系。
3835	砥石	長さ:(76mm)幅:34~ 18mm厚さ:26~13mm	流紋岩(砥沢?)。	使用面は二面。	
3836	砥石	長さ:(81mm)幅:26~ 23mm厚さ:24mm	流紋岩(砥沢?)。	使用面は三面。	
3837	?	縦横長:161mm×53mm 厚さ:21mm	緑色片岩。	用途不明。	
7井戸 3839	石白	長径:[420mm]短径: [330mm]厚さ:85mm $\frac{1}{2}$ 残	砂岩。	上白。中心に円筒状の芯棒受けあり。円形の白部に挽手穴部が一体となった形。	
3840	石白	直径:[360mm]厚さ: 120~80mm $\frac{1}{2}$ 残	砂岩。	上白。中心に円筒状の芯棒受けあり。供給面は上端が大きく下端が小さくなっている。	
3838	板碑	(後述)			
3841	五輪塔 水輪	長径:200mm短径:164 mm高さ:116mm重量: 3.030g完形	榛名ニツ岳軽石	整形やや良。上面は、ほぼ平坦。下面に径89mm、深44mmの摺鉢状の凹あり。平鑿の加工痕あり。	

## I 地区D区1号井戸跡 (第743図)

当井戸跡は、C区1号館跡の堀内に位置するが、同館跡に属するかどうかは不明である。当井戸跡の規模は、長軸約2.1m・短軸約1.8m・確認面からの深さ約1.5mであり、平面形は不整形な楕円形を呈し、断面形は上面の大きく広がった円筒形を呈する。

遺物の出土はなく、時期の限定は困難である。

(井川)

## I 地区D区2号井戸跡 (第743図)

当井戸跡に重複関係はないが、C区1号館跡の堀が西側に接する。当井戸跡は、確認面から約1.5mのところ段を持ち、2段構造となっている。規模は、確認面から約1.5mまでが長軸約2.6m・短軸約2.3mであり、平面形は不整形な楕円形を呈し、断面形は上部のやや広がった円筒形を呈する。約1.5mから下は、長軸約0.8m・短軸約0.7mであるが、深さは出水のために不明である。平面形は不整形な楕円形を呈し、断面形は円筒形を呈すると考えられる。

当井戸跡の上段部分は、下段に合わせた大ききで丁寧に石が積み上げて井戸枠としており、周囲の壁との間にはロームが詰め込まれていた。当井戸跡からは遺物の出土がなく、時期の限定は困難であるが、井戸の形態・周辺の遺構との関係から推定される当井戸跡の時期は、中世～近世である。

(井川)

## I 地区D区3号井戸跡 (第743・745・746図、第209表)

当井戸跡は、D区1号古墳の墳丘から検出された。D区1号古墳の墳丘は大部分が削平されており、新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、遺物・覆土の相違から当井戸跡の方が新しい。当井戸跡の規模は、直径約0.9m・確認面からの深さ約2.0mであり、平面形は不整形な円形を呈し、断面形は円筒形を呈する。遺物は、内耳土器・土器の摺鉢・五輪塔が出土している。遺物・井戸の形態から推定する当井戸跡の時期は、中世である。

(井川)

## I 地区D区4号井戸跡 (第743図)

当井戸跡は、D区1号古墳・C区1号館跡の北側の堀と重複する。D区1号古墳との新旧関係は、同古墳の墳丘の大部分が削平されており、新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、覆土の相違から当井戸跡の方が新しい。C区1号館跡との新旧関係は不明であるが、両遺構共に覆土中には浅間A軽石が含まれており、時間的な大差はないものと推定している。

当井戸跡の規模は、C区1号館跡の堀との重複部分で確認できず不明であるが、径約2.5m・確認面からの深さ約1.3mであり、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈し、断面形は漏斗状を呈するものと推定される。遺物の出土はなく、時期の限定は困難であるが、井戸の形態・覆土の状態から推定される当井戸跡の時期は、江戸時代の後半以降である。

(井川)

## 第6章 中世・近世の遺構と遺物

### I 地区D区5号井戸跡 (第743・746図、第209表、図版140)

当井戸跡は、D区1号古墳の墳丘上で確認された。D区1号古墳の墳丘は大部分が削平されており、新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、遺物・覆土の相違から当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、西側の一部が調査区域外になるために確定できないが、長軸約1.8mであり、平面形は不整形な楕円形を呈するものと考えられる。確認面からの深さは、出水のために確認できなかったが、断面形は上部の広がる円筒形を呈するものと推定される。遺物は、石臼が出土している。遺物・井戸の形態から推定される当井戸跡の時期は、中世～近世である。(井川)

### I 地区D区6号井戸跡 (第744図)

当井戸跡は、D区1号方形周溝墓と重複する。新旧関係の直接的な確認はできなかったが、覆土の相違から当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、南側の一部が調査区域外のために確定できないが、直径約1.7mであり、平面形は不整形な円形を呈するものと考えられる。確認面からの深さは、出水のために不明であるが、断面形は上部の広がる円筒形を呈するものと推定される。当井戸跡の上面は投げ込まれた石が詰まっている状態であった。遺物の出土はなく、時期の限定は困難であるが、井戸の形態・周辺の遺構との関係から推定される当井戸跡の時期は中世～近世である。(井川)

### I 地区D区7号井戸跡 (第744・745図、第209表)

当井戸跡は、C区1号館跡の堀内に位置するが、同館跡に属するかどうかは不明である。当井戸跡の規模は、直径約1.0m・確認面からの深さ約1.6mであり、平面形は不整形な円形を呈し、断面形は円筒形を呈する。

覆土は径1mmの軽石を含んでいる。遺物は、土器の皿・土器の摺鉢・カワラケの杯が出土している。遺物・井戸の形態・覆土の状態から推定される当井戸跡の時期は、室町時代である。

(井川)

### I 地区D区8号井戸跡 (第744図)

当井戸跡は、C区1号館跡の堀内に位置するが、同館跡に属するかどうかは不明である。当井戸跡の規模は、長軸約1.9m・短軸約1.5mであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。確認面からの深さは出水のために確定できないが、断面形は上部の広がった円筒形を呈するものと考えられる。上部の覆土には軽石が含まれている。

当井戸跡からは遺物の出土はなく、時期の限定は困難であるが、井戸の形態・覆土の状態・周辺の遺構との関係から推定する当井戸跡の時期は、中世～近世である。(井川)

## I 地区D区9号井戸跡 (第744図)

当井戸跡は、D区4号古墳と重複する。新旧関係は、当井戸跡がD区4号古墳の周堀の一部を破壊していることから、当井戸跡の方が新しい。又、当井戸跡は、C区1号館跡の堀内に位置するが、同館跡に属するかどうかは不明である。

当井戸跡の規模は、直径約1.0m・確認面からの深さ約1.7mであり、平面形は不整形な円形を呈し、断面形は円筒形を呈する。当井戸跡の上面には、石が投げ込まれた状態で詰まっていた。当井戸跡からは遺物の出土はなく、時期の限定は困難であるが、井戸の形態・周辺の遺構との関係から推定する当井戸跡の時期は、中世～近世である。 (井川)

## I 地区D区10号井戸跡 (第744図)

当井戸跡は、C区1号館跡の堀内に位置するが、同館跡に属するかどうかは不明である。当井戸跡の規模は、直径約1.0m・確認面からの深さ約2.2mであり、平面形は不整形な円形を呈し、断面形は円筒形を呈する。

当井戸跡からは遺物の出土はなく、時期の限定は困難であるが、井戸の形態・周辺の遺構との関係から推定する当井戸跡の時期は、中世～近世である。 (井川)

## I 地区D区11号井戸跡 (第744図)

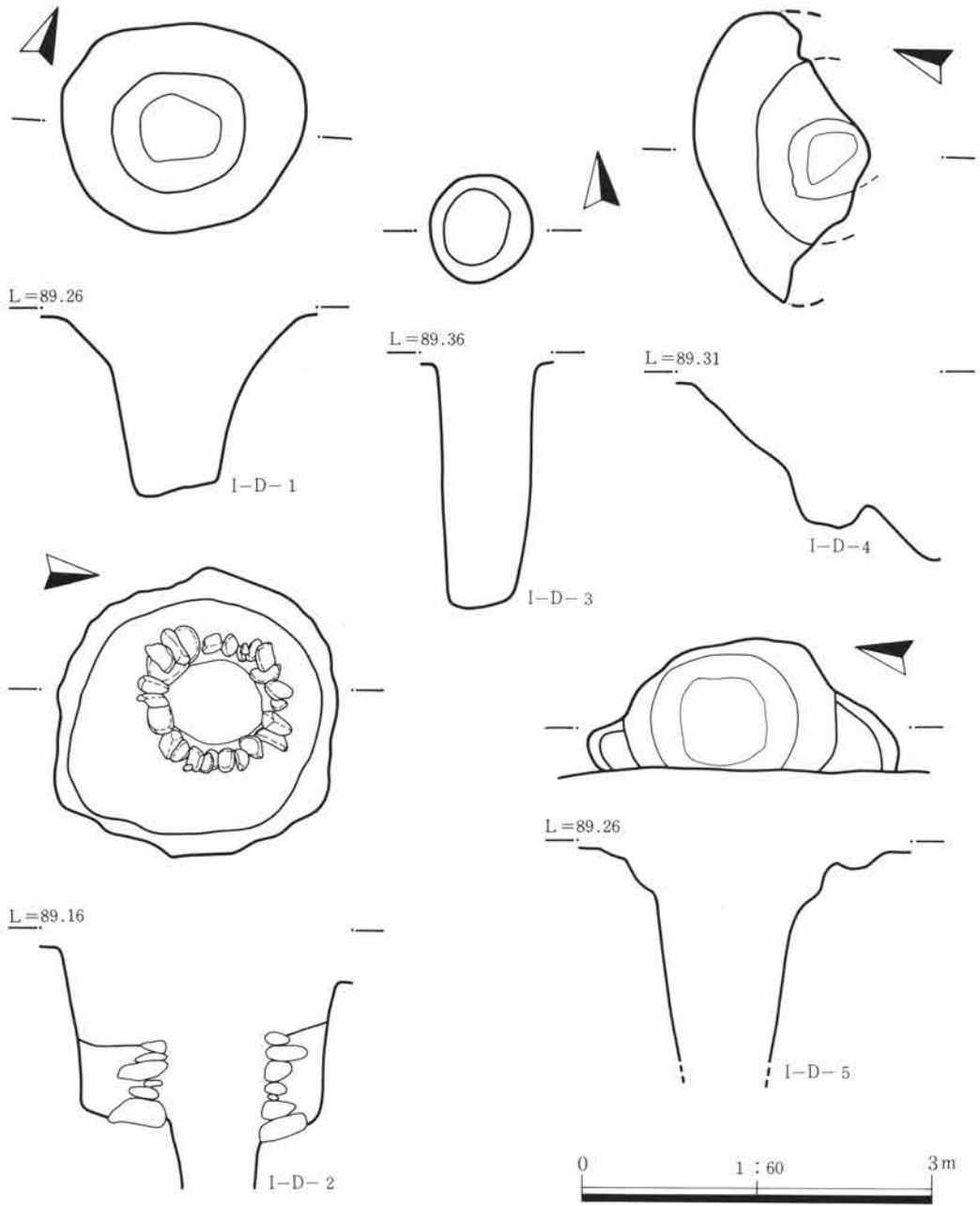
当井戸跡には重複関係はないが、D区6号古墳・D区7号古墳が近接する。当井戸跡の規模は、北側部分が現代の生活道路にかかり、未調査のために不明であるが、径約1.6mで、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈し、断面形は上部の広がった円筒形を呈するものと考えられる。

当井戸跡からは遺物の出土はないが、上部の覆土中には径1～2mmの軽石が含まれている。当井戸跡の時期の限定は困難であるが、井戸の形態・覆土の状態・周辺の遺構との関係から推定する当井戸跡の時期は、中世～近世である。 (井川)

## I 地区D区12号井戸跡 (第744図)

当井戸跡は、C区1号館跡の堀内に位置するが、同館跡に属するかどうかは不明である。当井戸跡の規模は、長軸約1.1m・短軸約0.9m・確認面からの深さ約1.4mであり、平面形は不整形な楕円形を呈し、断面形は上部のやや広がった円筒形を呈する。

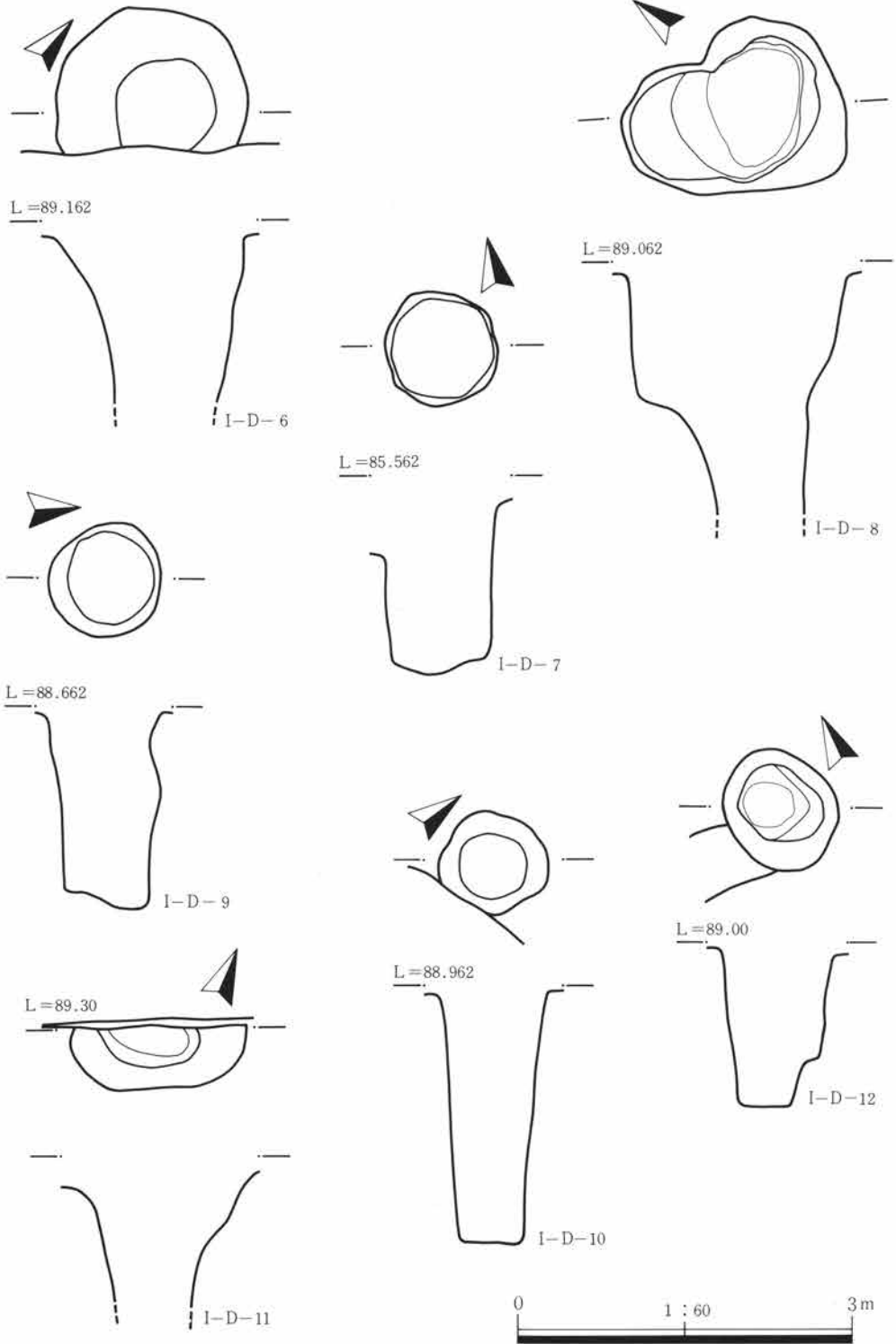
当井戸跡からは遺物の出土はないが、上部の覆土中には径1～2mmの軽石が含まれている。当井戸跡の時期の限定は困難であるが、井戸の形態・覆土の状態・周辺の遺構との関係から推定する当井戸跡の時期は、中世～近世である。 (井川)



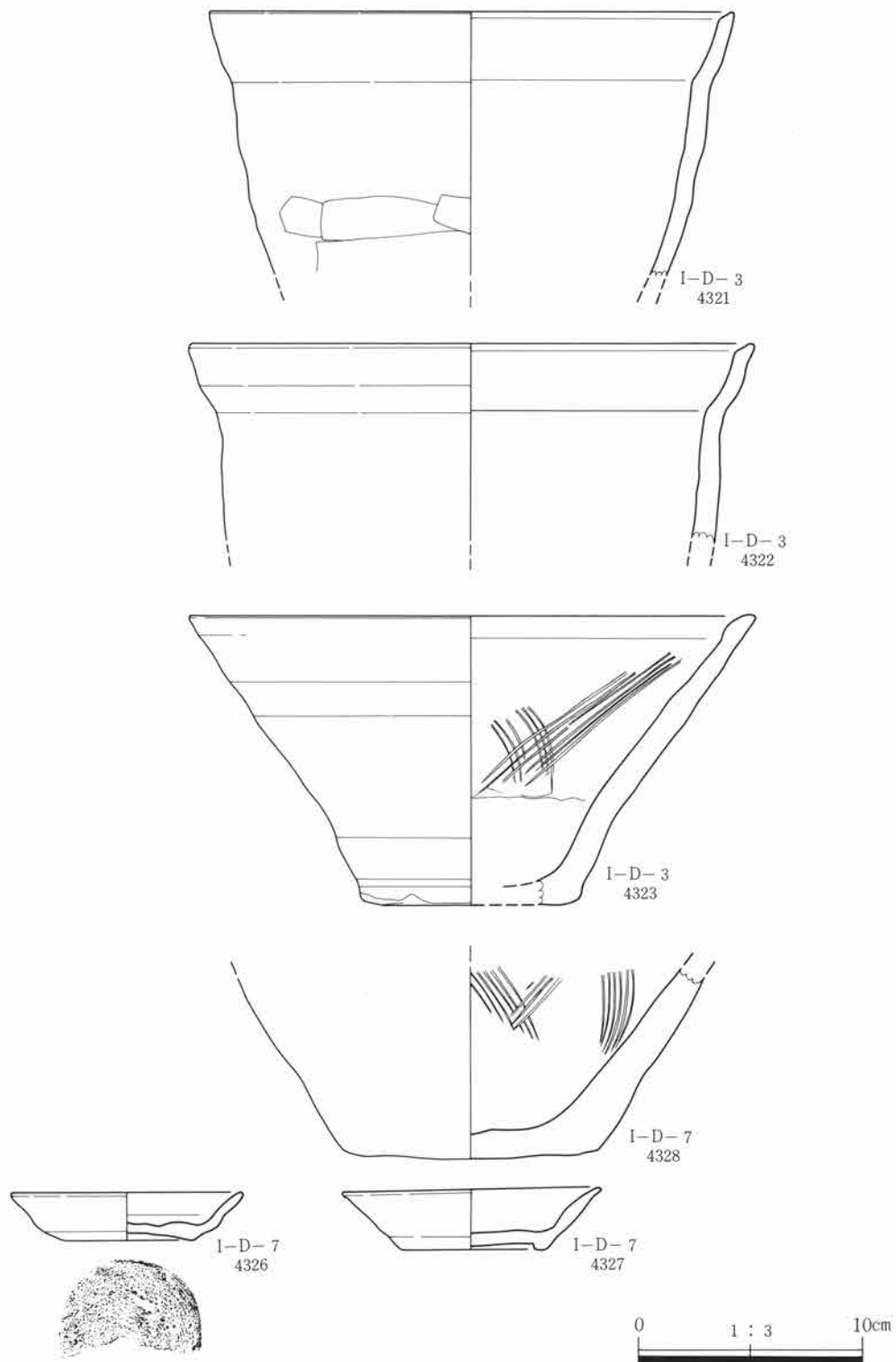
第743図 井戸遺構図(1)



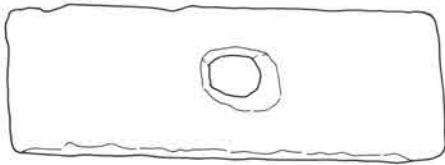
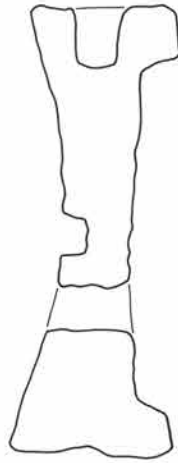
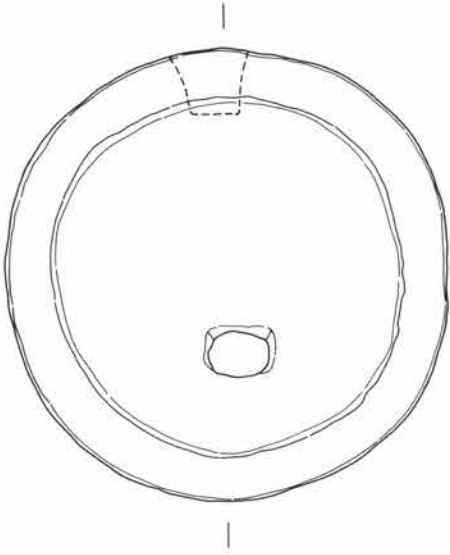
(5) 井戸跡



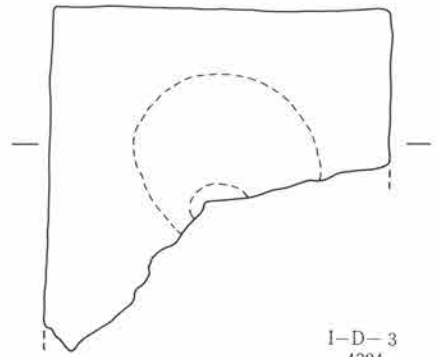
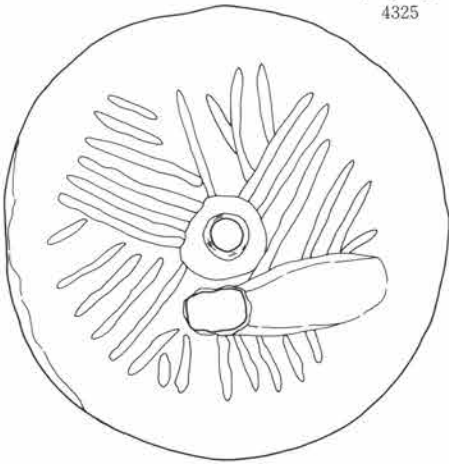
第744図 井戸遺構図(2)



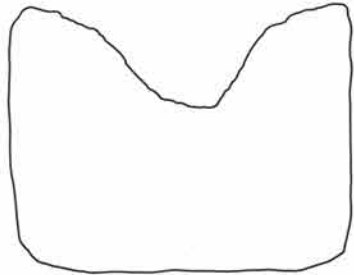
第745図 井戸遺物図(1)



I-D-5  
4325



I-D-3  
4324



第746図 井戸遺物図(2)

第209表 井戸遺物観察表（D区）

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
3井戸 4321	鍋 瓦質土器	器高:(116mm)口径: [240mm]底径:一口縁 部小片	砂・石英・鉄分粒を含む。 還元焼成。硬質。外面は二 次焼成。	口縁部は短く外反。内面に稜あり。輪 積成形。外面:下端、削り。外面上端及 び内面:軽いなで調整。	4322に似る。
4322	鍋 瓦質土器	器高:(86mm)口径: [240mm]底径:一口縁 部小片	砂・石英・鉄分粒を含む。 還元焼成。硬質。外面は二 次焼成。	口縁部は短く外反。内面に稜あり。輪 積成形。内外面:軽いなで調整。	4321に似る。
4323	搦鉢 瓦質土器	器高:127mm口径: [250mm]底径:[100 mm]½残	砂粒・鉄分・気泡を含む。 酸化後中性焼成。硬質。	口唇部は内面に緩い稜あり。輪積成 形。外面の中央は無調整。内面:6本 歯交叉状すりめ。中央は磨耗。	
5井戸 4325	石白	直径:350mm厚さ:120 mm完形	粗粒安山岩(輝石安山 岩)。	上白。中心に円筒状の芯棒受けあり。 供給面の平面径は隅丸方形、上面が 大きく、下面が小さい。側面に挽手穴 がある。	
7井戸 4326	皿 土質質土 器	器高:21mm口径:[103 mm]底径:[57mm]口縁 部~底部½残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。橙。	轆轤左回転。底部は回転糸切り。外 面:口縁部~体部は轆轤なで。内面: 口縁部~体部は轆轤なで、底部はな で。	
4327	小皿 陶器長石 釉	器高:26mm口径:115 mm底径:64mm½残	微気泡を含む。淡黄。軟 質。廃棄後二次焼成。	体部は緩く外反。削り込み高台。全面 長石釉・灰釉。見込みの釉は厚く、暗 緑色。高台にも釉溜まり。貫入あり。 底部に重ね焼き痕あり。	瀬戸美濃系。
4328	搦鉢 瓦質土器	器高:一口径:一底 径:112mm½残	砂粒で気泡を含む。酸化 焼成。軟質。内外面は二次 焼成。	器壁は厚い。やや丸底ぎみ。輪積成形 外面:無調整。内面:6本歯交叉状す りめ。磨耗。	二次焼成は廃棄 後。
3井戸 4324	五輪塔 地輪	長径:(182mm)短径: 181mm高さ:140mm重 量:2,600g½残	榛名二ツ岳軽石	整形は良。全面磨き。上面に径99mm、 深55mmの搦鉢状の凹あり。紀年銘等 の彫り込みは不明。	

寺前地区1号井戸跡（第747図）

当井戸跡は、寺前地区2号井戸跡と重複する。新旧関係は、覆土の相違により、当井戸跡のほうが古い、大きな時間差はないものと考えられる。

当井戸跡の規模は、長軸約1.3m・短軸約1.1mであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。確認面からの深さは、出水のために確認できなかったが、断面形は上面の広がる円筒形を呈するものと考えられる。当井戸跡の上部は、河原石を組んで井戸枠としてあった。

当井戸跡からの遺物の出土はなく、時期の限定は困難であるが、井戸の形態・周囲の遺構との

関係から推定する当井戸跡の時期は、中世～近世である。

(井川)

#### 寺前地区2号井戸跡 (第747図)

当井戸跡は、寺前地区1号井戸跡と重複する。新旧関係は、覆土の相違により、当井戸跡のほうが新しいが、大きな時間差はないものと考えられる。

当井戸跡の規模は、長軸約1.4m・短軸約1.3mであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。確認面からの深さは、出水のために確定できなかったが、断面形は上部の広がる円筒形を呈するものと推定される。当井戸跡からの遺物の出土はなく、時期の限定は困難であるが、井戸の形態・周囲の遺構との関係から推定する当井戸跡の時期は、中世～近世である。

(井川)

#### 寺前地区3号井戸跡 (第747・749図、第210表、図版142)

当井戸跡は、寺前地区9号古墳と重複する。寺前地区9号古墳の墳丘の大部分は削平されており、新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、遺物・覆土から当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、長軸約1.1m・短軸約0.9m・確認面からの深さ約1.7mであり、平面形は不整形な楕円形を呈し、断面形は円筒形を呈する。

遺物は、陶器の摺鉢・陶器の椀・磁器の椀・磁器の鉢・砥石が出土している。遺物・井戸の形態から推定する当井戸跡の時期は、室町時代である。

(井川)

#### 寺前地区4号井戸跡 (第747・749・750図、第210表、図版142)

当井戸跡は、寺前地区9号古墳と重複する。寺前地区9号古墳の墳丘の大部分は削平されており、新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、遺物・覆土から当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡は、確認面から約1.4mのところ段を持つ。段より上の部分の規模は、長軸約3.0m・短軸約2.7mであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。段より下の部分は、長軸約1.1m・短軸約0.9mであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。全体の確認面からの深さは約2.9mであり、断面形は漏斗状である。

当井戸跡の上部には、河原石が投げ込まれた状態で詰まっていた。遺物は、内耳土器・カワラケの杯・石臼が出土している。遺物・井戸の形態から推定する当井戸跡の時期は、室町時代である。

(井川)

#### 寺前地区5号井戸跡 (第747・751図、第210表、図版141)

当井戸跡は、寺前地区9号古墳と重複する。寺前地区9号古墳の墳丘の大部分は削平されており、新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、遺物・覆土から当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、長軸約1.7m・短軸約1.6m・確認面からの深さ約2.4mであり、平面形は不整形な楕円形を呈し、断面形は上部の広がった円筒形を呈する。遺物は、陶器の摺鉢の他、銭「寧

## 第6章 中世・近世の遺構と遺物

元寶]・「寛永通寶」が出土しており、遺物から推定する当井戸跡の時期は、江戸時代（寛永）以降である。 (井川)

### 寺前地区6号井戸跡 (第748・751・752図、第210表、図版141)

当井戸跡に重複関係はないが、寺前地区7号古墳が近接する。当井戸跡は、確認面から約1.3mのところ段を持つ。段より上の規模は、長軸約1.8m・短軸約1.6mであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。段より上の規模は、直径約0.8mであり、平面形は不整形な円形を呈する。出水のために全体の深さは確定できないが、段の上・下共に断面形は円筒形を呈する。

段の上は、河原石を井戸枠として積み上げ、裏込めにはロームを用いてあった。又、段の上には、河原石が投げ込まれた状態で詰まっていた。遺物は、石臼・五輪塔が出土している。遺物・井戸の形態から推定する当井戸跡の時期は、中世～近世である。 (井川)

### 寺前地区7号井戸跡 (第748図)

当井戸跡に重複関係はないが、寺前地区7号溝跡・寺前地区31号溝跡が近接する。当井戸跡の規模は、長軸約1.3m・短軸約1.1m・確認面からの深さ約1.7mであり、平面形は不整形な楕円形を呈し、断面形は円筒形を呈する。

当井戸跡からの遺物の出土はなく、時期の限定は困難であるが、井戸の形態・周囲の遺構との関係から推定する当井戸跡の時期は、中世～近世である。 (井川)

### 寺前地区11号井戸跡 (第748図)

当井戸跡は、寺前地区6号古墳と重複する。寺前地区6号古墳の墳丘の大部分は削平されており、新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、覆土の相違から当井戸跡の方が新しい。

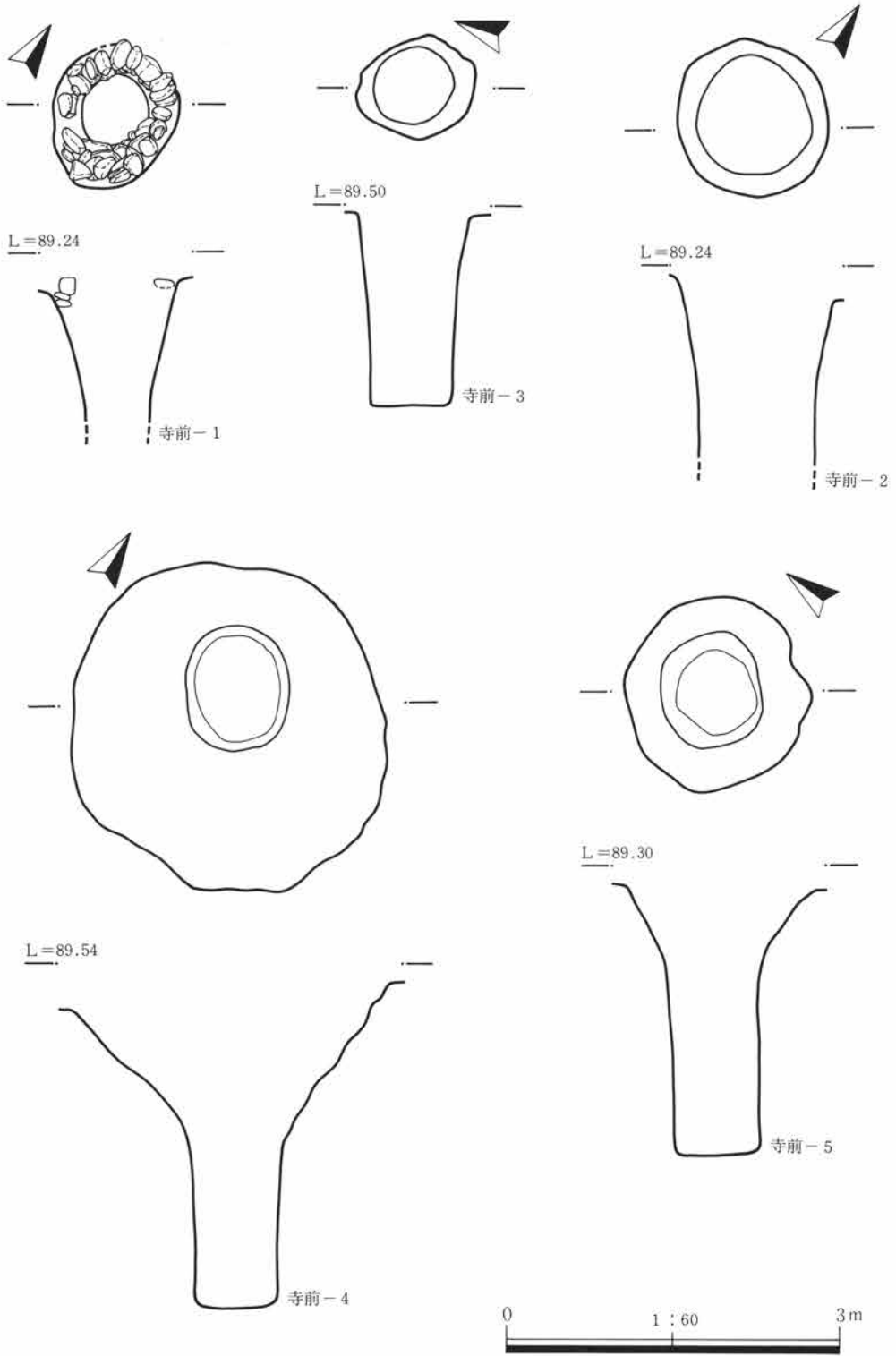
当井戸跡の規模は、直径約1.4mであり、平面形は不整形な円形を呈する。深さは、出水のために確認することができなかったが、断面形は円筒形を呈するものと推定される。当井戸跡からの遺物の出土はなく、時期の限定は困難であるが、井戸の形態・周囲の遺構との関係から推定する当井戸跡の時期は、中世～近世である。 (井川)

### 寺前地区12号井戸跡 (第748・752図、第210表、図版141)

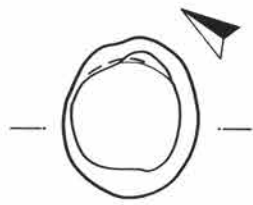
当井戸跡は、寺前地区6号古墳と重複する。寺前地区6号古墳の墳丘の大部分は削平されており、新旧関係を直接的に確認することはできなかったが、遺物・覆土から当井戸跡の方が新しい。

当井戸跡の規模は、長軸約1.6m・短軸約1.4mであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。深さは、出水のために確認することができなかったが、断面形は円筒形を呈するものと推定される。遺物は、板碑と銭「太平通寶」が出土している。遺物・井戸の形態から推定する当井戸跡の時期は、中世以降である。 (井川)

(5) 井戸跡



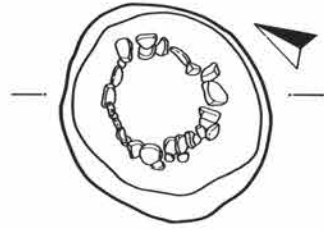
第747図 井戸遺構図(1)



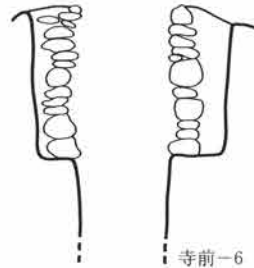
L=89.64



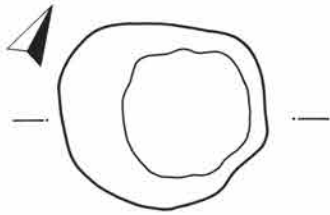
寺前-7



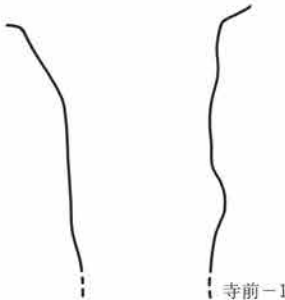
L=89.87



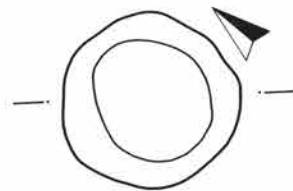
寺前-6



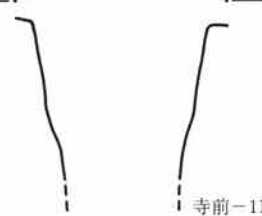
L=89.60



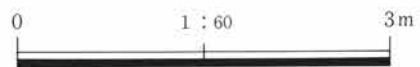
寺前-12



L=89.40



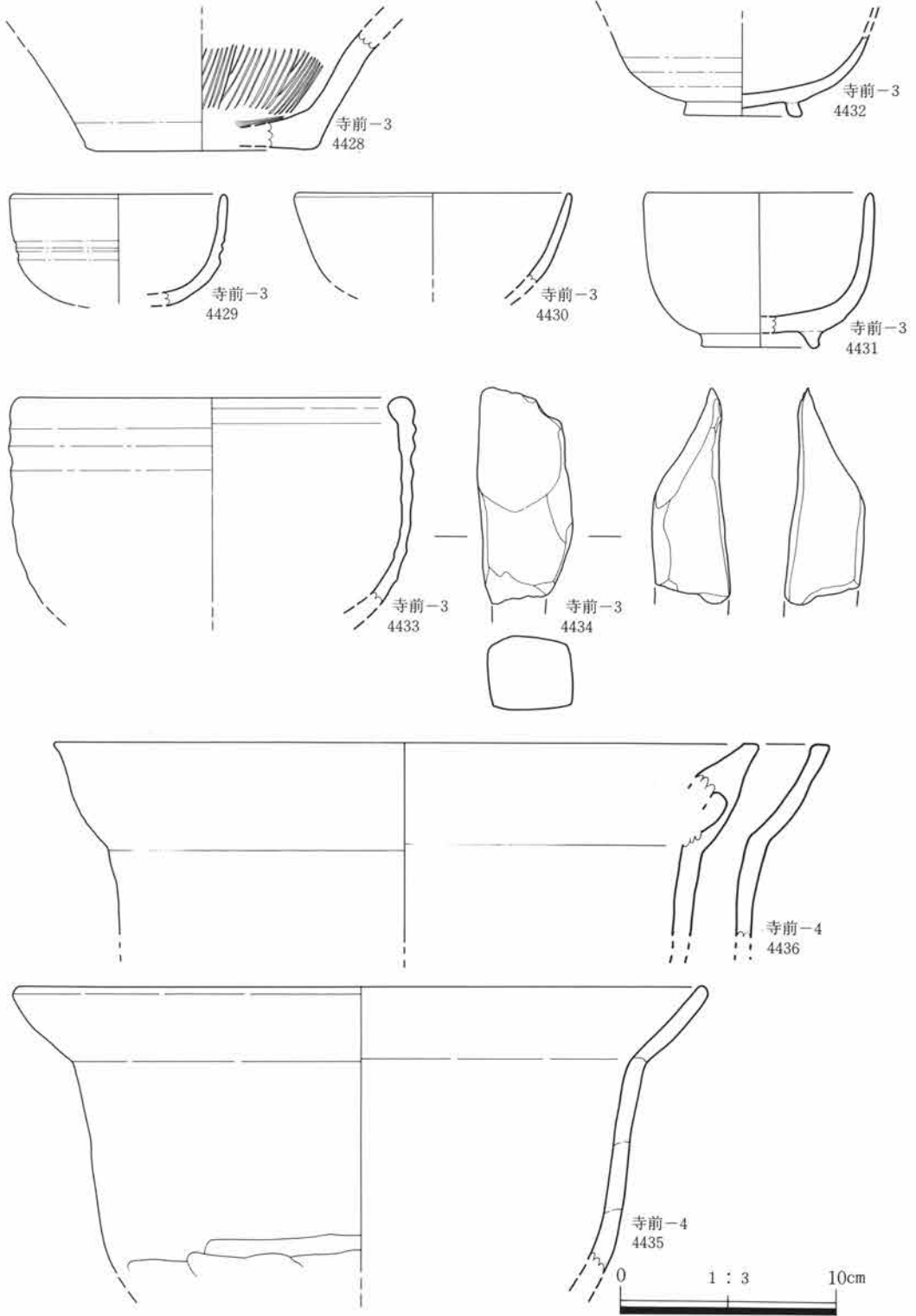
寺前-11



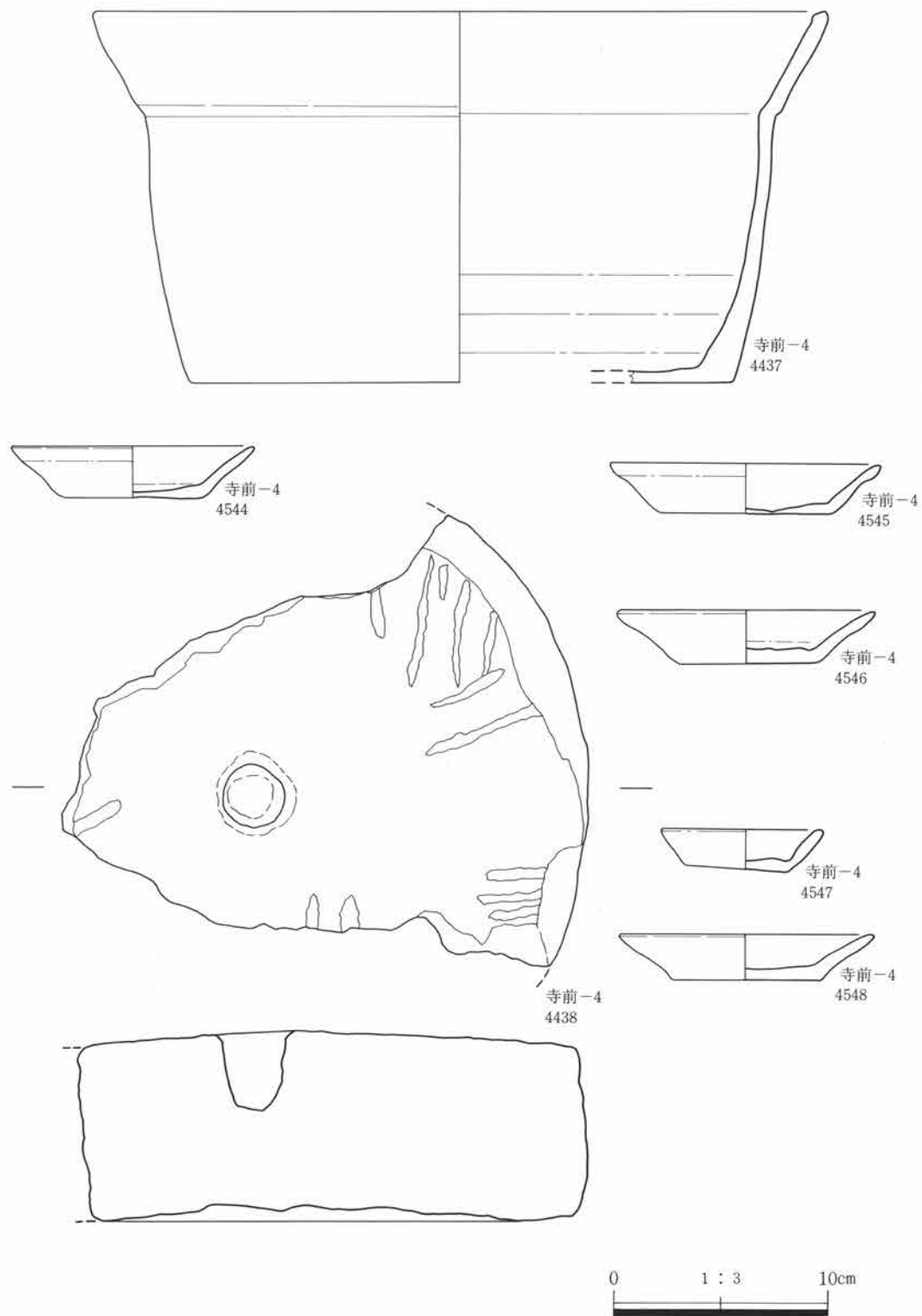
第748図 井戸遺構図(2)



(5) 井戸跡

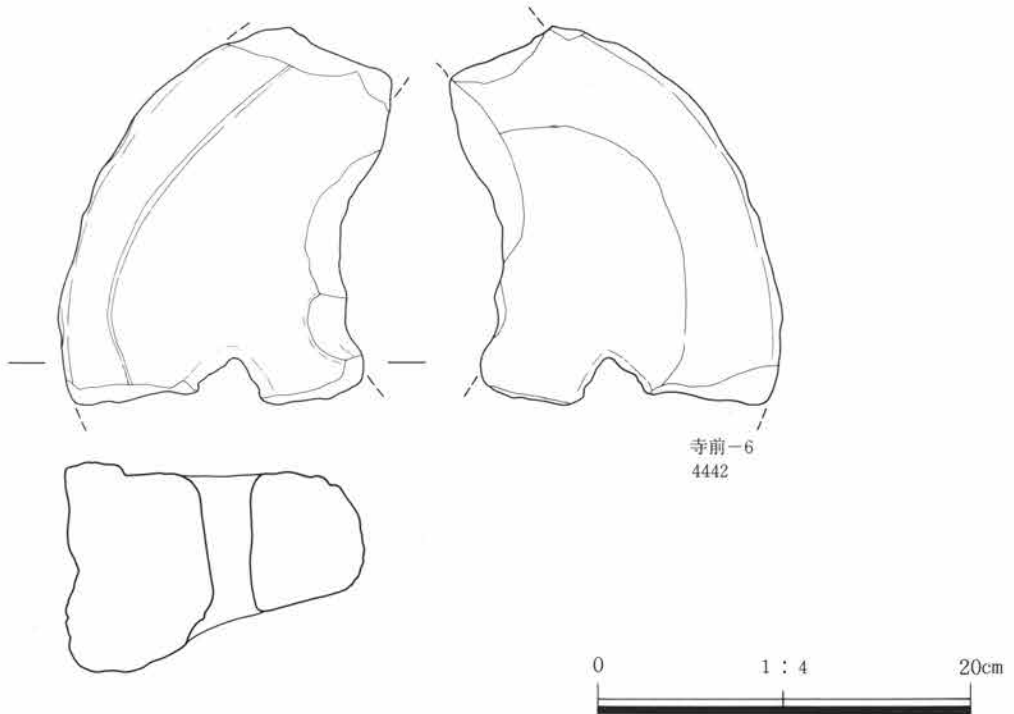
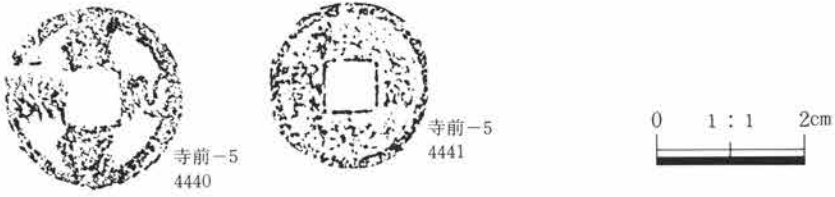
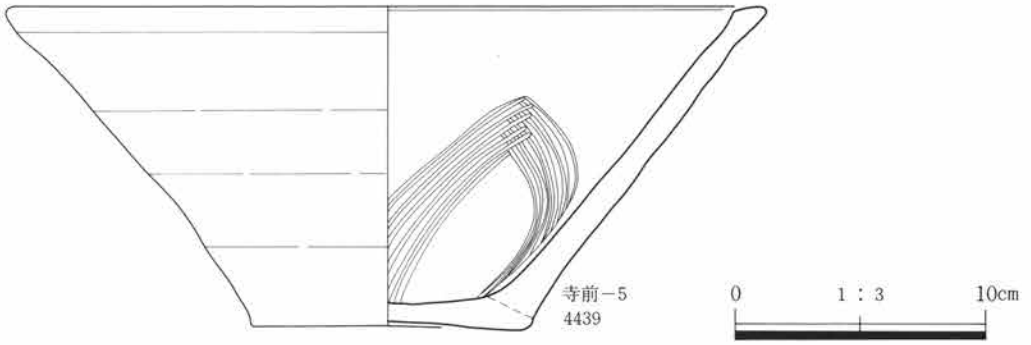


第749図 井戸遺物図(1)

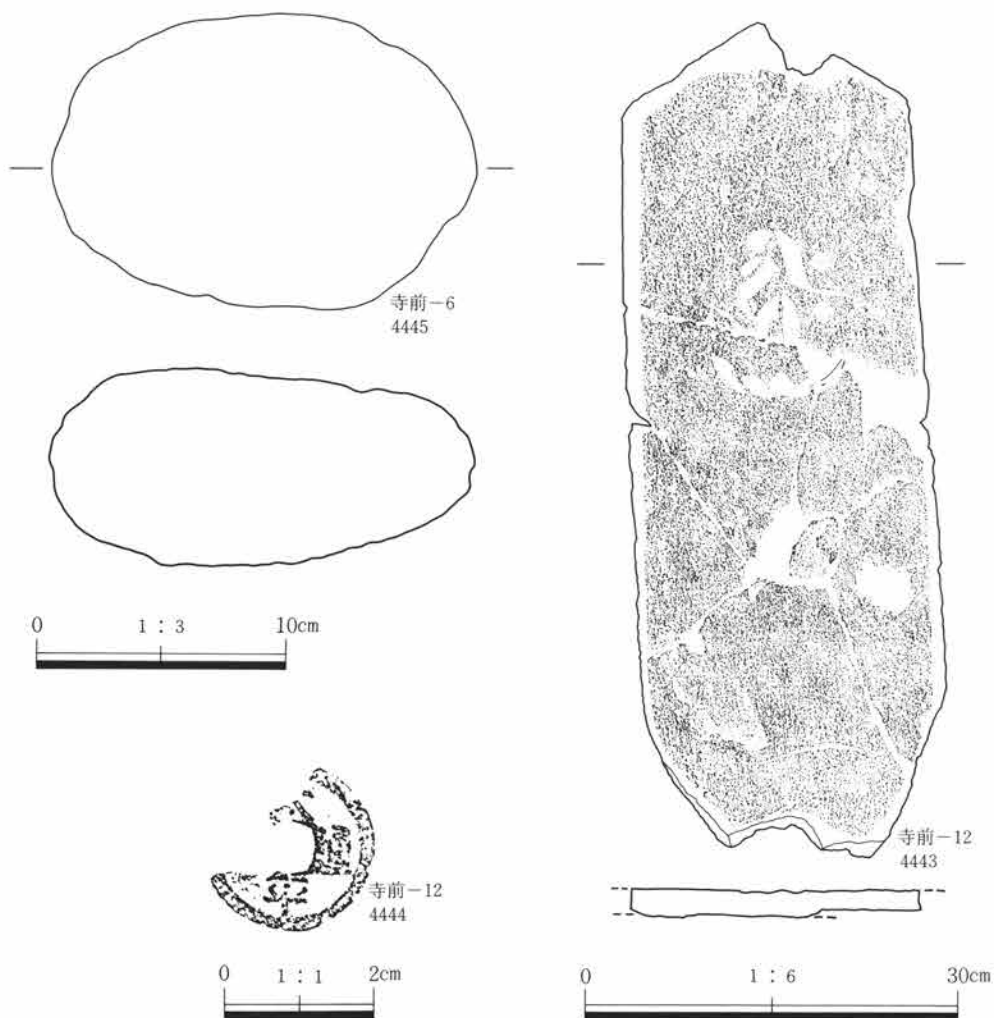


第750図 井戸遺構図(1)

(5) 井戸跡



第751図 井戸遺物図(3)



第752図 井戸遺物図(4)

第210表 井戸遺物観察表(寺前地区)

番号	器 種 土 器 種	法量(器高・口径・底 径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出 土 状 態 備 考
3井戸 4428	播 鉢 陶器鏝釉	器高:一口径:一底 径:[100mm]残存:?	石英・鉄分を多く含む。中 性後還元焼成。軟質。	輪積成形。外面の上端は無調整。外面 上端及び底部は施釉。内面の底部ま で左回り10本以上歯のすりめ。	瀬戸美濃系。
4429	椀 陶器掛分 け	器高:一口径:一底 径:一口縁部小片	微気泡を多く含む。還元 焼成。軟質。	口縁部は直立。体部は半球形。外面の 中央に沈線3条。外面の上端と内面 に灰釉。外面の下端は鉄釉を掛け分 け貫入あり。	瀬戸美濃系。

## (5) 井戸跡

4430	碗 染付白磁	器高：一口径：一底 径：一口縁部小片	緻密な磁胎。硬質。	口縁部より半球形。外面：コバルト釉 で草花文。	肥前系。
4431	碗 染付陶器	器高：69mm口径：[104 mm]底径：[54mm] 1/2残	微砂粒を含み緻密。還元 で一部酸化焼成。硬質。	体部はほぼ直立。器壁は厚い。口縁部 から高台の外面にコバルト釉で横線 と山水文。発色は悪い。貫入あり。釉 割れ多い。	肥前系。
4432	碗 陶器灰釉	器高：一口径：一底 径：52mm 1/2残	微砂粒で気泡を含む。還元 焼成。軟質。	体部は半球形状。容量多い。高台貼り 付け。内面及び外面上端に灰釉。トチ ン痕あり。高台やや歪む。	瀬戸美濃系。
4433	片口鉢 陶器灰釉	器高：一口径：一底 径：一口縁部片 1/2残	気泡を含む。還元焼成。硬 質。	口縁部は玉縁状。外面の口縁部下に 凹帯2条。内面及び外面上端に薄く 施釉。	瀬戸美濃系。
4434	砥石	長さ：(98mm)幅：42～ 32mm厚さ：35mm	流紋岩(砥沢?)。	使用面は3面。	
4井戸 4435	鍋 瓦質土器	器高：(130mm)口径： [320mm]底径：1/2残	砂粒で鉄分を緑含む。酸 化中性焼成。軟質。外面は 二次焼成。	口縁部は大きく外反。体部は直立ぎ み。内面に稜あり。輪積成形。外面：下 端、削り。上端、なで。内面：こぼめ調 整。	
4436	鍋 瓦質土器	器高：?口径：[330 mm]底径：? 1/2残	砂粒を含む。酸化中性焼 成軟質。外面は二次焼成。	口縁部は大きく外反。体部は直立ぎ み。内面に稜あり。耳部は中形。輪積 成形体部内面：軽いこぼめ調整。	
4437	鍋 瓦質土器	器高：170mm口径： [340mm]底径：[250 mm] 1/2残	砂粒・小石を含む。還元中 性焼成。硬質。外面は二次 焼成。	口縁部は大きく外反。体部は直立ぎ み。内面に稜あり。輪積土型成形。体 部内面：軽いなで。その他は軽いこぼ め調成。	
4438	石白	直径：[300mm]厚さ： 88mm	粗粒安山岩。	下白。中心に円筒状の芯棒受けあり。	
4544	皿 土師質土 器	器高：24mm口径：113 mm底径：65mm口縁部 ～底部 1/2残	直径1～2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。淡橙。	外面：口縁部～底部は轆轤なで、底部 は寛削り。内面：口縁部～底部は轆轤 なで。	
4545	皿 土師質土 器	器高：23mm口径：[125 mm]底径：[80mm]口縁 部～底部 1/2残	直径2～3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い黄橙。	轆轤左回転。底部は回転糸切り。外 面：口縁部～体部は轆轤なで。内面： 口縁部～底部は轆轤なで。	
4546	皿 土師質土 器	器高：24mm口径：[120 mm]底径：64mm口縁部 ～底部 1/2残	直径1～2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い橙。	轆轤左回転。底部は回転糸切り。外 面：口縁部～体部は轆轤なで。内面： 口縁部～底部は轆轤なで。	
4547	小皿 土師質土 器	器高：19mm口径：75mm 底径：48mm口縁部 ～底部 1/2残	直径1～2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い橙。	轆轤左回転。底部は回転糸切り。外 面：口縁部～体部は轆轤なで、内面： 口縁部～底部は轆轤なで。	

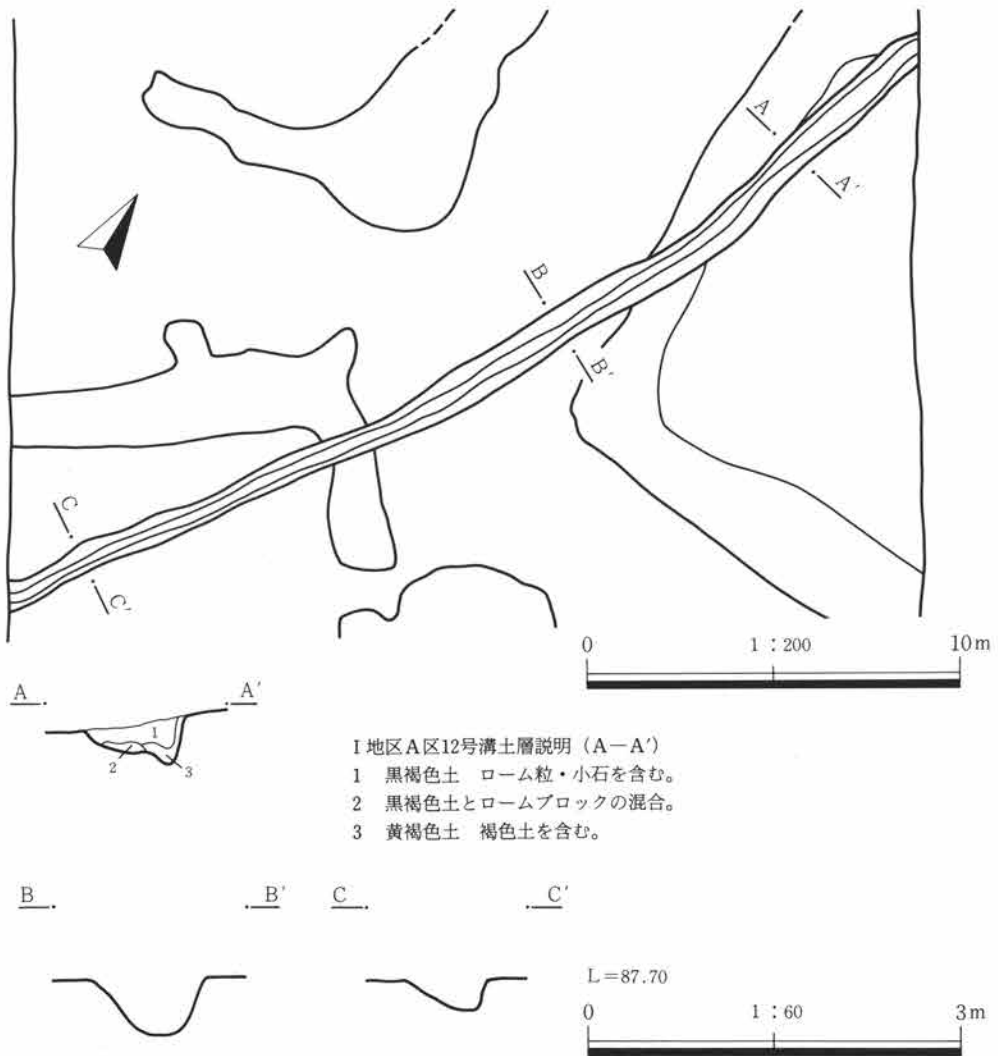
第6章 中世・近世の遺構と遺物

4548	皿 土師質土器	器高:21mm口径:[118mm]底径:[70mm]口縁部~底部 $\frac{1}{4}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	轆轤左回転。底部は回転糸切り。外面:口縁部~体部は轆轤なで。内面:口縁部~底部は轆轤なで。	
5井戸 4439	播鉢 瓦質土器	器高:126mm口径:300mm底径:110mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒・気泡を含む。還元焼成。硬質。	口唇部は平坦。体部は輪積あり。底部は回転糸切り成形。内面:7本歯で三ッ葉状すりめ。	
4440	銭			「熙寧元寶」	
4441	銭			「寛永通寶」(江戸亀戸)	
6井戸 4442	石 白	直径:[300mm]厚さ:112mm	粗粒安山岩	上白。中心に円筒状の芯棒受けあり。供給面の平面形は隅丸方形、上面が大きく、下面が小さい。	
12井戸 4444	銭			「太平通寶」	
4443	板 碑	別紙に掲載			
6井戸 4445	五輪塔 水輪?	長径:228mm短径:155mm高さ:104mm重量:1.970g完形	榛名二ツ岳軽石	整形は良。各部に平鑿の加工痕を残す。凹はなし。	

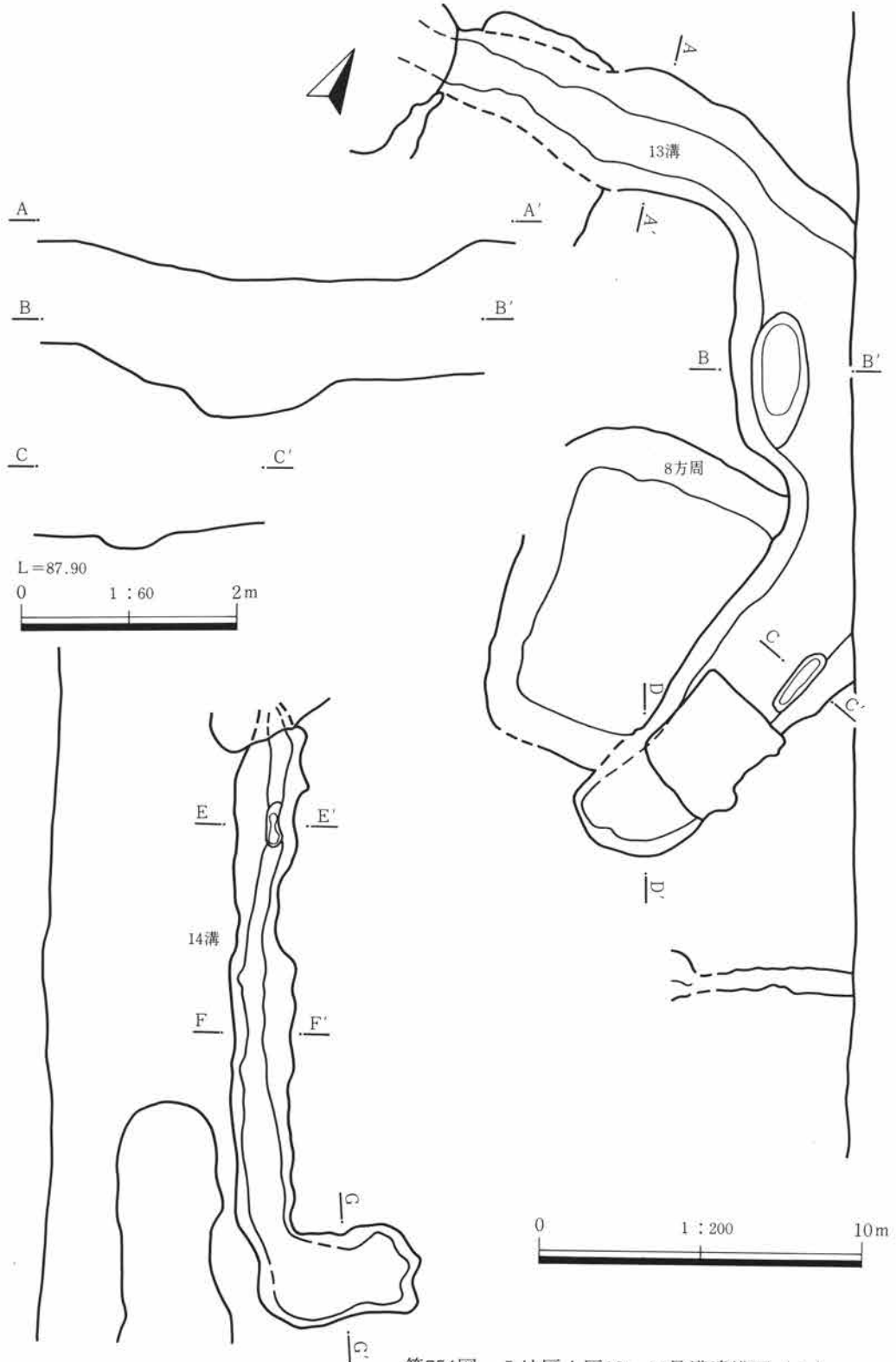
## (6) 溝

## I 地区 A 区 12 号溝 (第 753 図)

本溝は、A 区 6 号方形周溝墓、7 号方形周溝墓と重複しているが、両方形周溝墓より新しい。規模は、幅が 50cm～1m、深さ 30～45cm である。溝底面のレベルは、調査部分中央付近がやや深くなっている。溝の掘り方は一様ではなく、逆台形を呈する部分と不整形を呈する部分とがある。又、直線とはならず、やや曲がっている。本溝からの出土遺物は皆無であり、時期については、古墳時代前期以降という以外不明である。(飯塚)

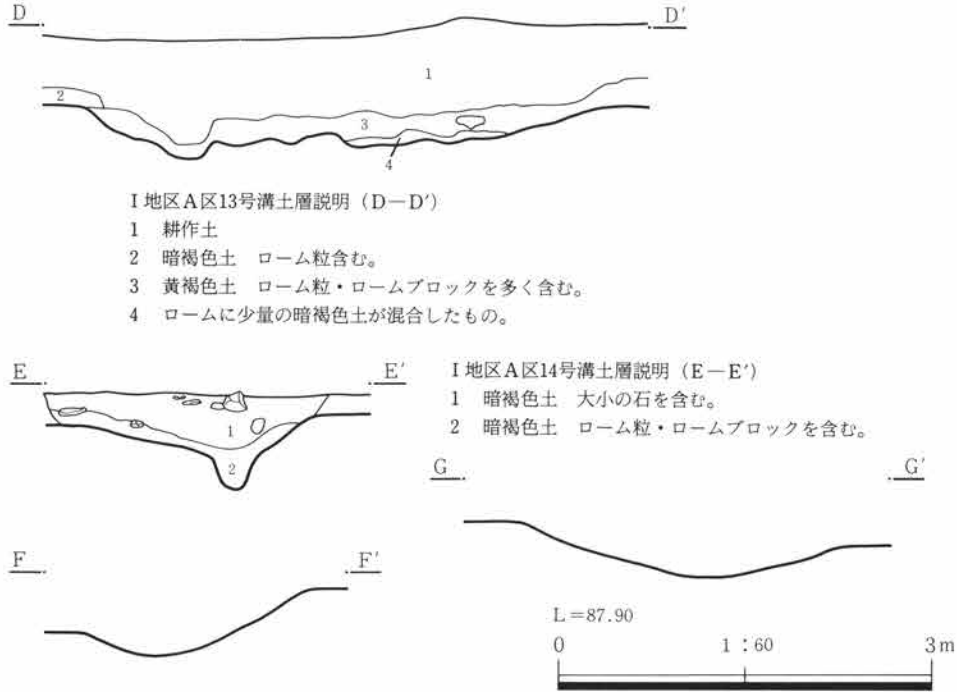


第 753 図 I 地区 A 区 12 号溝遺構図



第754図 I地区A区13・14号溝遺構図(1)





第755図 I地区A区13・14号溝遺構図(2)

## I地区A区13号溝 (第754・755・762図、第211表)

本溝は、A区47号住居跡・86号住居跡・8号方形周溝墓・65号土坑と重複しているが、47号住居跡・8号方形周溝墓よりは新しく、86号住居跡より古い。又、65号土坑との新旧関係は不明である。形態は、歪んだ半円形を呈する。規模は、幅が2.5~4.5mで、深さは20~30cmである。掘り方は一様ではないが、皿状を呈する部分が多い。

覆土よりの出土遺物として、甕(2754)・台付甕(2755)・高台付椀(2756~2758)の破片がある。出土遺物の様相から、平安時代とも考えられるが、古墳周堀である可能性もある。なお、高台付椀には、「正」の墨書が存在したが、水洗の段階で消失した。(飯塚)

## I地区A区14号溝 (第754・755・762図、第211表)

本溝は、A区54号住居跡・55号住居跡・10号方形周溝墓・74号土坑と重複しており、74号土坑を除く他の遺構よりも新しいが、74号土坑との新旧関係については不明である。溝は、北西方向では、74号土坑と重複する部分で切れており、それより先へは続かない。又、南北方向では、直角に曲がっているが、約4mほどで立ち上がっている。

溝の規模は、幅が1~2mで、深さは30~50cmである。掘り方は一様ではないが、皿状を呈する

## 第6章 中世・近世の遺構と遺物

部分が多い。出土遺物としてカワラケ（2760）・内耳土器（2759）・洪武通寶（2761）がある。出土遺物の様相から、中世末と考えられる。（飯塚）

### I 地区 A 区18号溝（第756図）

本溝は、調査区西側付近に一部が確認された。規模は、幅約80cm、深さ15cm～20cmで、西側調査区壁と接する部分では、ほぼ直角に曲がっている。出土遺物は皆無、時期は不明である。

（飯塚）

### I 地区 A 区21号溝（第757・763図、第211表）

本溝は、97号住居跡・1号畠跡・2号古墳と重複しているが、97号住居跡・2号古墳よりも新しく、1号畠跡よりも古い。溝の規模は、幅が90cm～1.5mで、深さは45cm～60cmである。溝は、2号古墳周堀より北側では、直線的に延びているが、墳丘部では円弧を描き、途中で切れている。出土遺物としては砥石がある。時期は、平安時代の97号住居跡を切っているため、平安時代以降と考えられる。（飯塚）

### I 地区 A 区23号溝（第758・763図、第211表）

本溝は、極く一部が確認された。26号溝と重複しており、本溝の方が新しい。規模は、幅が約1.2m、深さは約40cmである。出土遺物として、内耳土器（2764）があり、本溝の時期は室町時代と考えられる。（飯塚）

### I 地区 A 区25号溝（第759図）

本溝は、II地区7区5号古墳の墳丘部分に存在する。重複する遺構の中で、本溝が最も新しい。溝は、幅が約1m、深さ約45cmで、大きくカーブしており、両端が西側調査区域外へと延びている。出土遺物はないが、溝内には浅間A軽石の純層が堆積しており、本溝の時期は、浅間A軽石降下時からそれほど遡らない時期と考えられる。（飯塚）

### I 地区 A 区26号溝（第758・763図、第211表）

本溝は、A区2号古墳周溝・23号溝と重複しているが、2号古墳よりも新しく、23号よりも古い。なお、西側は、2号古墳周堀上へと延びているが、確認は難しくなる。溝の規模は、幅が約2mであるが、2号古墳周堀と重なる付近では、やや広がっている。又、東側の23号溝と重複す

## (6) 溝

る部分では、立ち上がっているようにも見える。溝の深さは、約10cmであり、浅い皿状の掘り方を呈する。出土遺物として、内耳土器（2765）の破片があり、本溝の時期は室町時代と考えられる。

（飯塚）

### I 地区 A 区29号溝（第756図）

本溝は、A区10号方形周溝墓と東側調査区壁との間に確認された。東側は調査区外へと延びているが、西側は東壁から約5mで二つに分かれ、10号方形周溝墓の周溝上へと延びており、確認が難しくなる。又、90号住居跡のカマドの一部を切っており、本溝の埋没後に2号畠が造られている。

規模は、幅が50cm～1m、深さ約15cmである。本溝に伴うと考えられる遺物は発見されなかったが、90号住居跡よりも新しい平安時代以降と考えられる。

（飯塚）

### I 地区 A 区30号溝（第756図）

本溝は、A区13号井戸・101号土坑・2号畠跡と重複しているが、両遺構よりも古い。溝は、東側は調査区外へと延びているが、西側は13号井戸付近で直角に曲がり、101号土坑と重複する部分で立ち上がっているものと思われる。

溝の規模は、幅が50cm～1mで、深さは10cm～30cmである。幅、深さ、掘り方とも一定していない。本溝からは、遺物は発見されなかった。時期不明。

（飯塚）

### I 地区 A 区31号溝（第756図）

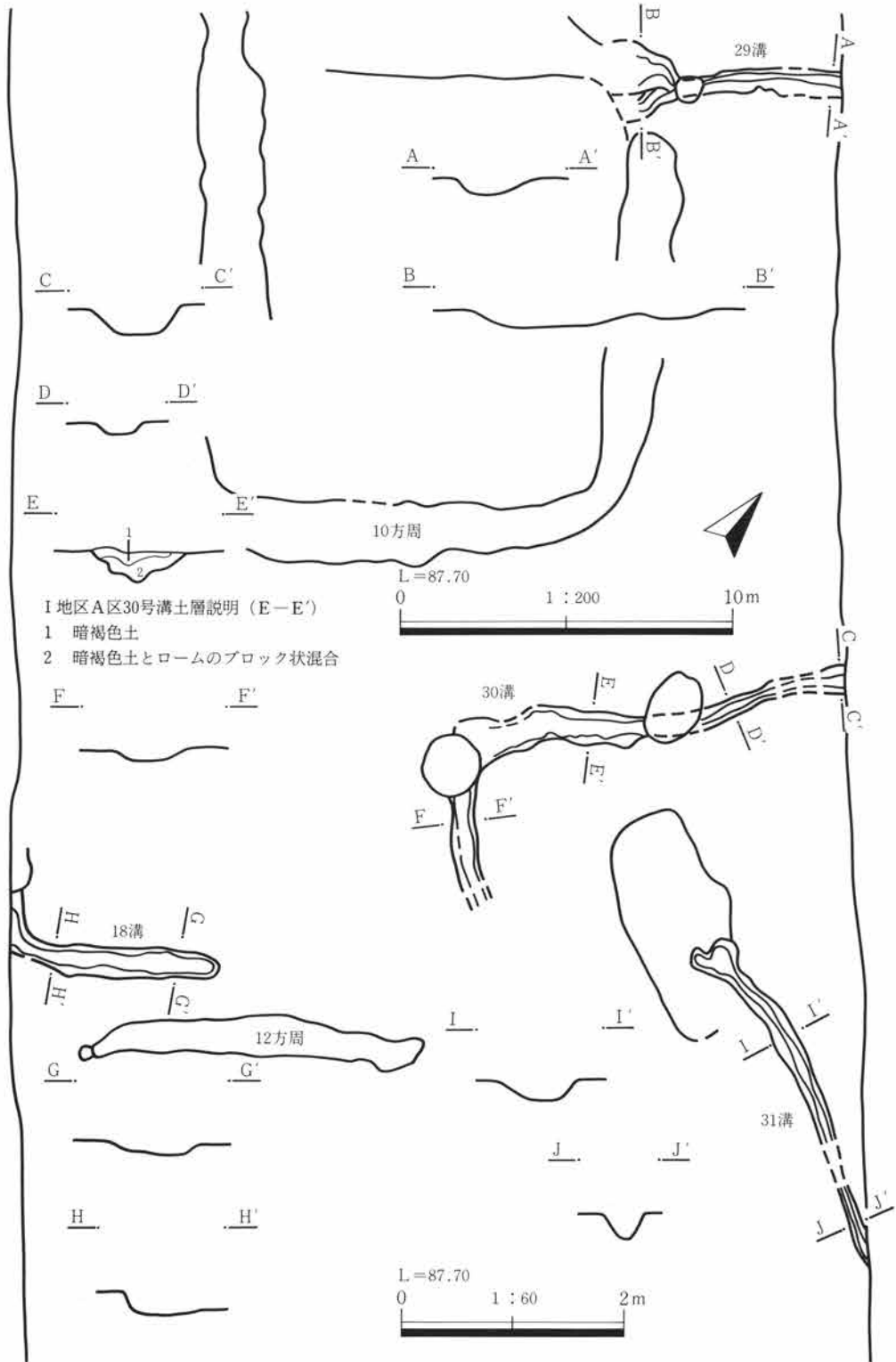
本溝は、285号土坑・2号集石と重複しているが、2号集石よりは新しく、285号土坑よりは古い。溝の規模は、幅30cm～60cmで、深さは約20cmである。なお、2号集石との重複部分では、幅が広く土坑状となって立ち上がっている。本溝からの出土遺物は皆無であり、時期は不明であるが、中世～近世となる可能性がある。

（飯塚）

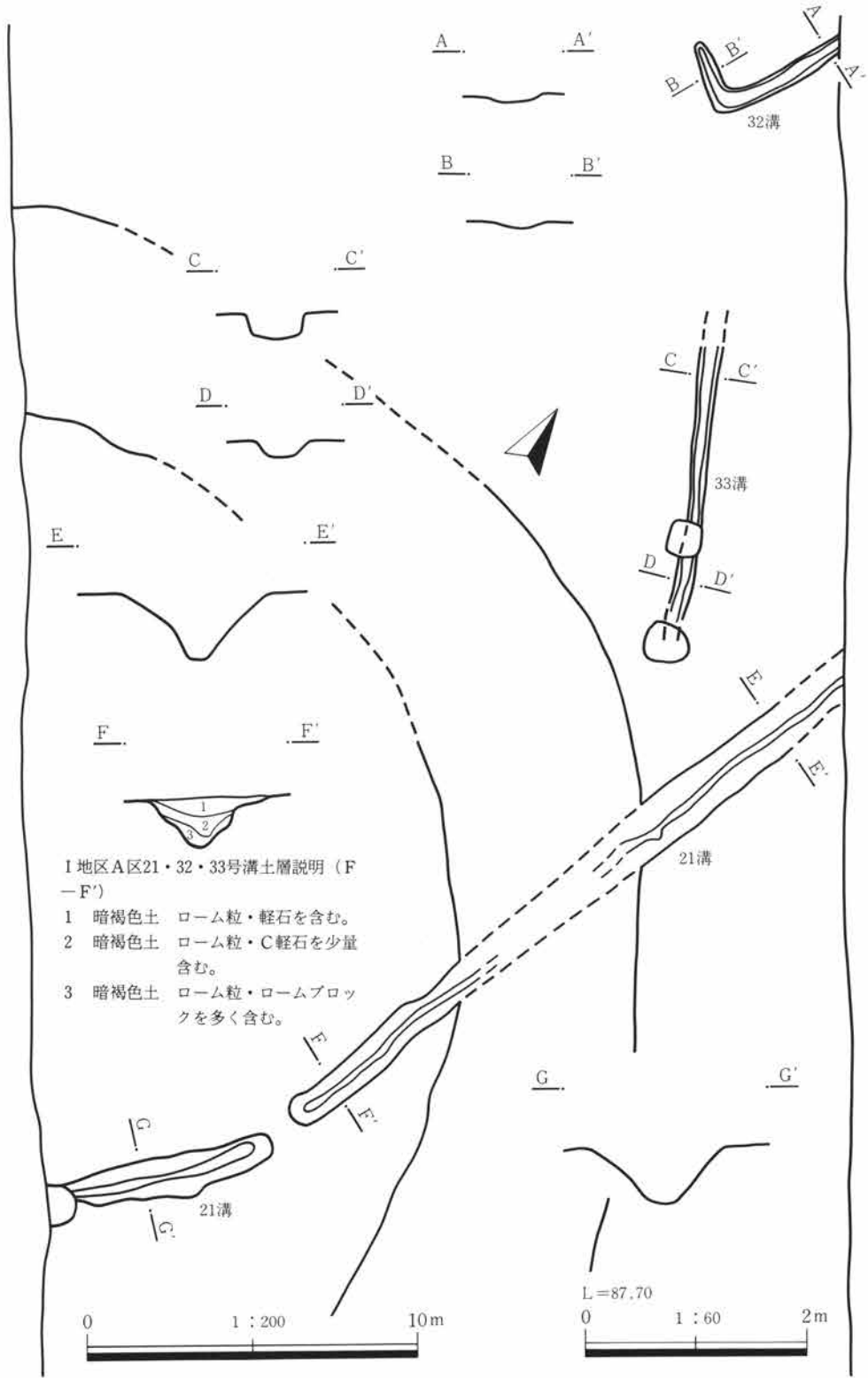
### I 地区 A 区32号溝（第757図）

本溝は、幅が約50cm、深さ約10cmで浅い皿状を呈する。調査区壁より南側約3.5mの付近で、西側へとほぼ直角に曲がっているが、約2mで立ち上がっている。本溝より遺物は発見されなかった。時期不明。

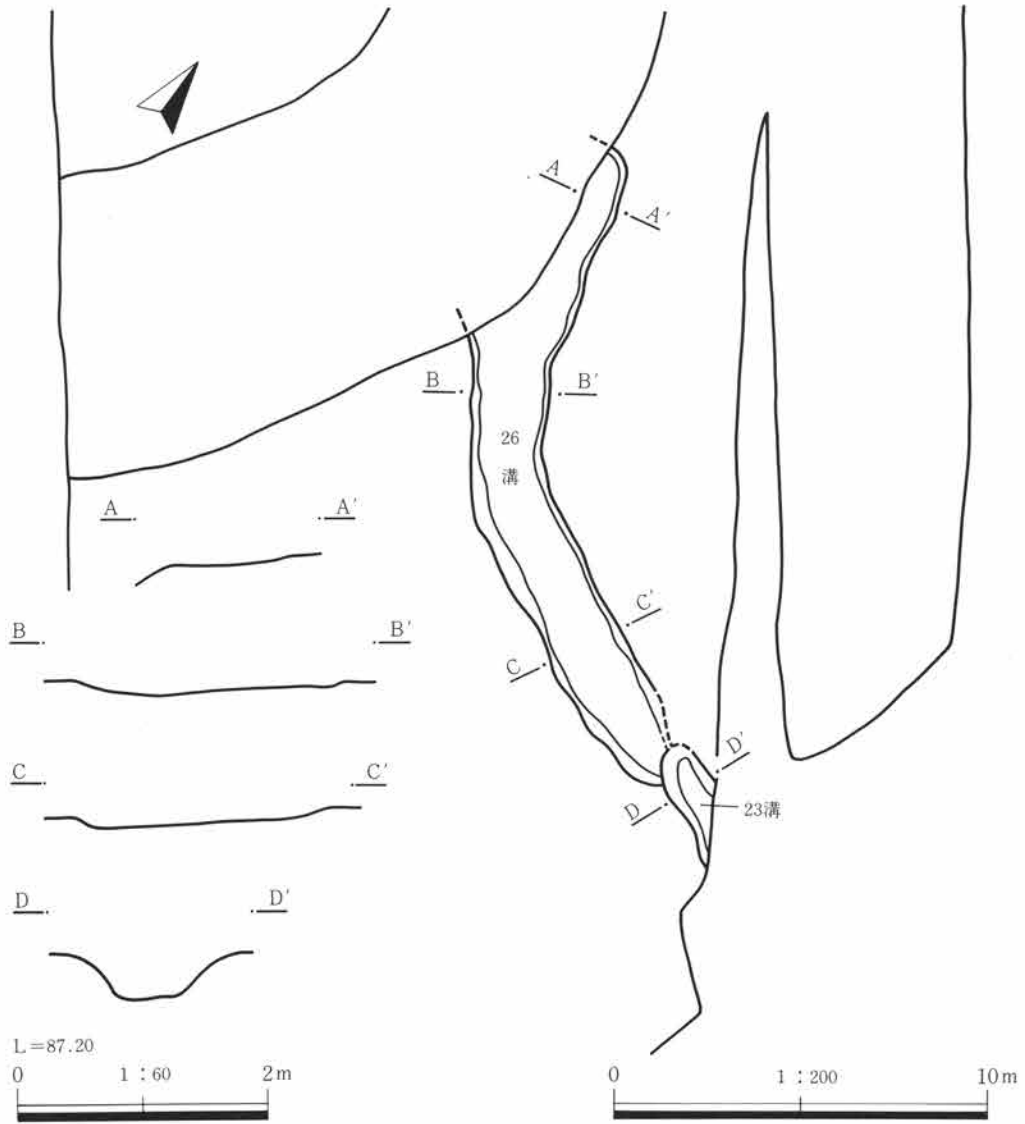
（飯塚）



第756図 I地区A区18・29・30・31号溝遺構図



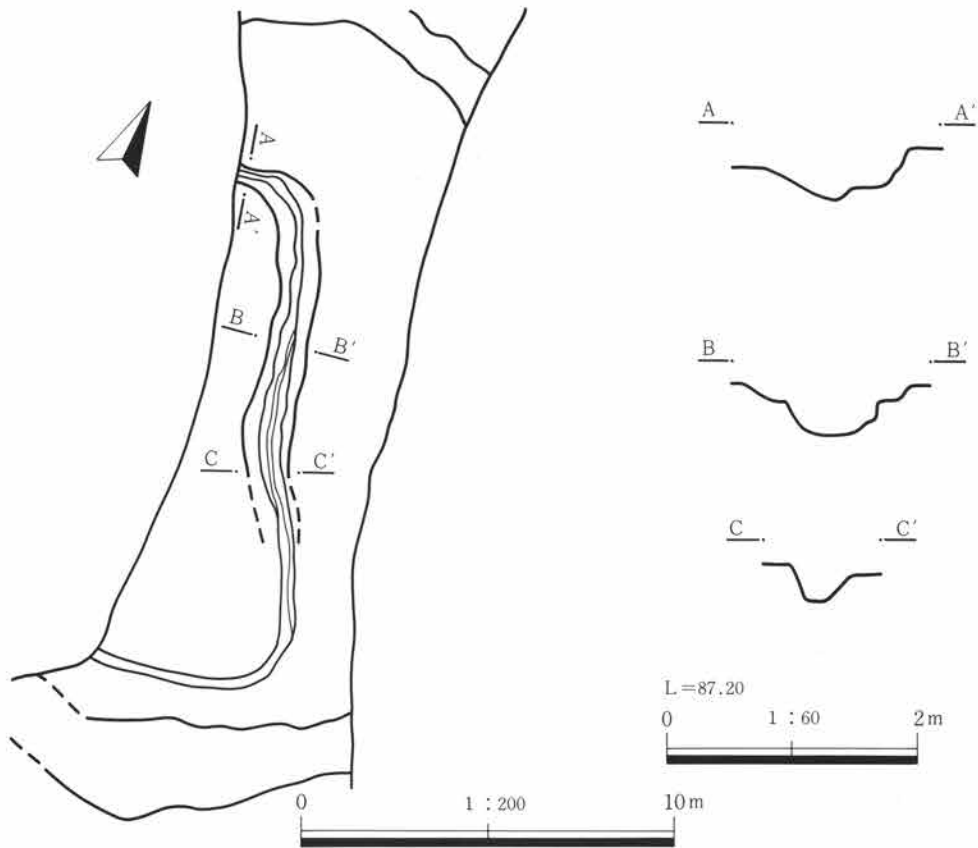
第757図 I地区A区21・32・33号溝遺構図



第758図 I地区A区23・26号溝遺構図

I地区A区33号溝（第757図）

本溝は、94号住居跡・254号土坑と重複しており、76号土坑よりは、本溝の方が新しい。又、254号土坑との新旧関係は不明である。溝の規模は、幅が30cm～50cm、深さは約20cmである。溝内より遺物は発見されなかった。時期不明。  
 （飯塚）



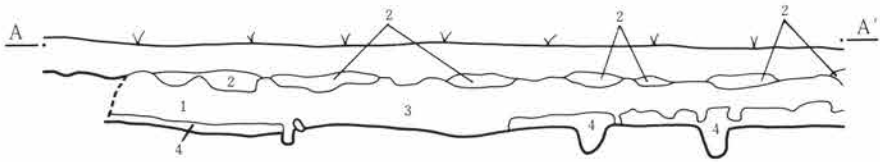
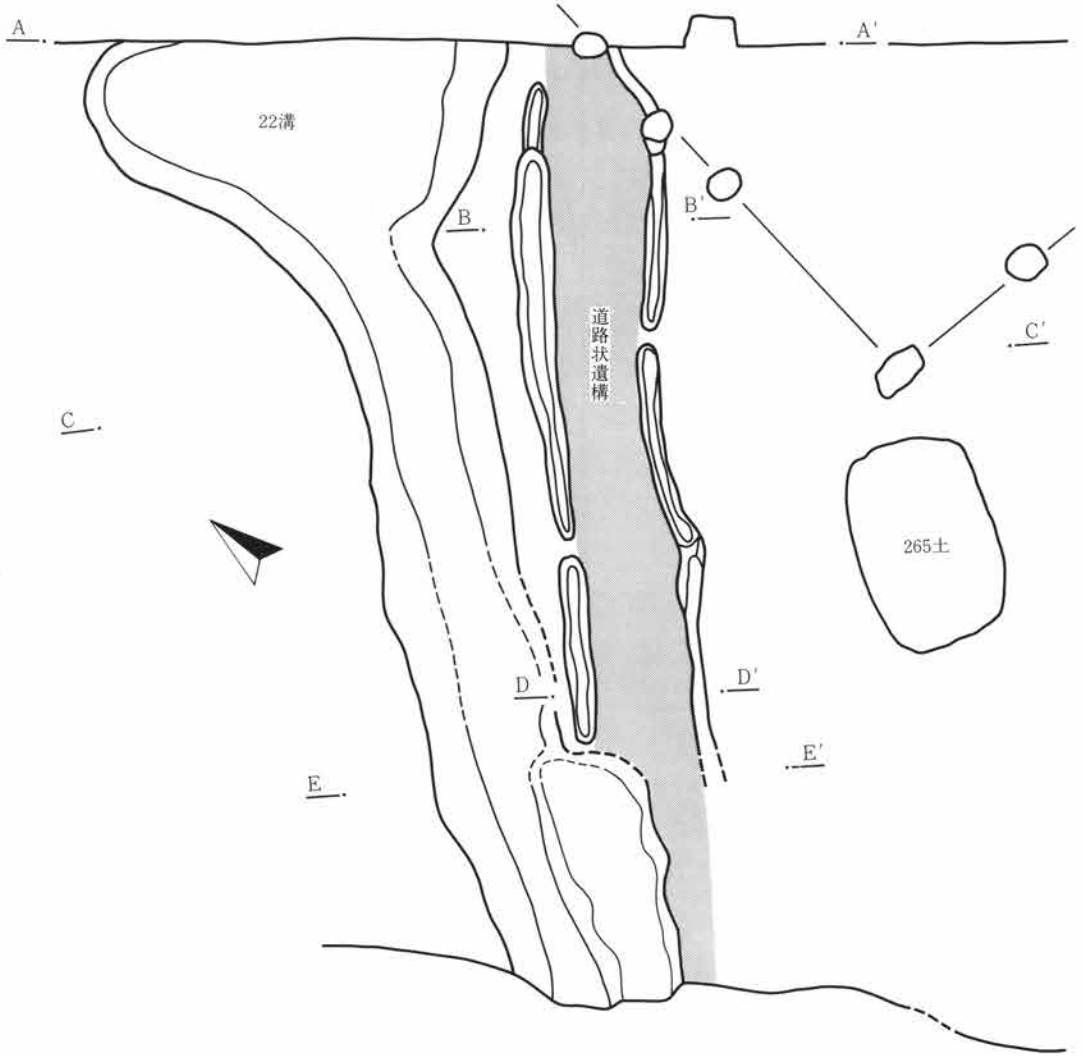
第759図 I地区A区25号溝遺構図

## I地区A区道路状遺構 (第760・761図)

本遺構は、極く一部が確認された。重複する他の遺構との新旧関係では、A区2号古墳よりは新しく、9号掘立柱跡より古い。

遺構は、道路部分と側溝部分よりなる。道路部分の南側は、北側のように側溝22号溝が存在しないため、道路幅を明確にすることは難しいが、北側側溝から1.5mのローム面が固くなっており、道路面をこの範囲と推定することができる。道路部分は、周囲よりローム面が低くなっている。ローム面のレベルは、側溝の北側と比較すると約18cm低くなる。ところが、南側については、側溝より約4mの間はほぼ水平であるが、それより南側は約3cm程ロームのレベルが高くなるものの、側溝の北側と比較すると、かなり低くなっている。

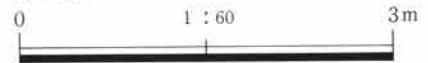
道路面は、ローム面を整地して踏み固めているものと考えられる。路面と推定される固い面は、幅約1.5mで、東側調査区壁から約6mが確認できた。道路面には、轍跡が存在する。轍跡は幅15cm～30cm、深さ3cm～9cmで、2本が平行する。なお、轍跡から推定される車輪幅は、約90cmで



I 地区A区22号溝土層説明 (A-A')

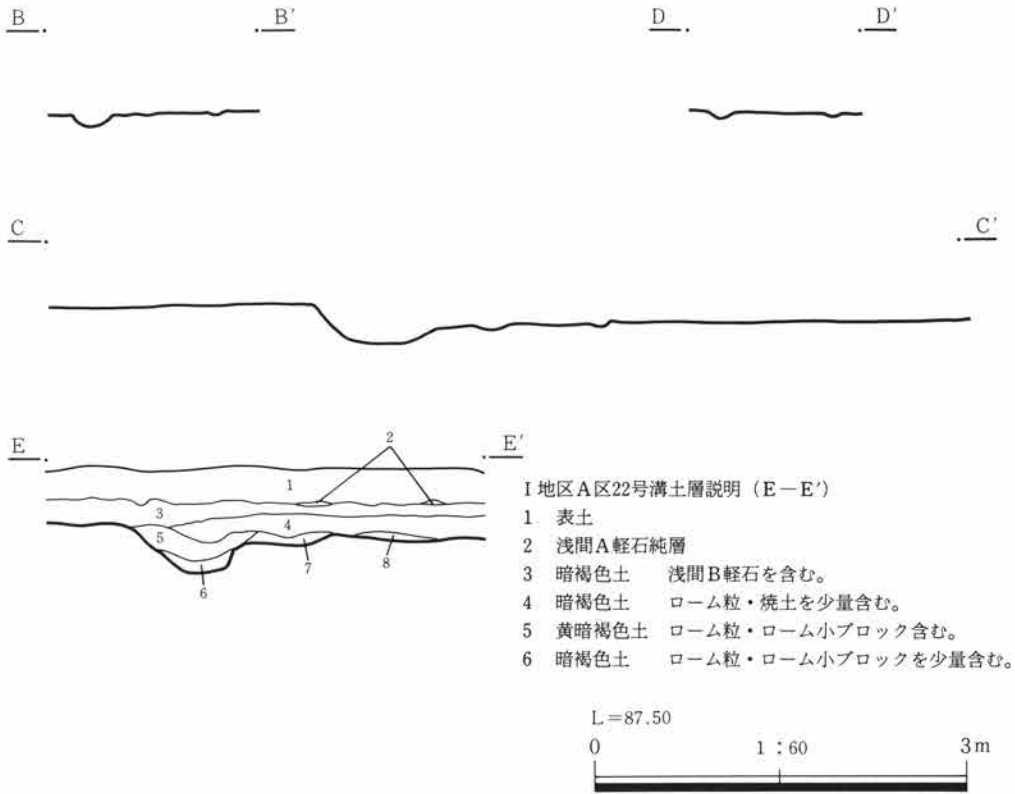
- 1 表土
- 2 浅間A軽石純層
- 3 暗褐色土 ローム粒・B軽石・小石を含む。
- 4 褐色土 ローム粒を含む。

L = 87.50



第760図 I 地区A区22号溝・道路状遺構図(1)





第761図 I 地区A区22号溝・道路状遺構図(2)

ある。

側溝の掘り方は、不整形であり、幅が最も広い部分で3.3m、又、最も狭い部分で1mである。溝の深さは、東側調査区壁付近の幅の広い部分で約10cm、その他の部分で約15cmである。

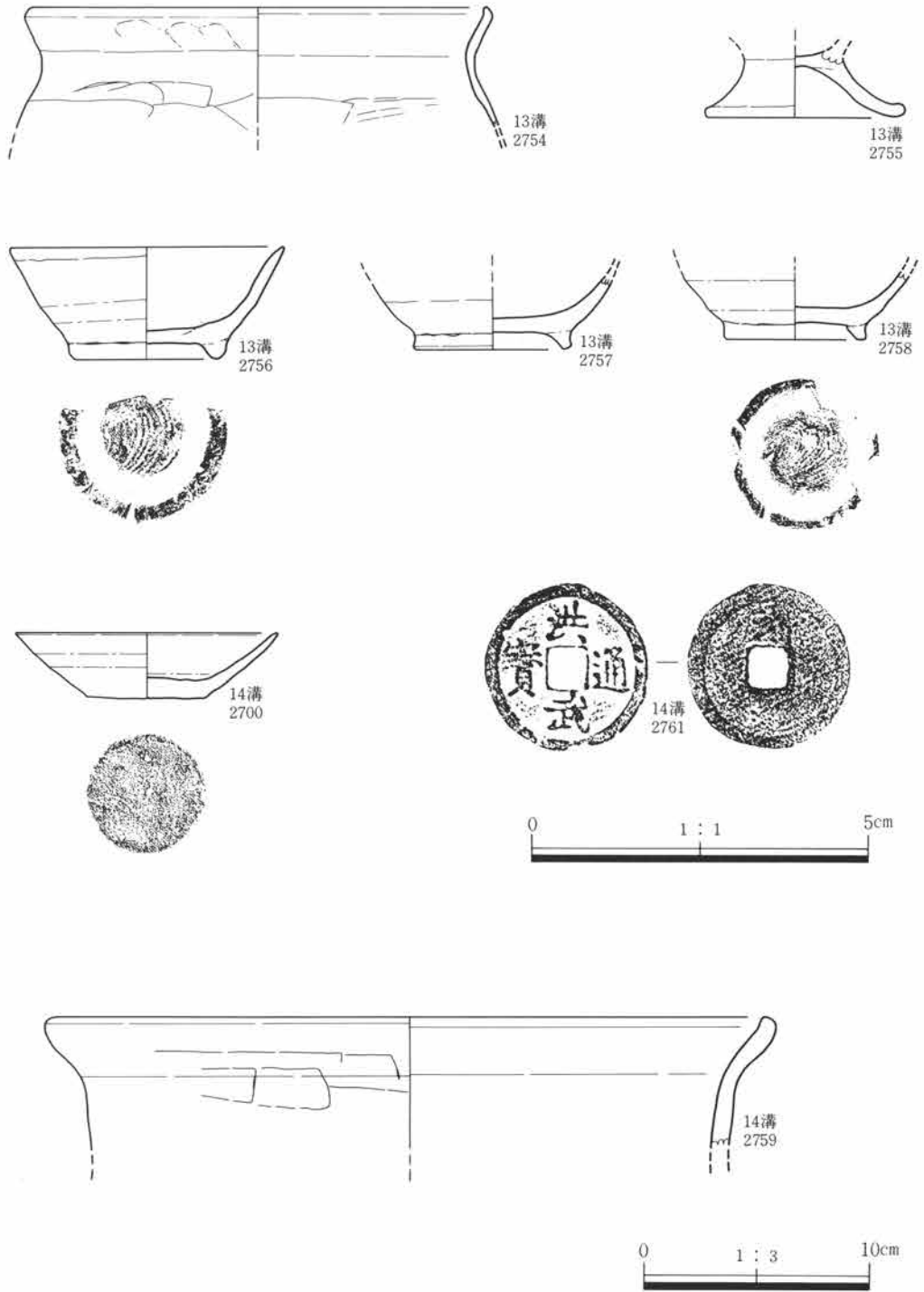
本遺構の時期は、土層断面の状況から、浅間B軽石降下以前と考えられる。なお、本遺構に伴うと考えられる遺物は発見されなかった。(飯塚)

#### I 地区A区22号溝〔道路状遺構側溝〕(第760・761図)

本溝は、2号古墳周堀東側に確認された。重複関係では、2号古墳周堀上へと延びているものの、更に先の墳丘部分へは達しておらず、周堀内での確認が難しいため、墳丘部分手前で立ち上がっているのか、周堀内を墳丘に沿って延びるのか、あるいは、26号溝に連続するのかは、明らかではない。

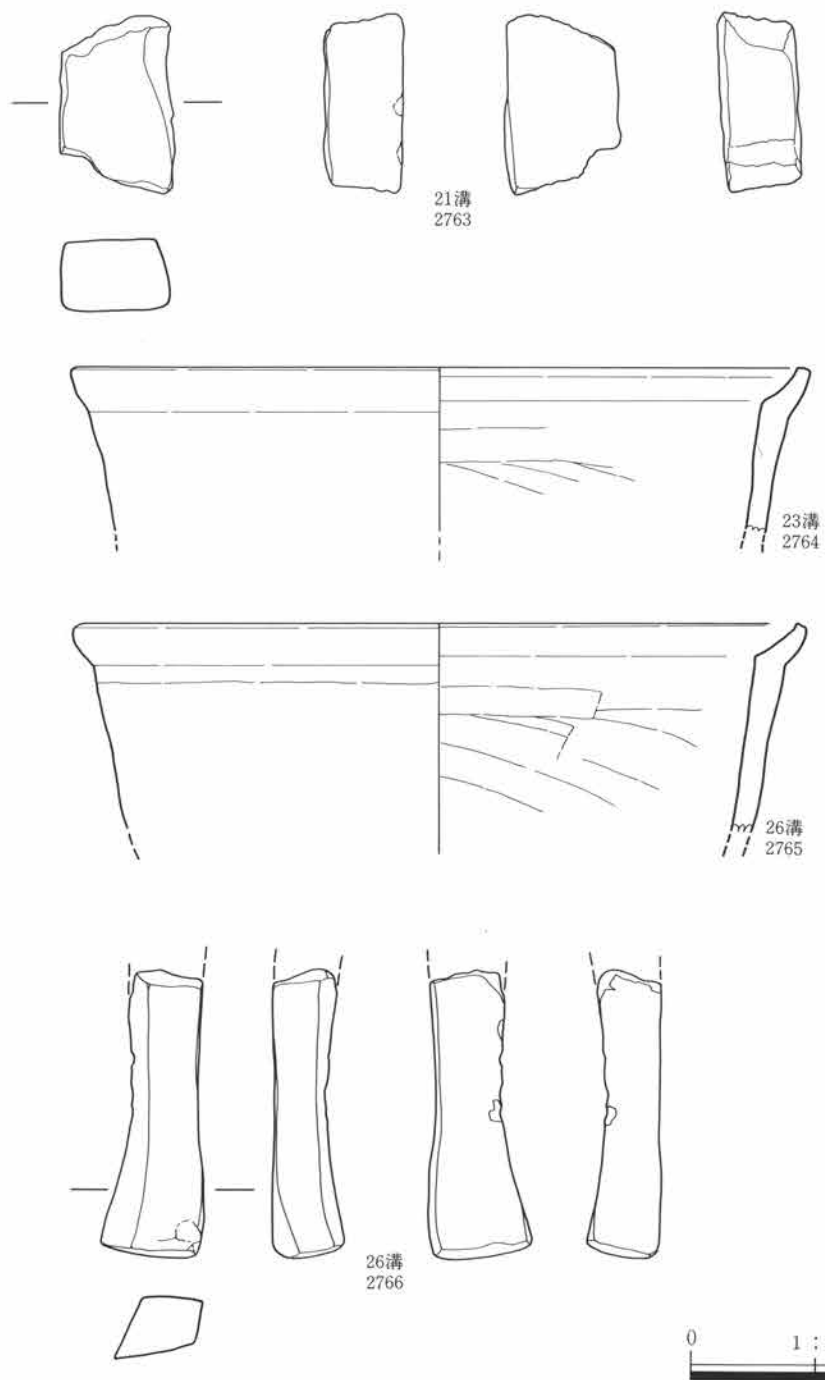
溝の幅は、約1mであるが、2号古墳周堀と重複する付近では約1.5m、東側調査区壁付近の最も広い部分では、約3.3mとなる。溝の深さは、約30cmであるが、調査区東側壁付近では、約10cmと浅くなっている。溝内より遺物は発見されなかった。(飯塚)

第6章 中世・近世の遺構と遺物



第762図 I地区A区溝遺物図(1)

(6) 溝



第763図 I地区A区溝遺物図(2)

第211表 溝遺物観察表 (A区)

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
13溝 2754	壺 土師器	器高:一口径:202mm 底径:一最大径:一口径~頸部の一部残	小石・小砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。黒斑あり。	口縁部やや「コ」の字状。口唇端部内傾。外面:口縁部~頸部まで。体部篋削り。内面:なで。	覆土。
2755	台付壺 土師器	器高:一口径:一底径:89mm最大径:一上部のみ残	砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い褐。煤付着。	台部の一方が大きく開く。内外面:なで。	覆土。
2756	椀 須恵器	器高:50mm口径:122mm底径:70mm最大径:一全体の1/2残	小砂粒を僅かに含む。酸化。硬質。鈍い黄橙・黒。	やや内湾気味に開く。底部回転糸切り。貼付高台。内外面:回転台によるなで。	覆土。
2757	椀 須恵器	器高:一口径:一底径:9mm最大径:一底部下端~底部残	砂粒を少量含む。還元。やや軟質。鈍い黄橙・黒。	底部回転糸切り。貼付高台。内外面:回転台によるなで。	覆土。
2758	椀 須恵器	器高:一口径:一底径:62mm最大径:一底部下端~底部残	砂粒を少量含む。還元。硬質。灰黄。	底部回転糸切り。貼付高台。内外面:回転台によるなで。	覆土。
14溝 2759	鍋 瓦質土器	器高:(56mm)口径:[324mm]底径:一口縁部小片	砂粒鉄分を含む。還元中性焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部外反。土型成形。外面:削り・なで。内面:軽いこぼめ調整。	覆土。
2760	杯 土師質土器	器高:29mm口径:116mm底径:54mm最大径:一残存:?	胎土粗い。微砂粒を多く含む。酸化。軟質。鈍い黄橙。	杯部やや浅く直線的に開く。底部回転糸切り。内外面:回転台によるなで	覆土。油煙付着。
2761	銭			「洪武通寶」	覆土。
21溝 2763	砥石 石製品	幅:43mm厚さ:27mm両端欠	流紋岩。	四面とも擦り減っており、表面は滑らか。	
23溝 2764	鍋 瓦質土器	器高:(65mm)口径:[275mm]底径:一口縁部小片	砂粒鉄分を含む。還元焼成。軟質。	口縁部小さく外傾。土型成形。外内面:軽いこぼめ調整。	
26溝 2765	鍋 瓦質土器	器高:(81mm)口径:[246mm]底径:一口縁部小片	砂粒で気泡が多い。還元。軟質。外面軽く二次焼成。	口縁部小さく外傾。体部直立ぎみ。土型成形。外内面:こぼめ調整。	
2766	砥石 石製品	現存長109mm端部欠	流紋岩。	四面ともかなり擦り減っており、中央部が細くなっている。	

**I 地区 B 区 2 号溝 (第764・769図、第212表)**

2本を一括して2号溝とした。規模は、幅約80cm、深さ20～30cmである。掘り方は、逆台形を呈する部分が多い。出土遺物として、古墳時代初頭の土師器壺形土器(3483)があるが、底面より約25cm上方(ローム上面の遺構確認面と同レベル)であり、本溝が造られた時期を示すものとは断定できない。(飯塚)

**I 地区 B 区 5 号溝 (第765図)**

本溝は、B区7号溝・8号溝・9号溝と併行して走っている。他の遺構との重複関係では、14号住居跡・18号住居跡・20号住居跡と重複しているが、いずれの遺構よりも本溝の方が新しい。

規模は、幅が80cm～1mであるが、北側では50cmとなり、深さは、南側では約20cmであるが、北側に行くに従い次第に浅くなり、やがて確認は難しくなる。本溝に伴うと考えられる遺物は発見されなかった。時期については、住居跡よりも新しい平安時代以降と考えられる。(飯塚)

**I 地区 B 区 6 号溝 (第764図)**

調査区内に一部が確認された。4号土坑と重複しており、本溝の方が古い。規模は、幅が約1mで、深さは約20cmである。掘り方は、逆台形を呈する部分もあるが、不整形を呈する部分が多い。本溝内には、河原石が多く入り込んでいた。河原石は、溝中央付近から西側に多くなっている。なお、本溝は古墳周堀の可能性もある。遺物は全く発見されなかった。時期不明。(飯塚)

**I 地区 B 区 7 号溝 (第765・769図、第212表)**

本溝は、B区5号溝・8号溝の中間に位置しており、両溝と併行して走っている。他の重複遺構との新旧関係では、14号住居跡・20号住居跡・B区2号古墳よりも新しい。

規模は、幅が2～2.5mで、深さは約30cmである。溝はほぼ直線的に掘られており、掘り方は皿状を呈する。溝内より羽釜(3484)と甕形土器(3485)及び高台付椀(3486～3488)の破片が出土しているが、本溝の時期を示すものとは断定できない。(飯塚)

**I 地区 B 区 8 号溝 (第765・769図、第212表)**

本溝は、19号住居跡・22A号住居跡・26号住居跡・9号溝と重複している。これらの重複遺構との新旧関係では、19号住居跡・22A号住居跡・26号住居跡よりも新しいが、9号溝との関係は不明である。

## 第6章 中世・近世の遺構と遺物

溝は、7号溝と9号溝の中間に位置し、約11mの間、西溝と平行しているが、やがて向きを東に変え、22a号住居跡との重複部分で確認は難しくなる。溝の規模は、幅が約1mであるが、東側へ曲がり始める付近では、約3mと広がる。溝の深さは約30cmである。溝内からの出土遺物として、甕形土器(3489)と杯(3490)の破片があるが、溝の時期を示すものとは断定できない。

(飯塚)

### I 地区B区9号溝(第765図)

本溝は、B区26号住居跡・8号溝と重複する。新旧関係では、26号住居跡よりは新しいが、8号溝との関係は不明である。溝は、約11mの間8号溝と重複したあと、8号溝と交わり、更に19号住居跡方面へと延びているが、次第に不明瞭となり確認出来なくなる。

溝の規模は、幅が40~70cmで、深さ10~20cmである。溝内より、遺物は発見されなかった。なお、時期については、26号住居跡の時期(平安時代)よりも新しくなる。

(飯塚)

### I 地区B区10号溝(第766・769・770図、第212表、図版132)

本溝は、極く一部が確認された。他の遺構との重複が多い。重複遺構として、8号住居跡・15B号住居跡・21号住居跡・1号古墳・2号古墳があるが、このうち1号古墳との新旧関係が不明であるほかは、本溝の方が古い。

溝の規模は、幅が1.3~1.8m、深さ4~10cmである。溝の北部分は、1号古墳周溝と重複しているが、更に1号古墳の墳丘部にまでは延びていない。又、南側は、15B号住居跡・2号古墳の石室入り口と重なるためか、北端の1号古墳周溝に重複する部分から約10mで確認できなくなる。溝内よりの出土遺物として、須恵器蓋杯(3492~3501)・長頸壺(3491)・土師器甕(3502)があり、溝底より5~10cm上方にまとまって存在した。時期は奈良時代と考えられる。

(飯塚)

### I 地区B区11号溝(第767図)

本溝は、28号住居跡・29号住居跡・42号住居跡・43号住居跡・30a号住居跡・30b号住居跡・12号溝・14号溝と重複する。これらの重複遺構のうち、本溝より新しいのは14号溝のみであり、他の遺溝はすべて本溝より古い。

溝は、ほぼ直線的に延びているが、西側の14号溝と重複する付近では、南西方向に枝分かれしている。規模は、幅1.5m~2.0m、深さ35cm~45cmである。掘り方は逆台形を呈しており、底面はほぼ平坦である。なお、西側の14号溝付近で南西方向に枝分かれした部分の方が、わずかではあるが底面は低くなっている。本溝の時期については、平安時代以降中世以前と考えられる。覆土中より、高台付碗が出土しているが、本溝の時期を示すものではない。

(飯塚)

## I 地区 B 区12号溝 (第767図)

本溝は、11号溝・14号溝と重複しているが、両溝より本溝の方が古い。規模は、幅が約70cm、深さ10～30cmである。底面のレベルは、溝北端部が南端部に比べて約25cm高くなっている。溝内より遺物は発見されなかった。時期は、11号溝に切られているという関係から、奈良時代かそれ以前となる可能性が強い。(飯塚)

## I 地区 B 区14号溝 (第767・770図、第212表)

本溝は、調査区西側壁部分に、極く一部が確認された。重複遺構として、30C号住居跡・33A号住居跡・33B号住居跡・11号溝・12号溝があるが、いずれの遺構よりも本溝の方が新しい。

溝の規模・形態は、極く一部であるため明らかではない。又、溝ではなく、他の遺構である可能性もある。なお、深さは約60cmである。出土遺物として、陶器の破片(3506・3507)がある。出土遺物の時期から中世末～近世初期と考えられる。(飯塚)

## I 地区 B 区17号溝 (第768図)

本溝は、B区16号溝・18号溝と重複しており、両溝よりも新しい。規模は、幅が80cm～1.2mで、深さは、約30cmである。直線とはならず、やや蛇行している。溝内より遺物は発見されなかった。時期については、18号溝よりも下る平安時代以降と考えられる。(飯塚)

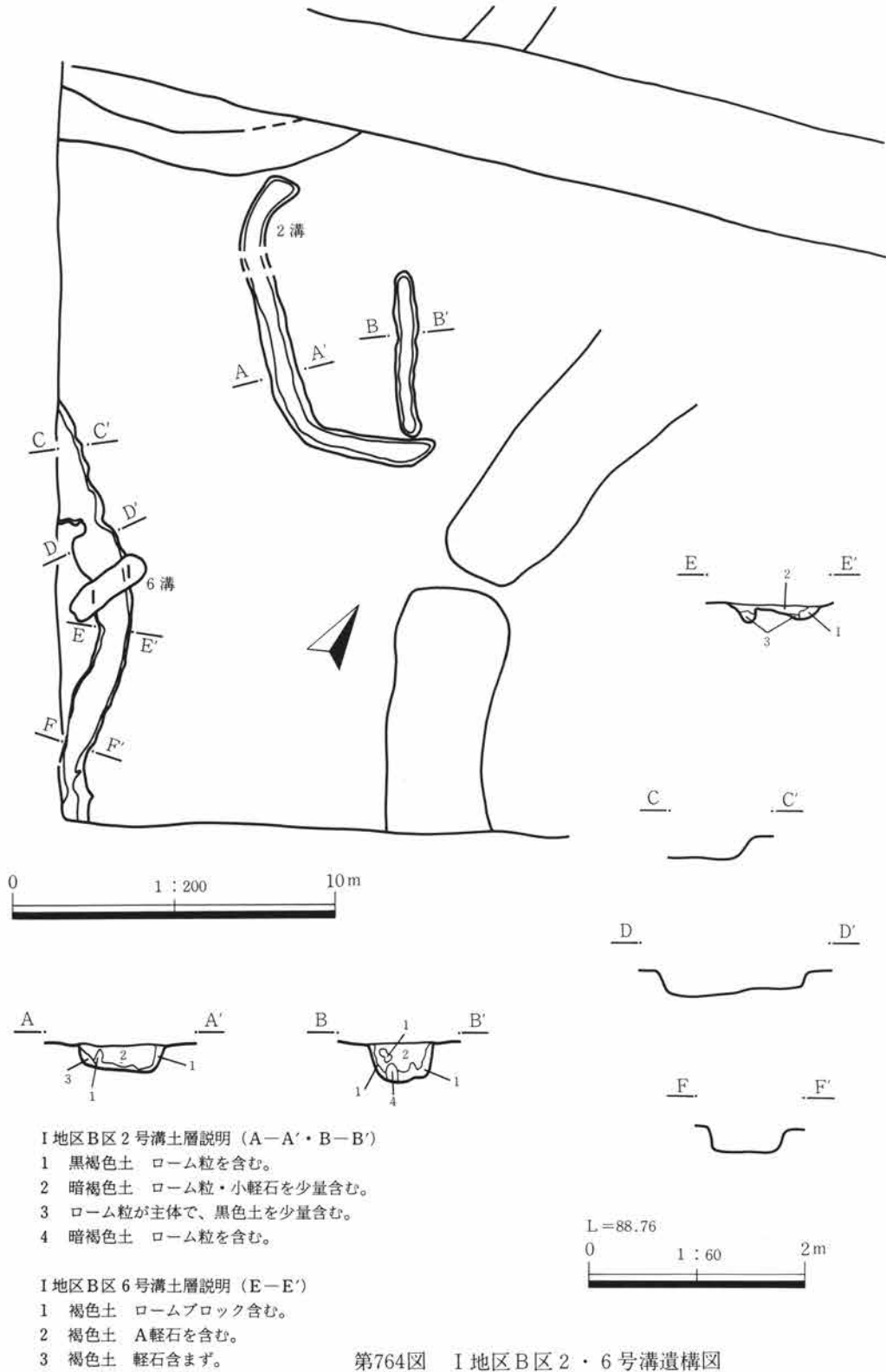
## I 地区 B 区18号溝 (第768・770図、第212表)

本溝は、16号溝・17号溝と重複している。16号溝よりも新しく、17号溝よりも古い。規模は、長さ7.5m、最大幅2.3m、中央の最も深い部分で約50cmである。形態は、長隋円形で、16号溝の走行と一致している。なお溝内には、底面より浮いた状態で、多くの河原石が存在した。

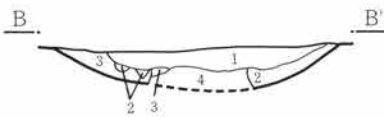
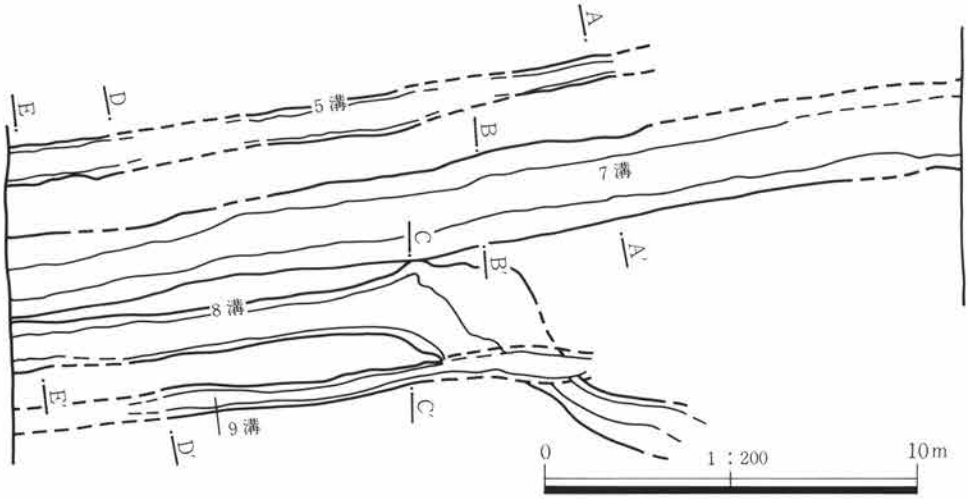
本溝からの出土遺物として、平安時代の高台付椀(3509・3510)があり、本溝の時期を示すものか否かは断定出来ない。(飯塚)

## I 地区 B 区19号溝 (第768図)

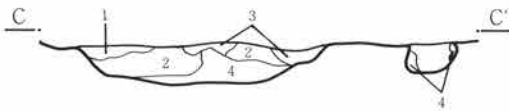
本溝は、重複するB区47号住居跡よりも新しい。規模は幅約1m、長さ8m、深さ約12cmである。底面はほぼ平坦である。出土遺物が皆無であるため、時期については不明であるが、47号住居跡の時期である古墳時代後期以降と考えられる。(飯塚)



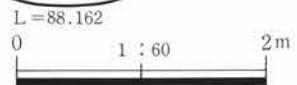




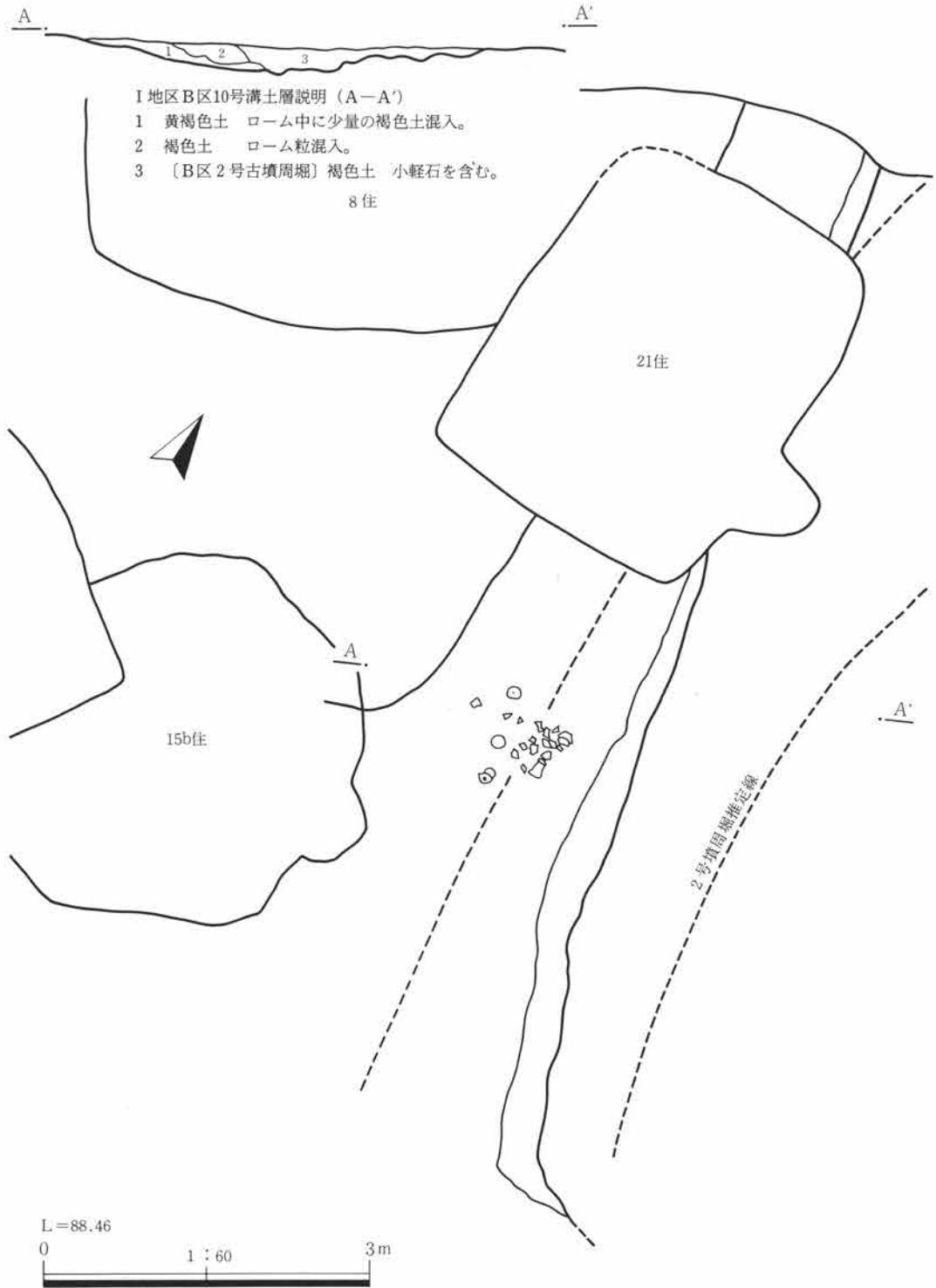
- I地区B区7号溝土層説明 (B-B')
- 1 褐色土
  - 2 褐色土 ローム粒を含む。
  - 3 ローム主体、褐色土少量混入。
  - 4 褐色土 ローム粒・小石を多く含む。



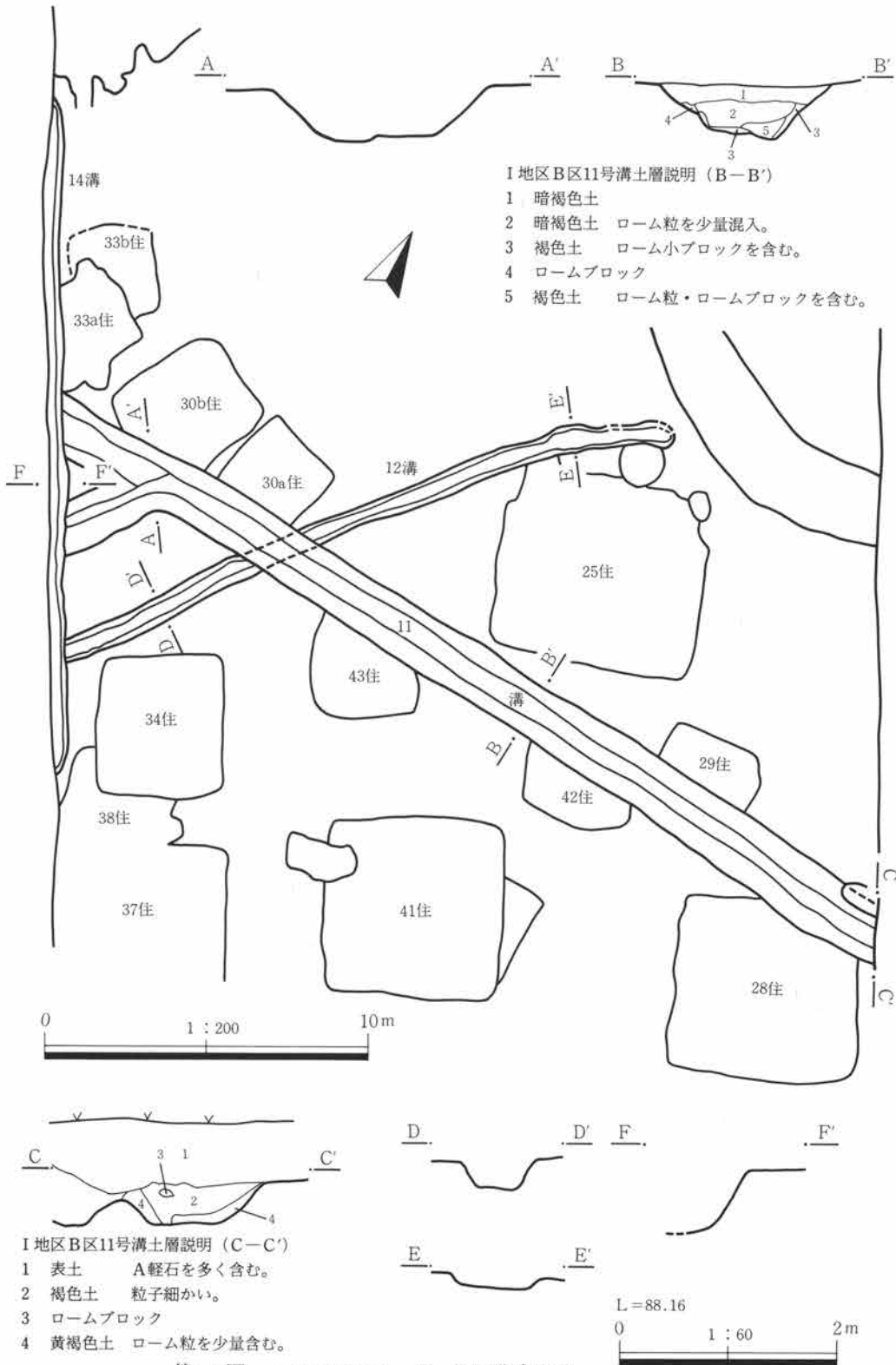
- I地区B区8・9号溝土層説明 (C-C')
- 1 褐色土 A軽石を含む。
  - 2 黄色土 ローム小ブロックを含む。
  - 3 A軽石
  - 4 黄色土 ローム粒を多く含む。
  - 5 褐色土 ロームブロック混入。

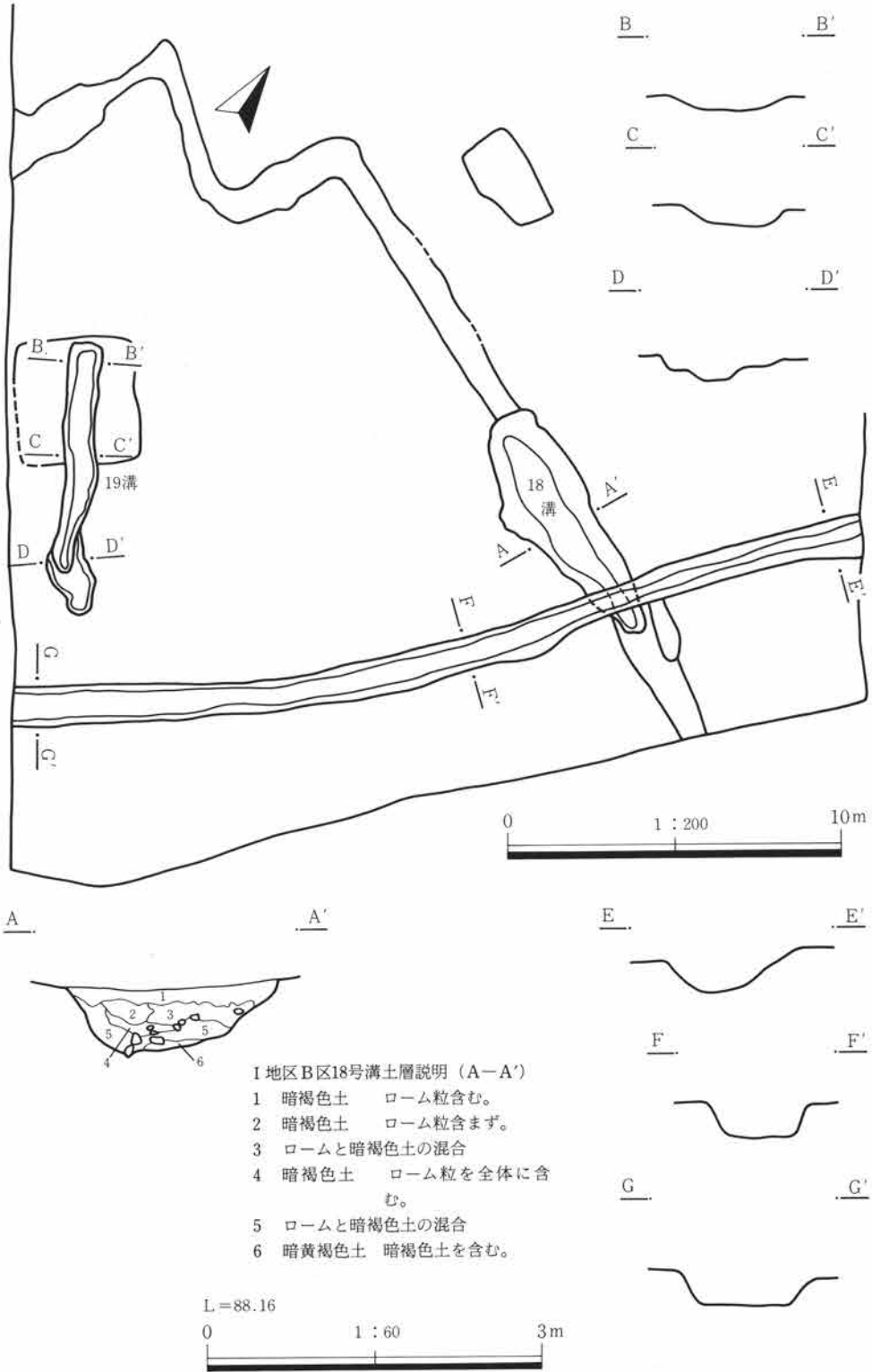


第765図 I地区B区5・7・8・9号溝遺構図

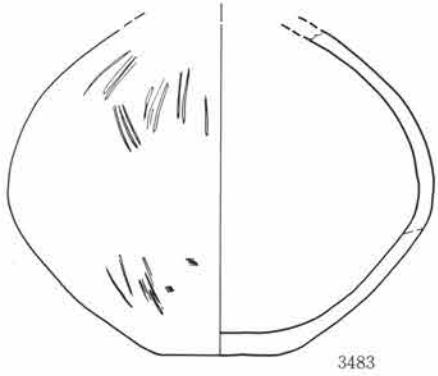


第766図 I地区B区10号溝遺構図

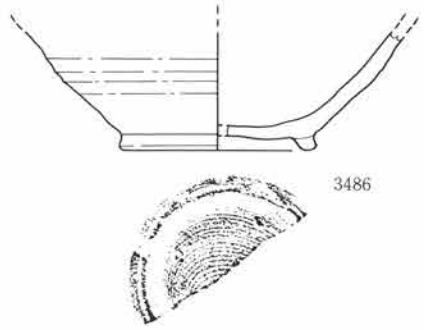




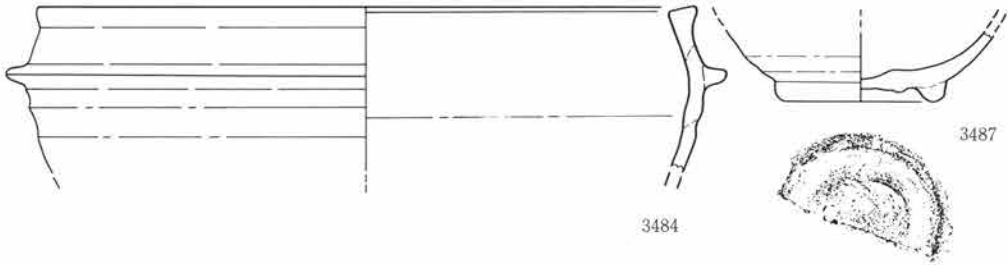
第768図 I地区B区 17・18・19号溝遺構図



3483

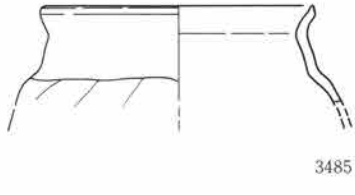


3486

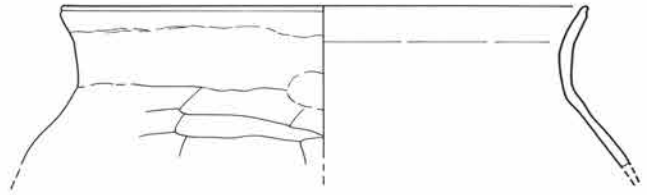


3484

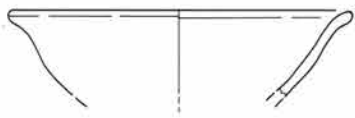
3487



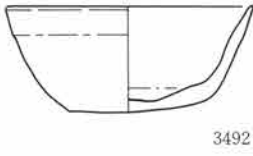
3485



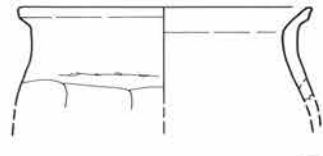
3489



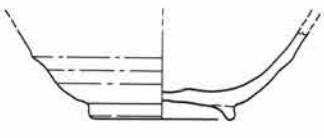
3488



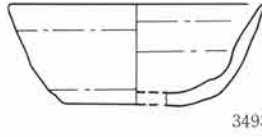
3492



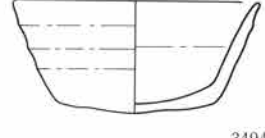
3502



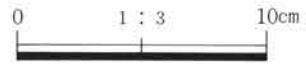
3490



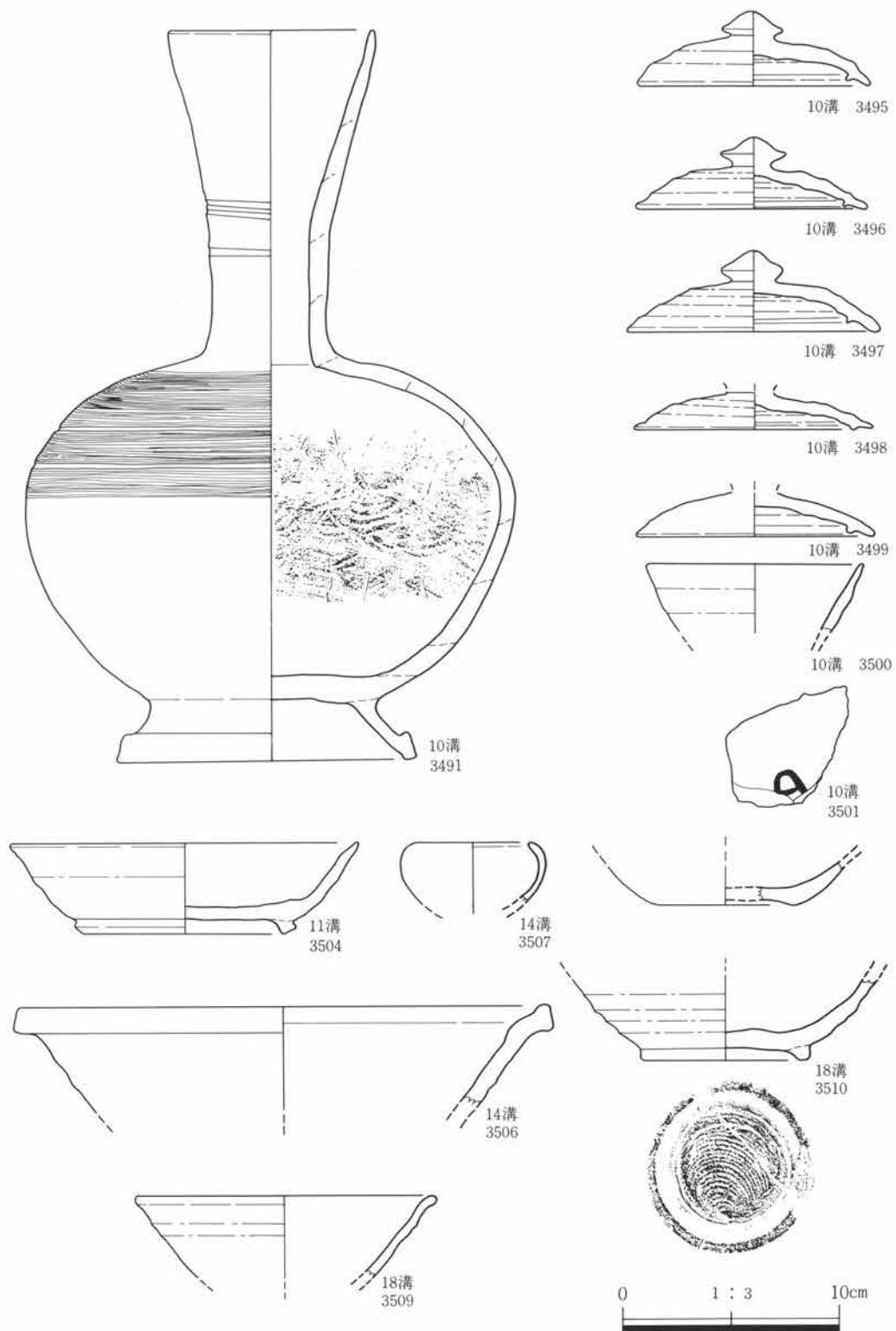
3493



3494



第769图 I地区B区溝遺物图(1)



第770図 I地区B区溝遺物図(2)

第 212 表 溝遺物観察表 (B区)

番号	器 種 土 器 種	法量(器高・口径・底 径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状 態考
2溝 3483	壺 土師器	器高:(130mm)口径: 一底径:50mm最大 径:170mm全体の $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟 質。鈍い黄橙。内面:黒斑 あり。	最大径は体部中央。外面:篋磨き。な で。	覆土。
7溝 3484	羽釜 土師器	器高:(65mm)口径: [262mm]底径:一口縁 ~体部上半の一部残	小砂粒を僅かに含む。酸 化。やや硬質。全面に煤が 付着しており、オリーブ 黒。	口縁部は肥厚し内傾。内外面:回転台 によるなで。	覆土。
3485	甕 土師器	器高:(40mm)口径: [108mm]底径:一口縁 ~頸部の一部のみ残	小砂粒を僅かに含む。酸 化。やや硬質。明褐。	口縁部は「コ」の字状。外面:口縁部は 指押さえ。体部は篋削り。内面:なで。	覆土。
3486	椀 須恵器	器高:(47mm)口径: 一底径:[78mm]底部 ~体部下 $\frac{1}{2}$ 残	小砂粒を僅かに含む。還元。 硬質。灰白。	底部は回転糸切り。貼付高台。内外 面:回転台によるなで。	覆土。
3487	椀 須恵器	器高:(28mm)口径: 一底径:62mm底部 ~体部下 $\frac{1}{2}$ 残	径2~4mmの小石を含 む。還元。硬質。オリーブ 黄。	底部回転糸切り。貼付高台。内外面: 回転台によるなで。	覆土。
3488	椀 須恵器	器高:(33mm)口径: [137mm]底径:一上半 部の一部残	小砂粒を含む。還元。やや 軟質。灰白。	内外面:回転台によるなで。	覆土。
8溝 3489	甕 土師器	器高:(60mm)口径: [210mm]底径:一口縁 ~体部上半の一部残	微砂粒を少量含む。酸化。 硬質。鈍い橙。	頸部はやや「コ」の字状。口縁部外面 に輪積痕。外面:口縁部はなで・指お さえ。体部は篋削り。内面:篋なで。	覆土。
3490	椀 土師器	器高:(34mm)口径: 一底径:58mm体部下 半~底部のみ残	小砂粒を僅かに含む。酸 化。硬質。橙。	体部は内湾気味に立ち上がる。底部 は回転糸切り、貼付高台。内外面:回 転台によるなで。	覆土。
10溝 3491	長頸壺 須恵器	器高:333mm口径:96 mm底径:138mm最大 径:225mmほぼ完形	小砂粒を含む。還元。硬 質。外面は灰。内面は鈍い 橙。	頸部は長く、緩やかに外反するが、口 唇部は直立。体部最大径は中央やや 上方。高台は折り返し。外面:頸部に 3条の沈線文、体部上半にカキ目。底 部は回転糸切り後、高台貼付。内面: 回転台によるなで。	覆土。
3492	杯 須恵器	器高:42mm口径:100 mm底径:55mm口径 ~体部の一部欠	小砂粒を含む。還元。硬 質。浅黄。	やや小形で深い。底部は篋切り。内外 面:回転台によるなで。	覆土。
3493	杯 須恵器	器高:40mm口径:102 mm底径:50mm口径 ~体部の一部欠	径2~3mmの小石・砂粒 を含む。還元。硬質。灰。	やや小形で深い。底部は篋切り。内 面:回転台によるなで。	覆土。

第6章 中世・近世の遺構と遺物

3494	杯 須惠器	器高:44mm 口径:[98mm]底径:[60mm]全体の $\frac{2}{3}$ 残	小石・小砂粒を少量含む。還元。硬質。灰。	やや小形で深い。底部は篋切り後などで。内外面:回転台によるなで。	覆土。
3495	蓋 須惠器	器高:34mm 口径:108mmつまみ径:28mm一部欠	砂粒を少量含む。還元。硬質。灰。	内外面:回転台によるなで。	覆土。
3496	蓋 須惠器	器高:33mm 口径:106mmつまみ径:30mmつまみの一部欠	小石・小砂粒を少量含む。還元。硬質。灰。	内外面:回転台によるなで。	覆土。
3497	蓋 須惠器	器高:37mm 口径:116mmつまみ径:28mm完形	径3~4mmの小石・砂粒を少量含む。還元。硬質。灰。	内外面:回転台によるなで。	覆土。
3498	蓋 須惠器	器高:(17mm)口径:115mmつまみ及び蓋の一部欠	砂粒を少量含む。還元。硬質。灰。外面に灰附着。	内外面:回転台によるなで。	覆土。
3499	蓋 須惠器	器高:(20mm)口径:110mmつまみ及び蓋の一部欠	砂粒を少量含む。還元。硬質。灰。外面に灰附着。	内外面:回転台によるなで。	覆土。
3500	杯 須惠器	口径:100mm小破片	小砂粒を少量含む。還元。軟質。灰。	内外面:回転台によるなで。	覆土。
3501	杯 須惠器	底径:63mm小破片	胎土粗く砂粒を含む。還元。軟質。灰白。	底部は回転糸切り。	覆土。墨書あり。
3502	甕 土師器	口径:118mm小破片	小砂粒を僅かに含む。酸化。やや硬質。鈍い褐。	小形。口唇部はなで。頸部は指おさえ。体部は篋削り。内面:なで。	覆土。
11溝 3504	杯 須惠器	器高:41mm 口径:[16mm]底径:[102mm] $\frac{2}{3}$ 残	小砂粒を含む。還元。硬質。灰。	杯部やや浅く、高台幅が斜行する。底部は篋切り後、高台貼付。	覆土。
14溝 3506	播鉢 陶器鉄釉	器高:52mm 口径:242mm底径:一口縁部小片	砂粒で黒色鉱物粒を多く含む。酸化焼成。軟質。	口唇部は外へ稜を持って張り出し、内面も稜を持っている。輪積成形。全面施釉。	釉はやや銀化。瀬戸・美濃系?
3507	薬壺? 陶器鉄釉	器高:(28mm)口径:[54mm]底径: $\frac{1}{3}$ 残	還元焼成。硬質。砂粒、気泡少ない。	器壁薄い。口唇部大きく内反。全面施釉でややむらあり。	美濃系。
18溝 3509	碗 須惠器	器高:(37mm)口径:[140mm]底径: $\frac{1}{3}$ 残	小砂粒を含む。還元。硬質。灰黄。	やや内湾しながら開き、口唇端部は外傾。	覆土。
3510	碗 須惠器	器高:(38mm)口径:一底径:77mm体部下半~底部残	小砂粒を含む。還元。やや硬質。灰白。	体部内湾しながら開く。底部は回転糸切り、貼付高台。内外面:回転台によるなで。	覆土。



## I 地区C区1号溝 (第771・777図、第213表)

本溝は、C区1号古墳・2号古墳・3号古墳・10号住居跡・13号住居跡・14号住居跡・1号方形周溝墓・2号溝・10号土坑と重複しているが、これらの遺構よりも本溝の方が新しい。

溝は、N-3°-Wを示し、ほぼ南北に直線的に延びている。南側は、1号古墳の墳丘部に若干入り込んだ所で立ち上がっている。規模は、幅1~1.5mで、深さは30~50cmである。北側がやや浅くなっている。出土遺物としては、皿(3842)・燈明皿(3843)・乗燭(3844)・砥石(3845・3846)がある。時期は江戸時代と考えられる。(飯塚)

## I 地区C区2号溝 (第772図)

本溝は、1号古墳・5号住居跡・10号住居跡・1号溝と重複しているが、1号溝よりは古く、1号古墳・5号住居跡・10号住居跡よりも新しい。溝は、N-85°-Wで、ほぼ東西へ走行する。なお、西側は調査区外へと延びているが、東側は5号住居付近で立ち上がっている。

規模は、幅70cm~1mで、深さ約30cmであり、直線的に延びている。本溝に伴うと考えられる遺物は発見されなかった。時期については、他の遺構との重複関係から、平安時代~江戸時代の間と考えられる。(飯塚)

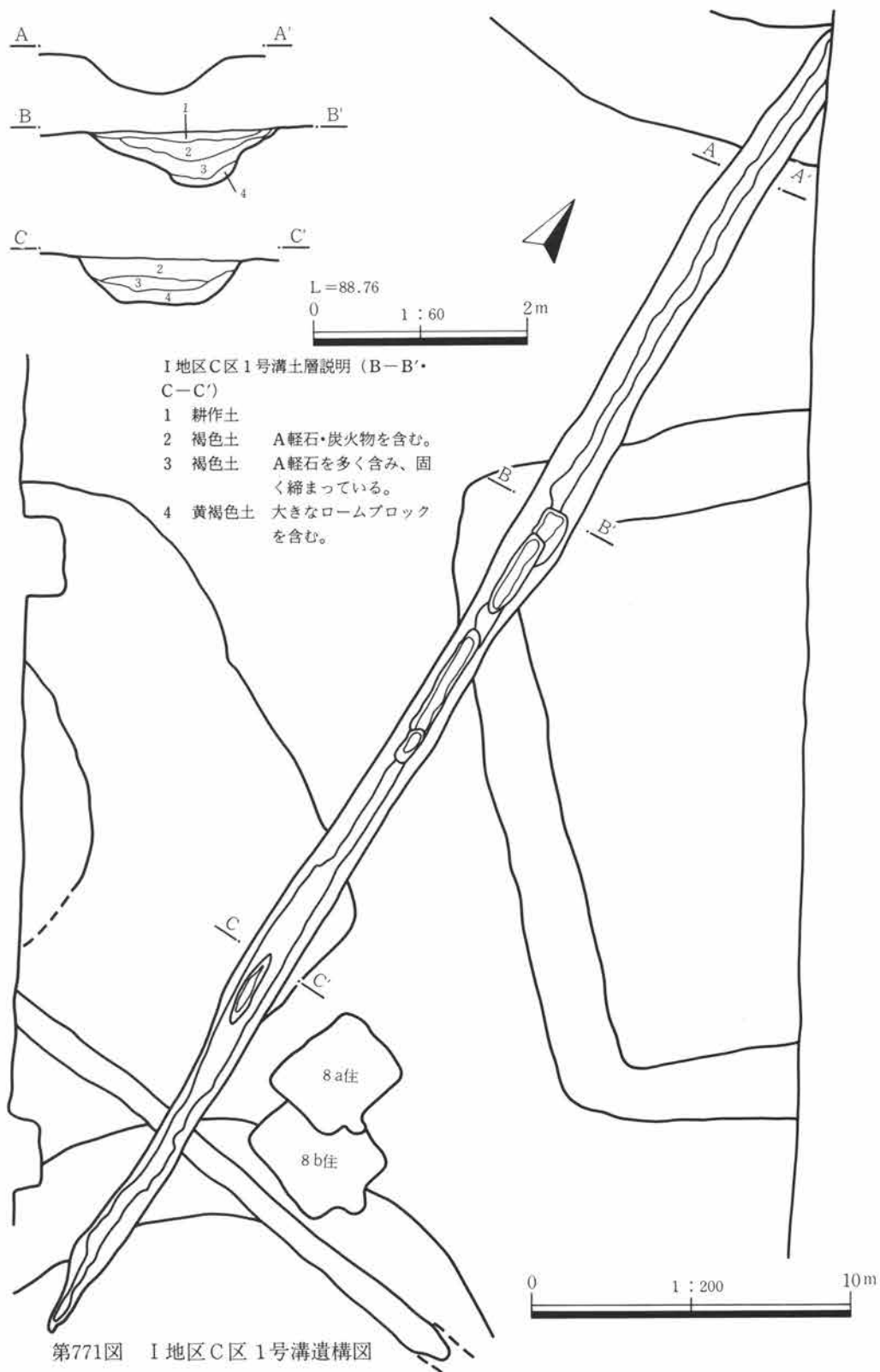
## I 地区C区6号溝 (第773・777図、第213表)

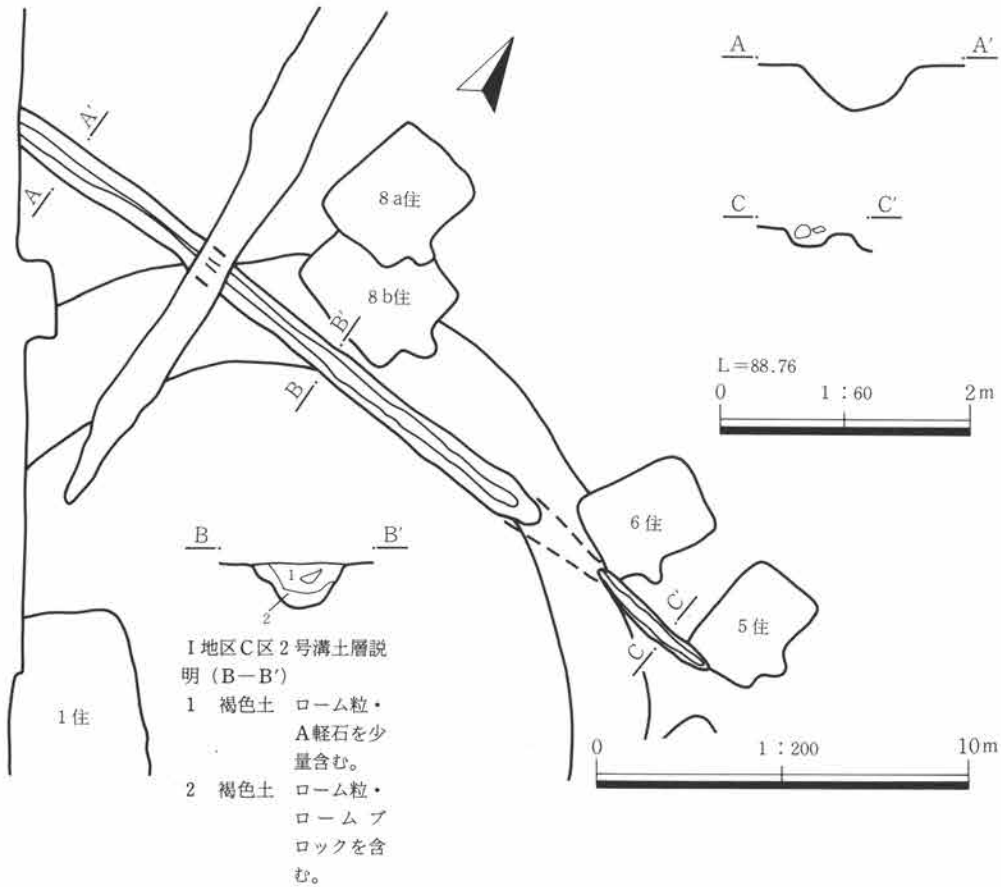
本溝は、C区1号館跡・2号館跡・6号方形周溝墓・7号溝と重複する。重複遺構との新旧関係では、6号方形周溝墓よりは新しく、1号館跡・2号館跡よりは古い。又、7号溝との新旧関係は不明である。

規模は、幅1~1.2mで、深さは約60cmである。出土遺物として、カワラケ破片(3851)・キセル(3852)がある。時期は室町時代と考えられる。(飯塚)

## I 地区C区7号溝 (第773・777図、第213表)

本溝は、C区2号館跡・6号溝と重複している。新旧関係では、2号館跡よりは古いですが、6号溝との関係は不明である。確認されたのは12mであるが、南側では立ち上がっており幅がやや広くなっている。規模は、幅1.2~1.5mであるが、南端の幅は3.5mとなる。深さは約35cmである。出土遺物として鉢(3853)の破片がある。時期は室町時代と考えられる。(飯塚)





第772図 I 地区C区2号溝遺構図

## I 地区C区8号溝 (第773図)

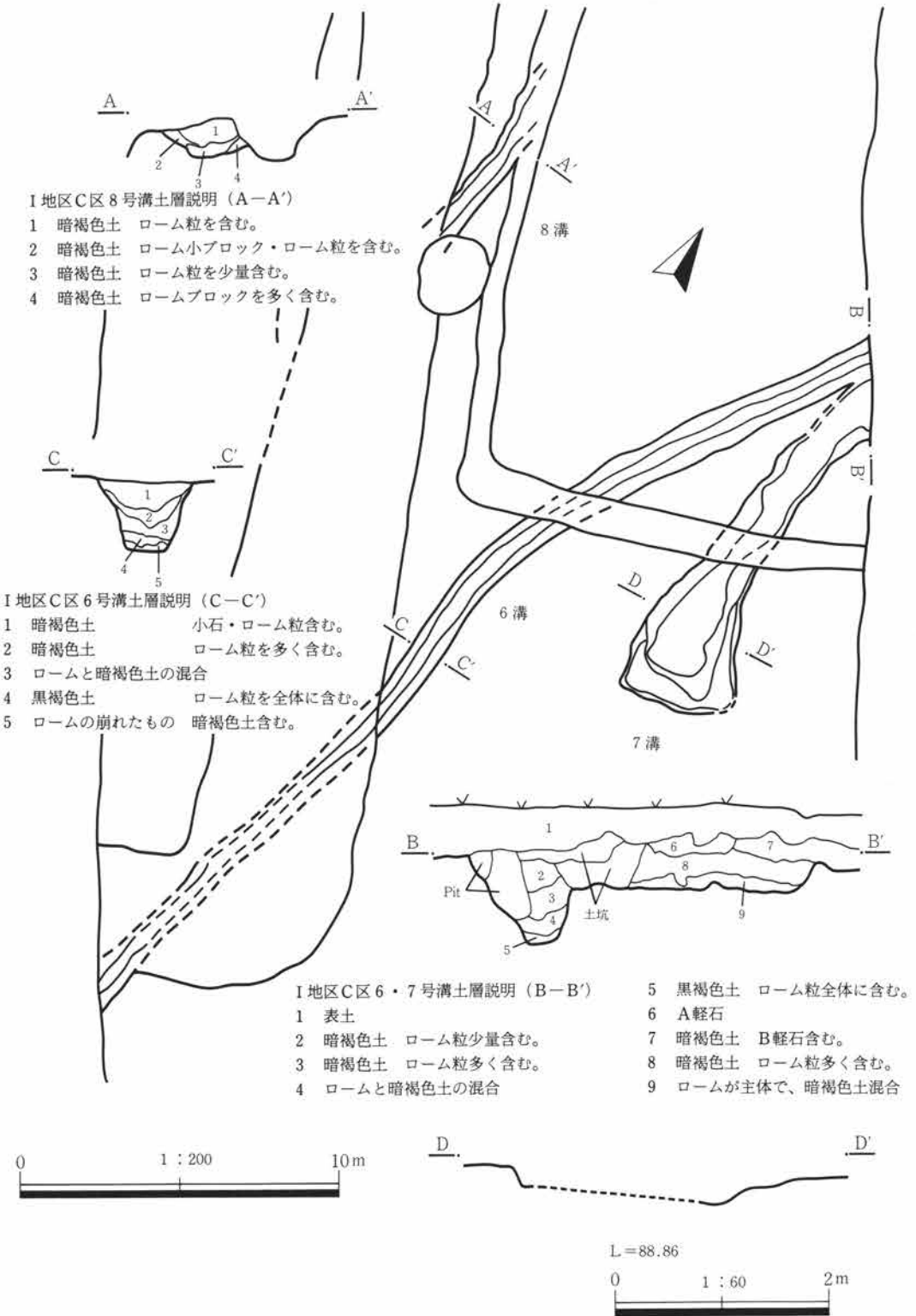
本溝は、C区1号館跡と2号館跡の間隙に存在する。2号館跡よりは古い。1号館跡との関係は明らかにできなかった。規模は、幅約80cm、深さ約30cmである。遺物は全く出土していない。時期は中世末以前。(飯塚)

## I 地区C区9号溝 (第774図)

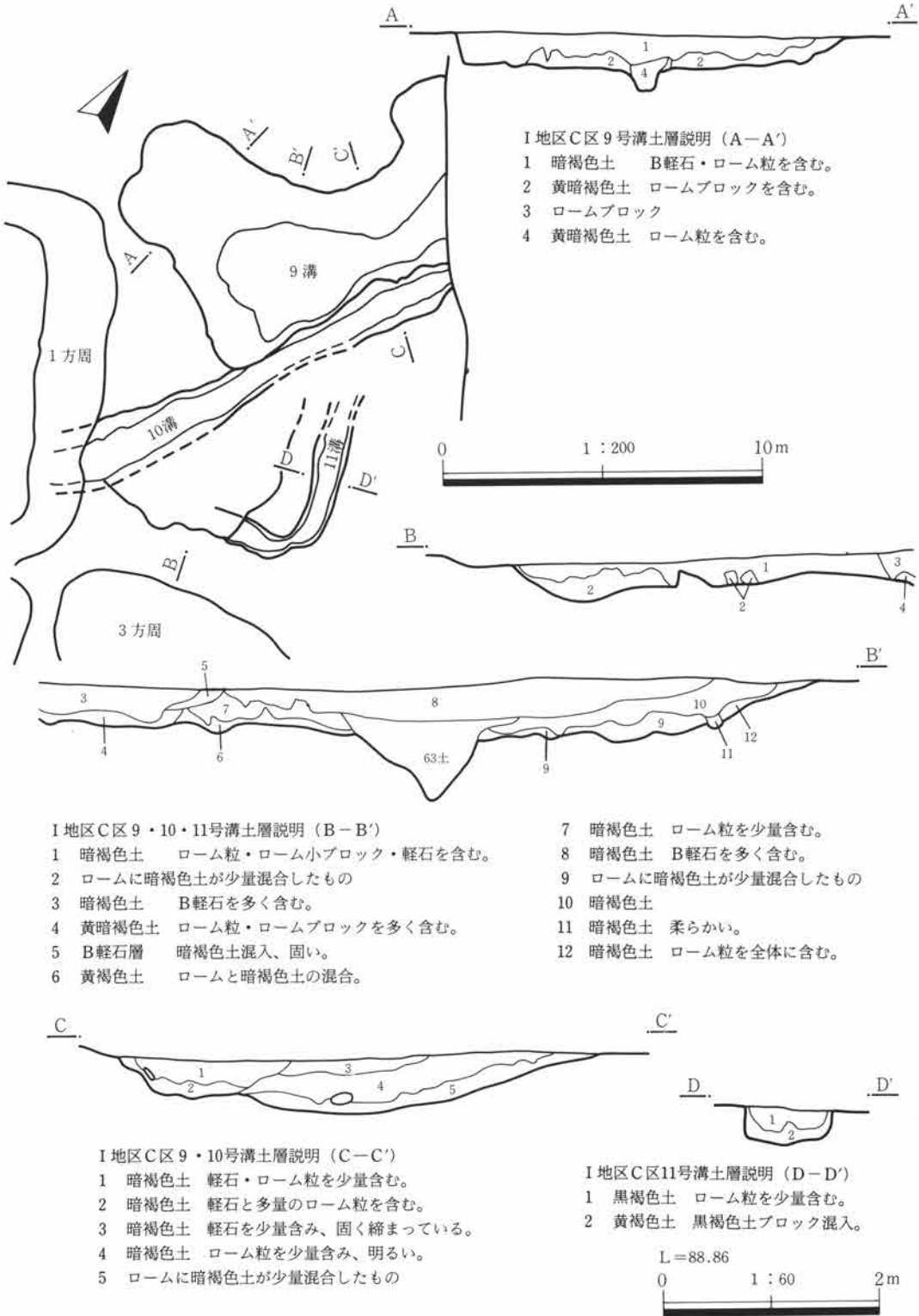
本溝は不整形を呈する。10号溝と重複しているが、本溝の方が古い。深さ約50cmで、皿状の掘り方を持つ。覆土中に部分的ではあるが、浅間B軽石層が見られることから、浅間B軽石降下以前と考えられる。溝内より遺物は発見されなかった。(飯塚)

## I 地区C区10号溝 (第774図)

本溝は、C区6号方形周溝墓・9号溝と重複するが、両遺構よりも新しい。規模は、幅1~1.5mで、深さは約30cmである。遺物は発見されなかった。時期は、古墳時代以降と考えられる。(飯塚)



第773図 I地区C区6・7・8号溝遺構図



第774図 I地区C区9・10・11号溝遺構図

I 地区C区11号溝 (第774・777図、第213表)

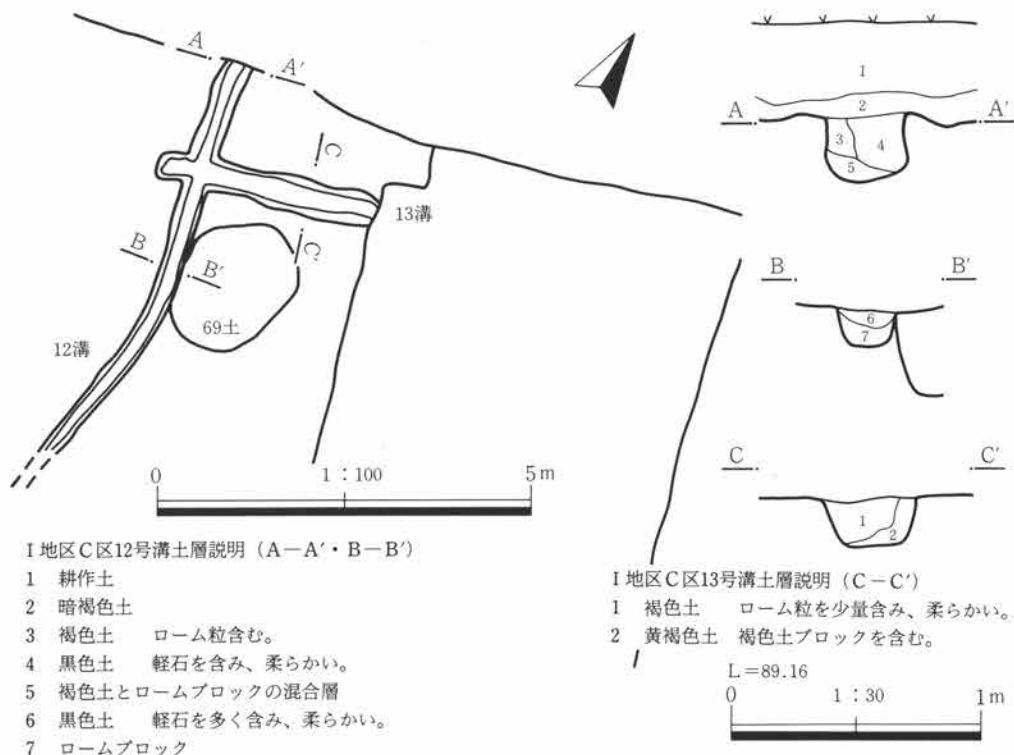
本溝は一部が確認された。北側は、次第に浅く不明瞭となり、西側は浅い掘り込みによって、確認できなくなる。規模は、幅約70cm、深さ約30cmである。出土遺物として、石臼(3854)の小破片がある。時期不明。(飯塚)

I 地区C区12号溝・13号溝 (第775図)

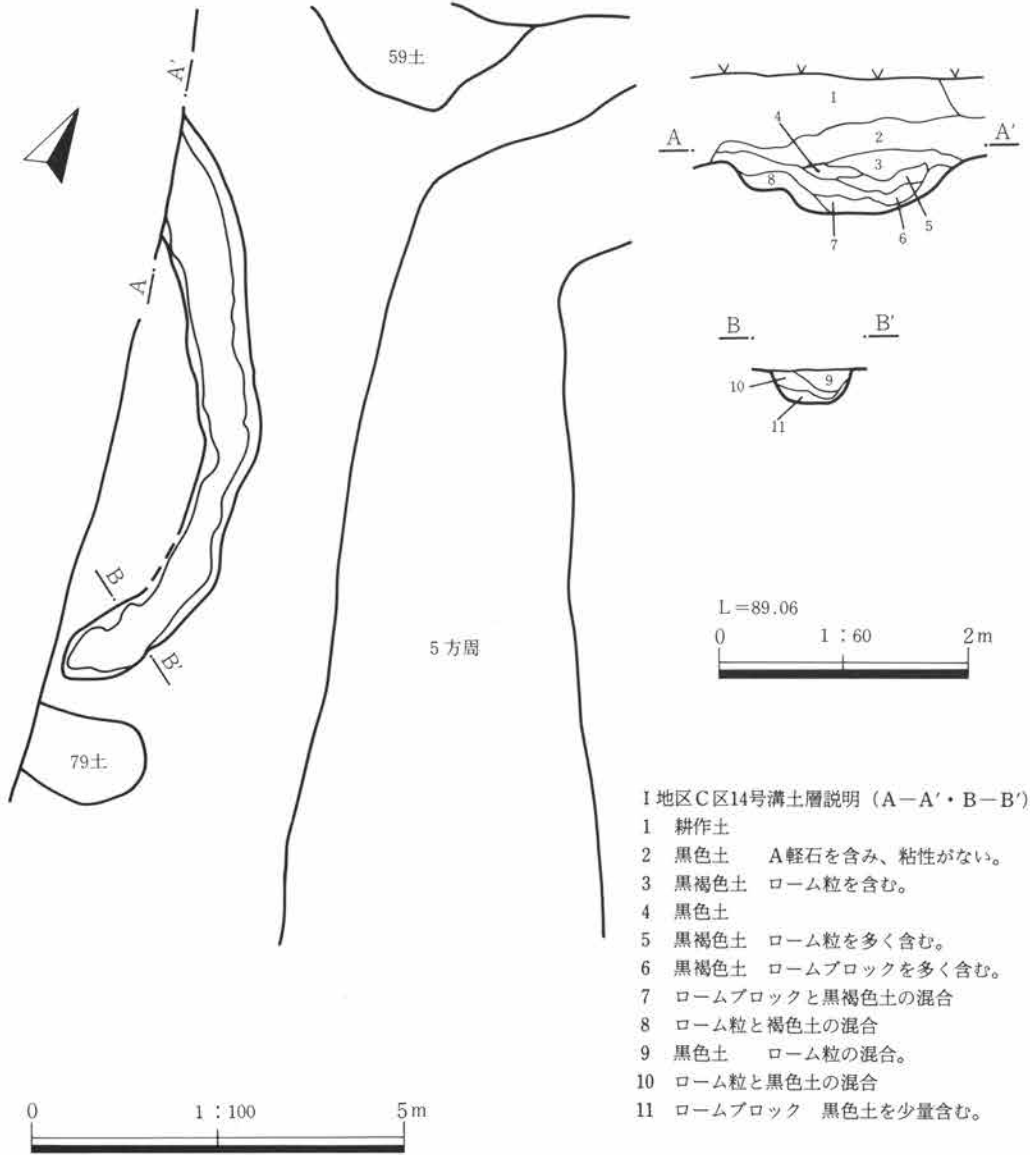
本溝は、連結している、C区1号館跡の内側に存在し、堀と重複している。1号館跡との新旧関係・同時存在の有無については不明である。規模は、幅30~40cm、深さは15~25cmである。遺物は全く発見されていない。時期不明。(飯塚)

I 地区C区14号溝 (第776図)

本溝は、一部が確認された。溝は径4~5mの円弧を描くような形となるが、南側は立ち上がっている。規模は、幅50cm~1mで、深さは20~40cmである。遺物は全く発見されなかった。時期不明。(飯塚)



第775図 I 地区C区12・13号溝遺構図

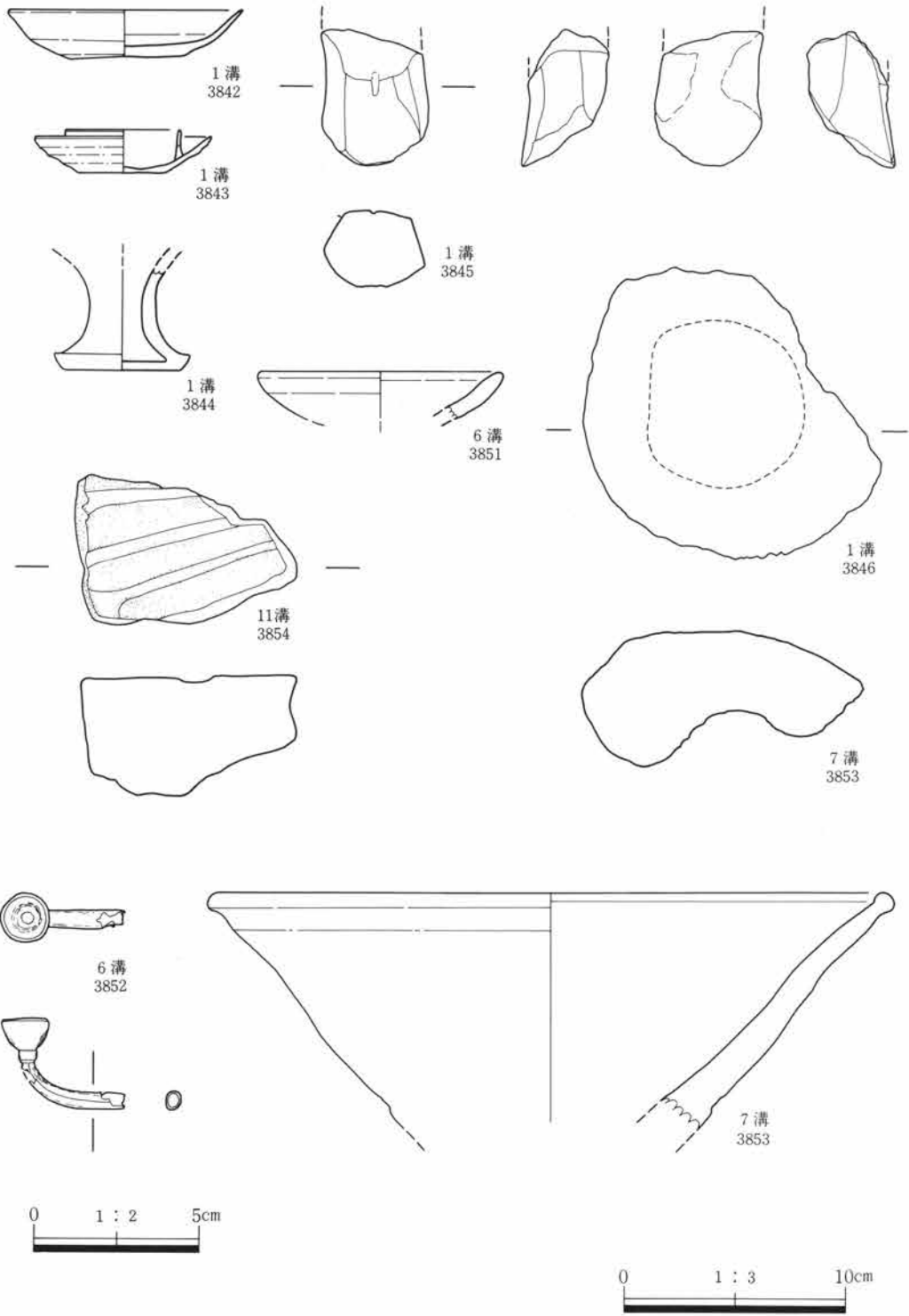


I 地区C区14号溝土層説明 (A-A'・B-B')

- 1 耕作土
- 2 黒色土 A 軽石を含み、粘性がない。
- 3 黒褐色土 ローム粒を含む。
- 4 黒色土
- 5 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
- 6 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 7 ロームブロックと黒褐色土の混合
- 8 ローム粒と褐色土の混合
- 9 黒色土 ローム粒の混合。
- 10 ローム粒と黒色土の混合
- 11 ロームブロック 黒色土を少量含む。

第776図 I 地区C区14号溝遺構図

第6章 中世・近世の遺構と遺物



第777図 I地区C区溝遺物図



第 213 表 溝遺物観察表 (C区)

番号	器 種 土 器 種	法量(器高・口径・底 径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	出 土 状 態 備 考
1 溝 3842	灯 明 皿 陶器 錆釉	器高:21mm 口径:105 mm 底径:54mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。還元焼成。硬質。内外面は二次焼成。	口縁部の器壁は薄く外傾。底部は回転糸切り後、周縁部調整。底部以外は薄く施釉。見込みにトチン痕。	瀬戸美濃系。
3843	灯 明 皿 陶器 錆釉	器高:19mm 口径:80mm 底径:38mm $\frac{1}{2}$ 残	微砂粒を含む。酸化焼成。硬質。内外面は二次焼成。	全体に器壁は薄い。受け部は直立。体部は大きく外傾。底部は小さい。体部の下端まで調整。底部と内面の下端以外は施釉。	瀬戸美濃系。
3844	乗 燭 陶器 灰釉	器 高:一口径:一底 径:55mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。酸化焼成。硬質。内外面は二次焼成。	台部の上端は大きく外反。器壁は厚い。底部は回転調整。底部と内面の下端以外は施釉。	瀬戸美濃系。
3845	砥 石	幅:45mm 両端欠	流紋岩(砥沢?)。目が細かい。	四面使用。	覆土。
6 溝 3851	杯 土師質土 器	口径:[108mm]小破片	小砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	器肉は厚い。内外面:回転台によるなで。	覆土。
3852	煙管雁首 青 銅	残長:38mm 口径:14mm 肩部破損		火皿部真下より、細い首部が大きく曲がって延びる。接合部に補強帯。火部壁に小孔。	覆土。
7 溝 3853	捏 鉢 瓦質土器	器 高:一口径:一底 径:一口縁部片	砂粒で鉄分粒を含む。酸化後、還元焼成。硬質。	口唇部の断面は半円形で両面の内面に稜あり。輪積成形。内面:回転調整で磨耗痕。	鉄分付着。
11溝 3854	石 白 石 製品	溝:5~6mm 溝の深 さ:2~3mm 残存:?	粗粒安山岩。	不揃いの溝を持つ。	覆土。
1 溝 3846	五 輪 塔 水 輪	長径:(134mm)短径: (130mm)高さ:60mm 3.925g $\frac{1}{4}$ 欠	榛名二ツ岳軽石	整形良。表面磨き。下面に径が71mm、深24mmの摺鉢状の凹あり。	

## I 地区 D 区 6 号溝 (第 778・779・783 図、第 214 表)

本溝は、D 区 6 号墳周溝・7 号溝と重複するが、重複部分の土層断面を検討しても、新旧関係は明らかに出来なかった。溝の走行は、ほぼ東西であるが、西側は調査区外へと延びている。

規模は、幅が 1.5~2 m、深さ約 20cm である。幅に比べると浅く、底面は平坦である。出土遺物としては、砥石 (4663) がある。時期不明。(飯塚)

I 地区D区7号溝 (第778・779図)

本溝は、D区5号古墳・6号古墳・7号溝と重複しているが、土層断面の検討によっても新旧関係を明らかにすることはできなかった。溝は、幅が3.5～4mで、深さ約50cmである。掘り方は皿状を呈している。出土遺物は皆無であった。時期不明。(飯塚)

I 地区D区8号溝 (第780図)

本溝は、調査区に一部が確認された。幅は約2m、深さ約30cmである。遺物は全く発見されなかった。時期不明。(飯塚)

I 地区D区10号溝 (第781・782図)

調査区西隅で確認された。規模は、幅約50cm、深さ約15cm、長さ13m以上である。溝内より遺物は全く発見されなかった。時期不明。(飯塚)

I 地区D区11号溝 (第781・782図)

本溝は、ほぼ南北に直線的に延びている。幅は約1.8m、深さ約50cmの規模を持つ。掘り方は、西側にテラス状の段がついており、底面は逆台形を呈する部分と深い皿状を呈する部分とがある。溝内からは、遺物は全く発見されなかった。時期不明。(飯塚)

I 地区D区12号溝 (第781・782図)

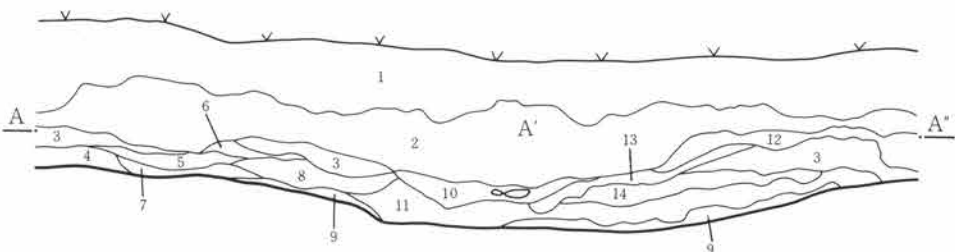
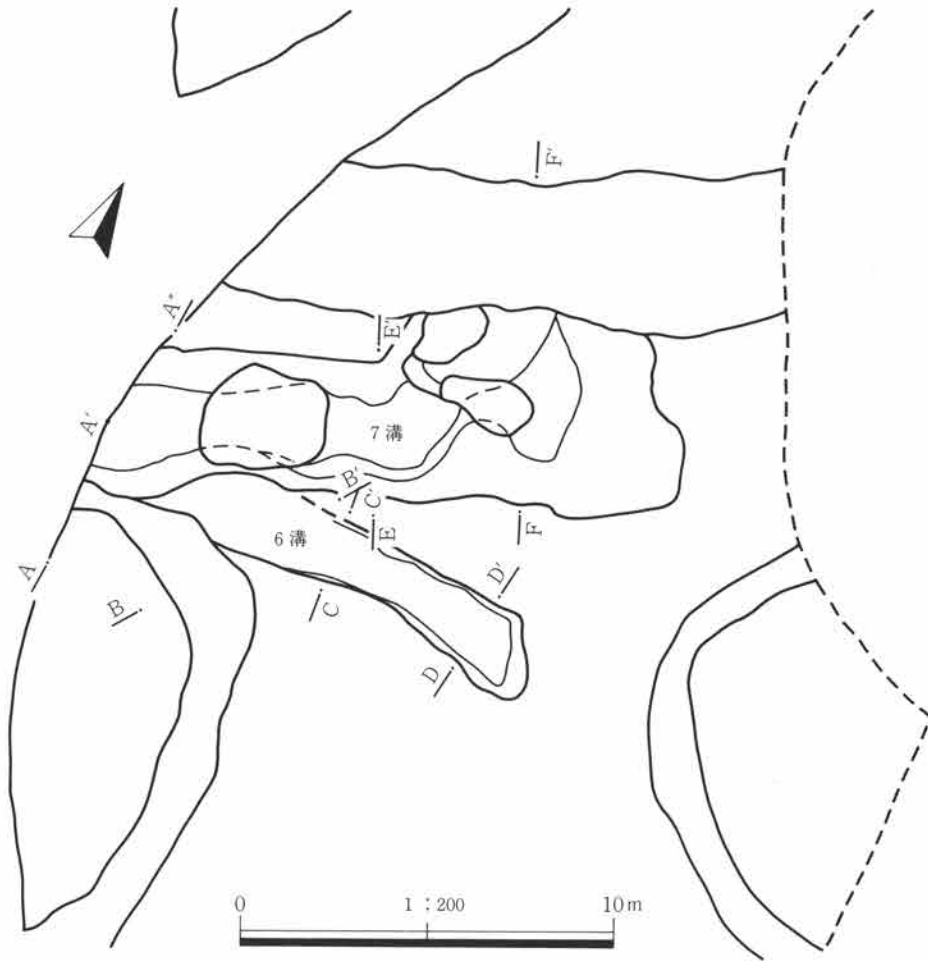
本溝は、13号溝と重複しているが、本溝の方が新しい。溝の走行は、南北に近い。規模は、幅が80cm～1.3mで、深さは約25cmである。溝の掘り方は、皿状を呈する部分が多いが一様ではない。又、北側には幅が広がっている部分がある。溝内より遺物は全く出土していない。時期不明。(飯塚)

I 地区D区13号溝 (第781・782図)

本溝は、一部が確認された。12号溝と重複しているが、本溝の方が古い。規模は、幅約5m、深さ約90cmである。掘り方は、緩やかで、皿状を呈する。溝内より遺物は全く発見されなかった。時期不明。(飯塚)

I 地区D区14号溝 (第781図)

一部が確認された。ほぼ東西に延びており、11号溝と直角を作るような形となる。溝は、幅約1m、深さ約30cmである。遺物は全く出土していない。時期不明。(飯塚)

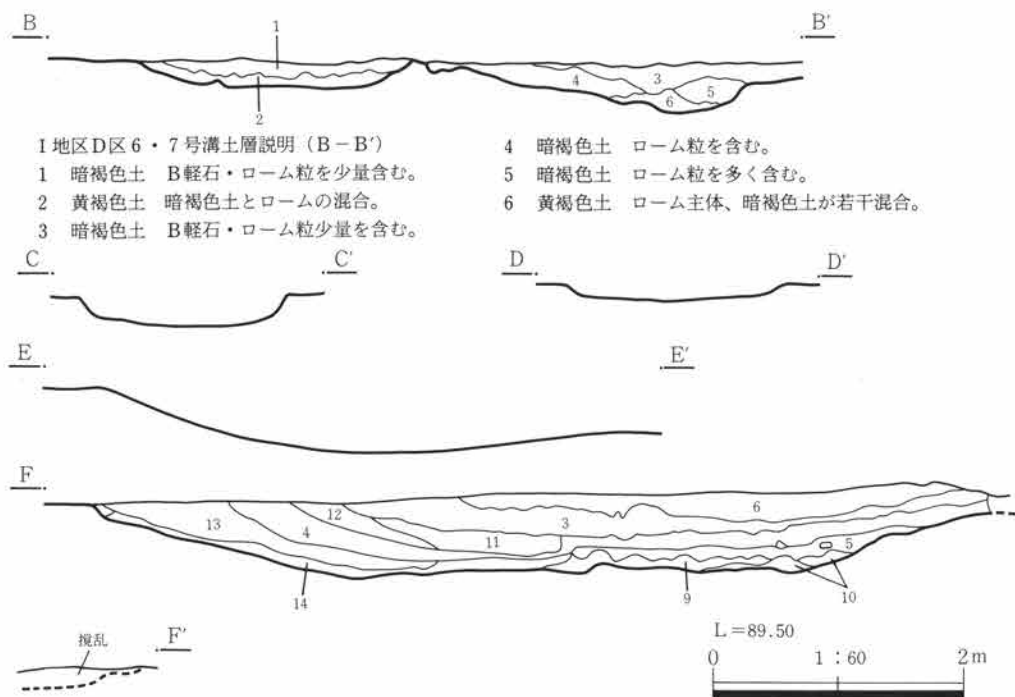


## I 地区D区6・7号溝土層説明 (A-A')

- |      |               |            |                |               |                         |           |               |                    |               |                            |               |              |               |
|------|---------------|------------|----------------|---------------|-------------------------|-----------|---------------|--------------------|---------------|----------------------------|---------------|--------------|---------------|
| 1 表土 | 2 暗褐色土        | 3 B軽石層     | 4 暗褐色土         | 5 黒褐色土        | 6 黒褐色土粘質とB軽石、暗褐色土粘質土の混合 | 7 暗褐色土    | 8 暗褐色土        | 9 黄褐色土             | 10 暗褐色土       | 11 暗黄褐色土                   | 12 暗褐色土       | 13 暗褐色土      | 14 黒褐色土       |
|      | B軽石を全体に含み、砂質。 | 暗褐色土が少量混合。 | ローム粒を全体に含み、粘質。 | ローム粒を少量含み、粘質。 | ローム粘質とB軽石、暗褐色土粘質土の混合    | 暗褐色土とローム。 | ローム粒を少量含み、粘質。 | ローム主体、暗褐色土若干混合、粘質。 | B軽石を全体に含み、砂質。 | ローム粒・ローム小ブロックが暗褐色土中に混合、粘質。 | B軽石を多量に含み、砂質。 | B軽石が少量混合、粘質。 | ローム粒を少量含み、粘質。 |

第778図 I 地区D区6・7号溝遺構図(1)

第6章 中世・近世の遺構と遺物



I地区D区6・7号溝土層説明 (B-B')

- 1 暗褐色土 B軽石・ローム粒を少量含む。
- 2 黄褐色土 暗褐色土とロームの混合。
- 3 暗褐色土 B軽石・ローム粒少量を含む。

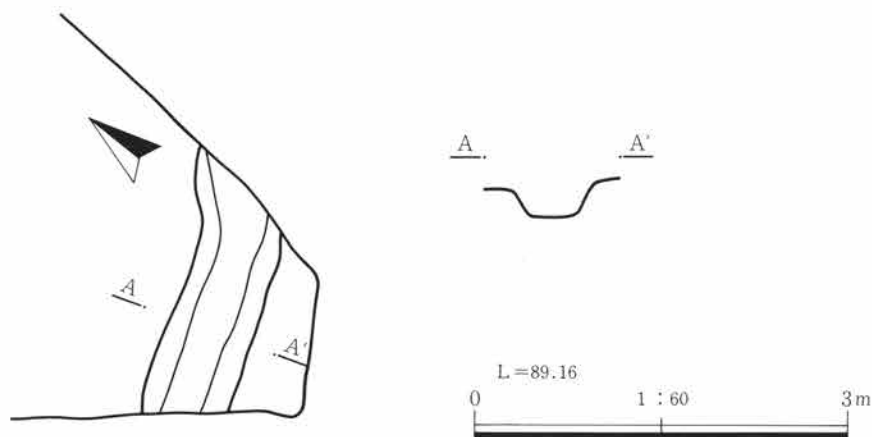
- 4 暗褐色土 ローム粒を含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
- 6 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土が若干混合。

I地区D区6・7号溝土層説明 (F-F')

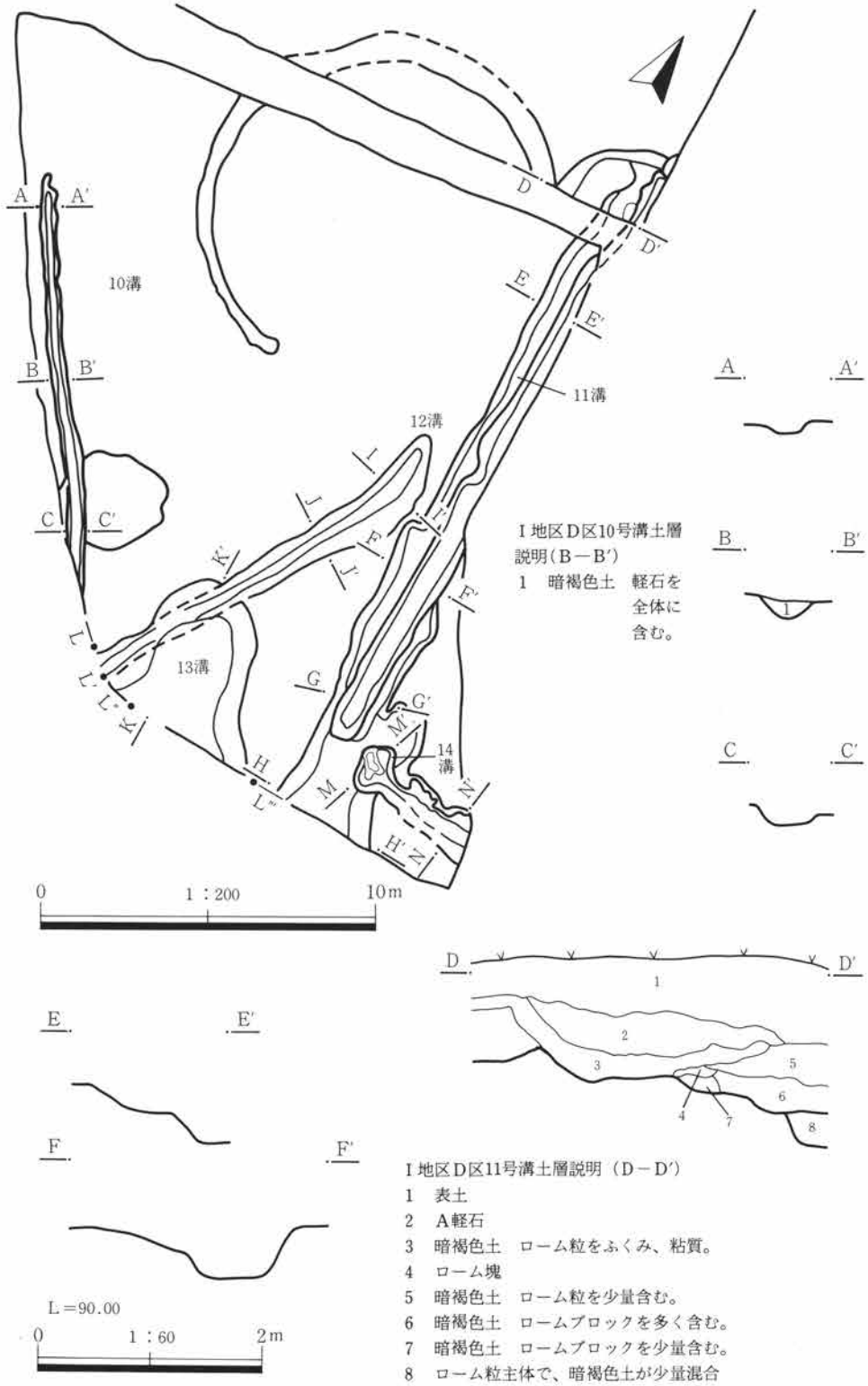
- 1 攪乱土
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック・B軽石を含む。
- 3 B軽石層 黒色土が少量入り込む。下部は、粒子粗く、黄褐色を呈す部分が一部にある。
- 4 暗褐色土 ローム粒を少量含み、粘質。
- 5 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混合、固い。
- 6 B軽石と暗褐色土の混合、灰褐色土を呈す。

- 7 ロームと暗褐色土の混合で、ロームの量やや多い。
- 8 ロームと暗褐色土の混合で、半々ぐらい。
- 9 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混合で、ローム量多い。
- 10 ローム主体、暗褐色土全体に混合。
- 11 黒褐色土 固く締まっている。
- 12 暗褐色土 ローム小粒を含む。
- 13 暗褐色土 ローム小粒・ロームブロック含む。
- 14 黄褐色土 暗褐色土とロームの混合。

第779図 I地区D区6・7号溝遺構図(2)

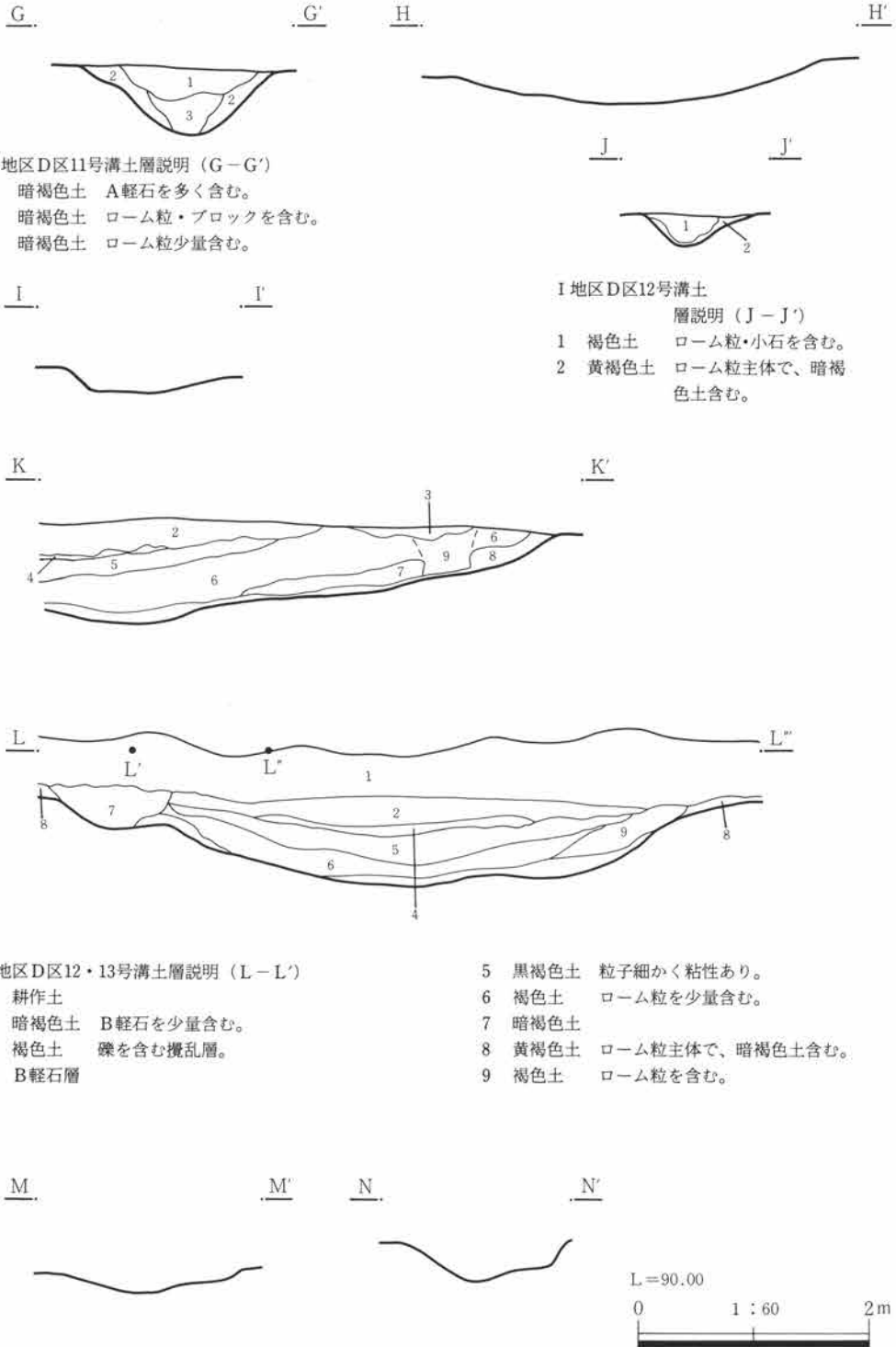


第780図 I地区D区8号溝遺構図

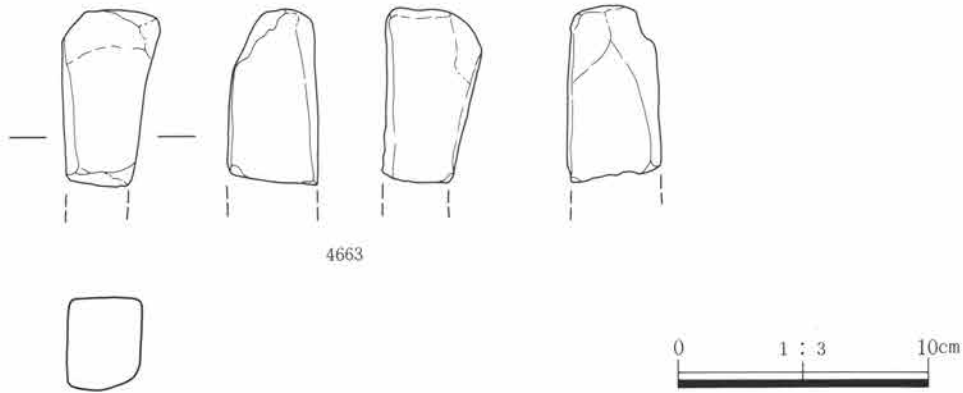


第781図 I 地区D区10・11・12・13・14号溝遺構図(1)

第6章 中世・近世の遺構と遺物



第782図 I地区D区10・11・12・13・14号溝遺構図(2)



第783図 I地区D区6号溝遺物図

第214表 溝遺物観察表 (D区)

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
6溝 4663	砥石	現存長:70mm幅:40mm 厚さ:36mm半分欠	流紋岩。	四面使用。	覆土。

## 寺前地区1号溝 (第784・785図)

本溝は、寺前地区4号古墳周堀・9号古墳周堀・5号溝・1号土坑・75号土坑・76号土坑・81号土坑と重複しているが、4号古墳及び9号古墳よりも新しく、5号溝よりも古い。又、1号土坑・75号土坑・76号土坑・81号土坑との新旧関係は不明である。

溝は大きくカーブしており、更に北側と西側の調査区域外へと延びている。溝の形態は不整形で、北側では、幅約12.5m、深さ約35cmの幅が広く浅い溝の中央部に、更に幅約50cm、深さ約20cmの一段と深くなった部分がある。又、調査部分中央付近では、最大幅がやや狭くなっており、中央の一段と深くなった部分は続く、しかし、西側調査区壁付近では、掘り込みがやや浅くなり、中央部の一段と深くなった部分の確認は難しくなる。時期については、古墳時代後期～中世末の間と考えられる。(飯塚)

## 寺前地区2号溝 (第786・788図・第215表)

本溝は、3号溝・4号溝と平行して存在する。他の遺構との重複関係では、寺前地区9号古墳の墳丘が消滅した後に造られている。調査区内において確認できる溝の長さ12mで、南側は途中で上がっている。又、南端部より約25mほど北へ行ったらとこで、溝はやや角度を変えている。

溝の規模は、幅が約60～70cm、深さ約25cmである。溝底面のレベルは、北側よりも南側の方が

約25cmほど低くなっている。本溝からの出土遺物として、鉢(4447)がある。時期は江戸時代前期。  
(飯塚)

#### 寺前地区3号溝・4号溝(第786図)

3号溝と4号溝は、北半部では重なり、南側では近接するものの、3号溝は途中で消滅する。4号溝は、3号溝よりも南側へと続いており、5号溝と重複する。なお、4号溝と5号溝の新旧関係は不明である。

3号溝は、幅約30cm、深さ約30cmの規模を持つ。北側で4号溝と重複するが、新旧関係は明らかにすることができなかった。

4号溝は、3号溝と重複する部分では幅約30cm、深さ約15cmであり、3号溝よりもやや浅くなっている。また南側では、幅が50~70cmと広がっており、掘り方も不整形となっている。

3号溝及び4号溝からは、遺物は全く発見されなかった。時期不明。  
(飯塚)

#### 寺前地区5号溝(第784・785・788・795・796図、第215表)

本溝は、寺前地区4号墳・9号墳・4号溝と重複しており、4号溝を除く他の遺構よりも新しいが、4号溝との新旧関係については不明である。

溝はほぼ直線で、北北東―南南西を向いている。北北東部分では立ち上がっており、調査区内における全長は29mとなる。溝の幅は1.5mであるが、中央部では約2.5mと広がっている。なお、調査区内西壁の断面によると、本来の幅は3.3mで、浅間B軽石の上に堆積した暗褐色土を掘り込んでいることがわかる。溝の深さは、北北東方向で約45cm、南南西方向で約90cmで、溝は南南西に向かって深くなっていることがわかる。なお、溝内には、底面から浮いた状態で、多くの河原石が存在した。

出土遺物として、鉢・磁器碗・カワラケ・五輪塔等があり(4448~4460)、溝の全域より出土している。時期は室町時代。  
(飯塚)

#### 寺前地区7号溝・33号溝(付図4、第789・795図、第215表)

7号溝と33号溝は連結しており、本来1つの遺構として捉えることができる。7号溝は、17mほど直線的に延びた後、西側で7号古墳の周堀内へと続いているが、周堀内においては確認できなかった。7号溝は、約2m南側に平行して走り、同じく38号溝に連結する溝と共に、31号溝と重複している。又、33号溝は、北側で126号土坑と重複し、南側で9号溝・37号溝と重複する可能性があるが、いずれも新旧関係は不明である。

7号溝及び33号溝は、幅が70cm~1m、深さ15~30cmで、逆台形の掘り方を呈する。出土遺物として、7号溝より磁器碗(4462~4463)・釘(4465)・鎌(4464)、33号溝より陶磁器碗(4541~4543)がある。時期は江戸時代と考えられる。  
(飯塚)



**寺前地区 8号溝 (付図 4、第789図、第215表)**

本溝は、31号溝と重複するが、新旧関係は不明。幅約70cm、深さ約20cmの規模を持つ。遺物は皆無である。時期不明。 (飯塚)

**寺前地区 9号溝 (付図 4、第789・796図、第215表)**

本溝は、寺前地区 7号古墳周堀・31号溝と重複しているが、新旧関係では 7号古墳よりも新しいが、31号溝との関係においては不明である。溝の幅は、1.5～2mで、やや蛇行しながら北東方向へと延びている。又、東北部分においては、33号溝・36号溝と交わっているようにも考えられるが、新旧関係は不明である。溝の深さは、30～40cmで、全体的にはほぼ水平である。掘り方は一様ではなく、各部分によって若干異なる。

遺物は、覆土中より素焼鉢 (4467)・陶器類 (4468～4475)・五輪塔 (4476) が出土している。本溝の時期は、江戸時代後期と考えられる。 (飯塚)

**寺前地区11号溝 (第785・790図、第215表)**

本溝は、寺前地区10号古墳の墳丘が消滅した後に造られている。17号溝と重複しているが、本溝の方が新しい。溝は、調査区内約12mの所で終わっているが、全体的にややカーブしている。

溝の規模は、幅が1～1.6mで、東南寄りの途中で終わっている部分付近がやや広がっている。深さは約35cmで、西端が僅かに深くなっている。遺物は全く発見されなかった。時期は、古墳時代以降。 (飯塚)

**寺前地区12号溝 (第787図)**

本溝は、調査区隅に一部が確認された。幅約1.5～2mで、深さ約20cmである。掘り方は一様ではなく、浅い部分と深い部分とがある。遺物は全く発見されなかった。時期不明。 (飯塚)

**寺前地区13号溝 (第787図)**

本溝は、調査区内において円弧を描くような形で存在する。寺前地区10号古墳・17号溝・18号溝と重複する。重複遺構との新旧関係では、10号古墳・17号溝よりも新しく、18号溝よりも古い。

規模は、幅1.2～1.5m、深さ25～40cmである。底面のレベルは、ほぼ同じで、掘り方は逆台形を呈する部分が多い。溝内より、遺物は全く発見されなかった。時期は、古墳時代以降。 (飯塚)

**寺前地区17号溝 (第787図)**

本溝は、極く一部が確認された。寺前地区10号古墳・11号溝・13号溝と重複しているが、10号古墳よりは新しく、11号溝・13号溝よりは古い。本溝は、幅は不明であるが、深さは約20cmである。遺物は全く発見されなかった。時期は、古墳時代以降である。 (飯塚)

寺前地区18号溝 (第787図)

本溝は、寺前地区10号古墳・13号溝・17号溝と重複しているが、いずれの遺構よりも本溝の方が新しい。溝は、調査区内において、約8m南東方向に延びた後、10号古墳の堀にかかっているが、それより先には確認できず、周堀内で立ち上がっている可能性が強い。規模は、幅80cm～1mで、深さ約10cmと浅い。溝内より出土遺物は発見されなかった。時期は古墳時代以降。(飯塚)

寺前地区26号溝 (付図4、第790・791図、第215表)

本溝は、調査区内に一部が確認された。他の重複遺構との新旧関係では、寺前地区3号古墳よりは新しいが、29号溝との関係は不明である。溝はほぼ南北方向をとるものと考えられる。

規模は、幅が推定約3m、長さ15m以上、深さ約1.2mである。掘り方は、逆台形で底面は平坦となっている。出土遺物には、内耳土器(4498・4499)と陶器(4500)がある。時期は、室町末～桃山時代。(飯塚)

寺前地区28号溝 (付図4)

本溝は、北側で3号古墳周堀上へと延びているが、確認は難しい。又、南側では29号溝と重複する可能性が強く、30号溝と同一の溝となる可能性もあるが、29号溝と交わる付近に攪乱が入っているため不明である。

規模は、幅1.5～2mで、深さ約20cmである。掘り方は一様ではなく、浅い逆台形・皿状を呈する。溝内より遺物は全く発見されなかった。時期不明。(飯塚)

寺前地区29号溝 (付図4、第791図、第215表)

本溝は、寺前地区3号古墳の墳丘が消滅した後に造られている。26号溝・29号溝・30号溝と重複するが、新旧関係は不明である。なお、中央やや西寄りに攪乱が入っており、この攪乱を境にして溝の太さがやや異なっており、あるいは別の溝である可能性もある。

溝の幅は、攪乱の西側で約70cm、東側で70cm～1.2mである。攪乱の西側で約30cm、東側で約45cmで、東側の方がやや深い。出土遺物としては、陶磁器(4501～4504)・古銭(4506)がある。時期は、江戸時代後期と考えられる。(飯塚)

寺前地区30号溝 (付図4、第791図、第215表)

本溝は、29号溝と連結する一つの溝である可能性もある。3号古墳の墳丘消滅後に造られており、32号溝と重複するが新旧関係は不明である。溝の幅は、1.5～3mで、不規則に走行している。西側では、32号溝と重複する付近で消滅し、東側では南へカーブしている。溝の深さは、30～45cmで、底面のレベルはほぼ水平である。出土遺物として、カワラケ5枚(4507～4511)がある。時期は、室町時代と考えられる。(飯塚)

**寺前地区31号溝** (付図4、第791・792・794・795図、第215表)

本溝は、調査区内で完結している。他の遺構との重複関係では、寺前地区3号古墳・9号古墳・36号古墳よりは新しいが、7号溝・8号溝・9号溝との関係は不明である。

溝の規模は、長さが45.5m、幅2～2.5mで、直線とはならずやや曲がっている。掘り方は、逆台形となり、底面は平坦である。溝の深さは約1mで、溝の両端において底面のレベル差はない。

出土遺物として、内耳土器・鉢・壺等多くの遺物(4512～4514・4516～4517・4519～4540)があり、溝の全域から出土している。時期は、江戸時代前期。(飯塚)

**寺前地区32号溝** (付図4)

本溝は、28号溝・30号溝と重複するが、新旧関係は不明である。又、南側へ約4mほど枝分かれしている部分があり、この枝分かれした部分は、7号古墳の周堀内へ延びており不明瞭となる。

溝の幅は約1.2m、深さは約20cmであるが、南側立ち上がりがテラス状となっている。なお本溝は、調査区内で約11m続き、東側では30号溝と重複した部分で終わっている。溝内より遺物は発見されなかった。時期不明。(飯塚)

**寺前地区35号溝** (付図4)

調査区内において一部が確認された。寺前地区9号古墳の前方部を切って造られている。溝の深さは約1mである。遺物は発見されなかった。時期は、古墳時代以降。(飯塚)

**寺前地区36号溝** (付図4)

本溝は、31号溝・125号土坑と重複している。新旧関係では、31号溝よりは古いが、125号土坑との関係は不明である。溝は、31号溝と重複する付近で直角に曲がり、北側へと続き9号溝・33号溝等と重なっている。

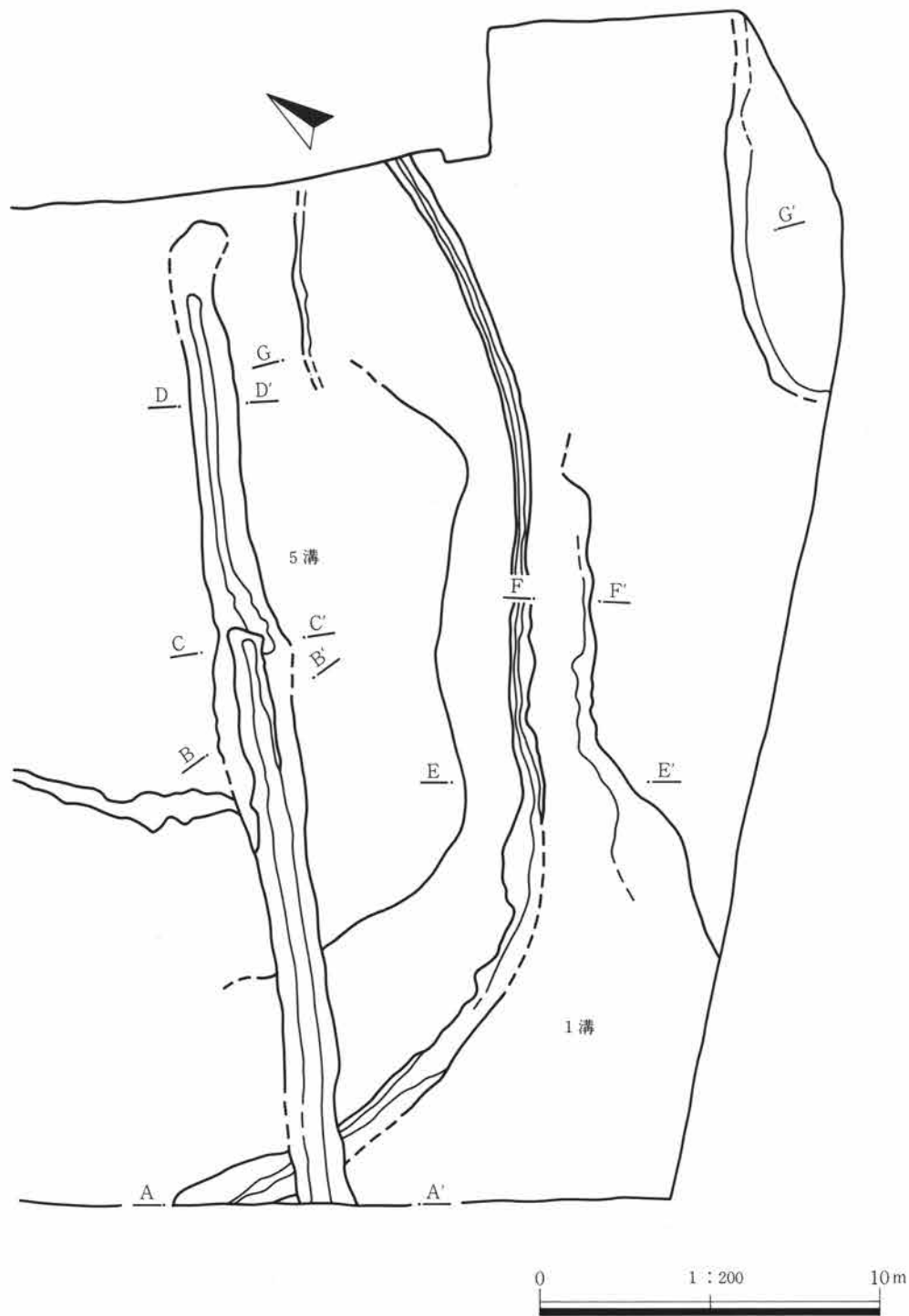
規模は、幅2～3mで、深さは約50cmである。掘り方は、各部分によって一様ではなく、不整形を呈す。出土遺物は皆無である。時期は、31号溝より新しい。江戸時代と考えられる。(飯塚)

**寺前地区37号溝** (付図4)

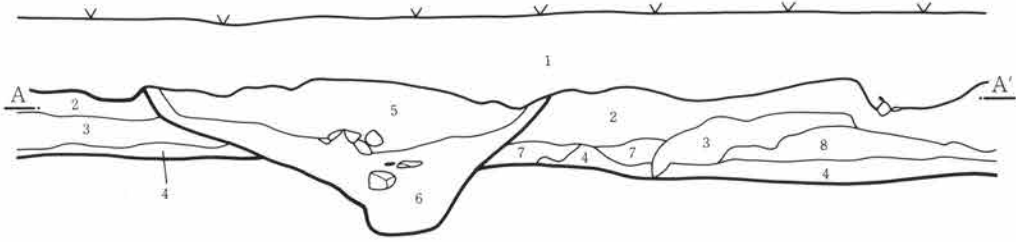
本溝は、寺前地区7号古墳と9号古墳の間に存在する。一部切れている部分があり、途中で2ヶ所、直角に曲がっている。溝の幅は約70cm、深さ30～40cmで、底面はほぼ水平である。本溝からは、遺物は全く発見されなかった。時期不明。(飯塚)

**寺前地区38号溝** (付図4)

本溝は、寺前地区9号古墳の周堀内に造られている。長さは約10.5m、幅約80cm、深さ約15cmで、ほぼ東西を向いている。遺物は全く発見されなかった。時期は、古墳時代以降。(飯塚)



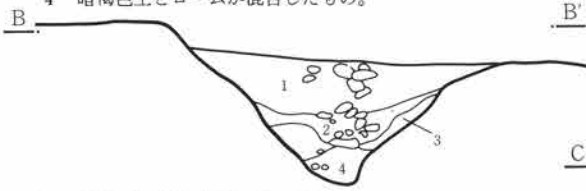
第784図 寺前地区1・5号溝遺構図(1)



## 寺前地区1・5号溝土層説明 (A-A')

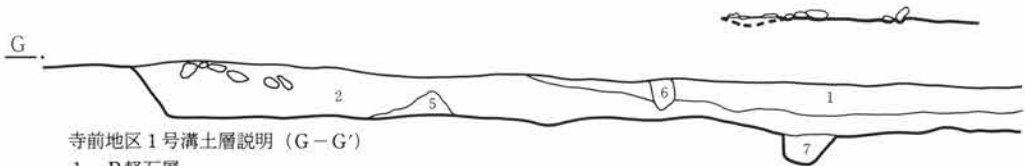
- 1 表土
- 2 暗褐色土 軽石・ローム粒・小石を含み、粘質。
- 3 B軽石が主体で、少量の暗褐色土が混合したもの。
- 4 暗褐色土とロームが混合したもの。

- 5 暗褐色土 赤味がかっており粘質。
- 6 暗褐色土 黒味がかっており粘質、  
B軽石を全体に含む。
- 7 暗褐色土 B軽石をやや多く含む。
- 8 B軽石純層



## 寺前地区5号溝土層説明 (B-B')

- 1 黒色土 円礫を含み、バサバサしている。
- 2 黒色土 やや粘性あり、円礫と少量の軽石を含む。
- 3 黒色土と黄褐色土の混合 円礫を含む。
- 4 黄褐色土 ロームの2次堆積。



## 寺前地区1号溝土層説明 (G-G')

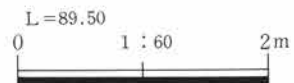
- 1 B軽石層
- 2 暗褐色土 ローム粒を含み、粘質。
- 3 黄暗褐色土 粘質。
- 4 黒褐色土 粘質。

5 ロームブロック

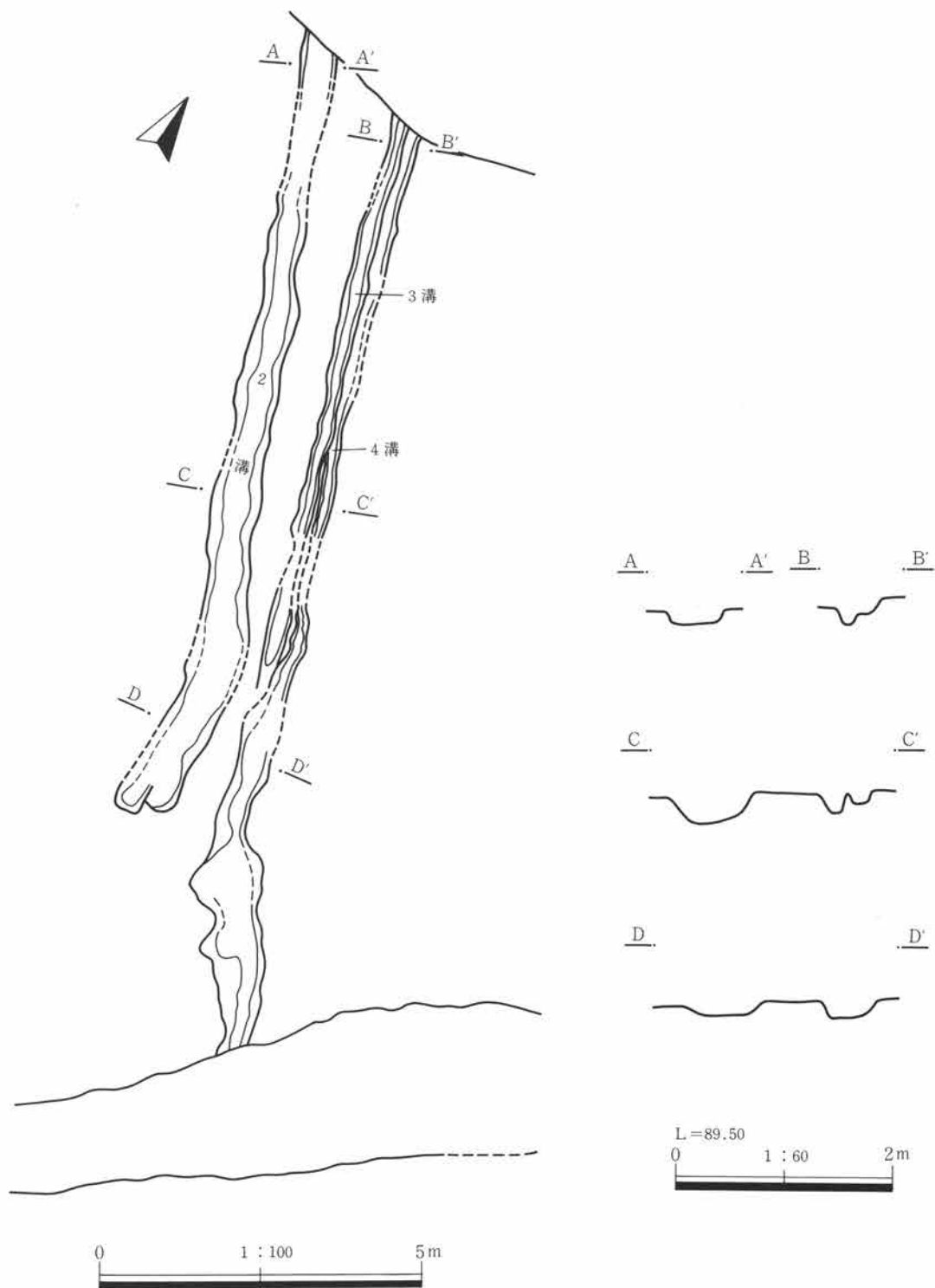
6 灰褐色土

7 暗褐色土 ロームを多く含み、粘質。

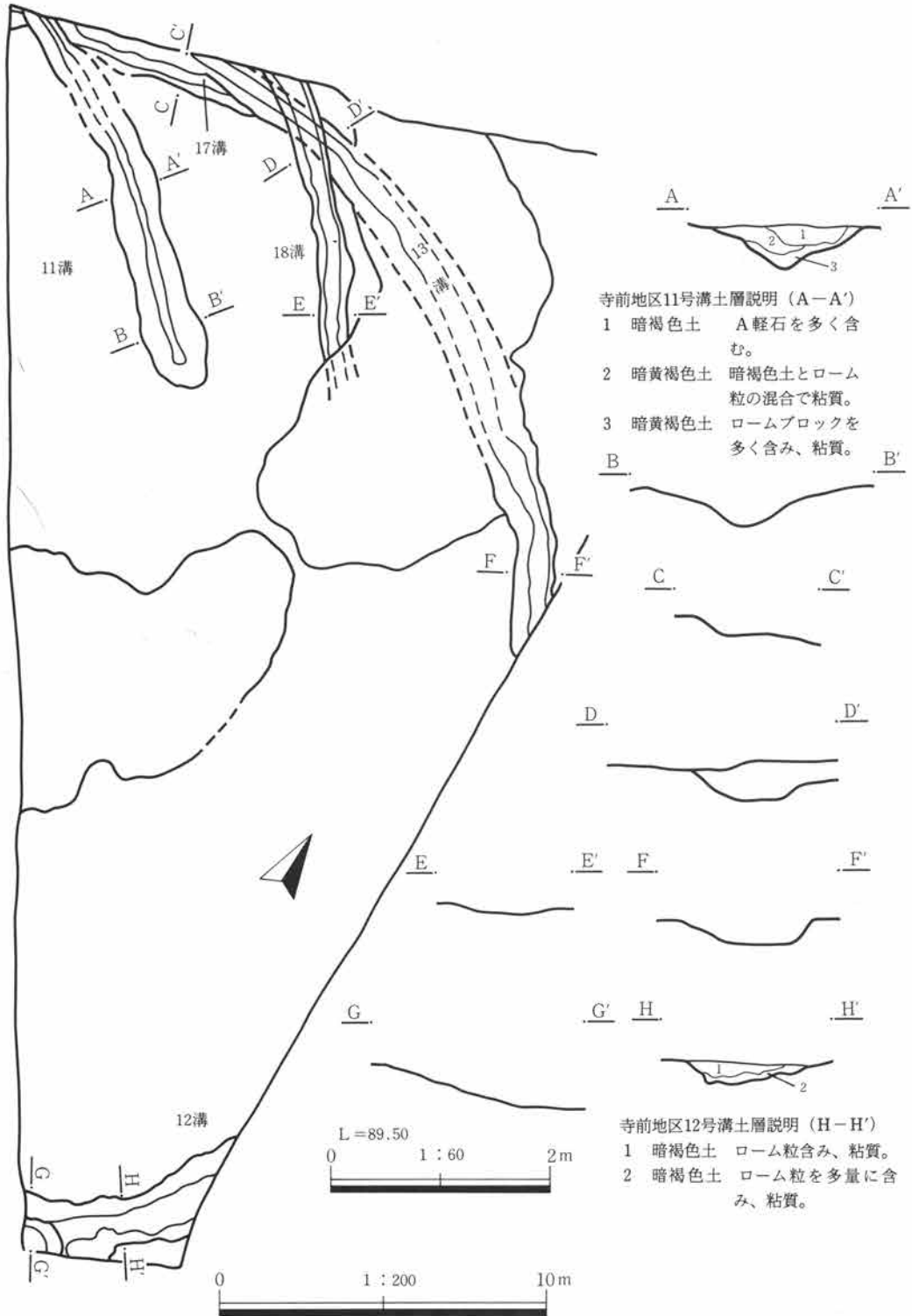
8 暗褐色土 B軽石を含む。



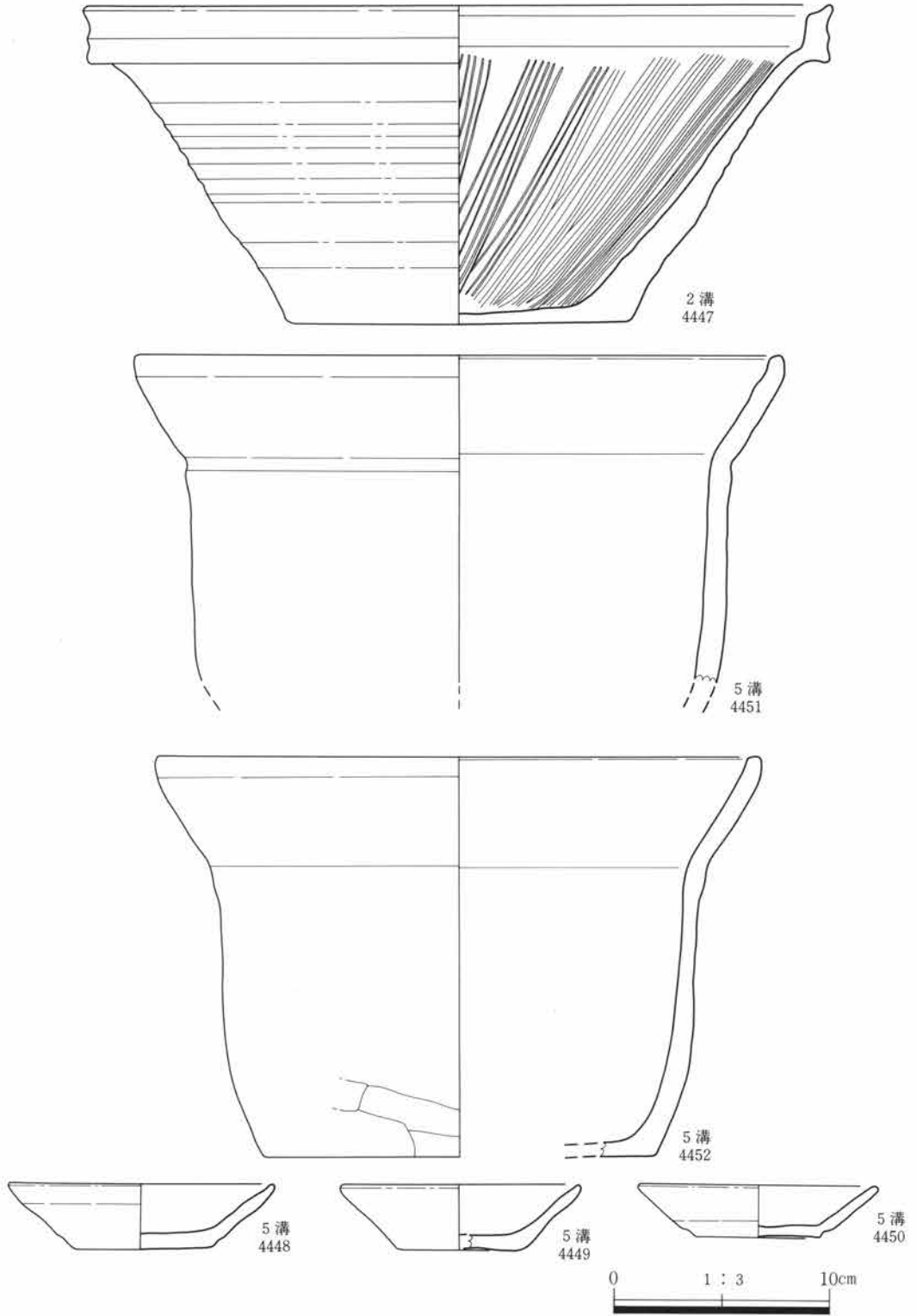
第785図 寺前地区1・5号溝遺構図(2)



第786図 寺前地区2・3・4号溝遺構図



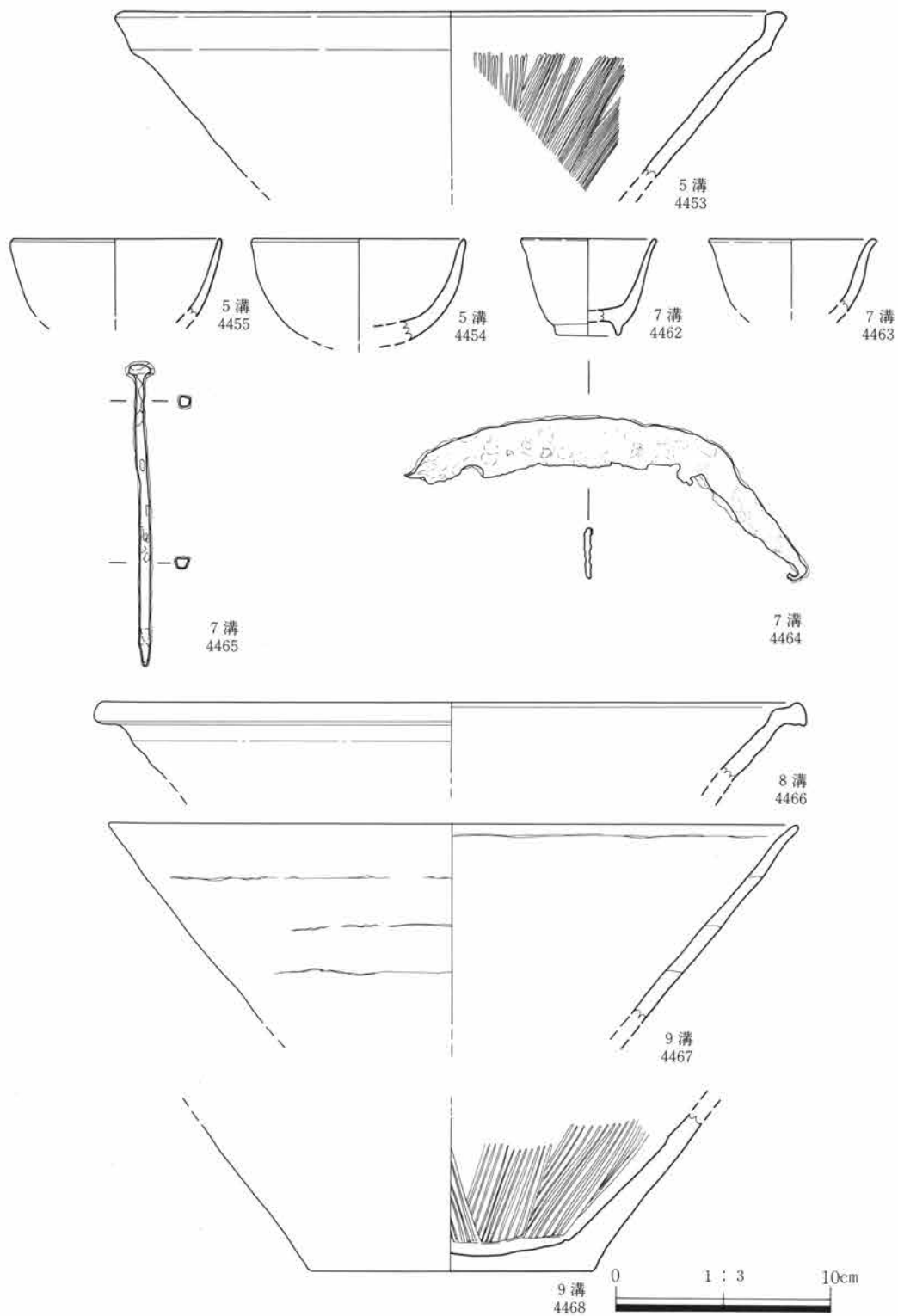
第787図 寺前地区11・12・13・17・18号溝遺構図



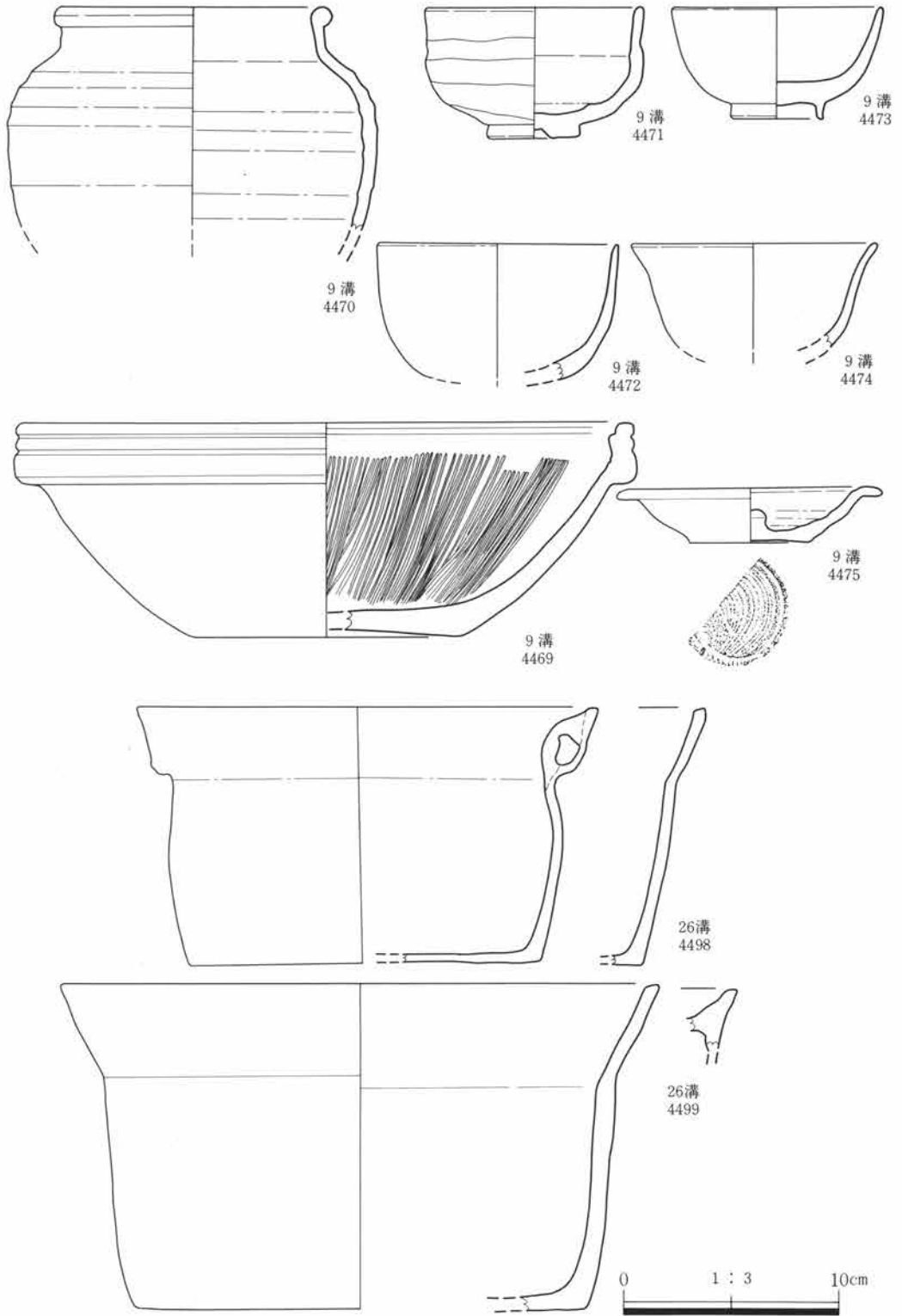
第788図 寺前地区溝遺物図(1)



(6) 溝

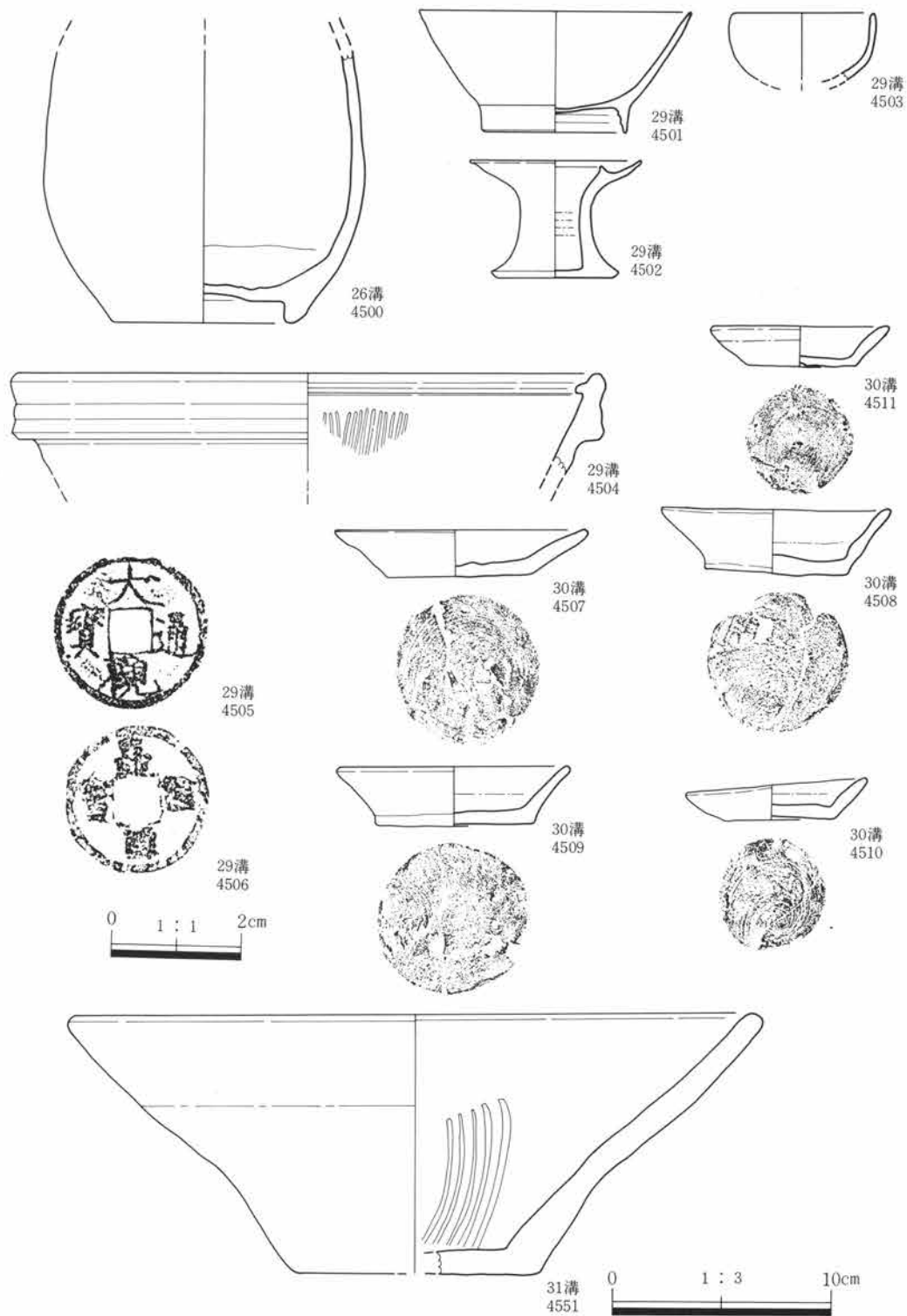


第789図 寺前地区溝遺物図(2)

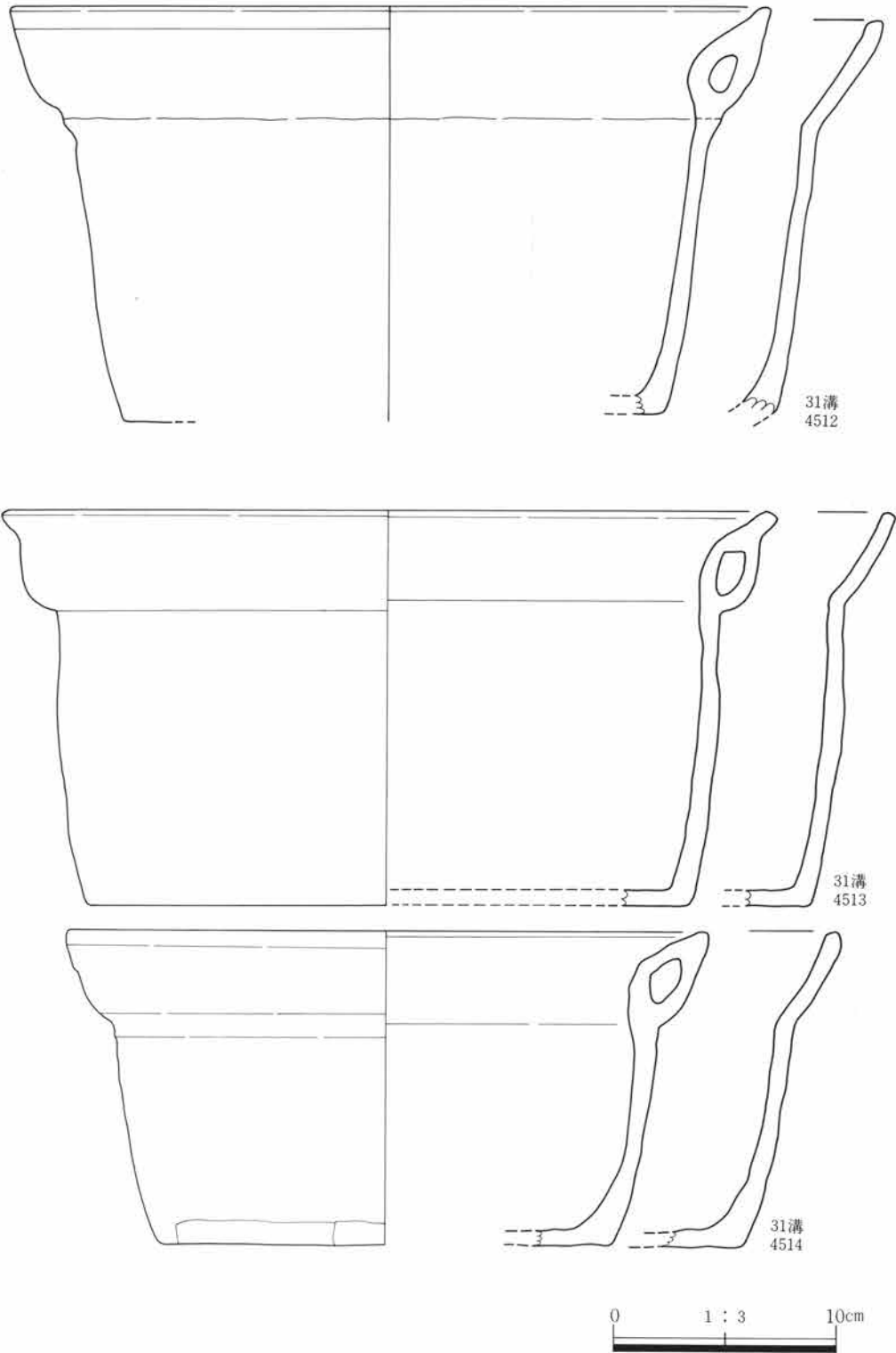


第790図 寺前地区溝遺物図(3)

(6) 溝

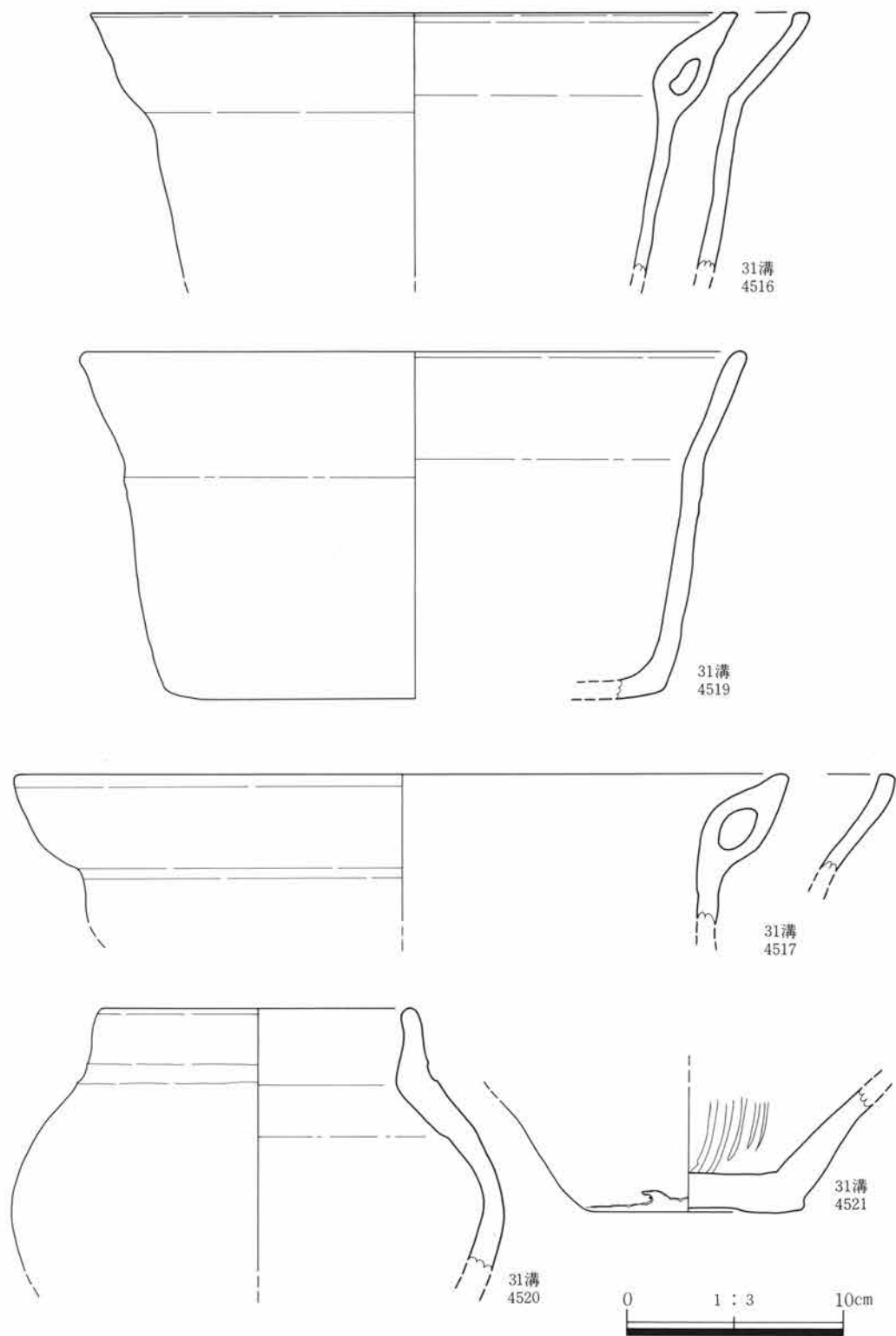


第791図 寺前地区溝遺物図(4)

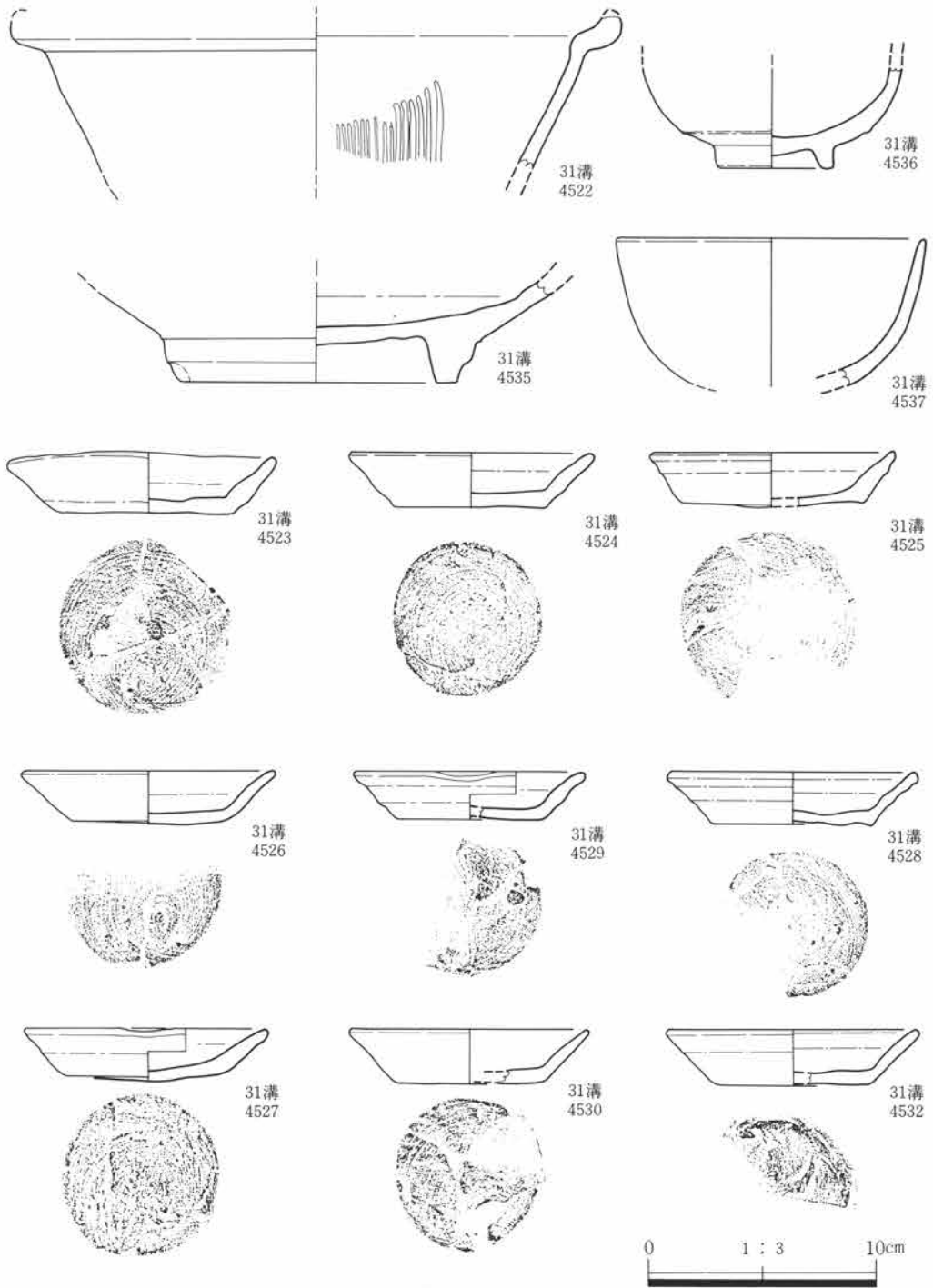


第792図 寺前地区溝遺物図(5)

(6) 溝

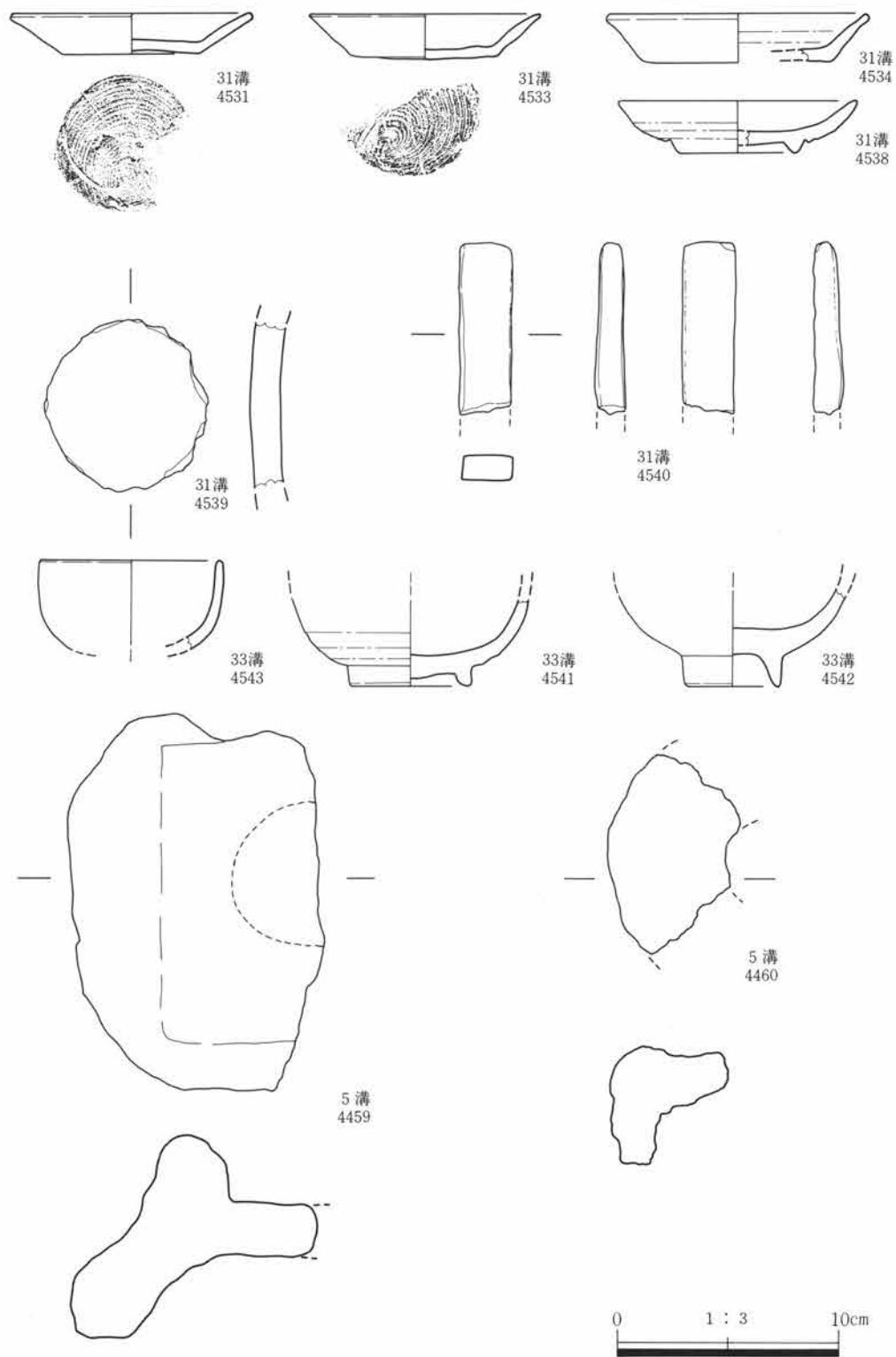


第793図 寺前地区溝遺物図(6)

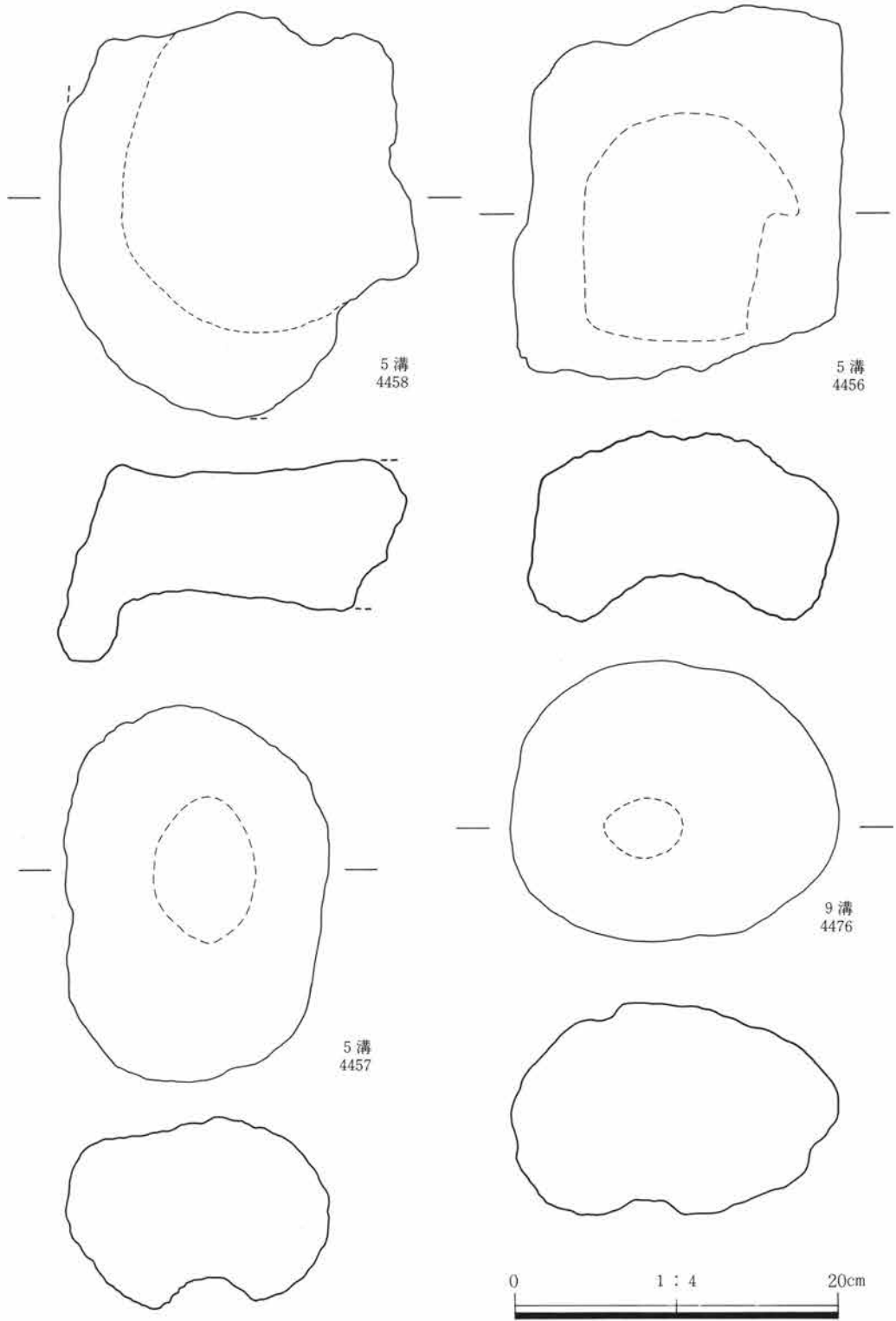


第794図 寺前地区溝遺物図(7)

(6) 溝



第795図 寺前地区溝遺物図(8)



第796図 寺前地区溝遺物図(9)



第 215 表 溝遺物観察表 (寺前地区)

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
2 溝 4447	播鉢 焼締陶器	器高:145mm口径:342mm底径:160mm $\frac{1}{2}$ 残	小石・石英粒・気泡を含む。酸化焼成。硬質。	口縁部は直立。外面:凹帯 2 条。内面:稜あり。轆轤成形。外面の中央は無調整。内面:6 本歯で右回りに上端をあけて全面すりめ。	信楽系。
5 溝 4448	杯 土師質土器	器高:30mm口径:[123mm]底径:66mm $\frac{1}{2}$ 残	褐色砂粒を含む。酸化。焼成良好。軟質。鈍い黄橙。油煙痕。	内外面:回転台によるなで。底面は、回転糸切り。	覆土。
4449	杯 土師質土器	器高:29mm口径:[111mm]底径:[57mm] $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を少量含む。酸化。焼成良好。軟質。	内外面:回転台によるなで。底面は、回転糸切り。	覆土。
4450	杯 土師質土器	器高:24mm口径:[111mm]底径:57mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒・赤褐色粘土粒を含む。酸化。軟質。浅い黄橙。	内外面:回転台によるなで。底面は、回転糸切り。	覆土。
4451	鍋 瓦質土器	器高:(150mm)口径:(300mm)底径:一縁部小片	砂粒を含む。還元中性口焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は大きく外反。体部は直立きみ。内面に稜あり。輪積成形。外面:体部は軽いなで。口縁部、回転なで。内面:下端、軽いこぼめ調整。	
4452	鍋 瓦質土器	器高:183mm口径:(280mm)底径:(180mm) $\frac{1}{2}$ 残	砂・雲母粒・小石を含む還元中性焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は大きく外反。体部は直立きみ。内面に稜あり。輪積土型成形。外面:下端、削り。その他は軽いなで調整。	
4453	播鉢 焼締陶器	器高:一口径:一底径:一口縁部小片	小石・気泡を含む。還元焼成。硬質。	口縁部は直立きみ。内外面:稜あり。器壁は薄い。輪積成形。内面:12本歯で右回り全面すりめ。	丹波系。
4454	碗 染付白磁	器高:一口径:[100mm]底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。硬質。	口縁部より半球形。外面:コバルト釉で草花文。	肥前系。
4455	碗 染付白磁	器高:一口径:[100mm]底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。硬質。	口縁部より半球形。器壁は薄い。外面:コバルト釉で草花文。発色やや悪い。	肥前系。
7 溝 4462	猪口 染付白磁	器高:44mm口径:[60mm]底径:[30mm] $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。硬質。	口縁部は僅か外反。外面にコバルトで横線と草花文。	瀬戸美濃系?
4463	猪口 染付白磁	器高:一口径:[80mm]底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。硬質。	口縁部は僅かに外反。外面:コバルトで型紙摺花鳥文。発色はやや悪い。	瀬戸美濃系?
4464	鎌 鉄製品	刃長:[130mm]幅:22mm背の厚さ:3mm刃の一部欠		曲刃。	覆土。全体に錆びる。

第6章 中世・近世の遺構と遺物

4465	釘 鉄製品	長さ:140mm幅:5mm 厚さ:5mm 頭部:13mm×13mm		頭部及び断面方形。	覆土。全体に錆びる。
8溝 4466	播鉢 陶器錆釉	器高:一口径:一底径:一口縁部小片	石英粒を含む。酸化焼成。硬質。	口縁部は水平に外へ張り出て、側面は直立。内外面:薄く施釉。	瀬戸美濃系。
9溝 4467	鉢 瓦質土器	器高:(91mm)口径:[320mm]底径:一口縁部小片	微砂粒を含む。還元中性焼成。硬質。外面は二次焼成。	口縁部と体部は分かれず、大きく外傾。器壁薄い。輪積成形。口縁部の内外面:回転まで。体部の内面:磨耗。	捏鉢を鍋として転用か。4461に似る。
4468	播鉢 陶器錆釉	器高:一口径:一底径:132mm $\frac{1}{2}$ 残	石英粒・気泡を含む。酸化焼成。硬質。	底部の中央はやや薄い。内面:12本歯左回りすりめ。底部は右回転糸切り成形。底部の端以外は全面施釉。	瀬戸美濃系。
4469	播鉢 焼締陶器	器高:99mm口径:[290mm]底径:[120mm] $\frac{1}{4}$ 残	砂粒を多く含む。酸化焼成。硬質。	口縁部は直立。外面:沈線2条。内面:突帯。浅いが容量は多い。内面:8本歯左回り全面すりめ。底部は砂目。	泉州堺系?
4470	壺 陶器鉄釉	器高:一口径:[100mm]底径:一小片	砂粒を含む。還元焼成。硬質。	口縁部は玉縁状。頸部は短い。外面及び口縁部内面:施釉。外面:釉は窯変。	瀬戸美濃系。
4471	椀 陶器鉄釉	器高:60mm口径:100mm底径:43mm $\frac{1}{2}$ 残	気泡を含む。還元焼成。軟質。	体部の中央は張り出し、つまみ出し部分あり。削り出し輪高台。外面の下端以外は天目釉後、中央に長石釉雲文。	瀬戸美濃系。引き出し黒。
4472	椀 陶器鉛釉	器高:一口径:[110mm]底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	気泡を含む。還元焼成。硬質。	口縁部は直立。下端に連れて肥厚。内外面:鉛釉施釉。	瀬戸美濃系。
4473	碗 染付白磁	器高:51mm口径:[100mm]底径:[40mm] $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。硬質。	口縁部より半球形。外面:コバルト釉で草花文と横文。発色やや悪い。	肥前系。
4474	碗 染付白磁	器高:一口径:[110mm]底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	緻密な磁胎。硬質。	口縁部は外反。器壁は薄い。コバルト釉で外面に渦文。内面に横線。発色は良い。	肥前系?
4475	蓋 陶器錆釉	器高:25mm口径:[120mm]底径:55mm $\frac{1}{2}$ 残	小石・気泡を含む。酸化焼成。軟質。	口唇部は水平に延びる。見込みに鈕。底部は右回転糸切り。外面の上端及び内面に薄く施釉。	瀬戸美濃系?
26溝 4498	鍋 瓦質土器	器高:173mm口径:328mm底径:245mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。還元焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は外反。体部は直立きみ。耳部は中形で一對。歪みあり平底。輪積成形。外面の下端及び底部:なで。その他:軽いこぼめ調整。	
4499	鍋 瓦質土器	器高:150mm口径:[270mm]底径:[210mm] $\frac{1}{2}$ 残	微砂粒で気泡を含む。酸化中性焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は外反。体部は直立きみ。耳部は中形で一對。平底。輪積成形。外面の下端及び底部:なで。その他:軽いこぼめ調整。	4498とほぼ同形で小さい。

## (6) 溝

4500	壺 陶器鉄釉	器高:一口径:一底 径:83mm $\frac{1}{2}$ 残	微気泡を含む。還元焼成。 硬質。	体部の中央に凹みあり。輪積成形。削りこみ高台。上げ底。外面の高台部端以外天目釉施釉。内面:釉流れ。	瀬戸美濃系。徳利か。
29溝 4501	碗 白磁染付	器高:55mm口径:[120 mm]底径:66mm $\frac{1}{2}$ 残	緻密な白色胎土。軟質。	体部は直線状に外傾。高台部は大きく高い。器壁は薄い。体部の外面にコバルト釉で山水文。	瀬戸美濃系。広東茶碗。
4502	乗 燭 陶器灰釉	器高:53mm口径:[80 mm]底径:58mm $\frac{1}{2}$ 残	気泡は少ない。還元焼成。 硬質。内外面は二次焼成。	四部は小さく、脚部は大きく短い。底部以外は全面施釉。	瀬戸美濃系。廃棄後、二次焼成。
4503	仏飯器 陶器灰釉	器高:一口径:[60mm] 底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	石英粒を含み気泡は少ない。 還元焼成。硬質。	口縁部はやや内反ぎみ。器壁は薄い。外面の下端を除き全面施釉。貫入あり。	瀬戸美濃系。
4504	播 鉢 焼締陶器	器高:一口径:一底 径:一口縁部小片	砂粒で気泡を含む。酸化 焼成。やや軟質。	口縁部は直立。外面:緩い沈線2条。内面:凸帯。8本歯左回りすりめ。	泉州堺系。4469に似る。
4505	銭			「大観通寶」	覆土。
4506	銭			「嘉祐通寶」	覆土。
30溝 4507	皿 土師質土 器	器高:22mm口径:114 mm底径:66mmほぼ完 形	砂粒を含む。酸化。やや硬 質。鈍い橙。	口縁部は外反しながら立ち上がる。底部は回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	覆土。
4508	皿 土師質土 器	器高:30mm口径:104 mm底径:65mm完形	砂粒を少量含む。酸化。や や硬質。鈍い橙。	口縁部は歪む。底部は回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	覆土。
4509	皿 土師質土 器	器高:26mm口径:104 mm底径:71mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を少量含む。酸化。や や硬質。鈍い橙。	口縁部は外反しながら立ち上がる。底部は回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	覆土。
4510	皿 土師質土 器	器高:16mm口径:82mm 底径:47mmほぼ完形	砂粒を少量含む。酸化。や や硬質。鈍い橙。	底部中央は径30mmにわたり、やや高い。底部回転糸切り。内外面:回転台によるなで。	覆土。油煙付着。
4511	皿 土師質土 器	器高:18mm口径:78mm 底径:48mm完形	砂粒を少量含む。酸化。や や硬質。鈍い橙。台による なで。	口縁部はやや外反しながら立ち上がる。底部は回転糸切り。内外面:回転。	覆土。口縁部に油煙付着。
31溝 4512	鍋 瓦質土器	器高:183mm口径:343 mm底径:244mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡を含む。還元 焼成。軟質。外面は二次焼 成。	口縁部は大きく外傾。体部は直立ぎみ。内面に稜あり。平底。耳部は中形で一對。輪積土型成形。外面:下端、軽いなで。外面の上端及び内面:軽い削り。その他は軽いなで調整。	覆土。
4513	鍋 瓦質土器	器高:176mm口径:340 mm底径:236mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒・鉄分を含む。酸化 後、還元焼成。軟質。外面 は二次焼成。	口縁部は外反。体部は直立ぎみ。内面に稜あり。平底。耳部は中形で一對。輪積土型成形。体部の外面:軽い削り。その他は軽いなで調整。	

第6章 中世・近世の遺構と遺物

4514	鍋 瓦質土器	器高:138mm口径:288mm底径:[210mm]×残	砂粒・気泡を含む。還元焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は外反。体部は直立きみ。内面に緩い稜あり。平底。耳部は中形で一对。歪みあり。輪積土型成形。外面:下端、軽いなで。その他は軽いなで調整。	4512に胎土・焼成似る。
4516	鍋 瓦質土器	器高:(120mm)口径:[300mm]底径:一×残	砂粒・気泡を含む。酸化後、還元焼成。硬質。外面は二次焼成。	口縁部は大きく外傾。口唇部は水平。内面に稜あり。耳部は中形。輪積成形。内外面:軽いこぼめ調整。	
4517	鍋 瓦質土器	器高:(67mm)口径:[350mm]底径:一×残	微砂粒を含む。酸化後、還元焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は大きく緩く外傾。体部は直立きみ。内面に稜あり。耳部は中形で一对。輪積成形。内外面:軽いこぼめ調整。	
4519	鍋 瓦質土器	器高:158mm口径:[310mm]底径:[230mm]×残	砂粒・気泡が多い。還元焼成。軟質。外面は二次焼成。	口縁部は大きく、僅かに外傾。内面に緩い稜あり。平底。輪積土型成形。口縁部の内外面及び体部の内面は軽いなで調整。	
4520	壺 素焼土器	口径:[120mm]最大径:[226mm]×残	砂粒・小石を含む。酸化焼成普通。やや硬質。外面:鈍い黄褐色。内面:黒。	口縁部短く、やや内傾。最大径体部の内外面:回転台によるなで。外面:頸部に太い沈線文。	覆土。内外面は、煤付着。
4521	播鉢 瓦質土器	器高:一口径:一底径:97mm×残	小石・気泡を含む。還元焼成。軟質。	底部はやや薄い。内面:5本歯放射状すりめ。底部は左回転糸切り成形。内面:磨耗。	
4522	播鉢 陶器鉄釉	器高:一口径:一底径:一口縁部小片	石英粒・気泡を含む。還元焼成。軟質。	口縁部は受け口状に張り出す。器壁は薄い。内面:6本歯すりめ。全体に薄く施釉。	瀬戸美濃系。
4523	皿 土師質土器	器高:26mm口径:119mm底径:79mm一部欠	砂粒を含む。酸化。焼成良好。やや軟質。橙。	内外面:回転台によるなで。底部は回転糸切り。	覆土。
4524	皿 土師質土器	器高:24mm口径:107mm底径:67mm一部欠	砂粒を含む。酸化。焼成良好。やや軟質。橙。	内外面:回転台によるなで。底部は回転糸切り。	覆土。油煙付着。
4525	皿 土師質土器	器高:24mm口径:107mm底径:80mm一部欠	砂粒を含む。酸化。焼成良好。やや軟質。橙。	内外面:回転台によるなで。底部は回転糸切り。	覆土。内外面は、煤付着。
4526	皿 土師質土器	器高:23mm口径:[112mm]底径:68mm×残	小砂粒を含む。酸化。焼成良好。やや軟質。橙。	内外面:回転台によるなで。底部は回転糸切り。	覆土。
4527	皿 土師質土器	器高:22mm口径:108mm底径:72mm一部欠	小砂粒を含む。酸化。焼成良好。やや軟質。橙。	内外面:回転台によるなで。底部は回転糸切り。	覆土。内面は、煤、油煙付着。片口。
4528	皿 土師質土器	器高:23mm口径:[110mm]底径:70mm×残	砂粒を含む。酸化。焼成良好。やや軟質。橙。	内外面:回転台によるなで。底部は回転糸切り。	覆土。内面は、煤、油煙付着。

## (6) 溝

4529	皿 土師質土器	器高:21mm口径:[102mm]底径:62mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。焼成良好。やや軟質。鈍い黄褐色。	内外面:回転台によるなど。底部は回転糸切り。	覆土。内面は、煤、油煙付着。片口。
4530	皿 土師質土器	器高:24mm口径:[105mm]底径:67mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒・小石を含む。酸化焼成良好。やや軟質。鈍い橙。	内外面:回転台によるなど。底部は回転糸切り。	覆土。内面は、煤、油煙付着。
4531	皿 土師質土器	器高:18mm口径:[109mm]底径:62mm $\frac{1}{2}$ 残	小砂粒を僅かに含む。酸化。焼成良好。やや硬質。橙。	内外面:回転台によるなど。底部は回転糸切り。	覆土。外面及び底面煤付着。
4532	皿 土師質土器	器高:25mm口径:[111mm]底径:65mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒・小石を含む。酸化焼成良好。やや軟質。鈍い橙。	内外面:回転台によるなど。底部は回転糸切り。	覆土。外面及び底面煤、油煙付着。
4533	皿 土師質土器	器高:20mm口径:[104mm]底径:64mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。焼成良好。やや軟質。鈍い橙。	内外面:回転台によるなど。底部は回転糸切り。	覆土。
4534	皿 土師質土器	器高:22mm口径:[118mm]底径:80mm $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。焼成良好。やや軟質。鈍い橙。	内外面:回転台によるなど。底部は篋削り。	覆土。内面煤、油煙付着。
4535	大鉢 陶器三島手	器高:一口径:一底径:121mm $\frac{1}{2}$ 残	微砂粒を含む。酸化焼成。硬質。	器壁は薄い。高台部は外面に稜あり。見込みに砂目。高台部に胎土目。内面:櫛目文に白土象後、薄く透明釉施釉。	唐津系。
4536	椀 陶器胎釉	器高:一口径:一底径:50mm $\frac{1}{2}$ 残	気泡を含む。酸化焼成。軟質。	体部は半球形。高台部は断面台形。見込みに環状重ね焼き痕。体部上端及び内面は胎釉。口縁部うのふ釉。	瀬戸美濃系。
4537	椀 陶器灰釉	器高:一口径:[140mm]底径:一 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒で気泡は少ない。酸化焼成。軟質。	口縁部の体部はやや外傾。器壁やや厚い。全面施釉。外面:施釉不均一。貫入。	瀬戸美濃系。
4538	皿 陶器灰釉	器高:23mm口径:[110mm]底径:[50mm] $\frac{1}{2}$ 残	砂粒・小石を含む。還元焼成。硬質。	口縁部菱花状。高台部は削り出し。断面は三角形。見込みに重ね焼き痕。外面の上端及び、内面は施釉。	瀬戸美濃系。
4539	印地 焼締陶器	75×71×14重量100g	砂粒を多く含む。還元後、酸化焼成。硬質。	大甕体部片を円盤状に打ちかく。周縁部無調整。	常滑系。
4540	砥石 石製品	幅:24mm厚さ:12mm端部欠	流紋岩。	四面に使用痕あり。大きく磨滅。	覆土。
33溝 4541	椀 陶器胎釉	器高:一口径:一底径:38mm $\frac{1}{2}$ 残	気泡を含む。酸化焼成。軟質。	体部は半球形。底部は厚い。高台部は周辺以外施釉。見込みに窯変。	唐津系。
4542	椀 陶器灰釉	器高:一口径:一底径:40mm $\frac{1}{2}$ 残	微気泡を含む。還元焼成。硬質。	体部は半球形。器壁はやや厚い。高台部は小さく高い。全面施釉。貫入あり	唐津系。4496に似る。

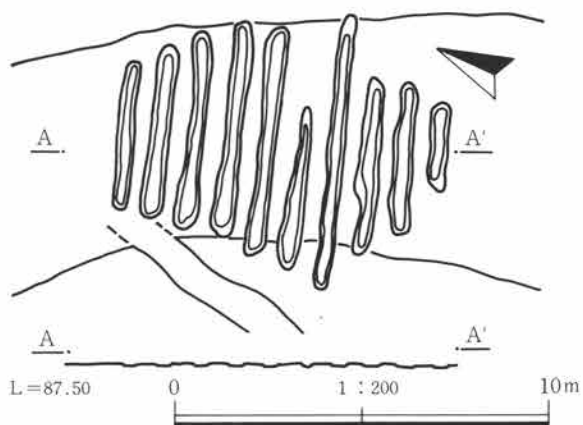
第6章 中世・近世の遺構と遺物

4543	碗 染付白磁	器高：一口径：[80mm] 底径：一ノ残	緻密な磁胎。硬質。	器壁は低く浅い。内外面：コバルト軸 で横線と笹文。	肥前系。
5溝 4456	五輪塔 火輪?	長径：(225mm)短径： 185mm高さ：133mm重 量：3,010g一部欠	榛名二ツ岳軽石	整形やや良。上面に径130mm、深30mm の播鉢状の凹あり。	
4457	五輪塔 水輪?	長径：230mm短径：165 mm高さ：135mm重量： 3,280g一部欠	榛名二ツ岳軽石	整形やや良。下面に径70mm、深16mmの 播鉢状の凹あり。	
4458	五輪塔 水輪	長径：(250mm)短径： (222mm)高さ：121mm 重量：2,690gノ欠	榛名二ツ岳軽石	整形やや良。各部に平鑿の加工痕あり。 下面に深44mmの皿状の凹あり。	
4459	五輪塔 火輪	長径：(170mm)短径： (110mm)高さ：105mm 重量：820.6g半欠	榛名二ツ岳軽石	整形は良。表面磨き。上面に径55mm、 深27mmの円筒形凹、下面に径130mm、 深45mmの播鉢状の凹あり。	
4460	五輪塔 水輪?	長径：(900mm)短径： (530mm)高さ：530mm 重量：1,067gノ欠	榛名二ツ岳軽石	整形やや良。各部に平鑿の加工痕を 残す。上面はほぼ平坦、下面に径約80 mm、深34mmの凹あり。	
9溝 4476	五輪塔 水輪?	長径：202mm短径：170 mm高さ：130mm重量： 2,920g完形	榛名二ツ岳軽石	整形粗雑。各部に平鑿の加工痕を残 す。下面に径49mm、深9mmの凹あり。	

(7) 畠跡

I地区A区1号畠跡

本畠跡は、A区2号古墳の埋没周堀  
上に造られている。9m×7mの範囲  
で、約50cm間隔で約50cmのサクが10本  
掘られている。深さは約10cmである。  
サク内には、浅間A軽石が多量に含ま  
れていた。なお、遺物は発見されてい  
ないが、浅間A軽石の大量含有から、  
軽石降下後まもなく造られた畠である  
と考えられる。(飯塚)

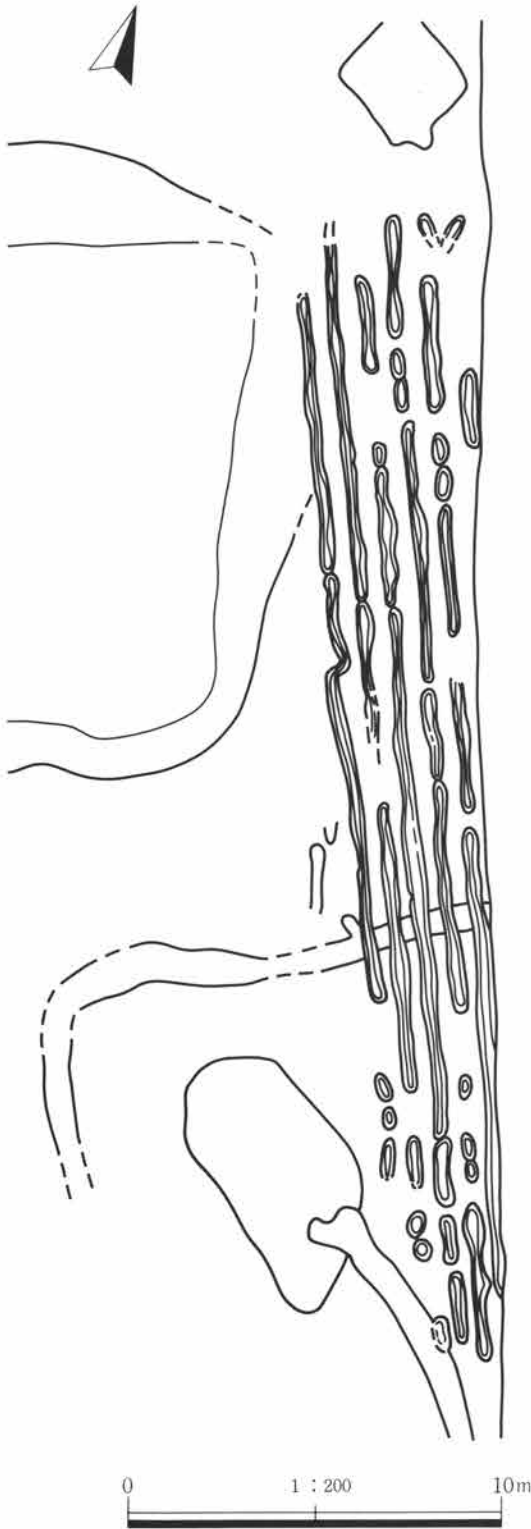


第797図 I地区A区1号畠跡遺構図

I 地区A区2号畠跡

本畠跡は、A区88号住居跡・90号住居跡・91号住居跡・29号溝・30号溝・222号土坑・225号土坑と重複しているが、いずれの遺構よりも本畠跡の方が新しい。範囲については、東側は調査区外へ延びているため不明であるが、南北は約30mである。畠跡は、約50cmの間隔をおいて、幅約30cm、深さ約10cmのサクが掘られている。なお、サク内には浅間A軽石が多く含まれており、浅間A軽石降下以降まもなく造られた畠であると考えられる。

(飯塚)



第798図 I 地区A区2号畠跡遺構図

## (8) 土 坑

第216表 土坑一覧表

土坑番号	規模(長辺・短辺・深さ) (一辺・深さ)(直径・深さ) (長軸・短軸・深さ)	形状・方位 (方位は長辺・ 長軸を基準)	出土遺物	備考	押図番号
A区-005	長辺:190cm短辺:80cm 深さ:40cm	長方形 N-10°-E		A区4号住居跡と重複。住居より新しい?	799図
A区-006	長辺:160cm短辺:110cm 深さ:50cm	隅丸長方形 N-90°-E			799図
A区-008	長辺:110cm短辺:80cm 深さ:60cm	不整長方形 N-80°-W		内部に河原石が詰まっている。	800図
A区-013	長辺:420cm短辺:120cm 深さ:60cm	長方形 N-15°-E		覆土はロームブロックを含む。	799図
A区-014	長辺:550cm短辺:100cm 深さ:65cm	長方形 N-17°-E		覆土はロームブロックを含む。	799図
A区-017	長辺:220cm短辺:100cm 深さ:40cm	長方形 N-23°-E		覆土はローム粒子を含む。	799図
A区-020	長辺:540cm短辺:100cm 深さ:60cm	長方形 N-10°-E		覆土はロームブロックを含む。	799図
A区-030	直径:90cm深さ:30cm	不整円形		内部に河原石が詰まっている。	800図
A区-034	直径:120cm深さ:25cm	不整円形			800図
A区-037	直径:90cm深さ:30cm	不整円形		覆土はロームブロックを含む。	800図
A区-038	直径:100cm深さ:20cm	不整円形		覆土はローム小ブロック・軽石を含む。	800図
A区-040	直径:100cm深さ:30cm	不整円形		覆土はローム小ブロック・軽石を含む。	800図
A区-048	長軸:120cm短軸:110cm 深さ:45cm	不整楕円形 N-30°-E		A区18号住居跡より新しい。覆土はローム粒子を含む。	800図
A区-050	長辺:290cm短辺:120cm 深さ:30cm	長方形 N-70°-W		覆土はローム小ブロック・軽石を含む。	800図
A区-057	長軸:90cm短軸:80cm 深さ:45cm	不整楕円形 N-64°-E		覆土はローム小ブロックを含む	800図
A区-059	直径:100cm深さ:15cm	不整円形		底面は凹凸が多い。	801図
A区-065	直径:60cm深さ:20cm	不整円形			801図
A区-069	長軸:120cm短軸:100cm 深さ:25cm	不整楕円形 N-48°-E	人骨。銭・熙寧元寶	墓塚。覆土中に河原石・軽石を含む。	801図



## (8) 土 坑

A区-072	直径:100cm深さ:15cm	円形		覆土中に少量のロームブロックを含む。	801図
A区-073	長軸:130cm短軸:120cm 深さ:35cm	不整楕円形 N-22'-W		覆土中にロームブロックを含む	801図
A区-074	長軸:90cm短軸:70cm深さ:15cm	不定型 N-81'-W	銭2枚。照寧元寶・至道元寶。	墓塚か?	801図
A区-085	長軸:135cm短軸:100cm 深さ:20cm	楕円形 N-33'-W		土坑内に河原石多数。	801図
A区-088	直径:130cm深さ:50cm	円形		覆土はロームブロックを含む。 A区9号方形周溝墓より新しい。	801図
A区-090	長軸:190cm短軸:120cm 深さ:65cm	不整楕円形 N-13'-E		底面は摺鉢状。	801図
A区-091	長軸:155cm短軸:110cm 深さ:65cm	不整楕円形 N-28'-E		A区8号方形周溝墓より新しい。	801図
A区-096	長辺:430cm短辺:110cm 深さ:65cm	長方形 N-64'-W		覆土は軽石を含む。	802図
A区-099	長辺:240cm短辺:180cm 深さ:25cm	不整長方形 N-31'-E		覆土はロームブロックを含む。	802図
A区-101	長辺:320cm短辺:120cm 深さ:40cm	不整長方形 N-17'-E			802図
A区-102	長辺:310cm短辺:110cm 深さ:35cm	長方形 N-23'-E		A区103土坑と重複。新旧不明。	802図
A区-103	長辺:260cm短辺:1深さ:15cm	長方形 N-24'-E		A区102土坑と重複。新旧不明。	802図
A区-104	長辺:145cm短辺:100cm 深さ:40cm	長方形 N-24'-E		A区4号掘立柱跡と重複。新旧不明。	802図
A区-105	長辺:140cm短辺:110cm 深さ:55cm	長方形 N-67'-W		A区2号掘立柱跡と重複。新旧不明。	802図
A区-109	長軸:130cm短軸:110cm 深さ:30cm	不整楕円形 N-82'-E			802図
A区-115	長辺:170cm短辺:140cm 深さ:55cm	長方形 N-32'-E		A区12号方形周溝墓より新しい。 A区5号掘立柱跡との新旧は不明。	802図
A区-116	長辺:160cm短辺:90cm 深さ:45cm	長方形 N-58'-W			803図
A区-117	直径:90cm深さ:95cm	不整円形			803図
A区-120	長軸:90cm短軸:80cm 深さ:50cm	楕円形 N-46'-E			803図

第6章 中世・近世の遺構と遺物

A区-121	長辺:210cm短辺:90cm 深さ:55cm	長方形 N-62'-W		A区70号住居跡より新しい。	803図
A区-122	長辺:240cm短辺:100cm 深さ:40cm	長方形 N-32'-W		A区132号土坑より新しい。覆土はロームブロックを含む。	803図
A区-123	直径:80cm深さ:25cm	不整形円形		覆土はロームブロックを含む。	803図
A区-130	直径:100cm深さ:15cm	円形		A区60号住居跡より新しい。	803図
A区-134	長辺:190cm短辺:80cm 深さ:15cm	長方形 N-57'-W		覆土中に浅間B軽石を含む。	803図
A区-136	長辺:180cm短辺:160cm 深さ:30cm	長方形 N-67'-W	銭・元祐通寶	覆土はローム粒子を含む。	803図
A区-140	直径:95cm深さ:20cm	円形		覆土はロームブロックを含む。	803図
A区-145	直径:100cm深さ:20cm	円形		覆土はローム粒子を含む。	803図
A区-146	長辺:330cm短辺:100cm 深さ:30cm	長方形 N-61'-W		覆土はロームブロックを含む。	803図
A区-149	直径:110cm深さ:20cm	不整形円形			804図
A区-150	長軸:140cm短軸:125cm 深さ:15cm	楕円形 N-10'-E			804図
A区-151	直径:220cm深さ:60cm	不整形円形		A区72号住居跡より新しい。中央部分が凹んでいる。	804図
A区-154	長辺:170cm短辺:90cm 深さ:35cm	不整形長方形 N-75'-W			804図
A区-157	長軸:170cm短軸:150cm 深さ:30cm	不整形楕円形 N-12'-E		覆土に浅間A軽石を含む。	804図
A区-161	長軸:110cm短軸:90cm 深さ:25cm	不整形楕円形 N-32'-W			804図
A区-162	長軸:115cm短軸:105cm 深さ:10cm	不整形楕円形 N-4'-W			804図
A区-173	長辺:330cm短辺:90cm 深さ:45cm	長方形 N-28'-W			804図
A区-175	直径:90cm深さ:25cm	不整形円形			804図
A区-177	直径:70cm深さ:20cm	円形		覆土に軽石・ローム粒子を含む。	804図
A区-178	長辺:280cm短辺:100cm 深さ:15cm	長方形 N-60'-W			804図
A区-180	長辺:125cm短辺:110cm 深さ:30cm	長方形 N-17'-E		覆土にはローム粒子を含む。	804図

## (8) 土 坑

A区-182	長辺:280cm短辺:90cm 深さ:20cm	隅丸長方形 N-26°-W		A区79号住居跡より新しい。	805図
A区-183	長軸:150cm短軸:110cm 深さ:10cm	不整楕円形 N-35°-W			805図
A区-184	長軸:110cm短軸:90cm 深さ:40cm	不整楕円形 N-51°-E			805図
A区-188	長辺:240cm短辺:90cm 深さ:40cm	長方形 N-55°-E			805図
A区-189	長辺:230cm短辺:90cm 深さ:45cm	長方形 N-48°-W		A区81号住居跡より新しい。	805図
A区-190	長辺:140cm短辺:120cm 深さ:65cm	長方形 N-15°-E		覆土には浅間B軽石・ロームブロックを含む。	805図
A区-199	直径:60cm深さ:50cm	円形			805図
A区-203	長辺:80cm短辺:70cm 深さ:70cm	隅丸長方形 N-28°-E		A区25号溝跡と重複。新旧は不明	805図
A区-211	長軸:130cm短軸:110cm 深さ:45cm	楕円形 N-75°-W		覆土に軽石・ローム粒子を含む。上層には小石を含む。	805図
A区-215	長軸:120cm短軸:100cm 深さ:30cm	不整楕円形 N-8°-W		A区83号住居跡より新しい。覆土にロームブロック・軽石を含む。	805図
A区-216	長軸:135cm短軸:65cm 深さ:20cm	不整楕円形 N-39°-E		覆土はロームブロックを含む。	805図
A区-220	長軸:90cm短軸:70cm 深さ:30cm	不整楕円形 N-4°-E		A区84号住居跡より新しい。覆土はロームブロックを含む。	805図
A区-221	長軸:135cm短軸:120cm 深さ:30cm	不整楕円形 N-54°-E		A区89号住居跡より新しい。覆土にロームブロック・炭化物を含む。	805図
A区-222	長辺:125cm短辺:80cm 深さ:20cm	不整長方形 N-78°-W		覆土に浅間B軽石・ロームブロックを含む。	805図
A区-223	長軸:115cm短軸:70cm 深さ:15cm	楕円形 N-51°-W		覆土にロームブロック及び少量の炭化物・焼土粒子を含む。	806図
A区-224	長軸:105cm短軸:80cm 深さ:15cm	不整楕円形 N-50°-E		覆土はロームブロック及び少量の炭化物・焼土粒子を含む。	806図
A区-226	直径:100cm深さ:30cm	円形		覆土にローム粒子・炭化物粒子を含む。	806図
A区-227	直径:165cm深さ:20cm	円形		A区87号住居跡・A区90号住居跡より新しい。覆土にロームブロックを含む。	806図

第6章 中世・近世の遺構と遺物

A区-235	直径:100cm深さ:15cm	円形		覆土はロームブロックを含む。	806図
A区-238	長辺:240cm短辺:115cm 深さ:15cm	長方形 N-29°-E		覆土に浅間B軽石を含む。	806図
A区-239	長軸:110cm短軸:95cm 深さ:20cm	楕円形 N-27°-E		覆土にローム粒子・焼土粒子を含む。	806図
A区-241	長軸:130cm短軸:100cm 深さ:20cm	不整楕円形 N-55°-W		覆土に浅間B軽石・ロームブロックを含む。	806図
A区-248	長軸:95cm短軸:80cm 深さ:35cm	楕円形 N-5°-E		A区249号土坑より新しい。覆土にローム粒子を含む。	806図
A区-249	長辺:110cm短辺:70cm 深さ:20cm	長方形 N-90°-E		A区248号土坑より古い。覆土にローム粒子を含む。	806図
A区-252	直径:100cm深さ:65cm	円形			806図
A区-254	長辺:100cm短辺:90cm 深さ:30cm	不整長方形 N-28°-W		A区23号溝跡と重複。新旧は不明	806図
A区-257	直径:120cm深さ:30cm	不整円形		覆土にローム粒子・多量の小石を含む。	806図
A区-258	長辺:80cm短辺:70cm 深さ:45cm	不整長方形 N-5°-W		覆土はローム小ブロック・ロームを含む。	806図
A区-265	長辺:160cm短辺:110cm 深さ:50cm	長方形 N-35°-E		覆土にロームブロック・小石を含む。人為的な埋没か?	807図
A区-269	長辺:180cm短辺:90cm 深さ:20cm	不整長方形 N-61°-W		覆土にローム粒子を含む。	807図
A区-270	一辺:80cm深さ:10cm	方形		覆土にローム粒子を含む。	807図
A区-273	長辺:100cm短辺:70cm 深さ:40cm	長方形 N-55°-W			807図
A区-274	長辺:(390cm)短辺:100cm 深さ:35cm	長方形 N-44°-E		A区10号掘立柱跡・A区11号掘立柱跡と重複。新旧は不明。	807図
A区-278	長辺:150cm短辺:85cm 深さ:40cm	不整長方形 N-28°-E		A区283号土坑より古い。覆土はローム粒子を含む。	807図
A区-282	直径:120cm深さ:20cm	円形		A区93号住居跡・A区95号住居跡より新しい。覆土に浅間A軽石・焼土粒子を含む。	807図
A区-283	長辺:115cm短辺:65cm 深さ:50cm	長方形 N-56°-E		A区278号土坑より新しい。覆土は大部分が拳大の河原石。陶器の小破片を含む。墓壇か?	807図
A区-284	長辺:120cm短辺:65cm 深さ:35cm	長方形 N-57°-W		A区283号土坑と形態は類似。覆土は大部分が拳大の河原石と軽石。墓壇か?	807図

## (8) 土 坑

A区-285	長辺:(400cm)短辺:120cm 深さ:30cm	長方形 N-32°-E		A区31号溝跡より新しい。	807図
A区-293	長辺:135cm短辺:100cm 深さ:25cm	長方形 N-77°-W	カワラケの杯1個体。	覆土はローム粒子を含む。墓塚か?	807図
A区-310	長軸:150cm短軸:140cm 深さ:55cm	楕円形 N-40°-W		覆土はローム粒子・軽石を含む。	807図
A区-316	長軸:175cm短軸:100cm 深さ:15cm	楕円形 N-52°-E		8号方形周溝墓より新しい。覆土はロームブロックを含む。	807図
A区-319	長軸:105cm短軸:75cm 深さ:15cm	不整楕円形 N-39°-W	人骨・カワラケの杯6個体・銭3枚:嘉祐通寶1枚・熙寧元寶1枚・不明1枚。	中世の墓塚。	808図
A区-320	長軸:180cm短軸:150cm 深さ:80cm	楕円形 N-18°-W	人骨小片。	河原石による石組。覆土は骨片を含む。	808図
B区-004	長辺:260cm短辺:80cm 深さ:30cm	不整長方形 N-19°-W		B区6号溝跡より新しい。覆土はロームブロックを含む。	809図
B区-007	長辺:150cm短辺:130cm 深さ:25cm	不整長方形 N-42°-E	砥石?1個・角釘1本。	B区8号土坑と重複。新旧は不明。	809図
B区-008	長軸:200cm短軸:150cm 深さ:45cm	不整楕円形 N-36°-E		B区8号土坑と重複。新旧は不明。覆土に多量の河原石を含む。	809図
B区-010	長軸:75cm短軸:— 深さ:15cm	楕円形 N-36°-W	人骨・陶器の摺鉢・銭3枚。慶元通寶1枚・寛永通寶1枚・紹興元寶1枚。	B区37号住居跡・B区38号住居跡より新しい。江戸時代の土墳墓。	809図
B区-012	直径:110cm深さ:40cm	不整円形		覆土にローム粒子・小石を含む。	809図
B区-013	直径:110cm深さ:50cm	不整円形	銭1枚。寛永通寶。	覆土にローム粒子・ロームブロックを含む。江戸時代の墓塚か?	809図
B区015	長辺:340cm短辺:120cm 深さ:35cm	長方形 N-82°-W		B区39b号住居跡より新しい。覆土は軽石ロームブロックを含む。	809図
B区-016	長辺:330cm短辺:130cm 深さ:25cm	長方形 N-77°-W		B区39-b号住居跡より新しい。覆土はロームブロックを含む。	809図
B区-017	長辺:290cm短辺:165cm 深さ:20cm	不整長方形 N-72°-W		土坑内に小ピットあり。	809図
B区-018	長辺:(180cm)短辺:120cm 深さ:35cm	長方形 N-77°-W		B区19号土坑と重複。新旧は不明。覆土は多量の軽石を含む。	810図
B区-019	長辺:250cm短辺:120cm 深さ:30cm	長方形 N-18°-W		B区18号土坑と重複。新旧は不明	810図
B区-020	長辺:235cm短辺:135cm 深さ:25cm	長方形 N-25°-E		土坑内に小ピットあり。覆土は多量の軽石及びロームブロックを含む。	810図

第6章 中世・近世の遺構と遺物

C区-001	長辺:(290cm)短辺:120cm 深さ:40cm	長方形 N-13'-E	五輪塔の風輪2?	覆土に多量のロームブロック・拳大〜人頭大の河原石を含む。	810図
C区-003	長軸:360cm短軸:180cm 深さ:90cm	不定型 N-10'-W		C区2号古墳より新しい。覆土にローム小ブロックを含む。	810図
C区-005	長辺:(330cm)短辺:100cm 深さ:15cm	不整長方形 N-5'-E		底面に小ピットがある。覆土はやや多量のローム大小ブロックを含む。	810図
C区-006	長辺:(180cm)短辺:95cm 深さ:20cm	長方形 N-47'-W		C区4号古墳・C区4号土坑より新しい。覆土はやや多量のローム大小ブロックを含む。	810図
C区-010	長辺:200cm短辺:180cm 深さ:20cm	不整長方形 N-5'-W		C区10号住居跡より新しい。覆土に多量の拳大〜人頭大の河原石を含む。	810図
C区-012	長軸:110cm短軸:90cm 深さ:45cm	不整楕円形 N-63'-W			811図
C区-020	長辺:(110cm)短辺:70cm 深さ:25cm	長方形 N-34'-E		覆土に浅間A軽石・ロームブロック・人頭大の河原石を含む。	811図
C区-023	直径:95cm深さ:15cm	不整円形		覆土にロームブロックを含む。	811図
C区-026	長軸:—短軸:—深さ:20cm	不明	陶器の椀1個体。	中央部分が凸状。覆土はロームブロックを含む。	811図
C区-033	長軸:155cm短軸:140cm 深さ:60cm	楕円形 N-87'-W		覆土は多量のロームブロックを含む。	811図
C区-035	長辺:160cm短辺:70cm 深さ:40cm	長方形 N-81'-E		覆土は多量のローム粒子を含む	811図
C区-036	長軸:150cm短軸:55cm 深さ:20cm	不定型 N-4'-E			811図
C区-037	長軸:230cm短軸:210cm 深さ:20cm	不定型 N-28'-W		覆土は多量の浅間B軽石・ローム粒子を含む。	811図
C区-038	長軸:120cm短軸:70cm 深さ:60cm	楕円形 N-39'-E		覆土はローム粒子を含む。	811図
C区-039	長辺:150cm短辺:120cm 深さ:25cm	不整長方形 N-21'-W		C区2号方形周溝墓より新しい。覆土は多量のロームブロックを含む。	811図
C区-040	長軸:200cm短軸:150cm 深さ:55cm	楕円形 N-55'-E			812図
C区-046	長辺:115cm短辺:60cm 深さ:15cm	長方形 N-24'-W		覆土はローム小ブロック・軽石を含む。	812図
C区-051	長軸:230cm短軸:90cm 深さ:30cm	長楕円形 N-68'-E		覆土はローム小ブロックを含む	812図

## (8) 土 坑

C区-052	一辺:160cm深さ:15cm	不 明		覆土はローム小ブロックを含む	812図
C区-057	直径:230cm深さ:20cm	円 形 ?		C区2号古墳より新しい。覆土はローム小ブロックを含む。	812図
C区-062	長辺:125cm短辺:70cm 深さ:40cm	不整長方形 N-17'-W		C区5号方形周溝墓と重複、新旧は不明。多量のローム小ブロックを含む。	812図
C区-063	長軸:150cm短軸:125cm 深さ:65cm	楕 円 形 N-87'-E			812図
C区-064	長軸:320cm短軸:250cm 深さ:135cm	不整楕円形 N-15'-W	内耳陶器1・陶器の火鉢1・砥石2。	C区1号館跡と重複、新旧は不明。覆土は全体にロームブロックを含み、人為的に埋められた土。	812図
C区-065	長辺:320cm短辺:110cm 深さ:45cm	長 方 形 N-73'-E		覆土はローム小ブロック・軽石を含む。	813図
C区-069	長軸:185cm短軸:150cm 深さ:30cm	楕 円 形 N-4'-E		C区12号溝跡と重複、新旧は不明底面に小ピットあり。覆土はロームブロック・軽石を含む。	813図
C区-070	長軸:140cm短軸:130cm 深さ:35cm	楕 円 形 N-4'-W		C区7号方形周溝墓より新しい。	813図
C区-071	長軸:185cm短軸:130cm 深さ:55cm	不整楕円形 N-12'-E	陶器の擂鉢。	C区1号館跡の堀内にあるが、関係は不明。覆土は浅間A軽石・ロームブロックを含む。	813図
C区-073	長辺:215cm短辺:80cm 深さ:20cm	長 方 形 N-29'-W		覆土はローム小ブロックを含む	813図
C区-075	長辺:150cm短辺:45cm 深さ:25cm	長 方 形 N-17'-W		C区9号溝跡より新しい。覆土は浅間A軽石・ローム小ブロックを含む。	813図
C区-076	長辺:300cm短辺:120cm 深さ:35cm	長 方 形 N-33'-W		覆土はローム小ブロック・軽石を含む。	813図
C区-077	長軸:220cm短軸:200cm 深さ:50cm	不 定 形 N-3'-W		覆土はローム小ブロック・軽石を含む。	813図
C区-079	長辺:(160cm)短辺:120cm 深さ:15cm	不整長方形 N-72'-E		覆土は浅間A軽石・ローム小ブロックを含む。	813図
D区-004	長軸:170cm短軸:150cm 深さ:35cm	不整楕円形 N-8'-W		覆土はローム小ブロックを含む	814図
D区-007	長辺:230cm短辺:(65cm) 深さ:20cm	長 方 形 ? N-12'-W		覆土はローム粒子を含む。	814図
D区-008	長軸:240cm短軸:180cm 深さ:70cm	不整楕円形 N-8'-W		覆土はローム粒子を含む。	814図

第6章 中世・近世の遺構と遺物

D区-018	長軸:170cm短軸:150cm 深さ:55cm	不整楕円形 N-10'-E		D区19号土坑と重複、新旧は不明覆土はローム小ブロック・軽石を含む。	814図
D区-019	長辺:130cm短辺:110cm 深さ:30cm	長方形 N-63'-E		D区18号土坑・D区19号土坑と重複、新旧は不明。覆土はローム粒子・軽石を含む。	814図
D区-020	長軸:180cm短軸:140cm 深さ:60cm	不定形 N-45'-W		D区19号土坑と重複、新旧は不明覆土は軽石を含む。	814図
D区-023	長軸:320cm短軸:190cm 深さ:100cm	不整楕円形 N-55'-W		覆土はローム小ブロック・軽石を含む。	814図
D区-024	長軸:180cm短軸:125cm 深さ:45cm	不整楕円形 N-25'-W		C区1号館跡の堀と重複、新旧は不明。覆土はローム小ブロック・軽石を含む。	814図
D区-025	長軸:370cm短軸:250cm 深さ:55cm	不定形 N-57'-E		覆土はローム小ブロック・軽石を含む。	815図
D区-027	長辺:110cm短辺:60cm 深さ:35cm	長方形 N-19'-W			814図
D区-028	長辺:85cm短辺:50cm深さ:20cm	長方形 N-16'-W			815図
D区-029	長軸:120cm短軸:70cm 深さ:50cm	不整楕円形 N-20'-W			815図
D区-030	長軸:230cm短軸:175cm 深さ:50cm	不定形 N-41'-W		土坑2基の重複か? 覆土はロームブロックを含む。	815図
D区-031	長辺:150cm短辺:85cm 深さ:35cm	長方形 N-85'-E		覆土はローム小ブロックを含む	815図
D区-034	長辺:120cm短辺:100cm 深さ:35cm	長方形 N-78'-E		C区1号館跡の堀と重複、新旧は不明。中間に段を持ち、覆土は多量の軽石を含む。	815図
D区-035	長辺:260cm短辺:160cm 深さ:30cm	不整長方形 N-33'-W		中間に段を持ち、覆土に軽石を含む。	815図
D区-037	長軸:180cm短軸:120cm 深さ:35cm	不整楕円形 N-7'-W		覆土は軽石・ローム小ブロックを含む。	815図
D区-038	一辺:125cm深さ:15cm	不整形		D区4号古墳より新しい。	815図
D区-039	長軸:120cm短軸:110cm 深さ:15cm	楕円形 N-84'-E		覆土上部には拳大〜人頭大の河原石が多く含まれる。	816図
D区-042	長軸:190cm短軸:130cm 深さ:25cm	不整楕円形 N-33'-E		覆土に軽石・ローム小ブロック・拳大の河原石を含む。	816図
D区-044	長軸:230cm短軸:170cm 深さ:95cm	不定形 N-81'-E		覆土はロームブロック・軽石を含む。	816図



## (8) 土 坑

D区-045	長軸:135cm短軸:110cm 深さ:25cm	不整楕円形 N-80°-E	人骨。銭7枚:元豊通寶1・ 皇宋通寶2・紹聖元寶1・政 和通寶1・永樂通寶1・大觀 通寶1。	中世の土墳墓。	816図
D区-046	長辺:400cm短辺:90cm 深さ:15cm	長 方 形 N-53°-W		覆土は多量のローム小ブロック を含む。	816図
D区-047		不 明	寛永通寶16枚:古寛永萩1・ 古寛永水戸5・古寛永越後 高田3・古寛永岡山1・古寛 永駿河踏谷1・不明5。	土坑は検出出来なかったが、江 戸時代の土墳墓があったと推定 できる。	
D区-048	長軸:170cm短軸:120cm 深さ:30cm	楕 円 形 N-23°-W		覆土にローム粒子・細かい軽石 を含む。	816図
D区-049	長辺:145cm短辺:110cm 深さ:35cm	長 方 形 N-19°-W		覆土は多量のローム小ブロック を含む。	816図
D区-050	長辺:160cm短辺:105cm 深さ:30cm	長 方 形 N-23°-W		覆土に多量のローム粒子を含む	816図
D区-051	長軸:140cm短軸:110cm 深さ:20cm	不整楕円形 N-18°-W		覆土にローム小ブロック・軽石 を含む。	817図
D区-052	長軸:140cm短軸:90cm 深さ:20cm	不 定 形 N-90°-E		覆土にローム小ブロック・軽石 を含む。	817図
D区-053	長辺:85cm短辺:60cm深 さ:20cm	長 方 形 N-79°-E		D区4号古墳と重複、新旧は不 明。覆土はローム粒子を含む。	817図
D区-054	長辺:210cm短辺:70cm 深さ:20cm	長 方 形 N-20°-W		覆土にローム小ブロックを含む	817図
D区-055	直径:75cm深さ:15cm	不 整 円 形		覆土にローム小ブロック・拳大 の河原石を含む。	817図
D区-056	長軸:120cm短軸:70cm 深さ:20cm	楕 円 形 N-74°-E			817図
D区-059	長 辺:(180cm)短 辺:80 cm深さ:25cm	長 方 形 N-81°-W		C区1号館跡の堀と重複、新旧 は不明。覆土は多量のローム小 ブロックを含む。	817図
D区-061	長辺:70cm短辺:60cm深 さ:20cm	不整長方形 N-17°-W		覆土は軽石を含む。	817図
D区-062	長軸:165cm短軸:120cm 深さ:35cm	不 定 形 N-43°-W		覆土は多量のローム粒子・小石 を含む。	817図
D区-066	長 辺:(115cm)短 辺:70 cm深さ:30cm	長 方 形 N-79°-E		覆土はローム粒子・軽石を含む。	817図
D区-070	長軸:170cm短軸:115cm 深さ:35cm	不整楕円形 N-5°-E			817図

第6章 中世・近世の遺構と遺物

D区-073	長辺:125cm短辺:70cm 深さ:15cm	長方形 N-3'-W		D区3号住居跡より新しい。覆土に拳大〜人頭大の河原石を含む。	817図
D区-074	長辺:(160cm)短辺:115cm 深さ:40cm	長方形 N-26'-W		D区3号住居跡より新しい。	817図
D区-075	長辺:110cm短辺:60cm 深さ:15cm	長方形 N-67'-W			818図
D区-077	長軸:110cm短軸:80cm 深さ:20cm	楕円形 N-5'-W		覆土はローム粒子を含む。	818図
D区-078	長辺:80cm短辺:70cm 深さ:20cm	不定形 N-58'-W		覆土はやや多量のローム小ブロック・ローム粒子を含む。	818図
D区-080	長軸:250cm短軸:150cm 深さ:65cm	不整楕円形 N-27'-W		中間に段を持ち、覆土はローム小ブロック・軽石を含む。	818図
D区-081	長軸:330cm短軸:270cm 深さ:50cm	不定形 N-67'-E		D区7号溝跡と重複、新旧は不明。覆土は人頭大の河原石を含む。	818図
D区-085	長辺:(95cm)短辺:90cm 深さ:45cm	長方形 N-94'-E		覆土は暗褐色土とローム小ブロックの混合。	818図
D区-091	長軸:(150cm)短軸:110cm 深さ:10cm	不整楕円形 N-36'-W		覆土はローム粒子・小石を含む。	818図
D区-093	直径110cm深さ:25cm	不明			818図
D区-095	長軸:(50cm)短軸:55cm 深さ:15cm	不整楕円形 N-8'-E		覆土はローム粒子を含む。	818図
D区-100	直径:90cm深さ:20cm	円形		D区7号古墳より新しい。覆土はローム小ブロック・軽石を含む。	818図
D区-101	長軸:160cm短軸:125cm 深さ:40cm	不整楕円形 N-17'-E		D区8号古墳より新しい。中間に段を持ち、覆土はローム粒子・軽石を含む。	818図
D区-102	長軸:260cm短軸:200cm 深さ:85cm	不整楕円形 N-90'-E		D区9号古墳と重複、新旧は不明。中間に段を持ち、ロームブロックを含む。	819図
D区-103	直径:80cm深さ:30cm	円形		D区9号古墳と重複、新旧は不明。覆土はローム粒子を含む。	819図
D区-104	長軸:90cm短軸:75cm 深さ:35cm	楕円形 N-4'-W		D区9号古墳と重複、新旧は不明。覆土はローム粒子を含む。	819図
D区-105	長軸:220cm短軸:105cm 深さ:30cm	楕円形 N-73'-W		D区9号古墳と重複、新旧は不明。覆土はロームブロック・ローム粒子を含む。	819図
D区-106	一辺:230cm深さ:45cm	不明		D区9号古墳・D区107号土坑と重複、新旧は不明。覆土に拳大〜人頭大の河原石を含む。	819図

## (8) 土 坑

D区-107	一辺:160cm深さ:55cm	不 明		D区9号古墳・D区106号土坑と重複、新旧は不明。覆土に拳大～人頭大の河原石を含む。	819図
D区-108	長軸:95cm短軸:105cm深さ:20cm	楕 円 形 N-33'-W		D区9号古墳・D区106号土坑と重複、新旧は不明。	819図
D区-111	長軸:175cm短軸:115cm深さ:40cm	不整楕円形 N-61'-E		D区7号古墳と重複、新旧は不明。覆土はローム粒子・軽石を含む。	819図
D区-112	長軸:140cm短軸:100cm深さ:40cm	不整楕円形 N-14'-W		D区7号古墳と重複、新旧は不明。	819図
D区-117	長辺:320cm短辺:140cm深さ:60cm	長 方 形 N-5'-W		底面に小ビットがある。覆土はローム小ブロック・小石を含む。	819図
D区-121	長辺:165cm短辺:110cm深さ:20cm	長 方 形 N-76'-W		D区125号土坑と重複、新旧は不明。覆土はローム粒子・軽石を含む。	820図
D区-124	長軸:175cm短軸:130cm深さ:25cm	不整楕円形 N-57'-E		覆土はローム小ブロックを含む	820図
D区-125	長軸:120cm短軸:95cm深さ:25cm	楕 円 形 N-12'-E		D区121号土坑と重複、新旧は不明。覆土は多量のローム粒子を含む。	820図
D区-129	長軸:200cm短軸:150cm深さ:40cm	楕 円 形 N-23'-W		覆土はローム粒子を含む。	820図
D区-130	長軸:220cm短軸:125cm深さ:45cm	不整楕円形 N-39'-W		覆土はローム粒子を含む。	820図
D区-131	径:360cm深さ:100cm	不 明		覆土はローム小ブロック・ローム粒子を含む。	820図
D区-132	長軸:(140cm)短軸:110cm深さ:35cm	不整楕円形 N-11'-W		覆土はローム粒子を含む。	820図
寺前地区-001	長軸:200cm短軸:100cm深さ:25cm	不整楕円形 N-67'-W		寺前地区1号溝跡と重複、新旧は不明。覆土に拳大～人頭大の河原石を含む。	820図
寺前地区-002	長辺:125cm短辺:100cm深さ:20cm	長 方 形 N-17'-W		寺前地区3号土坑より古い。覆土はローム粒子を含む。	820図
寺前地区-003	長辺:90cm短辺:70cm深さ:15cm	不整長方形 N-22'-W		寺前地区2号土坑より新しい。覆土はローム粒子を含む。	821図
寺前地区-004	直径:100cm深さ:35cm	円 形		底面には溝がまわり、桶を埋めたものと考えられる。覆土は多量のロームブロックを含む。	821図
寺前地区-005	直径:160cm深さ:35cm	円 形		底面には溝がまわり、桶を埋めたものと考えられる。覆土は多量のロームブロックを含む。	821図

第6章 中世・近世の遺構と遺物

寺前地区-006	直径:100cm深さ:25cm	円形		底面には溝がまわり、桶を埋めたものと考えられる。覆土は多量のロームブロックを含む。	821図
寺前地区-007	直径:75cm深さ:10cm	円形		覆土はローム小ブロックを含む	821図
寺前地区-008	長軸:140cm短軸:85cm 深さ:20cm	楕円形 N-9°-E		寺前地区12号土坑と重複、新旧は不明。覆土はローム小ブロックを含む。	821図
寺前地区-009	長軸:100cm短軸:60cm 深さ:10cm	不定形 N-14°-W		覆土はローム小ブロックを含む	821図
寺前地区-010	長軸:95cm短軸:75cm 深さ:10cm	不定形 N-14°-W		覆土は少量のローム小ブロックを含む。	821図
寺前地区-012	長辺:120cm短辺:70cm 深さ:20cm	不整長方形 N-71°-E		覆土は少量のローム小ブロックを含む。	821図
寺前地区-014	長軸:110cm短軸:85cm 深さ:20cm	楕円形 N-34°-E		寺前地区2号溝跡と重複、新旧は不明。	821図
寺前地区-015	長辺:95cm短辺:75cm 深さ:15cm	長方形 N-25°-W		寺前地区16号土坑と重複、新旧は不明。覆土は少量のローム小ブロックを含む。	821図
寺前地区-016	長軸:170cm短軸:125cm 深さ:30cm	不整楕円形 N-48°-W		寺前地区15号土坑と重複、新旧は不明。覆土は砂質土で、ローム小ブロックを含む。	821図
寺前地区-018	長辺:150cm短辺:115cm 深さ:50cm	長方形 N-22°-W		覆土はやや多量のロームブロック・小石を含む。	821図
寺前地区-019	長軸:220cm短軸:110cm 深さ:55cm	不定形 N-33°-W		中間に段を持つ。覆土は大小のロームブロックを含む。	821図
寺前地区-020	長軸:210cm短軸:90cm 深さ:50cm	不定形 N-46°-W		覆土はやや多量のロームブロックを含む。	822図
寺前地区-022	長軸:130cm短軸:(70cm) 深さ:15cm	不整楕円形 N-27°-W		寺前地区2号溝跡と重複、新旧は不明。	822図
寺前地区-023	長辺:145cm短辺:80cm 深さ:25cm	長方形 N-24°-W		寺前地区4号溝跡と重複、新旧は不明。	822図
寺前地区-025	直径:85cm深さ:15cm	不整円形			822図
寺前地区-027	長辺:140cm短辺:110cm 深さ:60cm	長方形 N-22°-W		覆土に多量のロームブロック及び小石を含む。	822図
寺前地区-028	長辺:110cm短辺:80cm 深さ:30cm	長方形 N-40°-W			822図
寺前地区-030	長辺:90cm短辺:80cm 深さ:35cm	長方形 N-36°-W	人骨・カワラケの杯1・銭3枚・祥符元寶1・淳熙元寶1・政和通寶1。	中世の土坑墓。	822図

## (8) 土 坑

寺前地区-031	長辺:165cm短辺:100cm 深さ:60cm	不整長方形 N-31°-W			822図
寺前地区-032	長辺:240cm短辺:70cm 深さ:35cm	長方形 N-76°-E		覆土はローム粒子・炭化物を含む。	822図
寺前地区-036	長辺:215cm短辺:120cm 深さ:25cm	不整長方形 N-23°-W	砥石1。	寺前地区7号古墳より新しい。 覆土はやや多量のロームブロックを含む。	822図
寺前地区-037	長辺:160cm短辺:100cm 深さ:30cm	長方形 N-50°-E		覆土は砂質でやや多量のロームブロックを含む。	822図
寺前地区-040	長軸:140cm短軸:120cm 深さ:20cm	不整楕円形 N-34°-W		覆土はロームブロックを含む。	822図
寺前地区-041	長軸:110cm短軸:65cm 深さ:30cm	不整楕円形 N-62°-E		覆土はローム小ブロック・暗褐色土ブロックの混合。	822図
寺前地区-046	長軸:85cm短軸:65cm 深さ:15cm	不整楕円形 N-59°-W		覆土はロームブロック・軽石を含む。	823図
寺前地区-055	長軸:125cm短軸:75cm 深さ:20cm	不整楕円形 N-34°-W		覆土は炭化物を含む。	823図
寺前地区-056	長軸:115cm短軸:55cm 深さ:20cm	不整楕円形 N-15°-E	人骨?	覆土はやや多量の炭化物を含む 土壌墓か?	823図
寺前地区-057	長軸:120cm短軸:50cm 深さ:15cm	不整楕円形 N-8°-E		覆土はロームブロック・炭化物を含む。	823図
寺前地区-058	長辺:340cm短辺:120cm 深さ:20cm	長方形 N-15°-W	銭2枚:景德元寶2。	覆土はロームブロックを含む。 中世の土壌墓か?	823図
寺前地区-063	長辺:165cm短辺:85cm 深さ:25cm	長方形 N-15°-E		覆土はロームブロックを含む。	823図
寺前地区-064	長軸:160cm短軸:90cm 深さ:45cm	楕円形 N-23°-W			823図
寺前地区-066	一辺:130cm深さ:10cm	不整方形	人骨。	覆土はローム粒子を含む。土壌墓。	823図
寺前地区-067	長軸:180cm短軸:160cm 深さ:10cm	楕円形 N-30°-W		覆土はロームブロックを含む。	823図
寺前地区-069	長軸:125cm短軸:100cm 深さ:15cm	楕円形 N-35°-W		覆土はローム小ブロックと暗褐色土の混合。	823図
寺前地区-070	長軸:120cm短軸:90cm 深さ:20cm	楕円形 N-70°-E		覆土はローム小ブロック・ローム粒子を含む。	823図
寺前地区-071	一辺:180cm深さ:10cm	不整方形		覆土はローム小ブロックと暗褐色土の混合。	823図

第6章 中世・近世の遺構と遺物

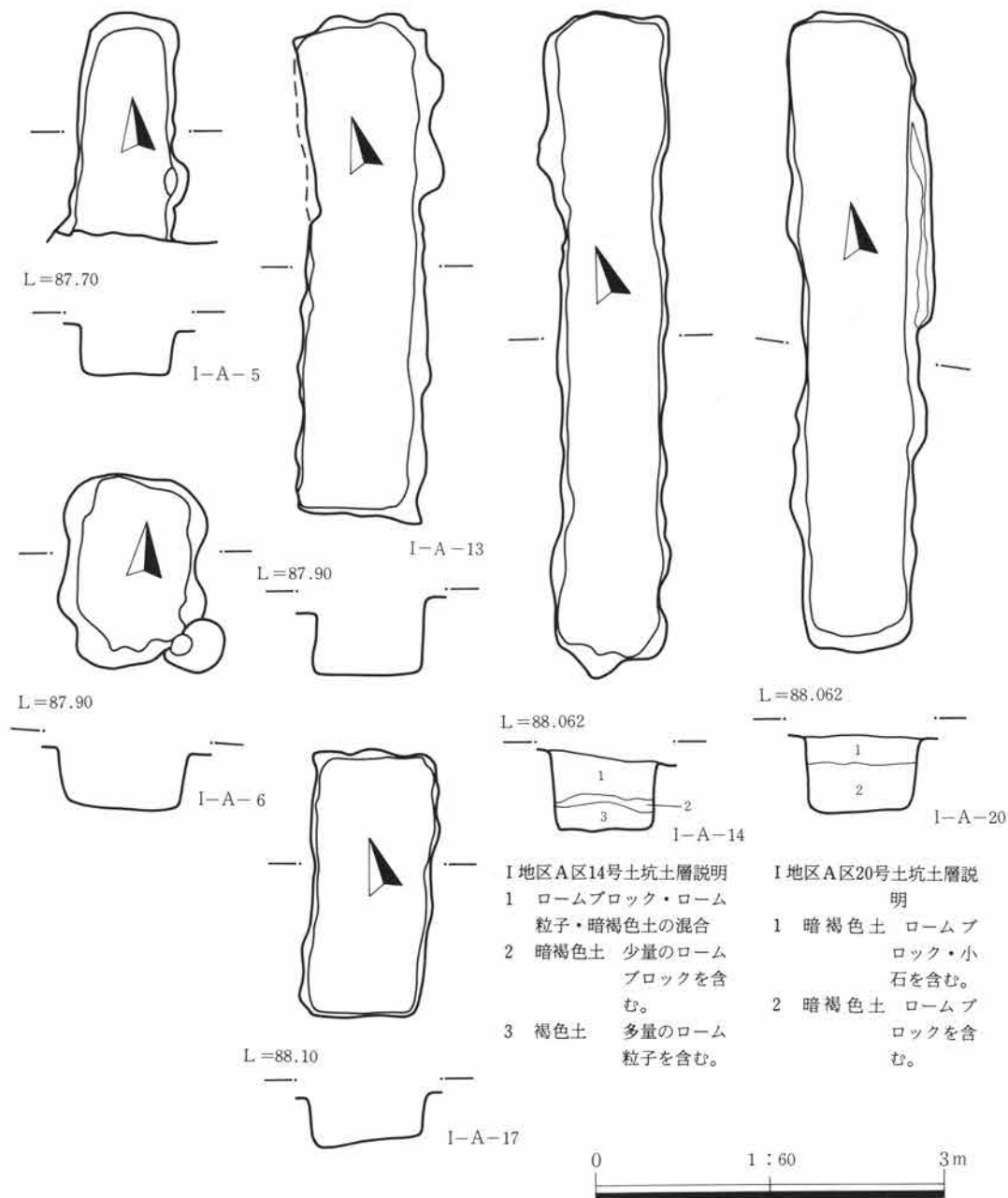
寺前地区-072	長軸:170cm短軸:140cm 深さ:15cm	楕円形 N-14'-W		覆土はローム小ブロックと暗褐色土の混合。	824図
寺前地区-073	長軸:110cm短軸:100cm 深さ:25cm	不整楕円形 N-22'-E		覆土はローム粒子を含む。	824図
寺前地区-074	直径:85cm深さ:20cm	円形			824図
寺前地区-075	長辺:145cm短辺:90cm 深さ:25cm	不整長方形 N-26'-E		寺前地区76号土坑と重複、新旧は不明。覆土に多量の浅間B軽石及びロームブロックを含む。	824図
寺前地区-076	長辺:200cm短辺:90cm 深さ:30cm	長方形 N-55'-E		寺前地区75号土坑と重複、新旧は不明。覆土に浅間B軽石・ローム粒子・拳大〜人頭大の河原石を含む。	824図
寺前地区-079	直径:110cm深さ:45cm	円形		覆土に浅間B軽石・ロームブロックを含む。	824図
寺前地区-081	長軸:130cm短軸:100cm 深さ:40cm	楕円形 N-37'-E		覆土は暗褐色土、ローム粒子を含む。	824図
寺前地区-083	長軸:175cm短軸:110cm 深さ:10cm	不定形 N-21'-W		覆土にロームブロック・軽石を含む。	824図
寺前地区-085	一辺:70cm深さ:25cm	方形			824図
寺前地区-086	長軸:145cm短軸:120cm 深さ:25cm	不定形 N-30'-E		覆土は暗褐色土・ロームブロックの混合。	824図
寺前地区-087	長軸:120cm短軸:80cm 深さ:45cm	楕円形 N-32'-W		覆土に多量の軽石及びロームブロックを含む。	824図
寺前地区-088	長軸:150cm短軸:115cm 深さ:25cm	不定形 N-15'-E		覆土に多量のローム粒子・軽石を含む。	824図
寺前地区-090	長軸:140cm短軸:110cm 深さ:20cm	不定形 N-63'-E		覆土に浅間A軽石・ローム粒子・ローム小ブロックを含む。	824図
寺前地区-094	長軸:290cm短軸:185cm 深さ:50cm	不定形 N-7'-E		覆土はローム粒を含む。	824図
寺前地区-096	長軸:330cm短軸:170cm 深さ:40cm	不整楕円形 N-50'-W		中間に段を持ち、覆土はローム小ブロック・ローム粒子を含む。	824図
寺前地区-097	長軸:310cm短軸:170cm 深さ:15cm	不定形 N-44'-W		覆土はロームブロック・ローム粒子を含む。	825図
寺前地区-098	長辺:150cm短辺:120cm 深さ:30cm	長方形 N-37'-W		寺前地区10号古墳の周溝と重複、新旧は不明。覆土はローム粒子・焼土粒子・炭化物を含む。	825図

## (8) 土 坑

寺前地区-099	長軸:250cm短軸:140cm 深さ:45cm	不 定 形 N-10°-W		寺前地区18号溝跡と重複、新旧は不明。覆土はやや多量のローム粒子・軽石を含む。	825図
寺前地区-111	長軸:125cm短軸:115cm 深さ:40cm	不 定 形 N-19°-E	人骨・カワラケの杯1・銭4:元豊通寶1・元符通寶1・開祿通寶1・不明1。	寺前地区6号古墳の墳丘から検出。覆土はローム小ブロック・ローム粒子を含む。	825図
寺前地区-112	一辺:190cm深さ:30cm	不 明		寺前地区6号古墳と重複、新旧不明。底面の小ピットは土坑より新しい。覆土はローム粒子を含む。	825図
寺前地区-116	長辺:175cm短辺:90cm 深さ:35cm	長 方 形 N-80°-W		覆土に少量のローム粒子・小石を含む。	825図
寺前地区-117	長辺:90cm短辺:65cm 深さ:40cm	長 方 形 N-13°-W		底面に小ピットを持つ。覆土はローム粒子を含む。	825図
寺前地区-120	長辺:(110cm)短辺:100cm 深さ:25cm	不 整 長 方 形 N-7°-E			826図
寺前地区-122	長軸:115cm短軸:95cm 深さ:35cm	楕 円 形 N-9°-W		覆土はローム小ブロックを含む	826図
寺前地区-123	長軸:245cm短辺:180cm 深さ:140cm	不 定 形 N-56°-E		寺前地区6号古墳と重複、新旧は不明。中間に段を持ち、覆土はローム小ブロックを含む。	826図
寺前地区-125	長軸:(150cm)短軸:125cm 深さ:50cm	不 整 楕 円 形 N-60°-E		寺前地区31号溝跡と重複、新旧は不明。覆土はローム粒子・焼土粒子・炭化物を含む。	826図
寺前地区-126	長軸:120cm短軸:65cm 深さ:15cm	不 整 楕 円 形 N-40°-E			826図
寺前地区-127	長軸:360cm短軸:160cm 深さ:75cm	不 定 形 N-53°-W		覆土はローム小ブロック・ローム粒子を含む。	826図
寺前地区-128	長軸:375cm短軸:150cm 深さ:35cm	不 整 楕 円 形 N-23°-W		中間に段を持ち、覆土は軽石・ローム小ブロック・ローム粒子を含む。	826図
寺前地区-129	直径:170cm深さ:30cm	円 形		覆土はローム小ブロック・ローム粒子を含む。	826図
寺前地区-131	長軸:110cm短軸:90cm 深さ:20cm	不 整 楕 円 形 N-90°-E		覆土はローム粒子を含む。	827図
寺前地区-133	長辺:180cm短辺:90cm 深さ:40cm	長 方 形 N-52°-E		覆土はロームブロックを含む。	826図
寺前地区-135	長軸:170cm短軸:130cm 深さ:20cm	楕 円 形 N-29°-W		覆土はロームブロックを含む。	827図

第6章 中世・近世の遺構と遺物

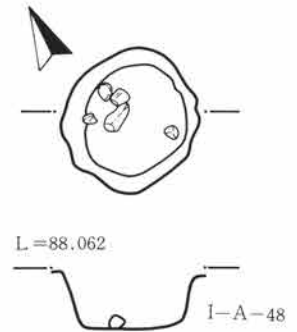
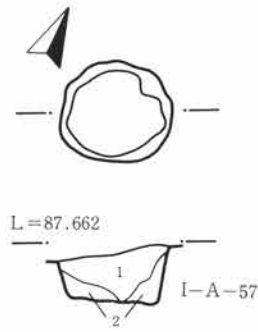
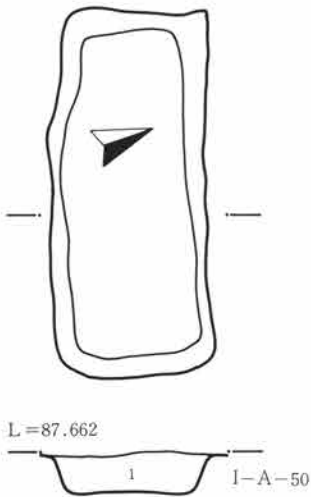
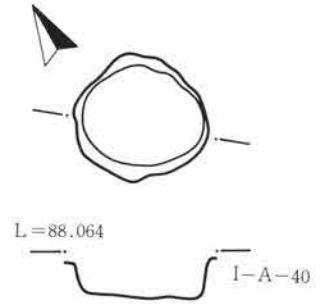
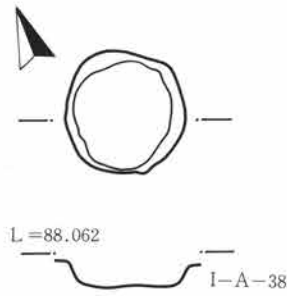
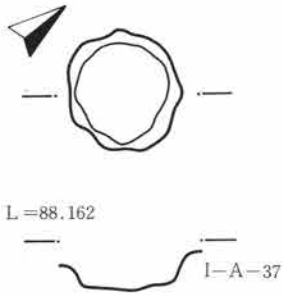
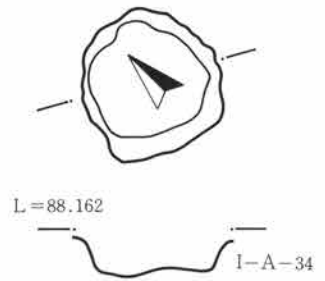
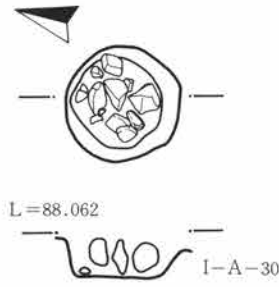
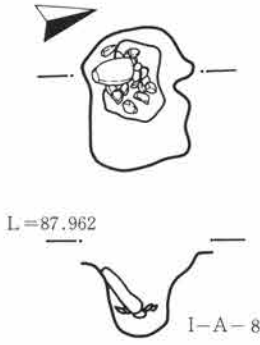
寺前地区-136	長軸:160cm短軸:120cm 深さ:30cm	不 定 形	埋藏銭5,992枚。唐の開元通寶から明の宣徳通寶までが含まれているが、寛永通寶は含まれていない詳しくは、別表を参照。	中世末の銭埋藏土坑。寺前地区1号館跡の堀の南西部隅に隣接するが、関係は不明。	827図
----------	-----------------------------	-------	--	--	------



第799図 土坑遺物図(1)



(8) 土 坑

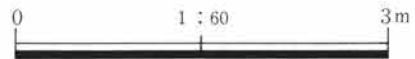


I地区A区57号土坑土層説明

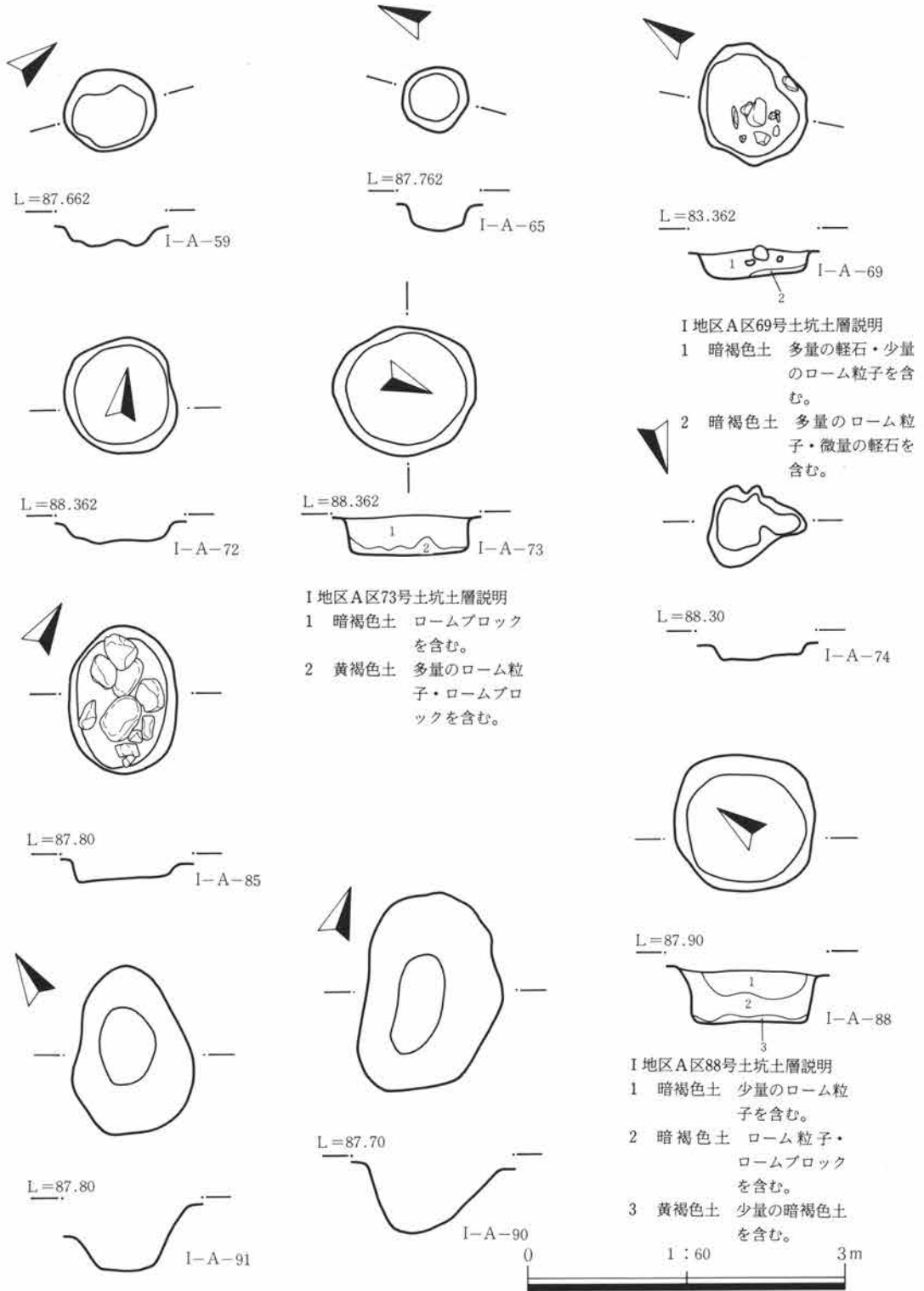
- 1 褐色土 ローム小ブロックを含む。
- 2 ローム主体、褐色土含む。

I地区A区50号土坑土層説明

- 1 暗褐色土 多量の軽石及びロームブロックを含む。

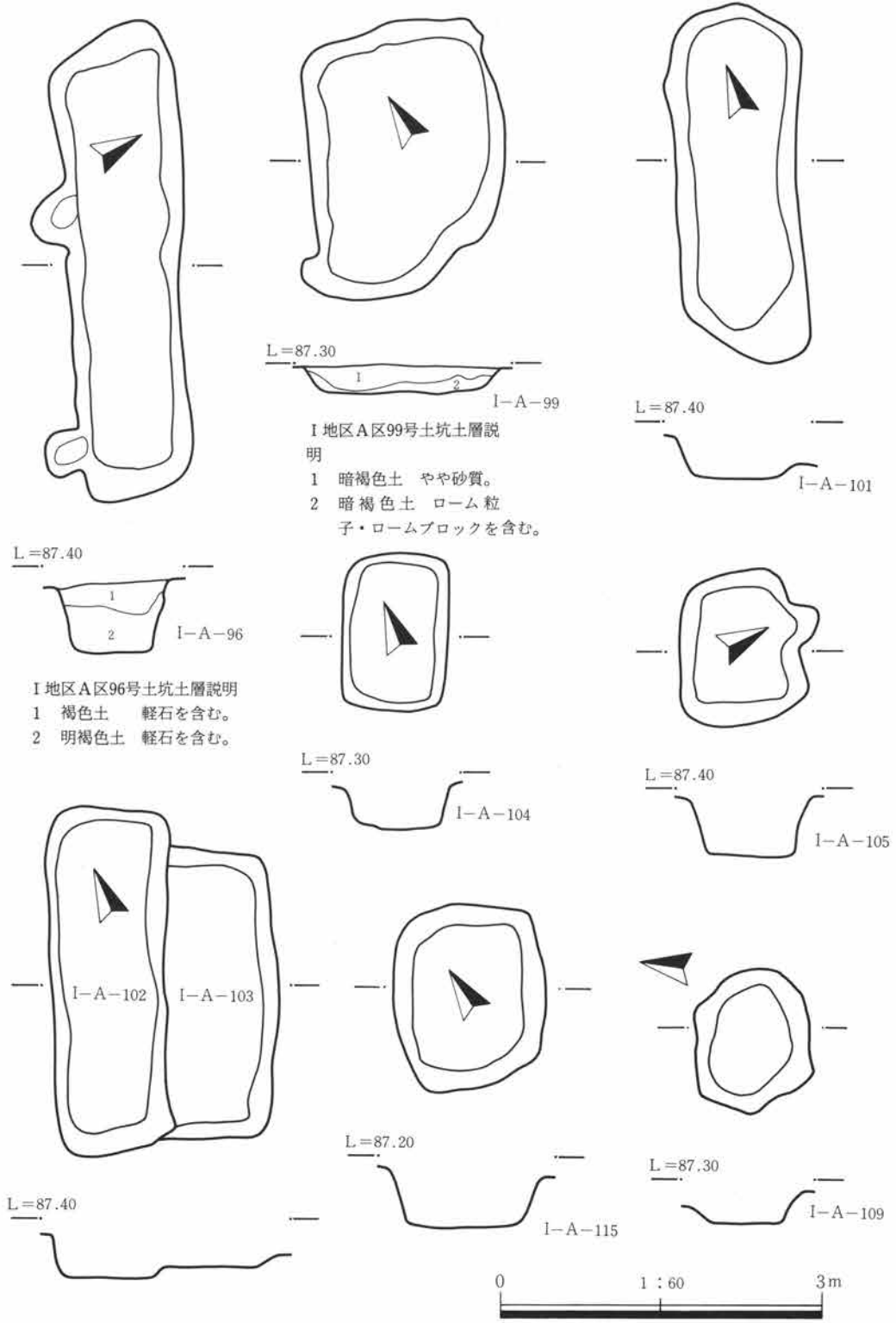


第800図 土坑遺物図(2)

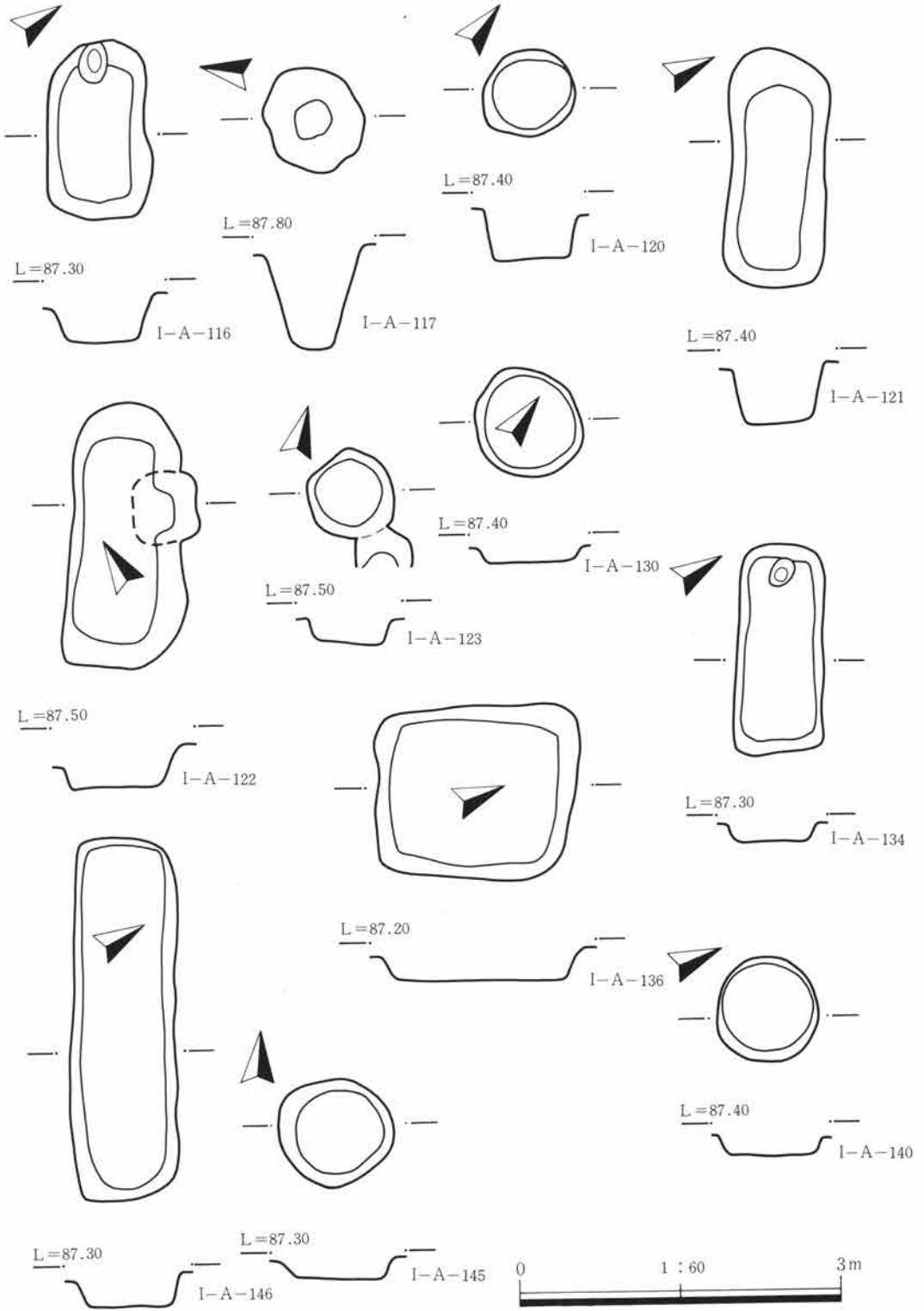


第801図 土坑遺物図(3)

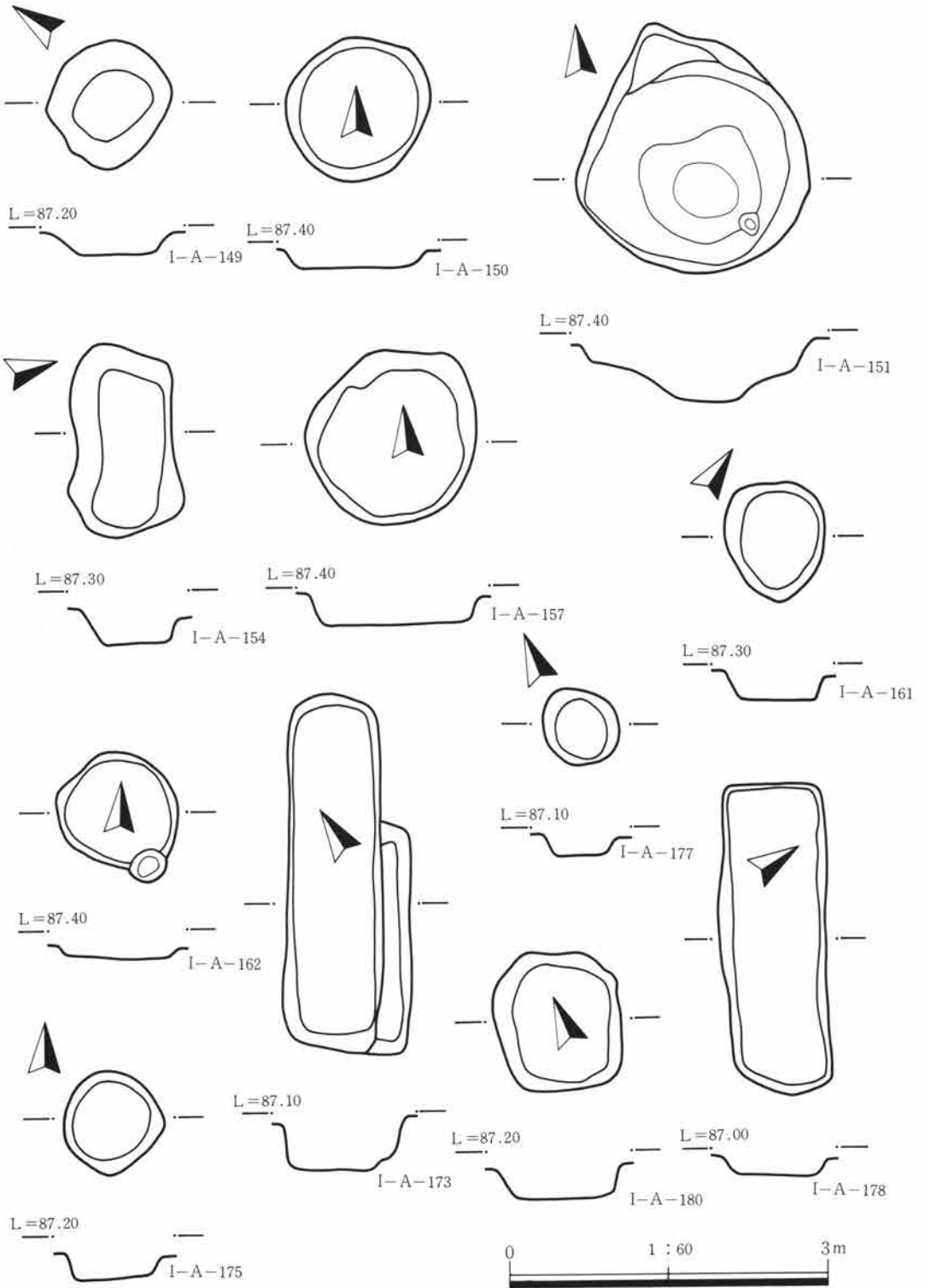
(8) 土 坑



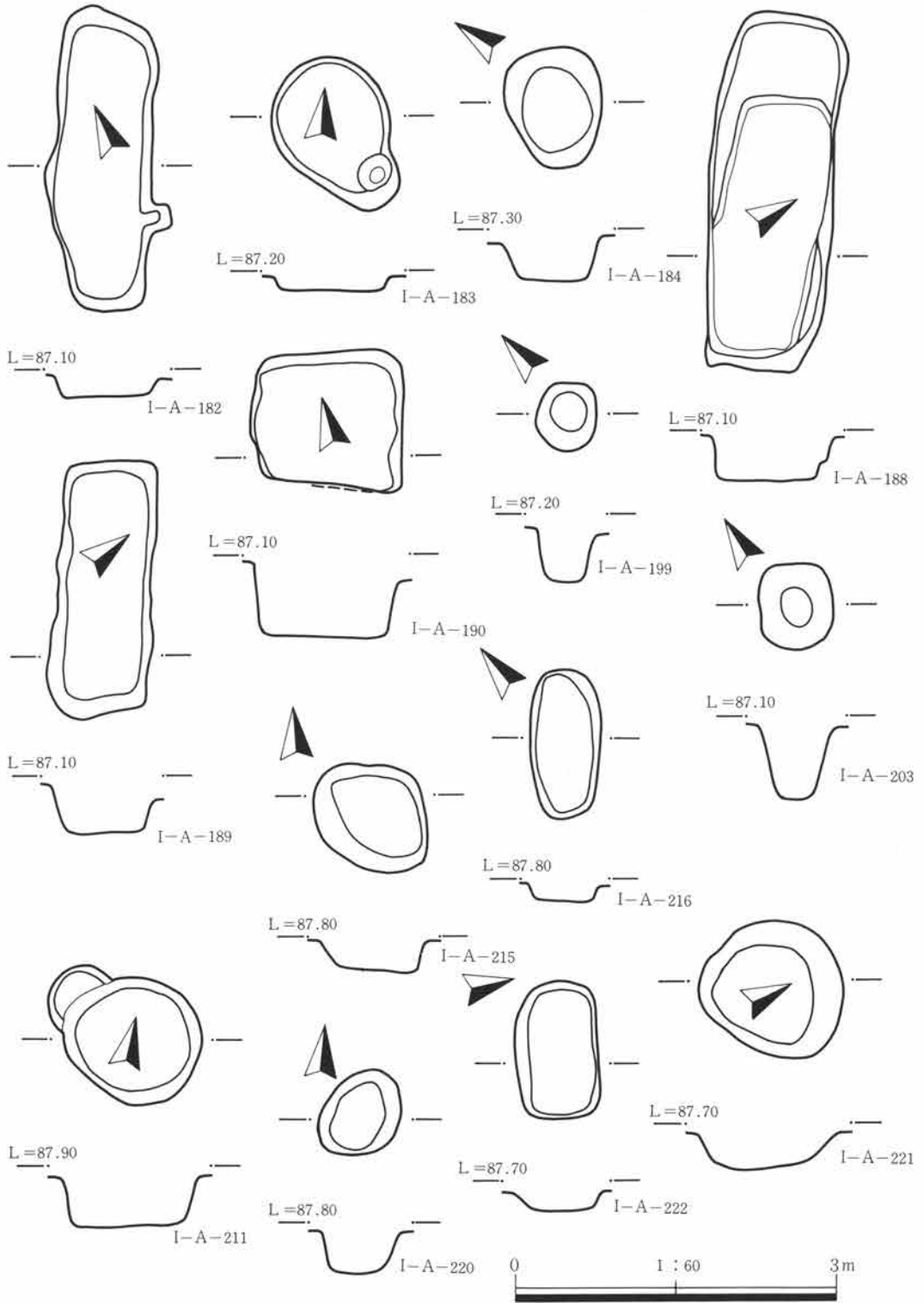
第802図 土坑遺構図(4)



第803図 土坑遺構図(5)

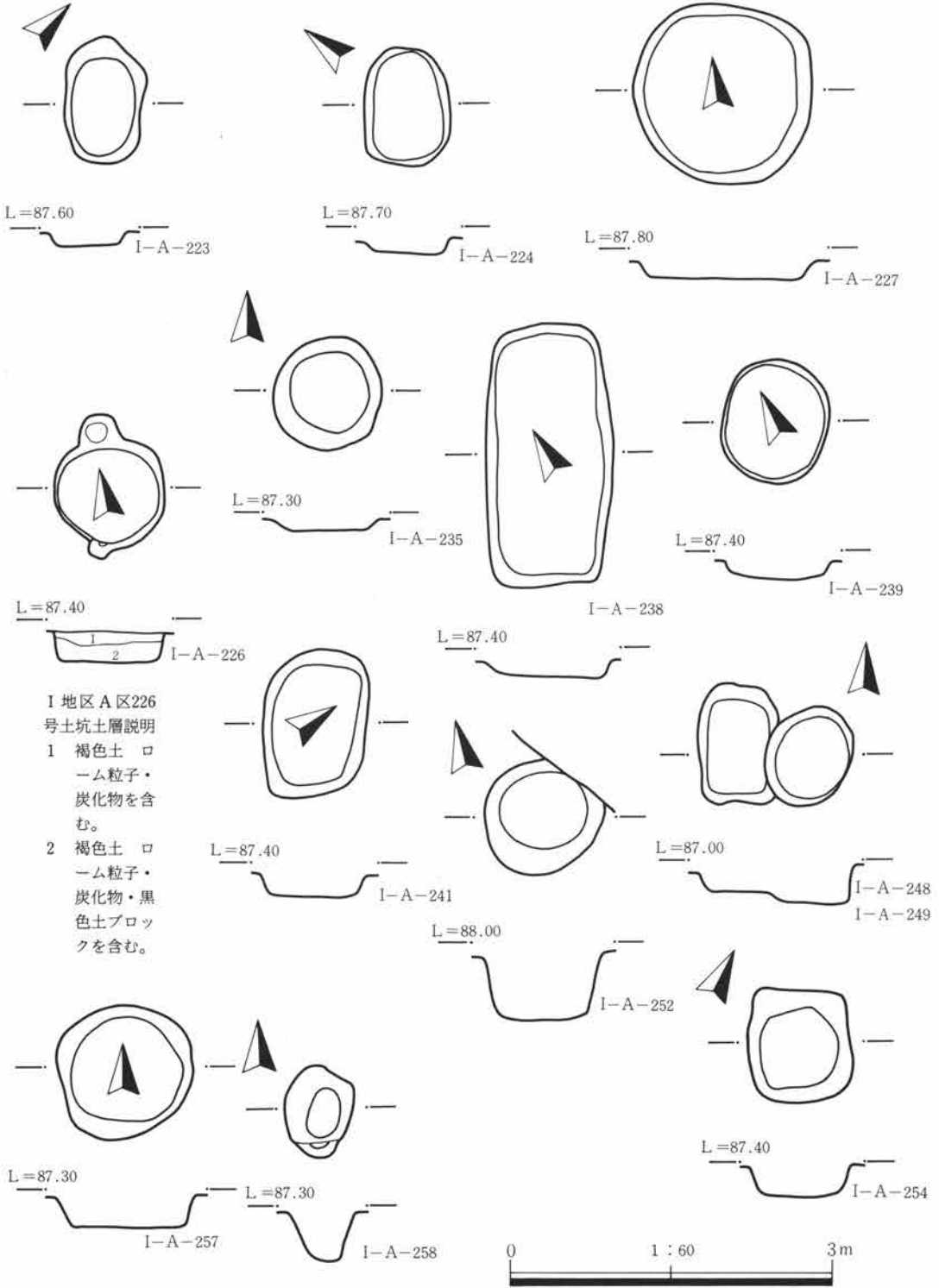


第804图 土坑遺構図(6)

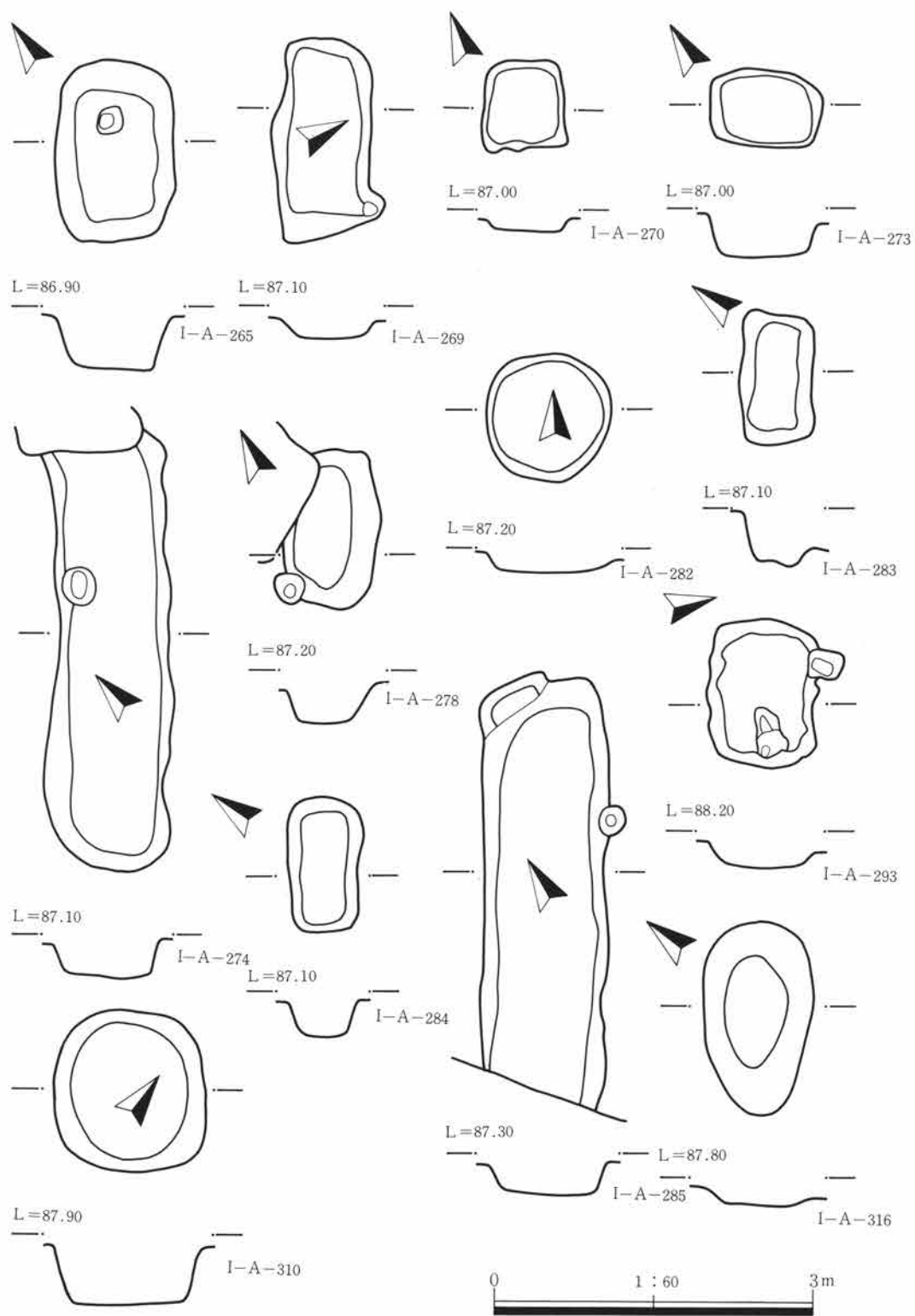


第805図 土坑遺構図(7)

(8) 土 坑



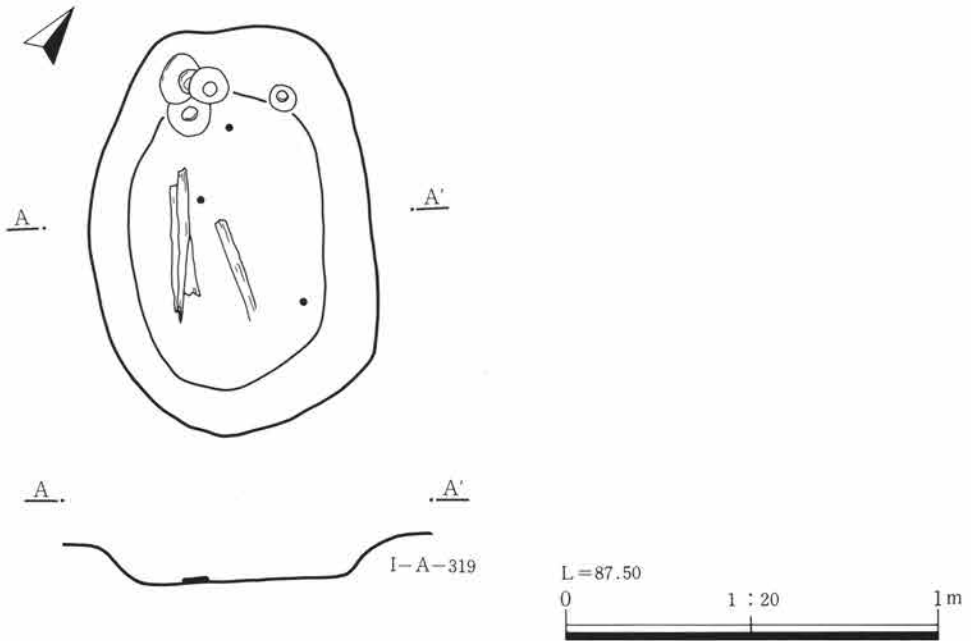
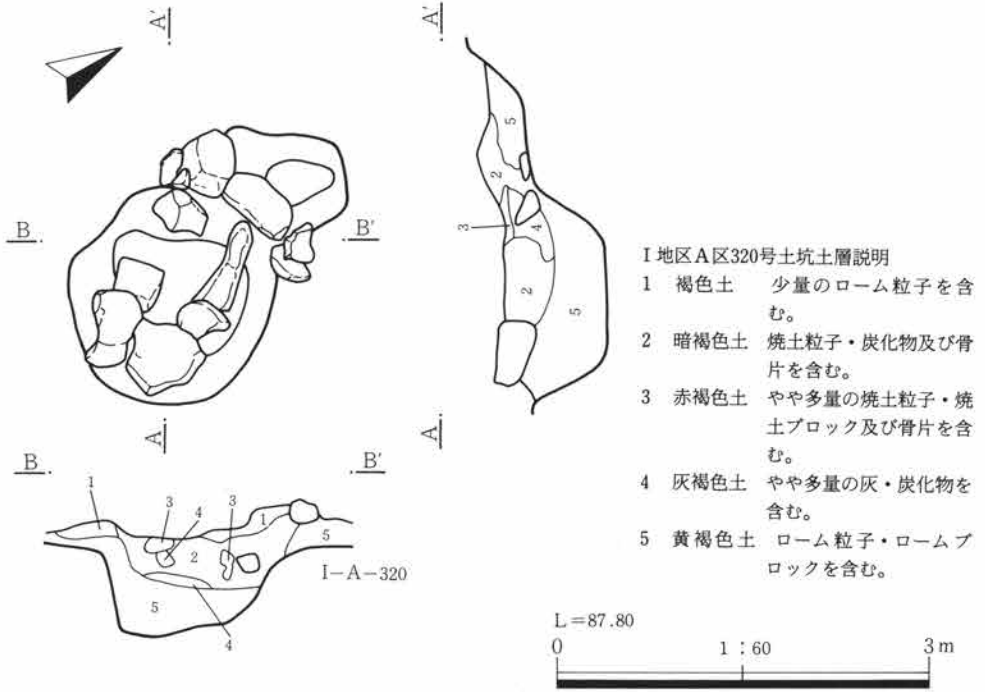
第806図 土坑遺構図(8)



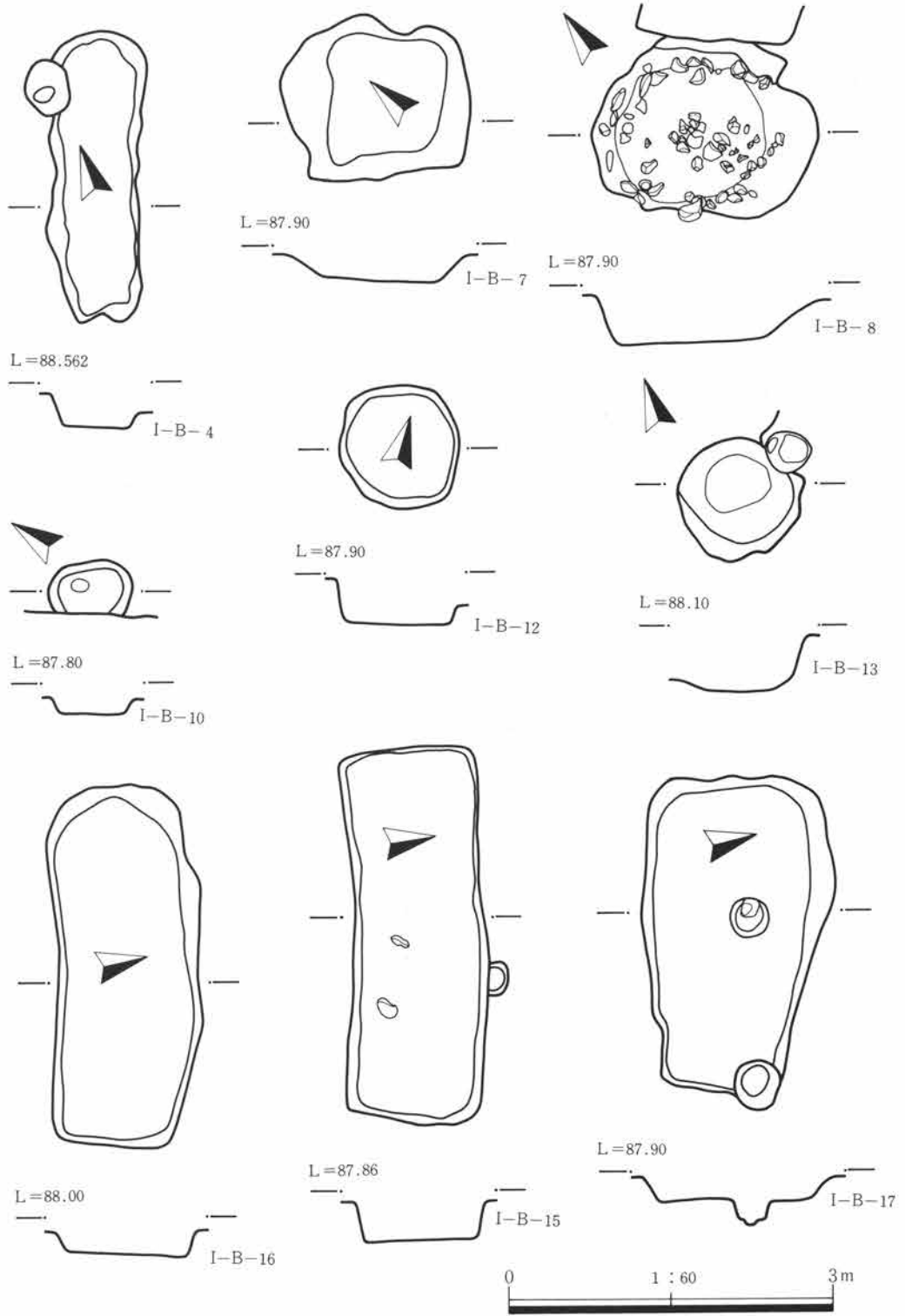
第807図 土坑遺構図(9)



(8) 土 坑

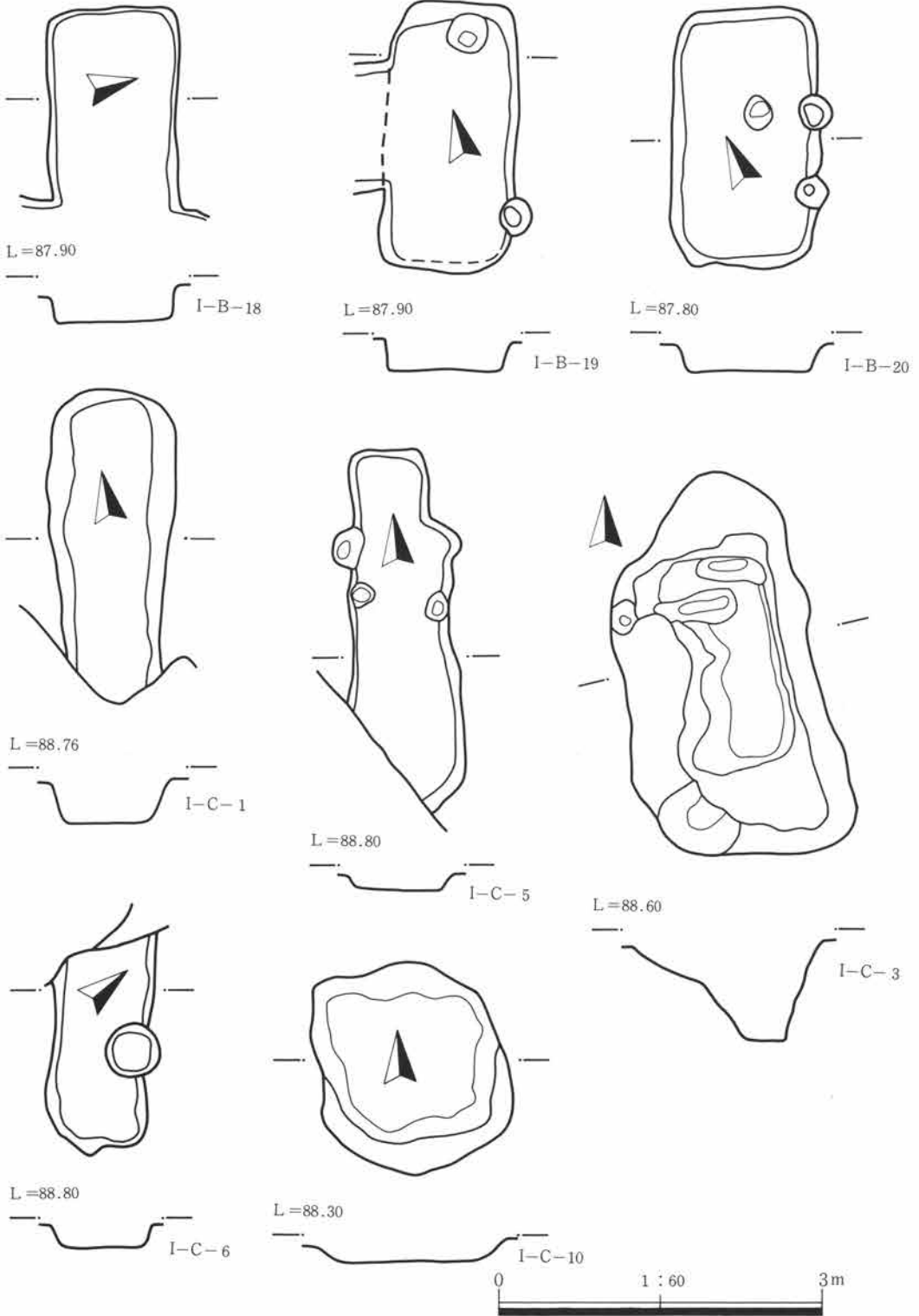


第808図 土坑遺構図(10)

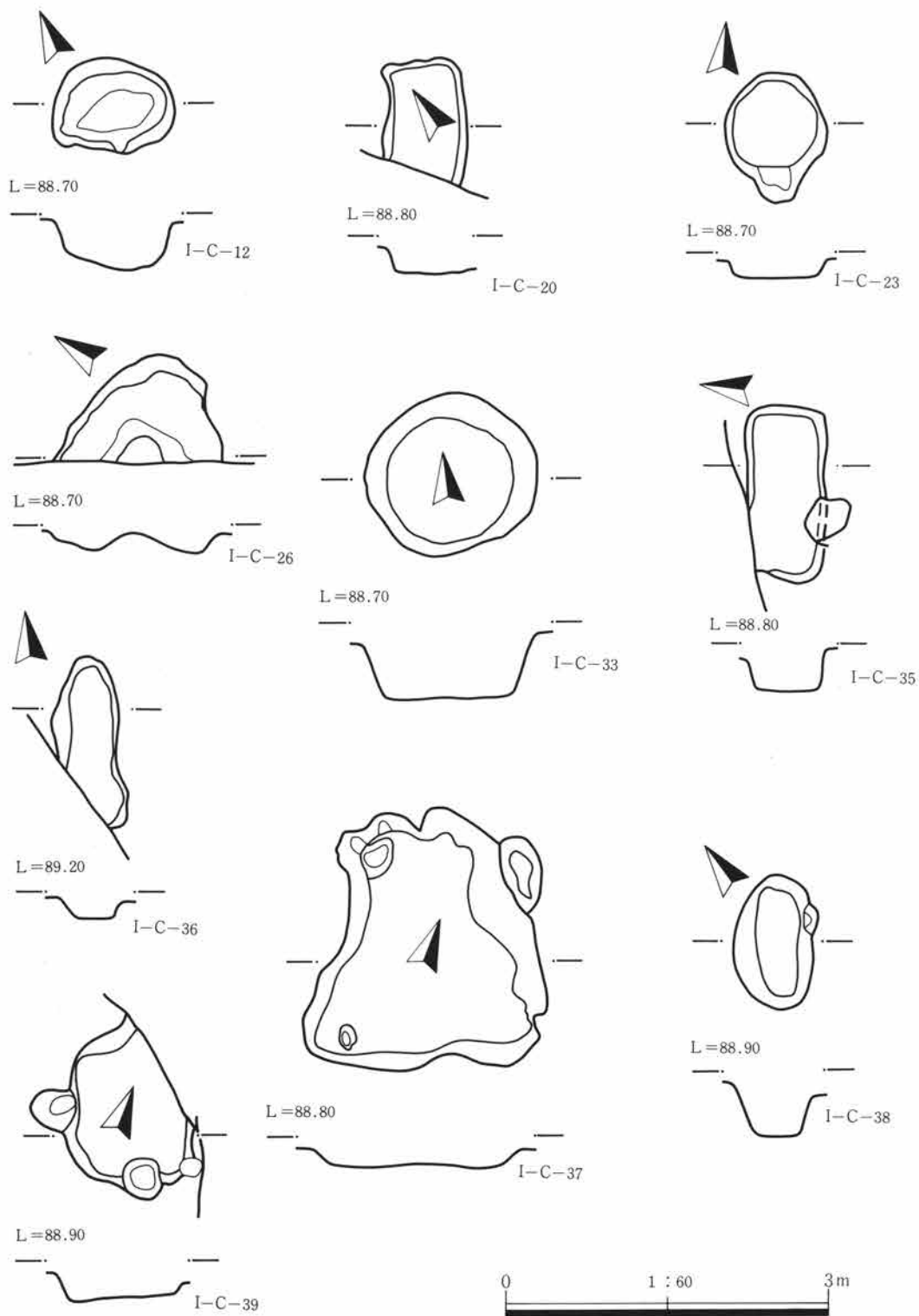


第809図 土坑遺構図(11)

(8) 土 坑

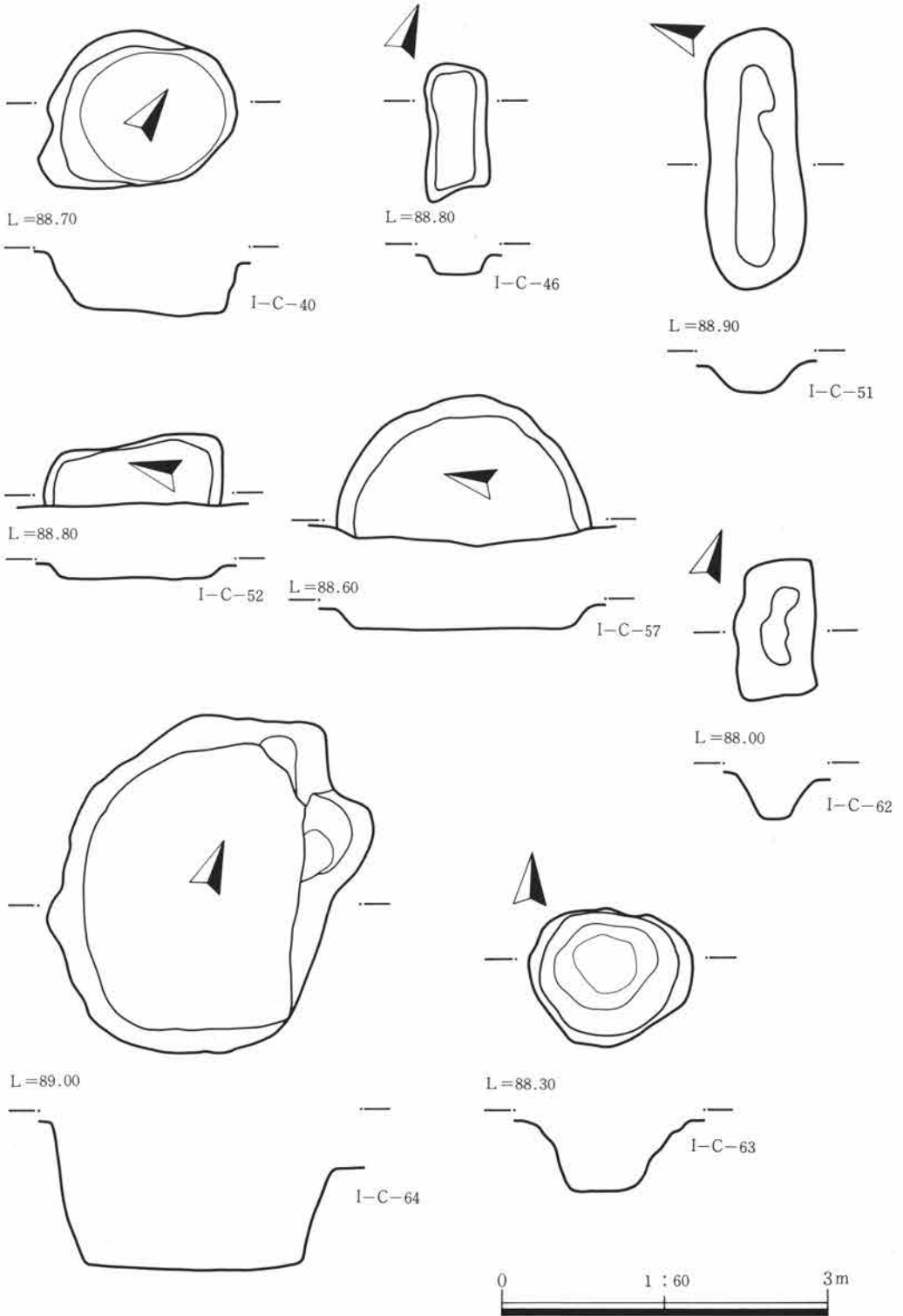


第810图 土坑遺構図(12)

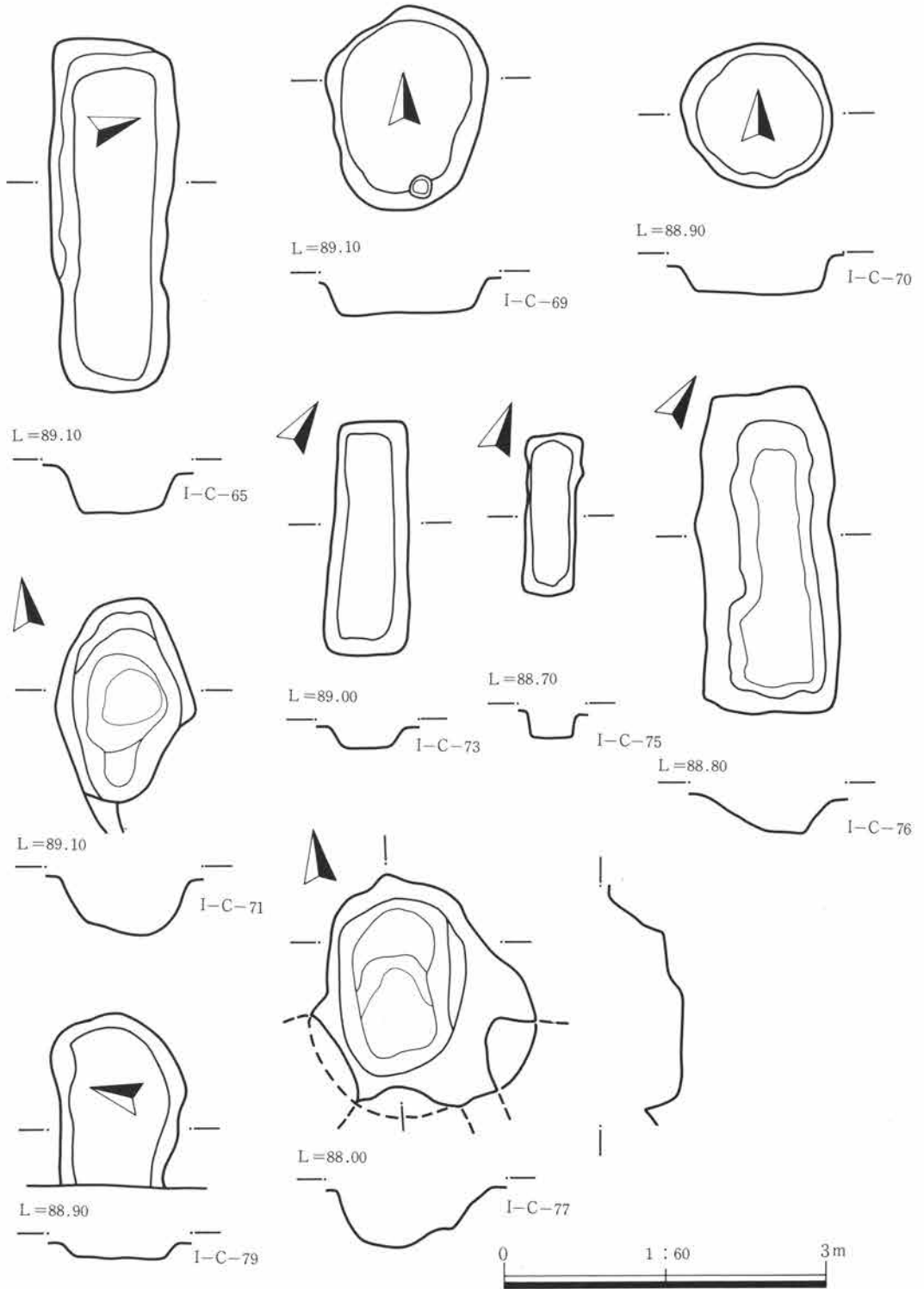


第811図 土坑遺構図 (13)

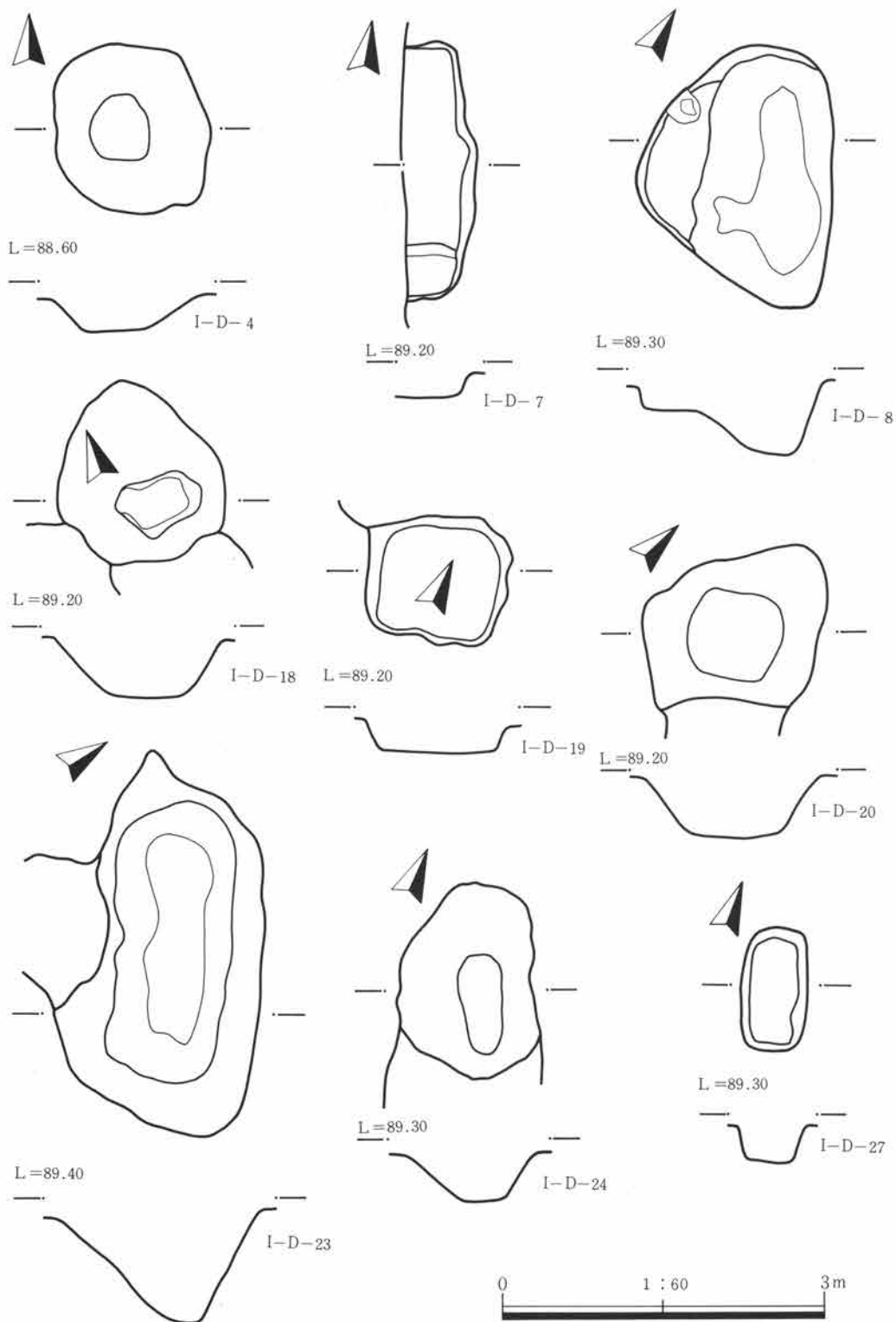
(8) 土 坑



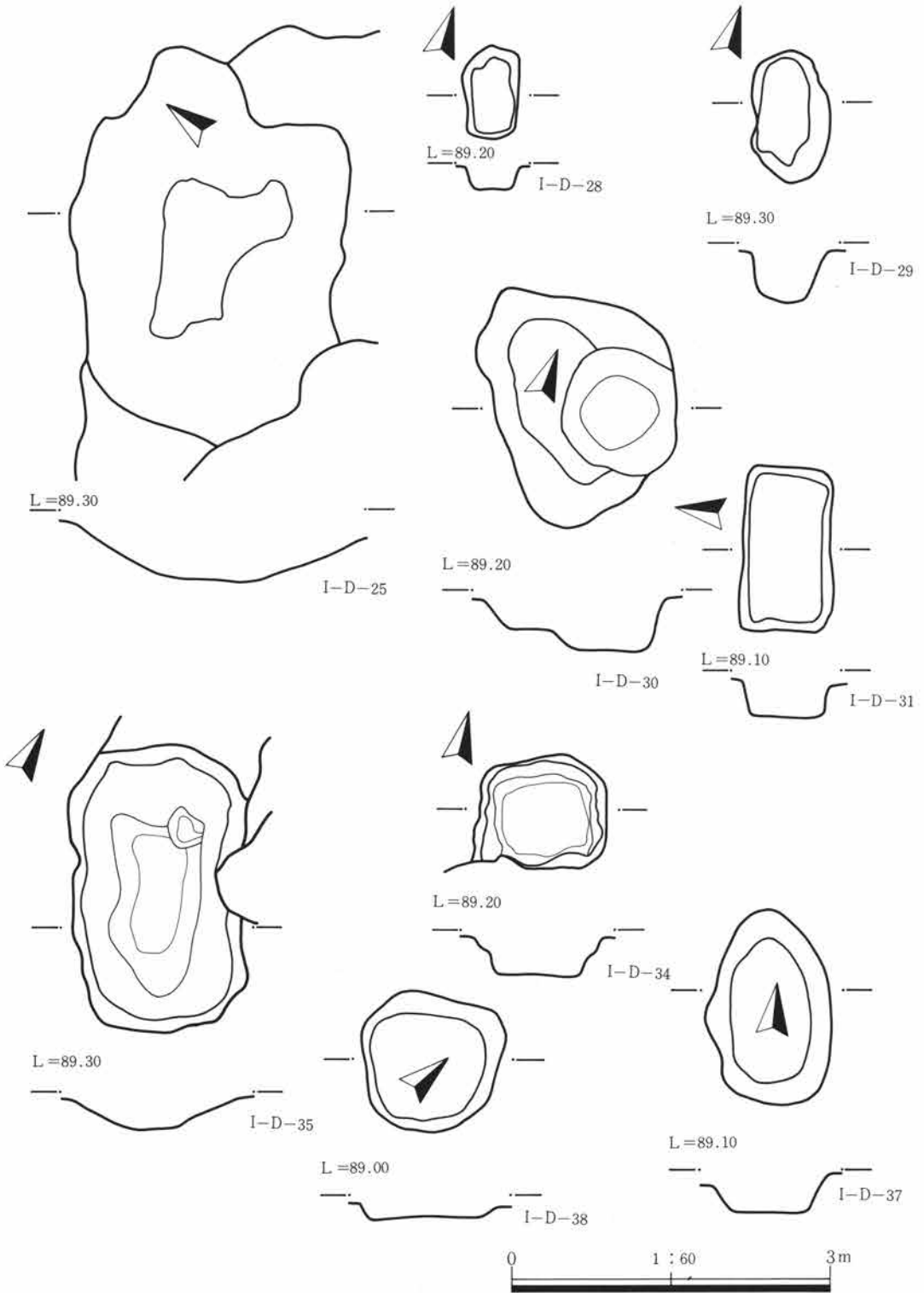
第812図 土坑遺構図 (14)



第813図 土坑遺構図(15)



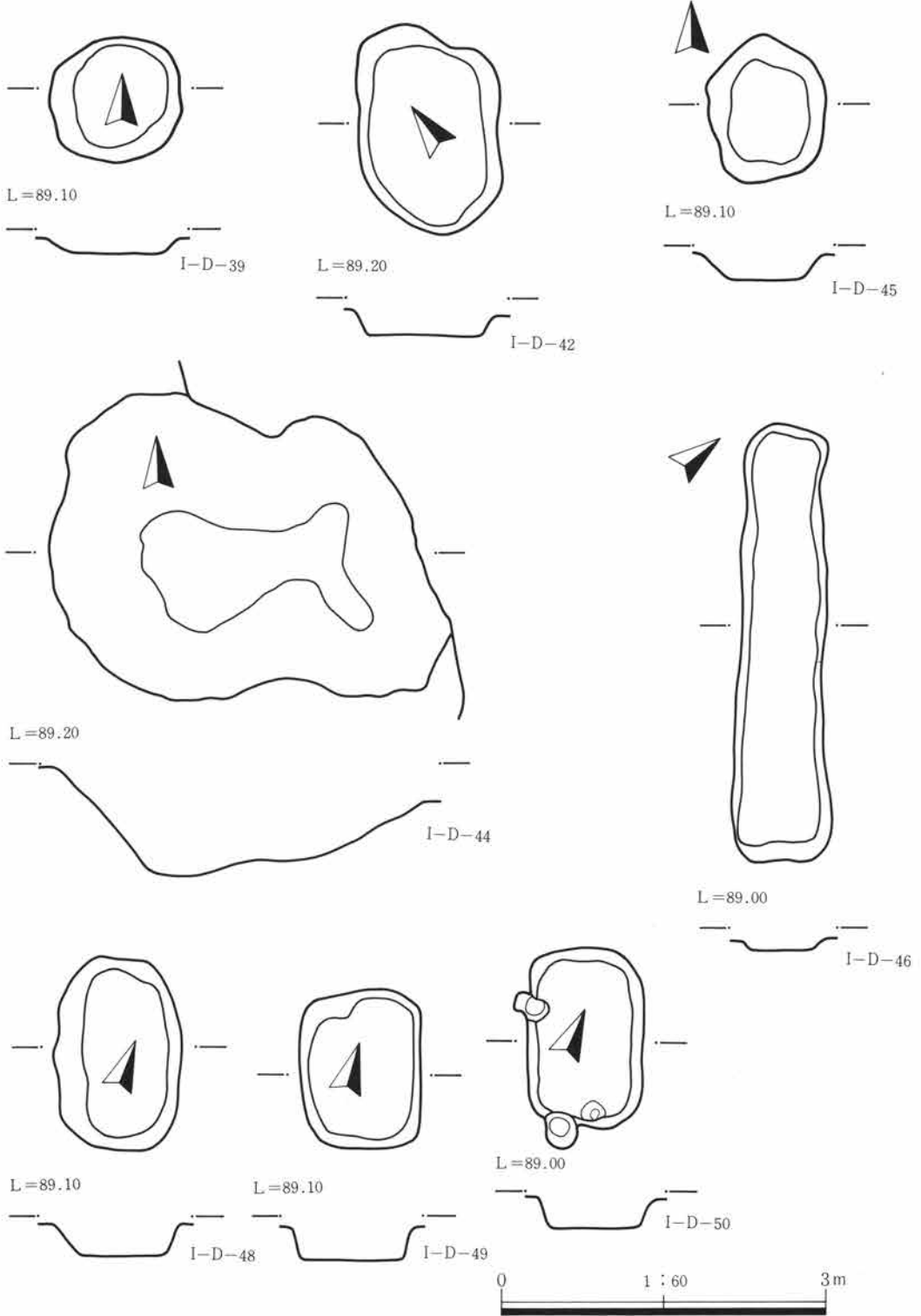
第814图 土坑遺構図 (16)



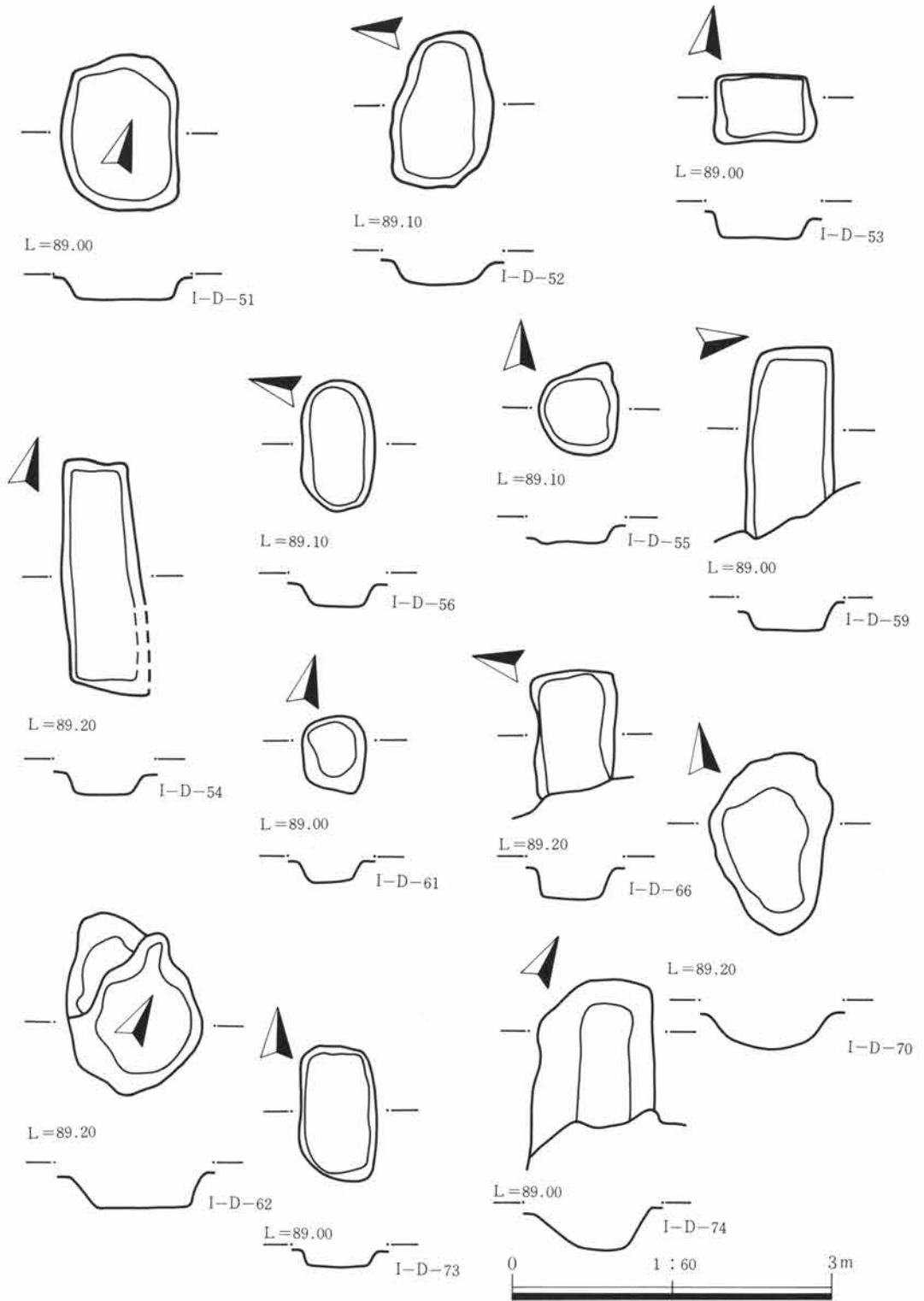
第815図 土坑遺構図 (17)



(8) 土 坑

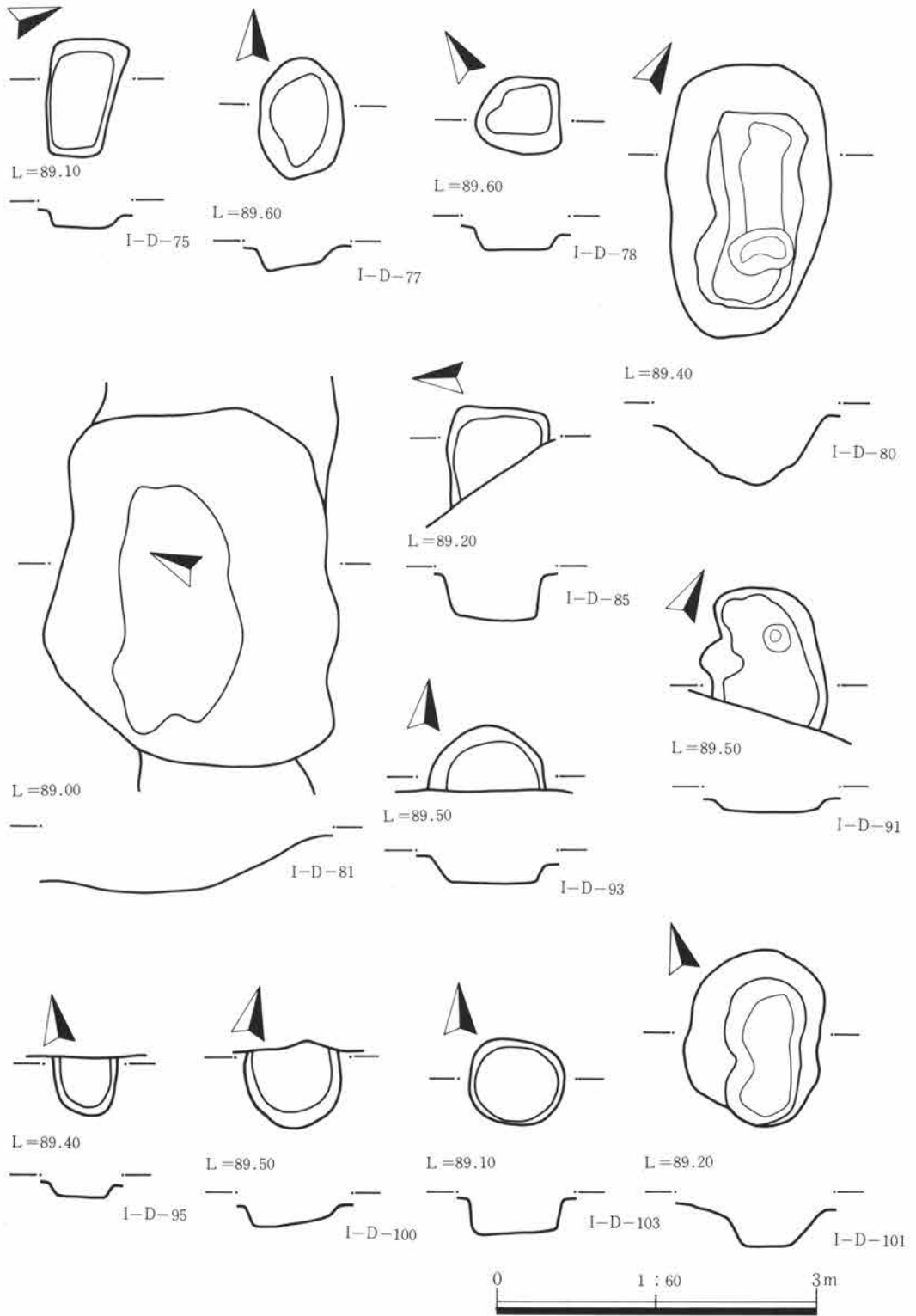


第816图 土坑遺構図(18)

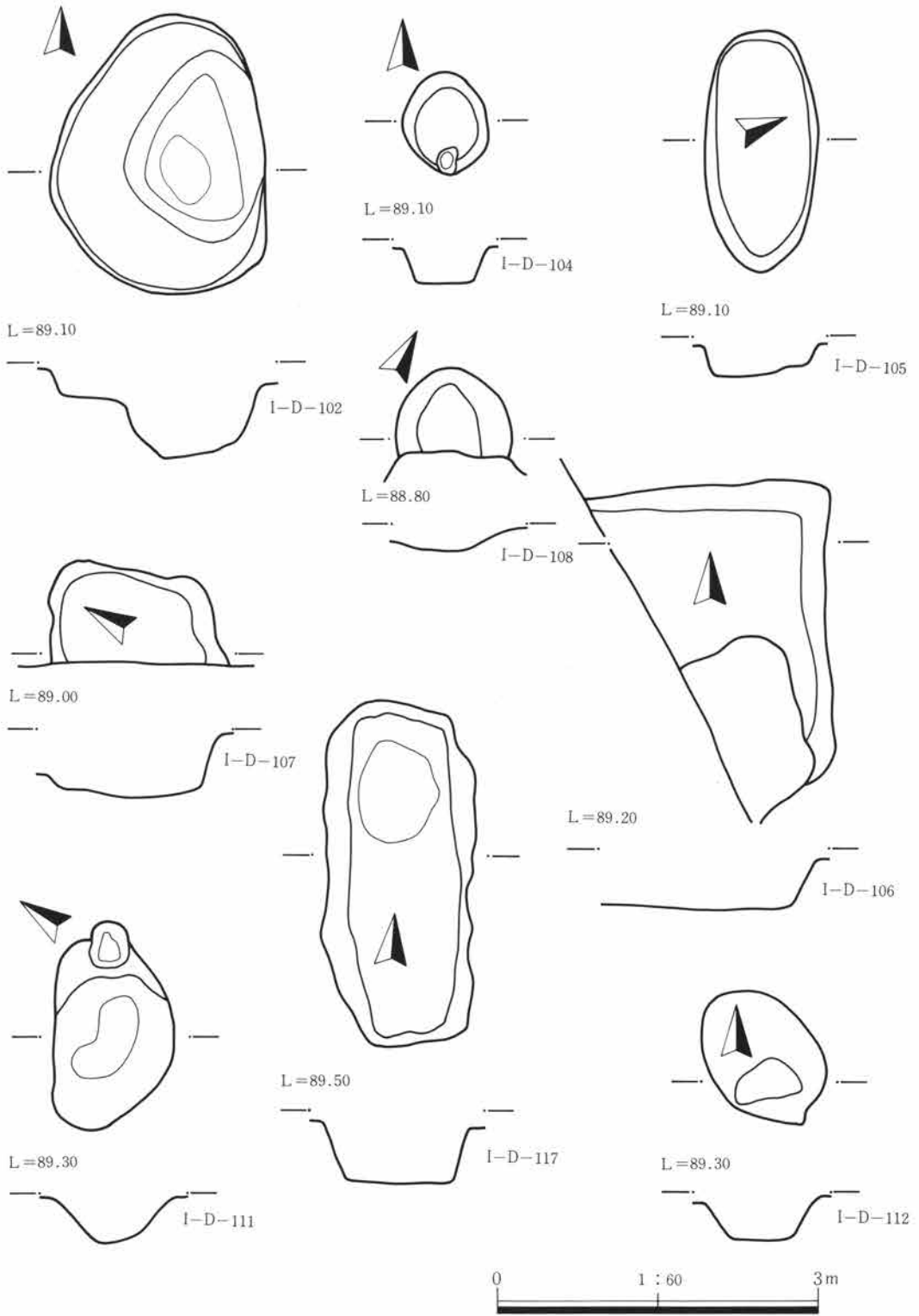


第817図 土坑遺構図 (19)

(8) 土 坑

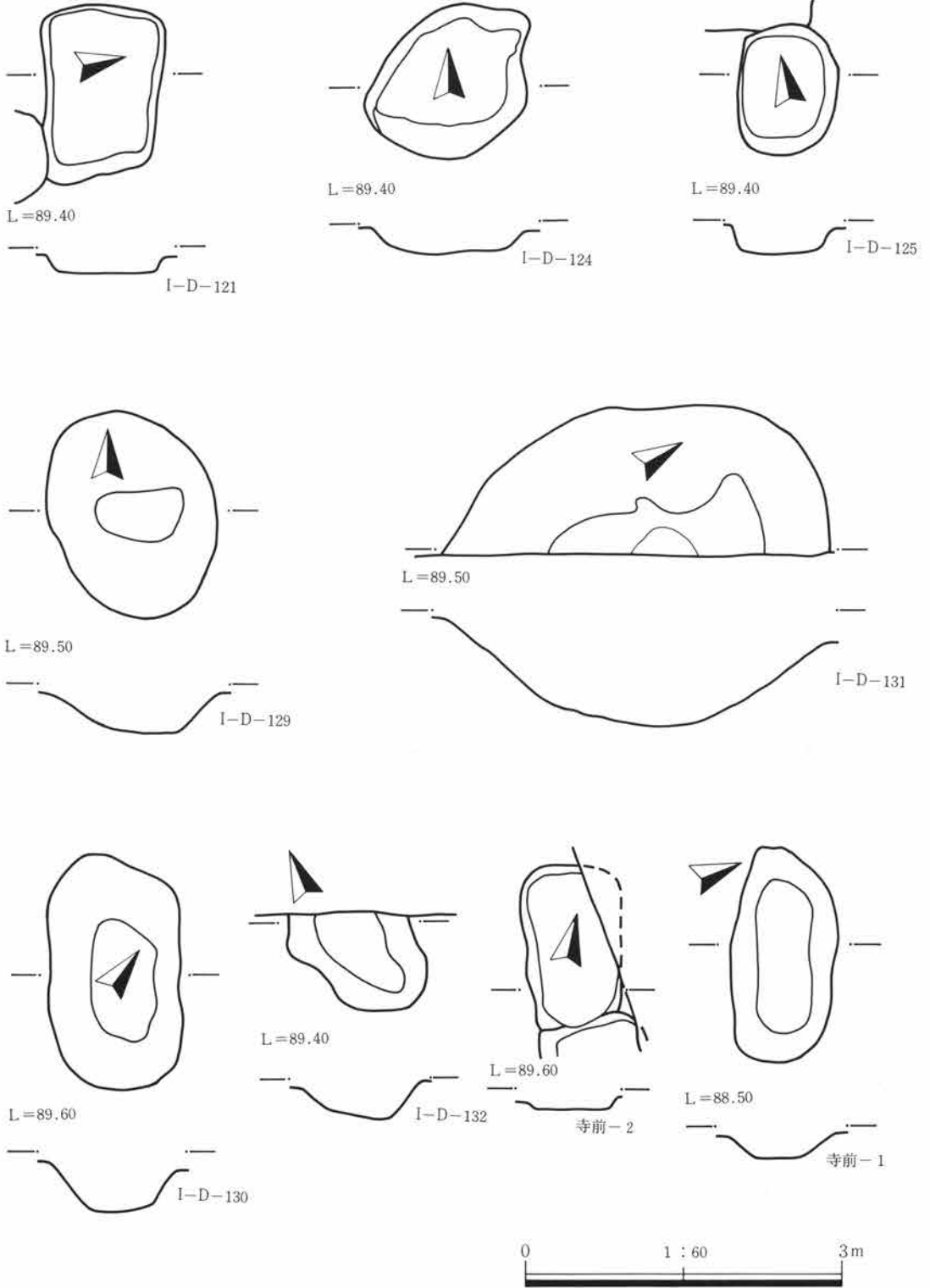


第818图 土坑遺構図(20)



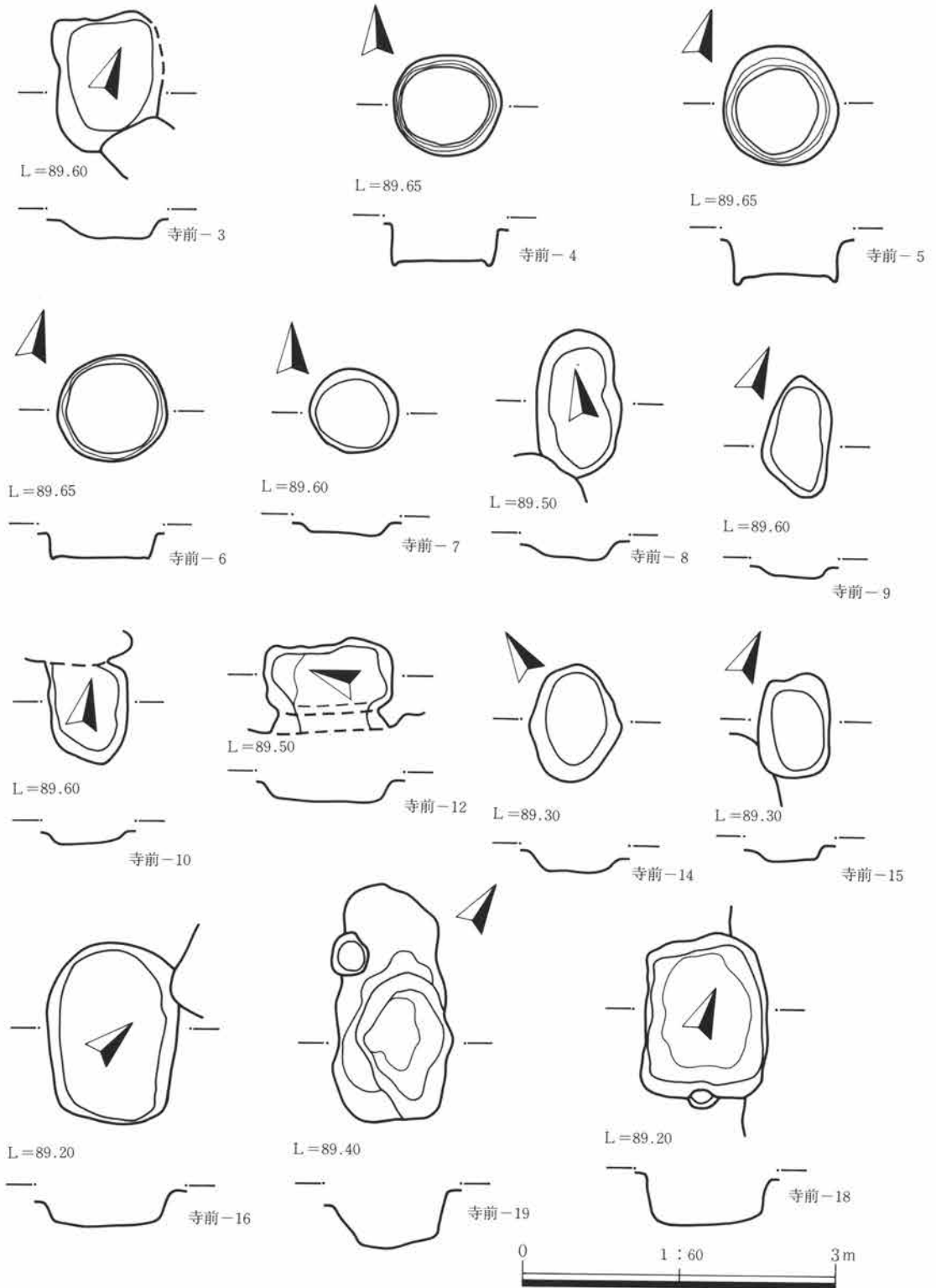
第819図 土坑遺構図 (21)

(8) 土坑



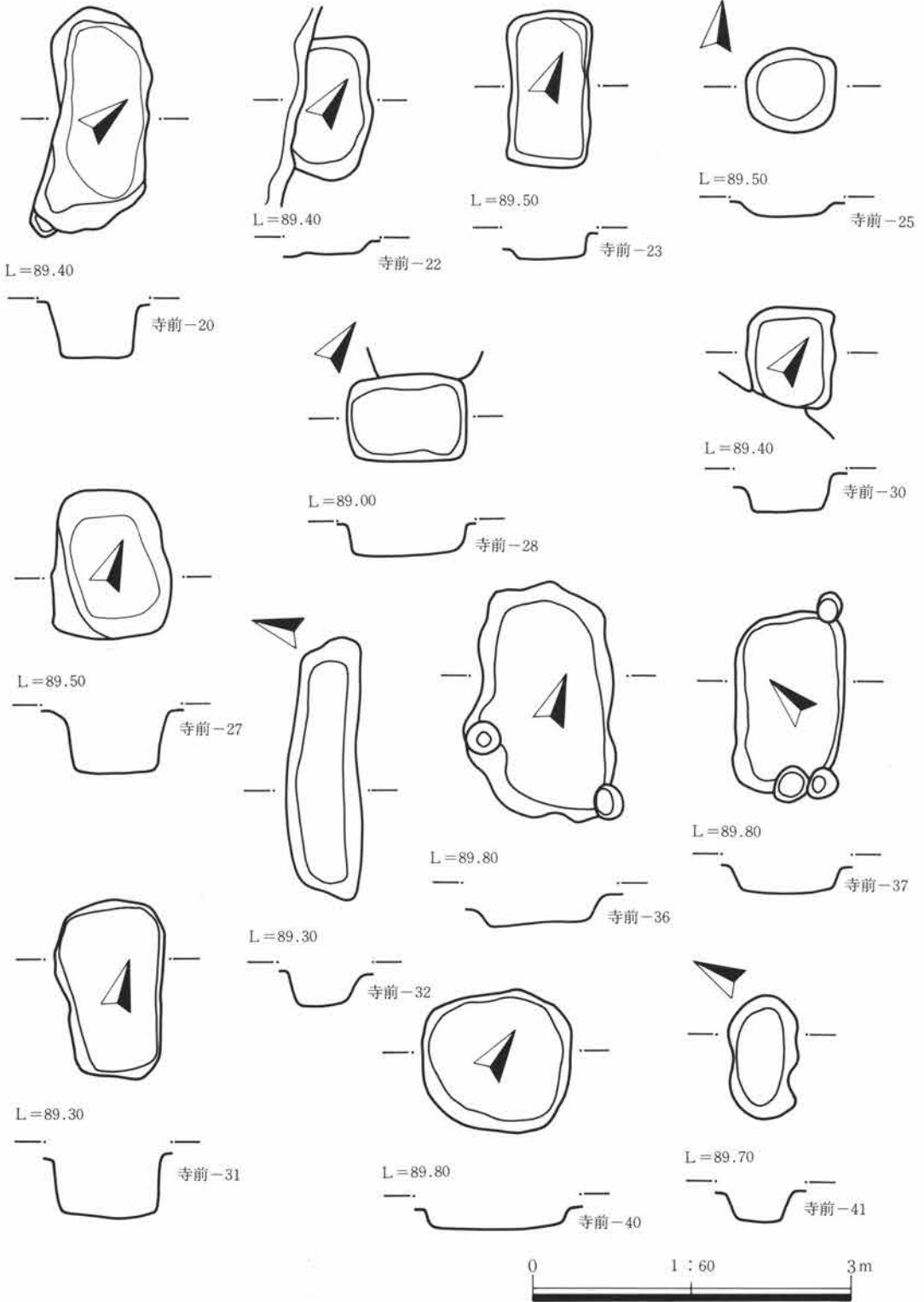
第820图 土坑遺構図(22)

第6章 中世・近世の遺構と遺物



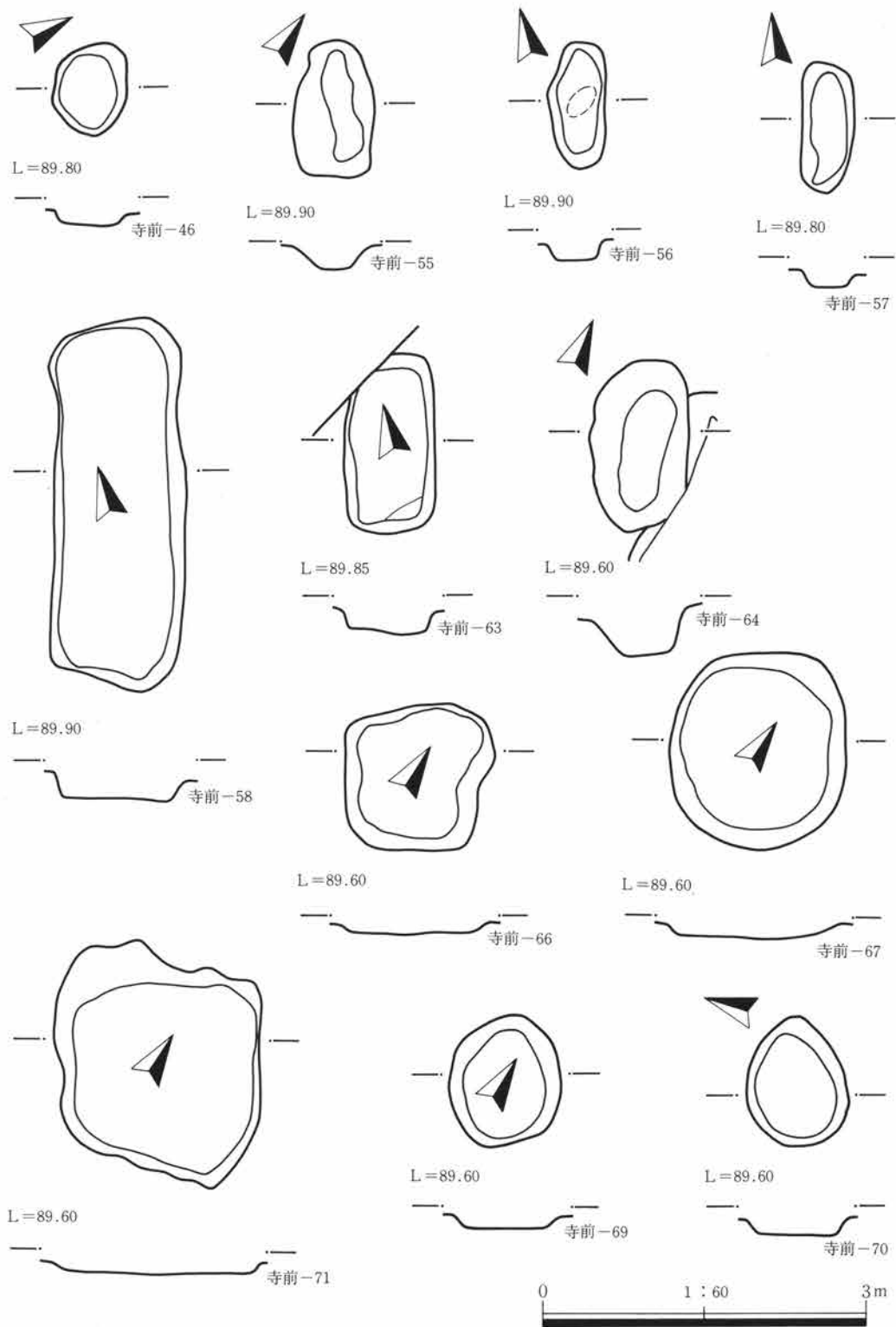
第821図 土坑遺構図 (23)

(8) 土 坑



第822図 土坑遺構図 (24)

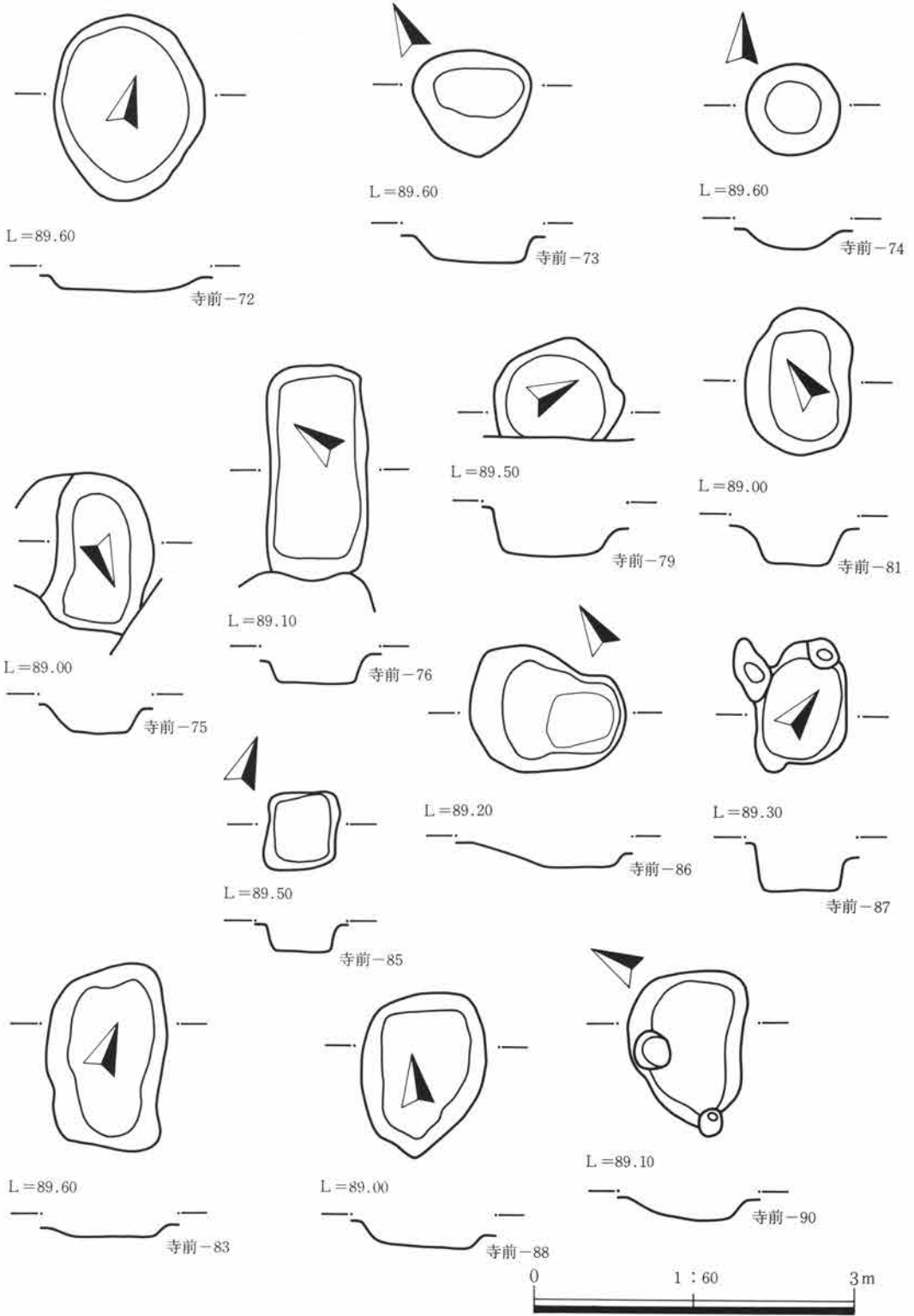
第6章 中世・近世の遺構と遺物



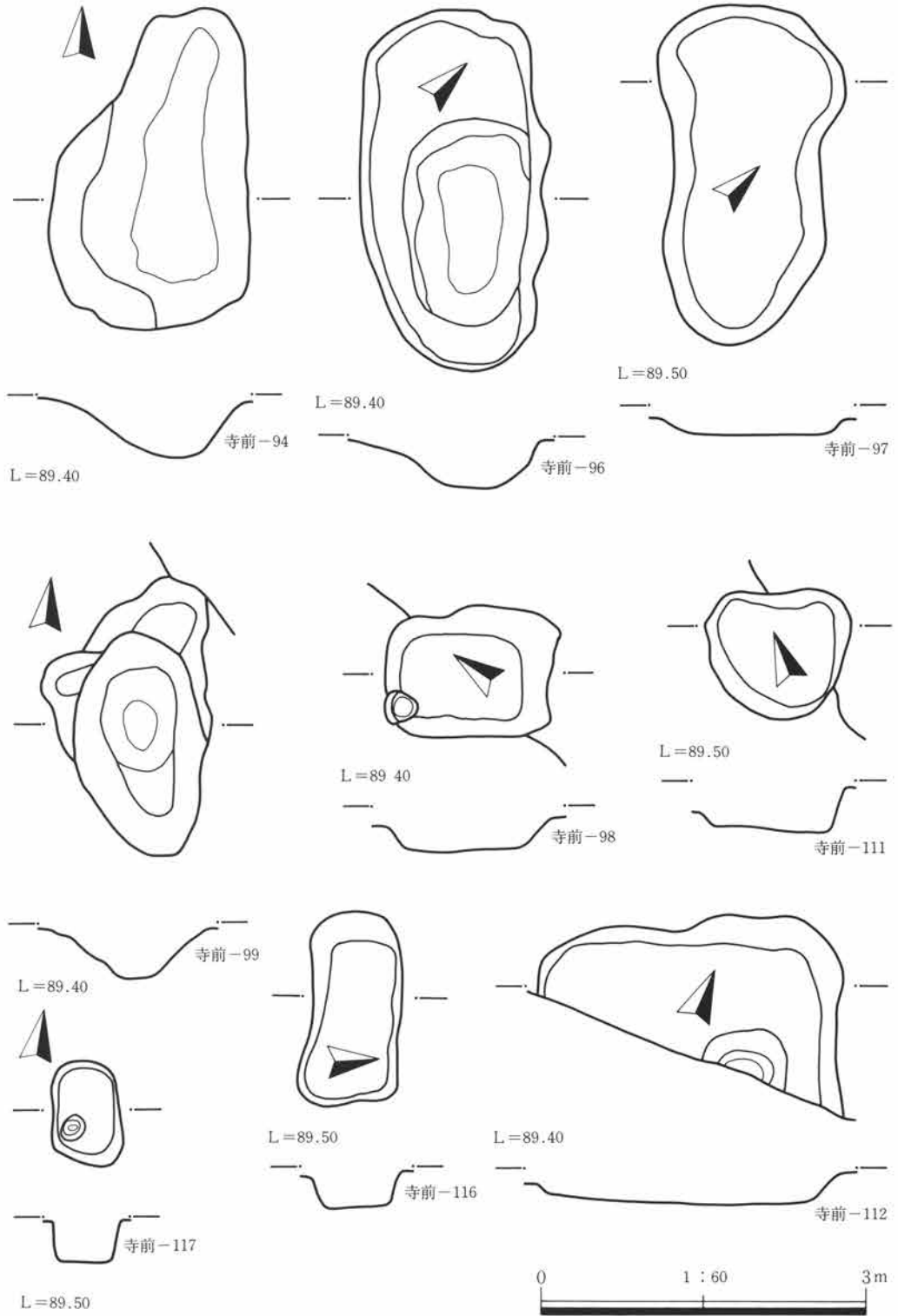
第823図 土坑遺構図 (25)



(8) 土 坑

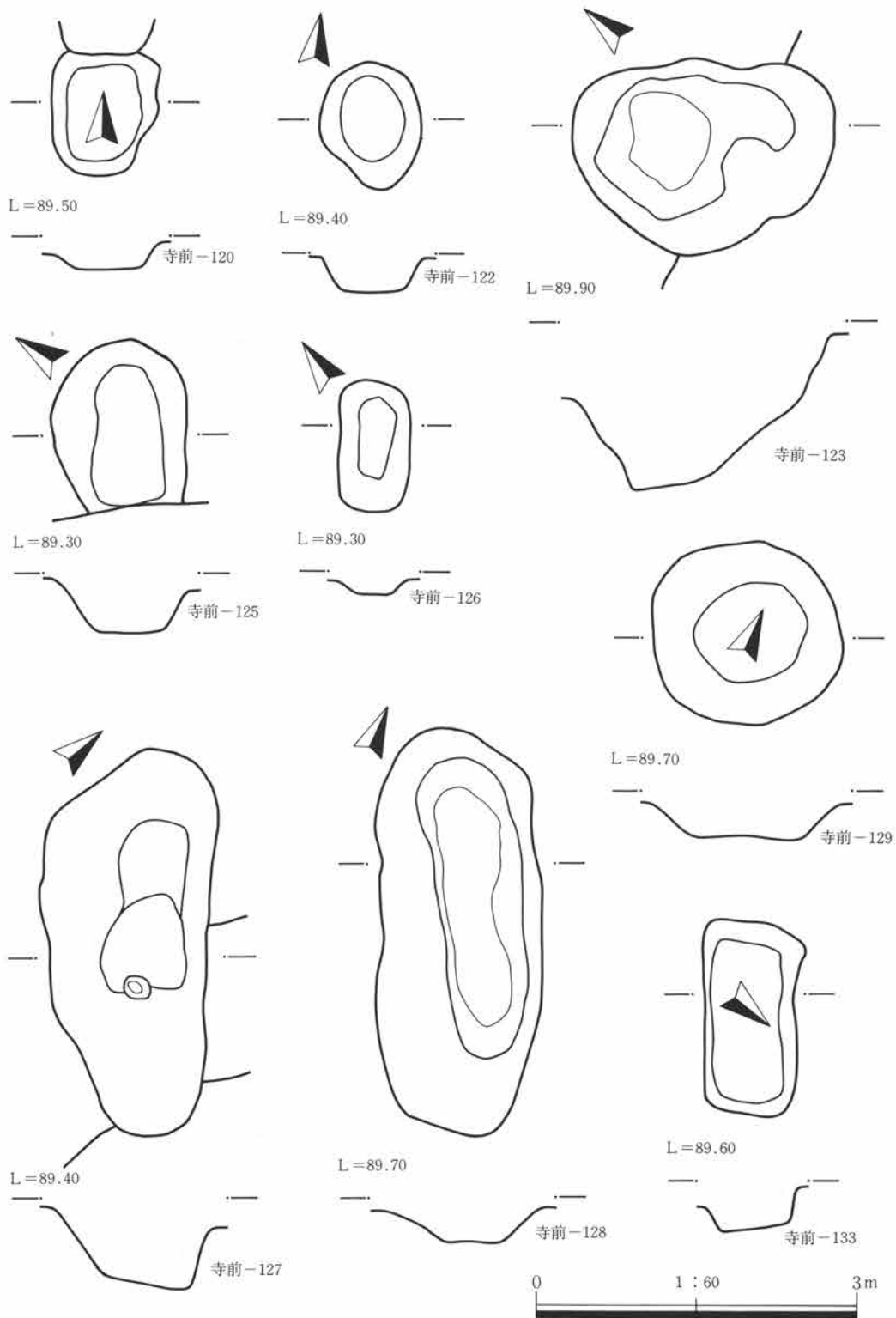


第824図 土坑遺構図 (26)



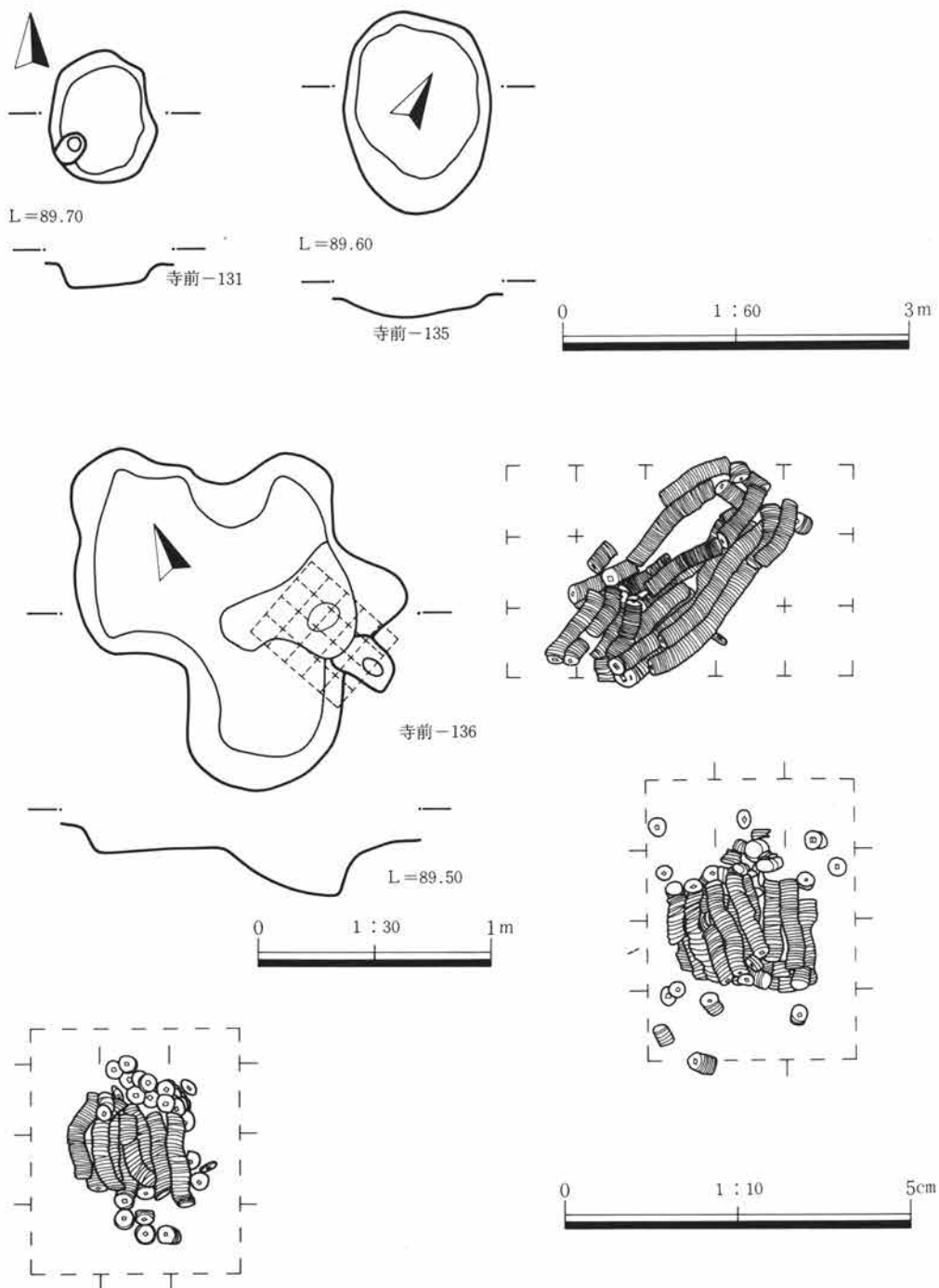
第825図 土坑遺構図 (27)

(8) 土 坑



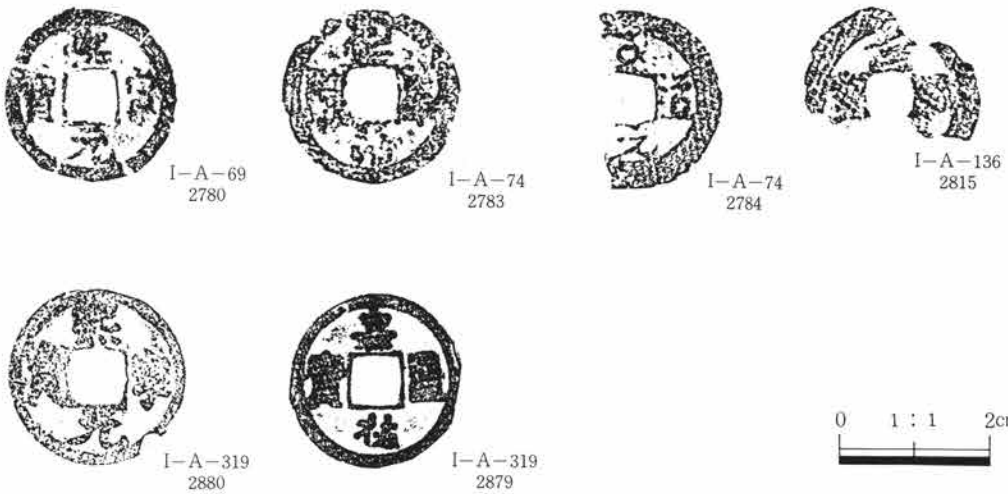
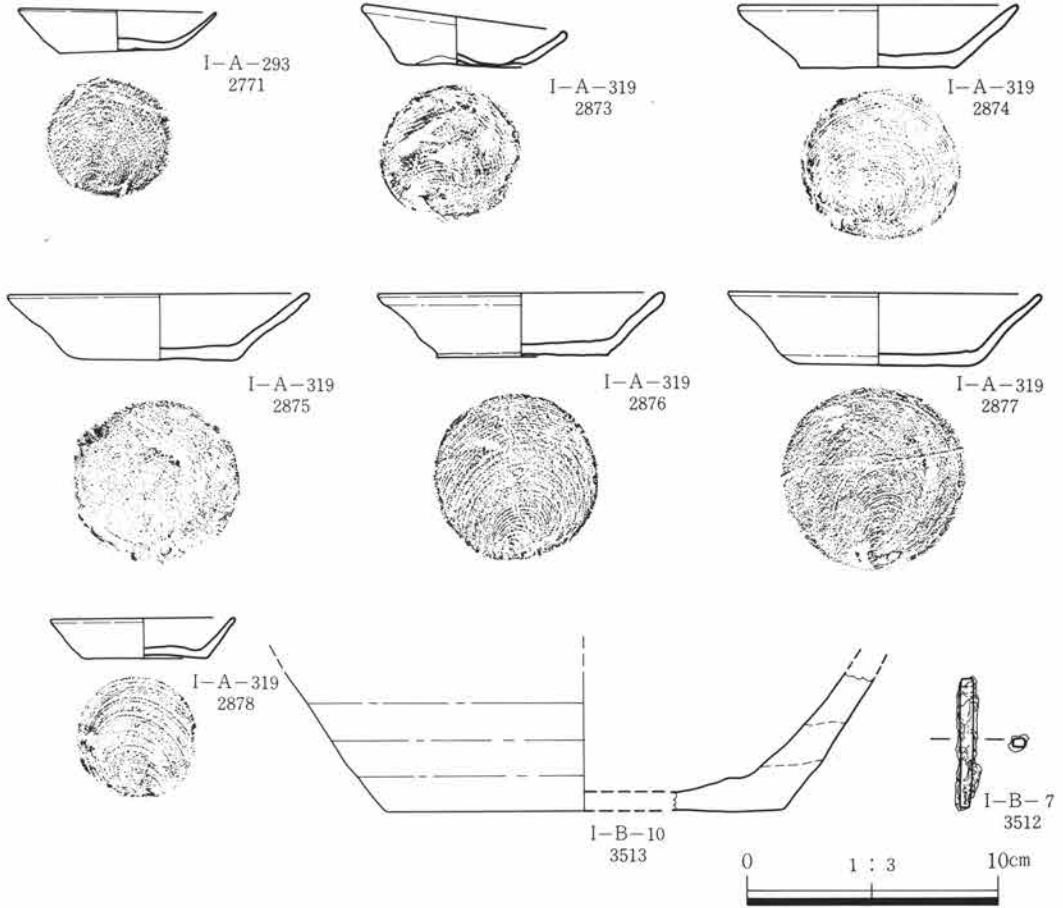
第826图 土坑遺構図 (28)

第6章 中世・近世の遺構と遺物



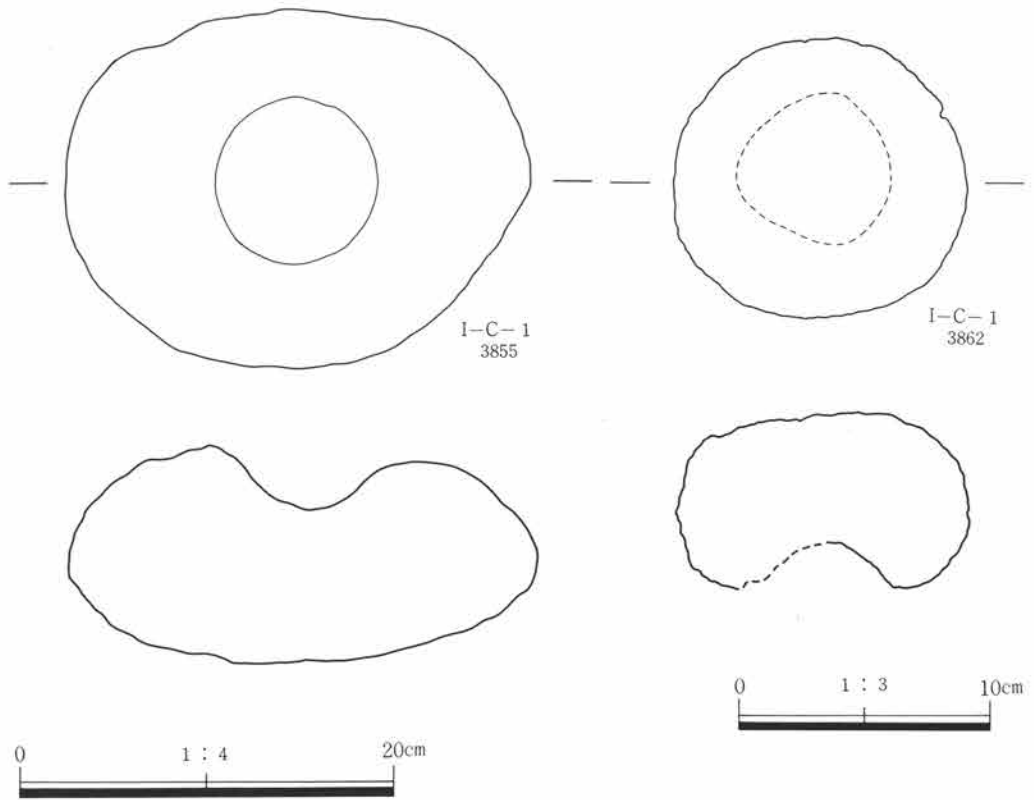
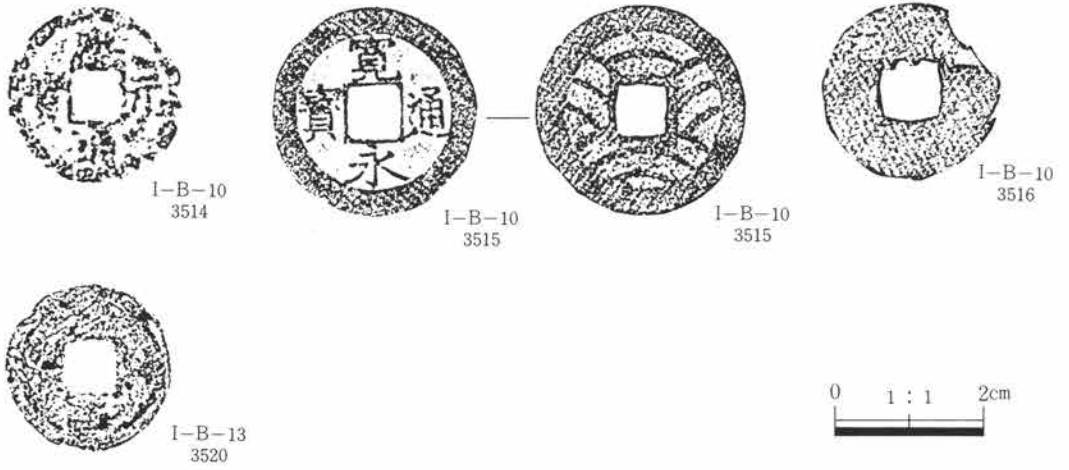
第827図 土坑遺構・遺物図(29)

(8) 土坑



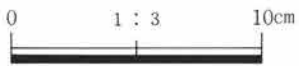
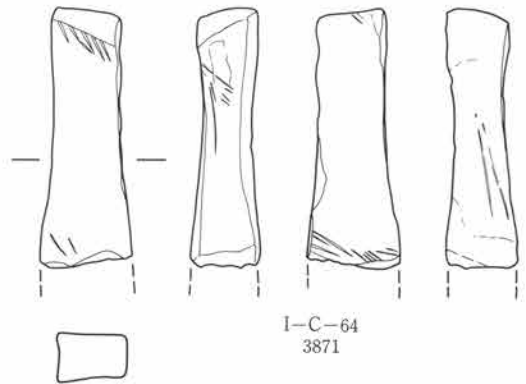
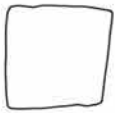
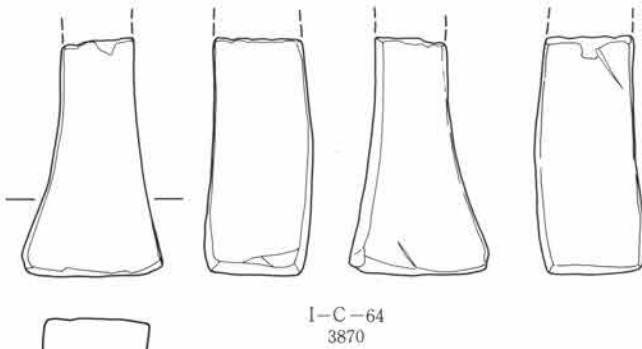
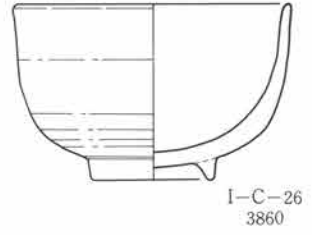
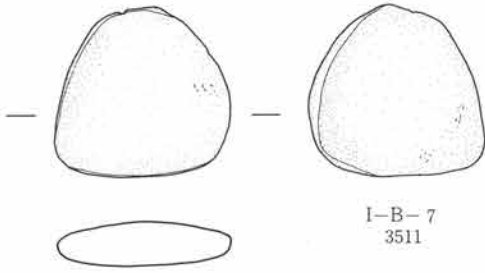
第828图 土坑遺物图(1)

第6章 中世・近世の遺構と遺物

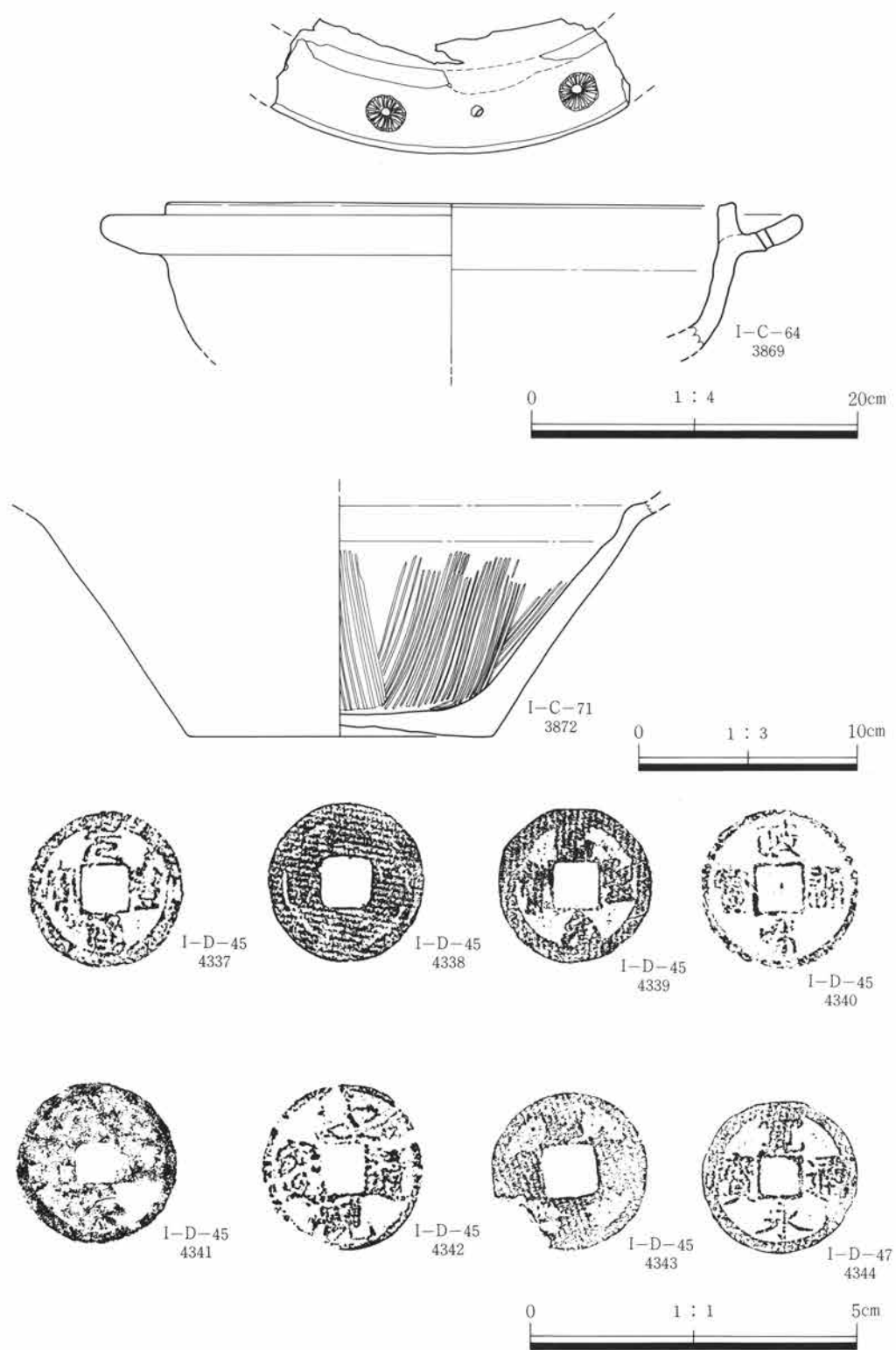


第829図 土坑遺物図(2)

(8) 土坑

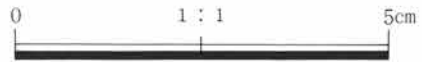
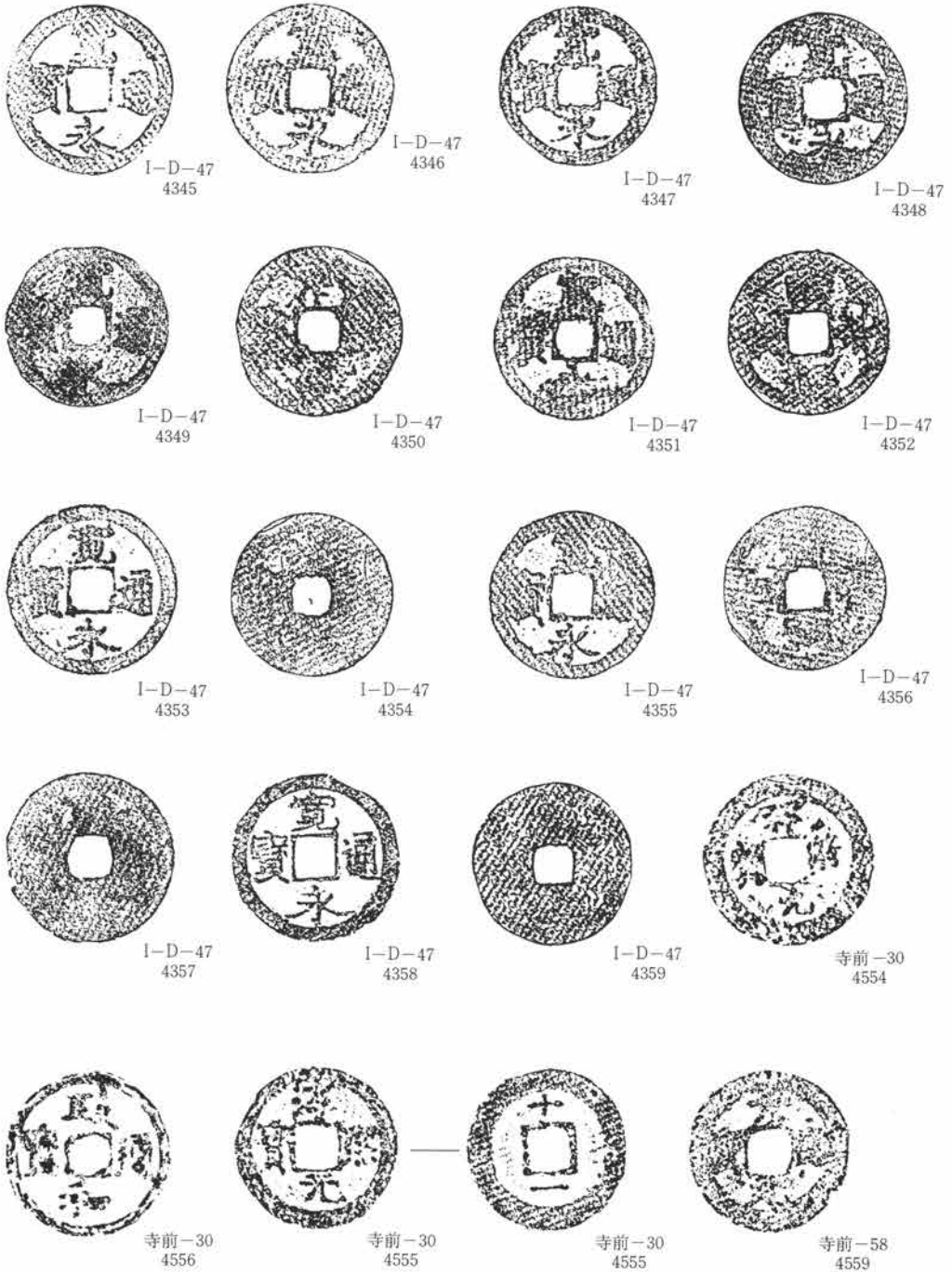


第830图 土坑遗物图(3)

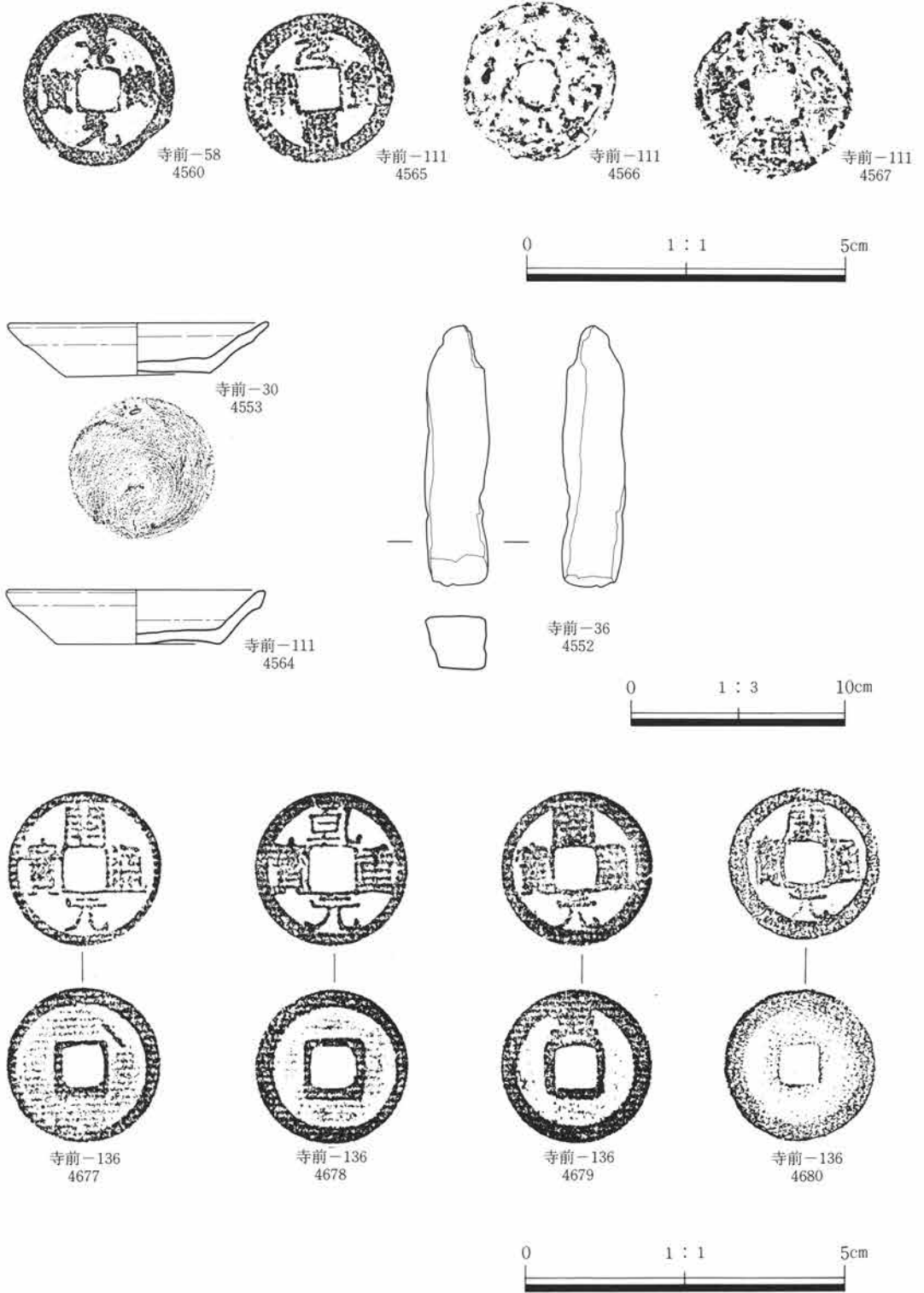


第831図 土坑遺物図(4)

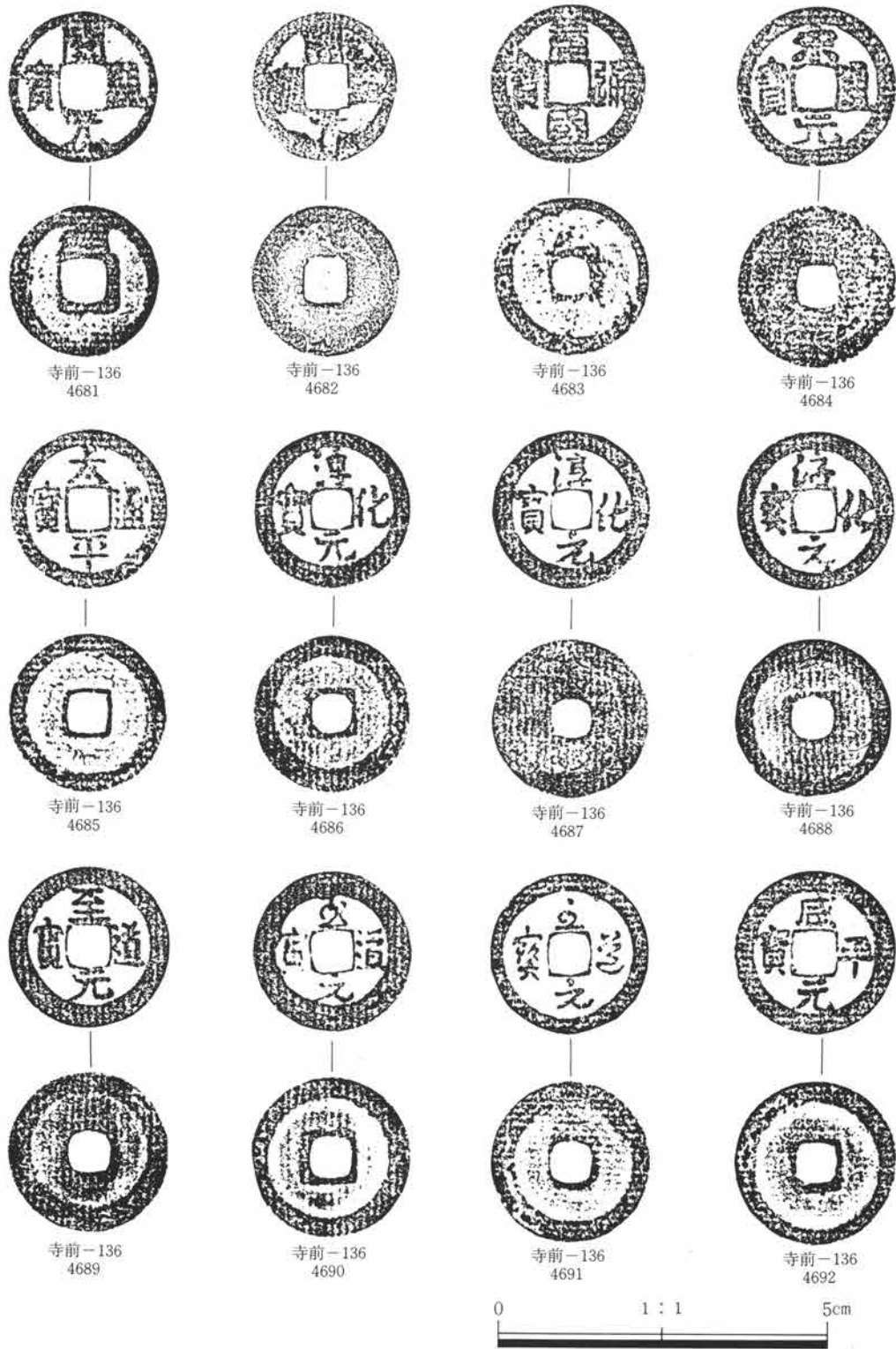




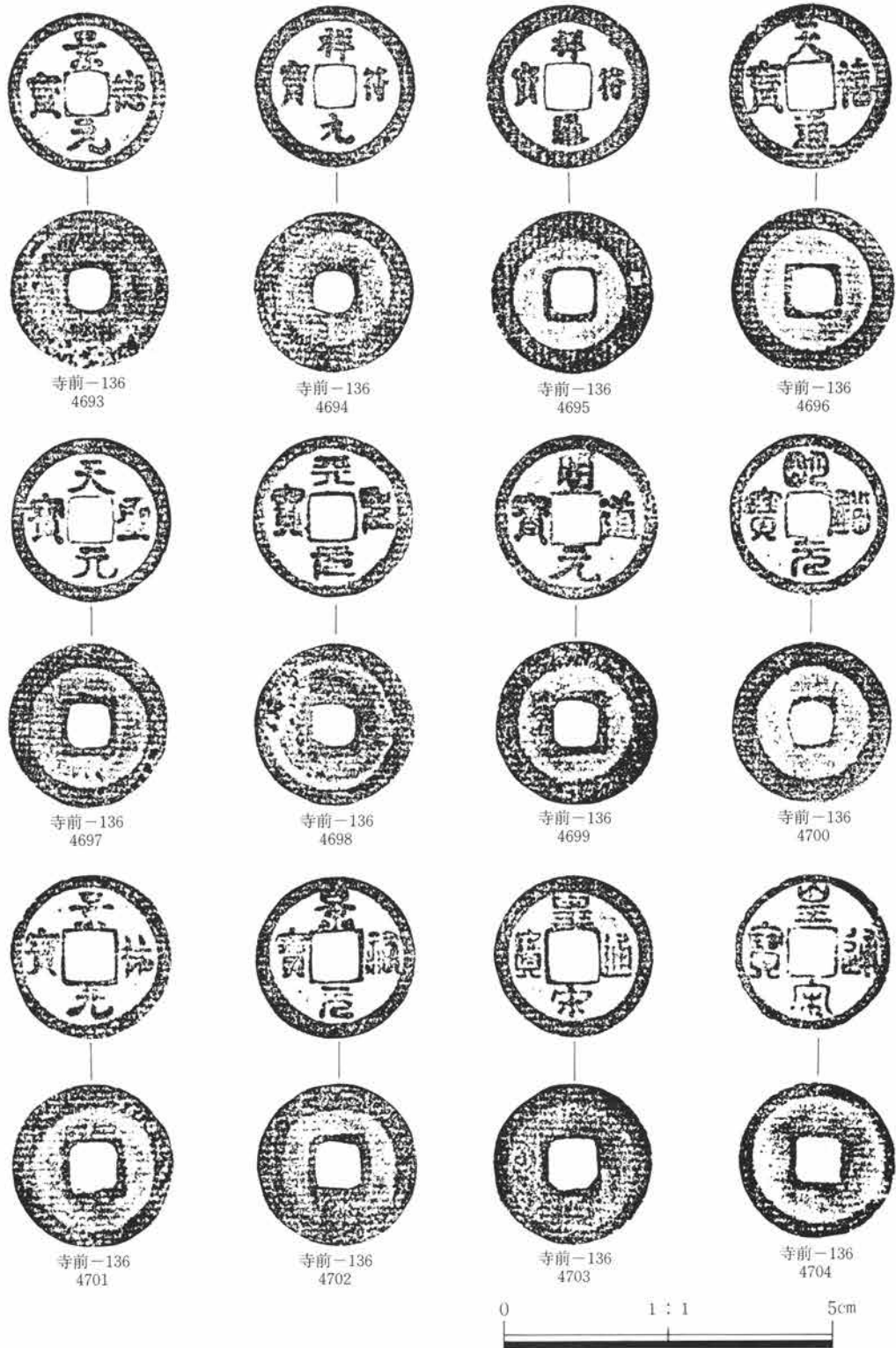
第832图 土坑遺物图 (5)



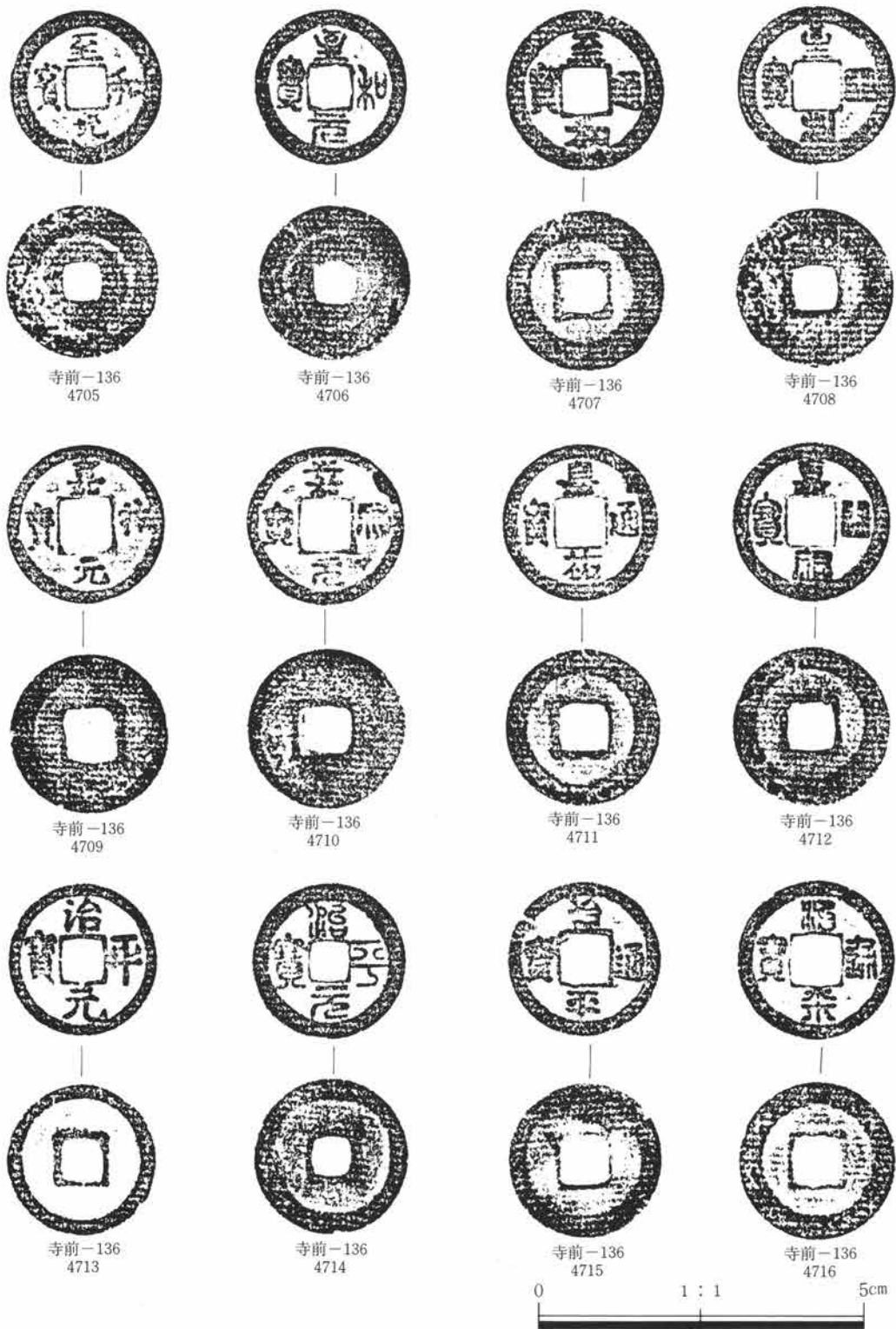
第833図 土坑遺物図(6)



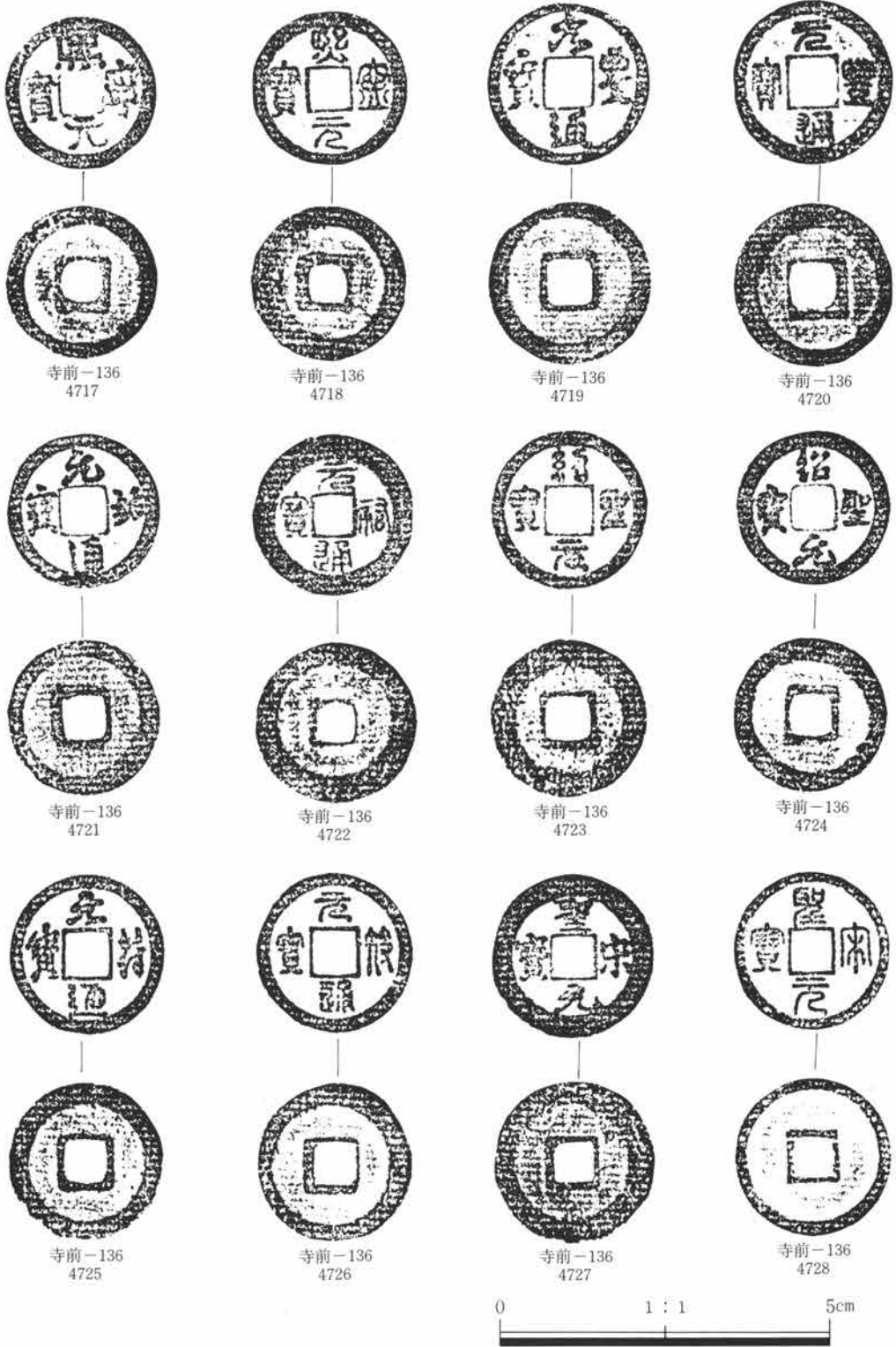
第834图 土坑遺物图(7)



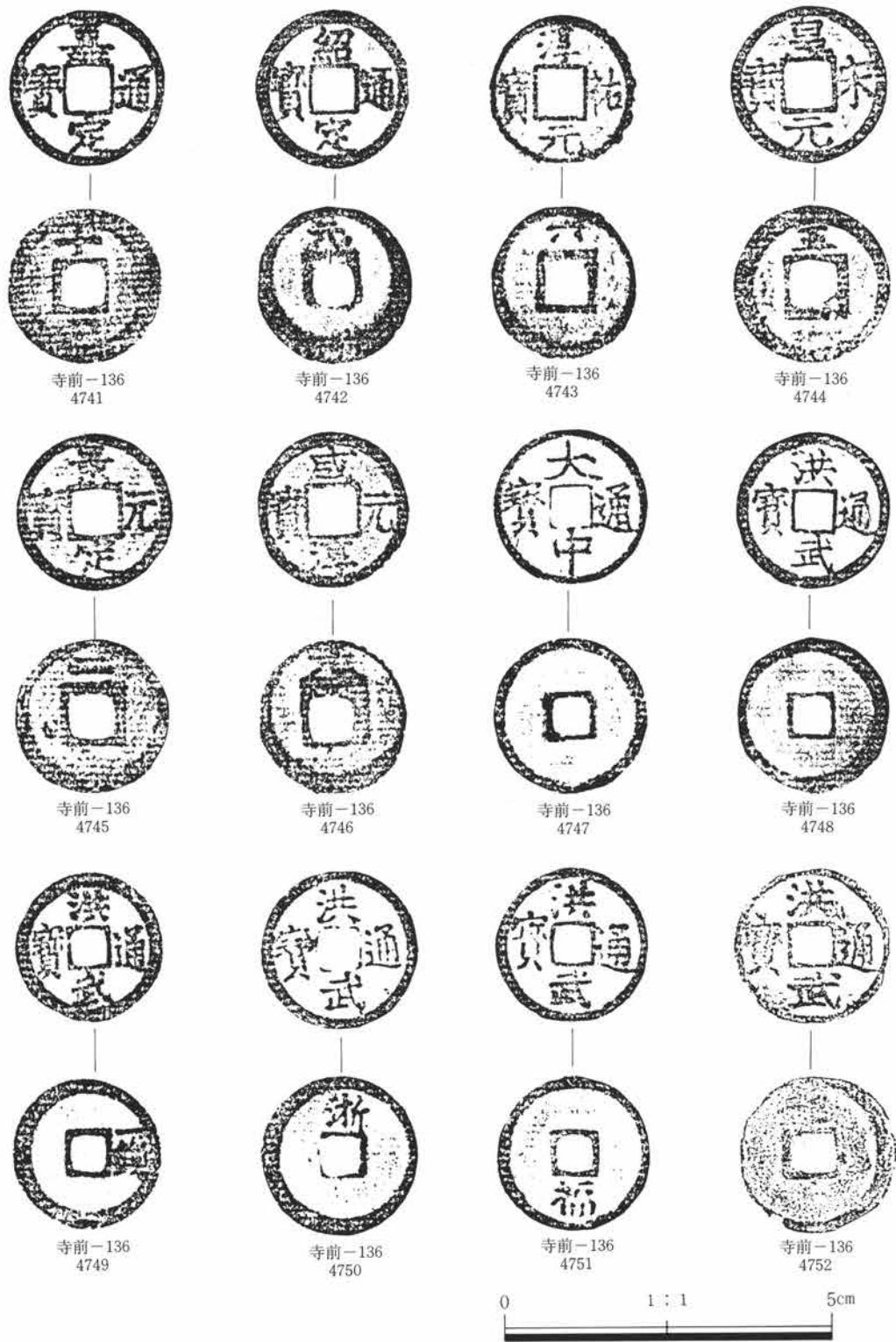
第835図 土坑遺物図 (8)



第836图 土坑遗物图(9)

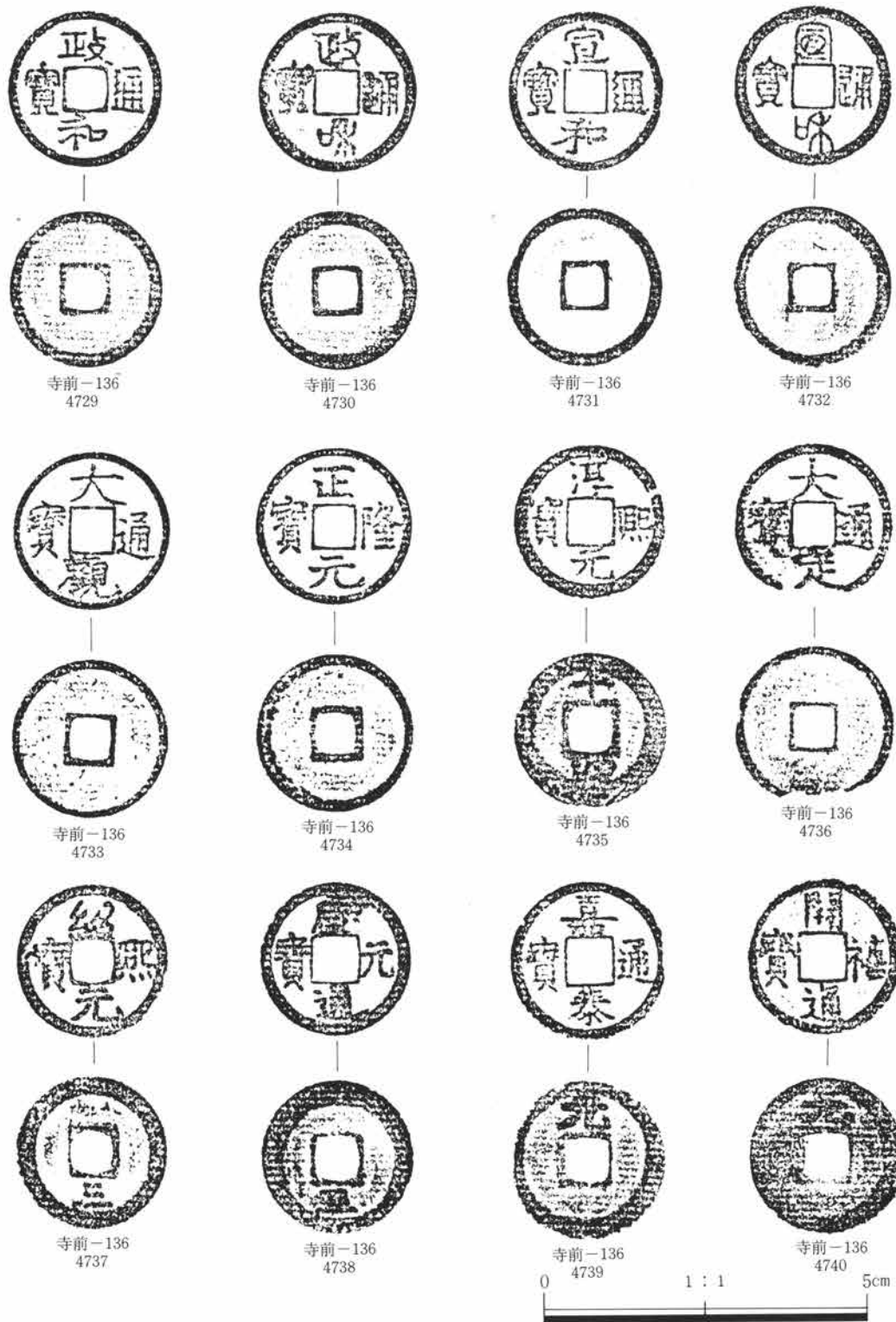


第837図 土坑遺物図 (10)



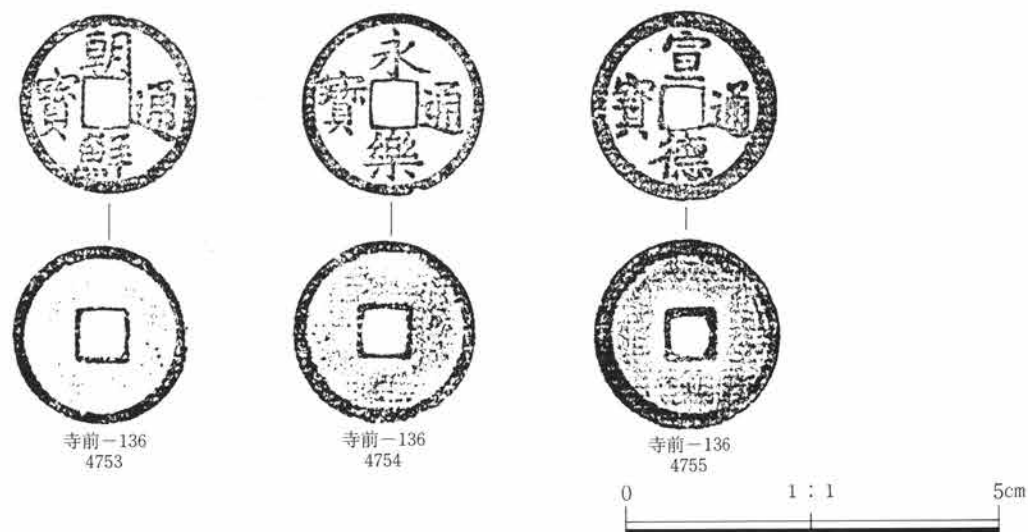
第838图 土坑遺物图 (12)





第839図 土坑遺物図 (11)





第840図 土坑遺物図 (13)

第 217 表 土坑遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
A区69土坑 2780	銭			「熙寧元寶」	土坑内覆土。
74土坑 2783	銭			「熙寧元寶」	土坑内北東部。
2784	銭			「至道元寶」	土坑内北東部。
136土坑 2815	銭			「元祐通寶」	土坑内。
293土坑 2771	小皿 土師質土器	器高:17mm口径:80mm 底径:47mmほぼ完形	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	轆轤左回転。底部は回転糸切り。外面:口縁部～体部は轆轤なで。内面:口縁部～底部は轆轤なで。	土坑内南西部。
319土坑 2873	小皿 土師質土器	器高:20mm口径:83mm 底径:52mm完形	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	轆轤左回転。底部は回転糸切り。外面:口縁部～体部は轆轤なで。内面:口縁部～底部は轆轤なで。	土坑内北西部隅。
2874	皿 土師質土器	器高:25mm口径:112mm 底径:61mm完形	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	轆轤左回転。底部は回転糸切り。外面:口縁部～体部は轆轤なで。内面:口縁部～底部は轆轤なで。	土坑内南西部隅。
2875	皿 土師質土器	器高:27mm口径:121mm 底径:67mm完形	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	轆轤左回転。底部は回転糸切り。外面:口縁部～体部は轆轤なで。内面:口縁部～体部は轆轤なで、底部はなで。	土坑内南西部。

第6章 中世・近世の遺構と遺物

2876	皿 土師質土器	器高:26mm口径:114mm 底径:69mm完形	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	轆轤左回転。底部は回転糸切り。外面:口縁部~体部は轆轤なで。内面:口縁部~体部は轆轤なで、底部はなで。	土坑内南西部。
2877	皿 瓦質土器	器高:29mm口径:125mm 底径:72mmほぼ完形	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。灰黄。	轆轤左回転。底部は回転糸切り。外面:口縁部~体部は轆轤なで。内面:口縁部~底部は轆轤なで。	土坑内南西部。内外面に油煙付着。
2878	小皿 土師質土器	器高:16mm口径:74mm 底径:50mmほぼ完形	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	轆轤右回転。底部は回転糸切り。外面:口縁部~体部は轆轤なで。内面:口縁部~底部は轆轤なで。	土坑内南西部。内外面に油煙付着。
2879	銭			「嘉祐通寶」	覆土。
2880	銭			「熙寧元寶」	覆土。
B区7土坑 3511	石製品	縦横長:70mm×67mm 厚さ:17mm	軽石(ニツ岳)。	平面形は円みを帯びた三角形。両面は擦れている。	土坑内覆土。
3512	釘	長さ:(50mm)厚さ: [5mm×4mm]		角釘の一部か。	土坑内覆土。
10土坑 3513	播鉢 陶器錆釉	器高:(55mm)口径:一 底径:[160mm]×残	石英粒を含む。淡黄。酸化焼成。軟質。	底部の中央は薄い。体部は輪積。底部は回転糸切り成形。回転調整。内面:左回り17本歯のすりめ。全面施釉。砂目。	瀬戸美濃系。
3514	銭			「慶元通寶(背五)」	土坑内覆土。
3515	銭			「寛永通寶」(江戸深川千田新田)	土坑内覆土。
3516	銭			「紹興元寶」(折二未鋳)	土坑内覆土。
13土坑 3520	銭			「寛永通寶」(相模国藤沢及び吉田島)	土坑内覆土。
C区26土坑 3860	椀 陶器鉛釉	器高:69mm口径:110mm 底径:49mm×残	砂粒・小石・気泡を含む。還元焼成。硬質。	口縁部は僅かに外反。やや歪む。体部は深く、高台部の断面は三角形。底部以外は鉛釉。口縁部うのふ軸。	瀬戸美濃系。
64土坑 3868	鍋 瓦質土器	器高:[150mm]口径: [296mm]底径:[208mm] 口縁部~底部×残	砂粒を含む。還元焼成。軟質。	口縁部は短く外反。内面に稜あり。輪積成形。外面:下端・削り。外面上端及び内面:軽いこぼめ調整。	鉄分付着。
3869	釜 瓦質土器	器高:一口径:一底径:一最大径:[430mm]小片	砂粒で気泡を多く含む。酸化中性焼成。軟質。	口唇部は水平に面取り。鋳部は大きく上向き。16弁菊花印文と外向き孔。体部の外面の鋳部より下は無調整。	

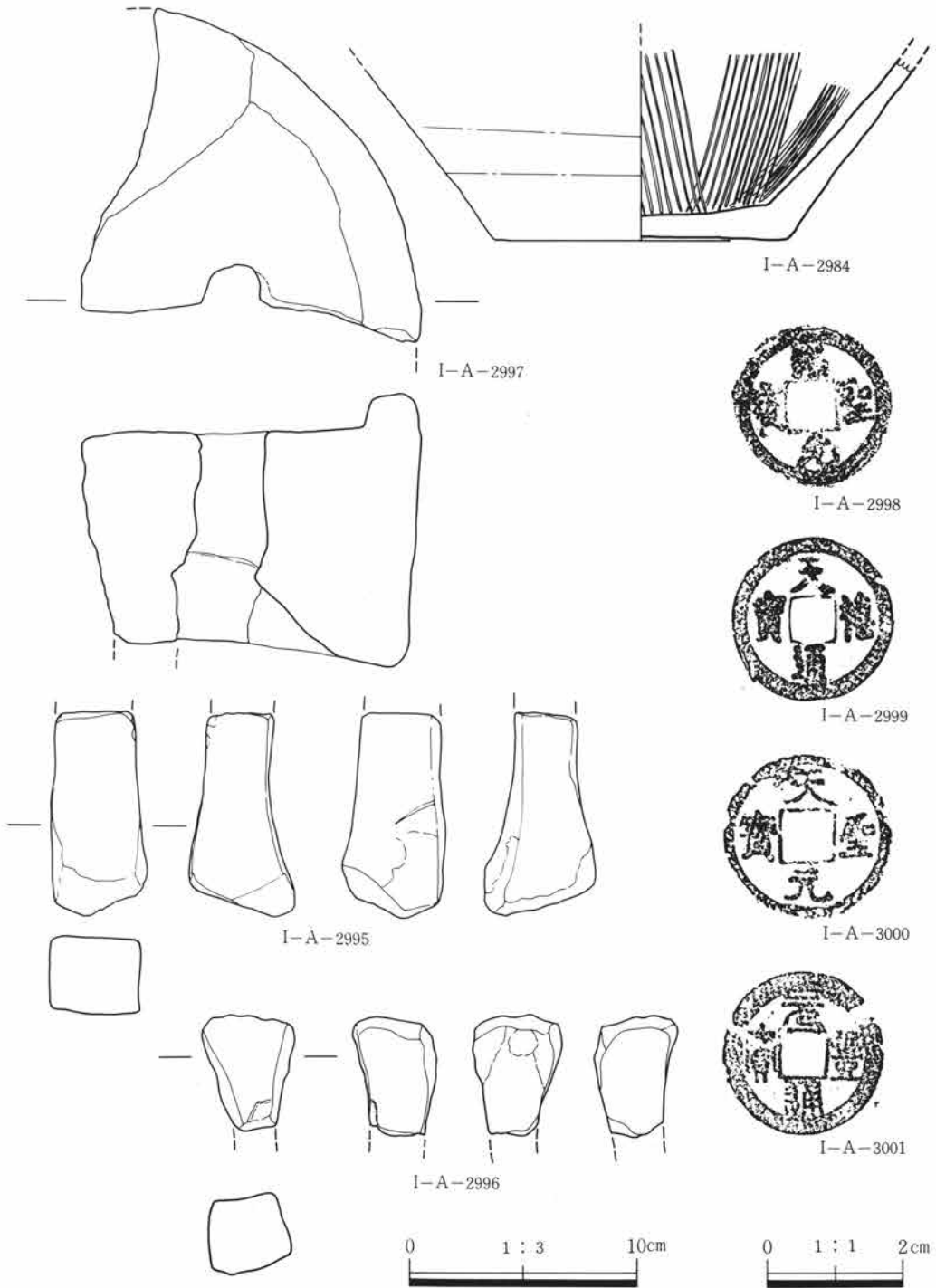
## (8) 土 坑

3870	砥石	長さ: (94mm) 幅: 54~28mm 厚さ: 42~36mm	流紋岩(砥沢?)。	使用面は四面。	土坑内覆土。
3871	砥石	長さ: 102mm 幅: 36~21mm 厚さ: 28~20mm	流紋岩(砥沢?)。	使用面は四面。	土坑内覆土。
71土坑 3872	播鉢 陶器錆釉	器高: 一口径: 一底径: [140mm] 3/8 残	雲母粒を多く含む。酸化焼成。硬質。	口縁部は有段ぎみ。底部はやや薄い。内面: 19本歯左回り。一部二重のすりめ。底部の端以外は全面薄く施釉。	瀬戸美濃系。3833に似る。
D区45土坑 4337	銭			「元豊通寶」	土坑内覆土。
4338	銭			「皇宋通寶」	土坑内覆土。
4339	銭			「紹聖元寶」	土坑内覆土。
4340	銭			「政和通寶」	土坑内覆土。
4341	銭			「永樂通寶」	土坑内覆土。
4342	銭			「大觀通寶」	土坑内覆土。
4343	銭			「皇宋通寶」	土坑内覆土。
47土坑 4344	銭			「寛永通寶」(古寛永水戸)	土坑内覆土。
4345	銭			「寛永通寶」(古寛永萩)	土坑内覆土。
4346	銭			「寛永通寶」(古寛永越後高田)	土坑内覆土。
4347	銭			「寛永通寶」(古寛永越後高田)	土坑内覆土。
4348	銭			「寛永通寶」	土坑内覆土。
4349	銭			「寛永通寶」	土坑内覆土。
4350	銭			「寛永通寶」(古寛永水戸)	土坑内覆土。
4351	銭			「寛永通寶」(古寛永水戸)	土坑内覆土。
4352	銭			「寛永通寶」	土坑内覆土。
4353	銭			「寛永通寶」	土坑内覆土。
4354	銭			「寛永通寶」(古寛永水戸)	土坑内覆土。
4355	銭			「寛永通寶」(古寛永岡山)	土坑内覆土。
4356	銭			「寛永通寶」	土坑内覆土。
4357	銭			「寛永通寶」(古寛永水戸)	土坑内覆土。

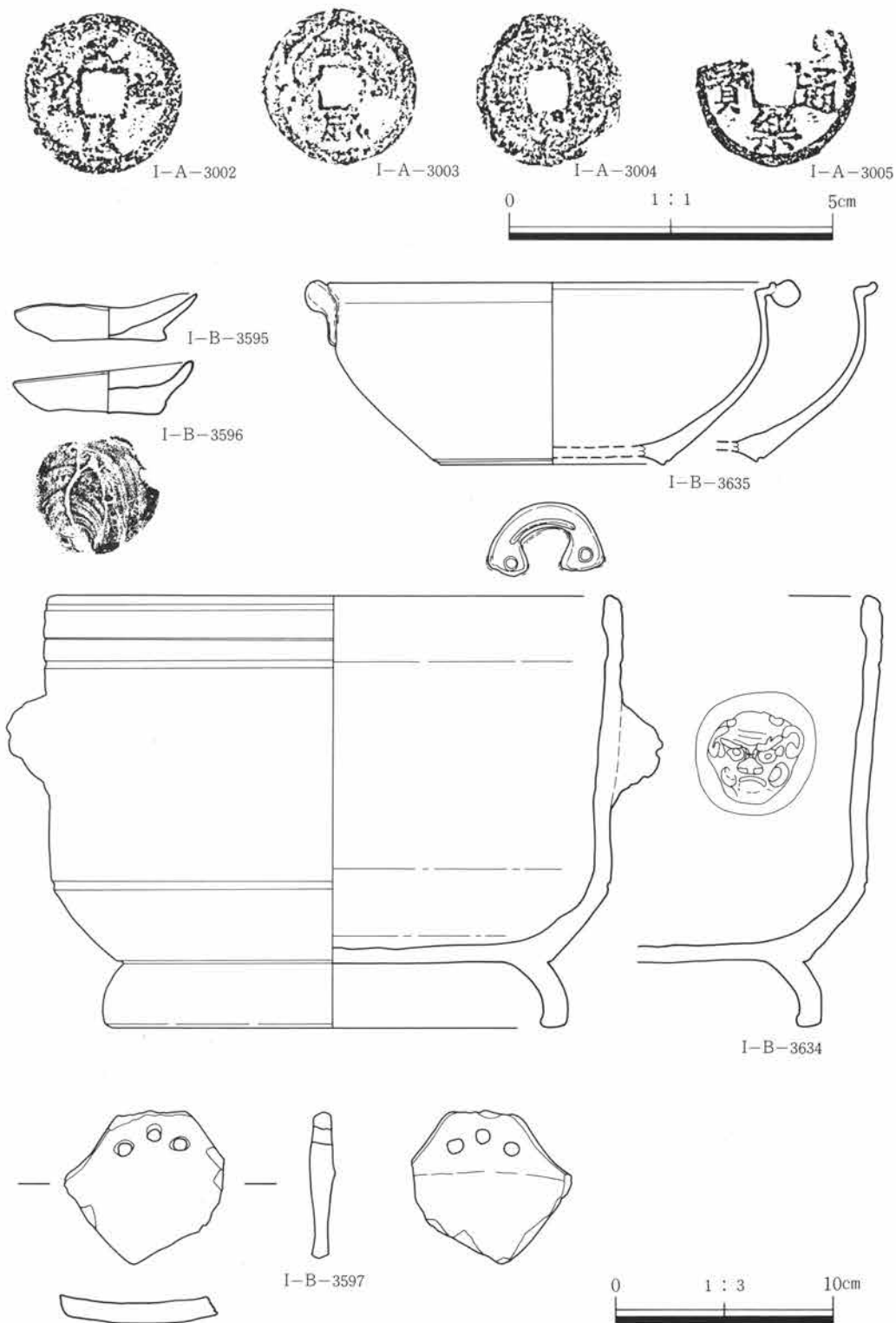
第6章 中世・近世の遺構と遺物

4358	銭			「寛永通寶」(古寛永駿河)	土坑内覆土。
4359	銭			「寛永通寶」(古寛永越後高田)	土坑内覆土。
寺前30土坑 4553	皿 土師質土器	器高:25mm 口径:112mm 底径:69mm ほぼ完形	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	轆轤左回転。底部は回転糸切り。外面:口縁部～底部は轆轤なで。内面:口縁部～底部は轆轤なで。	土坑内覆土。
4554	銭			「祥符通寶」	土坑内覆土。
4555	銭			「淳熙元寶」	土坑内覆土。
4556	銭			「政和通寶」	土坑内覆土。
36土坑 4552	砥石	長さ:120mm 幅:30～25mm 厚さ:23mm	流紋岩(砥沢?)。	使用面は二面。	土坑内覆土。
58土坑 4559	銭			「景德元寶」	土坑内覆土。
4560	銭			「景德元寶」	土坑内覆土。
111土坑 4564	皿 土師質土器	器高:25mm 口径:121mm 底径:76mm 完形	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い橙。	轆轤左回転。底部は回転糸切り。外面:口縁部は横なで、体部は轆轤なで。内面:口縁部～底部は轆轤なで。	土坑内覆土。
4565	銭			「元豊通寶」	土坑内覆土。
4566	銭			「元符通寶」	土坑内覆土。
4567	銭			「開禧通寶(背?)」	土坑内覆土。
1土坑 3855	五輪塔水輪	長径:248mm 短径:188mm 高さ:117mm 重量3,630g 完形	榛名ニツ岳軽石	整形良。表面一部磨き。上面に径88mm 深34mmの播鉢状の凹あり。	
3862	五輪塔水輪	長径:119mm 短径:111mm 高さ:70mm 重量567.4g 完形	榛名ニツ岳軽石	加工がやや良。平鑿の加工痕あり。下面に径62mm、深16mmの播鉢状の凹あり。	
136土坑 4677 4755	銭	第7章第4節219表			

(9) 表土出土遺物

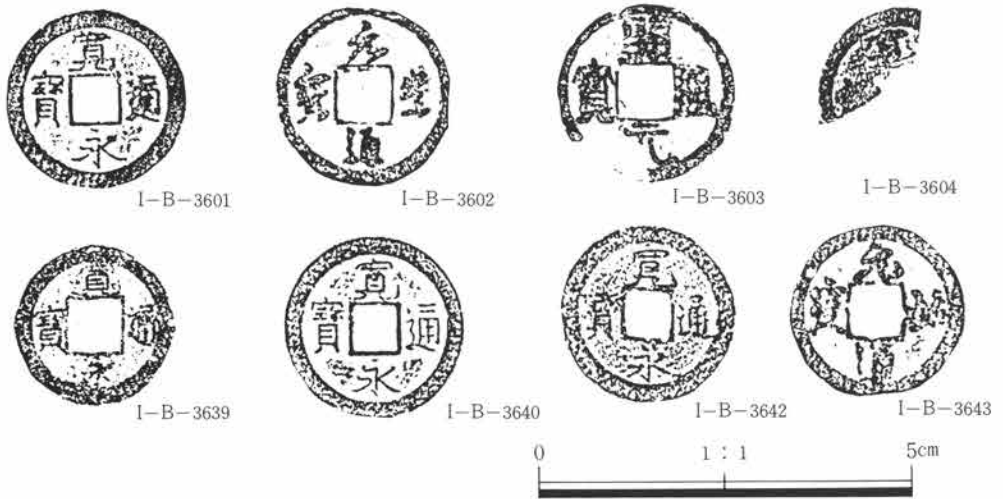
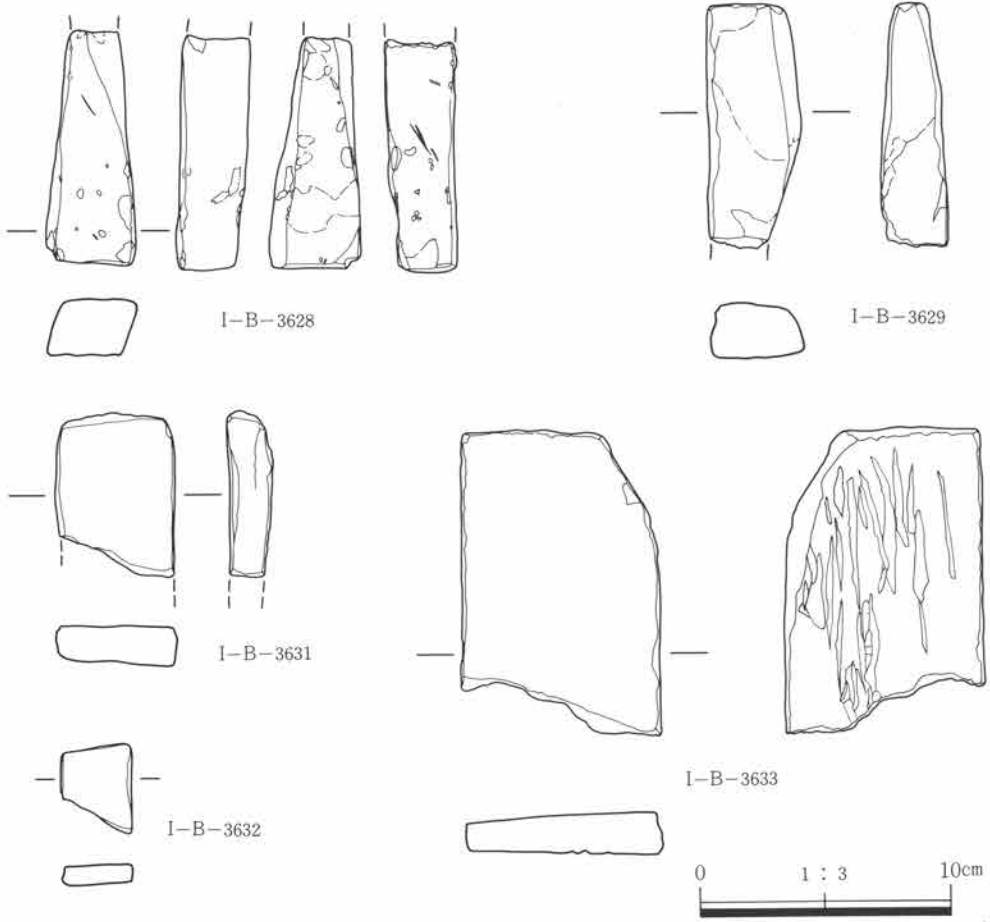


第841図 表土遺物図(1)

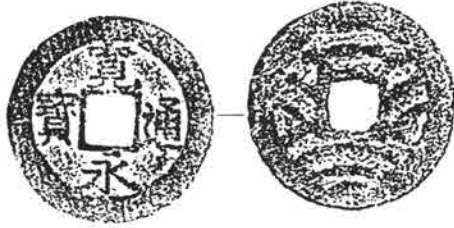


第842図 表土遺物図(2)

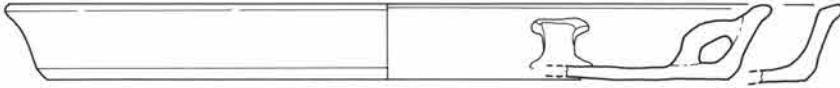
(9) 表土出土遺物



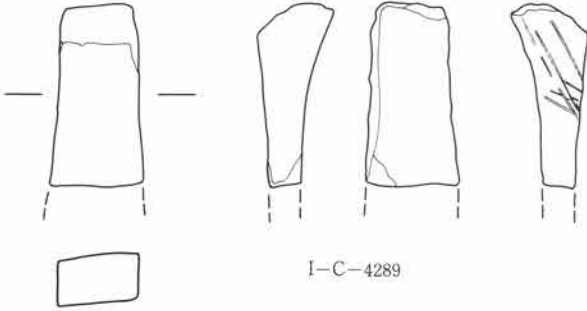
第843図 表土遺物図(3)



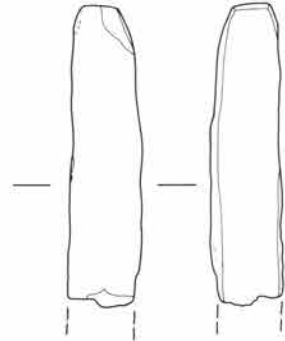
I-B-3641



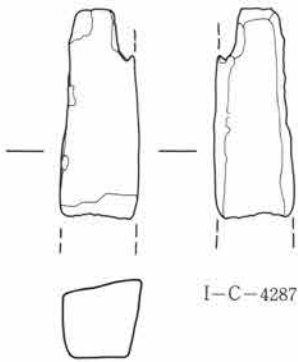
I-C-3873



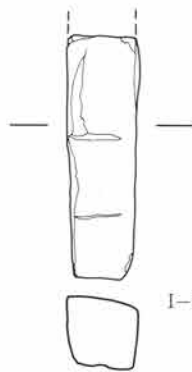
I-C-4289



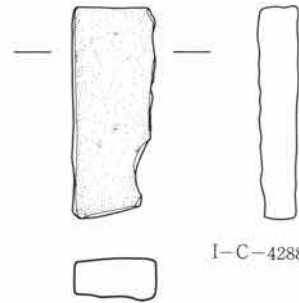
I-C-4285



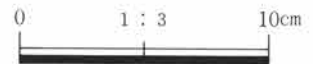
I-C-4287



I-C-4284



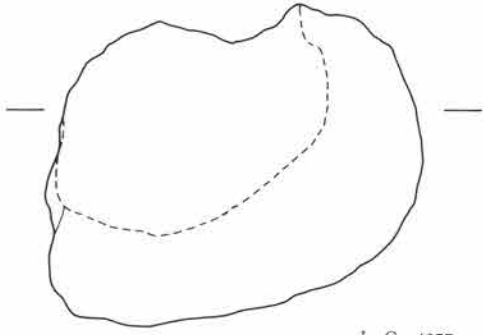
I-C-4288



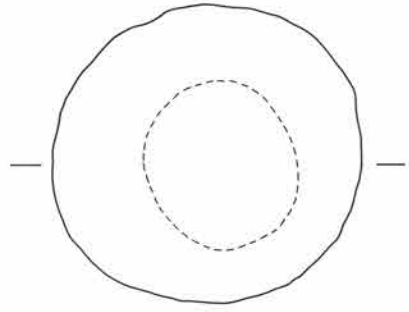
第844図 表土遺物図(4)



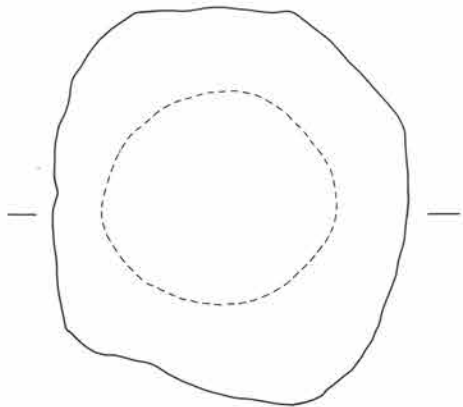
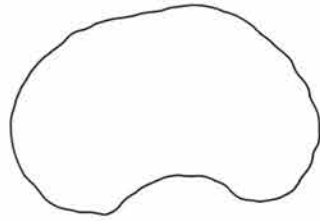
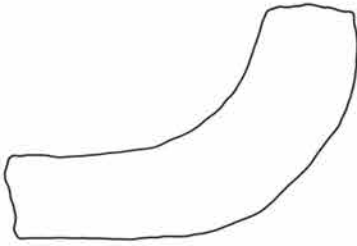
(9) 表土出土遺物



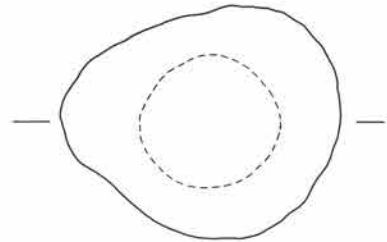
I-C-4277



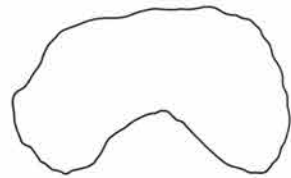
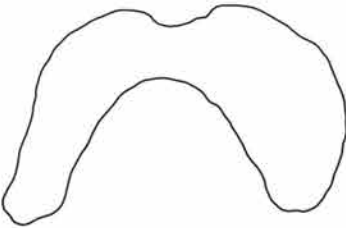
I-C-4280



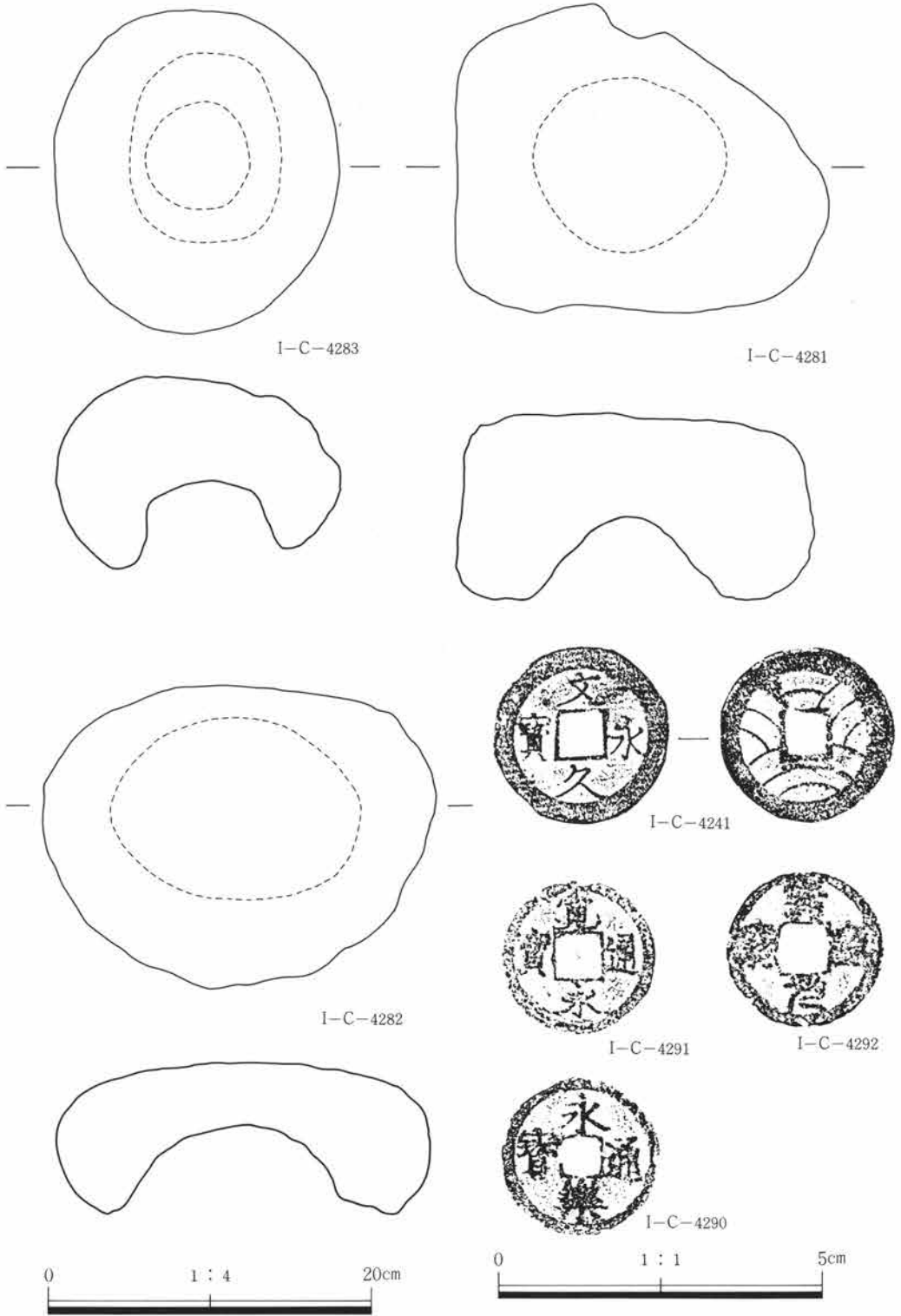
I-C-4278



I-C-4279

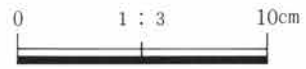
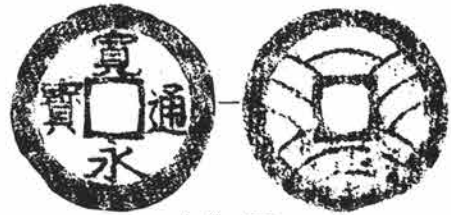
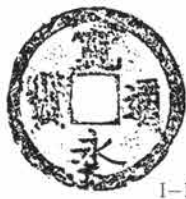
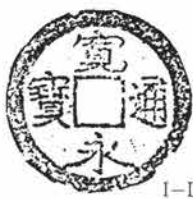
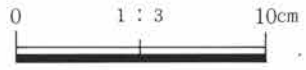
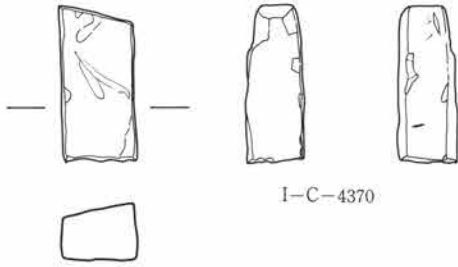
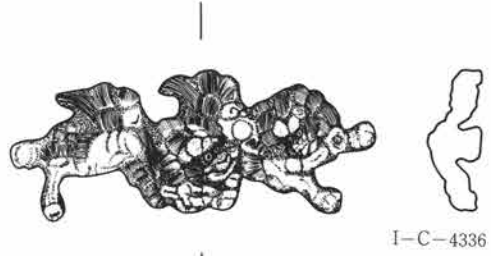
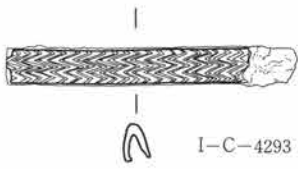


第845図 表土遺物図(5)

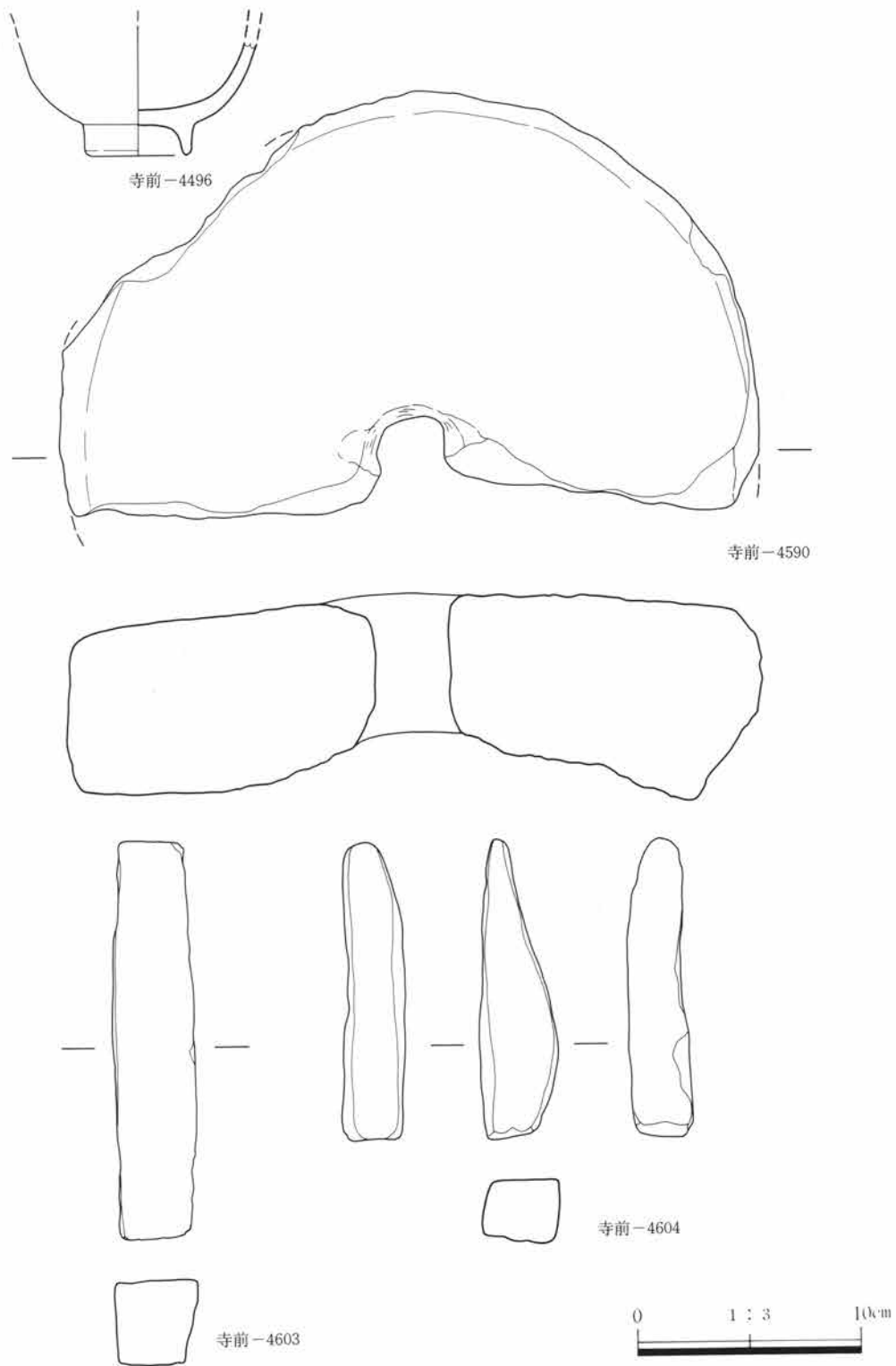


第846図 表土遺物図(6)

(9) 表土出土遺物

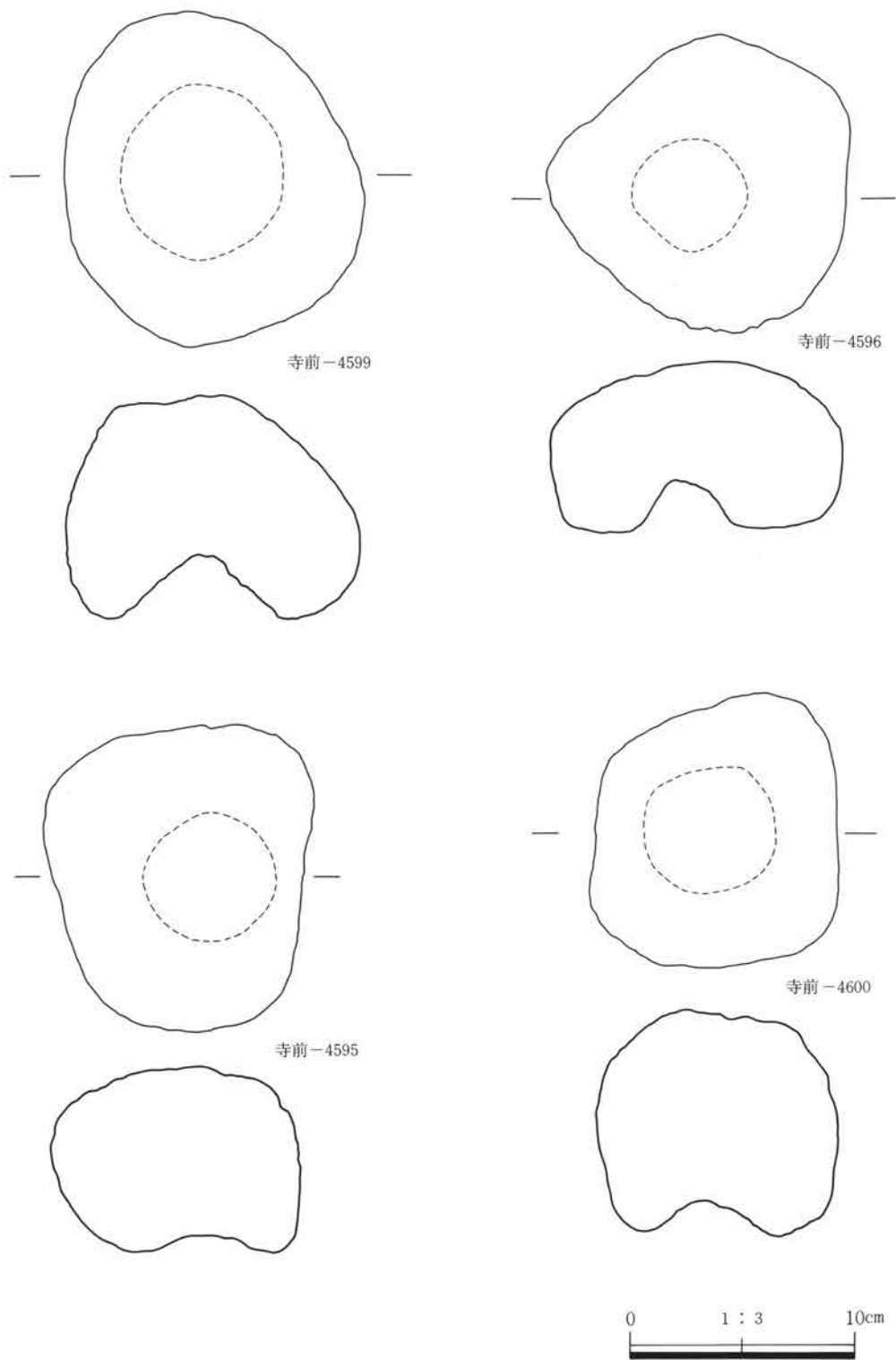


第847図 表土遺物図(7)

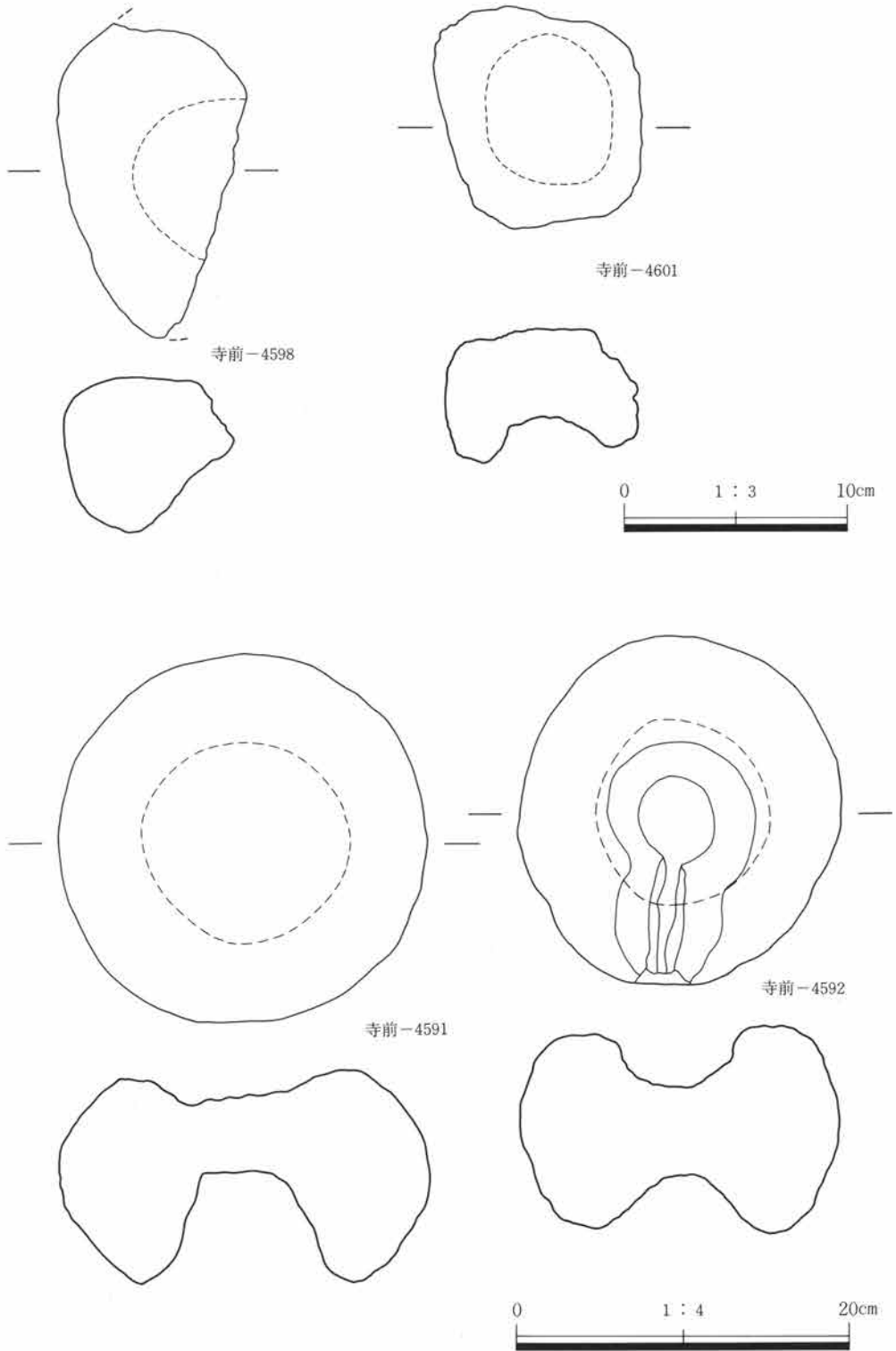


第848図 表土遺物図(8)

(9) 表土出土遺物

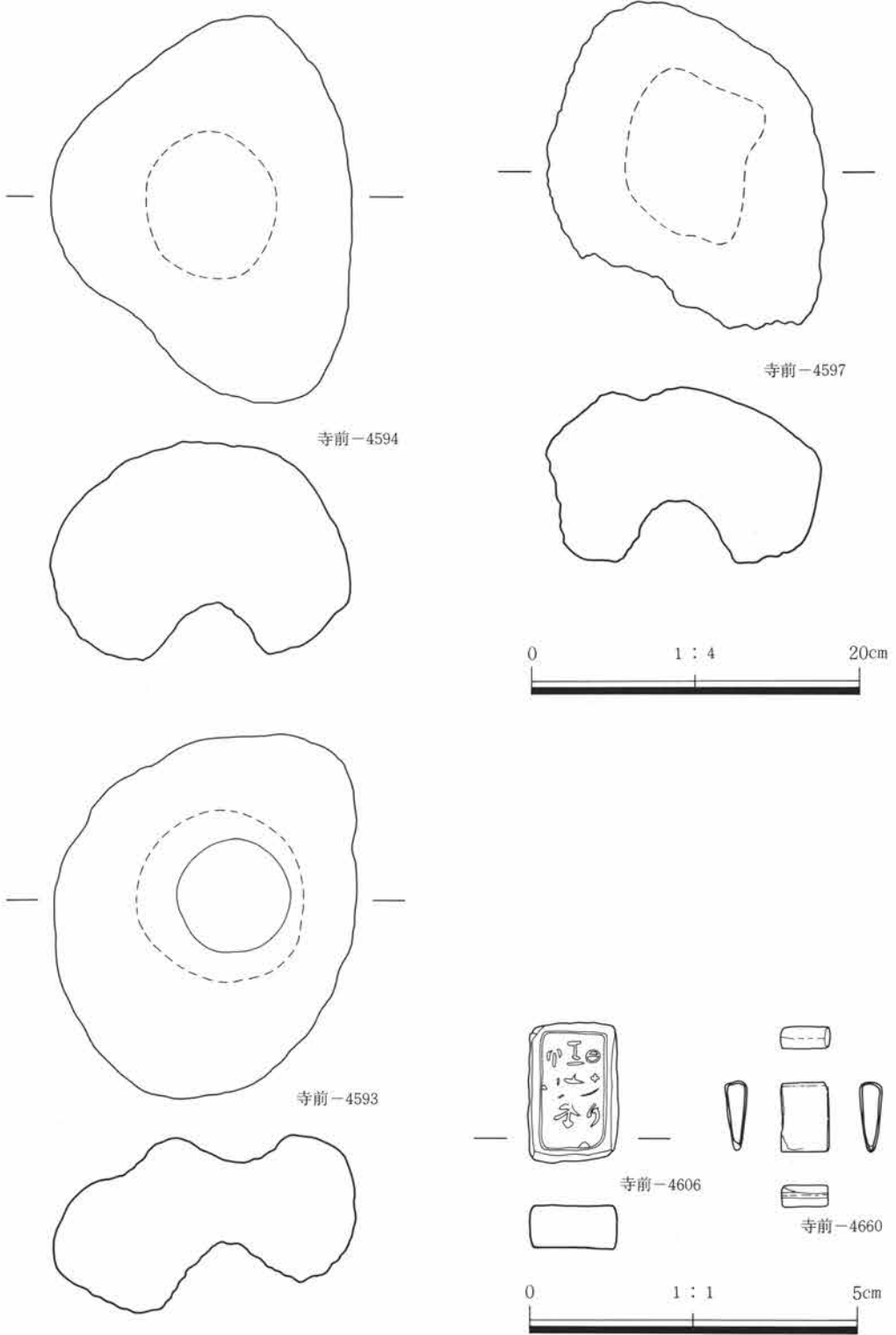


第849図 表土遺物図(9)



第850図 表土遺物図 (10)

(9) 表土出土遺物



第851図 表土遺物図 (11)



寺前-4608



寺前-4609



寺前-4610



寺前-4611



寺前-4612



寺前-4613



寺前-4614



寺前-4615



寺前-4616



寺前-4617



寺前-4618



寺前-4619



寺前-4620



寺前-4621



寺前-4622



寺前-4623



寺前-4624



寺前-4625



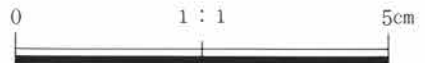
寺前-4626



寺前-4627



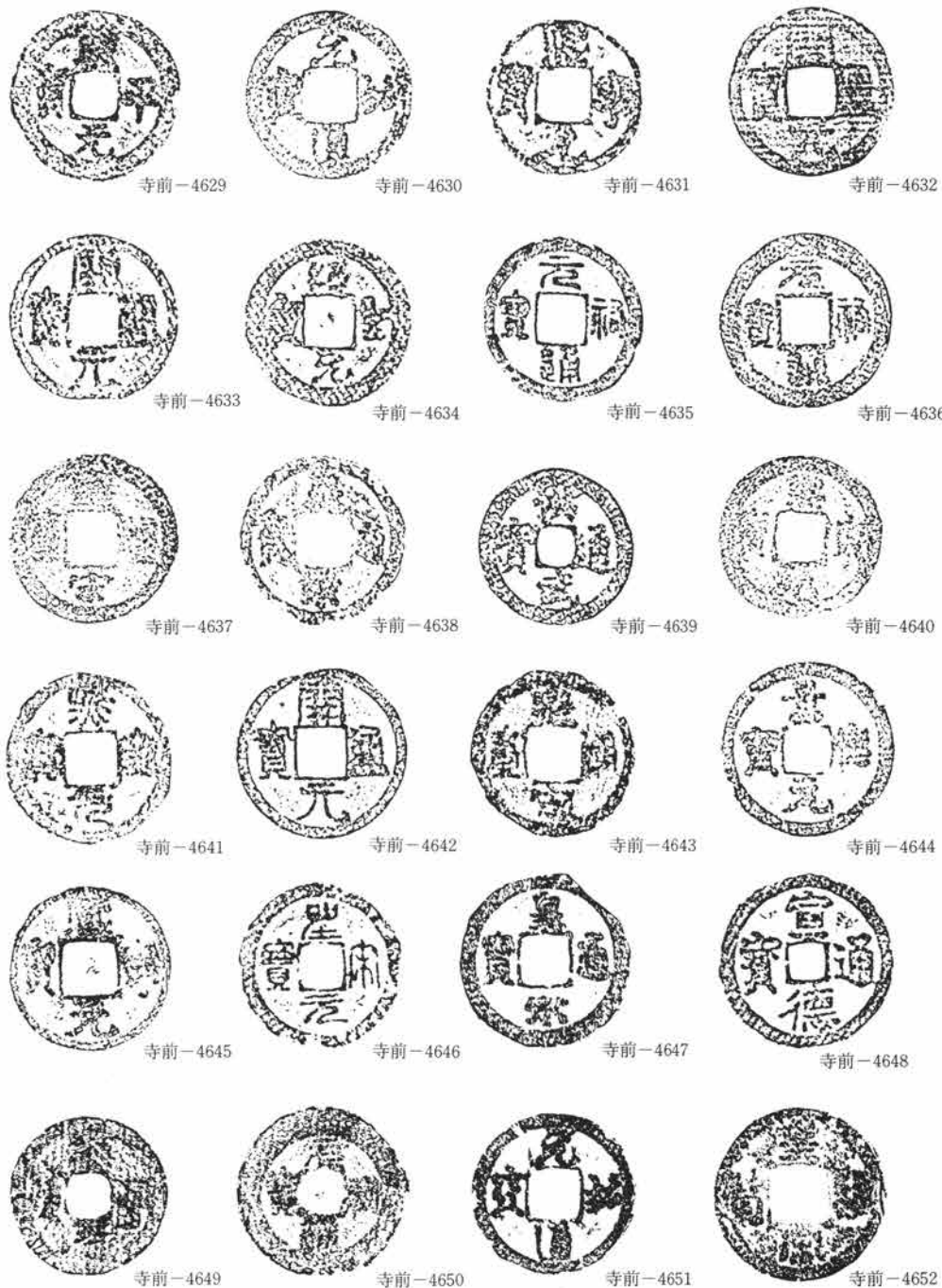
寺前-4628



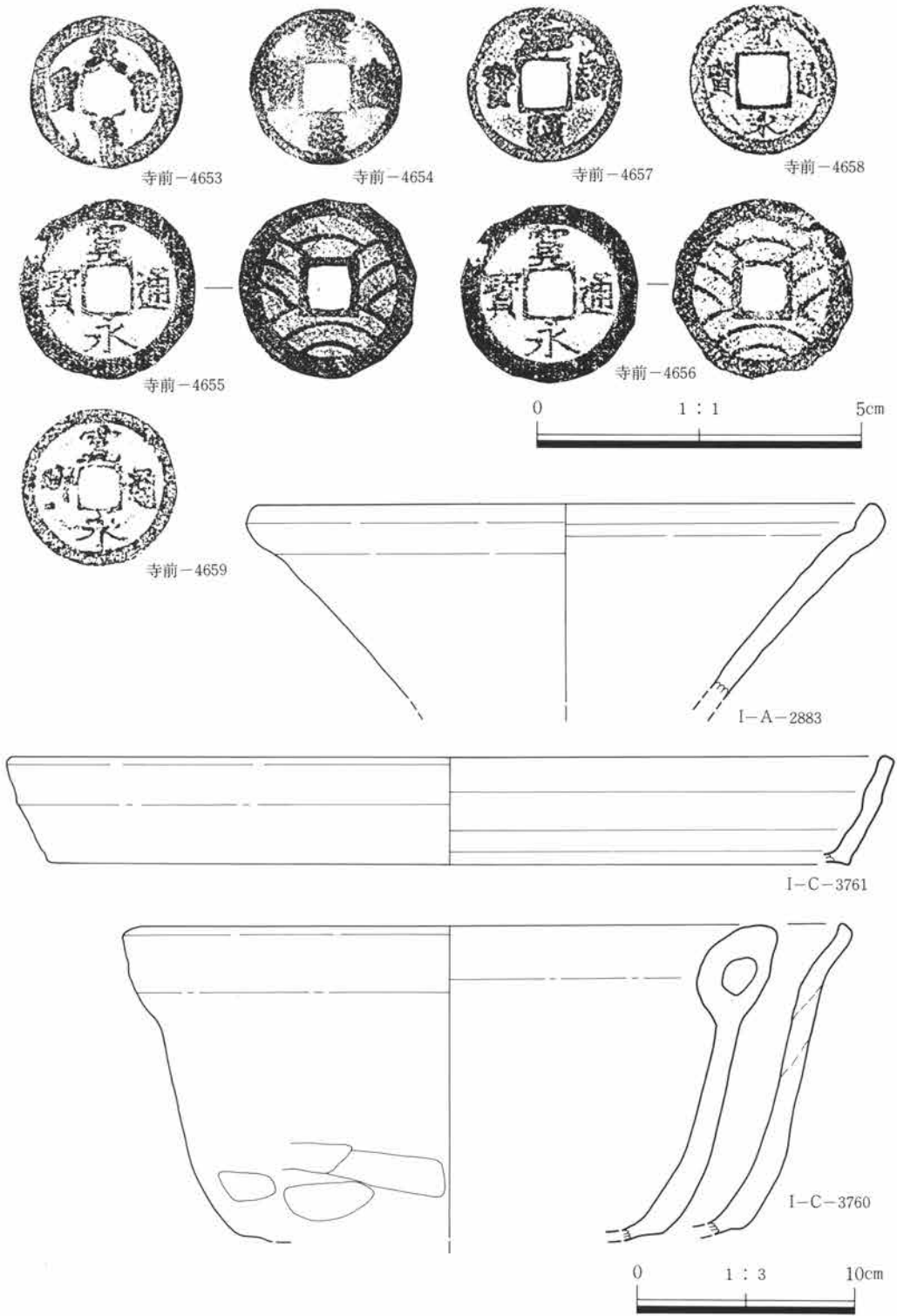
第852図 表土遺物図 (12)



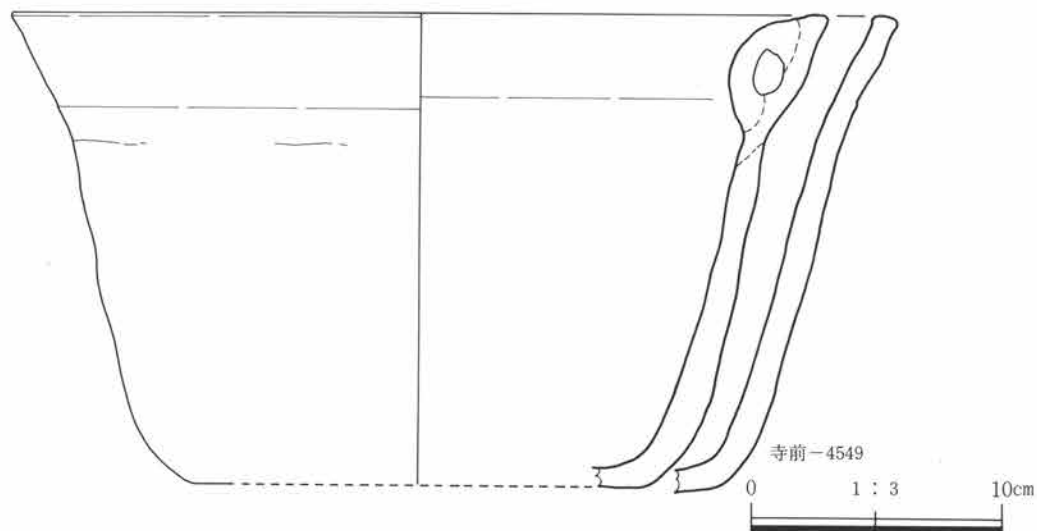
(9) 表土出土遺物



第853図 表土遺物図 (13)



第854図 表土遺物区(14)



第855図 表土遺物図 (15)

第218表 表土遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
A区 2883	捏鉢 瓦質土器	器高:870mm口径: [280mm]底径:一口縁 部小片	砂粒を多く含む。酸化中 性焼成、軟質。	口唇部は小さく内反。輪積成形。内外 面:軽いなで調整。内面:磨耗。	器表剥離多い。
2984	播鉢 錆釉陶器	器高:一口径:一底 径:132mm $\frac{2}{3}$ 残	微砂粒・気泡を含む。淡黄 色胎土。酸化焼成。形	体部は輪積。底部は右回転糸切り成。 回転調整。内面:12本歯左回りのすり め。底部は周縁以外に薄く施釉。	瀬戸系。
2995	砥石	長さ:(90mm)幅:39~ 35mm厚さ:46~28mm	流紋岩(砥沢?)。	使用面は四面。	
2996	砥石	長さ:(51mm)幅:40~ 20mm厚さ:35~26mm	流紋岩(砥沢?)。	使用面は四面。	
2997	石白	直径:[300mm]厚さ: 120mm	粗粒安山岩。	上臼。供給面の平面形は円形。	
2998	銭			「紹聖元寶」	
2999	銭			「天禧通寶」	
3000	銭			「天聖元寶」	
3001	銭			「元豊通寶」	
3002	銭			「元祐通寶」	

第6章 中世・近世の遺構と遺物

3003	銭			「寛永通寶」(江戸十萬坪)	
3004	銭			「寛永通寶」(江戸十萬坪)	
3005	銭			「永楽通寶」	
B区 3595	小皿 土師質土器	器高:21~15mm 口径:84mm底径:53mm 口縁部~底部 $\frac{1}{4}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	底部は回転篋切り。外面:口縁部~体部は轆轤なで。内面:口縁部~底部は轆轤なで。	内外面に油煙付着
3596	小皿 土師質土器	器高:22~16mm 口径:83mm底径:54mm 口縁部~底部 $\frac{1}{4}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	轆轤右回転。底部は回転糸切り。外面:口縁部~体部は轆轤なで。内面:口縁部~底部は轆轤なで。	内外面に油煙付着
3597	鍋 瓦質土器	器高:一口径:一底部:一把手部小片	微砂粒・気泡を含む。還元焼成。硬質。	台部状部分に外から内へ3孔。内面に緩い稜あり。なで調整。	41住埋土。
3601	銭			「寛永通寶」(石巻)	
3602	銭			「元豊通寶」	
3603	銭			「開元通寶」	
3604	銭			「寛永通寶」(江戸十萬坪)	
3628	砥石	長さ:(92mm)幅:33~20mm 厚さ:26~24mm	流紋岩(砥沢?)。	使用面は四面。	
3629	砥石	長さ:(96mm)幅:37~27mm 厚さ:26~15mm	流紋岩(砥沢?)。	使用面は二面。	
3631	砥石	長さ:(64mm)幅:48~45mm 厚さ:18~15mm	砂岩。	使用面は二面。	
3632	砥石	長さ:(36mm)幅:28mm 厚さ:8mm	泥岩。	使用面は一面。	
3633	砥石	長さ:(121mm)幅:80mm 厚さ:17~12mm	頁岩。	使用面は二面。	
3634	火鉢 瓦質土器	器高:197mm口径:[264mm]底径:214mm $\frac{1}{4}$ 残	砂粒・気泡を含む。酸化後還元。軟質。内面は二次焼成。	体部は円筒形で外面に獅子頭状把手一对。高台の器壁は厚く内反。輪積成形。体部の内面は回転調整。外面:布調整。高台部は外面研磨。	
3635	鍋 染付陶器	器高:85mm口径:205mm 底径:103mm $\frac{1}{4}$ 残	緻密な磁胎に似た胎土還元焼成。硬質。外面の下端は二次焼成。	口唇部は蓋受けの無軸部。体部の上半に釣手模倣の把手。削り込み底。轆轤成形。外面の上端は長石釉地にコバルト釉で笹文。内面:全面透明釉。	
3639	銭			「寛永通寶」(江戸亀戸)	
3640	銭			「寛永通寶」(石巻)	

## (9) 表土出土遺物

3641	錢			「寛永通寶」(江戸深川千田新田)	
3642	錢			「寛永通寶」(江戸十万坪)	
3643	錢			「元祐通寶」	
3760	鍋 瓦質土器	器高:(143mm)口径: 300mm底径:192mm $\frac{1}{2}$ 残	微砂粒・気泡を含む。還元 焼成、軟質。外面は二次焼 成。	口縁部は外反。口唇部の内面に稜あ り。耳部は、中形。下げ底。輪積土型成 形。外面:下削りで、上端は、こぼめ調 整。	
3761	盤 瓦質土器	器高:48mm口径:40mm 底径:368mm口縁部小 片	微砂粒・気泡を含む。還元 焼成、軟質。外面は二次焼 成。	単口縁で浅い。平底。輪積土型成形回 転などで調整。	
C区 3873	盤 瓦質土器	器高:40mm口径:[410 mm]底径:[370mm]遺 存:?	微砂粒を含む。酸化後還 元焼成。硬質。	口縁部水平に張り出し、浅い。耳部は 中形。輪積土型成形。回転などで調整。	鉄分付着。
4241	錢			「寛永通寶」	
4284	砥石	長さ:(96mm)幅:29~ 26mm厚さ:27~25mm	流紋岩(砥沢?)。	使用面は一面。	
4285	砥石	長さ:(118mm)幅:28 ~24mm厚さ:15mm	流紋岩(砥沢?)	使用面は二面。	
4287	砥石	長さ:(82mm)幅:31~ 26mm厚さ:30~25mm	流紋岩(砥沢?)	使用面は二面。	
4288	砥石	長さ:(83mm)幅:33~ 31mm厚さ:16~13mm	流紋岩(砥沢?)	使用面は二面。	
4289	砥石	長さ:(72mm)幅:37~ 30mm厚さ:27~14mm	流紋岩(砥石?)	使用面は四面。	
4290	錢			「永楽通寶」	
4291	錢			「寛永通寶」	
4292	錢			「熙寧元寶」	
4293	小柄	後述			
D区 4336	目貫	後述			
4360	錢			「寛永通寶」(古寛永駿河踏谷)	
4361	錢			「寛永通寶」(古寛永水戸)	
4370	砥石	長さ:(62mm)幅:30mm 厚さ:22~15mm	硬質泥岩。	使用面は三面。	

第6章 中世・近世の遺構と遺物

4373	銭				「寛永通寶」(江戸深川千田新田)	
4374	銭				「寛永通寶」(相模国藤沢・吉田島)	
4375	銭				「朝鮮通寶」	
4376	銭				「熙寧元寶」	
寺前 4461	鉢 瓦質土器	器高:(79mm)口径: [360mm]底径:一小片	微砂粒を含む。還元中性 焼成。硬質。外面は二次焼 成。	口縁部と体部は分かれず、大きく外 傾。器壁薄い。輪積成形。口縁部の内 外面:回転なで。体部の内面:なで調 整。	口縁部内面磨耗。 捏鉢を鍋として転 用か。	
4496	椀 瓦質陶器	器高:一口径:一底 径:48mm%残	微気泡を含む。還元焼成。 硬質。	体部は半球形。器壁はやや厚い。高台 部は小さく高い。全面施釉。貫入あり	唐津系。	
4549	鍋 瓦質土器	器高:200mm口径:330 mm底径:180mm%残	砂粒・気泡を含む。酸化中 性焼成、軟質。外面は二次 焼成。	口縁部は短く外傾。器壁厚い。耳部は 中形。輪積成形。全体に軽いこぼめ調 整。		
4590	石 白		砂岩。			
4603	砥 石	長さ:175mm幅:37~ 28mm厚さ:37mm	流紋岩(砥沢?)。	使用面は一面。		
4604	砥 石	長さ:130mm幅:27~ 25mm厚さ:35~25mm	流紋岩(砥沢?)。	使用面は三面。		
4606	印 版? 瓦質土器	59×38×19ほぼ完存	砂粒・気泡を含む。還元焼 成。軟質。	瓦の端部片側を残して削って長方形 に成形し、片面に枠線と「日」「十二」 【杉/利】などの文字を陰刻。	正字陰刻のため印 章ではない。	
4608	銭				「永楽通寶」	
4609	銭				「咸淳元寶(背八)」	
4610	銭				「洪武通寶(背浙)」	
4611	銭				「元豊通寶」	
4612	銭				「聖宋元寶」	
4613	銭				「洪武通寶」	
4614	銭				「紹聖元寶」	
4615	銭				「元豊通寶」	
4616	銭				「嘉祐通寶」	
4617	銭				「政和通寶」	
4618	銭				「皇宋通寶」	

## (9) 表土出土遺物

4619	錢			「皇宋通寶」	
4620	錢			「治平元寶」	
4621	錢			「熙寧元寶」	
4622	錢			「元祐通寶」	
4623	錢			「天禧通寶」	
4624	錢			「洪武通寶」	
4625	錢			「元祐通寶」	
4626	錢			「元豐通寶」	
4627	錢			「大觀通寶」	
4628	錢			「皇宋通寶」	
4629	錢			「咸平元寶」	
4630	錢			「元祐通寶」	
4631	錢			「熙寧元寶」	
4632	錢			「開元通寶」	
4633	錢			「開元通寶(背上月文)」	
4634	錢			「紹聖元寶」	
4635	錢			「元祐通寶」	
4636	錢			「元祐通寶」	
4637	錢			「皇宋通寶」	
4638	錢			「皇宋通寶」	
4639	錢			「洪武通寶(背一)」	
4640	錢			「熙寧元寶」	
4641	錢			「熙寧元寶」	
4642	錢			「開元通寶(背右月文)」	
4643	錢			「皇宋通寶」	
4644	錢			「景德元寶」	
4645	錢			「熙寧元寶」	
4646	錢			「聖宋元寶」	

第6章 中世・近世の遺構と遺物

4647	銭			「皇宋通寶」	
4648	銭			「宣徳通寶」	
4649	銭			「治平元寶」	
4650	銭			「元祐通寶」	
4651	銭			「元祐通寶」	
4652	銭			「皇宋通寶」	
C区					
4277	五輪塔水輪	長径:(150mm)短径:(120mm)高さ:92mm重量:990.0g破片	榛名二ツ岳軽石		整形は良。全面磨き。上面は平坦・下面より肉厚を30~50mmに保つ様に凹あり。
4278	五輪塔水輪	長径:156mm短径:149mm高さ:866.2g完形	榛名二ツ岳軽石		整形粗雑。一部に平鑿の加工痕あり。下面に径95mm、深57mmの播鉢状の凹あり。上面はほぼ平坦。
4279	五輪塔水輪?	長径:111mm短径:93mm高さ:65mm重量:418.8g完形	榛名二ツ岳軽石		整形粗雑。各部に平鑿の加工痕を残す。上面は平坦。下面に径57mm、深25mmの播鉢状の凹あり。
4280	五輪塔水輪	長径:123mm短径:118mm高さ:83mm重量960.0g完形	榛名二ツ岳軽石		整形やや良。一部磨き。上面は平坦。下面に径62mm、深16mmの皿状の凹あり。
4281	五輪塔火輪?	長径:230mm短径:184mm高さ:113mm重量:3,350g完形	榛名二ツ岳軽石		整形粗雑。各部に平鑿の加工痕あり。下面に径125mm、深52mmの播鉢状の凹あり。
4282	五輪塔水輪	長径:241mm短径:183mm高さ:95mm重量:3,150g完形	榛名二ツ岳軽石		整形粗雑。各部に平鑿の加工痕あり。45面が平坦。下面に径173mm、深57mmの播鉢状の凹あり。
4283	五輪塔水輪	長径:197mm短径:176mm高さ:116mm重量:3,680g完形	粗粒安山岩		整形やや良。上面を荒く平坦に加工。下面に径94mm、深53mmの播鉢状の凹あり。
寺前					
4591	五輪塔水輪	長径:220mm短径:220mm高さ:130mm重量:4,370g完形	榛名二ツ岳軽石		整形は良。表面磨き。上面に皿状の深15mmの凹。下面に上径120mm、下径50mm、深65mmの播鉢状の凹。舍利容器・経典容器の可能性あり。
4592	五輪塔水輪?	長径:205mm短径:190mm高さ:125mm重量:2,040g一部欠	榛名二ツ岳軽石		整形やや良。上面に上径100mm、深35mmの播鉢状の凹。下面に径90mm、深32mmの播鉢状の凹。下面に葉研状の彫り込みあり。転用か。
4593	五輪塔火輪?	長径:220mm短径:180mm高さ:120mm重量:2,420g一部欠	榛名二ツ岳軽石		整形粗雑。上面に径70mm、深17mmの播鉢状の凹。下面に径90mm、深35mmの播鉢状の凹あり。



## (9) 表土出土遺物

4594	五輪塔水輪?	長径:233mm短径:183mm高さ:131mm重量:2,690g完形	榛名二ツ岳軽石	整形粗雑。各部に平鑿の加工痕を残す。下面に径79mm、深36mmの楯鉢状の凹あり。	
4595	五輪塔水輪?	長径:136mm短径:120mm高さ:83mm重量:690g完形	榛名二ツ岳軽石	整形粗雑。各部に平鑿の加工痕を残す。下面に径60mm、深7mmの皿状の凹あり。	
4596	五輪塔水輪?	長径:134mm短径:132mm高さ:76mm重量760g完形	榛名二ツ岳軽石	整形粗雑。各部に平鑿の加工痕及び、線状の刃傷を残す。下面は平坦で径は52mm、深24mmの楯鉢状の凹あり。	
4597	五輪塔水輪?	長径:(197mm)短径:171mm高さ:105mm重量:2,170g $\frac{1}{2}$ 欠	榛名二ツ岳軽石	整形粗雑。各部に平鑿の加工痕を残す。下面に径60mm、深86mmの楯鉢状の凹あり。	
4598	五輪塔水輪?	長径:(140mm)短径:(85mm)高さ:70mm重量:460g $\frac{1}{2}$ 欠	榛名二ツ岳軽石	整形粗雑。下面は平坦、径は52mm、深38mmの楯鉢状の凹あり。	
4599	五輪塔水輪?	長径:148mm短径:133mm高さ:100mm重量:970g完形	榛名二ツ岳軽石	整形粗雑。上面は平坦、下面に径73mm深29mmの楯鉢状の凹あり。	
4600	五輪塔空輪?	長径:121mm短径:111mm高さ:99mm重量:990g完形	榛名二ツ岳軽石	整形粗雑。下面に径59mm、深18mmの楯鉢状の凹凸あり。	
4601	五輪塔空輪?	長径:975mm短径:935mm高さ:60mm重量:267g完形	榛名二ツ岳軽石	整形粗雑。各部に平鑿の加工痕を残す。下面は平坦で径56mm、深21mmの楯鉢状の凹を残す。	
4653	銭			「天祿通寶」	
4654	銭			「熙寧元寶」	
4655	銭			「寛永通寶」(江戸深川千田新田)	
4656	銭			「寛永通寶」(江戸深川千田新田)	
4657	銭			「元祐通寶」	
4658	銭			「寛永通寶」	
4659	銭			「寛永通寶」(越後高田)	
4660	繩	後述			

## 1 小柄と穂先残欠(4293)

《観察》差し裏用小柄である。小柄は長9.7cmで、やや長寸である。金属種は、錆色及び、地金色

## 第6章 中世・近世の遺構と遺物

から銅を主材としている。表面には綾状の意匠が施されるが、割れの裏側から見て施文は打ち出しではない。裏は無文である。継は棟側に臘付接合面が見え、1カ所である。

小刀は、鉄製で残欠であり刃部1.8cm、茎部6.6+2cm以上が割れ口から窺える。小刀は重ねも厚く、しっかりした片切刃の形をとる。

《考察》小柄の長さがやや長寸である点、継の接合が1カ所である点は、江戸時代でもやや遡る時代の形と技法に通ずるが、綾状をなす単調・質素な施文は中期以降の社会・世状を反映しているとも見て取れる。小刀の断面形状は、片庵棟状を呈しており江戸時代前期以前の丸棟とは異なることから、江戸時代後期の製作（新々刀期）としてさしつかえない。

### 2 目 貫 (4336)

《観察》二匹獅子の表目貫である。金属種は割れ口が素銅色ではなくやや紫味をおびるため、四分一（銅四・銀一）など銅を母材とする合金であろう。割れ口からすると脆さがあるため銅より硬い性質と考えられる。表面は金アマルガムと考えられる金色絵が全面に施される。金品位はやや白く銀を混えるものと察せられる。製作については、裏面に臘型による流し込み痕と内面の座が見られ、器肉は厚く、しっかりしている。表面は型押後に細かな獅毛の毛彫が刻まれ、肉置は臘型の凹凸に起因するため二匹の間に多少の差がある。

《考察》当団調査例における目貫の出土例は『清里・陣場遺跡』（財群馬県埋蔵文化財調査事業団）1981P,249にある短刀目貫1点に限られ、出土遺物種としては数の少ないものである。形状は、獅足部が明瞭な三ツ足、斑文が木瓜形、洲浜形を取らず厳密な意味での家彫（室町～江戸幕府の金座管理・支配に当たり、將軍直接の抱金工師後藤家の人々）とは異なるが意匠の大脈において近似している。構図、足のひらき、獅頭のみ・口・鼻などがそれである。従って、本例は後藤家彫が町彫との混交の中で現れた以降の例ではなく、家彫の命脈が保たれている江戸時代初頭以前の所産と考えられる。仔細(1)に見れば、幅広の尾の形状、全体に肥えた形状は、第六代の後藤榮乗（1577～1617）の頃以前であるので本例は16世紀代の数少ない倣後藤の地方金工の製作と鑑せられる。

(1) 佐藤寒山・若山泡沫『刀装小道具講座2 後藤家編』（雄山閣） 1972

### 3 鉢 (4660)

《観察》銅鑄が出た金属製で、恐らくは素銅（精練銅）・山銅（精練不充分銅）と見られる。棟は山形をなし庵棟である。

《考察》側面形は、刀身側が短く、身幅側の長い長方形をなしているの、正方形に近い近世の鉢よりも古出形態であり、内の薄い点からも、室町時代以前（室町時代を含む）と考えられる。板金の合わせとなる臘付は刃側でなされているが、材質は良くわからない。

（大江正行 当事業団専門員）

## 第7章 調査の成果と問題点 — 中世・近世 —

## 第1節 中世・近世の遺構と遺物

- 1 遺物 A 種類別の特徴 イ磁器 ロ施釉陶器 ハ焼締陶器 ニ土器  
 a土師質土器 b瓦質土器 b1鍋・盤 b2コネ鉢・摺鉢  
 b3火鉢・釜など ホ金属器 aキセル b銅銭
- B 時代別の特徴 イ14世紀 ロ15世紀 ハ16世紀 ニ17世紀 ホ18世紀  
 ヘ19世紀 ト小結 チII地区天明3年直前遺物
- 2 遺構の時期認定
- 3 遺構群の性格 A 寺前地区 イ中世 ロ中世から近世 ハ近世  
 B 清水地区 イ中世 ロ中世から近世 ハ近世  
 C 長者屋敷地区 イ中世 ロ中世から近世 ハ近世  
 D 小結 イ中世 ロ中世から近世 ハ近世
- 4 伝承とその背景 A 佐野源左衛門常世 B 藤原定家 C 放光寺 D 夕日長者  
 E 残存地名

## 1 遺物

## A 種類別の特徴（石造物を除く）

本遺跡から出土した中・近世の遺物はかなり多く、ここに報告しただけで約1,900点に達する。未報告の破片の量はこの数倍になる。ここでは、各遺物の種類ごとの特徴をまとめて示し、各種の条件により時期の判明するもの、あるいは新旧関係を考えられるものをあげて、編年的な概要を提示したい。

イ 磁器<sup>2</sup>

報告した磁器は、総数76点である。産地別では、竜泉窯系の青磁5点・景德鎮民窯系の青花白磁1点・有田長吉谷窯系の染付白磁1点そして残りの69点は有田を主とする肥前系（伊万里）の染付白磁（青磁染付2点を含む）である。器種別では、大部分が碗類及びこれに伴う蓋で、皿類は11点（竜泉窯系青磁1点・景德鎮民窯系1点・有田長吉谷窯系染付1点・伊万里染付8点）、そして香炉3点（竜泉窯系青磁）さらに碗類を転用した印地（竜泉窯系青磁と伊万里染付）が2点見られる。

碗類では、14世紀代の竜泉窯系青磁で印地転用のものが1点（4053）ある他は全てが17世紀後半以降の伊万里で肥前陶磁器の編年によれば、IIc期からIV期のものである。17世紀後半と考えられるものは、「大明年製」の銘を持つもの（4024）・見込みに蛇の目状の釉剥ぎが見られるもの（4018）など13点がある。18世紀前半のものはいわゆる「くらわんか茶碗」で、「み」字及びその

## 第7章 調査の成果と問題点

崩体銘をもつものが6点(4063など)あり、型紙摺(4020)・コンニャク判(4048)・網目文(4038)なども見られ、総数は24点である。18世紀後半のものは、青磁染付(4050)・小丸碗(4041)など8点、19世紀前半のものは広東碗(4078)・端反碗(4077)・筒碗(4060)など9点、19世紀後半のものは型紙摺(4055)など4点である。

皿類は、上記15世紀前半の竜泉窯系青磁(2719)・16世紀初頭頃と思われる景德鎮民窯系青花(4037)そして17世紀末頃の有田長吉谷窯系染付大皿(4036)が特筆される。17世紀後半のものは、他に染付輪花皿(4035)があり、18世紀前半の「くらわんか皿」にはコンニャク判五弁花を見込みに持つもの(4032など)そして渦福字銘を持つ手描五弁花のもの(3834)など6点見られ、さらに18世紀後半のものでは、見込みを蛇の目状に釉剥ぎをした染付青磁(4029)がある。

調度具の香炉に竜泉窯系青磁が、3点見られる(4051、4052、4054)。4051は、やや器形が異なり、皿状のものになるかも知れない。いずれも13から14世紀のものだが、竜泉窯系青磁5点のうち香炉の多いことに注意したい。

### ロ 施釉陶器<sup>3</sup>

施釉陶器は、数量・器種共に極めて多い。報告したものは、碗類が62点、皿鉢類が37点、摺鉢が15点、片口鉢・鍋・徳利・瓶・甕など調理・貯蔵具類が21点、香炉・灯火器などの調度具が22点である。産地別では、碗類の半数程度と鉢類が唐津系の他は、ほとんどが瀬戸美濃系である。

碗類は、瀬戸美濃系が33点、唐津系が28点、豊前上野系が1点である。瀬戸美濃系では、16世紀後半のものとして天目(4003)・灰釉(3979)が見られる。天目は、その後17世紀末のものまでである。17世紀前半は、灰釉の小碗(3984)が1点あるだけである。17世紀末には、掛け分けの尾呂碗(3991)や飴釉のもの(3994)が急激に出現し、18世紀初頭までのこの両者は総数14点に達する。18世紀には、他に腰錆(3999)が現れ、19世紀初頭までのものが続いている。また瀬戸黒が2点(4005、4471)見られる。

唐津系のものは、17世紀後半には灰釉のもの(4000)や京焼風の鉄絵(4086)があり、また同じ頃に上野の鉄絵(4001)がある。18世紀前半になると特徴的な灰釉のもの(3975など)や陶胎染付(4009など)・陶胎鉄絵(4087)が大量に現れ、報告したもののだけで21点になる。前者の内器形が異なる3980には、「富永」の刻印が押されている。また刷毛目では、現川のもの(3998)や皿に近いもの(4239)が見られる。

皿類は、全て瀬戸美濃系であり、食膳用のものと灯明用のものに大きく分かれる。前者は、16世紀後半のものとして灰釉輪花皿(4094、4538)・灰釉印花皿(3962)・志野皿(4327)が見られる。また17世紀前半には、緑釉菊皿(3969)・灰釉鉄絵皿(3960)・志野鉄絵皿(3961)があり、後半では輪髡皿(3964)が登場する。後者は、18世紀前半代のものばかりで油皿(3842など)・受け皿(4102など)ともに飴釉もしくは錆釉である。なお17世紀後半の志野皿(3967)は、灯明皿として使われている。

報告した鉢類7点は、全て唐津系である。17世紀後半代と考えられるものには、鉄絵(3955)

と三島手(4535)があり、18世紀前半代のものには二彩上絵(3950)・刷毛目(3954)そして青緑釉で蛇の目状に見込みを釉剥ぎしたもの(4028)がある。

錆釉の摺鉢の内、口縁部の形状が分かりある程度時期判定しうるものは9点である。16世紀前半のものとしては3927が、後半のものでは3918と3922がある。さらに17世紀前半では3506が相当する。17世紀後半では、4466と4522があり、18世紀前半はやや不明瞭だが、3833と3926が17世紀後半に続くものとして位置づけたい。

調理具は、片口鉢が8点あり、17世紀後半の鉄釉のもの(3945)・18世紀前半の灰釉のもの(3943)と続き、18世紀末の灰釉の鉢(3951)までみられる。鍋は、外部に耳を持ち長石釉地に染付笹文があるもの(3635)と片口の灰釉のもの(3947)があり、前者は19世紀前半、後者は後半と考えられる。錆釉の茶釜(3930)も1点出土した。

貯蔵具は、甕類が鉄釉の四耳壺(4091)など17世紀前半のものが4点あり、また瓶・徳利は柿釉のもの(3986)など5点ある。このうちには唐津系の陶胎染付(4084)も含まれており、いずれも17世紀後半のものである。同期のものとも思われる飴釉の水注(4092)も出土している。

調度具は、香炉が13点あり、17世紀後半には鉄釉で高台を持つもの(3931)と錆釉の脚部をもつもの(3937)が見られ、18世紀前半には飴釉で外面に菊花状の印花のあるもの(3935)などがある。その他仏飯器(4082)・天目台(4097)も見られる。灯火器は、乗燭が5点あり、18世紀前半から19世紀前半までのものである。

#### ハ 焼締陶器<sup>4</sup>

報告したのは14点で、このうち11点が摺鉢で最も多く、甕が2点、甕胴部を転用した印地が1点、そして器形不明のものが1点である。産地別では、摺鉢が丹波・信楽・泉州堺系で、その他は常滑系である。

摺鉢は、17世紀後半のものとしては丹波系(3917)があり、18世紀前半には信楽系(4447)と泉州堺系(3928)が入ってくる。その後堺系は、19世紀前半(4504)まで続いている。3923は、器形がやや異なるが、焼成状態は堺系に近い。

甕は、4104が13世紀後半から14世紀前半までの間に位置づけられる。4105は器形不明で、置き台のようにも見えるが、胎土・焼成は常滑に似ている。

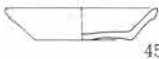












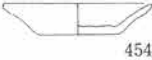
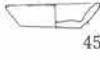




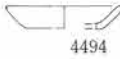





#### ニ 土器

上述以外の焼物をすべて土器として扱う。この中では、「かわらけ」と通称されることの多い酸化炎焼成を主とする皿状のものを土師質土器とし、その他の各種容器とこれに類するものを瓦質土器と総称し(「軟質陶器」と呼ばれるものも含む)、瓦などを土製品とする。

##### a 土師質土器

報告したものは、63点である。器形は全体に大小に分けられ、便宜的に大形のものを皿、小形のものを小皿とする。さらに大形の中には高さに比べ底径の小さい杯形のものもある。そしてまずこの器形にとらわれずに胎土・焼成状態により次のように分類した。

第7章 調査の成果と問題点

	A 種	B 種	C 種
14 C		<p>B 1</p>  <p>4564</p>  <p>2877</p>  <p>2873</p>  <p>2716</p>	<p>C 2</p>  <p>2721</p>  <p>2771</p>
15 C		<p>B 2</p>  <p>4553</p>  <p>4478</p>  <p>2726</p>	<p>C 2</p>  <p>2760</p>  <p>2878</p>
16 C	<p>A 1</p>  <p>4326</p>  <p>3912</p>	<p>B 2</p>  <p>4546</p>  <p>4547</p>  <p>4507</p>  <p>4510</p>  <p>4508</p>	<p>C 1</p>  <p>4211</p>
17 C	<p>A 2</p>  <p>4494</p>  <p>3901</p>  <p>3851</p> <p>A 3</p>  <p>3596</p>	<p>B 3</p>  <p>4523</p>  <p>4477</p>	

第856図 土師質土器皿類の分類区分

A種 砂粒・金属鋳物粒・石英粒を含む。硬質赤・黄褐色（A1）・やや軟質暗褐色（A2）・軟質赤・黄褐色（A3）

B種 砂粒・鉄分粒を含む。硬質灰・黄褐色（B1）・やや軟質黄褐色（B2）・軟質白黄色（B3）

C種 混入物を含まない。硬質灰黒色（C1）・軟質白黄・灰色（C2）

硬質とは撫でて粒子がとれないもの、軟質とはとれるもので、やや軟質とはその中間の程度を示すものである。

この胎土の種別は、おおまかな産地の差を意味するものと考えられる。それぞれの分類の中には器形の差がかなりあるが、これは本質的に粗製されたこの種の土器にとってそれほど意味があることとは思われない。むしろ各産地の中での焼成状態の差の方が時間的なものを示しているのではないかと考えて分類編年を行ってみた。（第856図）

14世紀代に想定されるのは、B1種とC2種の白黄色のものである。皿・杯・小皿の3形態があり、多くは丁寧な回転調整がなされている。これらの内でも焼成の最も良好な寺前地区111土坑の4564を古い段階のものと考えたい。この土坑からは南宋銭が出土しているため、14世紀に比定する。

15世紀代は、B2種の硬質のものやC2種の灰色のものである。器種構成は、前代と基本的に同じである。B2種のは、回転調整が雑になってきている。4553の寺前地区33土坑は南宋銭が、2760のA区14溝は明銭が出土している。

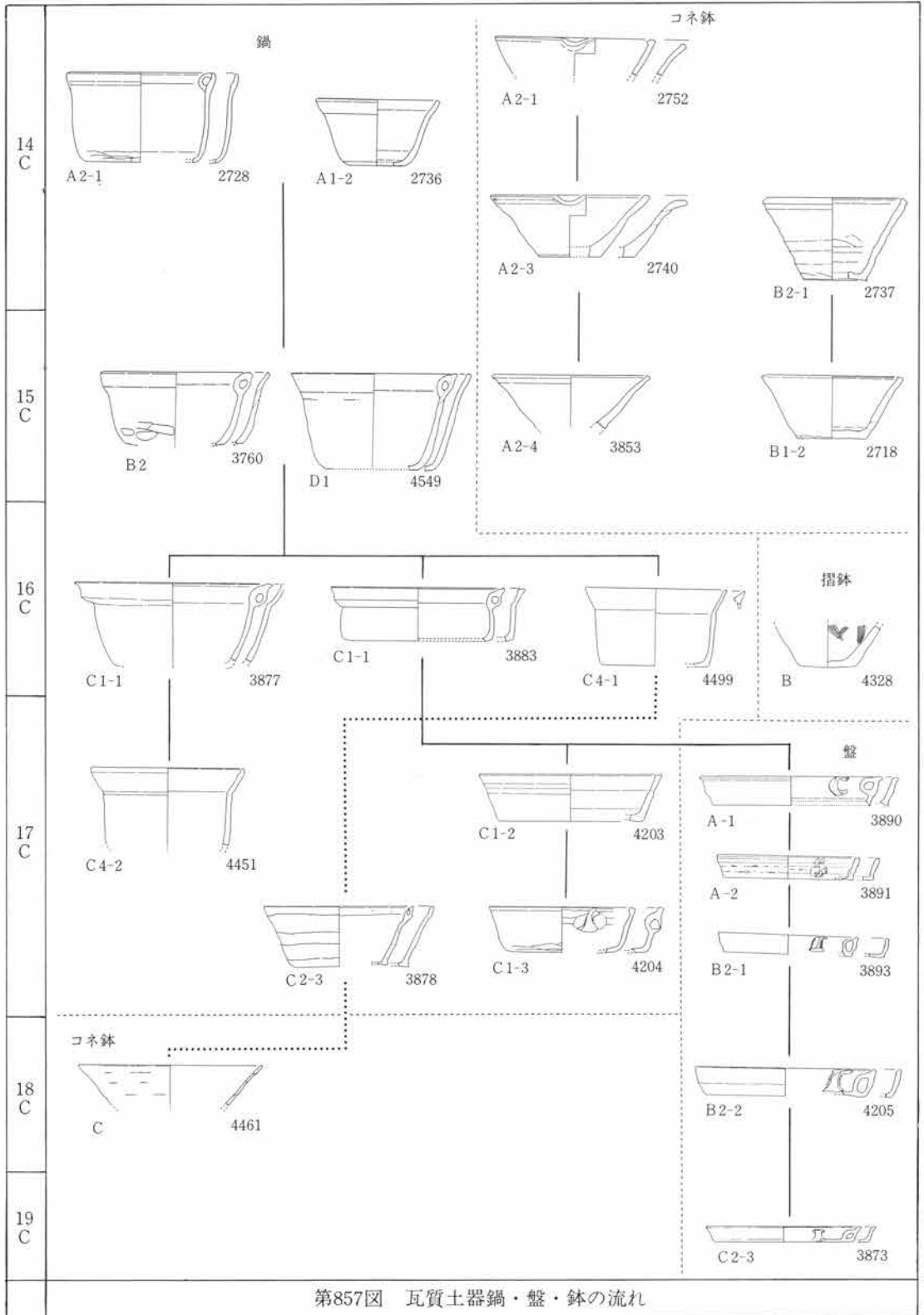
16世紀代には、新しくA1種が現れ、B2種の軟質のもの及びC1種と共存するとした。杯形ものは消滅し、皿形のものも全体に高さが低くなる。粗製のB2種と比べ、A1種はかなり精製の焼きの良いものである。しかし、伴出する施釉陶器より16世紀後半埋没と考えられるD区7井戸より4326が出土しているため、A1種は16世紀代に位置付けるのに無理はない。またB2種は、前代のものとの連続性があるため16世紀に想定することができる。C1種は、還元焼成に近く他のものとの関連性が薄い、A1種の小皿とやや器形が似ており、同じC区1館の出土のためここに入れた。

17世紀代は、A2種とA3種そしてB3種が相当する。全体に粗製であるが、4494は特に砂粒が多く焼成温度も低い還元のものである。また3596などのA3種は、他の全てと異なって回転方向が右である。B3種も軟質で粗製大量生産の特徴を持つものが、寺前地区31溝からかなり多く出土している。A2種の出土遺構はC区1館や寺前地区1館など伴出遺物に幅があるが、3851のC区6溝はキセルより17世紀後半と考えられるため、この年代で大きな相違はないだろう。B3種も共伴の施釉陶器より17世紀代として問題ない。

#### b 瓦質土器<sup>5</sup>

瓦質土器には、煮炊具の鍋・盤、調理具の鉢（摺鉢・コネ鉢）そして火鉢・釜などがある。以下それぞれを分けて見てみる。

第7章 調査の成果と問題点



第857図 瓦質土器鍋・盤・鉢の流れ



b1 鍋・盤 (第857図)

報告したものは、鍋が63点、盤が16点である。この場合、盤とは内耳を持つもので耳部が器高の半分以上を占めるいわゆる「ほうろく」形で耳は1対2の計3個のものをさす。それ以外が、鍋と称し、耳は一对である。

まず鍋は、内面の耳部の下位に蓋受けの機能が考えられる稜が普遍的に見られるが、この稜から口唇部まで(蓋受け部とする)の形態の差で次のように分類した。なお、口径が35cm程度を大形、30cm程度を中形、25cm以下を小形とする。

- A種 蓋受け部が小さく受け口状のもの。耳部は小さい。還元焼成のもの(A1)と酸化焼成後に還元処理されるもの(A2)がある。体部内外面は、コバメ調整されている。中形が大半であるが、A1種に小形が1点見られる。資料数は、24点である。
- B種 蓋受け部がやや長く斜傾するもの。酸化焼成後還元処理されるが、軟質のもの(B1)と硬質のもの(B2)がある。調整は、コバメの他に削り・布当てなど各種あり、また還元処理の状態もいろいろある。資料数は6点しかないが、全て中形である。
- C種 蓋受け部が大きく外傾するもの。耳部も多種に比べ大きい。さらに特徴的なことは、大形・小形・盤形の3形態があることである。この特徴を備えながら、胎土・焼成状態により4種に分かれる。鉄分・砂粒・石英粒を含む酸化後還元処理のもの(C1)、砂粒を多く含む還元のもの(C2)砂粒を多く含む酸化後黒色還元処理したもの(C3)そして砂粒を多く含む酸化後還元処理のもの(C4)である。この4種は、基本的に生産地の差と考えられる。資料数は、28点である。
- D種 蓋受け部がほとんど傾斜しないもの。砂粒多く含む酸化後弱く還元処理したもの(D1)酸化のもの(D2)そして還元のもの(D3)に分かれる。大形と中形の形態があるが、資料数は7点である。

次に盤は、以下のように分類した。

- A種 耳部が体部から出るもの。砂粒・鉄分を含む酸化で弱く還元処理をする。資料数は2点。
- B種 耳部が底部から出るもの。酸化後弱く還元処理したもの(B1)と黒色還元処理をしたもの(B2)に分かれる。資料数は12点。

これらの各分類は基本的に生産地と大きな時代差を示すと考えられ、それぞれの中に時期もしくは生産段階差と思われる形態及び焼成状態の差がある。これを小期とする。各分類と小期で年代観を推定する資料は、次のようになる。

鍋 A1-1 14世紀後半。焼成硬質。14世紀末の板碑(2743)を出土したA区1館よりのもの(2733)がある。

A1-2 14世紀末。焼成軟質。A区1館よりのもの(2736)があり、A1-1と大きな差は考えにくい。

## 第7章 調査の成果と問題点

- A2-1 14世紀後半。焼成硬質。2728などA区1館のものが大半。
- A2-2 14世紀末。蓋受け部がやや大きいもの(2732)。A区1館出土。
- A2-3 14世紀末か。焼成軟質。A2-1に続くものである。
- B1 15世紀か。確実な年代資料はなく内容も幅があるが、A2-3に続くと考えられる。
- B2 15世紀。2759は洪武通宝の出たA区14溝のものである。
- C1-1 16世紀後半か。3形態が出現する硬質の段階。C区1館下層より3877と3883が出土。C3-1と並行と推定される。盤A-1はここで誕生。
- C1-2 17世紀前半か。焼成軟質になり、蓋受け部の傾斜が弱くなった段階。小形の資料はない。C区1館下層よりの出土(3881)。C1-1に続くものである。
- C1-3 17世紀後半か。盤形しかなく、蓋受け部の傾斜が全くない(4204)。
- C2-1 16世紀後半か。焼成軟質。大形と小形しかない。寺前地区26溝や31溝(4512)の出土があり、これらの溝から伴出した施釉陶器より17世紀後半が下限になるが、C1-1との並行よりこの年代とする。
- C2-2 17世紀前半か。大形資料だけである。焼成は瓦に近い。
- C2-3 17世紀後半か。小形からの展開が想定される極めて退化した非実用の小さな耳を持つ鉢状のもの(3878)のみ。C1-1の小形のものと差が大きいのでこの段階を設定する。
- C3-0 16世紀前半か。蓋受け部が長大になり、形態は大形と小形。B1とC3-1をつなぐ段階と考えられる。
- C3-1 16世紀後半。酸化焼成。3形態が出現する段階。寺前地区31溝の資料(4513)が多いが、この溝の施釉陶器で古い段階の灰釉輪花皿(4538)の時期を当てる。
- C3-2 17世紀前半。焼成が中性に近い段階。寺前地区5溝の資料があり、18世紀前半が下限だが、C3-1とのつながりでこの時期とする。資料は大形のみである。
- C3-3 17世紀後半か。小形からの展開が想定されるC2-3に似た鉢状のもの(4202)のみ。同段階と並行とし、この年代を想定する。
- C4-1 16世紀後半。3形態が出現する段階。寺前地区1館と26溝の資料(4479, 4499)があるが、年代はC3-1並行とする。下記のD1に続く段階と考えられる。
- C4-2 17世紀前半か。蓋受け部の傾斜がやや弱まった寺前地区5溝の大形のもの(4451)のみ。18世紀前半が下限だが、前段階との連続でこの年代を当てる。
- D1 15世紀後半から16世紀前半か。B2に続くものと思われ、この年代を当てる。
- D2 16世紀前半か。いづれも大形で寺前地区1館の出土。D1と蓋受け部が似るためこの年代を当てる。
- D3 16世紀後半か。寺前地区31溝の大形のもの(4519)のみ。同溝のC-1段階各資料と並行と考え、この年代を当てる。
- 盤 A-1 16世紀末。鍋C1-1段階の盤形のものから生まれたと考えられる。胎土・焼成も同様で

ある。

A-2 17世紀前半。鍋C1-2段階と並行である。

B1-1 17世紀後半か。外面下位に鍋体部の名残のくびれを残す。A種の系統を引くもので、この年代を当てる。

B1-2 18世紀。外面下位のくびれが消滅。並行するB2-2よりこの年代を当てる。

B2-1 17世紀後半か。鍋C3-2段階に続くと考えられる。器形は、B1-1と同じ。

B2-2 18世紀。器形はB1-2と同じ。後述のようにII地区の天明の浅間山噴火直後の遺構よりこの段階のものが出土している。

B2-3 19世紀前半か。還元焼成で硬質。前段階よりやや変化が大きい。

以上のように、鍋と盤の分類編年をこの遺跡の資料を基本に行なったが、この流れから考えられる展開は概ね次のようなことになる。即ち、14世紀に中形の形態でかなりの斉一性をもって現れた鍋は、16世紀に大形のものの登場から始まり、ついには大・小・盤形の3形態が各地で生産されるという状況に至る。そして盤形鍋の中から完全な盤が出現し、17世紀にはほとんど盤が生産の主体を占めるようになる。このような理解は、従来の内耳土器の研究には見られず、盤形鍋は火鉢からの変化とされ、14世紀に位置付けられていた<sup>6</sup>。しかし細部の年代の誤差は否定できないものの、ここで報告した鍋C1-1段階から盤A-1段階への同一生産地での変化は確実である。

## b2 コネ鉢・摺鉢

内面に摺目のないものをコネ鉢、あるものを摺鉢とする。コネ鉢は14点、摺鉢は5点を報告した。胎土・焼成を基本とした分類は、次のようになる。

コネ鉢 A種 酸化焼成。還元処理をし砂粒を多く含むもの(A1)、同じく鉄分を多く含むもの(A2)そして還元処理を行わない軟質のもの(A3)に分かれる。A1種は右回転、A2種は左回転である。

B種 還元焼成。砂粒を多く含む軟質のもの(B1)、砂粒の少ない硬質のもの(B2)

C種 酸化後黒色処理をした軟質のもの。

これらは器形の差によって次のように細分できるが、資料数が少ないため時間差としての同定は他の遺物との関連で推定した便宜的なものである。

A1-1 14世紀中頃か。底部は完全に調整し回転方向は不明。(2720)

A1-2 14世紀後半か。底部無調整。(3482)

A2-1 14世紀前半か。口唇有稜。(2752)

A2-2 14世紀中頃か。口唇の稜に丸み。(3466)

A2-3 14世紀後半。口唇厚く内面に内稜。A区1館(2740)

A2-4 15世紀か。口唇薄く内面に内稜。(3853)

A3 15世紀か。

B1-1 14世紀中頃か。口唇受け口状。(3468)

## 第7章 調査の成果と問題点

B1-2 15世紀前半。口唇面取り。A区1井戸で青磁共伴(2718)。

B1-3 15世紀中頃か。口唇やや丸み、内面に稜。(4483)

B2-1 14世紀後半。口唇面取りで内外面に稜。A区1館(2737)。

B2-2 15世紀前半か。口唇面取りで稜なし。(2753)

C 18世紀。寺前地区9溝で陶磁器共伴(4467)。

新田郡尾島町東照宮古墓出土の元応2(1320)年墨書銘のある資料は、口唇の特徴は受け口状であり、上記分類の中ではB1-1種が最も近似している。しかし全体の形状は、口径が小さく深みがあるため、B1-1種はB2-1種に近い。そこで、14世紀中頃との年代観は、一応妥当性があると思われる。A種とB種は、基本的に同じ系統の調理具として考えられるが、C種は器壁が薄く軟質であり、大きな差がそれらとの間に見られる。

摺鉢 A種 還元焼成。

B種 酸化焼成。

A-1 17世紀。粗い摺目。寺前地区31溝の出土で(4551)共伴の陶磁器より当てる。

A-2 18世紀中頃。細かい摺目。寺前地区5井戸の出土で(4439)、寛永通宝の年代より想定。

B 16世紀。D区7井戸で施釉陶器が共伴。(4328)

資料数が少ないが、共伴資料があるため上記の年代には、大きな誤りはないと思われる。

これらの調理具は、後述するように施釉陶器と共に一連の流れの中で理解する必要がある。概略では、14から15世紀にはコネ鉢が盛行し、16世紀以降は施釉陶器と焼締陶器の摺鉢がこれに替わるが、それらの代替物として瓦質土器の摺鉢が少量存在したのだろう。

### b3 火鉢・釜など

上記以外の瓦質土器を、ここにあげてみる。

火鉢 内面が二次焼成を受けているもの。4例あるが、いずれも器形が大きく異なる。外側に把手のあるもの(3634、4362)と、内側に煮炊具をのせるための張り出し部分を持つもの(3848、4362、4662)に分かれる。4362は、両者の特徴を持つ。これらは時期を想定させる要素がほとんどないが、C区2館の3848とD区4溝の4662は近世の可能性が考えられる。

釜類 鋳を持つ釜(3869)は、竈構造に伴うと考えられ、共伴の盤より19世紀前半と思われる。鍋の釣り手と思われる破片(3597)も、18世紀以降のものであろう。

その他 印版と思われる文字状の陰刻のある長方形のもの(4606)があるが、これも時期は不明。

## ホ 金属器

ここでは、キセルと銅銭について述べる。

### a キセル

雁首 A種 脂返しが大きく屈曲し肩のないもの。A区6溝出土。(3852)

B種 脂返しの屈曲の小さいもの。C区1館出土。(4191)

吹口 A種 肩の形状が残るもの。C区1館出土。(4192)

B種 肩の形状が残らないもの。C区1館出土。(4190)

江戸での編年<sup>7</sup>によれば、雁首A種と吹口A種は17世紀後半、雁首B種と吹口B種は18世紀後半となる。

#### b 銅銭

本遺跡から出土した銅銭は、総数6,136枚に達する。このうち約97パーセントの5,992枚が、寺前地区136土坑の備蓄銭である。ここではこの備蓄銭を含めて全体的な銅銭の出土状況を概観したい。

まず同土坑とそれ以外の出土に分けた時代別の分布は、次の通りである。

	唐・五代	北 宋	南宋・金	明・朝鮮	古寛永	新寛永	寛永不明	銭種不明	計
136土坑	424	4,366	113	1,028	0	0	0	61	5,992
その他	4	82	4	15	14	16	7	2	144
計	428	4,448	117	1,043	14	16	7	63	6,136

このように全体の傾向としては、北宋銭に最大のピークがあり、続いて明・朝鮮銭から寛永通宝が並んでいる。また136土坑は既述のように寛永通宝は全く含んでいないが、これを15から16世紀の時点での標準的な銭種の傾向と考えた場合、その他のものは寛永通宝を除いてほぼ似た割合がみられる。次にその他の中で遺構に伴わない状態で検出された銅銭の状態を見てみる。

	唐・五代	北 宋	南宋・金	明・朝鮮	古寛永	新寛永	寛永不明	銭種不明	計
A 区	0	7	0	1	0	2	0	0	10
B 区	1	2	0	0	0	6	0	0	9
C 区	0	1	0	1	0	0	1	0	3
D 区	0	1	0	1	0	2	0	0	4
寺前地区	3	38	1	6	1	3	0	0	52
計	4	49	1	9	1	13	1	0	78

ここで分かるのは、BからD区については寛永通宝の割合が比較的高いのに対し、A区と寺前地区は舶載銭特に北宋銭が多いことである。この両区において明・朝鮮銭の流通以前の貨幣使用が顕著であったことを示すのであろう。

136土坑以外に複数の銅銭を出土した遺構は、次のものである。( )内は枚数。

北宋銭単独 A区74土坑(2) 寺前地区29溝(2) 寺前地区58土坑(2)

寺前地区113土坑(3)

北宋銭+南宋銭 寺前地区33土坑(2+1)

北宋銭+不明銭 A区319土坑(2+1) 寺前地区111土坑(3+1)

明銭+北宋銭 D区45土坑(1+6) 寺前地区1館(1+4)

古寛永+寛永不明 D区47土坑(11+4)

## 第7章 調査の成果と問題点

新寛永+北宋銭 寺前地区5井戸(1+1)

新寛永+南宋銭 B区10土坑(1+2)

寛永不明+明銭+北宋銭 C区1館(2+3+2)

土坑以外は、人為的な銅銭の埋納とは考えにくい。そのため、それらは重複する時代の混入とするべきである。それに対し土坑で異なった時代のものである場合は、当然新しい時代のものが埋納時期の上限となる。

### B 時代別の特徴 (第858図)

以上の種類ごとの遺物の様相に基づいて、ここでは各時期の遺物群の特徴をまとめてみたい。便宜的に世紀単位で分けたが、特に土器類についてはこれまで見たように共伴する陶磁器・板碑・キセル・銅銭などの時期判定がとりあえずなされているものによっている。ただし井戸・土坑・掘立の遺物については一括として扱ったが、溝・館の遺物はC区1館のように明確に大きな時代幅があるもの以外でも流れ込みなどを想定して、1世紀の幅は残した。また比較的時期資料の少ない16世紀以前については、誤差がやや大きい可能性はある。

#### イ 14世紀の遺物

煮炊形態は瓦質土器の鍋、調理形態も瓦質土器のコネ鉢、貯蔵形態は焼締陶器の甕、そして調度形態には土師質土器の皿と舶載磁器の香炉がある。土師質土器の皿は、供膳形態ではなく灯明皿であり、以後この性格は変わらない。全体としては鍋の出土量が最も多い。これは、使用量が多いためだけでなく、破損しやすいことも理由であろう。これに比べ相当数の使用が考えられる鉢・甕は、耐久力があるためか検出点数は少ない。供膳形態は焼物には見あたらず、漆器・木器が使われたとしか考えられない。

#### ロ 15世紀の遺物

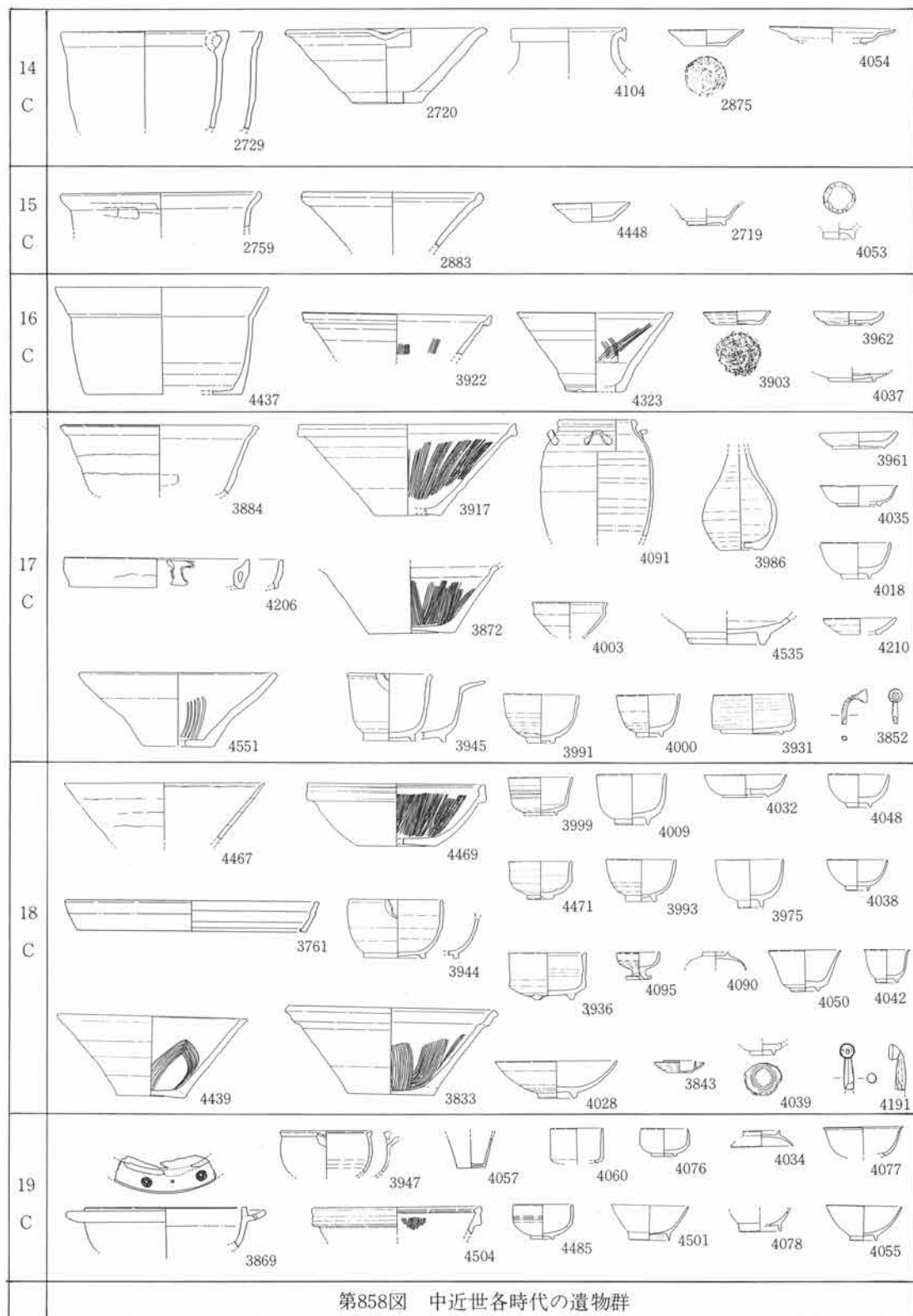
煮炊形態・調理形態は全く前代とは変わらず、瓦質土器の鍋・コネ鉢が使われている。調度形態には、土師質土器の皿と舶載磁器の皿がある。後者も全く供膳用に使われなかったとは断定できないが、量的には少ないため調度的要素が大きいと思われる。武器・遊技具の印地は、舶載磁器碗の二次使用であり確実にこの時期とは言えないが、上限としてここに含める。貯蔵形態は、前代と同様の存在が想定されるが、出土資料がない。

#### ハ 16世紀の遺物

煮炊形態と調理形態に、前代とは異なった多様化が発生する。前者は、瓦質土器の鍋に大形・小形・盤形の3器形が生まれ、さらに盤形から耳を三個持つ盤が出現する。これは、この時期の火処を含めた居住施設の変化を暗示するものである。後者は、コネ鉢が摺目のある摺鉢にとって変わられる。しかも摺鉢には瀬戸美濃系の施釉陶器と在地系の瓦質土器が並存している。使用量の増大が、産地を複数にしたと思われる。

ここで初めて供膳形態に瀬戸美濃系施釉陶器の皿が現れる。量的には少なく、やはり調度形態

第1節 中世・近世の遺構と遺物



第858図 中近世各時代の遺物群



## 第7章 調査の成果と問題点

的な使用がなされたかもしれない。調度形態には、引続き土師質土器の皿と舶載磁器の皿が見られる。後者は、従来の青磁に替わって青花が初現している。

### ニ 17世紀の遺物

この時期は、瀬戸美濃系の施釉陶器を中心に国内各地の焼物が搬入され始める。煮炊形態は、瓦質土器の鍋・盤が併用されるが、前者の比重は下がってきている。調理形態は、摺鉢に新しく丹波系の焼締陶器が加わり、瀬戸美濃系の施釉陶器と在地系の瓦質土器の三者が使われている。また瀬戸美濃系の片口鉢も登場する。貯蔵形態でも、瀬戸美濃系の四耳壺や徳利が見られる。供膳形態では、瀬戸美濃系の碗・皿が全盛を見るが、その中には調度的要素もある茶器も含んでいる。器形的には皿や鉢の伊万里・有田のものも調度として使われたと思われる。また広い意味で供膳と調度の役割を持つ喫煙用の銅製キセルが登場している。なおこの時期まで灯明皿として土師質土器が残っている。

### ホ 18世紀の遺物

前代とはさらに変化して、供膳形態を中心に肥前系の陶磁器が大量に入り、それらを中心に遺物の総量そのものが爆発的に増大した。

煮炊形態は、瓦質土器の鍋が消滅し盤が全盛を誇る。ただし従来の鍋の機能を完全に代替したとは考えられず、恐らく前代には出現していたと思われる鉄製品が主体的な役割を担ったと推定される。鍋の名残として瓦質土器の薄い鉢形のものだけが僅かに残っている。調度形態は、基本的に前代と変化しないが、焼締陶器は泉州堺系が中心になる。

供膳形態は、日常の食器と考えられる碗・皿は、ほぼ全てが肥前系のものになった。そして唐津系の施釉陶器は、碗類に一定の使用はあるものの、調度的な鉢類に広まっている。伊万里の磁器は碗・皿の大部分を占めている。瀬戸美濃系の施釉陶器の碗は絶対量は決して少なくないが、その使用は茶器的なものに移行している。そして瀬戸美濃系の中心はむしろ調度形態に変わり、乗燭などの灯明具・香炉・仏飯器などの新しい器種に変わった。

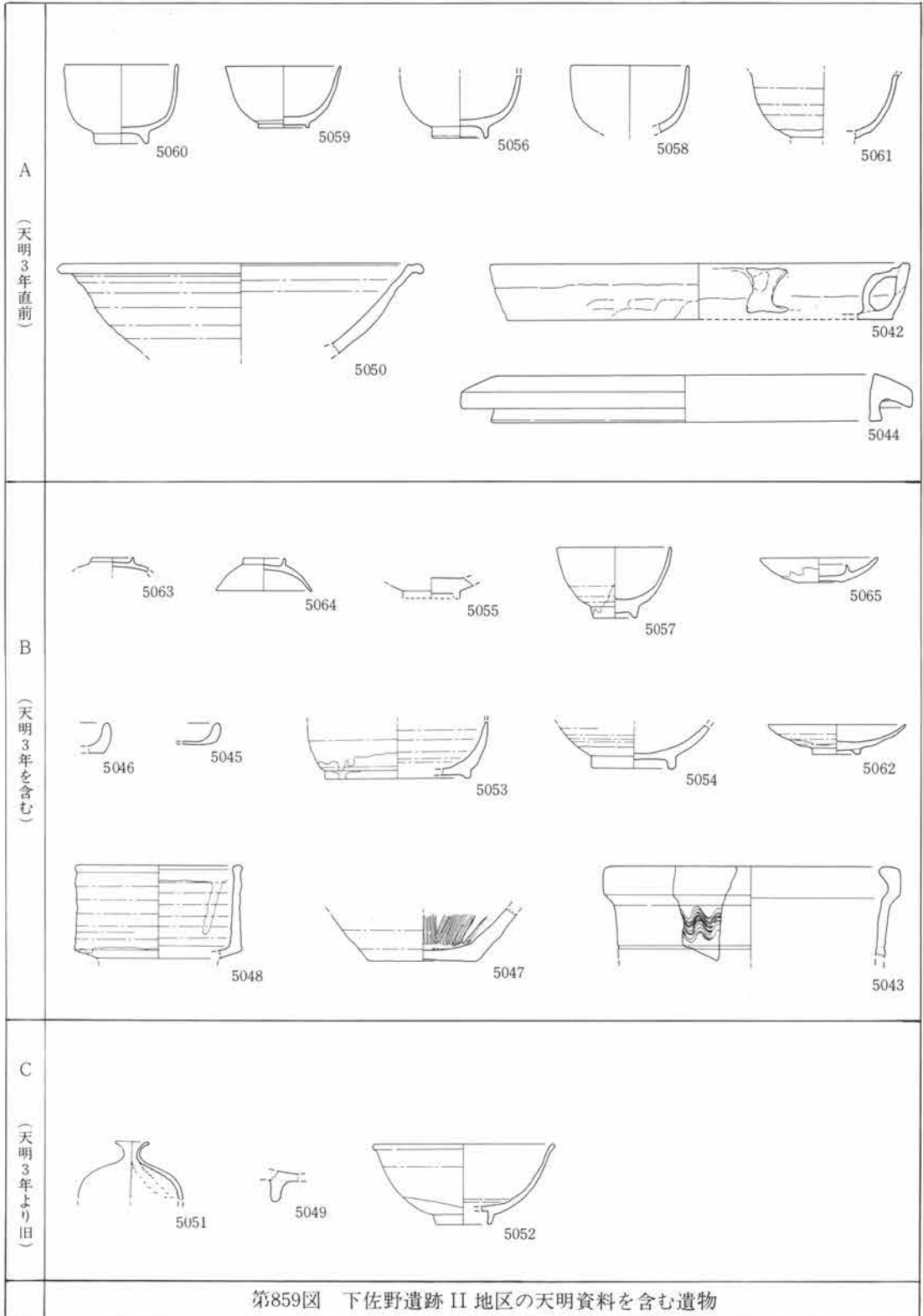
喫煙具の銅製キセルや遊技具の伊万里碗の二次使用の印地も見られる。

### ヘ 19世紀の遺物

この時期は、本来前代と同じ以上の遺物量と種類があるはずだが、遺物として取り上げたものはそれほど多くない。

煮炊形態では、瓦質土器の釜そして瀬戸美濃系の施釉陶器の鍋が新しく出現し、瓦質土器の盤と並存している。調理形態は、確実なものとして泉州堺系の焼締陶器摺鉢が残る。供膳形態は、前代と同様に伊万里磁器が完全に中心となり、碗類では器形的に多様になってくる。飯碗・茶碗・猪口などの用途別の分岐がなされたのであろう。瀬戸美濃系の茶器の系統を引く腰錆碗は、器形的に伊万里の小丸碗とあまり変わらなくなっている。これは、飲茶が日常の食生活の中にかかり入ってきたことを示すのではないだろうか。





第859図 下佐野遺跡 II 地区の天明資料を含む遺物

## 第7章 調査の成果と問題点

### ト 小結

このように世紀ごとの流れを見てきたが、これらは大きく分けて3時期に大別できる。

第Ⅰ期（14・15世紀） 日常的な生活具では、焼物では焼締陶器以外は土器が中心になっている。甕・コネ鉢・鍋が食生活の必需品である。これらとあまりに質の差の大きい舶載磁器の調度が不思議に共存している。

第Ⅱ期（16・17世紀） 盤が出現し供膳具に国産陶磁器が使われ始める。盤は鍋と異なって囲炉裏状の火処の設置を暗示し、それと共に主たる煮炊具が鉄製品に変わったと思われる。舶載・国産の染付の調度品が使われ、茶器も調度具的に使われる。一方、摺鉢や灯明皿に土器が残る。

第Ⅲ期（18・19世紀） 肥前系の碗・皿類、瀬戸美濃系の茶器・調度具を主体とし大量の器物が使われる。食器の種類が増え、飲茶も日常化する。盤・釜・摺鉢に土器が残るが、しだいに鉄製品や陶磁器などの他の種類のものに替わる。

### チ II地区天明3（1783）年直前の一括遺物

C区1館の埋没後の集石（道路）は天明3年の浅間山噴火の火山灰に覆われていた。しかしその大量の遺物は、道路構築のために敷かれたものでかなりの時期幅を持っており、基本的に天明3年が下限になることを意味するだけである。しかしI地区に隣接するII地区より出土した同地区の調査報告書には記載されなかった遺物には天明3年直前のものもあり、ここで同地区の末報告資料を紹介したい。<sup>8</sup>

天明3年直前の遺物（第859図A） 天明の火山灰をかたづけて埋めた土坑・井戸（6区84土坑・5井戸）からの出土。唐津系の灰釉の碗（5056、5058、5059、5060）と上絵の鉢（5050）、瀬戸美濃系の錆釉天目碗（5061）そして瓦質土器の盤（5042）・置き台（5044）がある。5060は磁胎に近い。5059は呉須絵があるが、胎土はやはり硬質。鉢の上絵は、青緑釉と鉄釉である。置き台は、竈に釜状の煮炊器を載せるためのものと思われる。とすれば、この時期に竈が普及していたことになる。

天明3年を含む時代の遺物（第859図B） 上記と同様の火山灰が詰まった溝（7区5・6溝）からの出土。明らかに時期の異なるものも含まれているため、Aとは扱いを分けなければならないが、ここでは併せて紹介する。5055は、14世紀の竜泉窯系の鉢である。5063と5064は、伊万里染付の蓋で、前者は手描五弁花、後者は発色良好な格子状の文様が描かれる。唐津系の青緑釉の陶器には、碗（5057）と皿（5062）があり、後者は見込みが蛇の目状に釉剥ぎがなされている。瀬戸美濃系のもは、長石釉の香炉（5048）・灰釉の灯明皿（5065）・鉛釉の鉢（5054）・同瓶（5053）そして錆釉の摺鉢（5047）がある。瓦質土器では、酸化の盤（5045、5046）と還元の花鉢（5043）がある。前者は、前記の盤の流れの中には見られなかったものである。

天明3年より古い遺物（第859図C） Aの土坑・井戸に壊された屋敷の側溝から出土したもの。5049は伊万里青磁の香炉で、脚部内面に菊花状の印花文がある。5051は伊万里染付の瓶

で、くらわんか手の発色で梅花文が描かれる。5052は唐津系の刷毛目の小鉢で、見込みが蛇の目状に釉剥ぎがなされている。

## 2 遺構の時期認定

これまで見てきたような遺物に基づき遺構を時期ごとに分けると次のようになる。なお井戸・土坑については新しい時期をとり、館・溝については遺物の時期を全てあげた。( )は銅銭単独。

### イ 14世紀の遺構

A区 1館、6溝、10溝、23溝、26溝、1掘立、2井戸、3井戸、12井戸、14井戸、293土坑、319土坑

B区 1井戸、5井戸

C区 1館

D区 1溝集石

寺前地区 111土坑

### ロ 15世紀の遺構

A区 12溝、14溝、1井戸、13井戸、2集石、(69土坑)、(74土坑)、(136土坑)

C区 6溝、1井戸、2井戸

寺前地区 1館、5溝、30溝、12井戸、33土坑、(58土坑)

### ハ 16世紀の遺構

C区 1館

D区 1溝集石、3井戸、7井戸、(45土坑)

寺前地区 1館、26溝、31溝、4井戸、不明遺構、(136土坑)

### ニ 17世紀の遺構

B区 11溝

C区 1館、6溝、71土坑

D区 1溝集石、(47土坑)

寺前地区 1館、5溝、8溝、9溝、26溝、31溝、33溝

### ホ 18世紀の遺構

B区 10土坑、(13土坑)

C区 1館、1溝、6井戸、26土坑

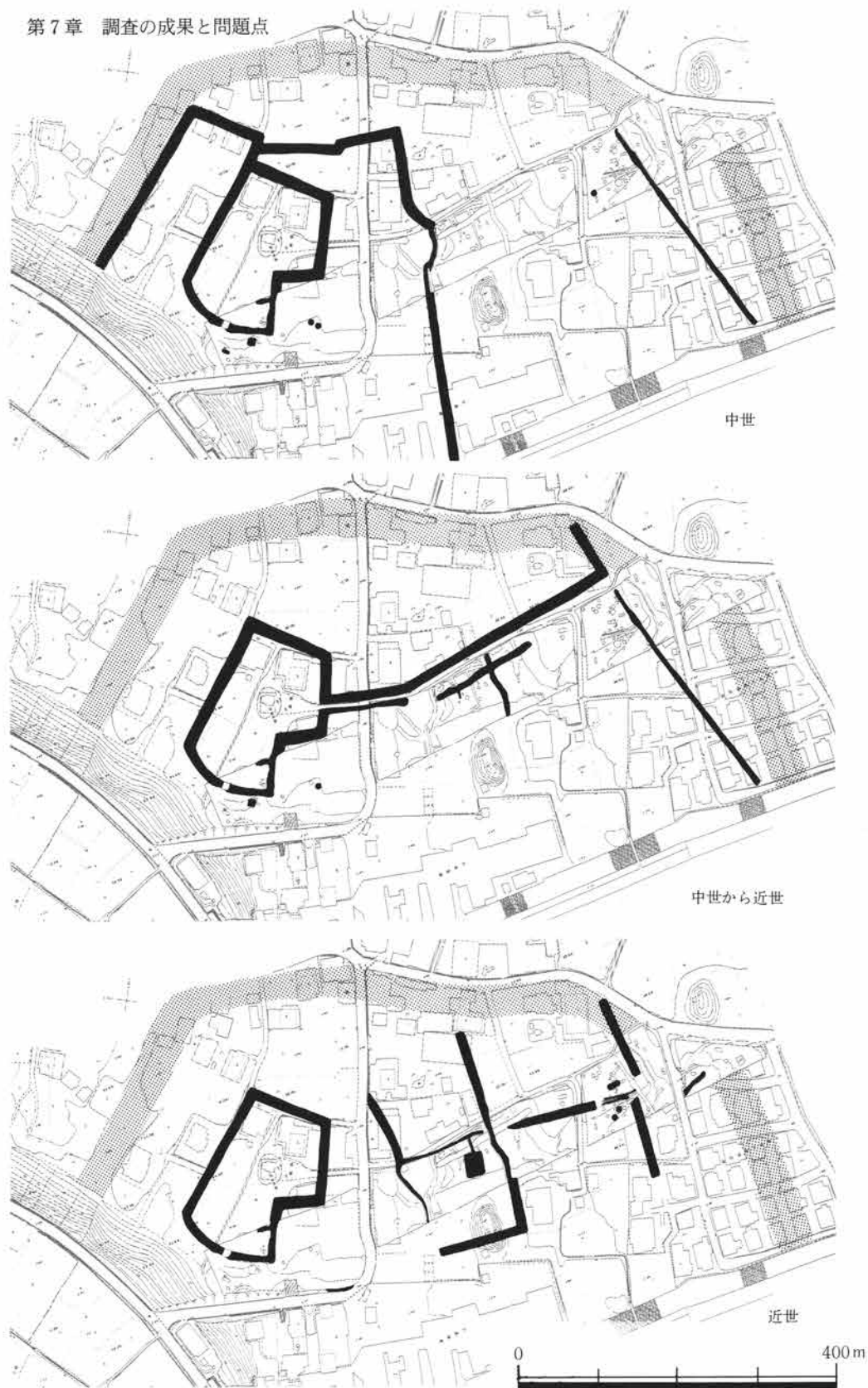
D区 1溝集石

寺前地区 2溝、5溝、6溝、9溝、22溝、33溝、3井戸、5井戸

### ヘ 19世紀の遺構

C区 64土坑

寺前地区 1館、7溝、9溝、29溝



## 3 遺構群の性格

ここでは、各調査区の遺構群の性格を時期別にまとめた。なお以下、調査区は寺前地区（寺前地区）・清水地区（BCD区）・長者屋敷地区（A区）と小字名をもって呼称し、また中世（14・15世紀）・中世から近世（16・17世紀）・近世（18・19世紀）との時期区分を用いる。

## A 寺前地区（第860図）（網は地割りに見られる大区画）

## イ 中世

特徴的な遺構は、1館・30溝である。1館は、常世神社を取り囲む堀の一部であることはほぼ確実である。そして地割りから考えると図のような北西側に張り出た部分の一部であろう。さらに30溝は、1館の南辺と似た走行を持っているため、1館を内堀とすれば外堀にあたるものと想定できる。この溝の東側での湾曲は、常世神社の南正面に当たっているため、大手の虎口のような部分と思われる。

このように考えれば、1館の内側は内郭そして1館と30溝の間は外郭となる。この外郭には1方形遺構・11井戸・12井戸・111土坑などのような、居住に関する遺構が検出されている。

全体としては、鳥川とその旧流路の低地に西と北を囲まれた台地に位置した館（以下、寺前館と呼ぶ）と言える。この時期の遺物は土師質土器の皿程度であるため、少なくとも今回の調査の資料ではそれほどの経済的な力をこの時期に館の主人公が有していたとは思われない<sup>9</sup>。

## ロ 中世から近世

特徴的な遺構は、5溝・26溝・31溝・136土坑である。26・31溝は、常世神社から南に下る現在の道とほとんど同じ走行であり、この時期にまだ存続していた内郭大手の道路の側溝と考えられる。そして31溝と直行する5溝は、新しい外郭線とすることができる。そして内郭に近い部分に五千枚以上の備蓄銭の埋納坑の136土坑が位置する。

ここで重要なことは、全体の規模が拡大したにもかかわらず外郭堀はそれほど大きくなく、またかつての外郭堀を横切る形で参道的な道路ができていることである。これは、この館の性格が軍事的なものより平和的なものに変化したことを示唆している。そして平和的なものとは、大量の備蓄銭に象徴される経済活動と考えられる。鍋類・搬入陶器の出土量の増加は、経済力に支えられた居住者の拡大を示している。

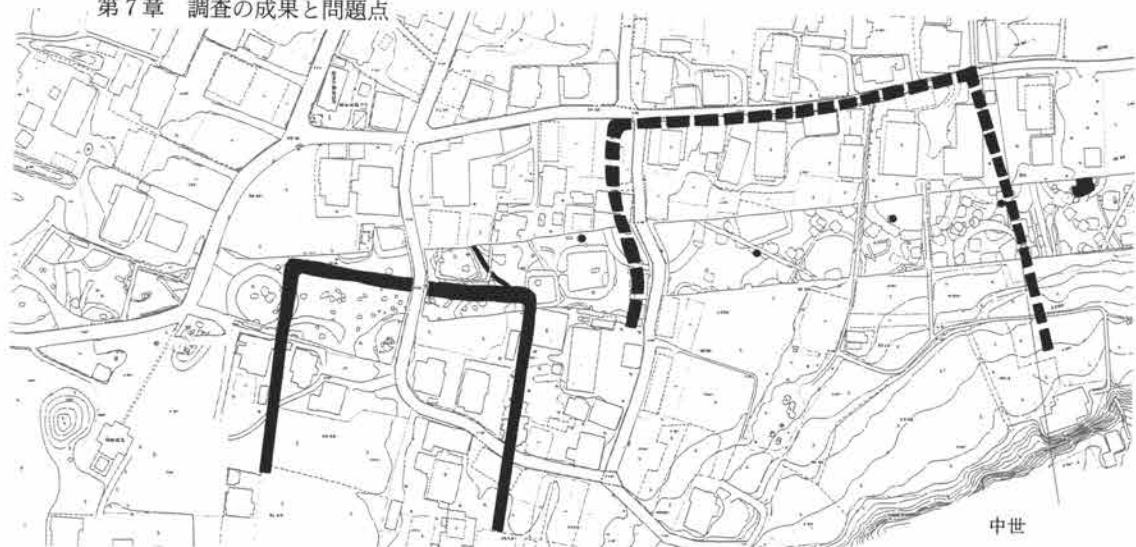
しかし全体としては、生活用具より銅銭の量が目立つことに現れているように、消費より収入活動の要素が中心と思われる。そこから考えれば、鳥川の舟運及び渡河権を掌握していた関所のような性格を有していたのかもしれない。

## ハ 近世

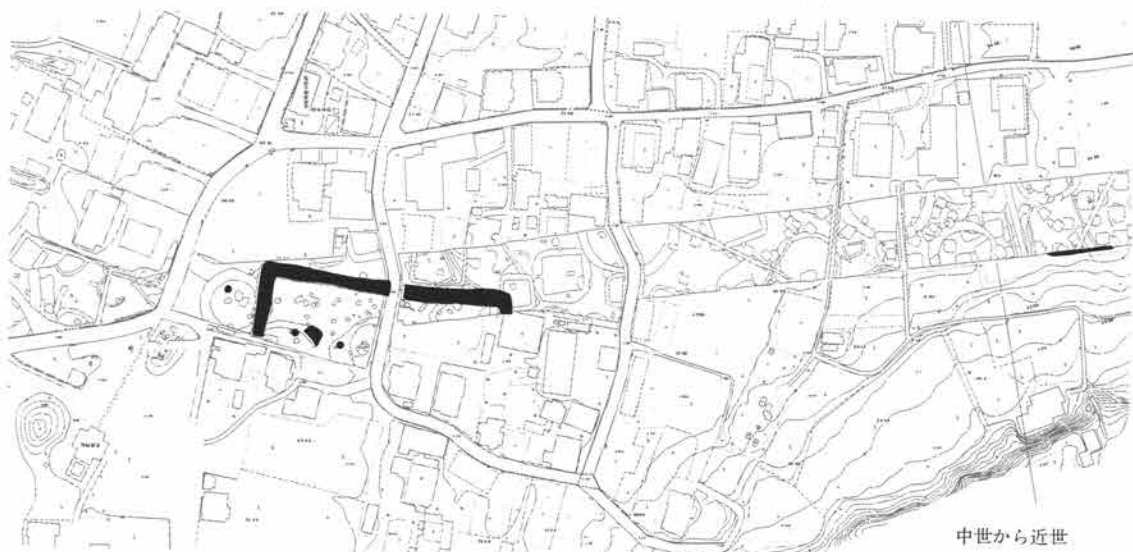
この時期は、2溝・9溝・22溝・29溝・33溝に特徴づけられる。これらの各溝は、屋敷の区画を意味するものと考えられる。図に示したような面積の似た方形の屋敷が南北に連なる状態が想定できる。9溝の北の集石土坑群は、19世紀段階の建物の地業の可能性はある。

遺物の量はそれほど多くないが茶器も出土しており、一程度の経済力を持っていた階層の屋敷

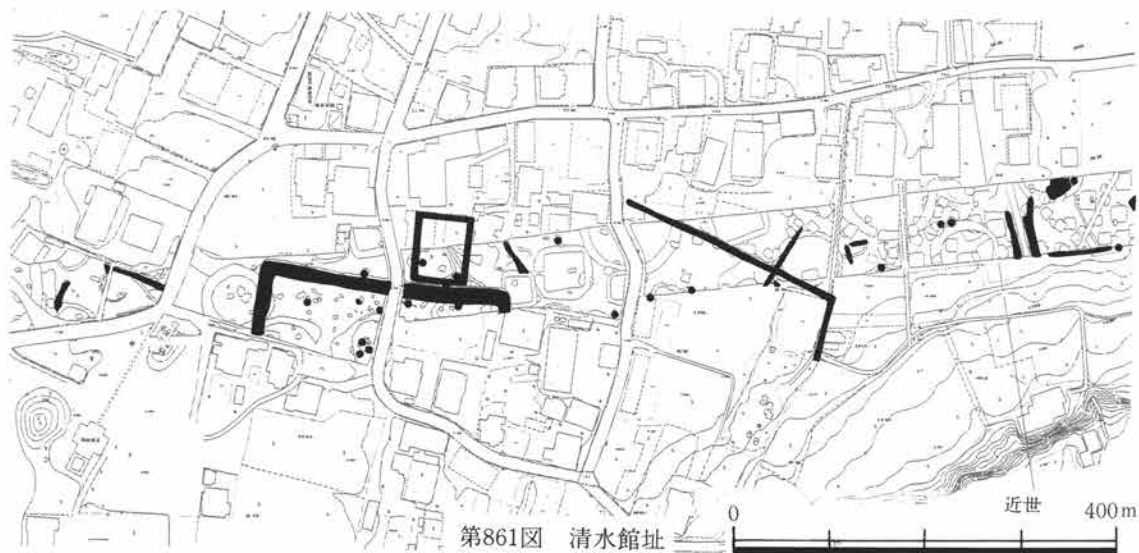
第7章 調査の成果と問題点



中世



中世から近世



近世 400m

第861図 清水館址

群であろう。なおかつての館の内郭堀や外郭堀は、この時期の初めまでまだ存続していた。

## B 清水地区（第861図）

### イ 中世

ここで代表的な遺構は、C区1館（以下、清水館と呼ぶ）である。極めて直線的な形状で方形の単純な形態の東側が、検出されている。北辺と南辺はそのまま西に向い、烏川の崖に達すると、思われる。大手の虎口は、南辺の現在の道路と交差するあたりと考えられる。

郭内の施設はほとんど不明だが、遺物の出ていないD区4・8井戸などはこの時期のもの可能性がある。郭外では、C区6溝でこの時期の遺物もみられるが、走行が全く異なって重複しており、流れ込みであろう。そして走行が同じで東側にほとんど接する馬小屋状のC区2館は、遺物がないためこの時期の郭外施設ともできなくもないが、やはり近すぎて堀の防衛機能と合わないため、後のものとしたい。

この時期の清水館の遺物は、食生活に関するものは少なく常滑の甕片がある程度だが、その代わりに4片の青磁があることは興味深い。そのうち3片は香炉状の調度具で、1片は碗を二次転用した印地である。香炉は、清水館の居住者の経済的余裕と消費的な性格を示すものと思われる。ここの印地は、他の遺物から見れば遊技具的な意味が強いだらう。なお他に銅製の鉦があるが、これも青磁との関連で考えれば、この清水館は仏教的な施設との有機的な関係が想定できる。堀から他の館に比べ圧倒的に多い29点の粗製の五輪塔片が出ていることも示唆的である。

清水館の南方に、この時期の井戸としてB区1・5井戸、C区1井戸が点在している。さらにその南側に遺物が出ていないが、道路の側溝と思われる溝群（B区5・7・8・9溝）がある。これらの点在する井戸を取り巻きその道路を南限とする居住域そして道路の南側の2基の竪穴遺構を取り囲む居住域が、図に示したような推定区画として考えられる。これらの居住域と清水館の関係は理解しにくい、清水館と相互補完的な区域とするのが妥当であろう。

### ロ 中世から近世

この時期の遺構は、C区1館とD区7井戸そしてC区6溝が代表的なものである。C区1館の遺物は、この時期から鍋や皿などの食生活遺物が急に増え始める。D区7井戸も同様の遺物が見られる。

このことは、清水館の性格がこの時期に居住的なものに変化したことを示すと思われる。しかし16世紀の舶載青花や17世紀後半の有田染付も出土していることから、居住者の経済力は依然として大きいことが分かる。そしてこの清水館の堀は、C区6溝との重複からこの時期の終末には埋まっていたと考えられる。堀の埋没は、館の居住者の力の弱体化を意味するのだろうか。

### ハ 近世

C区1館（集石）、C区2館、C区1・2溝、C区6井戸などが代表的な遺構である。

近世には大きな変化が、清水館に起きている。それは、この時期の初めには埋没していた堀に、石と陶磁器片が敷き詰められて道路になったこと、そしてこの道路は天明の浅間山の噴火で埋



## 第7章 調査の成果と問題点

まっぴからは、使われなくなったことである。かつての堀が道路に変わったことと、その道に接してC区2館の溝で囲まれた馬小屋状の建物ができたことは、それほど大きな時期差を考えなくても良いと思われる。

道路として使われた陶磁器の本来の使用場所がどこであったかは、どのようにも考えられる。ただ一般にこの時期には肥前系の陶磁器が大量に搬入されている状況があるため、それほど特異な現象とは考えられない。

南側のC区1・2溝は、C区6井戸を伴う屋敷地の区画溝と思われるが、C区2館の建物とは方向がずれており、両者の関係は不明である。ただこの井戸からもかつての中世の清水館にあったと思われる14世紀の板碑が出土しており、この井戸の埋没した18世紀中頃までには清水館がかつてのような力を持たなくなっていたことを傍証している。

浅間爆発後の近世後半にも、ここで居住生活があったことを示す陶磁器類も見られるが、恐らく現在の地割りに近づいたと思われる屋敷区画は検出できなかった。

### C 長者屋敷地区（第862図）

#### イ 中世

この時期の遺構は多く、A区1館、A区6・10・12・14溝、A区1・2・3井戸、A区1掘立、A区319土坑などが代表的なものである。その他に図に示した時期不明の掘立・竪穴遺構・長方形土坑・井戸の多くもこの時期の可能性がある。

まずA区1館は、周辺の地割りや現状の窪地の存在などにより図に示したような正方形に近い形状で内部を南北に分けた郭構成をしていた（以下北主郭・南主郭と呼ぶ）と推定できる。そしてこの南側に続く7・10・12溝に囲まれた部分は、ちょうど7・10溝の北の延長線上に1館の東西堀内に橋脚の跡が確認されたことから、主郭に連なる外郭（以下西外郭）と考えられる。またやや不明瞭だが、14・21・31溝に1掘立を含む似た方向の掘立群が囲まれる状態が想定でき、時的にも大きな差はないので、同一の巨大な館（以下長者屋敷館）を構成する部分（以下東外郭）と言える。

主郭では、南主郭に重複する状態で掘立群と竪穴遺構群が見られる。これらの内部遺構からは遺物の出土がないが、堀内からはかなりの量の鍋・鉢類が出土している。そのためこの部分は、日常的な居住域であったことは、まちがいない。次に西外郭は、南主郭と密接な関係があり、ここでも竪穴遺構や井戸がいくつも見られる。当然この部分も居住空間と考えられるが、6溝の北側の長方形土坑で囲まれた部分から一字一石経を曲げ物に入れたピットが発見されたこと、また1井戸から青磁皿が出ていること、そして時期は不明だが中央部分に八角形状の二重の溝（8・9溝）があることのために、一種の聖域的な空間として使われていた時期もあると思われる。また東外郭は、比較的列を揃えた状態で掘立の建物が並んでいるため、やや性格の異なった建物群と考えられる。この場合、周囲を巡る溝が深いものでなく、東西方向に並んでいることが特徴である。掘立遺構であるため遺物の量が少なくなってしまうているが、主郭や西外郭と比べ居住の





中世

近世

第862図 長者屋敷館址

0 400m

## 第7章 調査の成果と問題点

状態が別の地域と思われる。なおこの外郭の中に319土坑とした墓があることも注意しなければならない。

### ロ 中世から近世

この時期の遺構は、確認されていない。銅銭の分布も、この時期を特徴付ける明・朝鮮銭や古寛永銭が極めて少ない。遺物の出土していない遺構の中でこの時期のものが含まれることは全くは否定できないが、とりあえず空白時期と考える。

### ハ 近世

この時期の明確な遺物を伴う遺構も確認されていない。しかし、新寛永銭が2枚遺構外から出ており、いくつか土層状況や形状からこの時期と考えられる遺構がある。

まず中世の東外郭の北と東に見られる畑は、天明の浅間山火山灰を多く含んだ土で埋まっており、一応19世紀代の遺構と想定できる。次に調査範囲の最東端の長方形土坑群があるが、これは隣接するII地区の7区5溝を東限としA区22溝あたりを西限とするような屋敷を構成する遺構群と思われる。この屋敷は、前記の畑より古く、想定範囲が現在の字界を跨いでいること、そして7区5溝の遺物の混入の状態より18世紀代の天明以前のものとして推定できる。

まとめれば、この時期の初めには南東方向に続く状態でいくつかの屋敷が連なる集落がここにあった。この集落は、清水のものと比べると経済的にはやや弱体の傾向が感じられる。そして天明の災害で壊滅し、少なくとも本遺跡部分については居住空間としては復興せず、畑になったようである。また字界の道路もかなり天明以前の地割りとずれたものになって、今日に続いた。

## D 小結

### イ 中世

寺前館・清水館・長者屋敷館の各館が、かなり近い距離で続いている。まず南東の長者屋敷館が最も古く成立し、かなり規模が大きく居住人口も多かった。続いて北西側に寺前館が、中央に清水館が築かれた。前者は、烏川の舟運・渡河の管理を行った施設の様であり、後者は仏教施設的な性格を漂わせている。

距離的なことからみれば、これらの3館が全く異なった権力のもとに築かれたとは考えにくい。多少の時期差を持ちながら、相互に有機的な関連をもって同一の枠に含められる権力組織により使われたと思われる。文献上では元徳1（1329）年と貞和5（1349）年の長井道可・貞頼讓状に「佐野郷内在家四字田八丁」との記載があるが、本遺跡とどのような関係にあることなのかは不明である。なお後者は、北朝年号である。

### ロ 中世から近世

この時期には、3館並立の状態が大きく変化する。まず前代に中心的な居住域であった長者屋敷館は、消滅している。そしてこの時期の前半には居住の中心は清水館に移り、寺前館ではかなり盛んな経済活動が行われる。寺前館の備蓄銭の量は膨大なものであり、経済活動の大きさがそこに見られる。中世後半の上野国の政治的中心である関東管領山上内杉氏の居城平井城（藤岡市）

と16世紀前半に西上野での上杉氏権力の代理者であった長野氏の居城箕輪城（箕郷町）との中間的な位置に本遺跡があることも、この経済活動と関係があるかもしれない。

16世紀中葉の永禄年間、箕輪城を中心とする西上野の覇権をめぐる武田信玄・上杉謙信が激しい争奪戦を繰り返した。本遺跡の北西にある和田城の和田氏と南東にある倉賀野城の倉賀野氏は、もともと長野氏と同格の群馬郡の在地武士団であったが、この永禄以前は上杉・長野氏の勢力下にあった。そして和田氏が武田について上杉の攻撃を受け、上杉・長野側の倉賀野が武田に攻められるという乱戦を記録している<sup>12</sup>。

そのような中で、和田・倉賀野の両者の中間に位置する本遺跡周辺は、当然この当時の戦闘に関係したと思われるが、文献上にあるのは永禄6（1563）年に武田と北条氏の協議で「佐野之内少地」が安保晴泰・泰通に与えられたこと、そして『箕輪軍記』には武田の箕輪城攻撃で共に落城した城として「佐野の城」が記されている<sup>13</sup>。後者は近世に入ってから軍記であり、実際にそのような城があったかについては、文献上も疑問である。すでに記したように、本遺跡の各館は16世紀代の軍事拠点的な構造が感じられず、また落城に伴う焼土層面も確認されていない。前者は、安保氏は武蔵の武士であり上野とこの前後にあまり関係がみられないことから、下野の佐野の可能性もある。なおこの年は、謙信の失敗した和田城攻撃の年であり、武田側への倉賀野落城の前年、そして箕輪落城の3年前にあたる。

以上の情勢から考えれば、本遺跡の館は距離的な位置から考え和田氏に属した軍事的傾向の弱い勢力のものと推定できる。

武田没落後の和田氏は北条氏に属したが、小田原落城により越後へ逃げる。旧和田領は徳川氏の武将井伊氏の所領となり、まもなく和田城跡へ高崎城が築かれ高崎藩が成立する。元和5（1619）年の安藤氏時代の領分石高帳には下佐野村597石、上佐野村833石として両佐野村が併記されている<sup>14</sup>。

ここで想起されるのは、寺前館と清水館はもともと一体的なものであり、現在の地籍上で前者が上佐野に後者が下佐野に分かれているのは不自然な状態と感じられることである。これは元和5年以前の佐野の上下分割が両館を統一的に掌握していた勢力の弱体化したことにより可能であったことを意味している。

恐らくそれぞれの館は別個に、茶道をたしなめる程度の経済力を維持した郷土的な階層の居住地に変わっていった。そしてこの時期の終末にはほとんど没落してしまい、堀は埋まる。清水館の堀にいたっては道路になってしまう。

#### ハ 近世

この時期は、天明の浅間山の爆発の前後で大きく分かれる。爆発以前は、両館の地割りは良く残って屋敷地になっていたが、爆発による降灰で特に清水館の跡は完全に消えてしまった。天明年中の記録では、上佐野村の家数82人口369で、下佐野村は家数163人口558である。この数は、明治10年頃には、それぞれ上佐野が89戸391人、下佐野が95戸467人となっている<sup>15</sup>。下佐野は人口が

## 第7章 調査の成果と問題点

減り、一戸当りの人数が増えている。逆に天明期の下佐野の一戸当りの人数が上佐野や明治初年に比べ、かなり少ない。これは、下佐野では天明以前には小規模な家が多かったことを示していると思われる。

実際に調査で確認された屋敷地の区画は寺前地区ではある程度はっきりしているが、その他の地区ではあまり明確ではない。特に遺物量の多い清水地区ではほとんど不明確である。このことが上述の下佐野村の小規模な家が多いことを意味するのだろうか。しかしそうだとした場合、膨大な遺物量は厳然たる事実であり、均等な所有ではなかったとしても、近世にこの地域に入って来た搬入陶磁器を中心とする生活道具の種類と量の多さは、驚くほどのものである。

残念ながら今回の調査では、各遺物の具体的な所有関係を把握するには至らなかったが、今後のこの時期の研究の課題として残したい。

### 4 伝承とその背景

#### A 佐野源左衛門常世

謡曲の「鉢の木」で、僧体の鎌倉の執権北条時頼を鉢の木を燃やして暖をとりもてなしたため、木にちなむ所領を与えられた主人公である。貧しくも鎌倉御家人の気概を失わない13世紀後半の関東武士として描かれている。

すでに見てきたように、本遺跡では13世紀代と確認できる遺構は検出されていない。しかし常世神社の周辺は15世紀頃からの寺前館であった。明治初年でもこの寺前館の跡は、「郭ノ典型ヲ存シ」<sup>16</sup>た状態であった。

恐らく近世に佐野の地名にひかれて、寺前館を常世に結び付けたものであろう。中世武士の下野佐野氏と本地域を関係させる積極的なものは、何もない。

#### B 藤原定家

清水館の北に接して、藤原定家を祭る定家神社がある。近年ここから定家の真筆が発見されたとも言われるが、新古今集の「佐野ノワタリ」は本来紀伊の佐野で、地名にひかれてここに定家を祭ったと『上野国郡村誌』は述べている。

清水館は14世紀以降のものであり、定家の時代とは直接関係しない。しかし清水館の居住者のすでに記した特徴から、文化的なものを収集していた可能性は多いにあり、中世後半に定家関係の文物を集めて、地主神的な神社に奉納したかもしれない。いずれにしても、定家神社は清水館の性格と密接な関係があると思われる。

#### C 放光寺

清水館の北東に僅かに離れて放光寺跡と称されるところがある。『上野国郡村誌』によれば、文録年中にここに放光庵という仏堂があったという。古代の山上碑に記された放光寺についてはここでは言及しないが、清水館が仏教的な性格があったことと山上碑の記載が混同されて、近世後半に放光寺伝承が生まれた可能性は否定できない。

## D 夕日長者

『上野国郡村誌』には、『北国紀行』に佐野舟橋に至る兩岸に長者屋敷があると記されているが、本当は下佐野村の字長者屋敷が夕日長者の屋敷跡で、これに対する朝日長者屋敷が倉賀野にあるとしている。また『木曾名所図会』には、上佐野の西光寺の側に長者屋敷が記されていると述べている。

後者は、西光寺により寺前の字が生まれたことからみても、寺前館のことを示していると思われる。前者はそれから考えれば、寺前館と清水館のことを言っているのかも知れない。倉賀野のものはここでは不明だが、今回の調査で確認された3カ所の館それぞれが長者屋敷との伝承を持っていた可能性があり、複数との認識から朝日・夕日の対応呼称が生まれたとも考えられる。そして最も早く消滅した長者屋敷館の地に字名が残った。いずれにしても中世後半の比較的早い時点で、館跡に対し長者屋敷との呼称が使われている。

長者屋敷伝承は、全国的に数多く見られる。齋藤忠氏<sup>17</sup>によれば、少なくとも青森から熊本まで68例があり、特に茨城の14例・岡山の6例・鳥取の5例・熊本の4例などが目立っている。同氏は、長者とは「一種のかしらの地位にもあり、また経済的にも富めるもの」と指摘し、長者屋敷伝承地は「推定宮殿跡・国庁跡・郡衙跡・山城跡・寺院跡またはこれに関係する建物も含む」「平安時代頃までの古代遺跡であり」「何らかの建築関係の遺構の存する」ところであり、その「呼称は、単に長者の居宅としてのながい間の伝承でなく、むしろ、古代の建築遺構が恐らく中世以降その機能を失い廃滅した後に付会されたものの多いことがかんがえられる。」としている。

本遺跡の場合は、齋藤氏のこれらの指摘と異なって、古代の建築以降の存在は状態不明な放光寺以外には考えられず、むしろ長者の内容について見れば中世の各館を示しているとしたほうが、理解しやすい。

## E 残存地名

本遺跡の属する旧下佐野村・上佐野村そして隣接する佐野窪村の小字名は、本県の基礎的な地名資料である明治10年代の『小字名調書』には記載漏れになっており、ここでは明治6年の地租改正<sup>18</sup>で読み取れるものを『上野国郡村誌』でおぎなって紹介したい。( )内は『郡村誌』による。

下佐野村 屋鋪前 山王塚(蔵王塚ザウワウヅカ) 宮松 大山木 三島 平塚 一本木(イツホンギ) 清水(シミツ) 長者屋敷 稲荷塚 中道 不土塚(富士塚) 亀甲(カメノカウ) 杉塚 堀向 梶風(鍛治風カヂカゼ) 翁前(オキナマヘ) 萩塚 戸崎 檜谷 川籠石(カハゴイシ) 川窪(川久保)

上佐野村 佐の端(佐野堀) 樋越(ヒゴシ) 女将田 粕沢(カスサハ) 市橋 天神(天神前) 三本木(サンホンギ) 寺前 親王塚(観音塚) 佐野添 欠塚(カケヅカ) (船橋フナバシ) (屋敷北) (諏訪前) (五輪田ゴリンダ) (申府シンブ)

## 第7章 調査の成果と問題点

佐野窪村 慈泉(ジセン) 川向(カハムカヒ) 屋敷添(赤石アカイシ)

これらの地名の検討は別の機会に譲るが、寺前の寺は慶長2年創建の西光寺によることは、記しておく。(坂井)

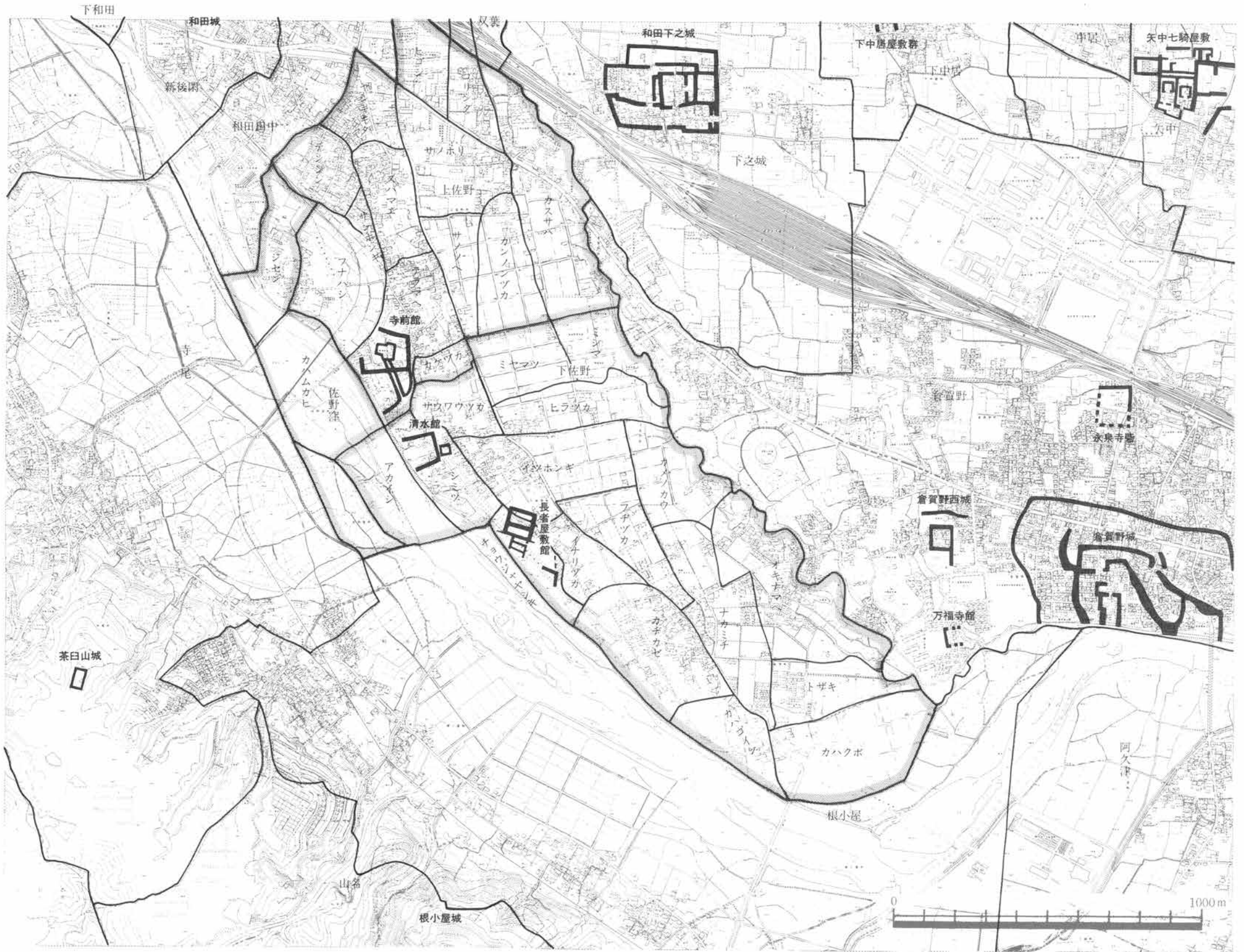
### 参考文献

- 大江正行 1981、「中世の遺物」、『清里・陣場遺跡』、群馬県埋蔵文化財調査事業団  
大江正行 1987、「中世土・陶・磁器」、『下東西遺跡』、群馬県埋蔵文化財調査事業団  
大橋康二 1984 a、『窯ノ辻・ダンバギリ・長吉谷』、佐賀県立九州陶磁文化館  
大橋康二 1984 b、『国内出土の肥前陶磁』、佐賀県立九州陶磁文化館  
大橋康二 1986、『南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯』、佐賀県立九州陶磁文化館  
大橋康二 1987、『伊万里・古九谷名品展』、佐賀県立九州陶磁文化館  
尾崎喜左雄 監 1987、『群馬県の地名』、平凡社  
亀井明徳 1972、「九州出土の宋・元代陶磁器の分析」、『考古学雑誌』58-4  
木津博明 1986、「鎌倉時代以降」、『上野国分僧寺・尼寺中間地域(1)』、群馬県埋蔵文化財調査事業団  
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981、『下之城条里遺構の調査』  
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986、『下佐野遺跡II地区』  
古泉 弘 1985、「江戸の街の出土遺物」、『季刊 考古学』13、雄山閣  
斎藤 忠 1976、「長者屋敷考」、『日本古代遺跡の研究 論考編』、吉川弘文館  
堺市教育委員会 1984、「堺環濠都市遺跡発掘調査報告 skt 20地点」、『堺市文化財調査報告第20集』  
鈴木重治 1985、「京都出土の伊万里産“清水”銘陶器をめぐって」、『考古学と移住・移動』、同志社大学  
瀬戸市歴史民俗資料館 1985、「瀬戸美濃の徳利」、『研究紀要IV』  
瀬戸市歴史民俗資料館 1986、「窯跡出土の赤津本業焼』  
高崎市教育委員会 1983 a、『根小屋城址』、高崎市文化財調査報告書第46集  
高崎市教育委員会 1983 b、『宝昌寺裏遺跡』、高崎市文化財調査報告書第43集  
高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会 1983、『倉賀野万福寺遺跡』  
竹内理三編 1988、『角川日本地名大辞典 10群馬県』、角川書店  
東京都新宿区教育委員会 1988、『三栄町遺跡』  
萩原 進 監 1980、『上野国郡村誌』群馬郡、群馬県文化事業振興会  
藤沢良祐 1986、「瀬戸大窯発掘調査報告」、『研究紀要V』、瀬戸市歴史民俗資料館  
藤沢良祐 1987、「本業焼の研究」、『研究紀要VI』、瀬戸市歴史民俗資料館  
山崎 一 1971、『群馬県古城址の研究』上下、群馬県文化事業振興会  
山崎 一 1979、『群馬県古城址の研究、補遺篇』上下、群馬県文化事業振興会  
山崎 一 1980、『上州合戦記』上下、上毛新聞社

### 注

- 1 遺憾ながら、整理期間の関係で著者は報告した以外の破片についてはほとんど把握していない。ここで述べる考察は、その前提で限界があることをまず記しておく。
- 2 大橋康二1984 aから1987及び亀井明徳1972などにより、時期把握を行った。
- 3 鈴木重治1985、瀬戸市歴史民俗資料館1985、1986、藤沢良祐1986、1987及び大橋康二1984 bなどにより、時期把握を行った。
- 4 堺市教育委員会1984などにより、時期把握を行った。
- 5 鍋・盤とコネ鉢・摺鉢とでは、胎土・焼成にかなりの差が全体を通じて見られる。後者は土器の中にも含めるべきでないのかもしれない。しかし前者を土器とするのは自然であり、古代須恵器を土器に含めるのと同じ意味で、後者も土器とする。
- 6 大江正行1981、1987及び木津博明1986など。
- 7 古泉 弘1985及び東京都新宿区教育委員会1988などによる。
- 8 群馬県埋蔵文化財調査事業団1986 遺構の火山灰との関係は女屋和志雄氏の教示による。
- 9 136土坑の時期は、宣徳通宝の初鋳年代をもって15世紀代にすることも可能であるが、それが16世紀にならないとの確実な証拠がないため、中世には含めず次の中世から近世の時期とした。
- 10 尾崎喜左雄1987、竹内理三1988による。
- 11 中世及び中世から近世の周辺の城館については第863図に示した。この中では、谷中七騎屋敷(高崎市教育委員会1983 b)、万福寺館(高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会1983)、和田下之城(群馬県埋蔵文化財調査事業団1981)、根小屋城(高崎市教育委員会1983 a)は、それぞれ一部が発掘調査されている。この図より永禄年中の軍事情勢を想定してみれば、和田氏の和田下之城と武田氏の拠点である根小屋城を結ぶ線と烏川が武田・和田と上杉・倉賀野の境界とするのが自然である。当然、寺前・清水両館は前者の勢力下になくなくてはならない。ただこれら佐野の館を防御するために宇オキナマへあたりに対倉賀野の





第863図 周辺城館分布図





砦のようなものの存在が考えられる。

- 12 山崎 一1971、1979、1980による。
- 13 尾崎喜左雄1987、山崎 一1979、竹内理三1988による。
- 14 同上。
- 15 同上。
- 16 荻原 進1980。
- 17 斎藤 忠1976。
- 18 群馬県立文書館に共に所蔵されている。字境界は、第863図に示した。

## 第2節 遺跡出土の石造物について

### 板 碑

本遺跡より出土する板碑は、No2743・No3838・No4443の3基であるが、いずれも紀年銘部分が欠損、あるいは磨滅しているために造立年代が明らかではない。造立年代が不明である点については、後記の五輪塔も同様であり、年代の推定を行う上では五輪塔に比べ板碑の方がその年代的特徴をつかむのに容易であるため、この板碑の造立年代の推定をもって、出土石造物の年代の指標にしたい。

No2743の板碑は、板碑右上半部分の破片であり、長さ36cm、幅16cm、厚さ3cmを測る。現存部分より推定し得る全体の大きさは、全長100cm前後、幅30cm前後、厚さ3cm程の板碑と考えられ、県内に所在する武蔵型板碑の中では中形の部類に属し、最盛期に多い規模である。主尊には阿弥陀如来（キリク）種子を刻むが、下部の欠損のため、一尊か三尊かは明らかではない。種子の書体は「キリク」の「イー」が「アク点」の間を抜けない書体であり、奇麗な葉研彫りで彫られている。蓮座は種子と同様に葉研彫りで彫られ、蓮実・間弁を描かない簡略化された形状を呈する。二条線は線刻で刻まれており、左右の三角形の切り込みはない。石材は緑泥片岩の中でも長石を多く含む点紋（長石）緑泥片岩を用いている。この板碑の造立年代は、二条線の線刻化、種子の書体と刻字法、蓮座の形態、全体の大きさ等から考えて、14世紀の中頃以降15世紀の初頭までの間の造立と推定される。

No3838の板碑は、板碑左上半部分の破片であり、長さ48.5cm、幅20cm、厚さ2.5cmを測る。現存部分より推定し得る全体の大きさは、長さ100～130cm、上幅26cm、中幅30cm、厚さ2.5～3cm程と考えられる。主尊には阿弥陀如来（キリク）種子を刻むが、下部の欠損のため、一尊か三尊かは明らかではない。種子の書体は「キリク」の「イー」が「アク点」の間を抜けない書体であり、深い葉研彫りで彫られている。蓮座は種子と同様に葉研彫りで彫られ、上部に蓮実を描く。下部欠損のため反花の形状は不明であるが、花卉はやや開き気味に立ち上がり、間弁を描かない。二条線はなく、左右の切り込みもない。石材はNo2743と同様の点紋（長石）緑泥片岩を用いている。この板碑の造立年代の推定を行うについて、遺跡地周辺に所在する板碑の中より、高崎市石原町鶴辺団地内桜塚に所在する「建武五年十月」銘の阿弥陀三尊種子板碑の種子・蓮座の形態、及び刻字法が本板碑とひじょうに類似しているため、これを元に本板碑の造立年代も14世紀の中頃と推定される。

No4443の板碑は略完形の板碑で、上下の一部を欠損し、長さ66.5cm、幅24cm、厚さ2.5cmを測り、これより求められる推定全長は、約70cm程と考えられる。県内の武蔵型板碑の中でも中形の小さい部類に属する。主尊は阿弥陀如来（キリク）一尊種子で、浅い葉研彫り（竹彫りに近い）で彫られている。書体は「キリク」の「イー」が「アク点」の間を抜ける書体で描かれている。蓮座は種子と同様に浅い葉研彫りで彫られ、蓮実・間弁はなく、反花も持たない簡略化された形

状を呈する。二条線は確認できないが線刻のものが磨滅してしまった可能性も残る。紀年銘は碑面の磨滅が著しいため、判読出来ない。石材は、前の2例と同様に点紋（長石）緑泥片岩を用いている。造立年代は、全体の大きさ、種子・蓮座の形態、及び刻字法から見て、15世紀初頭から15世紀中頃にかけての造立と推定される。

以上3基の板碑の他に、板碑の基礎（No4142）が出土している。これは、板碑の根底部を舌状に成形し、それを受ける口を礎石に穿ち、板碑を差し込んで造立するものと考えられている。造立時に差し込んだ状態で、この礎石が地中に埋まっている状態か否かは明らかでない。板碑の造立方法の大半はこの方法を用いず、根底部を直接地中に埋めて固定するものと考えられる。本遺跡出土の3基の板碑いずれかがこの礎石を用いていたものか否かは、板碑側の下部が欠損しているため明らかではない。

### 五輪塔

本遺跡より出土する五輪塔の部位と考えられる石製品の数は63個を数え、内No4128・No4148・No4283の3個の粗粒安山岩製の水輪部を除くすべてのものが榛名山二ッ岳より噴出した軽石（角閃閃安山岩）を石材として用いている。粗粒安山岩製の五輪塔は、その整形も表面を研磨する等丁寧であるのに対し、榛名山二ッ岳の軽石製の五輪塔の整形は、2つのタイプに分かれる。一方は粗粒安山岩製の五輪塔と同様に良好な整形を施しているが、もう一方では、原石の一部分を荒く削り取るだけの極めて簡易な整形に止まっている。全体の数量から見た比率は、榛名山二ッ岳軽石製の粗製五輪塔が圧倒的に多く、次いで同石材を用い整形が良好なもの、次いで粗粒安山岩製のものの順となる。数量的には一番多い榛名山二ッ岳の軽石を用いた五輪塔の大きな特徴は、上下面の中心付近に円筒形状、ないし擂り鉢状の凹みを有している。通常の五輪塔では、火輪上面に空風輪の基部を差し込む穴が穿たれていたり、火輪の下面・水輪の上下面・地輪の上面等に浅い皿状の凹みを持つものは多く見られるが、本遺跡出土の軽石製五輪塔の凹みの多くは深く、仮に水輪の場合を例にとると、水輪の上下面に径20cm、深度20cmの擂り鉢状の穴を穿ち、その上の火輪の下面と下の地輪の上面とに同様の穴を穿つとすると、組み上げた状態では水輪の上下面に縦径40cm、横径20cmの卵型の空洞部分が出来ることになる。この空洞部分の利用方法について考えるに、五輪塔の供養塔としての性格から、舍利容器（蔵骨器）、若しくは経典容器としての機能が考えられる。しかし、これは五輪塔の製作時において穴が穿かれたと考えた場合のことであって、出土遺物中のNo4592（第850図）のように穿かれた穴から注ぎ口のように延びる薬研状の溝などを見る限りでは五輪塔以外の用途への転用が考えられる。この転用と言った場合、その形状より擂り鉢等が想定されるが、出土するすべての軽石製石製品が擂り鉢等の生活用具であるかということ、その形状より五輪塔以外には考えられないものも多く、仮に転用されたとしてもそれは一時的のものであると思われる。また、生活用具として製作されたものを五輪塔として転用したか、逆に五輪塔として製作されたものが生活用具として転用されたかという問題が残るが、仏教遺物（供養塔）としての造立意義を考えると、前者の生活用具よりの転用は考えられない。

しかるに、本遺跡出土の軽石製石製品の多くは五輪塔と考え、その穿穴された凹みはその位置、及び工具の痕跡より五輪塔の製作時に穿かれたものと考えたい。

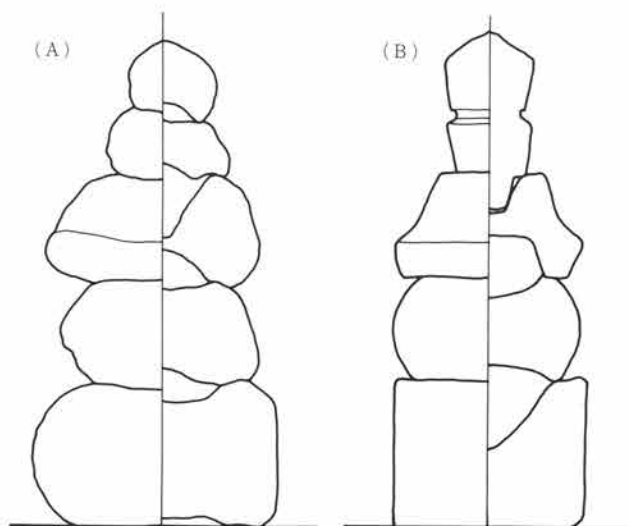
本遺跡出土の榛名山二ツ岳噴出の軽石製五輪塔には精製品と粗製品の2種類あることは前に述べたとおりであるが、この粗製品五輪塔の部位と考えられるものの中に、径10cm前後の円形、ないし楕円形を呈し、その上面または上下面に小さな擗り鉢状の凹みを有するものが含まれており、その大きさより水輪とは断定できず、これを空風輪部分ではないかと考える。通常空風輪部分は、一石を用いくびれを持たせることにより空輪と風輪を造り出すが、本遺跡例の場合は個別に小さな円礫を積み重ねることにより、空輪・風輪を表しているのではないかと考える。この場合の造立想定図を第864図一Aに掲載し、併せて本遺跡出土の精製五輪塔の造立想定図（第864図一B）と対比してみた。

### まとめ

本遺跡出土の板碑と五輪塔の造立背景や廃棄の問題について若干述べてみたい。

まず、造立年代についてであるが、冒頭で述べたように出土した板碑・五輪塔には紀年銘の残るものは1基もなく、その形態や出土状態より推定するほかはない。現段階では五輪塔に比べ板碑の方が年代的特徴をつかみやすく、これをもって石造物全体の造立年代に当てたい。本遺跡出土の3基の板碑の推定造立年代は、前述のとおり14世紀中頃から15世紀中頃にかけての造立である。

ここでの時間幅は造立という行為が続けられた期間であって、これとは別に造立された板碑が存在し続ける期間が問題となる。遺跡出土の3基の板碑は造立時の状態を保つものではなく、井戸や溝から出土する、言わば廃棄された板碑である。個々の板碑の状態を見ると、No2743・No3838の2基の板碑は碑面も荒れておらず、製作時に磨き出された面を残し、種子・蓮座の葉研彫りの稜が残ることから、磨滅の度合いが少ないままに廃



第864図 出土五輪塔造立想定図

棄されたものと思われる、造立の期間が比較的短かったことを示唆している。これに反してNo4443の板碑の碑面は磨滅が著しく、造立の期間が比較的長かったものと考えられるが、このNo4443の板碑はその形態から他の2基より造立された時期が新しいものと思われる、3基の板碑全体での造立期間にはかなりの幅があったことになる。

板碑の造立者の社会的階層については諸説あり、造立者を在地領主もしくは土豪階層の人間に

限定する意見と、もう少し階層を下げて考える説とがあるが、板碑の発生から各地への伝播の状況や造立にかかる経費の個人負担を可能とする経済力、供養を行うという仏教的思想などを有していることなどから、板碑を造立した人々は在地の領主階級の人間や土豪階級の人間に限定されるのではないかと考える。本遺跡の場合、遺構として館跡が検出されており、No4142のような板碑の基礎部分の出土を見ると、出土の板碑も当初の造立地より遠距離の移動は考えられず、板碑は館に伴い、造立者も館に関係が深い人間である可能性が強いものと考えられる。併せて出土の五輪塔は板碑と同様に館に関係するものと思われ、粗製品五輪塔は、数量が水輪部分だけでも30個体以上出土しており、館の付近に、板碑と合わせて造立された墓域（供養域も含む）が想定される。また、粗製品五輪塔の生まれる要因として、専門の工人（石工）の製作によるものではない可能性と、短期間に急ぎ製作する必要性があったかなどの可能性が考えられる。

最後に、出土板碑の造立の問題について若干触れてみたい。まず、造立に関する問題点のひとつとして、板碑の供給地（製作地）に関する問題がある。板碑は用いられる石材に特徴があるため、石材の産出地をある程度限定することが可能である。一般に武蔵型板碑と呼ばれるものは、緑泥片岩を石材として用いている。なぜ、緑泥片岩を用いたかについては想像の域を脱しないが、ひとつは石材の持つ性質が板状に剝離し易い点、もうひとつは石材が持つ「色」ではないかと考えられる。板碑の分布範囲をみると、石材が豊富に産出する秩父地方を中心とし、運搬が可能な限り緑泥片岩製の板碑を造立していることから、この石材への執着はかなり強かったものと思われる。本遺跡出土の板碑の石材は、前述のとおり長石を点紋状に多く含む点紋（長石）緑泥片岩を用いている。この点紋（長石）緑泥片岩は群馬県内にも産出し、一般的に武蔵型板碑の石材として用いられている秩父系緑泥片岩と同一系統に属し、御荷鉾山系緑泥片岩とも言うべく、秩父古生層を形成する三波変成岩中の緑泥片岩である。県内での産出地は甘楽郡甘楽町の秋畑地区周辺の露頭より採石が可能である。本遺跡より出土する板碑も点紋（長石）緑泥片岩を用いているため、この露頭周辺で採石された可能性もあるが、現段階では群馬県内産の点紋（長石）緑泥片岩を用いたと考えられる板碑の分布範囲も鐮川中流域を中心とする小範囲で確認されているのみであり、かつ、秩父系の緑泥片岩の中にも長石を多量に含む石材が見られるため、今後、分布範囲の拡大、及び秩父系と御荷鉾系の緑泥片岩の大きな差異が裏付けられない限り、県内産の板碑であると断定することは不可能である。

もう一点は板碑の廃棄に関する問題であり、これも想像の域を脱しないが、遺構より出土する板碑の大半が下半部を欠損し、種子部分を含む破片である場合が多い。本遺跡の場合も同様であり、その理由として、板碑が廃棄される時期には未だ板碑の造立が行われている場合が多く、造立者を含む勢力の交代や、それに伴う土地利用の改変が大きな要因と考えられ、井戸や溝を廃棄する際に、造立物の整理として廃棄されるが、板碑種子（仏）と井戸の場合は井戸神への配慮の表れとして、種子部分を井戸や溝に埋めたのではないかと考える。

（新倉明彦 当事業団調査研究員）

### 第3節 鉦鼓(伏鼓)について

#### [1]

近年の考古学の動向の中でも、中・近世の遺構・遺物の研究が進展している。県下における状態も同様であって、考古学からの知見により、中・近世の物質文化の一端がやや分明になりつつある。

本報告書も当該の遺構・遺物を多数掲載している。当該の遺物は、編集者が整理事業進行過程の段階で筆者の元“どの様な遺物種であるか”と言うことで持ち込まれたもので、これを機として、本小項の設定をして戴いた。本小項立てをするに就いての意義付は下記に示とおりである。

1. 当遺跡出土の他種の遺物と比較した場合特種遺物であること。
2. 当遺跡の性格付に重要な存在であること。
3. 当該期の諸遺跡の類例を鑑ても希少性が高いこと。
4. 上野国が室町時代鋳物の一大生産地(註1)であったが、この上野産鋳物と想定される遺物が少ない現状で、上野産品の可能性が想起されること。

以上により当該遺物に就いての小項を設定した。なお、筆者は、発掘調査には立ち合っていないため、出土状況等に就いては、編集者及び調査時に作製・撮影された図面類・写真等から得た。

#### [2]

第3章において若干の記述を行ったが不完全であったので、ここでは第3章の記述を補足しておく。

上面には、内・外区を分ける二条の隆線を鋳出し、内区には、素文の撞座を鋳出している。撞座は全体的に窪んでいる。外区には周縁直下に圏線状の細い隆線を廻らせている。そして、これらは、同心円で直円を呈している。胴部には、2ヶ1対の吊手を鋳出している。形状は、形骸化した“魚”を表出しているが、各部の削込みは明確に看取される。厚さは均一で、各面の仕上がり状態は丁寧である。そして、この部分は本体と同時に鋳出している。これは、孔の部分の胴体側は、孔がやや削っている点と、吊手と胴体の接す部分周辺では、薄く幕状になっており、熱圧着ではなく同時に鋳出したものと判断した。

裾部内面に認められる“足”は、伏鉦としての機能を具備させるものである。この足部は、断面形状が蒲鉾状を呈するが、外面側はやや丸味を帯び「●」の如くに鋳出されている。又、3本のうち2本は先端部のみを欠損するが、1本は途中から欠損し、欠損面を整形している。

器面は全体に遺存が良好である為鋳型の成形・鋳出し後の整形が看取される。鋳型は回し型作りで、胴部内面には中子型の回転成形の痕跡が認められ、外面は、回転成時の横位の条線を撫で消し平滑に仕上げ鋳出している。又、裾部内面には“鑢掛”の鑢目痕が認められる。この鑢目痕から、鑢本体の目はやや疎な状態であることが判読でき、近世刃剣の上作ものの茎に見られる鑢目痕とはやや異なりやや疎い。又、この一単位は約9mm程であり、現代の曲尺3分程に相当して

### 第3節 鉦鼓（伏鼓）について

いる。ただ、磨き主体の材質は、金属・礫等が考えられるが、鉦鼓自体の材質より硬いものであることは明らかである。礫を用いた場合は“砥石”的なものが考えられるが、鏡目痕からは、砥石によるとヒケ傷とは異なり、“砥石”は否定出来、主体材質は、金属であって、最も入手が易い。“鉄”であったと判断したい。鉄製鏡は、近世では金工製品に通有に用いられている。

使用痕は明確に判断させる状態はほとんどない。本品に使用痕を求めるならば、撞座・吊手・足の三ヶ所であろうが、後二者には全くない。撞座は、全体が窪む点では、叩き使用に伴うものとも思われるが、断面を顕微鏡観察を実施しない限り判断できない。ただ、撞座の上半端部は下半部端と比較するとやや“潰れ”が認められる。しかし、叩面は判断し難いが、この潰れが使用痕として考えられる。

本品には“型”の付着は認められない。総体的には、仕上がりは丁寧であったと考えられる。

#### [3]

所産年代は、本品が無銘文のため、明らかでない。このことより、上限・下限を共伴遺物から求め相対年代として考えたい。下限としては下位部出土の13点の土師質土器皿があり、これが示す年代観（註2）は15世紀中頃同末であり、第653図1・4・付図3（C-C'）の示す15世紀末は、ほぼ本品が廃棄された年代に近いものと判断できる。（出土状況より）。上限は、本品を出土した溝ないし当遺跡から出土した遺物に求められる。しかし、当該遺物の通有知見では、鎌倉時代以降であり、上限は、鎌倉時代に求められる。そして当遺跡における、13世紀代の遺物は、伝世品ないし古物の入手と考えられ、必然的に14世紀代に求められる。当遺跡の14世紀代の様相は、古い一群に有孔盤形火鉢があり、14世紀中頃（第2四半期）の年代に相当させられ、板碑の様相でも14世紀中頃が上限に考えられている。又、割愛した破片資料にもこの時期の遺物（土器類）も少なからずもあり、一応の年代観としては14世紀中頃15世紀後半の約150年間に考えられる。ただし、本品も伝世したものとしての存在は考慮していない。この点では矛盾が満ちているが、県内における鎌倉時代の遺物様相（遺跡）は大御堂遺跡しかなく、判断でき兼ねることが大半である。中世における物質文化は、南北朝期以降に隆盛期が達する点と、鋳物製品が至徳年間を界として多く鋳造されていることなどを勘案して伝世品としての存在は想定していない。すなわち、本品の年代観としては、当遺跡で館の構築される14世紀後半代頃に推定しておきたい。そして、本品は、精神文化（浄土宗・時宗）に係わることは想定出来るが、当遺跡が寺院に係るかは判断し難い。

註1 拙著『上野国府中妙見寺應永17年在銘梵鐘考』「群馬文化」213 群馬県地域文化研究協議会1988

註2 『上野国分僧寺・尼寺中間地域』1・2 群馬県埋蔵文化財調査事業団1987・1988

※ 本稿執筆中新たに伏鉦が出土していることが判明した。レイアウト終了後のことであり図化掲載できなかった。この伏鉦は、直径7.3cmの真円形を呈するものである。所産年代は近世のものと思われるものであり、表土層中よりの出土である。遺跡地は字名“寺前”が認められ、伏鉦・字名から寺院の存在も考慮される。現在は同地に小宇堂が存在しており、可能性は大と言え。又、近世陶器は寺院遺物であったかも知れない。今後再考したい。

（木津博明 当事業団主任調査研究員）



## 第4節 「出土古銭」— 概略・考察・課題 —

川 原 隆

1 国内より発掘される古銭は全国的に出土例を有し、その量も一枚のみより数十万枚と雑多で、又、包含される古銭の内容も中国、安南、朝鮮、琉球、日本の各銭が、鋳期や埋蔵時期を異にし、ながら、一国のみあるいは、数カ国の銭貨が混合して出土し、発掘され報告がなされている。

出土古銭を考察する場合、次の諸点に注意する必要がある。

1. 出土古銭の銭銘（銭文）分類
2. 各銭銘ごとの数量
3. 包含される出土古銭の鋳造地（国）の把握
4. 官鑄銭、私鑄銭の区別
5. その他として、例を中国渡来銭にとれば同一銭銘でも、中国内での鋳造地別の分類も一部可能であること。又、一文銭（小平銭）のみや否や等も挙げられる。

※出土古銭の埋蔵時期考察上の留意点。

1. 古銭のみの発見か
2. 出土古銭の容器や梱包物は
3. 伴出遺物の有無
4. 出土地は遺構等年代判定をし易い場所か否か

そして上記の内容を発展、考察をなし①埋蔵時期の政治、社会、経済、生活状況。②輸入銭（渡来銭）の場合は、輸入時期における輸出国、輸入国の国情。③輸出及び輸入に携わった人々について、又、運搬方法と経路。④我が国に齎した銭貨の経済的価値（購買力）⑤経済活動の活発化により発生する（した）諸問題——私鑄銭、市の発生、撰銭令など。⑥我が国の近世貨幣制度（江戸時代の三貨——金、銀、銅貨）確立迄に果たした役割等、非常に未解決の諸問題を抱えている。

### 2. 下佐野遺跡出土古銭に就て

本古銭は上佐野字寺前の土坑より、中世期の遺構を調査中に伴出物として、6,000枚弱が一括出土したものである。

その内容（各銭銘毎の分類及び数量）は別表の通りである。銭銘の上限鋳造年は、中国・唐の開元通宝（621年）で下限は、中国・明の宣徳通宝（1433年）であり、各銭銘毎の種類や内容等は今迄国内各地より発見・発掘される渡来銭と同じく、鎌倉～室町期に中国より輸入された銭貨である。本出土古銭は、その下限鋳造年の銭銘より、室町期の輸入と思われる。又サシと思われる、縄紐の付着より、古銭は全てつながれていたようであるが、一定単位毎（例えば100枚とか200枚毎）になっていたかは出土時点の観察に於いても不定数になっており不明である。



本出土古銭は、分類・精鑑の結果、特に稀少性を有する銭貨は含まれていない。なお、埋蔵された年代の推定であるが、15世紀の後半より17世紀初頭頃迄の範囲で、他の伴出物や遺構の年代判定等により総合的考察の上で試みなければならない。

第219表 寺前地区136号土坑出土古銭一覧表

番号	古 銭 名	鑄造国	初鑄造年	枚数	備 考
4677	開元通寶	唐	621	400	(開元通寶の総合計枚数)
4679	開元通寶 (曾昌年間)	唐	845	(7)	背・興。(曾昌年間の合計枚数)
4680	開元通寶 (曾昌年間)	唐	845		背・京
4681	開元通寶 (曾昌年間)	唐	845		背・潤
4682	開元通寶 (曾昌年間)	唐	845		背・昌
4678	乾元重寶	唐	666	19	
4683	唐国通寶	南 唐	959	5	
4684	宋通元寶	北 宋	960	10	
4685	太平通寶	北 宋	976	24	
4486	淳化元寶	北 宋	990	41	真書 (真書・行書・の合計)
4687	淳化元寶	北 宋	990		行書
4688	淳化元寶	北 宋	990		草書
4689	至道元寶	北 宋	995	83	真書 (真書・行書・の合計)
4690	至道元寶	北 宋	995		行書
4691	至道元寶	北 宋	995		草書
4692	咸平元寶	北 宋	998	82	
4693	景德元寶	北 宋	1004	114	
4694	祥符元寶	北 宋	1008	150	
4695	祥符元寶	北 宋	1008	84	
4696	天禧通寶	北 宋	1017	114	
4697	天聖元寶	北 宋	1023	260	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4698	天聖元寶	北 宋	1023		篆書
4699	明道元寶	北 宋	1032	18	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4700	明道元寶	北 宋	1032		篆書
4701	景祐元寶	北 宋	1034	85	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4702	景祐元寶	北 宋	1034		篆書
4703	皇宋通寶	北 宋	1039	630	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4704	皇宋通寶	北 宋	1039		篆書
4705	至和元寶	北 宋	1054	47	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4706	至和元寶	北 宋	1054		篆書
4707	至和通寶	北 宋	1054	13	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4708	至和通寶	北 宋	1054		篆書
4709	嘉祐元寶	北 宋	1056	52	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4710	嘉祐元寶	北 宋	1056		篆書
4711	嘉祐通寶	北 宋	1056	135	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4712	嘉祐元寶	北 宋	1056		篆書
4713	治平元寶	北 宋	1064	92	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4714	治平元寶	北 宋	1064		篆書
4715	治平元寶	北 宋	1064	17	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4716	治平元寶	北 宋	1064		篆書
4717	熙寧元寶	北 宋	1068	461	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4718	熙寧元寶	北 宋	1068		篆書
4719	元豐通寶	北 宋	1078	621	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4720	元豐通寶	北 宋	1078		篆書
4721	元祐通寶	北 宋	1086	488	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4722	元祐通寶	北 宋	1086		篆書
4723	紹聖元寶	北 宋	1094	191	真書 (真書・篆書の合計枚数)

第7章 調査の成果と問題点

番号	古 銭 名	鑄 造 国	初鑄造年	枚 数	備 考
4724	紹聖元寶	北 宋	1094		篆書
4725	元符通寶	北 宋	1098	85	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4726	元符通寶	北 宋	1098		篆書
4727	聖宋元寶	北 宋	1101	209	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4728	聖宋元寶	北 宋	1101		篆書
4729	政和通寶	北 宋	1111	189	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4730	政和通寶	北 宋	1111		篆書
4731	宣和通寶	北 宋	1119	25	真書 (真書・篆書の合計枚数)
4732	宣和通寶	北 宋	1119		篆書
4733	大觀通寶	北 宋	1107	46	
4734	正隆元寶	金	1158		
4735	淳熙元寶	南 宋	1174	30	掲載銭は背・十四
4736	大定通寶	金	1178	1	
4737	紹熙元寶	南 宋	1190	8	掲載銭は背・三
4738	慶元通寶	南 宋	1195	10	掲載銭は背・五
4739	嘉泰通寶	南 宋	1201	4	掲載銭は背・元
4740	開禧通寶	南 宋	1205	3	掲載銭は背・元
4741	嘉定通寶	南 宋	1208	16	掲載銭は背・十一
4742	紹定通寶	南 宋	1228	5	掲載銭は背・元
4743	淳祐元寶	南 宋	1241	4	掲載銭は背・六
4744	皇宋元寶	南 宋	1253	7	掲載銭は背・五
4745	景定元寶	南 宋	1260	7	掲載銭は背・二
4746	咸淳元寶	南 宋	1265	5	掲載銭は背・八？
4747	大中通寶	明	1361	2	
4748	洪武通寶	明	1368	275	(洪武通寶の総合計枚数)
4749	洪武通寶	明	1368	(66)	背・一銭
4750	洪武通寶	明	1368	(12)	背・浙
4751	洪武通寶	明	1368	(1)	背・福
4752	洪武通寶	明	1368	(1)	背・桂
4753	朝鮮通寶	朝 鮮	1423	14	
4754	永樂通寶	明	1408	714	
4755	宣德通寶	明	1433	23	
	不明・破損			61	
	合 計			5992	

## 第5節 群馬県下佐野遺跡出土人骨について

宮崎重雄

### 1. I地区A区319号土坑

- (1) 右大腿骨と左右の脛骨の骨体部が残存したもので、土圧による変形が特に大腿骨近位部において著しい。殿筋粗面や粗面の発達が良いほうである。成人のもので、保存全長は大腿骨28.1cm、脛骨右24.1、左20.1cmである。
- (2) 左右の側頭骨岩様部と細骨片数十片が残存する。他に9本の歯が確認される。歯の内訳は切歯3、犬歯1、小白歯3、大白歯1、歯種不明1である。歯の咬耗度やその大きさから、熟年期またはそれ以上の年齢の男性のものと推定される。

### 2. I地区B区10号土坑

左右の側頭骨を含む21片の破片からなる頭蓋骨片である。縫合線の様子、岩様部の大きさから成人のものと判断される。

### 3. I地区C区4号土坑

9片からなる焼けた人(?)骨片である。亀裂や歪みの様子から焼成温度は800°C前後が予想される。保存最大長は2.8cmである。

### 4. I地区C区33号土坑

7片の歯種不明の歯の破片である。咬耗が進んでいる。

### 5. I地区C区4号土坑

脛骨(?)の骨体破片が残存したもので、緻密質はかなり剝離し、腐食がかなり進んでいる。成人のもので、保存全長は18.2cmである。

### 6. I地区D区56号土坑

総数40片からなる焼骨片である。この中には頭蓋骨2片や橈骨片が含まれている。縫合線の様子から壮年期程度の年齢が予想される。亀裂や歪みが著しく焼成温度は800°C前後と思われる。保存最大長は62cmである。

### 7. I地区D区111号土坑

下顎左第一小白歯1本のみからなる。咬耗が全く見られないことから、少年期から青年期の年齢が予想される。



# 写 真 图 版





I 地区A区1号館跡(長者屋敷館)



I 地区A区1号館跡内郭部



I地区A区1号館跡内郭内方形遺構(1~3号)



I地区A区1号館跡内郭12号溝付近





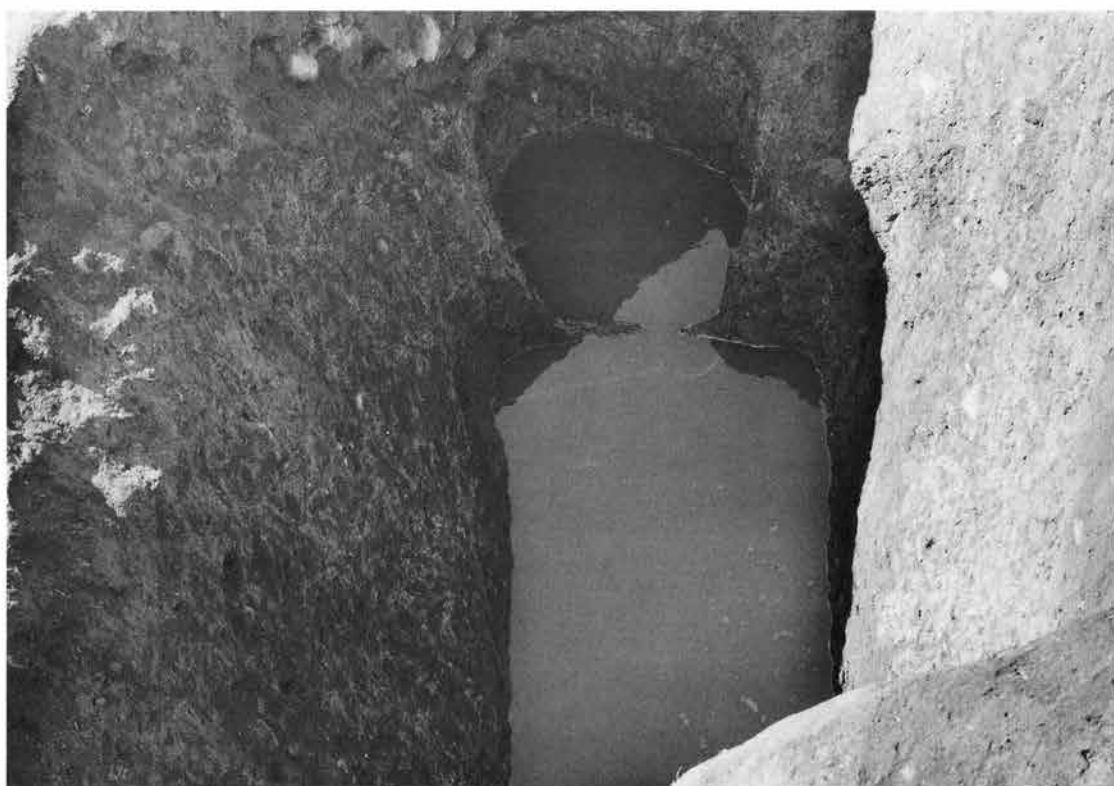
I地区A区1号館跡内郭堀橋脚部



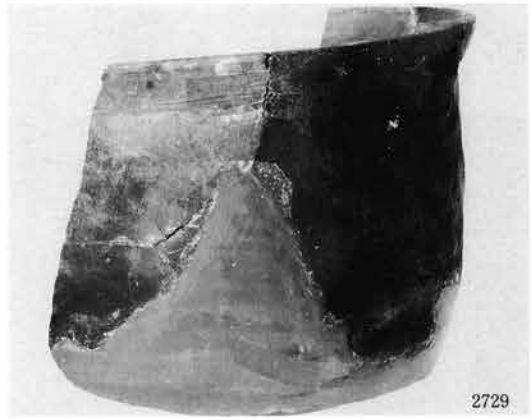
I地区A区1号館跡内郭犬走り付近



I地区A区1号館跡内郭堀内井戸付近



I地区A区1号館跡内郭堀内井戸



I 地区 A 区 1 号 馆 迹 出 土 遗 物



I 地区C区1号館跡(清水館)内郭堀埋没後の石敷き



I 地区C区1号館跡内郭堀埋没後石敷内の遺物





I地区C区1号館跡内郭堀埋没後石敷内の遺物



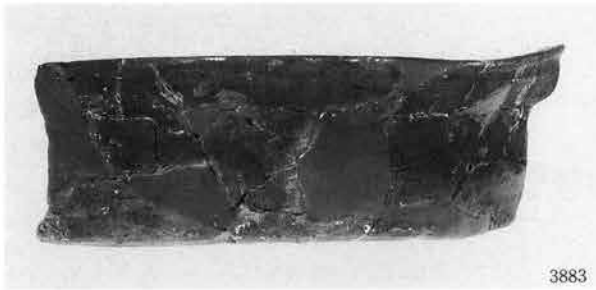
I地区C区1号館跡内郭堀遺物出土状況



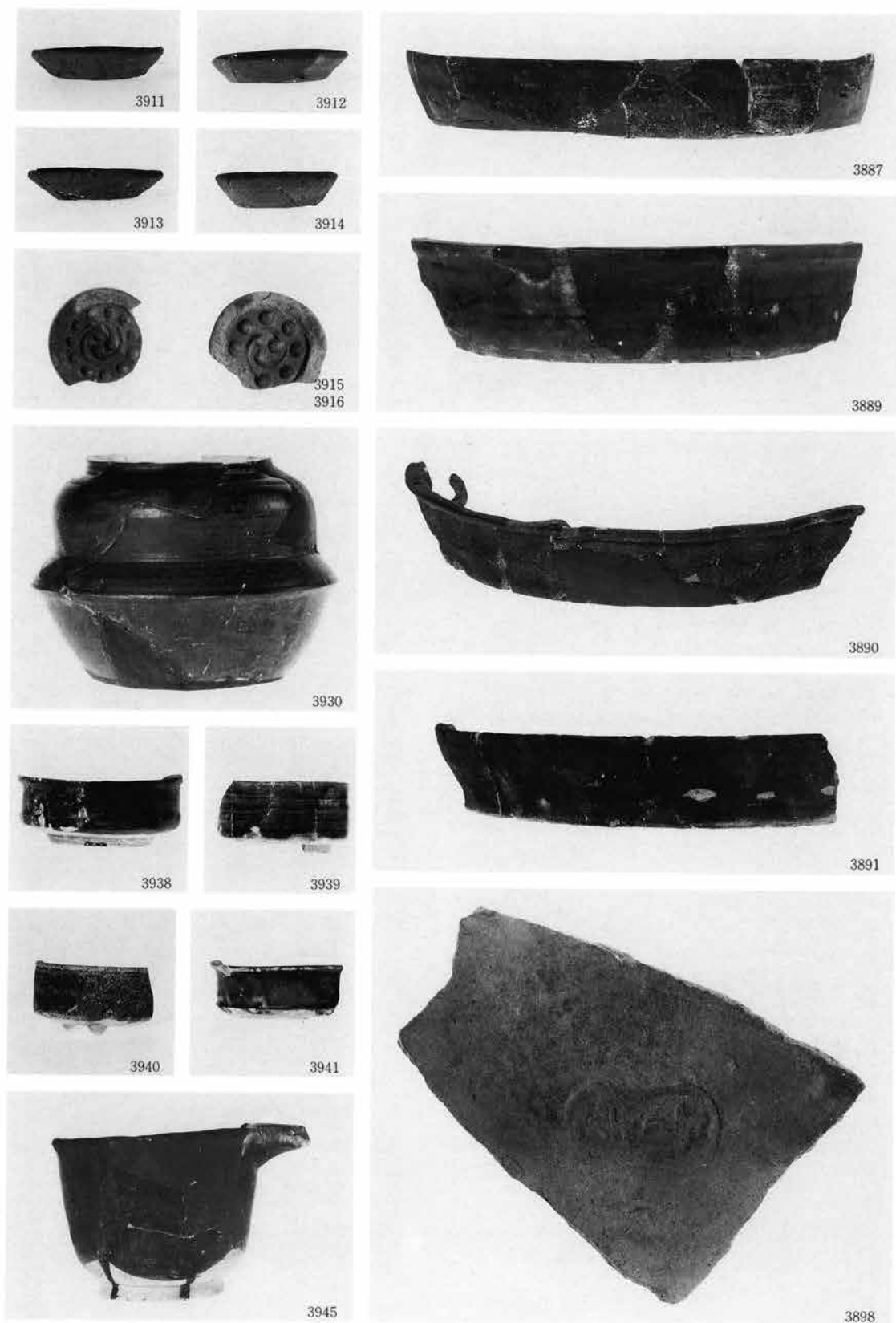
I 地区C区1号館跡内郭堀遺物出土状況



I 地区C区1号館跡内郭堀



I地区C区1号館跡出土遺物



I地区C区1号館跡出土遺物





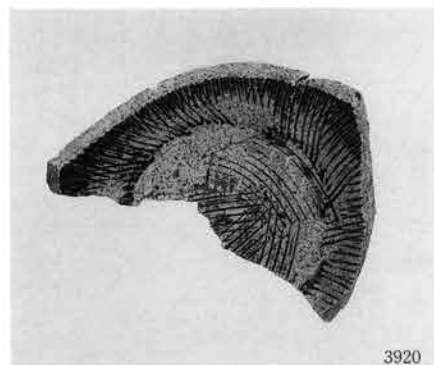
3919



3917



3919



3920



3917



3920



3918



3921

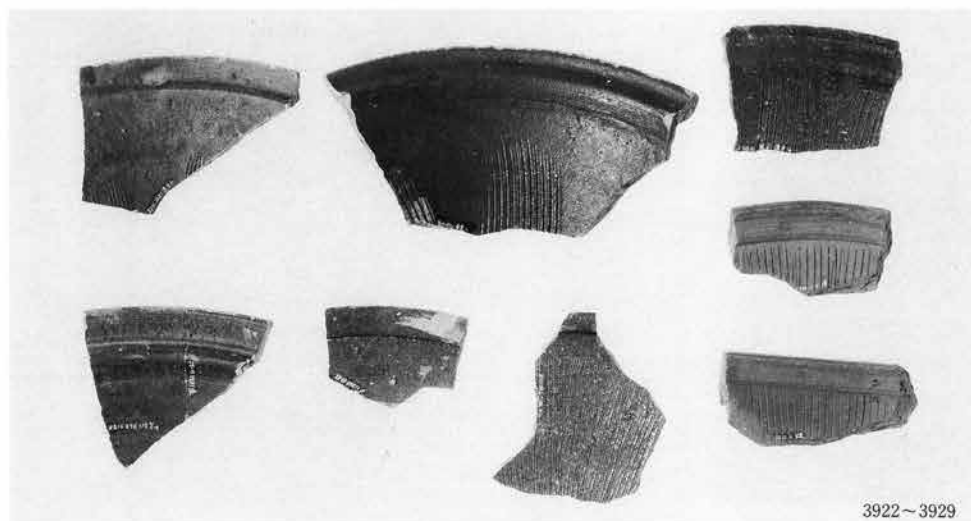
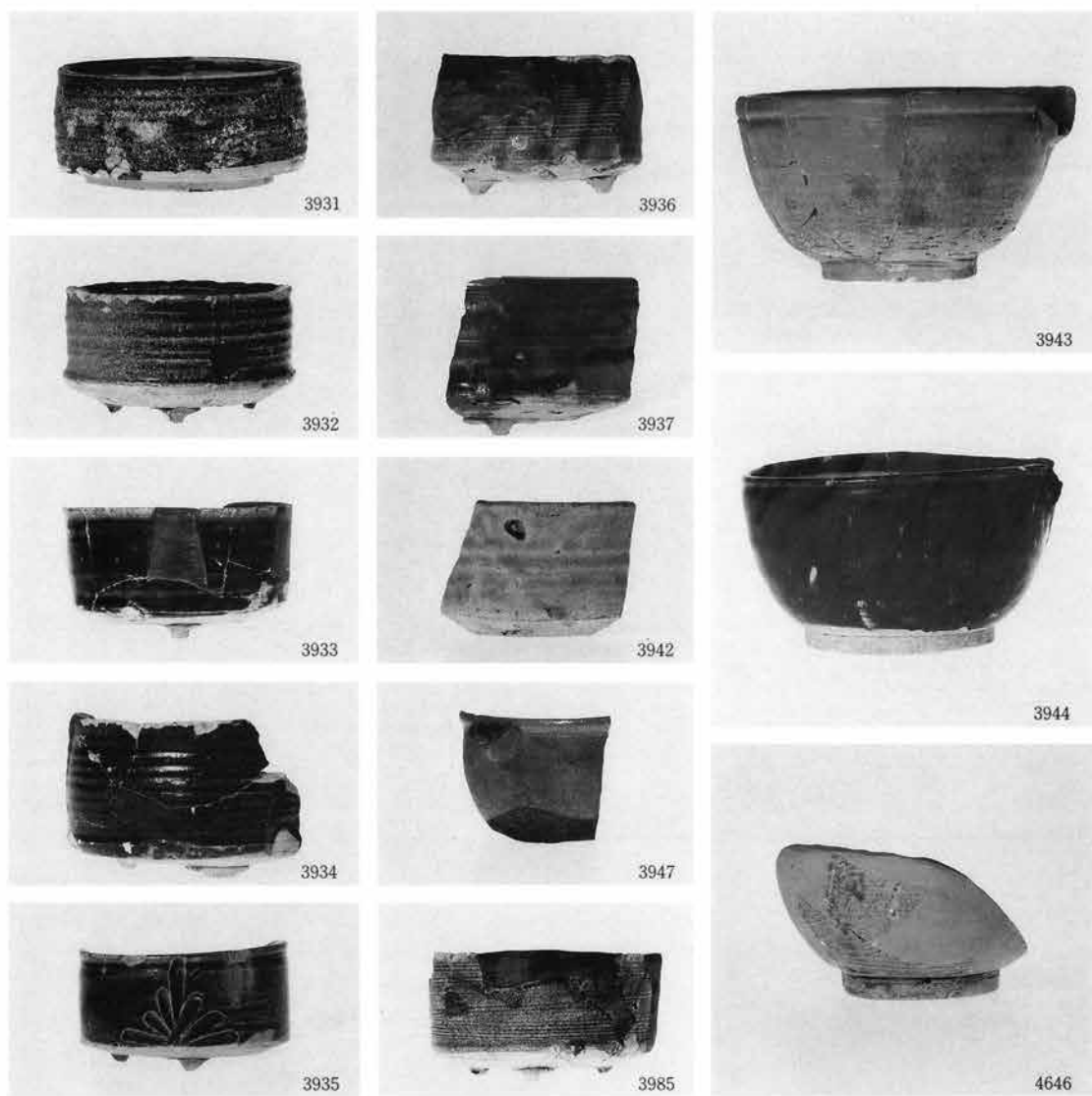


3918

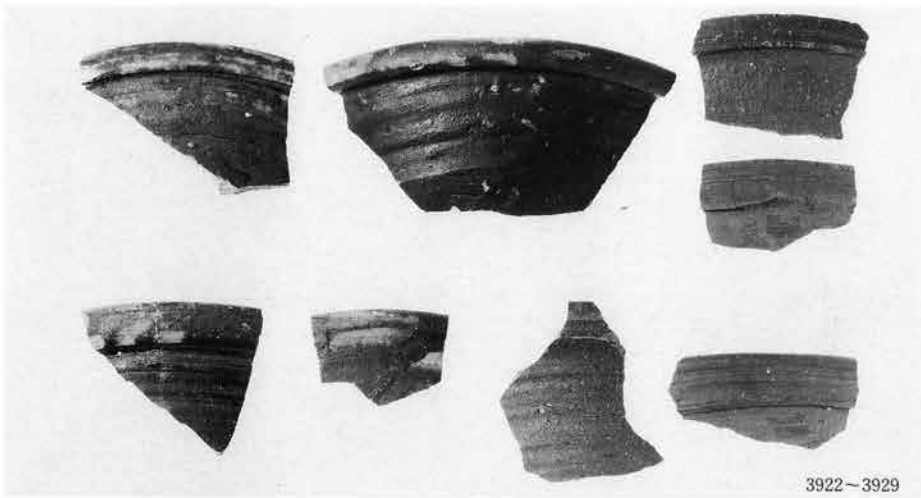


3921

I 地区C区1号館跡出土遺物



I地区C区1号館跡出土遺物



I地区C区1号館跡出土遺物



3949



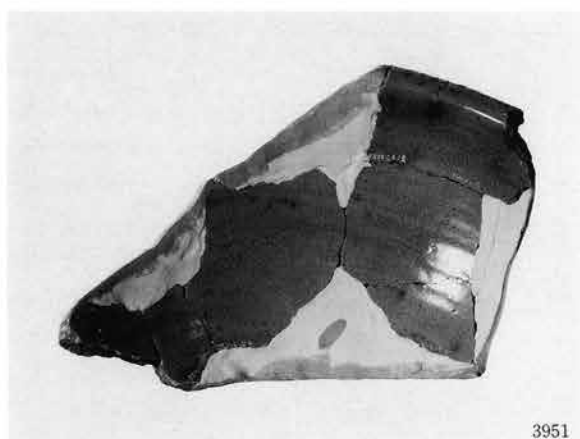
3952



3949



3952



3951



3955

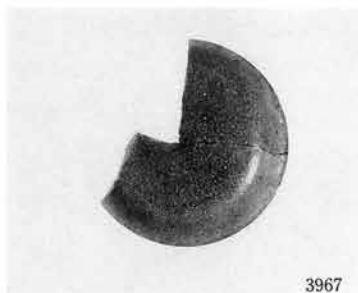
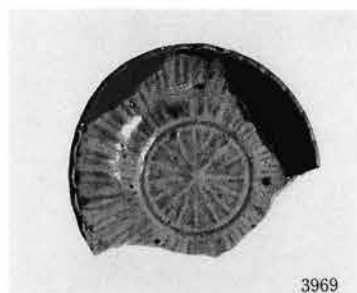
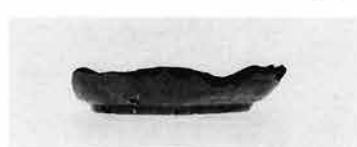
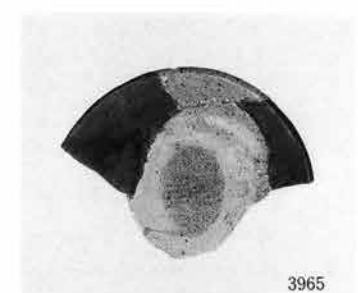
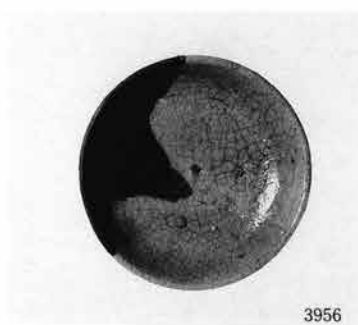
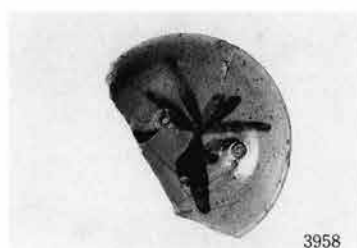


3951

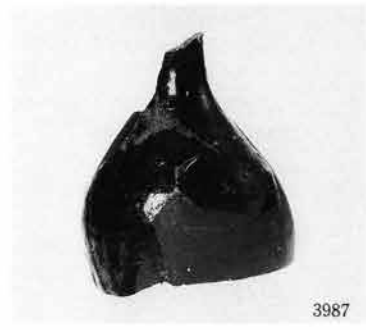
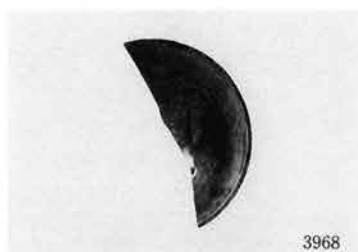


3955

I地区C区1号館跡出土遺物



I 地区C区1号館跡出土遺物

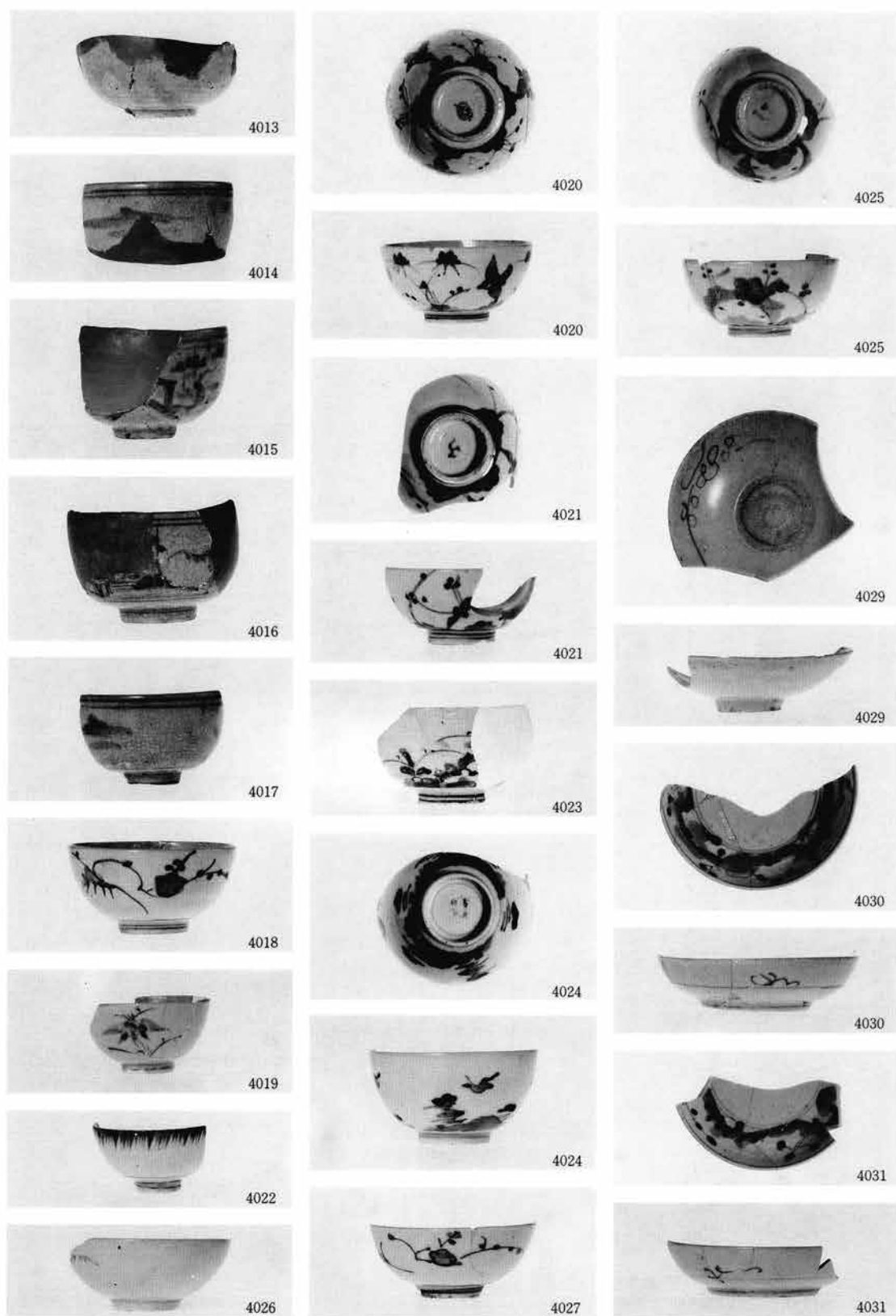


I地区C区1号館跡出土遺物



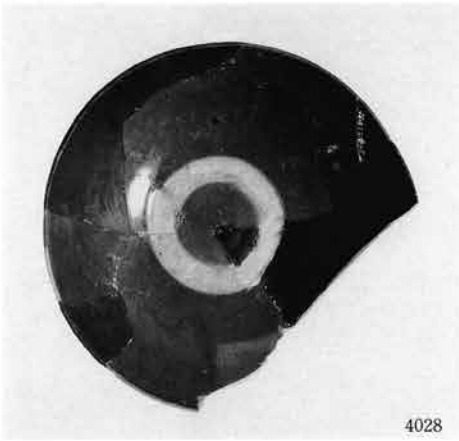
I地区C区1号館跡出土遺物



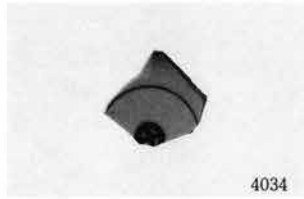


I地区C区1号館跡出土遺物

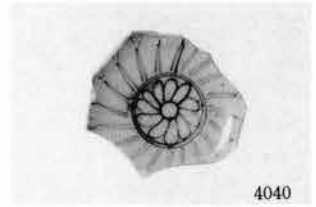




4028



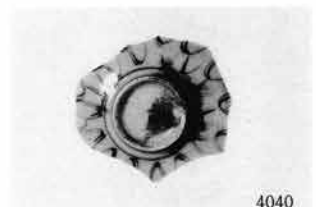
4034



4040



4034



4040



4034



4044



4028



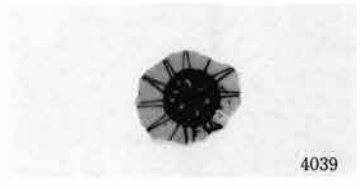
4037



4032



4036



4039



4032



4036



4039



4033



4038



4042



4033



4038



4043



4035



4038



4043



4035

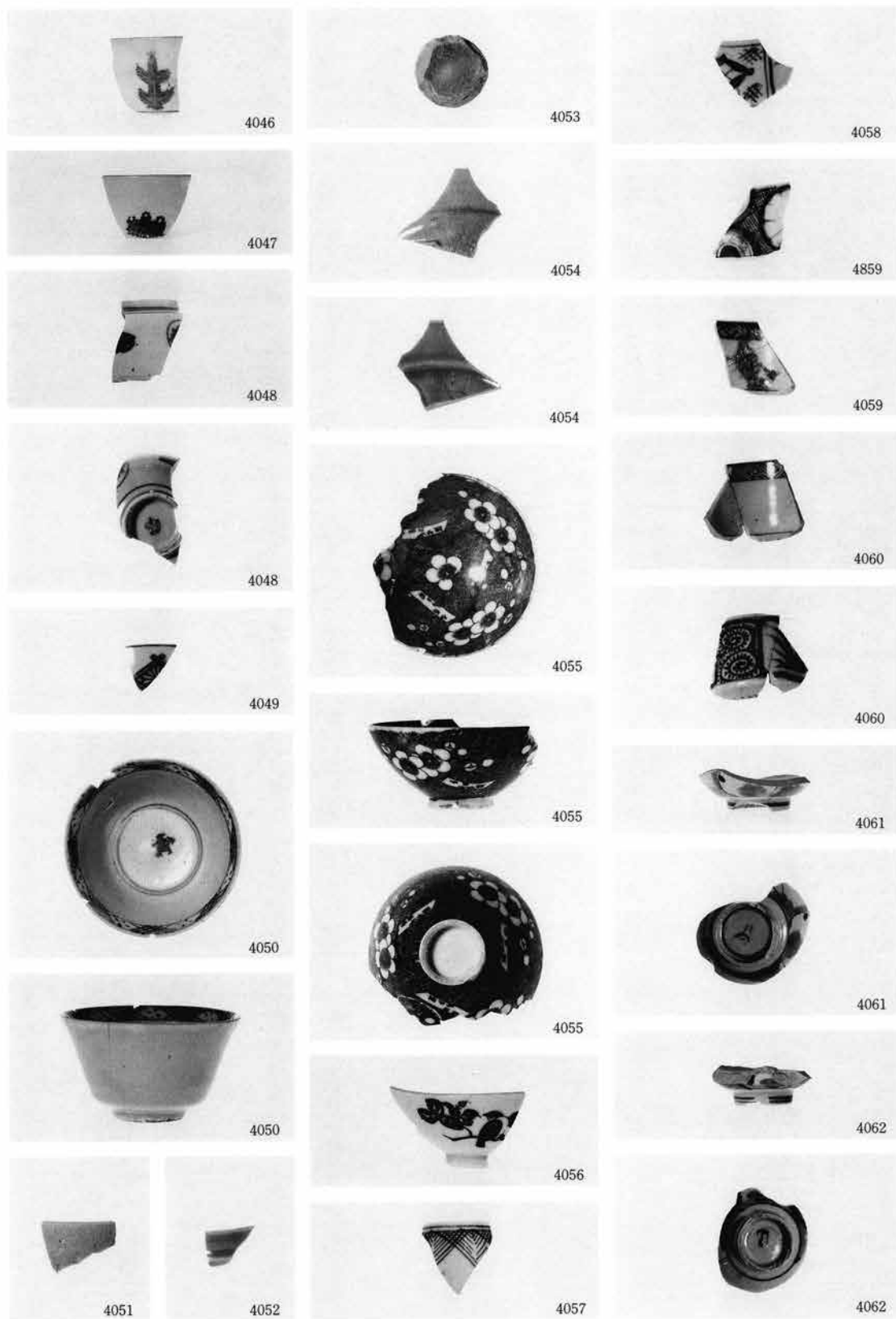


4041

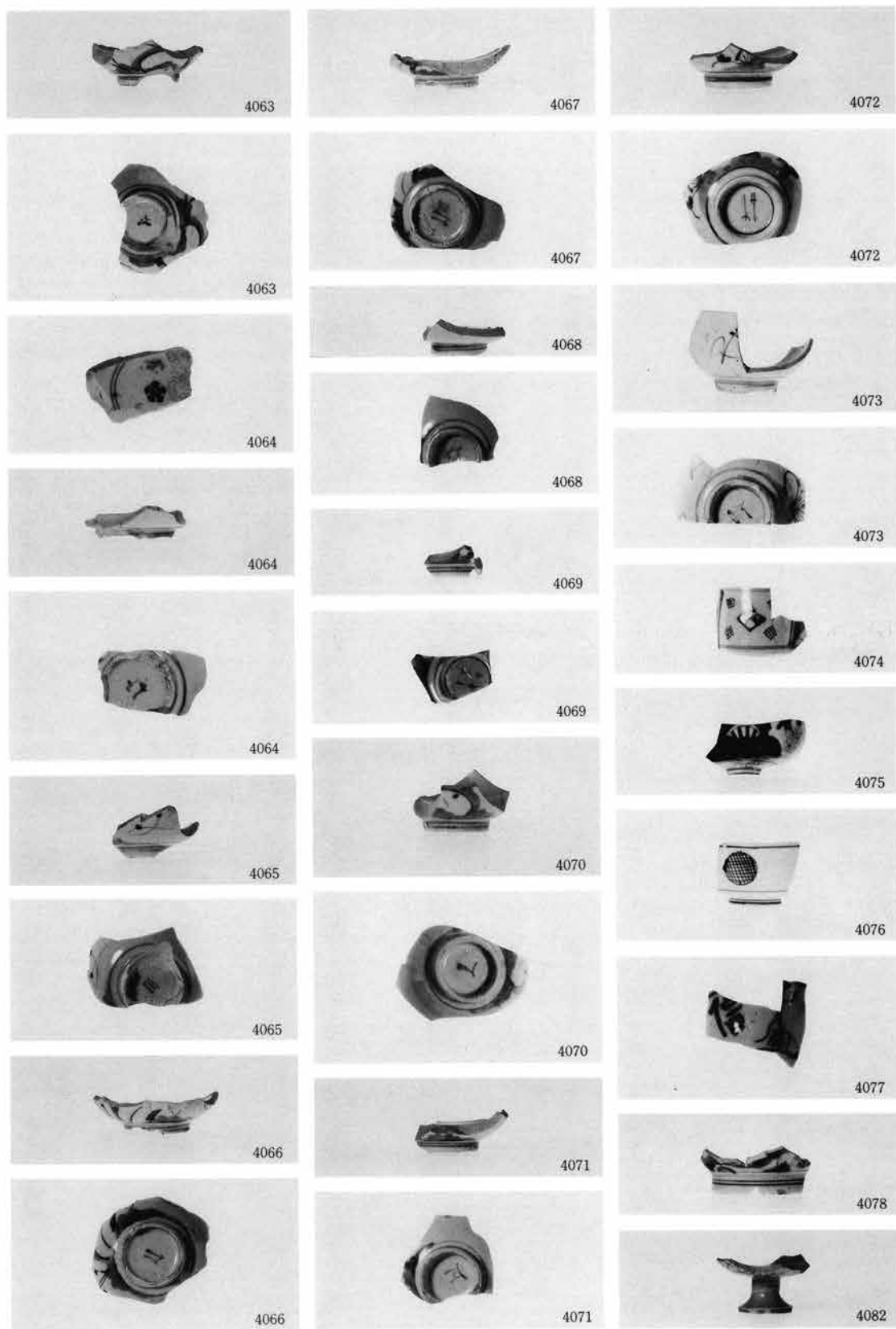


4045

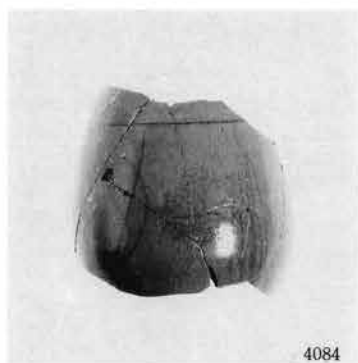
I 地区C区1号館跡出土遺物



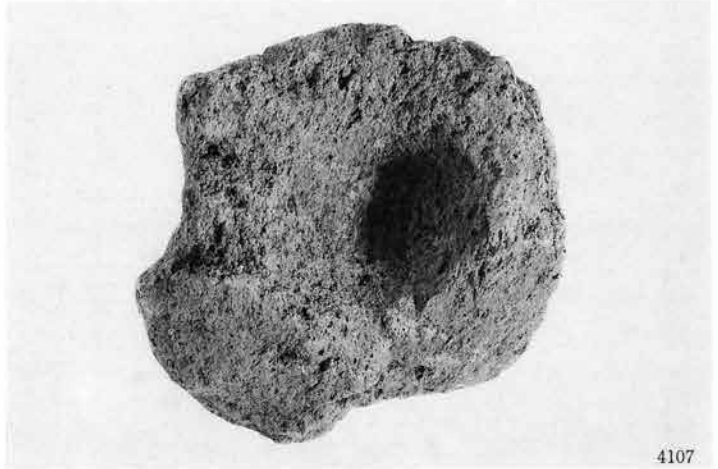
I地区C区1号館跡出土遺物



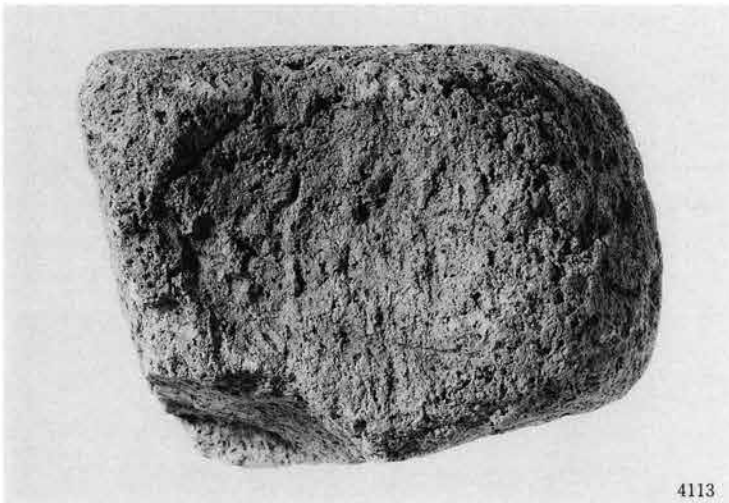
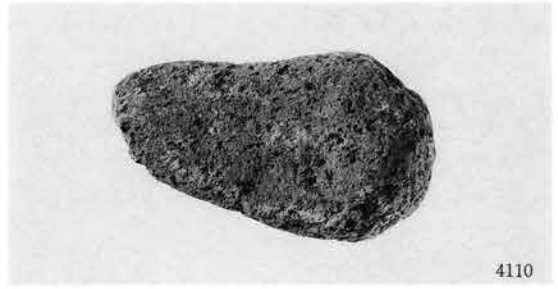
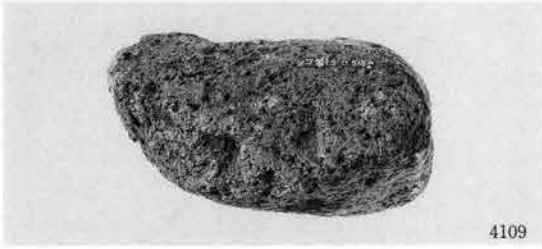
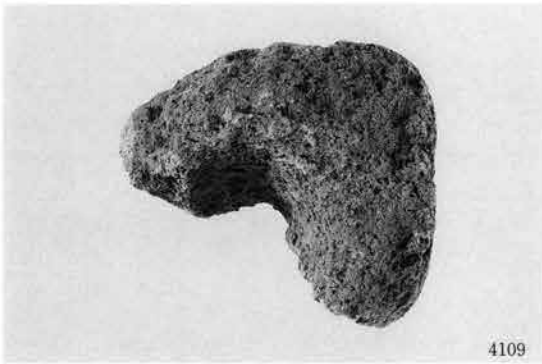
I地区C区1号館跡出土遺物



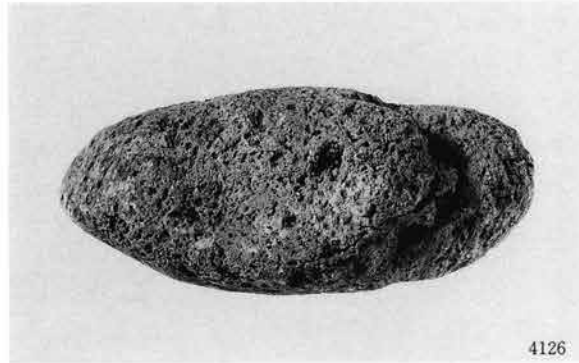
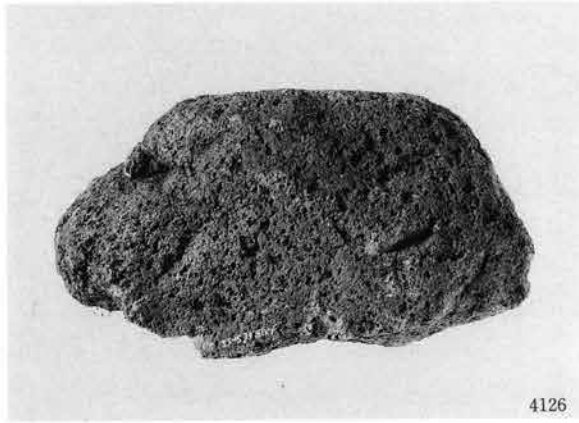
I 地区 C 区 1 号 馆 迹 出 土 遗 物



I 地区C区1号館跡出土遺物

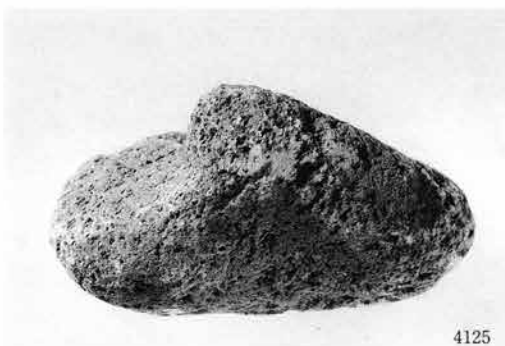


I地区C区1号館跡出土遺物



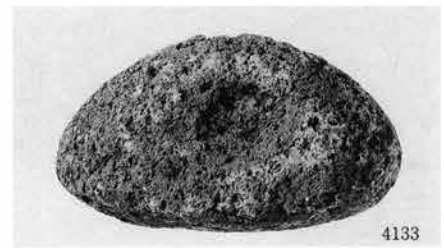
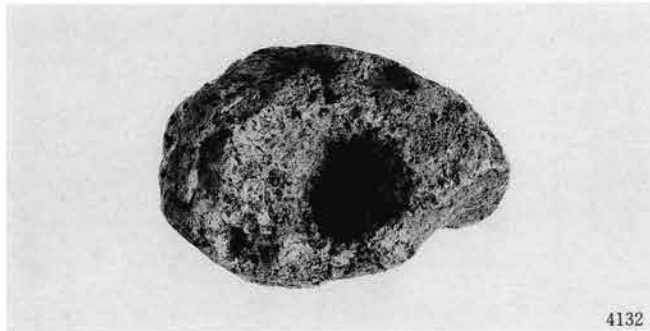
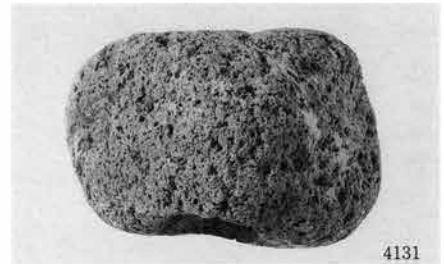
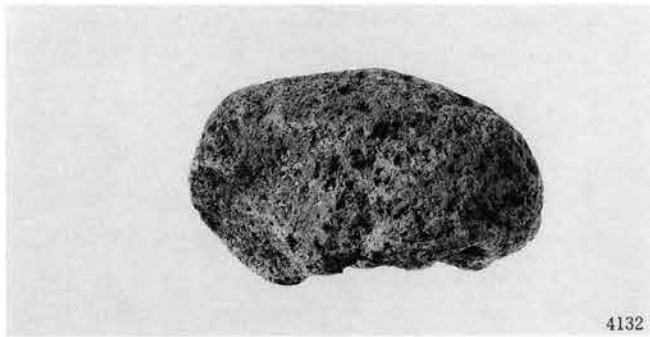
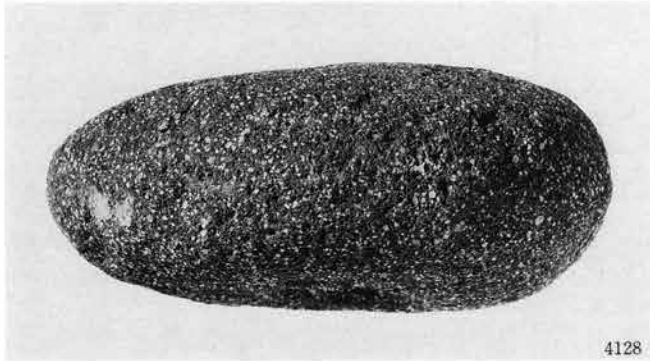
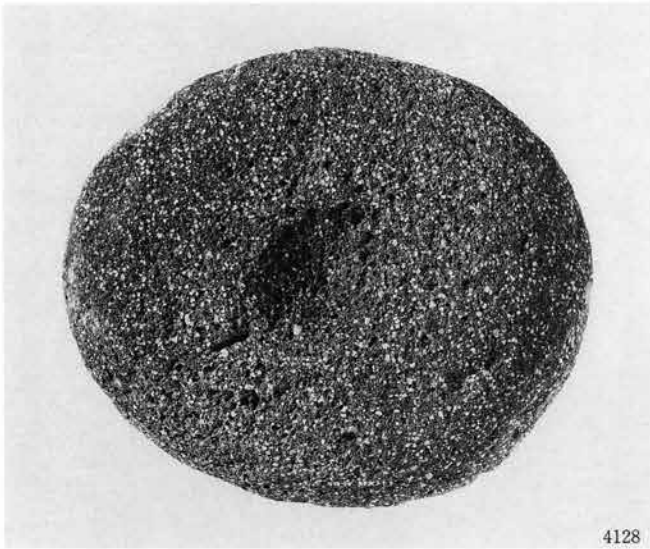
I 地区 C 区 1 号館跡出土遺物



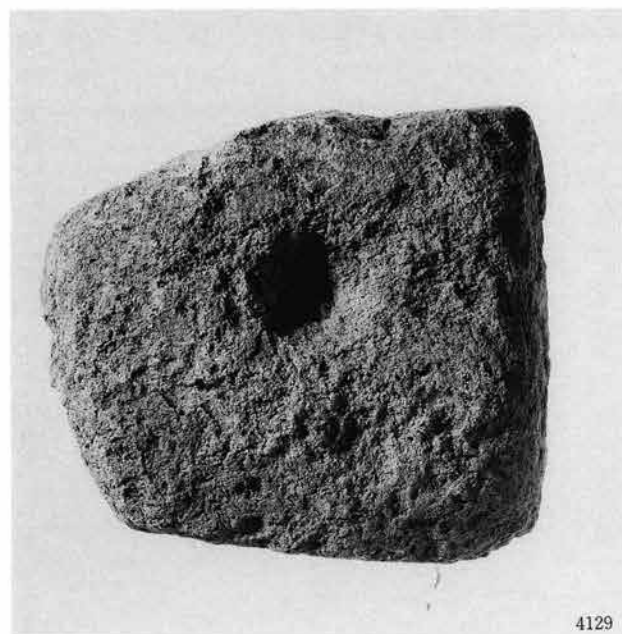


I地区C区1号館跡出土遺物

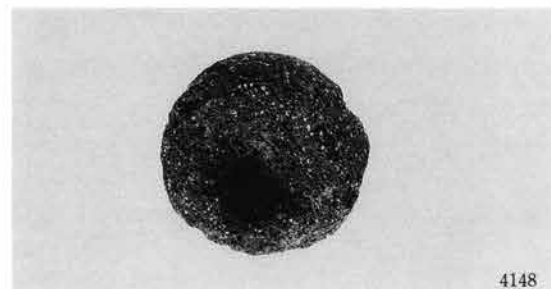
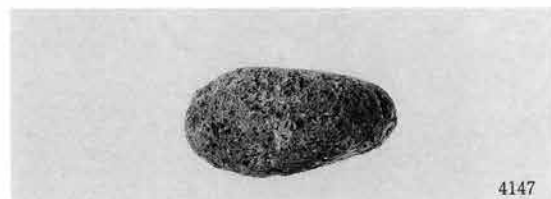
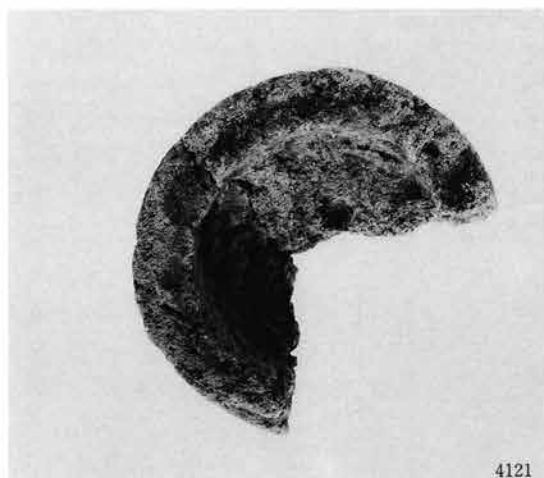
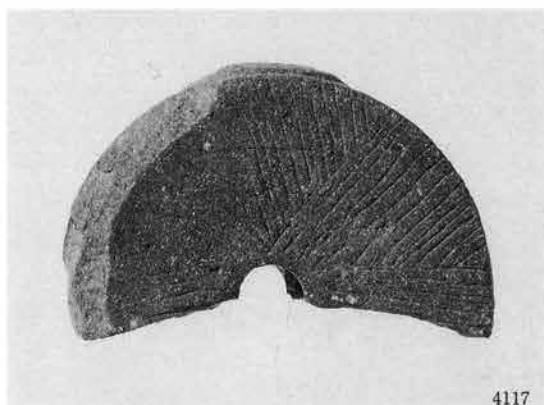




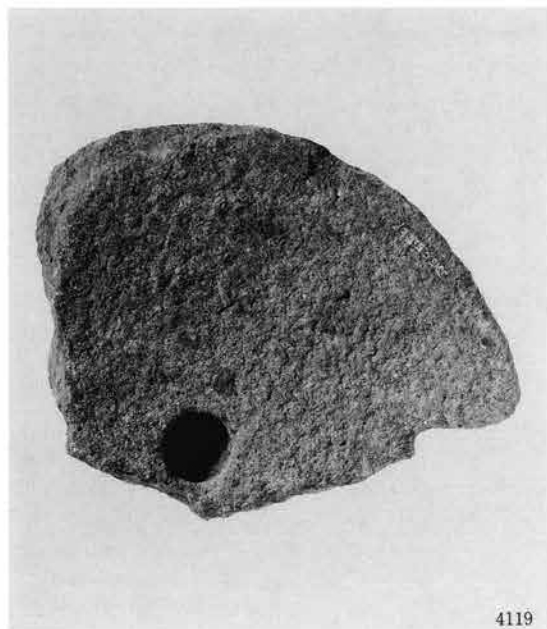
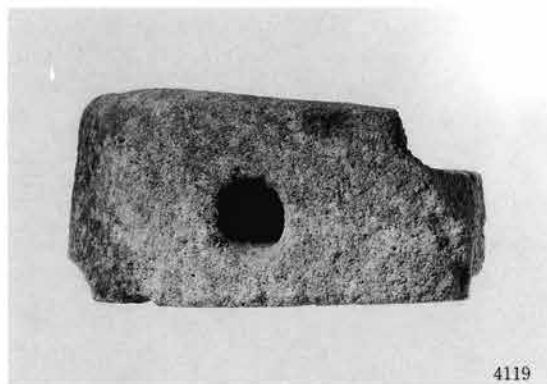
I地区C区1号館跡出土遺物



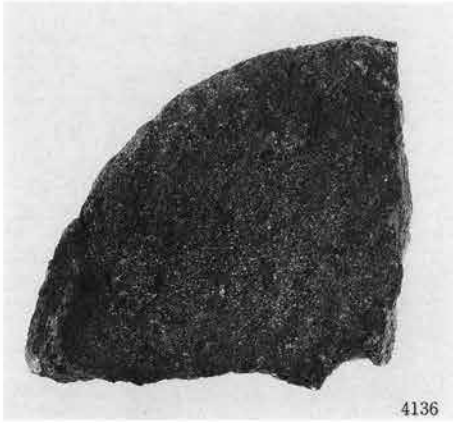
I 地区 C 区 1 号 馆 迹 出 土 遗 物



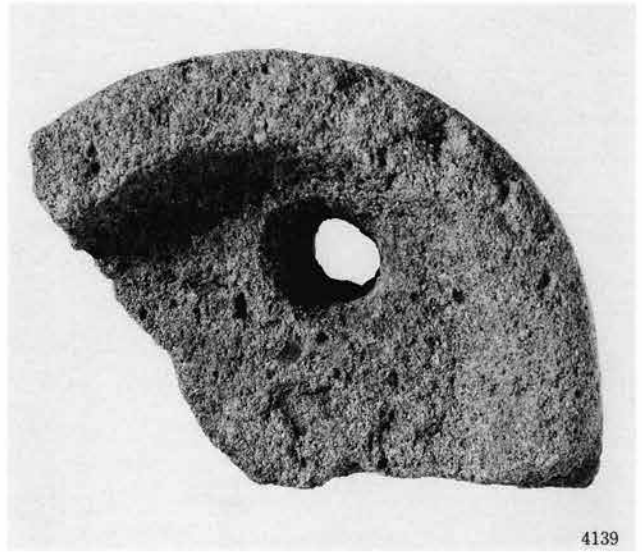
I 地区 C 区 1 号館跡出土遺物



I 地区C区1号館跡出土遺物



4136



4139



4136



4139



4137



4137



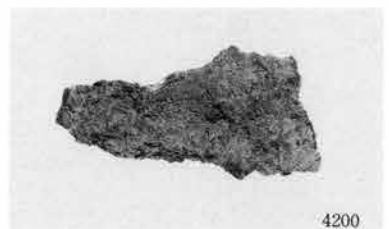
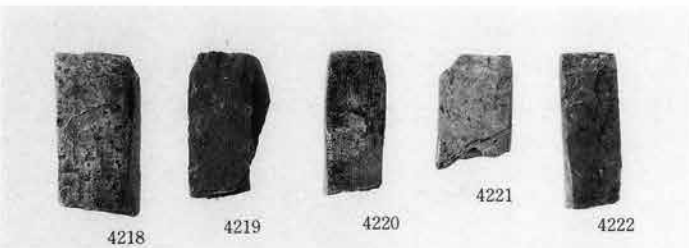
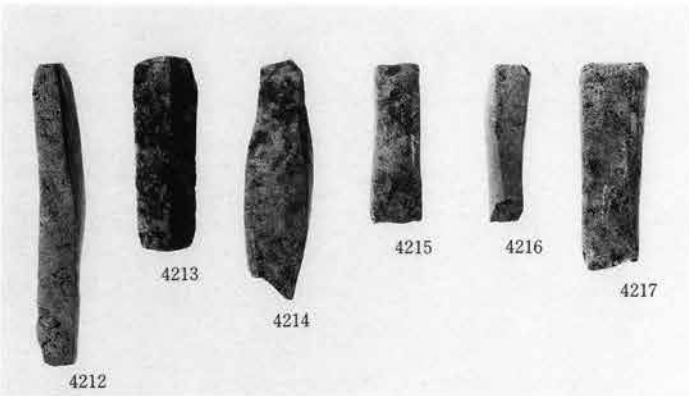
4139

I 地区C区1号館跡出土遺物

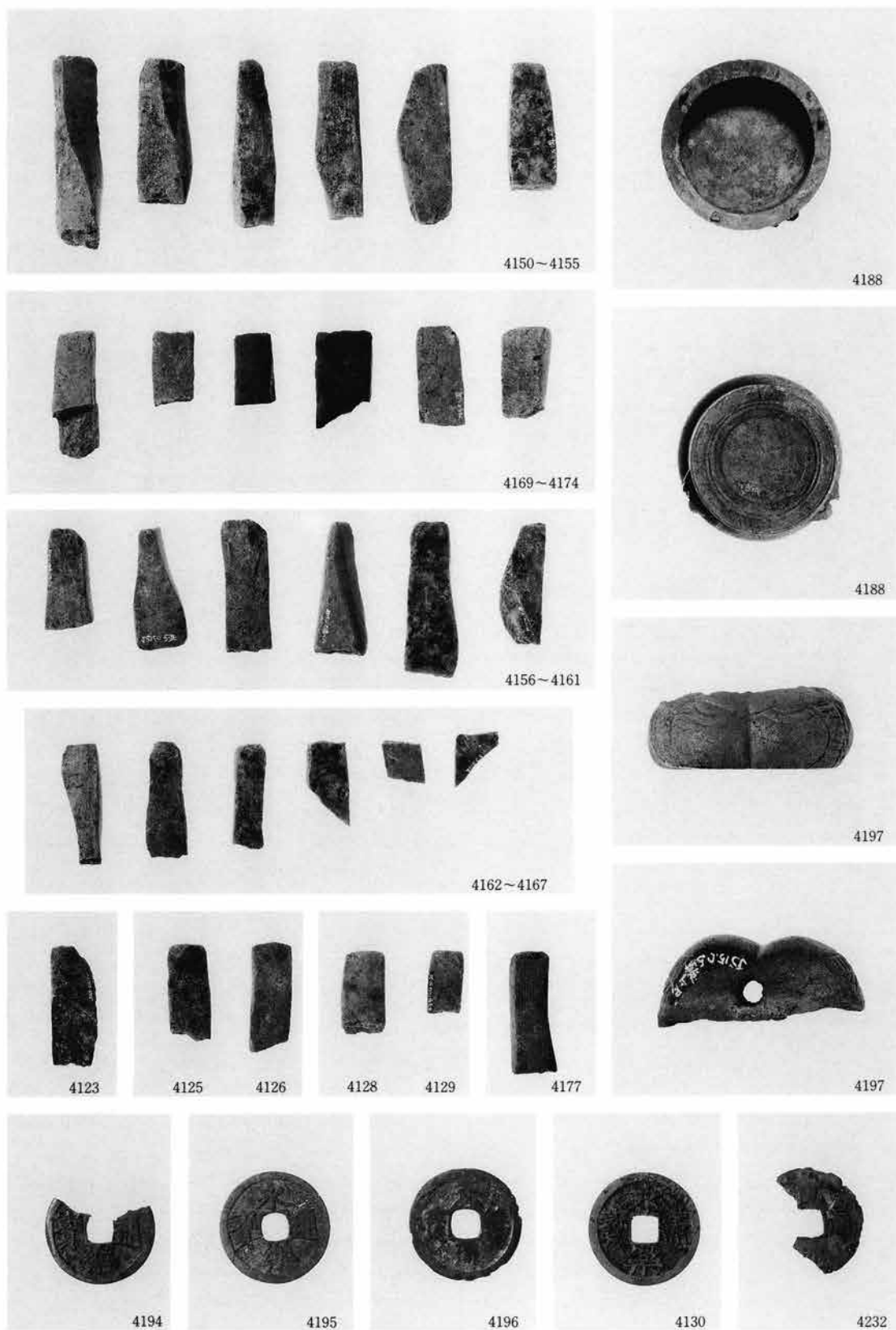




I 地区 C 区 1 号 馆 迹 出 土 遗 物

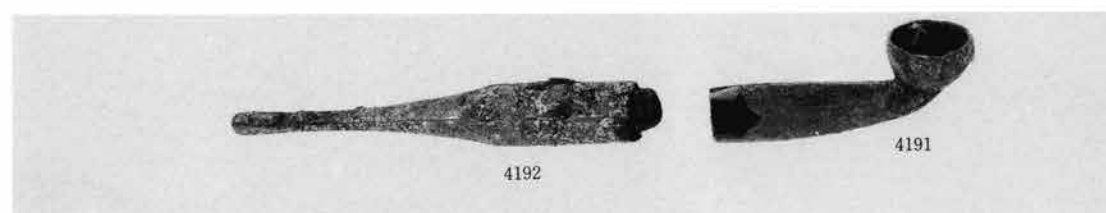
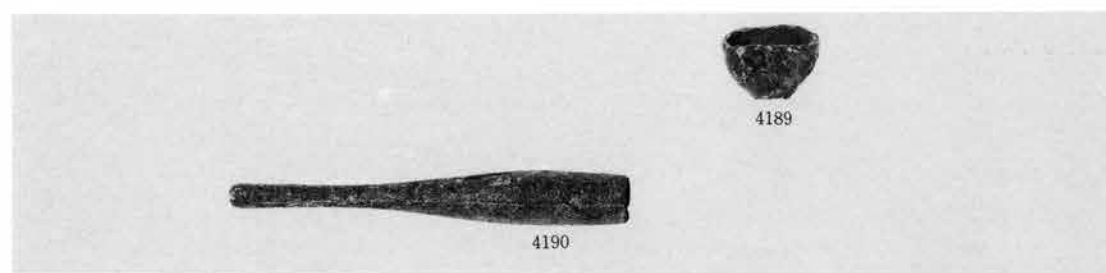


I 地区C区 1号館跡出土遺物



I地区C区1号館跡出土遺物





I 地区C区1号館跡出土遺物



I 地区C区围沟掘立群沟



I 地区C区围沟掘立群掘立柱跡



寺前地区1号館跡(寺前館)内郭



寺前地区1号館跡内郭堀内方形遺構



寺前地区1号館跡内郭



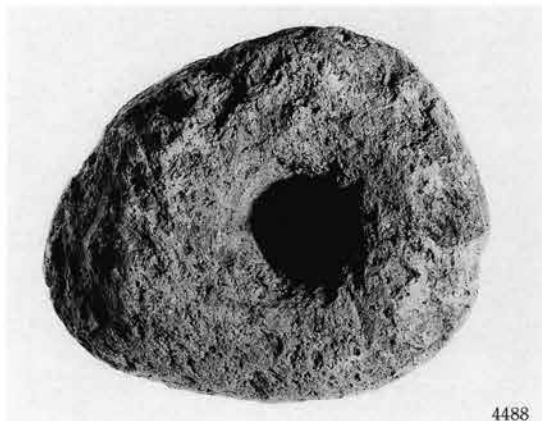
4487



4488

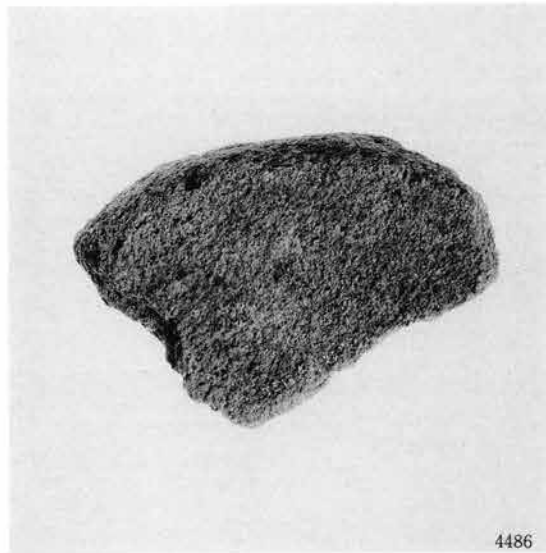
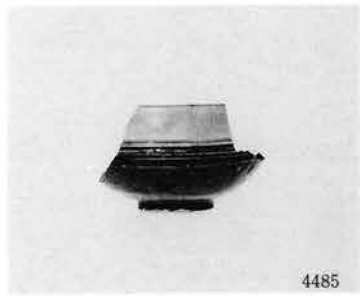


4487



4488

寺前地区1号館跡出土遺物

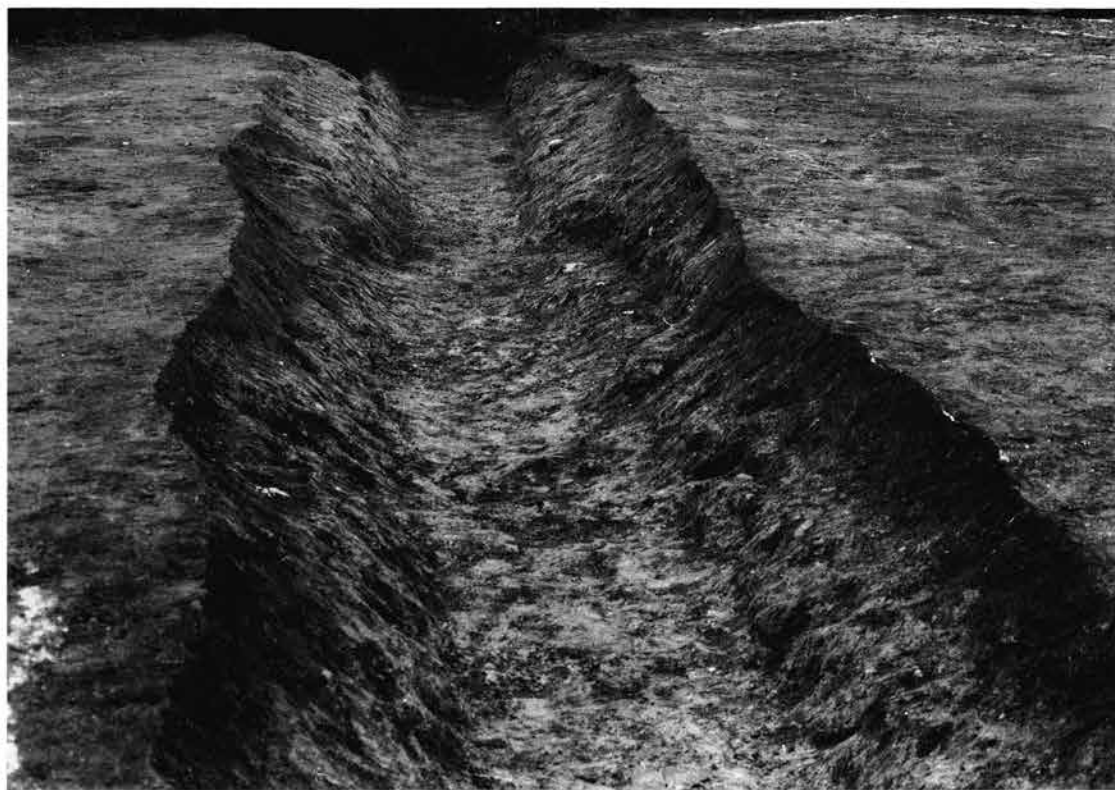


寺前地区1号館跡出土遺物





I 地区 B 区 10 号沟 遗物出土状况



I 地区 B 区 11 号沟



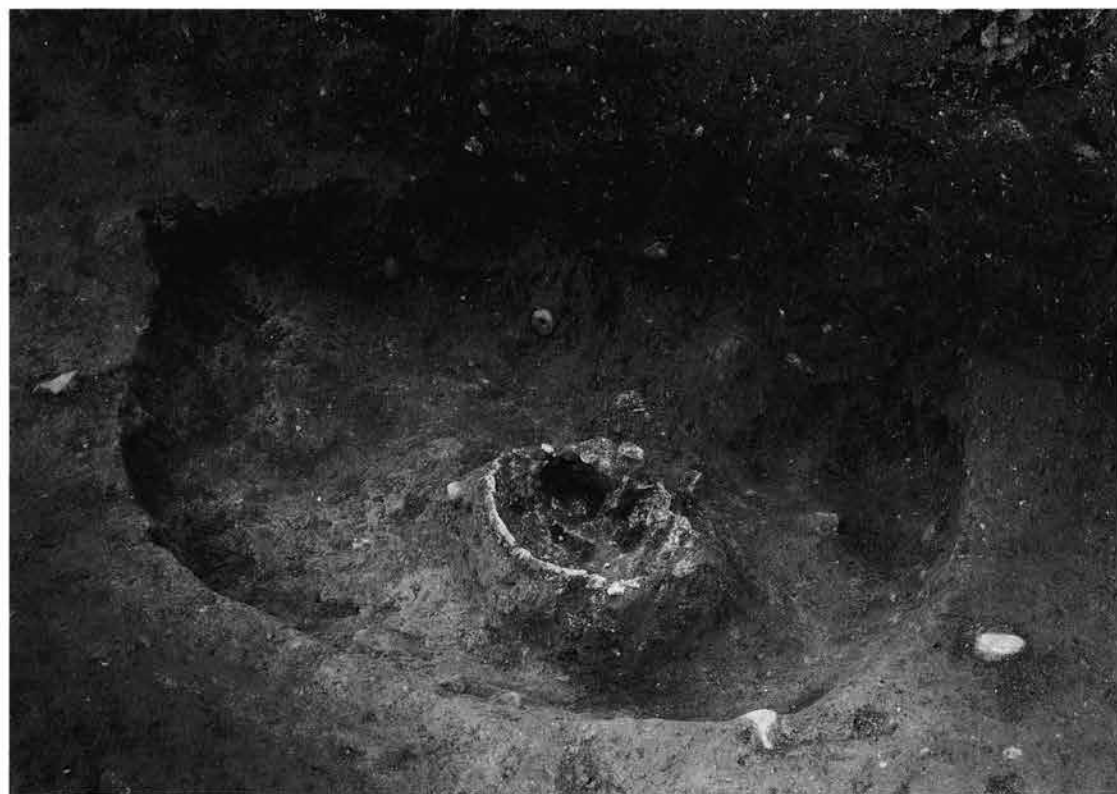
I 地区 A 区 78 号土坑



I 地区 A 区 102 号 · 103 号土坑



I 地区 A 区 319 号土坑

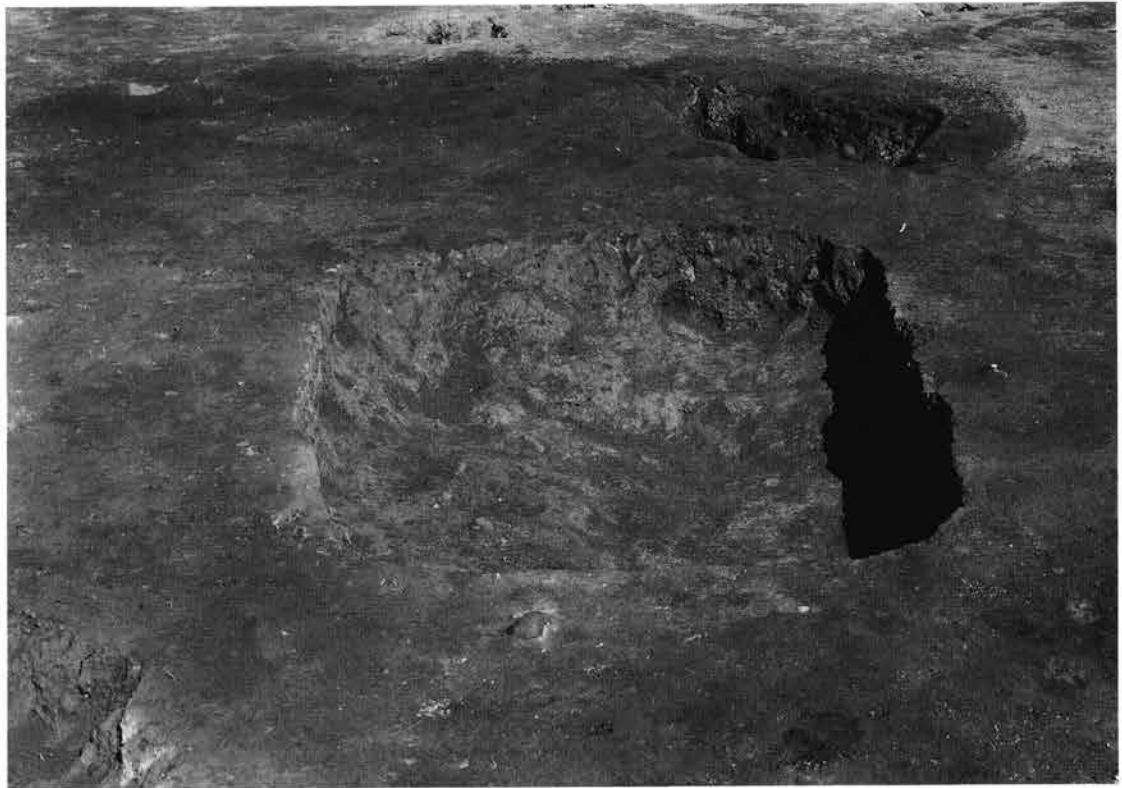


I 地区 B 区 10 号土坑





I 地区D区45号土坑



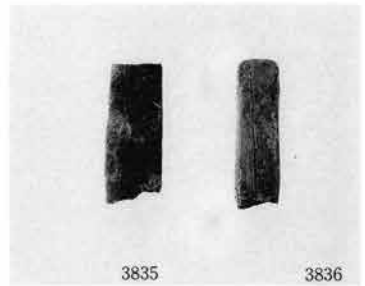
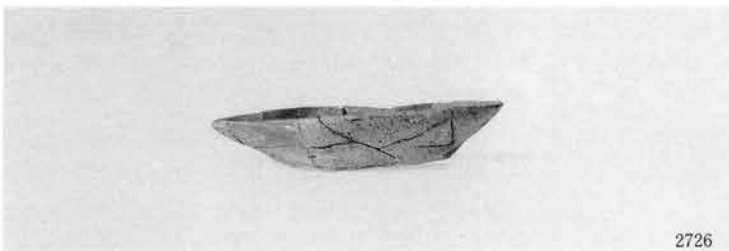
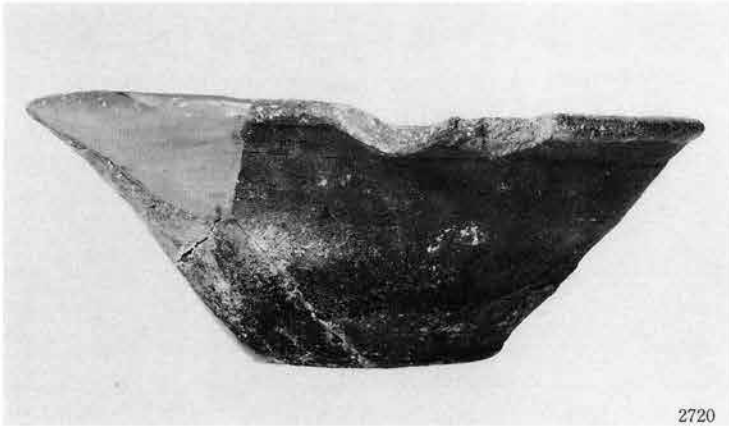
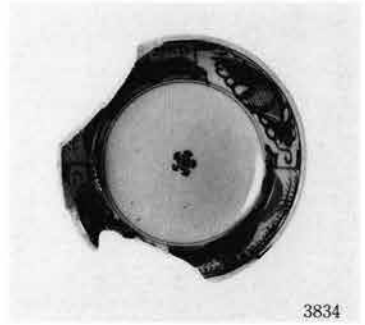
I 地区D区49号土坑



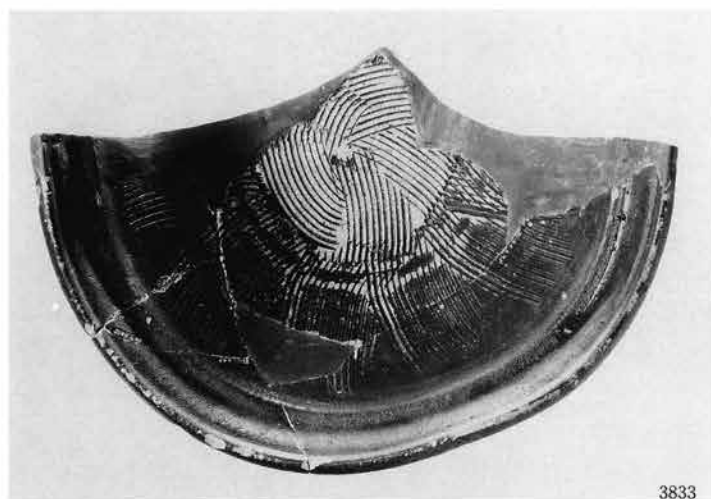
寺前地区136号土坑



寺前地区136号土坑



I地区A区1号・A区2号・B区5号・A区13号・C区6号井戸出土遺物



3833



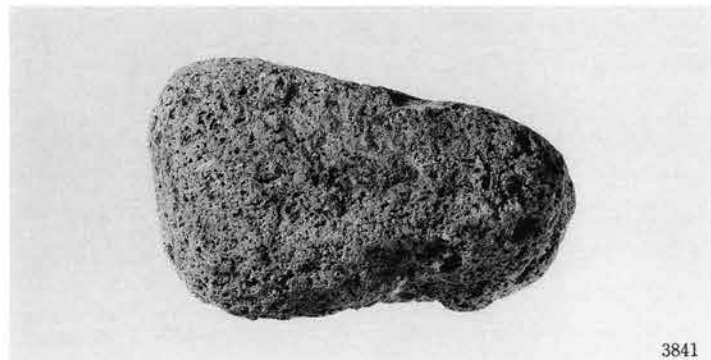
3833



3838



3841



3841

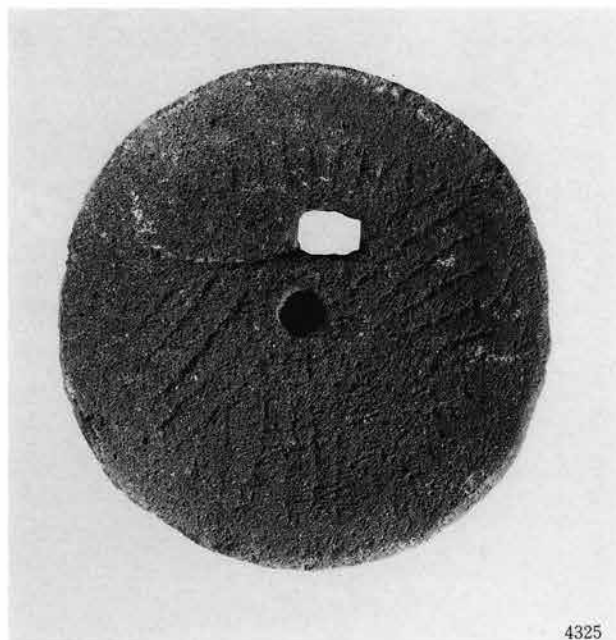


3838

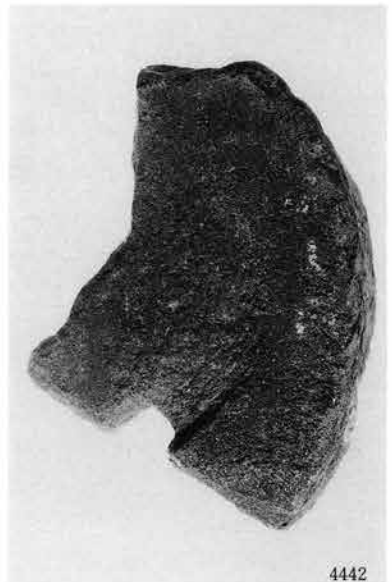


I 地区 C 区 7 号井戸出土遺物

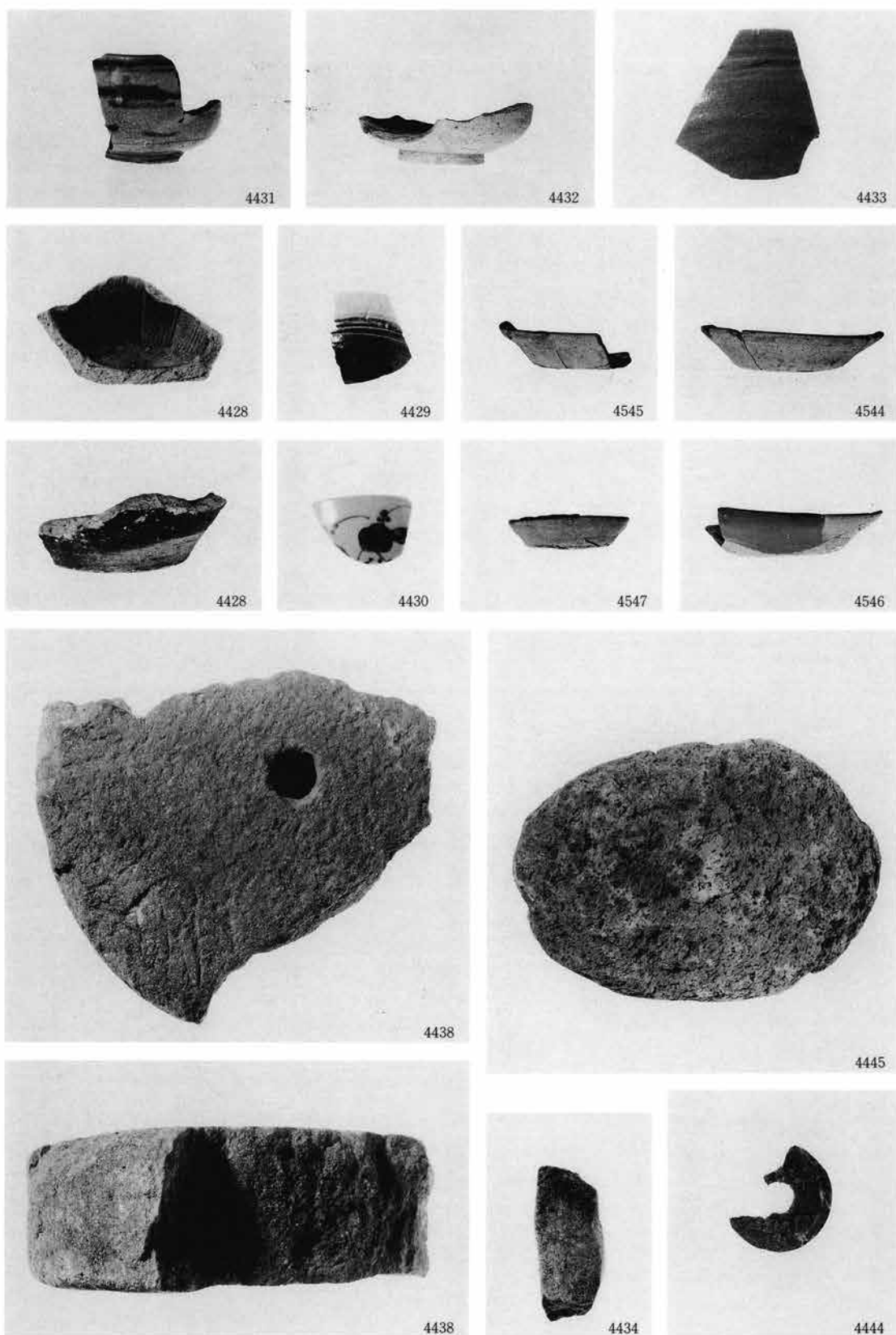




I 地区D区 5号井戸出土遺物



寺前地区5号・6号・12号井戸出土遺物



寺前地区3号・4号井戸出土遺物



群馬県埋蔵文化財調査事業団  
発掘調査報告第77集

I地区・寺前地区(4)  
中世・近世編

## 下佐野遺跡

—上越新幹線関係埋蔵  
文化財発掘調査報告第11集—

平成元年2月25日 印刷

平成元年2月28日 発行

編集／財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話 (0279) 5 2 - 2 5 1 1 (代表)

発行／群馬県考古資料普及会

勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話 (0279) 5 2 - 2 5 1 1 (代表)

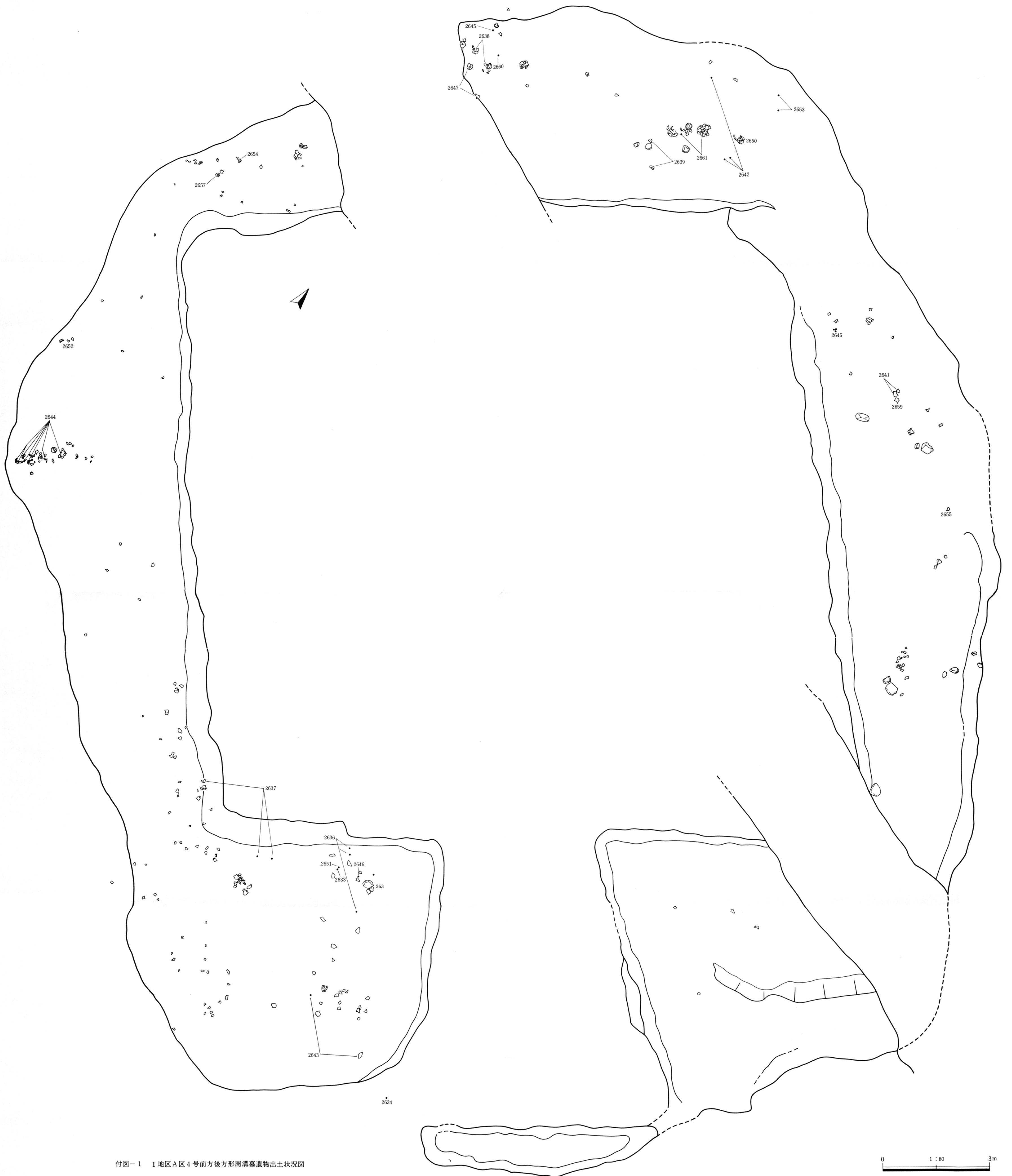
印刷／朝日印刷工業株式会社

頁	訂正箇所
例巻 17	木村豪章 本村豪章
70頁 18行目	炉体として使用 炉体として使用
432頁 23行目	この段階は工期の この段階は1期の
435頁 3行目	I期を通して 1期を通して
"	I期終末 1期終末
746頁 1・2行目の間	第1節 平安時代の遺構と遺物について
付図2 B-B'	I地区A区1号館跡土層説明(B-B') 1、灰褐色土(軽石・ローム粒を含む) 2、褐色土(多量のローム粒・ロームブロックを含む) 3、灰褐色土(ローム粒・多量の軽石を含む) 4、褐色土(ローム粒・多量の軽石を含む) 5、褐色土(ローム小粒を含む) 6、褐色土(ローム粒を帯状に含む) 7、黒褐色土(軽石を含み、鉄分の沈殿がある) 8、暗褐色土(ローム小粒を多く含む)
付図2 G-G'	I地区A区1号館跡土層説明(G-G') 1、暗褐色土(ローム粒・B軽石を多く含む) 2、暗褐色土(ローム粒を多く含む) 3、二次堆積ローム
付図2 H-H'	I地区A区1号館跡土層説明(H-H') 1、表土 2、旧表土(耕作土) 3、暗褐色土(ローム粒を含む) 4、攪乱 5、暗褐色土 6、褐色土(砂質) 7、褐色土(砂質でロームブロックを含む) 8、石 9、暗褐色土(ローム粒を含む) 10、黒褐色土

付図3 A-A'	11、地山崩落土(ローム) I地区C区1号館跡土層説明(A-A') 1、暗褐色土(A軽石を多く含む) 2、A軽石純層 3、暗褐色土(小石を多く含む) 4、褐色土(ローム粒を含む) 5、褐色土(ローム粒を多く含む) 6、褐色土(ロームブロックを含む) 7、褐色土 8、ロームブロック 9、褐色土 10、褐色土(ロームブロック・小石を含む) 11、褐色土(ロームを多く含む) 12、褐色土(ロームを多く含む) 13、暗褐色土(褐色土ブロック含む) 14、暗褐色土(ローム粒を含む) 15、褐色土(ローム粒・ロームブロック含む) 16、暗褐色土 17、ロームと暗褐色土の混合 18、褐色土(ロームブロック含む) 19、褐色土(ロームブロックを多く含む) 20、褐色土(ローム粒を含む) 21、褐色土(軽石を含む) 22、黒色土(ローム粒を含む) 23、黒色土(ローム粒を少量含む) 24、黒色土(砂質)
付図3 D-D'	I地区C区1号館跡土層説明(D-D') 1、2、表土 3、褐色土(A軽石を多量に含む) 4、灰色土(A軽石を多量に含む) 5、A軽石層(下半は純層)

付図4 D-D'	6、褐色土(ローム粒・河原石を含む) 7、暗褐色土(ローム粒を含む) 8、褐色土(ローム粒・軽石・小石を含む) 9、黒褐色土(粒子粗い) 10、黒褐色土(ロームブロック含む) 11、黒色土(ロームを含む) 12、ロームと黒褐色土の混合 13、褐色土(ロームを含む) 14、ロームと灰褐色土の混合 15、灰褐色土(粘性) 16、黒色土(砂と黒色土が互層) 17、灰褐色二次ローム 18、黒色土 寺前地区28号溝土層説明(D-D') 1、暗褐色土(ローム粒を含む) 2、暗褐色土(ローム粒を多く含む)
付図4 G-G'	寺前地区29号溝土層説明(G-G') 1、黒褐色土(B軽石・ローム粒を含む) 2、黒色土(ローム粒・ロームブロックを含む)
付図4 M-M'	寺前地区30号溝土層説明(M-M') 1、暗褐色土 2、暗褐色土(ローム粒・ロームブロックを含む)
付図4 V-V'	寺前地区33号溝土層説明(V-V') 1、黒褐色土(暗褐色土・ローム粒少量含む) 2、暗褐色土(ローム小ブロックを含む) 3、暗褐色土とロームの混合
付図4 X-X'	寺前地区31号溝土層説明(X-X') 1、褐色土(ローム粒・小石を含む) 2、褐色土(ローム粒を含む) 3、褐色土(ローム粒・ロームブロックを含む) 4、褐色土(ローム粒を多く含む) 5、褐色土(ローム粒を非常に多く含む)

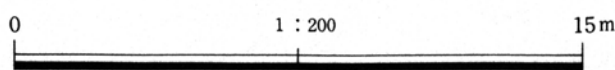
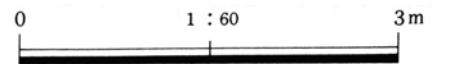
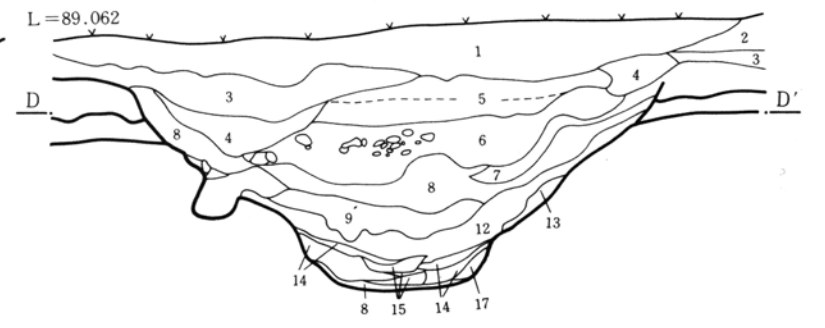
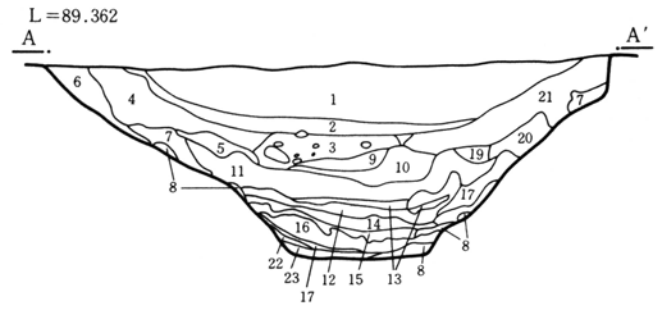
付図4 Y-Y'	寺前地区7号溝土層説明(Y-Y') 1、黒褐色土(ローム粒を少量含む) 2、暗褐色土
付図4 2A-2A'	寺前地区9号溝土層説明(2A-2A') 1、褐色土(A軽石を含む) 2、褐色粘質土(ロームブロックを含む) 3、黄褐色土粘質土(ロームを多く含む)
付図4 2G-2G'	寺前地区37号溝土層説明(2G-2G') 1、暗褐色土(B軽石を含む) 2、暗褐色土(B軽石・ロームブロックを含む) 3、ロームと暗褐色土の混合(B軽石含む)
付図4 2K-2K'	寺前地区35号溝土層説明(2K-2K') 1、褐色土(ローム粒・小石を多く含む) 2、黄褐色土(ロームブロックを多く含む)
付図5 2H-2H'	寺前地区37号溝土層説明(2H-2H') 1、表土 2、暗褐色土(B軽石含む) 3、暗褐色土(ローム粒を含む) 4、暗褐色土(B軽石・ロームブロック含む) 5、黒褐色土



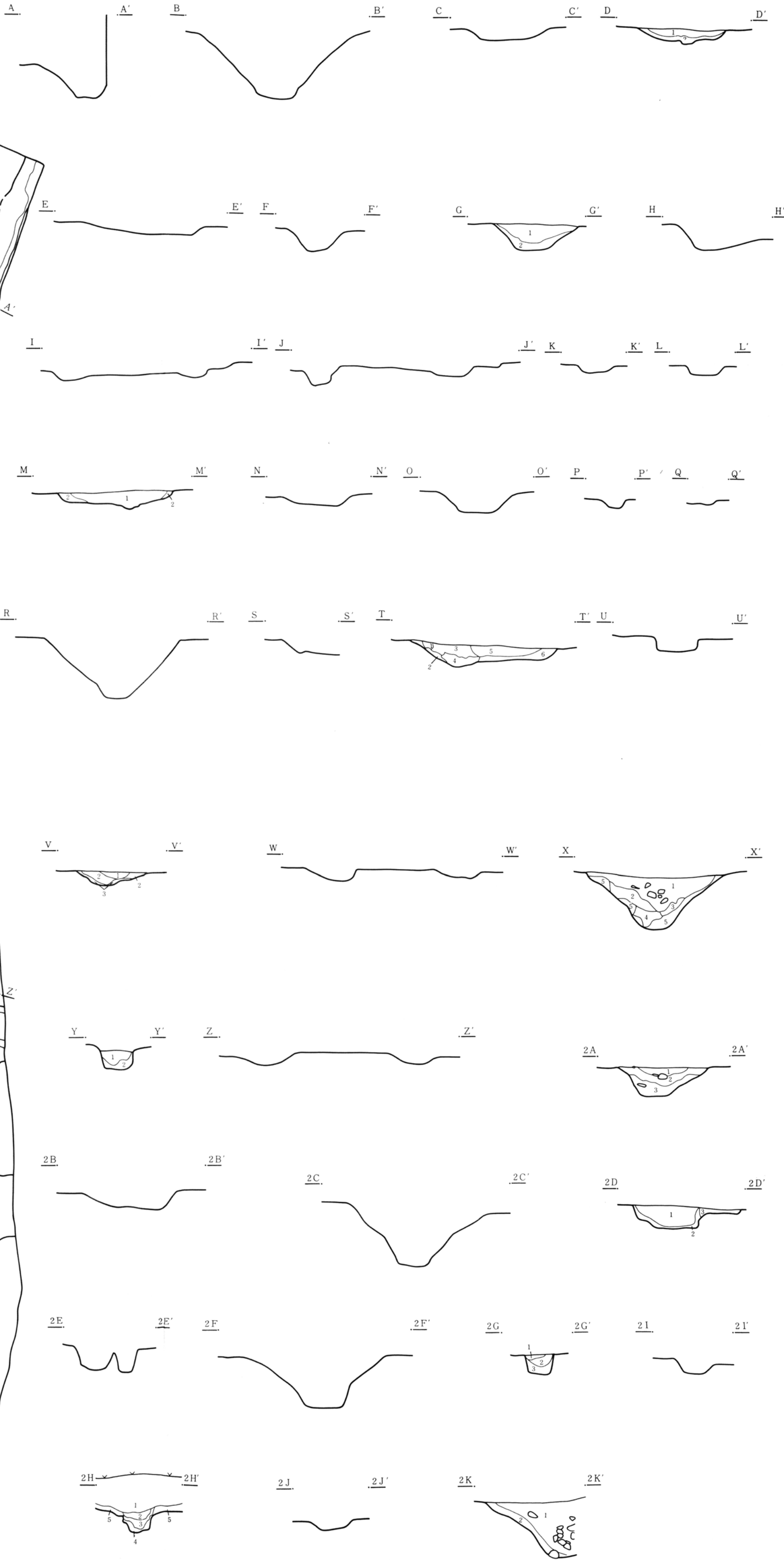
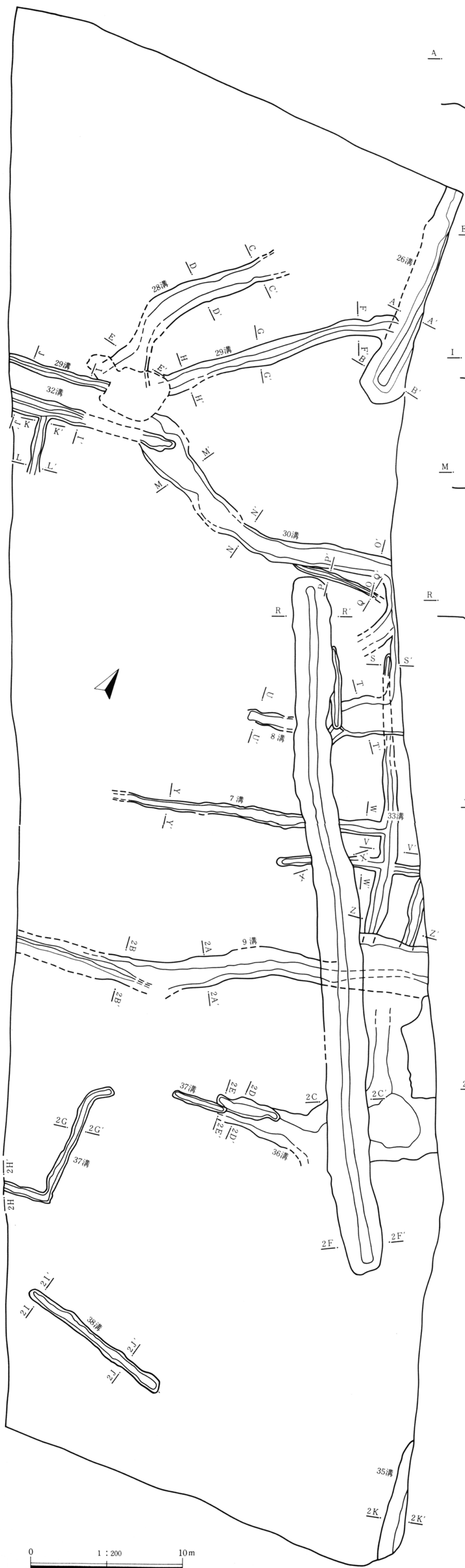
付图-1 I地区A区4号前方後方形周溝墓遺物出土狀況図



付图-2 I地区A区1号馆踪(内郭)遗構图



付図-3 I地区C区1号館跡(内郭)遺構図

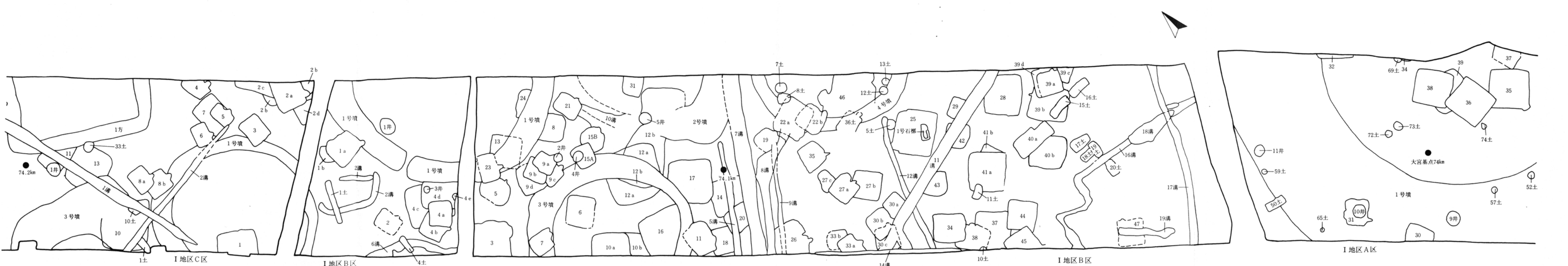
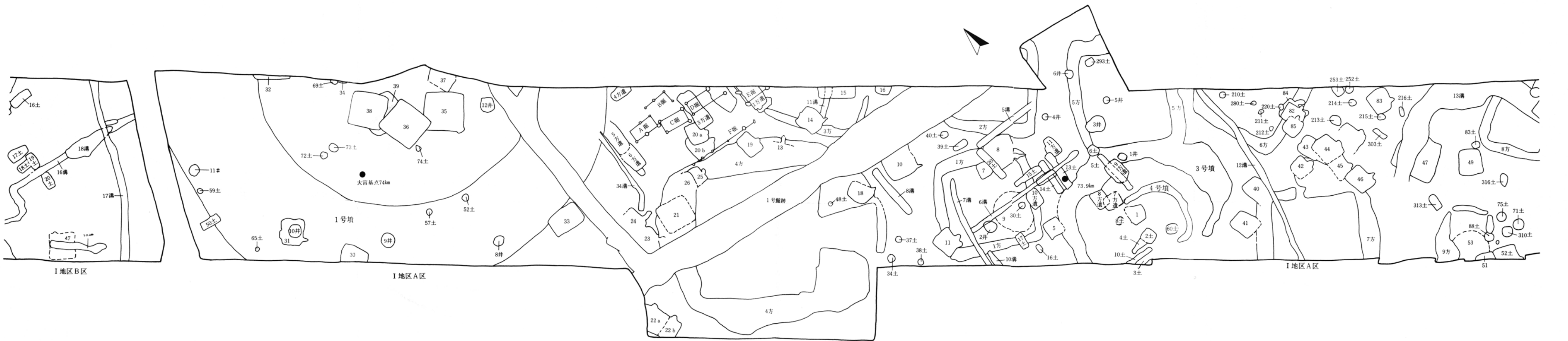
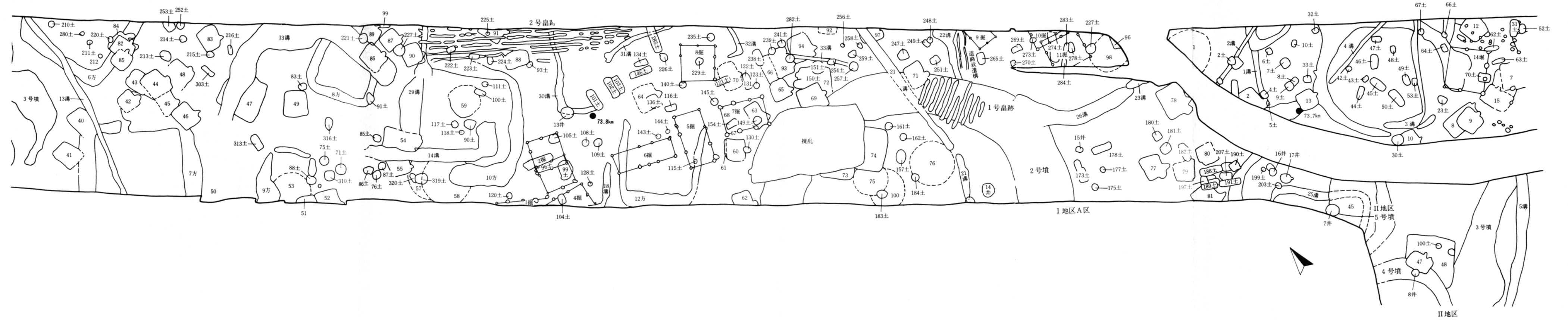


0 1 : 200 10m

0 L=89.9 1 : 60 3m

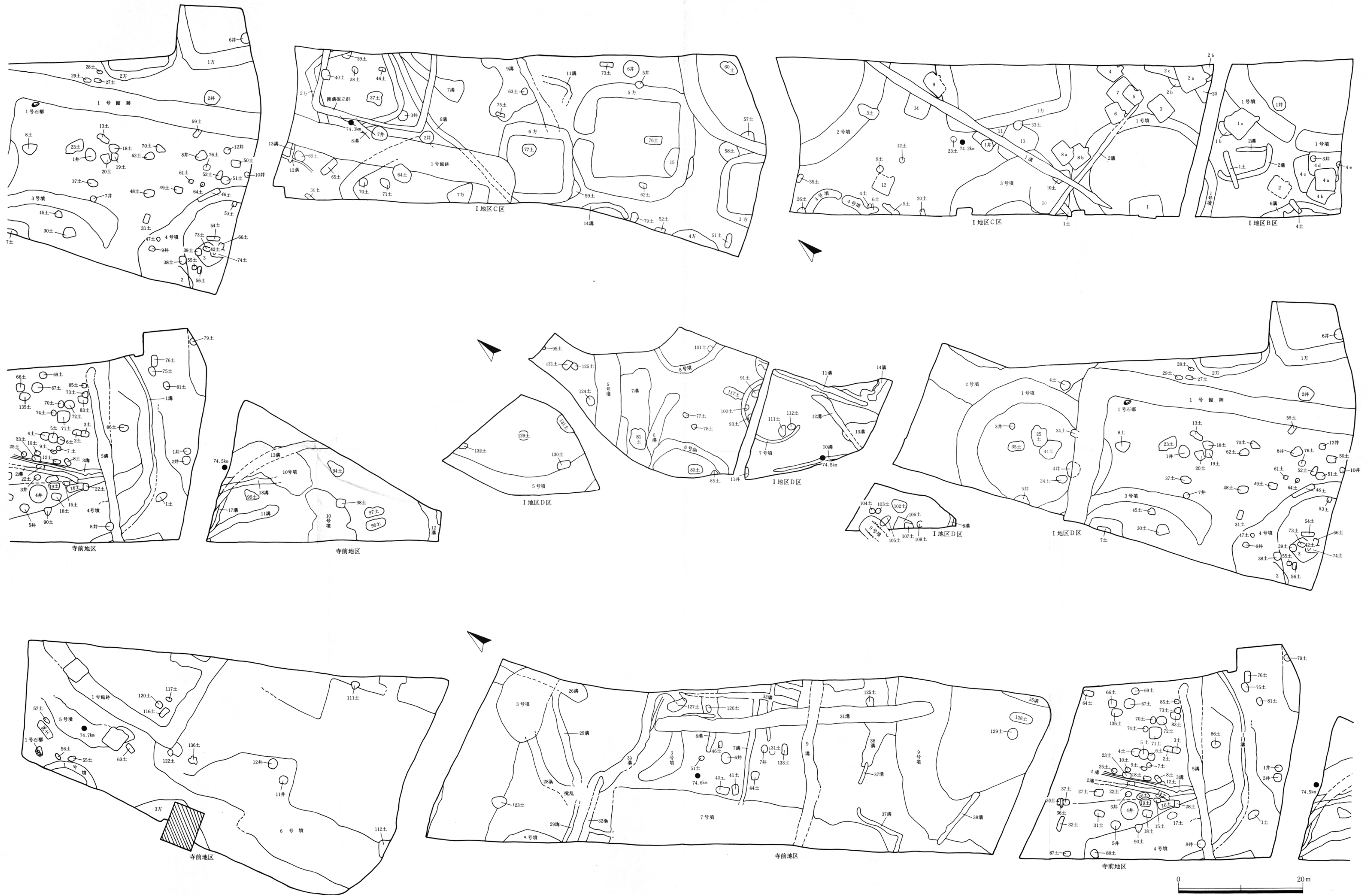
付图-4 寺前地区 沟 (7~9、26、28~33、35~38) 遗构图





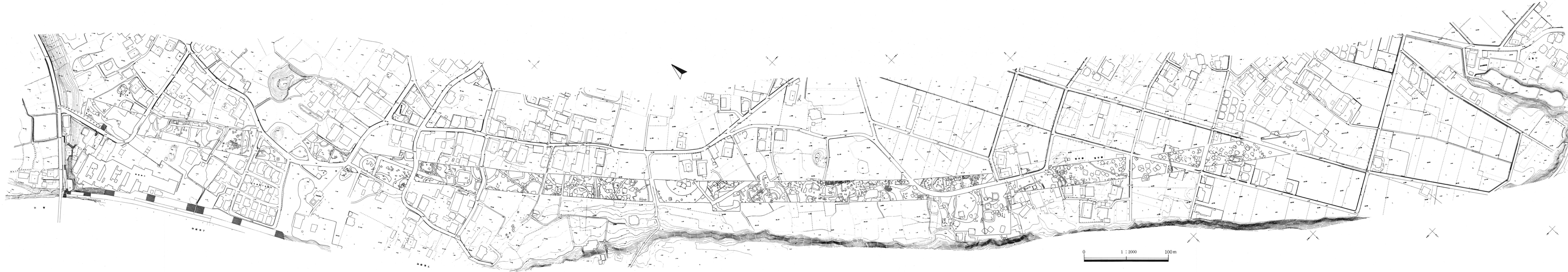
- |      |                |
|------|----------------|
| 番号のみ | 住居跡            |
| 土    | 土坑             |
| 掘    | 掘立柱跡           |
| 方    | 方形遺構           |
| ● 印  | 大宮からの距離程新幹線中心杭 |

付図5-(1) 下佐野遺跡遺構全体図 (I地区A・B区)



付图 5-(2) 下佐野遺跡遺構全体图 (I地区C·D区、寺前地区)





付図-6 遺跡の地形と検出遺構